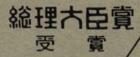
山岳



LXII

Caravan





・キャラバン	デラックス¥	2,500
・キャラバン	スーパー¥	
・キャラバン	スタンダード…¥	
・キャラバン	ポピュラー·····¥	
・キャラバン	ハイピック······¥	
・キャラバン	ヤングギ	
E PALLA CONTRA		

製造元 藤倉ゴム工業株式会社



製造元 鐘淵化学工業株式会社

カネカロン シュラフ カネカロン BBシュラフ



- シュラフザックの効率をたかめるためにキャラバンマット の御併用をおす、めします。夏用シュラフか5極寒用まで各種取りそろえてあります。季節と用途にあわせてお選び下さい。

株式会社 山 晴

東京·東京都千代田区神田駿河台 2-11 TEL (291) 2722 · 6905 大阪·大阪市西区京町堀1-68 TEL(441)4431·5204 run le 1 juin 1968

山

岳 第六十二年

山岳 第六十二年 目 次 (一九六七年度)

30,1110,5	ミール・サミール 一九六六年中	コー・イ・バンダコール登頂 (一九六六年)板	グランド・ジョラス北壁―ウォーカー稜の登攀―伊	ハンター及びフォレイカーの登頂(一九六六年)錦	越後の県境を探る日本山岳会越後支部… 五	山と明治天皇	山内ピッケル抄録平	アンナプルナ北方山域の踏査(一九六五年)薬	東グリーンランドの山(一九六六年)池	アコンカグア南壁(一九六六年)原	アンデスからアマゾンへ(一九六五年)同志社大学山岳会…	会員第一号城数馬氏のこと藤
1	馬	橋	藤	織	山岳人	瀬	柳	師	田		心社大	島
U.S.	敏	元	敏	英	会越後		-	義	錦		学山口	敏
	隆…二0	一	夫… 兌	夫… 兖	支部…	誠… 壹	郎…[0]	美…	重…	真 ::	岳会…	男
	110	六	元	六	玉	亖	101	全	夳	E O	쯔	-

## A Century o, A Century	海外登山年表 = 一九六六年 =松 田	英文梗概	会務報告(一九六六年七月—一九六七年六月)	図書紹介(森林・草原・氷河、1863—1963 1 Cent Anni del Club Alpino Italiano, A Century of Mountaineering 1857—1957)	追 悼 和田豊種氏(水野祥太郎・中原繁之助)	アーサー・ジェフリーズの富士登山	ティエラ・デル・フェゴの山旅(一九六六年)安	ボリビアの山(一九六五年)岡	ペルー・アンデス(一九六六年)エーデルワイス・クラブ… 宍	アラスカ・ボナ峰登頂
一 atury c	雄			, A Cei	(相内武	瀬	間	島	ルワイ	岳京 部教
	_			ntury c	千雄)、	岩		成	ス・ク	同育 O _士
	編:卷末 六	巻 末 一	-1110	+0=:-	完	雄…六0	荘…芸	行…三吾	一员	芸

サルカンタイに関するもの六枚 城数馬氏から日本山岳会宛封書

アコンカグア南壁に関するもの七枚(内折込み二枚

東グリーンランドに関するもの六枚 ティリツオ・ピークに関するもの四枚

越後県境山岳に関するもの二枚 山内ピッケルに関するもの三六枚

ハンター及びフォレイカーに関するもの四枚

ミール・サミールに関するもの二枚 コー・イ・バンダコールに関するもの二枚

ボナに関するもの二枚 ムンジャン山群に関するもの二粒

ブカランラに関するもの四枚

ボリビア・アンデスに関するもの二枚

名誉会員高木菊三郎氏、石黒清蔵氏、磯野計蔵氏、斎藤長寿郎氏、 ティエラ・デル・フェゴに関するもの四枚

稜ルート図、メリソス・グループ概念図、メリソス・ルート図 ビルカバンバ南東部概念図、サルカンタイ概念図、サルカンタイ北東

アコンカグア近傍図(折込み) アンマスサリック近傍概念図

タコーラ及びアンナブルナ北方概念図(折込み)、ティリツォ・ビー

ク近傍概念図(折込み)

新潟県境踏査区分図 ハンター及びフォレイカー概念図

グランド・ジョラス北壁(ウォーカー稜)ルート図

アリンガル地域概念図、ミール・サミール概念図 コー・イ・バンダコール概念図

図、ランガル山登頂ルート図

アラスカの主要山塊及び高山図、ランゲル山塊概念図、ボナ山群概念

プブヤ山群北東部概念図、イリマニ概念図 カウヤラフ山塊概念図、プカランラ概念図、プカランラ・ルート図

ティエラ・デル・フェゴ概念図(折込み)

表紙カット

佐 藤久 朗

岳 第六十二年抜刷

藤

島

敏

男

多 旅 罗老 氏から、いかに手をつくしても、

わからないと連絡があった。

会員第一号 城 数馬氏のこと

で、未記入のまま、編集者の手で調べてほしいと書添えて送稿した。資料蒐集には人一倍熱心なエディター望月達夫 資料を漁って六人までは判明した。ところが、当時最年長ときいていた城数馬氏の年齢が、どうしてもわからない ということを言いたいためもあって、発起人の方々の年齢を記入したのであるが(一八五頁)、 文を草して『山岳』第六十年に収録された。その中で私は創立当時発起人たちが、いかに年少気鋭の士であったか 本会創立発起人のひとりであった高野氏の歿後、武田、中村、山川、三枝の諸先輩が追悼記を寄せられたが、 藤 島 会報その他 敏 あれ これと 男 私も

書が届いて、 の親くらいの違いがあります。……当時としては長老城棲碧氏は別格、次で小島君高頭君相共に壮年時代、 起人中の最年長者で……。 正氏(『山と書物』正続二巻の著者)に当ってみると、何とかわかるだろうと引受けてくれたものの、 そこで、これまた資料集めに夢中で、頼まれもしないのにJACのふるいことを執念深く調べている会員、 高野鷹蔵氏の書かれた文章に「……これに馳せ参じたる城 数馬老(事実当時一番の老人)……。 ……城さんという人は武田君が高山植物の方で懇意になられた人で、 結果は三枚続きの葉 年輩からいうと我 武田君自 小林義 …..発

(1)

分梅沢君山川君は青年時代……」とあり、また『山岳』第二年第一号に小島烏水氏の「表紙揮毫の小杉 う記事を取上げ、五百城画伯は明治三十九年六月七日四十四歳で日光の自宅で逝去とあるから、 城数馬さんが描かせたもので、 か、そうだとすれば生年は文久二年(一八六二年)となる筈と、 小杉君は青年時代に、城氏の親友五百城文哉の書生をしていたところから……」とい たいへん行届いた報告を貰ったが、 親友の城氏も略同年 依然として城氏

の正確な年齢は不明のままである。

去の四ヵ月前に城氏の年譜をまとめられてあったことも、私には、 取込みのため返信のおくれた旨が認められてあった。 郎』と記された謄写版刷の小冊、それに添えられた書面は伊藤夫人からのもので、伊藤氏がその六月八日病歿され、 でいると、 の住所電話まで教示された。私は詳細な書面を認めて、伊藤氏の教えを乞うたが、中々返信に接しないので気をもん 知らないが、 らないのである。 それではと、 約三週間後 城さんのことをよく調べている弁護士がいるから、 同じ発起人である武田博士に伺いを立ててみた。 (四十年六月二十九日)に封書が届き、『山草家・城 数馬先生年譜。 ちょうど、私が照会状を発信した前後に永眠されたことも、 そのアドレスを教えよう。とのことで、 ″僕はヒトの年齢には、 なにか不思議なめぐり会わせのような気がしてな 昭和四十年二月作成。 むかしから興味がないか 伊藤憲郎氏

この伊藤氏からの返書を心待ちしているあいだに、 私は本会のライブラリーで『山岳』を調べてみたが、第十七年

第三号(大正十三年五月発行)の一三六頁、会報欄に、

〇名誉会員城氏の訃

程、 二月薨去されたる旨通知に接したり、 本会発起人の一人にして名誉会員たる城数馬氏は、高等覆審法院長として朝鮮京城に在職中なりしが、 早く既に明治二十八九年頃より各地の諸高山に登られたるが、明治三十八年に至り、偶山岳会設立の議起るや、 氏は夙に山草家として其名を知られ、 且. 知人の間に高山狂を以て呼ばれたる 病の為本年

(

(未醒)

君は

として朝鮮京城に赴任するまで会務を取扱はれ 発起人として大いに尽力する所あり、 事務所の如きも日本橋室町なる氏の法律事務所内に置きて、 たり。 大正十年名誉会員に推薦さる 四十一年控訴院長

という、 遺影も全く見当たらなかった。 たって簡単な記事があるのみで、 逝去の月も実際は一月だったのが、二月となっているし、

る人物なることを鑑定して報告された。」(小島鳥水氏著『山の風流使者』二二頁)というようなところから、 とになっ あり、後に朝鮮控訴院長として京城に赴任せられた『名士』の一人であった。 白馬岳等に早くから登られていた。本職は弁護土として、法曹界に、早くから名を成していた。東京市の市会議 か、「山岳会の骨組には城数馬氏の斡旋も多としなければならぬ。 が折 れには高頭君もなんていっていいのかどうにも判らないので、 でも誰でも片っぱ ったものとおもわれるが、最年長の城氏が丁度第一号となったのは、偶然とはいえ、まことにうまくいったものである)で あっ て、 だろう、 ときには 「若いものばかりでなく、そういうお目付役の年寄りも加わりまして……」(『山岳』第五十年六六頁、 城氏の会員番号は第一号 い々ありますのでその席上、私が城氏にこういう話があるんだが、加わって貰えないかといった処が、それは なんとかやってみようといわれたが、……中略……この人はわれわれから見れば数代上の大先輩で、 「小島君の案で、社会的に相当の地位のある人を発起人に加えた方がよかろうというので、 れたのが しから叱り飛ばされて、 城 数馬氏 で、……」(『山岳』第四十四年第一号二二一三頁、武田久吉氏講演筆記)というような 存在 であり、 単身高頭君の郷里へ乗り込み、高頭君にも面会した上、 (因みに発起人の会員番号は、1城、 或時高頭君が何か失敗して謝ったが、城氏に謝まって済むかと叱られ、 2小島、 流石の高頭君も口をつぐんでしまったという 3高野、 城氏は、 4高頭、5武田、 高山植物の採集家として知られ、 聲望資産まで調査して、 高頭君が会のために一と肌 6梅沢、7山川であって、 高野鷹蔵氏講演筆記) 山草会の 信頼するに足 脱がれ ABC順によ 八ヶ岳 高 面 小 るこ

(

しても会の長老元締格であったことは間違いない。会の事務所も、最初は城氏の法律事務所(日本橋区西室町三ノ一〇)に

員に推薦された、 置 されたのが、 あろう。或いは城氏の朝鮮在住が十六年の長きに亘って、本会と稍疎遠になっていたためかも知れないし、 かれた。 大正十年には、ウェストン、 かの関東大震災から半歳たたない大正十三年一月で、城氏往年の同志の身辺も、 この大先輩の逝去後、 数行の訃報以外『山岳』誌上に何も残っていないのは、どういうわけなので 志賀重昂、大平晟、 白井光太郎の諸先輩につづいて、本会で五人目の名誉会 多事であったためかと また逝去

も推測されるのである。

かりでなく、生年歿年はもとより、経歴などもはっきりとしたのである。この年譜が作成者の永眠される僅 知るよしもないが、私としては、これをこのまま埋もれさせてしまうに忍びないし、 前に漸く完成したことは、 しての面に重点がおかれているが、作成者の意思を尊重して、敢えて省略することなくここに再録しておきたい。 に記るされるのも、 日に至って、発起人中の最長老、 この伊藤憲郎氏が苦心して作成された年譜を入手して、 無意義ではあるまいとおもう。作成者が城氏京城時代の部下であった関係から、 前にも書いたが、 会員第一号城数馬氏のことが歿後四十余年を経て、始めて 関係方面といっても、 城氏の本会創立当時の年齢が四十一歳と判明したば どの程度の範囲の人々の手に配布されたものか、 創立六十周年もすでにすぎた今 、『山岳』 法曹家司法官と 誌上にやや詳細 カン 四ヵ月

一、年譜

元治 元年 八月七日誕生 久留米藩

明治 十三年 司法省法学校入学

二十一年 七月東大仏法科卒業、著述仏国証拠法其他

二十五年 代言人無試験免許

一十六年 東京弁護士、法典論争参加

みた。

ている一人であるが、

東京弁護士会副会長

東京市会議員当選 一副議長二

高山植物の採集はじめる

日本山岳会組織 山草会結成 ツクモグサ発見

(四十一歳

三十八年 三十五年

四十一年 京城控訴院長に起用さる

三月東京弁護士会主催送別会

四十三年 日韓併合

職階改正 朝鮮総督府裁判所令公布 京城覆審法院長

四十五年

八年 朝鮮独立万才騒擾事件勃発(ニヵ月に及ぶ)

料

十三年

一月二十三日

逝去(六〇歳

城数馬先生は、 維新前から大正半まで、日本の創成期にその生涯を送られ、多彩に亘っているが、 終始、

の晩年京城覆審法院長の時代、その部下として謦咳に接しているので、私なりに先生の伝記なりともと意欲を燃やし して植物を愛好されまた法曹として、弁護士から法官になり一貫している、いわば花と法の生涯といえる。 何しろ古い時代のしかも広範囲に及ぶこととて困難している。今の程度だけでは、質にも量に 私は先生

山草家と

(5)

もその何分の一にも及んでいないが、一応道標を立てるつもりで記述し、敢て先輩知友から教示を得たく、印刷して

(一) 司法省法学校時代(若槻礼次郎著『古風庵回顧録』七頁 昭二十五年五月読売新聞社刊

司法省が法学校を作ったのは、裁判官を養成する目的であったが、フランス語を主としたのを正則法学校とい

それを卒業すると、法律学士という称号を与えられた。

木下謙次郎などは最初に出

た組で、それについで梅謙次郎、それから城数馬など弁護士になった者も多い。

或は八年制法学校と称していた。

大審院長であった横田秀雄なども、そこの出身であった。原敬とか国分青崖とかは、 われわれの先輩であった。 漢

文だけの入学試験をしておいて、一たん入学すると漢文を読むことを絶対禁じた。

- (註) 司法省法学校は明治十七年東京大学に併合されたが、城先生はその明治二十一年の卒業である
- (11) 法典論争(穗積陳重著『法窓夜話』三四三頁 大正九年二月 有斐閣刊)

明治二十五年春に至って江木衷、奥田義人、土方寧、岡村輝彦、 中橋徳五郎君等法学院派の法律家十一名を以て、法典実施延期意見なるものが発表せられた。 穂積八束の諸博士を始め松野貞一郎君、 伊藤悌次

此の宣言書に対して明治法律学校派の岸本辰雄、態野敏三、磯部四郎、本野一郎の諸博士を始め宮城浩蔵君、

虎一君、城数馬君等が発表した法典実施断行意見と題するものの論旨及文字は一層激烈であった。

(II) 山草家の草分け(武田久吉理博著『原色日本高山植物図鑑』九九頁、昭和三十九年九月一日増訂三刷発行保育社

山草家の中で最も活動家であった城氏は……明治三十七年七月赤岳に向ったが、足の踏み入れる余地もない

持ち帰ったのは、 茂していた高山植物を片端から採取し、城氏の生品を預って裁培していた日光萩垣面在住の画家、 その月の二十一日のことであった。この行、城氏の新発見はツクモグサを筆頭にウルップソウ、ミ 五百城文哉氏方に

ヤマツメクサ、クモマナズナ等であった。

(四) 山草展覧会主催 (前掲武田博士図鑑九五頁

明治三十五年(一九〇二年)五月五、六の両日、 本郷団子坂下の薫風園という植木屋の座敷を借りて、 山草陳列会

(

百城文哉の七氏であった を催すことになった。この一団の人々には松平康民 その親戚の青木信光の山草好きの四子爵と弁護士城数馬、行政裁判所評定官木下友三郎、 (作州津山藩主の令嗣)、 加藤泰秋(伊予大洲藩主)、久留島通簡 日光在住の画家五

(註) 右子爵のうち松平康民、久留島通簡両氏は明治二十三年日本最初の貴族院議員になっている。そのときの貴族院議長は伊藤博文であった。

(五) ツクモグサ発見(人事院総裁佐藤達夫氏「わたしの宝物」中央公論社『自然』昭和三十七年十二月一日発行四八頁。

濃国八ヶ岳横岳採集の表示とともに、記要として「余之ヲ発見スルノ年祖父九十九君ノ三三回忌ニ当ル而シテ此草実 此草ヲ採リ乃チ同氏父君?ノ名ニ因ミテ同氏ノ命名セシモノナリ」……そのラベルには明治三十五年七月十七日信 鑑』に出ているが、そこには「和名ハ九十九草ノ意ニシテ山草愛好家ナリシ弁護士城数馬氏信州八ヶ岳 ニ翁草即チ白頭翁ニ彷彿トシテ花ハ黄色ナリ余故ニ名ツク 彼が発見した植物のなかで、 いちばん有名なのは、 ツクモグサであろう。 これは牧野富太郎博士の 二於テ始メテ 『日本植物図

面かげの翁に似たり九十九艸」

という自筆の付記までついている。これがでてきたときのうれしさは、筆舌のつくせることでない。

城先生のツクモグサ発見のときの紀行詳細は、別掲武田博士の『日本高山植物図鑑』九九頁に出ている

3 韓国司法官の任用 (法学士渡辺輝之助著『雨山遺稿』 一六二百 明治四十三年五月一日法律新聞社発行

らず、 日韓新協約実施の第一着歩として、統監伊藤氏は彼国司法制度の改善を図んとす。由来韓国には司法制度なきにあ 制度と称するに足らざるなり……統監は司法省と商議する所あり、其人員も既に決定せりと聴く

……統監たる伊藤氏に一言す、 必ずや第一流の名判官にあらざれば不可なり。

(七) 京城控訴院長選任 (国分三亥氏談 司法協会雑誌記載 昭和十五年八月十五日発行

判所に法務補佐官を配置した。 統監府の設置となり、司法制度の刷新を行うことになり、日本人を招聘した。先ず法部に法務参与官を入れ、 次で日本人を官吏として採用したが、倉富さんが法部次官となり、渡辺暢君は大審院 各裁

(註) 倉富さんは東京控訴院検事長から渡韓したが、 帰国して法制局長官となり枢密院議長となった。 渡辺さんは東京地方裁判所長から渡韓した

長になった。城君も京城控訴院長になった。私は大審院検事総長になった。

が、帰国して貴族院議員となった

以上

明というより外なかったろうとおもうと、本会とは関係のない方ではあるが、伊藤憲郎氏の熱意と労とを多としなけ ればならない。 苦心されたことがうかがわれる。 伊藤氏作成の小冊子の内容は右のようなもので、簡単といえば簡単であるが、引用書目をみても、 この年譜がなかったならば、 われわれは会の創立者中の最長老については、 ずいぶん探索に 詳細不

先生にはまちが 十五年七月ということで、 を立てた。 は三十五年とある。 ついては、最近やっと昭和四〇年七月増訂版を入手し、問題の九九頁をみましたところ、 で、或いは三十七年が正当かと、標本所持者の佐藤達夫氏は会員でもあるし、氏と同僚の会員島田巽氏を通じて同 わたしの宝物」のコピーを送られたので、私の疑問は氷解してケリがついた。 城氏のツクモグサ発見が年譜には明治三十五年とあり、資料(三)のところには三十七年となっており、 佐藤氏は東大植物学教室、科学博物館等について調べ、古い植物学雑誌などにもあたり、 のないことを確認、 私は、 小生標本の年月と一致しています。 三十七年が伊藤氏の誤写であろうと考えればよかったが、引用の原本が武田博士の著なの あらためて敬意を表した次第です。という報告と共に、 結局伊藤憲郎氏の誤写だったわけですが、さすが武田 ツクモグサ発見は、 同氏所蔵標本と、 武田博 士の著に 金に



>
該
型
泊
河
觊

460	. 4
AND S	12.V)
	THE RESIDENCE OF THE PROPERTY
信意用	公民横在
	信息 子七日排收

「何年 数馬氏といえば、明治から大正時代にかけて、ながく弁護士や裁判官をつとめ、 高校以来の親友で、 いま裁判官をしている城富次君から、その父君、数馬氏の遺品の一部をもらった。 日本におけるアマチュア植物家の草わけだった。…… 法律家では長老格であった人だ

中略……そんなことで、同じ法律の道をあゆみ、 氏はいわばあこがれの先輩だった。 本職の方よりも、 熱心な山草採集家として知られ、 かつまた、ご同様、 植物の、道草、をくっている私にとっては、城

この先輩が、 女学生がつくったかと思われるくらい、手ぎれいにできていて、ことにそのなかのシラネアオイなどは、 むかし採集したおし葉の一部をもらったわけである。そのおし葉は、 花の淡紫色がまだ残っているという美しい仕あげである……後略…」 標本として完全であるばかりで

三十四年の採集というのに、

ある。 若い時代とはいえ高頭仁兵衛氏を叱り飛ばし、謝って済むかとなじるような気性の城氏に、女学生のように手ぎれ な標本をつくる一面があったということは、私には見知らぬ大先輩ながら、 が治三十四年といえば、城氏は弁護士会副会長とか東京市会副議長の頃でもあろうか、そして山岳会発足後 なにかほほえましくさえ感じられるので には、

がある。 九年三月十八日の消印のある封筒の表には、 城さんの写真もあるよ。と示された二葉の写真は、大礼服姿の城氏であった(叙位叙勲のときでもあろうか)。 で引取りに来てほしい。 ひとつの心残りだった。丁度そこへ武田博士から〝家の中を整理したら山岳会関係のふるい資料が、一括出てきた 伊藤、 これで写真も揃ったと喜んだことだった。日記をみると昭和四十一年四月二十日のことである。その三日あ 佐藤両氏のおかげで、 と連絡があり、 城氏に関する資料が手に入ったからには、 推参すると、君が城さんのことを何か書いてるというじゃないか。 日本山岳会御中とあり、 裏には朝鮮京城米倉町官舎城数馬と雄渾な署名 遺影がどこからか出てこないかと、 この中に

十周年記念展覧会に発起人の写真を飾りたいのに、 では早速と彼は私の許に立寄って、 JACの会員総会があり、 懇親会の席上で私はそのことにもふれたのだが、 城氏の遺影をもっていった。 城氏だけが入手できないで、 困りはてているとの話があり、 会のあと会員 0 Ш 崎

城氏の登山歴は、 四十一年六月十一日から西武百貨店で盛大に開催された、 植物の分類にしたがって、それぞれの部門に入っているというから、これを探し出すことは不可能 まずそれに近いとおもわねばなるまい。 って掲げられたし、目録にも収載されたのは、ほんとうにタイミングがよかったというべきであろう。 その採集標本からでも知るほかないのだが、 私は 『山岳・総索引』について、城氏の執筆されたものを摘記するに 日本山岳会創立六十周年記念展覧会には、 東大理学部へおさまった標本は、 一括され 発起人七人の では T

の神仏 雑)。信州の箕冠岳 女貌山と太郎山 (三ノ1雑)。 (一ノ1本欄)。 白頭山 (二ノ1雑)。 「長白山」 函嶺の駒ヶ岳 (二ノ2本)。 富士登山 (五)1 と明石女子師範学校職員の責任 本)。 北面より遠望したる赤石山系 (一ノ3雑録)。 (二ノ3雑)。 八ヶ岳の登路 八ヶ岳 ノ3 上

太田篤氏と連名になっている白頭山紀行は、

とどめてお

白頭 余が大に誇る所である……後略」とあって、城氏は渡韓後、 まだ白頭山を遠望した事もない。 Ш 冒頭の緒言だけは城氏の文である。 0 い路破を心に誓ふて韓国に渡ったのは明治四十一年の三月である。 山は の極である。 おろか、 されども今茲に最も新らしく又最も有益なる太田工学士の白頭山登山日誌を紹介することを得るは もっと手近かの山あるきや、山草採取も思うにまかせなかったのではあるまいか。 従て 今回の紀念号に於て 大々的探検隊の報告を公にすることも出来ない 日く「先輩諸君が日本アルプスの探検に殆ど全力を尽さるる時に当り、 明治四十二年四月から五月にかけて太田氏一行の行なっ その職務や地位や当時の治安状況、 爾来已に二ヶ年の星霜を経過した今日 交通事情などか 然し城氏の山 た 一登山 のは 余が白頭 記で、

山草への情熱がさめたわけではなく、私が山崎安治君を煩わして『山岳』を調べてもらったところ、第十三年第一号 (大正七年十二月発行) 一一九頁雑録欄に、「海抜八千尺の冠帽峰」と題する記事のあることが判明した。 大正七年夏(一 (12)

九一八年・当時五十五歳)朱乙温泉より冠帽峰(多分主峰とおもわれる)に登られたのである。 この記事には「北鮮日報大正七

でないが、 年八月三―四日」と附記されているところからみると、城氏から切抜きが送付されたものであろう。 このように元気であったと想像されるが城氏が、還暦の年に現職のまま逝去されたのは、どのような事情 ほかの発起人の方々は、いまなおカクシャクなどと書けば、これが当たり前といわれるにきまっている武 高野、 山川の諸先輩がみな八十歳を越え、 或いはそれ

れ、八十歳近くまで健在であったならば、或いは小集会或いは大会の席上などで、 年齢であっ 田博士は別格として、 この先輩中の大先輩の風貌に接することができたろうにと、惜しまれるのである。 たのからすれば、早逝というべきであろう。もし城氏が大正末期にでも韓国から引上げて、 戦後亡くなられた小島、 高頭、 私のようなその頃の新米会員も、 東京に在住さ

なにかをくみとるのが、私にのこされた仕事だとおもうが、これはまた他日に譲りたい。 三年越しの稿を綴りおわって、私はホッとした気持である。城氏の『山岳』への寄稿全部に目を通して、そこから

追記 『山岳 ・総索引』に記載 のないものについて、 山崎安治君からの報告は左の通りである。

岳』一ノ2雑録一四七頁、 高山に於ける植物の保護。 K・Jの署名あり、 城氏のものと思われる。文中白井光

太郎博士のリーゼンゲビルゲ登山のことにふれている。

一ノ3 (一八○頁)、二ノ3 (一七四頁)、共に会員登山報欄に、 明治三十九年七月上旬戸隠山の表山及び裏山、 同

月十七日八ヶ岳。四十年六月箱根駒ヶ岳神山、七月八ヶ岳に登山のことが出ている。 三/1 (一五一頁) 金剛杖 (遅塚麗水、江見水蔭、 登張竹風その他合著春陽堂刊) の書評がK・Jの署名で載って

いる。

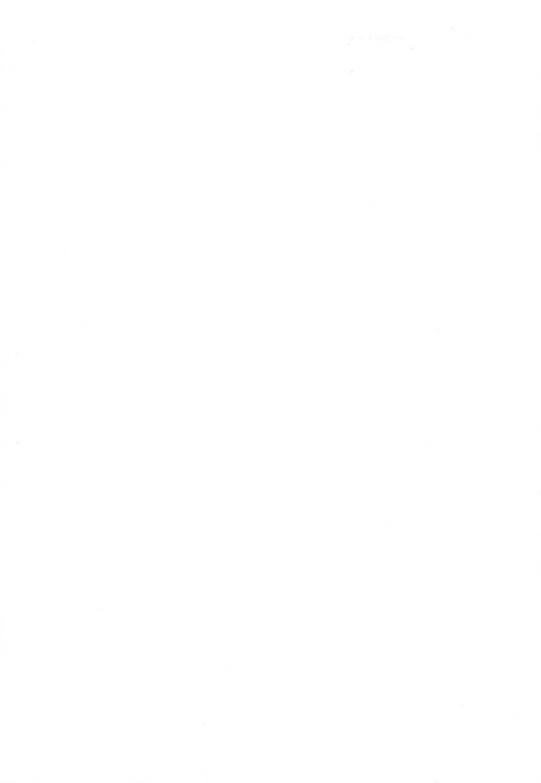
私もなお念のため『山岳』を繰ってみたところ、いくつかの落穂があった。 二ノ1、戸隠裏山の宝丹小屋 (雑録)。同号新刊批評欄、 三好学・牧野富太郎共撰・日本高山植物図譜・成美堂

明治三十九年八月十日発行。小西和著・日本の高山植物・三十九年十月七日・二松堂発行。 二ノ3、書評欄、

ところがない。JACに伝わる批判精神の源流は、

大観。これらの書評は綿密詳細なもので、時にユーモアを交え、ときに辛ラツをきわめた批評で、決しておざなりの 前田曙山著・高山植物叢書第一冊。志村烏嶺著・やま。小島烏水著・雲表。小島烏水著・富士山 この辺に端を発しているのかもしれないと感じたことだった。

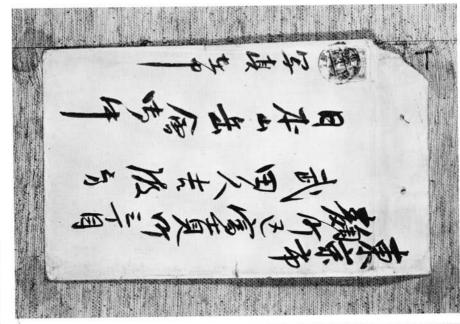
以 上







会員第一号 城数馬氏 (創立発起人・名誉会員) Kazuma Jō (founder & Hon.mem.) (1864-1924)









会員第一号 城数馬氏 (創立発起人・名誉会員) Kazuma Jō (founder & Hon.mem.) (1864-1924)



城数馬氏から日本山岳会宛封書

(大正九年三月十八日付の消印がある一本文10ページ参照

0

会員第一号 城 数馬氏のこと

藤 島 敏 男

氏から、いかに手をつくしても、わからないと連絡があった。 で、未記入のまま、編集者の手で調べてほしいと書添えて送稿した。資料蒐集には人一倍熱心なエディター望月達夫 ということを言いたいためもあって、 資料を漁って六人までは判明した。ところが、当時最年長ときいていた城数馬氏の年齢が、どうしてもわからない 文を草して『山岳』第六十年に収録された。その中で私は創立当時発起人たちが、いかに年少気鋭の士であったか 本会創立発起人のひとりであった高野氏の歿後、武田、中村、 発起人の方々の年齢を記入したのであるが(一八五頁)、 山川、三枝の諸先輩が追悼記を寄せられたが、 会報その他あれこれと

書が届いて、 起人中の最年長者で……。 正氏(『山と書物』正続二巻の著者)に当ってみると、 親くらいの違いがあります。 そこで、これまた資料集めに夢中で、頼まれもしないのにJACのふるいことを執念深く調べている会員、 高野鷹蔵氏の書かれた文章に「……これに馳せ参じたる城 数馬老(事実当時一番の老人)……。 ……城さんという人は武田君が高山植物の方で懇意になられた人で、 ……当時としては長老城棲碧氏は別格、次で小島君高頭君相共に壮年時代、武田君自 何とかわかるだろうと引受けてくれたものの、 結果は三枚続きの葉 年輩からいうと我 小林義 (

う記事を取上げ、 城数馬さんが描かせたもので、 か、そうだとすれば生年は文久二年(一八六二年)となる筈と、 五百城画伯は明治三十九年六月七日四十四歳で日光の自宅で逝去とあるから、親友の城氏も略同年 小杉君は青年時代に、 城氏の親友五百城文哉の書生をしていたところから……」 たいへん行届いた報告を貰ったが、依然として城氏 とい

の正確な年齢は不明のままである。

分梅沢君

山川

、君は青年時代……」とあり、また『山岳』第二年第一号に小島烏水氏の

知らないが、城さんのことをよく調べている弁護士がいるから、そのアドレスを教えよう』とのことで、 去の四ヵ月前に城氏の年譜をまとめられてあったことも、私には、なにか不思議なめぐり会わせのような気がしてな 取込みのため返信のおくれた旨が認められてあった。ちょうど、 郎』と記された謄写版刷の小冊、それに添えられた書面は伊藤夫人からのもので、伊藤氏がその六月八日病歿され の住所電話まで教示された。私は詳細な書面を認めて、伊藤氏の教えを乞うたが、中々返信に接しないので気をもん らないので 約三週間後(四十年六月二十九日)に封書が届き、『山草家・城数馬先生年譜。 同じ発起人である武田博士に伺いを立ててみた。 私が照会状を発信した前後に永眠されたことも、 ″僕はヒトの年齢には、 昭和四十年二月作成。 むかしから興味が 伊藤憲郎氏 伊藤憲 か

第三号(大正十三年五月発行)の一三六頁、会報欄に、 この伊藤氏からの返書を心待ちしているあいだに、 私は本会のライブラリーで『山岳』を調べてみたが、

〇名誉会員城氏の訃報

二月薨去されたる旨通知に接したり、 本会発起人の一人にして名誉会員たる城数馬氏は、高等覆審法院長として朝鮮京城に在職中なりしが、 早く既に明治二十八九年頃より各地の諸高山に登られたるが、明治三十八年に至り、 氏は夙に山草家として其名を知られ、 且. 知人の間 偶山岳会設立の議起るや、 に高山狂を以て呼ばれたる 病の為本年

「表紙揮毫の小杉

君は

として朝鮮京城に赴任するまで会務を取扱はれたり。 発起人として大いに尽力する所あり、 事務所 の如きも日本橋室町なる氏の法律事務所内に置きて、 大正十年名誉会員に推薦さる。 四十一年控

うなものも、 いたって簡単 遺影も全く見当たらなかった。 -な記事があるのみで、 逝去の月も実際は一月だったのが、二月となっているし、 追悼記のよ

あり、 とになったと聞くや、 撻してくれたのが 城 数馬氏 で、……」(『山岳』第四十四年第一号二二一三頁、武田久吉氏講演筆記)というような 存在 でも誰でも片っぱしから叱り飛ばされて、或時高頭君が何か失敗して謝ったが、城氏に謝まって済むかと叱られ、 だろう、 しても会の長老元締格であったことは間違いない。会の事務所も、最初は城氏の法律事務所(日本橋区西室町三ノ一〇)に る人物なることを鑑定して報告された。」(小島烏水氏著『山の風流使者』二二一頁)というようなところから、 白馬岳等に早くから登られていた。 たものとおもわれるが、最年長の城氏が丁度第一号となったのは、偶然とはいえ、まことにうまくいったものである)であって、 一若いものばかりでなく、そういうお目付役の年寄りも加わりまして……」(『山岳』第五十年六六頁、 K が折々ありますのでその席上、私が城氏にこういう話があるんだが、加わって貰えないかといった処が、それは 城氏の会員番号は は高頭君もなんていっていいのかどうにも判らないので、 「山岳会の骨組には城数馬氏の斡旋も多としなければならぬ。城氏は、高山植物の採集家として知られ、 後に朝鮮控訴院長として京城に赴任せられた なんとかやってみようといわれたが、……中略……この人はわれわれから見れば数代上の大先輩で、 「小島君の案で、社会的に相当の地位のある人を発起人に加えた方がよかろうというので、山草会の小集会 第一号(因みに発起人の会員番号は、1城、2小島、 単身高頭君の郷里へ乗り込み、 本職は弁護土として、法曹界に、早くから名を成していた。 "名士" 高頭君にも面会した上、 の一人であった。 流石の高頭君も口をつぐんでしまったという様に、 3高野、4高頭、5武田、6梅沢、 聲望資産まで調査して、 高頭君が会のために一と肌 7山川であって、 東京市の市 高野鷹蔵氏講演筆記) 城氏が、 信頼するに足 本会創立 脱がれるこ ABC順によ であり、 八ヶ岳 高頭君 面白 鞭 7

(

置かれた。大正十年には、ウェストン、志賀重昻、大平晟、白井光太郎の諸先輩につづいて、本会で五人目の名誉会 されたのが、 あろう。或いは城氏の朝鮮在住が十六年の長きに亘って、本会と稍疎遠になっていたためかも知れないし、また逝去 に推薦された、 かの関東大震災から半歳たたない大正十三年一月で、城氏往年の同志の身辺も、 この大先輩の逝去後、 数行の訃報以外『山岳』誌上に何も残っていないのは、どういうわけなので 多事であったためかと

も推測されるのである。

知るよしもないが、私としては、 に記るされるのも、 日に至って、発起人中の最長老、会員第一号城数馬氏のことが歿後四十余年を経て、始めて『山岳』誌上にやや詳細 前に漸く完成したことは、前にも書いたが、関係方面といっても、どの程度の範囲の人々の手に配布されたものか、 かりでなく、生年歿年はもとより、経歴などもはっきりとしたのである。この年譜が作成者の永眠される僅か四ヵ月 しての面に重点がおかれているが、作成者の意思を尊重して、敢えて省略することなくここに再録しておきたい。 さて、この伊藤憲郎氏が苦心して作成された年譜を入手して、 無意義ではあるまいとおもう。 これをこのまま埋もれさせてしまうに忍びないし、 作成者が城氏京城時代の部下であった関係から、 城氏の本会創立当時の年齢が四十一歳と判 創立六十周年もすでにすぎた今 明したば

譜

元年 八月七日誕生 久留米藩

二十一年 十三年 司法省法学校入学

七月東大仏法科卒業、

著述仏国証拠法其他

二十五年 代言人無試験免許

東京弁護士、 法典論争参加 みた。 もその何分の一にも及んでいないが、一応道標を立てるつもりで記述し、敢て先輩知友から教示を得たく、印刷して

二十年 東京弁護士会副会長

東京市会議員当選一副議長二

高山植物の採集はじめる

三十五年

山草会結成

ツクモグサ発見

三十八年 日本山岳会組織(四十一歳)

三月東京弁護士会主催送別会京城控訴院長に起用さる

四十一年

四十三年 日韓併合

八年 朝鮮独立万才騒擾事件勃発(ニヵ月に及ぶ)四十五年 職階改正 京城覆審法院長

大正

城数馬先生は、 十三年 維新前から大正半まで、日本の創成期にその生涯を送られ、多彩に亘っているが、 料 一月二十三日 逝去 (六〇歳

ている一人であるが、何しろ古い時代のしかも広範囲に及ぶこととて困難している。今の程度だけでは、質にも量に の晩年京城覆審法院長の時代、その部下として警咳に接しているので、私なりに先生の伝記なりともと意欲を燃やし して植物を愛好されまた法曹として、弁護士から法官になり一貫している、 いわば花と法の生涯といえる。 私は先生

終始、

山草家と

司法省法学校時代(若槻礼次郎著『古風庵回顧録』七頁 昭二十五年五月読売新聞社刊

或は八年制法学校と称していた。 司法省が法学校を作ったのは、 それを卒業すると、法律学士という称号を与えられた。木下謙次郎などは最初に 裁判官を養成する目的であったが、 フランス語を主としたのを正則法学校とい 出

た組で、それについで梅謙次郎、それから城数馬など弁護士になった者も多い。

文だけの入学試験をしておいて、一たん入学すると漢文を読むことを絶対禁じた。

大審院長であった横田秀雄なども、そこの出身であった。原敬とか国分青崖とか

は、

われわれの先輩であった。

漢

(註)司法省法学校は明治十七年東京大学に併合されたが、城先生はその明治二十一年の卒業である

大正九年二月

有斐閣刊

(一) 法典論争(穂積陳重著『法窓夜話』三四三頁

明治二十五年春に至って江木衷、 中橋徳五郎君等法学院派の法律家十一名を以て、法典実施延期意見なるものが発表せられた。 奥田義人、土方寧、 岡村輝彦、 穂積八束の諸博士を始 め松野貞 郎

伊藤悌次

虎一君、 IH: 一の宣言書に対して明治法律学校派の岸本辰雄、態野敏三、磯部四郎、 城数馬君等が発表した法典実施断行意見と題するものの論旨及文字は 本野一郎の諸博士を始め宮城浩蔵君、 層激烈であった。

山草家の草分け (武田久吉理博著『原色日本高山植物図鑑』九九頁、昭和三十九年九月一日増訂三刷発行保育社

持ち帰ったのは、 茂していた高山植物を片端から採取し、城氏の生品を預って裁培していた日光萩垣面在住 III [草家の中で最も活動家であった城氏は……明治三十七年七月赤岳に向ったが、 その月の二十一日のことであった。この行、 城氏の新発見はツクモグサを筆頭にウルップソウ、 足の踏み入れる余地も の画家、 五百城文哉氏方に

(四) 山草展覧会主催(前掲武田博士図鑑九五頁)

ヤマツメクサ、

クモマナズナ等であった。

明治三十五年(一九〇二年)五月五、 六の両日、 本郷団子坂下の薫風園という植木屋の座敷を借りて、 山草陳列会 3

百城文哉の七氏であった を催すことになった。この一団の人々には松平康民 その親戚の青木信光の山草好きの四子爵と弁護士城数馬、行政裁判所評定官木下友三郎、 (作州津山藩主の今嗣)、 加藤泰秋(伊予大洲藩主)、久留島通簡 日光在住の

(註) 右子爵のうち松平康民、 久留島通簡両氏は明治二十三年日本最初の貴族院議員になっている。そのときの貴族院議長は伊藤博文であった。

五 ツクモグサ発見(人事院総裁佐藤達夫氏「わたしの宝物」中央公論社『自然』昭和三十七年十二月一日発行四八頁

濃国八ヶ岳横岳採集の表示とともに、記要として「余之ヲ発見スルノ年祖父九十九君ノ三三回忌ニ当ル而シテ此草実 此草ヲ採リ乃チ同氏父君?ノ名ニ因ミテ同氏ノ命名セシモノナリ」………そのラベルには明治三十五年七月十七日信 鑑』に出ているが、そこには「和名ハ九十九草ノ意ニシテ山草愛好家ナリシ弁護士城数馬氏信州八ヶ岳 一翁草即チ白頭翁ニ彷彿トシテ花ハ黄色ナリ余故ニ名ツク 彼が発見した植物のなかで、 いちばん有名なのは、 ツクモグサであろう。 これは牧野富太郎博士の 二於テ始 『日本植物図

面かげの翁に似たり九十九艸」

という自筆の付記までついている。これがでてきたときのうれしさは、筆舌のつくせることでない。

城先生のツクモグサ発見のときの紀行詳細は、別掲武田博士の『日本高山植物図鑑』九九頁に出ている。

韓国司法官の任用(法学士渡辺輝之助著『雨山遺稿』一六二頁

明治四十三年五月一日法律新聞社発行

らず、 日韓新協約実施の第一着歩として、統監伊藤氏は彼国司法制度の改善を図んとす。由来韓国には司法制度なきにあ 幣害多端、 制度と称するに足らざるなり……統監は司法省と商議する所あり、其人員も既に決定せりと聴

……統監たる伊藤氏に一言す、必ずや第一流の名判官にあらざれば不可なり。

(註)なお同氏は韓国任用の法官に望む……との文をも同社に寄稿している。 著者渡辺氏は明治四十一年三月六日の(城氏)渡韓送別会に 出席し

京城控訴院長選任 (国分三亥氏談 司法協会雜誌記載 昭和十五年八月十五日発行

判所に法務補佐官を配置した。次で日本人を官吏として採用したが、倉富さんが法部次官となり、 統監府の設置となり、 司法制度の刷新を行うことになり、日本人を招聘した。 先ず法部に法務参与官を入れ、 渡辺暢君は大審院

長になった。城君も京城控訴院長になった。私は大審院検事総長になった。

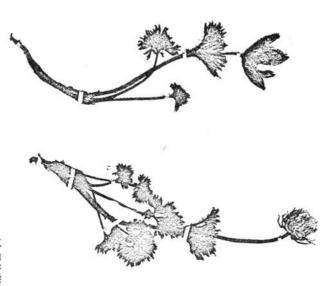
)倉富さんは東京控訴院検事長から渡韓したが、 帰国して法制局長官となり枢密院議長となった。 渡辺さんは東京地方裁判所長から渡韓した

が、帰国して貴族院議員となった

以上

明というより外なかったろうとおもうと、本会とは関係のない方ではあるが、伊藤憲郎氏の熱意と労とを多としなけ ればならない。 苦心されたことがうかがわれる。この年譜がなかったならば、 伊藤氏作成の小冊子の内容は右のようなもので、 簡単といえば簡単であるが、 われわれは会の創立者中の最長老については、 引用書目をみても、 ずいぶん探索に

先生にはまちがいのないことを確認、 十五年七月ということで、 で、或いは三十七年が正当かと、標本所持者の佐藤達夫氏は会員でもあるし、氏と同僚の会員島田巽氏を通じて伺い は三十五年とある。 「わたしの宝物」のコピーを送られたので、私の疑問は氷解してケリがついた。 城氏のツクモグサ発見が年譜には明治三十五年とあり、 『最近やっと昭和四○年七月増訂版を入手し、問題の九九頁をみましたところ、ツクモグサ発見は、 佐藤氏は東大植物学教室、 私は、三十七年が伊藤氏の誤写であろうと考えればよかったが、 小生標本の年月と一致しています。 科学博物館等について調べ、古い植物学雑誌などにもあたり、 あらためて敬意を表した次第です。という報告と共に、 資料 結局伊藤憲郎氏の誤写だったわけですが、 (三) のところには三十七年となっており、 引用の原本が武田博士の著な 同氏所蔵標本と、 武田博士の著に さすが武田 五 明治三 12



本標物植質觀

	面よりらか。似作も立叶と花に甘るかりまりも、りまれいまなん。 ありもののいる、彷徨しわしゃなり、なならならまなく。 おしゃならずまた、おりなりまれれる。三千三回とで、ものれれれる。
	つくとくさ
	拔 数 聪

佐藤氏の「わたしの宝物」の中には、こんなところがある。

中略 城数馬氏といえば、 何年か前、 実は、 ····・そんなことで、 本職の方よりも、熱心な山草採集家として知られ、日本におけるアマチュア植物家の草わけだった。…… 高校以来の親友で、いま裁判官をしている城富次君から、 明治から大正時代にかけて、ながく弁護士や裁判官をつとめ、 同じ法律の道をあゆみ、 かつまた、ご同様、 植物の、道草、をくっている私にとっては、 その父君、 数馬氏の遺品の一 法律家では長老格であった人だ 部をもらった。 城

なく 三十四年の採集というのに、花の淡紫色がまだ残っているという美しい仕あげである……後略…」 この先輩 女学生がつくったかと思われるくらい、手ぎれいにできていて、ことにそのなかのシラネアオイなどは、 が、 むかし採集したおし葉の一部をもらったわけである。 そのおし葉は、 標本として完全であるば か りで

氏はいわばあこがれの先輩だった。

ある。 若い時代とはいえ高頭仁兵衛氏を叱り飛ばし、謝って済むかとなじるような気性の城氏に、女学生のように手ぎれ な標本をつくる一面があったということは、私には見知らぬ大先輩ながら、 治三十四年といえば、城氏は弁護士会副会長とか東京市会副議長の頃でもあろうか、そして山岳会発足後には、 なにかほほえましくさえ感じられるので

がある。 九年三月十八日の消印のある封筒の表には、日本山岳会御中とあり、 城さんの写真もあるよ。と示された二葉の写真は、大礼服姿の城氏であった で引取りに来てほしい。と連絡があり、推参すると、君が城さんのことを何か書いてるというじゃないか。この中に ひとつの心残りだっ 伊藤、 佐藤 これで写真も揃ったと喜んだことだった。 両氏のおかげで、 た。 丁度そこへ武田博士から、家の中を整理したら山岳会関係のふるい資料が、 城氏に関する資料が手に入ったからには、 日記をみると昭和四十一年四月二十日のことである。 裏には朝鮮京城米倉町官舎城数馬と雄渾な署名 遺影がどこからか出てこない (叙位叙勲のときでもあろうか)。 括出てきたの かと、 その三日あ それ 大正 から

丽

Ш

しはおろか、

もっと手近かの山あるきや、

山草採取も思うにまかせなかったのではあるまいか。

では早速と彼は私の許に立寄って、城氏の遺影をもっていった。 十周年記念展覧会に発起人の写真を飾りたいのに、城氏だけが入手できないで、 J A C の会員総会があり、 懇親会の席上で私はそのことにもふれたのだが、 困りはてているとの話があり、 会のあと会員の山崎安治氏から、六

ても、 とどめておく 写真が揃って掲げられたし、 城氏 四十一年六月十一日 植物の分類にしたがって、 まずそれに近いとおもわねばなるまい。 の登 山歴は、 その採集標本からでも知るほかないのだが、東大理学部へおさまった標本は、一括されていな いから西武百貨店で盛大に開催された、 目録にも収載されたのは、 それぞれの部門に入っているというから、 私は『山岳・総索引』について、城氏の執筆されたものを摘記するに ほんとうにタイミングがよかったというべきであろう。 日本山岳会創立六十周年記念展覧会には、 これを探し出すことは不可能では 発起人七人の

雜)。 の神仏 女貌山と太郎山 (一ノ1本欄)。 信州の箕冠岳 (三ノ1雑)。 (二ノ1雑)。 白頭山 「長白山」(五ノ1本)。 函嶺の駒ヶ岳(二ノ2本)。北面より遠望したる赤石山系(二ノ3雑)。八ヶ岳山上 富士登山と明石女子師範学校職員の責任(一/3雑録)。 八ヶ岳の登路 / 3

冒頭の緒言だけは城氏の文である。 余が大に誇る所である……後略」 まだ白頭山を遠望した事もない。 H 『の踏破を心に誓ふて韓国に渡ったのは明治四十一年の三月である。爾来巳に二ヶ年の星霜を経過した今日まで余は 太田篤氏と連名になっている白頭山 である。 されども今茲に最も新らしく又最も有益なる太田工学士の白頭山登山日誌を紹介することを得るは とあって、城氏は渡韓後、 従て 今回の紀念号に於て 大々的探検隊の報告を公にすることも出来ない 日く「先輩諸君が日本アルプスの探検に殆ど全力を尽さるる時に当り、 紀行は、 明治四十二年四月から五月にかけて太田氏一行の行なった登 その職務や地位や当時の治安状況、 交通事情 などか のは 余が白頭 Ш 記で、

然し城氏の

Щ

九一八年・当時五十五歳)朱乙温泉より冠帽峰(多分主峰とおもわれる)に登られたのである。 山草への情熱がさめたわけではなく、 (大正七年十二月発行) 一一九頁雑録欄に、「海抜八千尺の冠帽峰」と題する記事のあることが判明した。 私が山崎安治君を煩わして『山岳』を調べてもらったところ、第十三年第一号 この記事には「北鮮日報大正七 大正七年夏(一

年八月三―四日」と附記されているところからみると、城氏から切抜きが送付されたものであろう。

でないが、 この先輩中の大先輩の風貌に接することができたろうにと、 年齢であったのからすれば、早逝というべきであろう。 田博士は別格として、 このように元気であったと想像されるが城氏が、還暦の年に現職のまま逝去されたのは、どのような事情か詳らか 八十歳近くまで健在であったならば、或いは小集会或いは大会の席上などで、私のようなその頃の新米会員も、 ほかの発起人の方々は、 戦後亡くなられた小島、 いまなおカクシャクなどと書けば、これが当たり前といわれるにきまっている武 高頭、 高野、 もし城氏が大正末期にでも韓国から引上げて、 惜しまれるのである。 山川の諸先輩がみな八十歳を越え、或いはそれに近 東京に在住さ

なにかをくみとるのが、私にのこされた仕事だとおもうが、これはまた他日に譲りたい。 三年越しの稿を綴りおわって、 私はホッとした気持である。 城氏の 『山岳』への寄稿全部に目を通して、

(一ナプ七年ア月言)

追記 『山岳・総索引』に記載のないものについて、山崎安治君からの報告は左の通りである。

ш [岳』一ノ2雑録一四七頁、 高山に於ける植物の保護。 K・Jの署名あり、 城氏のものと思われる。

太郎博士のリーゼンゲビルゲ登山のことにふれている。

一ノ3 (一八〇頁)、二ノ3 (一七四頁)、共に会員登山報欄に、 明治三十九年七月上旬戸隠山の表山及び裏山、 同

月十七日八ヶ岳。四十年六月箱根駒ヶ岳神山、 三ノ1(一五一頁)金剛杖(遅塚麗水、江見水蔭、登張竹風その他合著春陽堂刊) 七月八ヶ岳に登山のことが出ている。 の書評がK・Jの署名で載って



会員第一号 城数馬氏 (創立発起人・名誉会員) Kazuma Jō (founder & Hon.mem.) (1864-1924)



城数馬氏から日本山岳会宛封書 (大正九年三月十八日付の消印がある-本文10ページ参照

いる

明治三十九年八月十日発行。 私もなお念のため『山岳』を繰ってみたところ、いくつかの落穂があった。 二ノ1、戸隠裏山の宝丹小屋 小西和著・日本の高山植物・三十九年十月七日・二松堂発行。 (雑録)。同号新刊批評欄、 三好学・牧野富太郎共撰・日本高山植物図譜・成美堂

ところがない。JACに伝わる批判精神の源流は、 大観。これらの書評は綿密詳細なもので、 二/3、書評欄、 前田曙山著・高山植物叢書第一冊。志村烏嶺著・やま。小島烏水著・雲表。小島烏水著・富士山 時にユーモアを交え、ときに辛ラツをきわめた批評で、決しておざなりの この辺に端を発しているのかもしれないと感じたことだった。

以上

アンデスからアマゾンへ 一九六五年

ビルカバンバ山群とウルバンバ川==

志 社 大学 山 岳

U め に

は

心みたいなものは、私自身はあまり持っていなかった。神戸大学がサイパルをねらっているらしい、ということを聞 いた。だから福田勝一が第二次ヒマラヤ計画のことを持ち込んで来た時も、チャムランを推した。 いても、それほど特別な感情は生じなかった。西ネパールより、むしろ東ネパールのチャムランが頭にこびりついて 「A─A計画」の発端は、一九六○年までさかのぼらねばならない。アピが終わった時、西北ネパールに対する執

イパルぎらいというほどでなくても、東ネパールのソロ・クーンブ地方の風景を思うにつけ、今度は東へ行ってみた 谷間のキャラバンで、サイパルに行くにも、こんな道なのだろうと思い込んでしまったらしい。今考えてみれば、

サイパルもアピとあまり変らないように思えた。アピの帰路のキャラバン、それも特にダルチュラあたりの灼熱の

かった。

しまった。 チャムランを吹き込まれて、すっかりその気になっていた福田は、平林先輩に相談に行ったところが、一 平林先輩は、そのへんの事情を『サイパル登頂』(サンケイ新聞出版局刊)に、 こう書いている。 喝されて

や友人達と話し合ってきた、探検する目的を選ぶ精神と全く異っていた。 を通って、 〇〇〇メートル級の山に登ろうと云うのである。ヒマラヤの銀座のように、毎年何隊となく各国の遠征隊が通った道 であった。 いのだ。 「…福田と落ち合って話してみて唖然とした。彼が私に示した計画と地図は、 口の悪い人に云わせれば、きっとそう云うだろう。 四方八方から写真に撮され、 私はどの山に登るのか聞こうともしなかった。 少しの新鮮味もない針のような山に行こうと云うのである。これは長年 エベレストに登るのなら話しは別であるが、 あの辺は、職人登山家にまかせておけば良 エベレストを中心とする山塊の この附近 地図

そこでもう一度福田と、 遠征する目的の選び方を話し合って別れた。

次第である が後日その初登頂の栄をかちとったが(『山岳』第五十八年参照)、 こうして平林先輩を中心にした計画は、サイパルへ進展して行った。 日本隊に登られてよかった、などとみずからを慰めた しかしチャムランは立派な山である。北大隊

どと銘うって、アンデス関係の文献、 マゾンへのプランが、 スを調べることは、 、ヤムランも確かに魅力だったが、 自然その水系であるアマゾンも含めねばならなくなってきた。そして、いよいよアンデスからア だんだんはっきりと頭の中に巣くってきた。薬師義美君と一緒に"Article on ANDES"な 雑誌の目録を作ったりしたのも、 ヒマラヤとはまた趣を異にした、アンデスへの夢が生まれつつあった。 この頃のことである。

れの計 登山とか探検とかいうものは、ごく僅かの例外を除いては、一つの集団行動の成果であることが多い。 |画の発端や行動中において、非常に個人的な要素が、大いに入り込んでくることも、また多いのである。 しかし、

もしチャムランに成功していたら、今度のアンデスア→アマゾンがなくて、八○○○メートルのヴァリエーションを 平林さんがいなかったら、サイパルには行かなかったかもしれない。案外チャムランへ行っていたかもしれない。

狙っていた可能性もある。

界でも他に類がないような独特の風貌をしているが、そこにはアマゾンがない。 ばならなかった。何故ペルー・アンデスを選んだかであるが、北はベネズエラから南はティエラ・デル・フェゴまで のアンデスの中で、最もアンデスらしいアンデスが、そこにあるようだったからである。無論パタゴニアなどは、 私が考えていたアンデス→アマゾンに、人、金、タイミングの三要素が出そろうまでには、一九六五年まで待たね

たいなアルパマヨもある。ワイワッシュ山群はカンチェンジュンガ山群といったところ、イェルパハというカンチみ でみるナンガ・パルバットに似ているし、附近の山をぐっと押さえて、孤高を誇る巨大な独立峰である点がぴったり ば云いすぎかもしれないが、リマからクスコへ飛ぶ航空機から、すぐ近くに見られるところも、ギルギットへの途中 たいな山や、ジャヌーみたいなヒリシャンカがある。サルカンタイはといえば、ナンガ・パルバットみたいだといえ のマハラングール山群というところか。ペルー・アンデスの最高峰、 、ルー・アンデスの中でも、いろんな山群(コルディエラ何々)がある。ブランカ山群は、定めしエベレスト附近 ワスカランがここにあるし、アマ・ダブラムみ

であり、 カやワイワッシュと結びつくアマゾンの源流は、マラニョンであるが、この川筋は思ったより文明が入っているよう 話しが脱線してしまったが、ブランカやワイワッシュにない未知の探検的要素が必要だったのである。またブラン またゴムボートで下降して、面白いようなところでもなかった。

である。

ワガルンチョとワリャガ川を結ぶ線も考えてみたが、山塊が小さいことと、川筋がマラニョン同様面白くなさそう

である

う要素の他に、 こうやってくると、 その地域全体を覆っているクスコを中心としたインカ文明への限りない興味も、 私達の計画がビルカバンバ山群とウルバンバ川を選んだ大体の論郭が判然としてくる。こうい 捨て難いものとな

た存在にも スパレックらの死によって放棄されたままになっている北東稜は、 ヴァリ る案もあるだろうが、 ごく僅か 一アー ス合同隊 E ほ レルカバ ばば しかない。 (五七七五メートル) くらいで、後はスケールがぐっと小さくなってしまう。 ンバ かかか に たのは、 により北 わらず、 ン・ルート であるほうが Ш 群 面 大物はほとんど登られてしまっている。ビルカバンバ山群中でも同様で、残されてい の盟主サルカンタイは、 私達はそうは考えなかった。やはり大きくて立派な山でなければいけない。 南稜も考えていたからである。 カン その後誰れも試みようともしていない。 5 からの登頂」 一九五六年のオランダ・フランス隊により東稜 V いのは、 は、 皆あまり変りがない。 ごく自然に生まれてきた。 すでにルートを違えて二度登られている。一九五二年のアメリカ・フラ インカチリヤス 非常に残念なことであるが、 私達の主目標は、 サルカンタイの山稜中でも一番長く、 カの峠 九五四年、 →北面トラバースのル (四六〇〇メートル) これにほぼ決めて そういう山を数多く オー ストリア隊が手を付け、 アンデスには、 から、 1 ーサル 南峰 た からであ たのは 頂上へ一 カンタイの 初登頂」 番目 丰 気 力 す

登頂」 みら 結局サ ルート て適当な目標とはいえなくなってしまった。 に突き上げるこの急峻な稜は、この山 も見てみたが、 たことがある。 カンタイという山には いい気なことを云ったもので、このルートが最も「同志社」向きのルートだったわけである。 雪崩が気になるところである。 写真で見ていた時には、 「一般ルート」 の初登頂以前から目をつけていたイタリアのギリオーネによって、 北稜および西稜は登攀不可能と判断した。 まだ計 などないのである。 テレ 画 0 イの 部では 登っ あっ た東稜 「ヴァリエーション たが、 北 実物を仰いでからは、 面トラバ ・ルル ースのルー アメリカ・フランス隊の北 トによるサルカン 1 も非常 私達 ちょっ 0 隊 と試

面

という事態が起きた。幸いにも傷が軽く、手当が早かったために完全に回復したが、彼はアマゾン隊に入る予定にな ・シュアール(五七七五メートル)については、詳しくは後述するとして、その初登頂と共に、里藤隊員の足指の凍傷

っていたため、

当時は困ったことであった。

5. 員構成については、いろいろ考えさせられるものが含まれていそうである。 が、もう少し山登りがしたい意向が強いなどの理由で、結局前半の計画にくみ入れることにした。この判断および隊 後半のビルカバンバ隊の計画が、びっしりとつまっているし、天候もあまり期待できない、後半アマゾンへ入る隊員 的な問題から、 われてはいたが、全然試みられたこともなかっただけに、アプローチにどの谷をつめるかという、山登りのごく基本 ・シュアールを、隊を二分した後半の計画に入れるか、それとも前半に入れるかについては、いろいろ考えたが、 解決してゆかねばならない山登りであった。この時の苦しい経験は、 キシュアールという山は、 非常に貴重なものとなるであろ 外国隊にねら

画通りであった。 サルカンタイなど前半計画の終了の後は、いったん全員クスコに集結し、その後で隊を二分することは、 一隊は再度ビルカバンバの山登りを続け、 別の隊でウルバンバ川のゴムボートによる下降を行なう 当初の計

ているエスプリテュ・パンパなども、案の中に入っていた。 またプマシリョ (五九九四メートル)の他にも、 わせて、 ただ山 最終決定するつもりであった。ビルカバンバ西端のチョケサフラ(五一五二メートル)や、インカの遺跡が残 のほうの目標をどこにしぼるかに関しては、 現地でのムーラの調達状況や、 その時の気象条件などを考え合 コルディエ

ンタイの報告などしている時、メリソス(五三一〇メートル)双子峰の話しが出た。 凍傷の里藤隊員を日本へ急遽送るため、一緒にリマへ出た。そこでペルー山岳会々長のモラレス氏と会い、サルカ 一九五七年、ケンブリッジ隊が撮

ラ・ウルバンバの山

々も調べておいた。

たと思われる、この山の西面の写真を見せてくれた。ペルー山岳会会報 Revista Peruana de Andinismo その写真が掲載されており、 「未踏峰」と説明してある。モラレス氏もこの山を強く推した。 の最新刊

いという要素も加わって、皆をひきつける けにはいかない。アプローチの谷が全然違うのである。プマシリョもいい山であるが、 クスコへ帰ってから皆で相談し合った。プマシリョかメリソスかであった。BCへ行ってから決めよう、 (すでに第六登以上されている)。 この点、高度はやや劣るが、 メリソスの独特な美しさが、 結局知られすぎている感じで 未だ登られていな というわ

をつめて行けば、多分その東面の麓にたどりつけるはずだ。こうして後半の目標は決定した。 る。どうも、それらしい。相当ひどいようであるが、 キシュアール隊が撮って帰った写真を、急いで焼いてみた。メリソスの東面らしき、ひときわ目立つ山が写ってい 西面に比べればまだ可能性がある。ワドキー ナからサクサラ谷

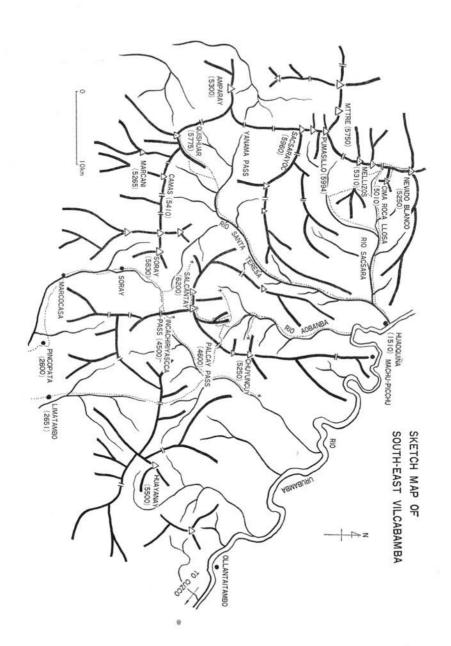
とも思われるので、現在調べているところである。 アメリカ隊が入った谷からは、このメリソスは登れそうにないし、 いて送った。ところが、この山は一九五六年にアメリカ隊により既に登られている、との返事がきた。 帰国した後、アメリカ山岳会のアダムス・カーター氏から報告を送るよう依頼があった。このメリソスのことも書 彼らの云っているのは、 他の山のことではないか 一九五六年に

つの頂、 ず れにせよ、このビルカバンバ隊は、 次にまた一つと、最後の力をふりしぼってねばりにねばりながら、 悪名高い八月→九月の悪天候の中 所期の目標を完遂した。 を ちょっとのチャンスをつか んでは

この私達の登山、 こうして現地滞在五ヵ月に亘るアンデス→アマゾンの登山、 方、アマゾンの源流、 探検に関して日本山岳会から戴いた御高配、 ウルバンバ川のゴムボートによる下降に関して、 探検は当初の計画通り終了したのである。 詳しくは別の報告書を見て戴きたい。

御支援に対し深く感謝の意を表します。 冠 上

康



た。

サルカンタイの登攀

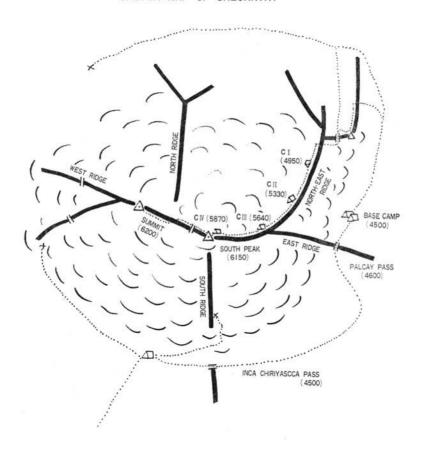
仕事ぶりは実にのんびりしている。 のんであったキャラバン用のムーラ (馬とロバの一代雑種)も揃ったので、 五月三一日、 三三頭のムーラと一〇人のアリ りとした曇空が続いている。この緑につつまれた静かな山村で、 I (馬方)のキャラバンは、 カ月半の船旅、 (二六〇〇メートル) に集結したのは、五月二六日だった。 ペルー ゆっくりサルカンタイの麓めざして動き出した。話には聞いていたものの、 についてからの通関、 あいさつ等をすませて、全隊員がキャラバンの基地になるピンコ 天気待ちもかねてしばらく休養することにした。 例年より雨期明けがおくれているのか、 アリエロ 毎日どんよ 0

除雪作業の一日を利用して、さっそくサルカンタイの南稜 -- hル)に小川、沢の二人が登ってきた。

急な雪渓を登り、丁度前穂高東壁のような岩登りを楽しんで、頂上に立っ それでも二日後には、すでにサルカンタイ南稜直下のインカチリヤスカ峠 結果は先述のとおり悲観的なものであった。 またこの日、インカチリヤスカ峠のすぐ南にある無名峰(五〇〇〇メ (宮本、 堀江)および西稜 (四五〇〇メートル) にキャンプし、 (里藤、 川田) の偵察に出 峠道の かけ

北東稜へ 岩尾根をさけてガラ沢をつめて第一キャンプ予定地までの荷上げとフィックス(前芝、 チと仏米隊が登った北東面のルート(江上、沢)、臼東氷河から北東稜へ(前芝、小川)、 キャンプを設営することができた。そして、さっそく五日には四つの偵察隊が出かけた。 日北東稜の偵察 六月三日には急なパルカイ峠(四六〇〇メートル)を越えて、サルカンタイ東氷河のアブレーション・バレイにベ (岩間 (岩間、 川田)、 堀江)、臼再び東稜へ(里藤、宮本)の三隊が出かけた。 回東稜から北東稜へ(里藤、 宮本)のルートをそれぞれ偵察した。 われわれは、岩尾根からとりつい 川田、 ()北面 は北東稜末端の岩尾根から 小川、 つづいて六日には から北東稜 モラレス)、 のスケッ ース

SKETCH MAP OF SALCANTAY



そしてCIIに入った四人によって、次の日から問題の

"東壁"との悪戦苦闘がはじめられたのである。

うだが、 りであった。たしかに仏米隊が初登頂した北東面は、頂上までの距離も近く、ルートとしては、一番可能性はあるよ て北東稜に出て、 つねに雪崩の危険があるし、 あとは忠実に尾根どおしに頂上に立てるのではないかと考えていた。 われわれのような大パーティでとりつくには、ルートとしてややもの足りな 偵察の結果も ほぼ予想どお

登れないという決定的な理由はない。それに、われわれは、というより日本人は、どちらかといえば面より稜の方が にベースキャンプからもはっきりみえる、いくつかのギャップ……たしかに悪場の連続である。 なじみやすい。ルートは予定どおり北東稜に決定した。 北東稜は長くて頂上までは遠い。 カスパレックが撃退された "東壁"、その上にあるキノコ雪、 しかし、どうしても トサカ尾根

CIのすぐ上の小さなピークから、 えなどがつづき、 ラバース、足ひとつがやっと乗る細い尾根、 ○メートルのロープをフィックスした。次の日からCIの四人によってCⅡへのルート偵察、 けて急なガラ場のルンゼを登って、北東稜の支尾根のコルに出、ここからアイゼンをつけて急な岩と氷のルンゼを登 ックスした。いうまでもなく、ほかの隊員は連日CIへ、あるいはCⅡへ荷上げをくりかえしている。 「の四隊員が入った。 六月九日、岩尾根から北東稜にとりついて第一キャンプ(四九五〇メートル、以下CI)を設営し、里藤、 やっと北東稜の雪尾根に出ると雪の台地があり、ここにCIを建設した。岩尾根と氷のルンゼに、 宮本が、つづいて一三日里藤、 やっと東壁直下の雪の台地に、CII(五三三Oメートル)を建設することができた(一一日)。そして ベースキャンプからCIへのルートは、東氷河の舌端を横断して岩尾根にとりつき、 尾根は急に細くなる。ここからロープをフィックスして、六〇度はある斜 川田がCIに入った。CIとCIの間には、 あるいは急な雪壁の直登、 ぽっかり尾根の切れているギャップの跳び越 約五〇〇メートルの 工作がおこなわれた。 、岩間、 それぞれ 宮本、川

るし、 に岩間、宮本が入った。この間、もちろんCIIからは最終キャンプであるCIV地の偵察、ほかの隊員はそれぞれのキ ができた。そして一七日にやっとトサカ尾根の上にCⅢ(五六四○メートル)を建設し、 を切り落として、やっとルートを開き、二段目と三段目は北面をトラバースし、急な氷のルンゼを登ってさけること ないが、 に成功した。この幸運なトンネルをぬけ出ると、すぐ目の前からトサカ尾根がはじまる。 このキノコ雪を突破する以外に方法はない。一日かかって、やっと身体がはいる大きさのトンネルを開通させること ここを越えられるかどうかが、そのまま登頂の成否にかかっているのである。第一日目は、このキノコ雪の下までし きな斜面 のロープでつながってしまった。テントとテントが、 か進むことができない。次の日、またキノコ雪にやってきた。キノコ雪のややうすくなっている北側にまわってみる でしまった。東壁の上にはキノコ雪がかぶさっている。一〇メートル近く、ひさしのようにおおいかぶさってい りつきのクレヴァスは、 ンプへの荷上げを続けながら、 思ったより登りは簡単だった。 三段階に分かれている。 (東壁) に出るが、ここは六〇度を越す氷壁であり、 巨大な雪庇に一ヵ所、 キノコ雪から落ちてきた小ブロックでできたスノーブリッジをみつけて渡って、三角形 一段目は、大きな、 一つずつ駒をすすめている。CⅡからCⅢ しかし氷はさすがに堅く、 スーッと穴があいているではないか。もうこの穴からトンネルを掘って、 しかも急な雪庇がスカイラインをなしている。 ロープでつながっているのであるから、 一歩一歩カッティングで登る。 岩間のピッケル(シモン)はブレードが少しゆがん へのルートは、 里藤、 トサカは 完全に約八〇〇メートル 川田が、つづいて一九日 めずらしい『記録』 しかし雪も安定して あまりはっきりし 不安定なところ の大

隊長がいる。 の隊員 二〇日には南峰 の配置は、 第一次アタック隊は岩間、 C の東肩の台地にCIV(五八七〇メートル)を設営し、翌二一日を第一次アタックの日と決めた。 に里藤、 宮本、 岩間、 川田に決めた。 川田、C皿に小川、沢、 これに里藤、 堀江、CⅡに前芝、CⅠは無人、 宮本がサポートし、 できれば四人が同 BCに 時 は江上 に頂上 日 ろう。CⅢから上は比較的なだらかな雪の尾根が、

南峰からつづいている。



に立つ、そして翌日小川、沢、堀江の学生班が第二次アタック隊として、頂上にむかうことにしていた。

第一次アタック隊とサポート隊は六時にCNを出発し、南峰(六一五〇メートル)には七時、

三月、

トは、 高度を確認したいと思って、二つの高度計を携帯したが、 〇メートルくらいのところが、妥当ではないかと思われる。しかし、これはあくまで感じである。できるだけ正確な とまってしまった。 分から一一時の間に、 ここからは頂上直下の急斜面を登るより仕方がない。 いるので、どうしてもその中にすいこまれてしまう。振子を使って、やっとギャップの下に降り立つことができた。 なかなかの悪場である。 るが、ギャップの末端は雪庇になっていて非常に不安定であり、しかもギャップの下にはクレヴァスが走っていて、 峰と頂上の間にある大ギャップの上にやってきた。ここまではアイゼンがよく効く、安定した氷の斜面がつづいてい の仏米隊、一九五六年のテレイに続いて第三登である。高度計はCNのやや上部で、六〇〇〇メートルを指したま いくらか傾斜はゆるいが、今年はどうしたことか、大クレヴァスが口を開けていて、どうしても越えることは 少し不安はあったが、 サルカンタイの高度は六三〇〇メートル、六二七〇メートル等々いろいろの説があるが、 サポート隊も含めて四人の隊員が、入れかわり立ちかわり頂上に立ったのである。一九五二年 結局約三時間かかってロープをフィックスし、懸垂で降るが下にはクレヴァスが待ちうけて 正面 (東南)の六○度を越える氷壁を登ることにする。そして、ついに一〇時三○ というのは仏米隊、あるいはテレイの辿った北 両方とも狂ってしまったのは残念であった。

する適当な場所がないため、結局隊員がひとつずつ荷物をかついでおりる以外に方法がないことがわかり、 うということになり、江上隊長がBCから袋をかついでCⅡにあがってきた。しかし斜面が複雑なことと、 五人の隊員と若干の荷物が、CⅢに残っている。CⅡ上の東壁の部分は、 た撤収がはじまった。 小川、沢、 ルートのほとんどは雪庇の上、あるいはキノコ雪、 堀江の第二次アタック隊も、天候にめぐまれて無事頂上に立つことができた。 急な斜面につけられているために、 滑車をつかってケーブル式に荷物をおろそ

そして問

きた、快心の登攀であった。 だれ一人高度の影響を受けるものもなく、全く予定表どおりに一日もくるわずに、七人の隊員が頂上に立つことがで ぼって、二七日には全撤収を終えて、全員無事BCに集結することができた。天候にめぐまれたとはいえ、不思議に た小ブロックが、CIIのテントに飛んできた。一日も早くCII、CIIを撤収しなければならない。 ばらくの快晴つづきで、大分いたんでしまった。とくにCⅢからCIまでの間は、いたるところ雪庇の崩壊で、 トが寸断されている。そして二三日には、最もおそれていたキノコ雪から小規模のブロック崩壊があり、 最後の力をふりし 勢いのつ

撤収して、リマタンボへ下山した。 たずねたり、 スキャンプを出ていった。残った江上、岩間、 しばしの休養の後七月一日、キシュアール(五七七五メートル)へむかう里藤、 七月に入ってからの天気は急変し、連日の吹雪に偵察だけに終わってしまった。その間インディオの部落を リヤクタパタというインカの遺跡を見にいったりで、七月一六日、約一ヵ月半暮したベースキャンプを 堀江、前芝は、近くのチュンクイ(五二五〇メートル) 宮本、 川田、 小川、 沢の五 の登攀を予定して

キシュアールの登攀

Andinismo からも離れていて、 ンバ山群中の未踏峰では一番高い。 この山は 六〇〇〇メートルのサルカンタイからも、 また プマシリョ・グループ キシュアール (五四一〇メートル)、マルカニ (五二六五メートル)の山々が、まだ未踏のまま残っている。 に紹介されているのに、キシュアールに関する記事はでていない。近くにはアンパレイ(五三〇〇メート (五七七五メートル)は、未踏峰のすくなくなったアンデスで、 今日まで 忘れられていたようだ。 メリソス は "注目の未踏峰』として Revista Peruana de 高さの点では "大物"であり、

七月一日、サルカンタイのBCを出発したキシュアール隊は、途中地図にある道が廃道になっていたり、

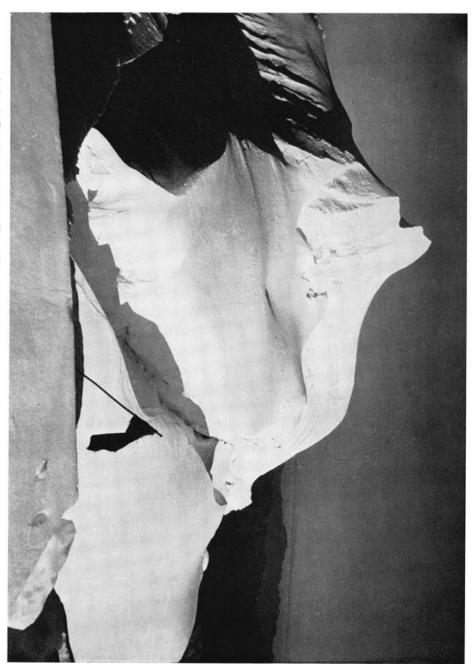
ムーラと

ウラ部落に着いたのは、八日になっていた。そしてキシュアールの氷河から流れ出ている沢を少し登った森林帯に、 アリエロに逃げられたりして、結局ウルバンバ川まで降りて、ワドキーナからサンタテレッサ谷をつめて、 麓のトト

ベースキャンプ(以下BC、三六三〇メートル)を設営した。

めることにした。結局その日は日、白とも稜線上に出たが、吹雪とガスのため前進できなかった。それでも稜線上の 台は沢どおしにできるだけ遡行し、 きな氷河に吸いこまれてしまう。 台地にCI(四四五〇メートル)の予定地を決めることができた。 みな具合がわるく、まともに動けるのは里藤と川田だけである。 は の頂上は姿を現わさない。 一一日にはCIを設営して里藤、 翌九日には、 いガスにつつまれてしまった。キシュアールにきてから里藤、川田以外の隊員は全員下痢に悩んでいる。 おきに便意をもよおすようだ。 さっそく二つの偵察隊が出かけた。 Hキシュアールから北方に派生している稜線へ(宮本、 一三日里藤、 氷河に出たところ(四九〇〇メートル)の地点にCI地を決めるが、 川田、小川が入った。翌日里藤、 適当なところで一隊と同じ稜線に出て 暑いワドキーナでガブ飲みした生水が、 川田は С II (ツェルト) に入り、さらに上部を偵察するが、午後からは、 そして翌一〇日は吹雪の中を全員で荷上げに出かけ、 川田は尾根ぞいにさらに登ると、やがて尾根は大 (里藤、小川)、 わるかったのだろう。 まず主峰の所在をたしか まだキシュア とくに今日は 沢なん 川田)、 また

このピーク(五二三〇メートル)の頂上に立つことができた。ここをわれわれは"Glacier Dome"と名ずけた。 n びえている。 がぎの日から里藤、 五日は六時三〇分に、ビバーク・サイトを出発する。 広い氷河をクレヴァスを避けながら進んでいくと、 あまりの遠さに、がっかりしてしまう。四時三〇分、五〇七〇メートルの地点でツェルトをかぶる。 さらに大氷河が二段になってつづいていて、そのはるか遠くに、キシュアールの頂上がひときわ高くそ 川田によって、CII用に張ったツェ 氷河の中にドーム形のピークが近づいてきた。八時前には ルトを撤収して、 その日は朝からどんより曇って、ガスがたちこめている 連続ビバークの頂上への前進がはじめら



the nife-edged ridge running down leftward from the summit. The Summit ot Salcantay seen from the South peak. The climbing route was taken on 南峰から見たサルカンタイの頂上、頂上から左にのびるナイフ・エッジの尾根がルート



リマ・クスコ間の飛行機から見たサルカンタイ。左は西稜、中央は南稜、右は北東稜 Salcantay (6200m) seen from an airplane (from Lima to Cuzco). Left=West ridge, center=South ridge and right=north-east ridge.



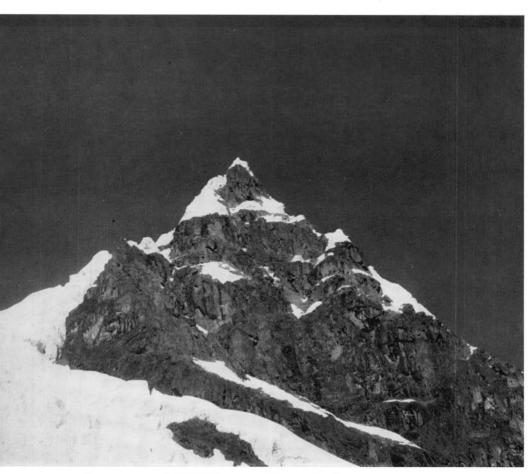
リマ・クスコ間の飛行機から見たキシュアール峰 Quishuar (5775m) seen from an airplane (from Lima to Cuzco)



サルカンタイの頂上に立つ岩間 (左)、川田 (右) の両隊員 The summit of Salcantay. (June 21,1965).



第2キャンプから第3キャンプ間にある巨大なキノコ雪に掘ったトンネル



メリソス・コルから見たメリソス・マイナー・ピーク Mellizos Minor Peak (5230m) seen from the Mellizos Col (4500m).

でにふれたように、

われわれはメリソスを西面から撮った写真を、手もとにもっていた。それによると、

ある。二人は五〇七〇メートルの地点にテントを張って待っていた。感覚がなくなっていた里藤の足の両親指は、こ 引き返す。 ゆっくり頂上に向かう。九時三〇分、ついに頂上に立つことができた(五七七五メートル)。三〇分の滞頂 バーク(三時三〇分)。 で進んだが できた。氷河は時々ズシン! の夜から急に痛みはじめた。翌一七日には全員BCに集結し、 :日のトレースのためにかんたんに進むことができた(六時三〇分)。 ここからは 深いラッセルに悩まされ 六日は久しぶりに朝から雲一つない晴天、四時三〇分にツェルトをたたんで、 昨日、 グレイシャー・ドームの頂上をみると、二つの豆つぶが手を振っている。サポート隊の宮本、 グレイシャー・ドームから十分頂上への大氷河を眺めておいたので、ゆっくりではあるが前進することが (一二時)、このあたりは不安定なスノー・ブリッジの連続なので、一段目の氷河にもどって 三晩目のビ 食料も残り少なくなってきた。コンビーフ一缶、オコシ二枚、チョコレート一本の夕食。 と無気味な音をたてるが、もう、おどろかなくなっていた。第二段目の氷河 二一日クスコに帰着した。 前進をはじめる。 二段目の氷河は 0 沢の二人で

メリソス・グループの登攀

るわけである。 ここワドキーナ(一五一〇メートル)でアマゾン河下降隊(江上、宮本、沢、 た。全員でぶつかったサルカンタイの登攀と、 る。五日、アマゾン隊が出かけると、 てワドキーナにやってきた。そして、次の日は全員でマチュピチュのインカの遺跡 ソス・グループ登攀隊 八月三日、凍傷のため帰国した里藤隊員をのぞく八名の隊員と安倍カメラマン、それにモラレスは、クスコを発 (前芝、 岩間、 われわれはさっそくキャラバン用のムーラ探しにかかった。 川田、小川、堀江、モラレス)は、それぞれ別々に河と山 別動隊によるキシュアール登頂が終わり、 へ "お別れハイキング" 安倍カメラマン) いよいよ第二次計画には へ出発するわけであ ٤ 12 出 け

南峰

て川 1 北峰につきあげている急なノコギリ状の二つの岩尾根、その尾根にはさまれた荒れ放題の懸垂氷河……、どこにもル つか 能性を求めて、 もちろん地域差がある。 と貴重な日が過ぎていく。アンデスの登山シーズンは、五月から八月までの約四ヵ月間といわれているが、 ドキーナの暑さと不潔に辟易しているわれわれをすっかり元気づけた。しかしキャラバンに必要なムーラが、 ブランコ(五二五〇メートル)やシマ・ロ を確認してきた。そして、やはり相当むずかしい山ではあるが、 まちがいなくサクサラ谷をつめたところにメリソスがあること、 田 っていない。 を見い出すことはできなかった。そこでキシュアール頂上から撮った写真にみえる、 堀江の二人は、キャラバンルートの偵察とメリソスの所在をたしかめるため、 東面から、すなわちワドキーナからサクサラ谷をつめて、アプローチすることにしたのだった。そし 高原地帯で働くムーラは、 アマゾン源流に近いビルカバンバ山群は、天気は不安定のようだ。ビルカバンバの カロサ(五〇一〇メートル)の山々のあることをたしかめてきた。 高度と寒さには強いが暑さには弱いらしい。 登頂の可能性は十分にあること、近くにはネバ またキャラバンルート、ベースキャンプの位置など 四日間 五日、 東にのびる氷河 の偵察に出 この報告は、 iz かけたが、 登攀史を まだみ ٠ ٢ ワ

サラ部落まで、 落に着いた一九日には、 方の帰りを待っていた前芝、 っとメリソスの麓、 八月一四日になって、 ・コル 二往復キャラバンをやるわけである。 (四五〇〇メートル)へのルートをひらき、 サクサラ部落(三六〇〇メートル)に集結した。 やっと必要数の半分六頭のムーラと、二人のアリエロ(馬方)をみつけることができた。 コルに前進ベースキャンプ(以下ABC)を設営し、 堀江、 モラレスは、一八日に二回目のキャラバンをはじめた。そして一九日全荷物がや この日先発の岩間、 コルへの荷あげをはじめていた。そして後発隊 先発の岩間、 川田、小川の三人が出発した。 川田、 川田、 小川の二人が入った。 小川はすでにサクサラ部落から がサクサラ部 ムーラと馬 サク

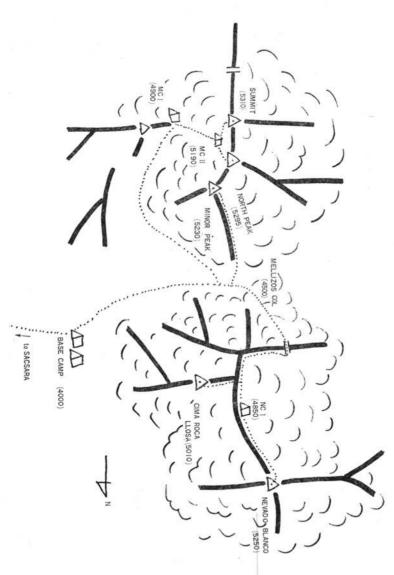
べてみると、

ムーラ探しの一日一日は、なによりもつらいことである。

ほとんどの山が六、七月に登られている。

八月、

それも下旬に登った記録は一つもみあたらない。こ



SKETCH MAP OF MELLIZOS GROUP

立った。サクサラ部落からは、ここが最高峰のようにみえているが、 きい。そして、この岩場を登りきって、極度に不安定な雪稜をたどって、メリソス北端のピーク(五三〇メートル)に 以外に方法はない。一三時四〇分、降りにかかるが、ほとんど懸垂下降である。 ことにした。」しかし残念ながら、マイナー・ピークからメリソスの主峰に近ずくことは不可能である。 れわれは、その二つのピークを北峰と南峰 コ (BCの二人は翌二〇日、さっそくコルからメリソス北稜の偵察にでかけた。六時にキャンプを出て、急な岩の ここからは完全な岩場で、丁度浮石の多いチンネ日嶺ルートを思わせる岩登り、もちろんスケールはもっと大 ルからのルートは、このマイナー・ピークまでであり、 岩と氷のルンゼをつめる。だんだんに傾斜は急になり、間もなく岩壁につきあたる。ずっとワンアットで 一稜のコル(四八〇〇メートル)に出、不安定な草付の急登、 (最高峰)と呼び、 川田、 主峰に登るためには、 小川が登ったピークをマイナー・ピークと呼ぶ 実は南方にさらに高いピークが二つある。 四九〇〇メートル(八時) 急な草付までくだってきた時 東氷河からキャンプをすすめる の地点で アイゼン

日) ABCに帰りついた。

かり暗くなり

(二)0時)、

ガスがわきはじめた。

その夜は草付でツェルトなしのビバークをして、

着きをとりもどして、 は相当のハンディになる。雨期が迫って少々あせり気味のわれわれには、この上なくつらいことであったが、 ておくことに危険を感じて、キャンプ・サイトを探すが、コルには適当な場所がない。思い切ってABCをコル下 ヴァスが開き、 スの北稜から岩雪崩が発生し、もとのABCの場所はデブリでうまってしまったのである。 方、二〇日サクサラか (草地) におろすことにきめた。 付近はメリソス北稜から出た大きな岩雪崩のデブリでうずまっているのをみて、ここにABCを置 じっくりやるんだという気持を、一人一人に植えつける効果もあった。 いらコルのABCに荷上げにむかった前芝、 高度差にして五〇〇メートル下がるわけで、 岩間、 モラレスは、 キャンプの前に大きなクレ これからの毎日の行動 と同時に数日後メリソ

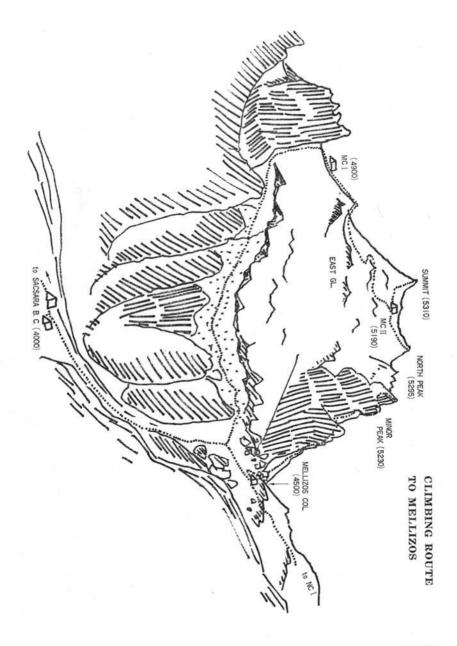
て、 ド・ブランコのルート この日サクサラ部落の前芝、 一日は 昨 堀江がはいった。メリソスは全員がBC入りしてからのことにして、二二日には岩間、 日決めたとおり、 ・偵察に出かけ、 ABCを撤収して下のパンパにベースキャンプ(四〇〇〇メートル)を設営し、 モラレスは荷物を整理してBCに入り、これでやっと本格的な登攀態勢にはい 四八五〇メートルの地点にCIの位置を決めて、 荷物をデポしてきた。 川田、

今後の計画として

CIを設営し荷上げを完了する。 日、BCは雨、 でネバド・ブランコに登る。自この日日を同時にすすめネバド・ブランコ登攀が終わるまでには、 日メリソス東面氷河へのルート 雪線以上でははげしい吹雪がつづいているが、悪天の日もできるだけ晴れ間をつかんで行動する。 そしてあとは八月一杯の予定で、全力でメリソス登攀にとりくむ。 および氷河から頂上稜線へのルートの偵察。 (=) 小川、 堀江の二隊員は四 メリソス東氷河に 何このところ連 日間 の予定

だろう。 は朝から吹雪であったが、 昼前からはげしい吹雪になったが、 二三日には 二五日には、 前芝隊は東氷河に出て四九〇〇メートルの地点にCI(以下これをMCI)予定地をみつけてきた。 頂上は案外近くにあった。 一瞬の吹雪の切れ間に東氷河が姿をあらわした。頂上稜線までクレヴァスをさけてルートを目で追うこ 右の計画にしたがって、 吹雪のなかを川田、モラレスで荷上げに出かけた。 再び前芝、 小川隊は予定どおり四八五〇メートルの地点に CI(以下これをNCI)を設営しそ 川田、 小川、 もう一つテントを出せば、 モラレスでMCIに登り、 堀江はネバド・ブランコへ、前芝、 一日のアタックで北峰と南峰に登ることができる ツェルトをかぶって吹雪のなかを東氷河をに 岩間はメリソス東氷河 へ出 翌二四日 かけた。

8 メリソス登攀がひかえているので、今日はBCにおりてくるはずだ。二七日、心配になって前芝、 一六日もまた吹雪である、 今日は予定の最終日だ。 今日は休養日とした。ネバド・ブランコにむかった小川、 NCIは一日でアタックできるところにあるし、 もし 悪天で アタックできなくて 堀江の帰りを待つが、 川田、モラレ おりて



三ピッチ、四〇メートルのロープがのびると頂上であった のニュージーランド隊につづいて第二登である。吹雪のなかを真暗になってBCに帰り着いた。 スは引き返す。 スでNCIに登ってみることにした。 歩もテントから出ることができなかったという。明日は撤収してBCに下ることにして、すぐ前芝、 少し時間があったので、寄り道してシマ・ロカロサに登ることにした。 やっとの思いでNCIにたどりつくと、元気な二人が出てきたので安心する。 あいかわらずの吹雪の中を、赤旗をたよりにコンティニュアスで苦しい前 (五〇一〇メートル)。 吹雪で何もみえなかった。 細い尾根を登って岩場に出 連日の吹雪とガスで、 川田、 モラレ

度目の偵察で、 に帰ってきた。 マであろう。 ンプ生活である。 スにきてからは、 二八日も朝から吹雪である。 ぬれ 堀江は風邪を引いたのか元気がない。 そのうえ食料も栄養のあるものは、だんだん底をついてきた。 四日のうちに晴天がこなければ、残念ながら頂上はあきらめざるを得まい 連日吹雪と雨 ねずみになった岩間も、 今日は岩間、 (BC) にさらされ、それにサルカンタイの時から通算すると、もう三ヵ 熱を出して昨日まで休養していた。 川田はMCIに入った。 前芝も身体の調子をすっかりこわしている。 また小川、 隊員はみな相当疲れている。 メリソス登攀はここ三、 堀江はシマ・ロ 力 BCをつくって P サに 月間 四日間

メートル)を設営し、そこに入った。夜は久しぶりに月が出た。 はいった。 た。 BC できるだろうに……。 一九日も吹雪であるが、MCIの岩間、 前芝、 あいかわらずBCは朝からどしゃ降り。 小川はM みんな祈るような気持になっていた。 CIへ荷上げ。 三〇日には小川、 川田はわずかの吹雪の切れ目をぬって頂上稜線に、CⅡ この日、 M モラレスでMCIへ荷上げし、 一日いや半日でも晴れてくれれば、頂上に立つことが CIの岩間、 川田は昨日偵察した位置にCⅡ 小川はそのままM の位置をきめてき CI

(五時五

〇分)。そして不安定なニエベ・ペニテンテとクレヴァスに悩まされながらも、八時三一分主峰(南峰、五三一〇メートル)

CⅡの岩間、

川田は勇躍テントをとびだした

一〇日間降り続いた吹雪がやんで青空がでている。

頂上に立つことができた。そして懸垂でCⅡに引きかえした(一〇時)ころには、いつものような吹雪がはじまって ラッセルと、 いた。しかし主峰から十分偵察することができたので、すぐにCⅡを出発し(一○時二○分)北峰に向 ル)に立った。一方、BCの堀江は、この日MCIに入っていた。 ブロック崩壊の危険におびやかされながら、最後の力をふりしぼって一二時三〇分北峰(五二九五メート

くるまで日があるので、もし晴れればネバド・ブランコにも登ることになった。元気ものの川田、小川は翌二日前記 があると信じて、 のところにNCIを設営し、三日には恵みの半日の青空を利用して、約九時間のアルバイトでネバド・ブランコ頂上 (五二五〇メートル) に立つことができた。一九六二年のニュージーランド隊につづいて第二登である。 吹雪のなかを、CII、CIを撤収して全員無事BCに集結した。雨や吹雪の中を、いつかはチャンス 最後までのぞみを捨てずに偵察、荷上げを積みかさねていったからこそ、 登頂することができたのであった。その夜、さっそく今後の計画を相談した。まだムーラが迎 わずか四時間足らずの晴

Cを出発した。そして九月一三日全員クスコに下山した。 方、ビルカバンバのエスプリテュ・パンパに向かう前芝、堀江、モラレスはムーラの来るのを待たずに、二日B

ウルバンバ川の下降

はアタラヤというところで、ほぼ同じ大きさのアプリマック川と合流し、ウカヤリ川と名を変えて、アマゾンの大き をビルカバンバ山群と、ウルバンバ川に決めるにいたった点については、すでに述べたところである。ウルバンバ川 とアマゾンを結びつけようとする点にあった。すなわち「南米大陸」といえば、誰れもが一番に思い浮かべるアンデ ス、アマゾンという全く異った二つの要素を、 前にもふれたとおり、 今回のわれわれの登山探検の考え方の中心は、アンデスに登ってアマゾンを降る、アンデス ひとつの登山・探検にまとめあげようとするものであった。その目標

すべて流れ落ちるのであるから、 一つとなっている。 しかもビルカバンバ山群の雪溶水は東側はウルバンバ川へ、 これほどわれわれの条件を満足させてくれるところはない。 西斜面はアプリマック川

ル チゲンガ族にカヌーを作らせているし、道案内までさせているのである。 合が多いというわけである。 けが、一方的に伝えられた結果、アマゾンの原住民はみな獰猛で野蛮な種族であるというふうに、 られて、 数えきれない悪事を働らいてきた。 の理由があるのだという説がある。 ゾン原住民を想像しがちである。 を出している。 友好的に接すれ で遭難死してしまった。) ともあるだろう。 ていた。 (文明人) だわれの下降終了地のプカルパから近いところで、四二人の道路建設の調査隊が、マヨルーナ族の襲撃を受け死傷 のアマゾン上流で、 急流 番われわれが心配したのは、 0 そして最終的には、ライフラフト(膨張式救命イカダ)甲種SLAO型ゴムボートを採用した。 機関銃で殺された話しが残っている。こういう白人にたいして、毒矢をもって立ちあがった原住民の抵抗だ 問題については、 は、 原住民を奴隷のように働らかせ、 われ ば 一九三二年、はじめてウルバンバ川下降を試みたイギリスのグレゴリー博士は、この流域に住む わ 理由もなしに攻撃をしかけてくることはないだろう、 五人のアメリカ人宣教師がアウカ族の毒矢で殺害されたことがあったし、 れはともすれば、 われわれもグレゴリー博士の例からも、 もちろん京都近郊の保津川や淀川で、 しかし、 しかし、だいたい未開地方の原住民が、よそ者に危害を加えるときには、それだけ 急流の問題もさることながら、 それはゴムを、 ウルバンバ川の流域でも、 こういう苦がい経験から、 ヒバロ族のサンサ 脱走者を撃ち殺したり、彼らの大事な家畜をとりあげてしまったり、 あるいは石油資源をもとめて、 (乾燥圧縮された人間の首) 作りなどによって象徴される、 二〇〇人ほどの アマワカ族が全部後手にしばりあげ 数年前からさまざまの種 よそ者をみればすぐに攻撃をしかけてくるというこ 原住民の問題であった。 ウルバンバ川沿岸の原住民については、 という考え方を基本とした。 (博士は不幸にもポンゴデマイニケの アマゾン源流地帯には 類のボートを使って実験 九五六年には、 考えられ 九六四年には、 これは旅客機や I クアド る場場 T 7

をとりつけたり若干改造を加えた。長さ四メートル、幅二メートル、ボート全体が一一の空気室に分けられている。 外洋航海船が、救命用に積んでいるものであり、これをアマゾン下降用に、空気室の数を増やしたり、プロテクター 点ではそれ以上の比重を持つものであった。しかし本誌の性格上、くわしくは近日中に刊行予定の報告書を参照願う このウルバンバ川下降は、われわれの計画のなかでは、ビルカバンバの登山活動と同じ、あるいは "未知" という

ことにして、ここでは下降日誌にしたがって、簡単に報告することにとどめたい。

楽だった。かえって先日のマンタロウ川の出合付近の方がわるかった。 チリ川出合まで。 もう一雙には沢、 かった(時速四〇キロくらい)が、 かかる。 では転覆の危険を感じる。荷物をへらすべく、一日マランキアトに滞在して一三日、ユヤト川合流点(四○○メートル) 人二世グスターボ・エノモトを加えて、九日いよいよ二雙のゴムボートを浮かべる。一雙に江上、宮本、エノモト、 ぎてケマリアト(六〇〇メートル)に着く。九日ケマリアトでガイドのロヘリオ、同行を強く希望したキャバンバの日本 八月五日、江上、宮本、沢、安倍カメラマンはワドキーナをトラックで出発し、キャバンバ(一〇〇〇メートル)をす ここからいよいよポンゴデマイニケの急流に入る。一四日は荷物を全部ロープで固定して、ポンゴの通過に 途中沢の落水があったが、セルフビレイでボートに這い上がり、ことなきを得た。たしかに流れは力強く早 安倍、ロヘリオが乗り込む。 一一日は、いよいよマチゲンガ族の中心地マランキアトに着く。途中マンタロウ川出合付近の急流 われわれの頭の中には常にグレゴリー博士の遭難があったので、 この日はコシレニ川との合流点下流に設営(五〇〇メール)。一〇日はパ 想像していたよりは

ミセア部落に着く。 いよいよ ウルバンバ川も 大アマゾンを思わせる川幅になり、一九日、ミシャウワ川 出合付近で (約一五〇メートル)、 一五日は、 魚つりをしながら、 最大の難関であるポンゴも通過したので、急に気が楽になって、ゆっくりインディオの部落を訪 流速も大分おさまった。一六日には岸辺の鹿をゴムボートの上からショットガンで撃ちながら、カ 夕方にはサベティ川出合までくだった。 このあたりまでくると、 急に河の幅は広くなり

して二二日、待望のアプリマック川との合流点アタラヤの部落に着いて、久しぶりに電燈のあかりに感激する。 アマワカ族の部落を訪問したり、スンガロ(大型ナマズー、五メートル)をつりあげたりする。ワニも多く見かける。そ は、五○○メートルはある。この日は非常に涼しくて気温二二度、水温二○度であった。二○日はセパウワに着き、

日、ぬれた荷物を乾したり、ボートの整理をし、二四日にはランチャ(エンジン付カヌー)をチャーターして、アプリマ ック川を約五〇キロメートルさかのぼったところにある、カンパ族のプエニ部落を訪ねる。

流速にまかせて下降した距離は、アタラヤまでで約七〇〇キロメートルである。 カルパにむかう。そして三〇日無事プカルパに到着した。全長約一三〇〇キロメートルの旅であった。ゴムボートで 二七日、すっかり流れのなくなったウカヤリ川を、ゴムボートをたたんでチャーターしたランチャで一路終着駅プ

(以上は前芝茂人が隊日誌を中心にまとめた)

記

附

- 1 同志社大学山岳会ベルー・アンデス→アマゾン登山探検隊は、隊長・江上康(29)、副隊長・前芝茂人(27)、 (25)、宮本光将(25)、川田哲二(25)、小川允己(23)、沢祥晃(22)、堀江礼二(22)、それにKBC九州朝日放送(株)からカメラマンと 隊員·里藤武(25)、岩間清平
- 2 この登山・探検に関しては既に左記の出版がなされている。
- 『山へのあこがれ―アンデス探検記―』前芝茂人著 一九六七年三月 理論社刊

①『緑の秘境・白い巨人―アンデス・アマゾン遠征記―』江上康・前芝茂人共著 一九六六年二月

- 3 一九六七年末には公式報告書を出版する予定であり、現在その準備中である。
- of Andean Ascents (AAJ, 1962) には六〇八一メートル(一九、九五一フィート)となっていることを参考までに記しておく。 シュヴァリーア氏の調査は、最近数年間の記録を欠いているが、アンデスを調べる場合極めて便利な文献であることを附言する (編者附記)サルカンタイの高度を本稿では六二〇〇メートルとしているが、アメリカ山岳会の Evelio Echevarria C.

ア コ ン カ グ ア 南 壁 (一九六六年)

――フランス稜―

原

真

隊の構成と目的

一、アコンカグア北面における高所生理の研究。

である。東海支部の有志が核となって始められた計画が、

隊の名称を「アンデス学術遠征隊一九六六年」という。

曲折の末、右のように大規模となり、次の三つの目的を持日本山岳会東海支部と名古屋大学高所医学研究会との共催

つにいたった。

二、アコンカグア南壁の登攀。

三、パタゴニア地方の踏査旅行(フィツロイの登攀)。

計画の当初には、ネパール・ヒマラヤの八〇〇〇メートル峰を目標として、学術的内容を加えた準備を進めていた

が、 が、 壁で、技術的にも客観的にも非常な困雑が予想されることは、 悪しくネパー によって明らかであるが、 アメリカ大陸 その過程を学術班が追求する。 最初のロ 北面における研究活動が、 1 iv の最高峰アコンカグアに変更することになった。 ーツェ 政 府 ・シャール計画が、早稲田大学と競合したため中止となり、つづくマカルー東南稜計 の国策変更 高度馴化が攻略の前提になることは言をまたない。 南壁の成功に少なからぬ影響を与えていることは、 (登山禁止令) とぶつかって、 つづいて南面へ移動し、 悪絶をもってなる南壁の登攀を試みる。 十三年前この壁を初登攀したフランス隊の凄惨な記録 当分の間実現不可能となった。 登山隊員は、 まず傾斜のゆるい北面で高度馴化を行な 本稿では、 見逃がせ 南壁の登攀記に主点を置く な そのため、 南壁は岩と氷の 画は、 急遽目標を 折り

隊員構成は下記の如くで、 ※印の者は南壁の登攀に参加し、 他は北面の実験終了とともに帰国または離隊した。

副隊長 昌 ※石 安 原 玉 73% 利 34歳 36 歳 名古屋大学事務官 名古屋大学環境医学研究所助手、

隊

隊

長

高

木

健

太 郎

(55歳)

名古屋大学医学部教授

高 永 井 坂 利 鉄 恭 夫 (32歳) (32歳) 名古屋大学医学部助手、 三重県企業庁電機技師

高 田 光 政 31歳 自営、 装備

※原 ※中 世 古 降 真 司 30歳 名古屋信用保証協会、 学術、

28歳

国立名古屋病院、

村 曹 (28歳) 東洋レーヨン、装備、 南壁登攀隊長

※市 JII 章 弘 (28歳) 埼玉銀行、

憲 (24歳) 名古屋大学理学部大学院、

※矢

隊 昌 ※黒 Ш 明 彦 (23歳) 名古屋大学工学部、

※小 栗 嘉 浩 (21歳)

直 義 (26歳) アルゼンチン在住

※マリオ・ケサーダ (25歳) 現地において南壁登攀に参加。Centro Andino Buenos Aires 会員

レベルト・ニフリ (30歳) 新聞記者、 南壁の様子を取材

ж п

(24歳)

学生、おもにBCに滞在し、ブエンテ・デル・インカとの連絡をしてくれた。

※セッソー・エグアプール

アコンカグアについて

登山史ノート」がマリオ・ファンティン氏によってまとめられている。 覚え書き」という文章で解説しておられる。また『アルパイン・ジャーナル』一九六六年(二)には「アコンカグア アコンカグアの山名、標高、歴史、登山事情等については、関根吉郎氏が『山岳』第四十九年に、「アコンカグア

償とひきかえの成功であった。この事実は我々の心に重くのしかかった。 後現われないだろう。と、賞讃している」とある。しかし、ほとんどの隊員が、 ナプルナ隊のエルゾーグ、ラシュナル、レビュファ、そして私自身を意味している。 記録であり、 五三年一月北面から登頂した。フランス隊によって南壁が初登頂されたのは、一九五四年二月である。 グア隊は、テクニックからいえば我々よりも優秀であることを、私は断言してはばからない。我々というのは、アン 初登頂は一八九七年一月、北面から行なわれ、以後このルートには小屋が出来、次第に一般化した。 (初登攀)によれば「この登攀こそ、アルプス外の高峰をヴァリエーション・ルートから登攀した最初の輝かしい 驚異的な成功であった。隊員の実力も一流中の一流で、リオネル・テレイは彼らを評して、 凍傷のため手足の指を失うという代 彼ら以上の岩登りの達人は、今 近藤等氏の解 関根隊は一九 "アコンカ

5

近くの左岸のモレーン状台地に避難小屋があり、

ムーラに乗ってオルコーネス谷を遡行する。

三五キロ上流に谷の源頭、

上オルコーネス氷河がある。

ル ートから成功している その後十三年間、ついに第二登を許していない。六六年には四つの隊が南壁を試み、 そのうち三隊がそれぞれ 别

は出来な 5 ス隊は壁の上部で登攀速度が落ちている点から、 六〇〇〇メートル以上にC3を設けて、 ランス隊の場合は五二〇〇メートルにC2を設け、 ビヴァークの回数を減らし、 高度馴化が不充分であったのではないかとも推測しているが、 その先をビヴァーク4回で登っている。 より確実に登ろうと考えた。 我々は出来ることな なお、 フラン

ル』の六九五九メートル説に従う。なお、 〇〇メートルを越えるものと、 部分の標高が六九〇〇メートルから七一〇〇メートルの間に集中している。 7 地形図をもとに、『アルパイン・ジャーナル』の高度に従って一部を修正したものである。 コ ンカグアの標高に関しては、 それに達しないものとがあって一定しなかった。 昔から諸説あり、 ここに発表する地形図は、アルゼンチン陸軍が一九五一 関根氏も П Щ 岳 に 我々の入手した地図も、 八種類の出典を列挙 本稿では 『アルパイン・ジャー して 年に作 それぞれに七〇 、おら n 0 た五 大

Ļ る る二つの避難小 斜 0 Ш インデペンデンシア小屋まで人間を運んでくれる。北面 南壁の説明は後述したい。現在、 V ゆ 容は主峰 ずれもけわしい岩と雪の稜となっている。 るい北 面と、 (北峰) 屋があり、 三〇〇〇メートルの断崖をなす南面とに分かたれる。 と南峰からなる双耳峰で、 六四八〇メートルにインデペンデンシア小屋がある。 北面は一般ルートと化し、五八五〇メートル地点にリベルタード小 東稜と北面にはさまれて東壁が、 両峰の間はゆるやかな吊尾根を形成する。 への接近は、最奥人家のあるプエンテ・デル 北峰からは ムーラと称する牡馬と雌 西稜と北 東稜、 この吊 面 南峰 VZ は さま から 尾根 は をは れ 西稜が て西 ささん の雑 カカか われ から 種 傾 あ

氷河

0 0

登山

ここをプラサ・デ・ムーラス(四二三〇メートル)といって北面

ばれるフランス隊のBC跡があり、

水が取れる。

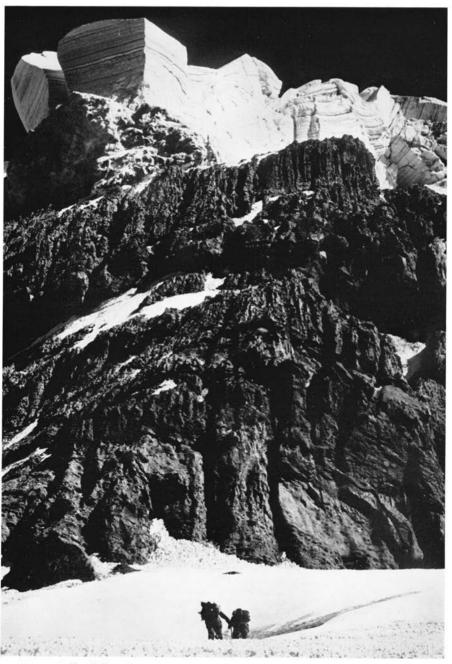
物は五・五トンあった。これを北面と南面へムーラを使って運び込んだが、この輸送費が一六四ドルであった。 令でその隊に特別の便宜が計られるというような事はない。ペロン小屋、 での荷物の運 てもらった。 7 登山口のプエンテ・デル・インカにあったホテルは、 ンカグアの登山事情は、 山岳部隊ではホテルを兼業しているようで、食事つき、将校待遇で、一泊三・五ドルであっ 機は前述のムーラによる。 関根隊やフランス隊の時代と大差はないが、 一頭が六○~八○キロ背負う。我々はアコンカグア開山以来最大の隊で、 雪崩で壊され閉鎖中であったため、 エバ・ペロン小屋等の名称もなくなって ペロン政権の終わった現在、 山岳部隊の兵舎に泊め た。 大統領命 ВС ま

チリー を越えて、 H 本からアコンカグアに到る経路としては、 -から アルゼンチン に入る国境の町 ラス・クエバス を通るときは、 プエンテ・デル・インカ(アルゼンチン)に達した。通関のためにバルパライソで一〇日間滞在したが、 西岸のバルパライソ(チリー)に上陸し、鉄道で国境のアンデス山脈 山岳部隊隊長の計らいで無検査で通関出来

北面での行動概要

た

C H 月二日バルパライソ Iであっ から三キロ上流の氷河上にテレメーター基地を設け、登山中の隊員の心電図を記録する準備もした。 九六五年一〇月一一日、 まず高所医学研究のため北面へ入山し、プラサ・デ・ムーラス(四二三〇メートル)にBCを建設した。 (チリー) に着いた。アコンカグアの登山口プエンテ・デル・インカに着いたのは、 川崎汽船の「ぼりびあ丸」で横浜を出航した一二名の隊員(隊長は飛行機で後発)は、 北面 一二月一〇 に滞在し В



アコンカグア南壁の "ロック・ウォール" と上部氷河の氷蠖(中部氷河から望む) Aconcagua South Face : The "Rock Wall" and the ice-cliff of the Upper Glacier seen from the Middle Glacier (c. 5800m).



アコンカグア南壁の "ロック・ウォール" を登る (約5900m) Climbing up the "Rock Wall" of Aconcagua South Face (c. 5900m).



アコンカグア南壁の "ロック・ウォール" を登る(約6100m) Climbing up the "Rock Wall" of Aconcagua South Face (c. 6100m).



アコンカグア南壁、緩バシゴを登る(4900m) Aconcagua South Face : Climbing up a rope ladder (4900m).



アコンカグア南壁、グレイト・タワーズ(5500m) Aconcagua South Face : The Great Towers(5500m) Loads are hauled up by three ropes.

・ラを利用した三人のうち、

ある点である。

北面では テレメーター

の他に、

BCの高さで各隊員を対象として、

血球数、

血色素、

血圧、

中に蛋白の出現するものもいた。概して入山の遅れた者程、 有効滞在期 を試みた隊員は、 になやまされ、三日から一週間は激労に耐えなかった。 二三〇メートルのプラサ・デ・ムーラスに着くと、ほとんどの者はひどい高山病にかかって頭痛、 四〇〇〇メートルと六〇〇〇メートルに高度障害の壁があったようだ。 一二月一五 間は二〇日弱であっ 五八五〇メートルのリベルタード小屋で再び高度障害にやられて、 日から一月五日までの二五日間であるが、 た。 二七〇〇メートルのプエンテ・デル・インカからムーラに乗って、 関根隊も同じであったようだ。 症状は軽い傾向にあった。 入山が遅れたり、下山がはやかったりした者もい 中には顔に浮腫が現われ、 みな登頂出来ずに下山して来 入山期間 の前半に徒歩で登頂 呕気、 約七 倦怠、 時 間で四 不眠 尿

は た事実は、 かった。 トルまでムーラに乗って登り、あとを歩いて登頂を試みたが、頂上に立ったのは石原のみで、 けて登頂を試みたが、 ーで記録され、 のようになり、 ろまで登行を試みたが、 定以上の期間が必要であることを、 七〇〇〇メートルの高山においては、 面に技術的 リベルタード小屋から五人(中世古、原、 不整脈 いかなる精神力をもってしても、 頂上下五〇メートルで終った。その他に三人 な困難はない。 の現われた隊員もいた。 頂上下一五〇メートルで動けなくなり、 それだけに二〇日間 隊員に強 同じメンバーがリベルタード小屋で一日休み、 それ以上動くことは不可能であった。 高度馴化がいかに決定的な条件となるかを、 く認識させ 市川、 の滞在期間 た 小栗、 引き返した。 (石原、 矢入) に ВС 橋村、 が徒歩で出発、 頭痛、 か ら歩い 増山) 呼吸困難、 て頂上を踏める者が この時の心電 が、 体力に応じて行けるとこ そして馴化するために 他の二人は登頂出来な ВС 一月五日再び面 異常な倦怠感で病人 カン 6 図がテレメータ 六五〇〇 目に な カン か

心電図 (45)

○○メートルを体験し、他の二人は日本の三○○○メートルの経験しかなかったことと関係があるかどうか、

石原のみが登頂出来たことは、

彼が七年前

ヒマラヤ(ビッグ・ホワイト

で六八

(静止時と運動時)、 息止め時間、 肺胞ガス分析、 尿成分定性、 握力、ピン計等の測定も行なった。

南 壁 登 鐢 日 記

一月八日、北面の最後の撤収を行ない、 全員がプエンテ・デル・インカへ下る。このさき学術隊員は帰国し、 登山

隊員のみで南壁へ 向かうことになる。

らいたいと挨拶する

全体的に見れば大成功であった。続く南壁の登攀に対しても、 九日、全隊員の会議が持たれる。高木隊長は帰国に先だち、 学術的見地からも大いに興味があるから、 北面の学術研究は目標の九割を達成することが出

げの無計画性の結果、好意で協力してくれている軍隊を、 妙な心理的葛藤が生じはじめていたからである。それは記録主義に対する単純な執着と複雑な反応の差とも、 らパタゴニアへ行くのでは、時間切れになる恐れのあることのほかに、各人の好みを生かすということが考慮され けた方が、 ゴニア隊を出すためには、この荷物を再び運びおろす必要があったからである。 あったにもかかわらず、実現不可能となった。理由は、すべての荷物が南面に運び込まれてしまっていたため、パタ いる。というのは、 中で個人プレーに傾く者と、 南壁の攻略に関しては、いろいろの意見が出る。第一の意見は、ここで隊を二分してパタゴニア班と南壁班とに分 それぞれの方面で、より多くの成果があがるであろうというものである。この考えは、 この時期に到って、尖鋭主義をさかんに標榜する者と、それにいささか辟易する者との間に、 チーム全体に目を向けようとする者との軋轢とも受け取れる。 牛馬の如く使うことは出来なかったからである。 この際、 不要なものまで運んだ荷あ この案には強い賛成が 南壁を終わってか チーム 微

以上で何回のビヴァークをなし得る能力が、

第二の問題は、

南壁の攻め方に関する各人の意見が、未整理の状態であった点にある。

自分達にあるのかに集約される。

足の指の二、三本は失う覚悟でやらな

論点は、六〇〇〇メートル

(46)

る ければ、 その外にも、 南壁なぞ登れ 遠征の人間心理を考える上で示唆に富む興味ある事態が種々発生したが、 ないという者もいたし、 我が隊の靴では二回以内のビヴァー っクにとどめるべきだという者も 紙面の都合で詳述は避け

こで日本へ帰る学術隊員四人や、 員メンドサへ下ってホテル「レジデンシア・パリス」(森与兵衛氏の経営)に数日逗留し、 H 高木隊長の決断で残る全員が南壁へ向かうことになり、 ヨーロッパへ渡る高田光政等と別れた。 橋村が登攀隊長の指名を受ける。 美しい緑の街で休養した。 このあと全

れる。 から 彼らにすれば、 る から懸垂氷河を突破して 上段氷河の上に出て、 大トラバースを行なって フランス・ルート ひとつは、 ートで行動していた。 る。 を終り、C2を作る行動をおこしていた。 八人山 発生する事になる。 もう一つ アルゼンチン隊は 月一六日から二一日までの間に九人の隊員が、三隊に別れて、南面の基地プラサ・フランシア(四四〇〇メートル) 例えば、 我々は話し合う。彼らは、 食糧 南壁の右端から突出する尾根の側壁(一〇〇〇メートルほどで上部に氷壁がある) は、 前者のル の補給、 ミッテレギー山 小登のル 例の尾根と南壁とによって形成される凹角部を登り、上部氷河へ入る懸垂氷河で前者のルートに合 BCからでは肉眼で、彼らのC1や行動中の人間を見ることが出来ない。 1 ВС 五 登山観の差異という。彼らの開きつつあるルートは、いずれも南壁の向かって右の端である。 ートであるという点を強調したい いに親しい仲であり、 は、 の建設等を完了する。 一稜から、 我々の見解では、 過去二年間の観察で大丈夫と判断しているのだと言っているが、 アイガーの北壁の中央部 池のまわりに、 かつ同一のクラブ この時、 下部の尾 日本隊を加えて三隊の基地が出来、 のだろう。 根の部分において南壁を登ったとは すでに入山していた二つのアルゼンチン隊は、 へ横断して来て、 (CABA) 後者のルー に属しながら、 1 これを登るという感じがするが は を登り、 雪崩 上部 0 尾根の上に出て、 危険が 二つに別 V にぎやかな交流 我々は望遠鏡で彼ら い難いように感じら へ合流する予定であ あるのではない れ で別 С 1 スタのル が始 0 そこ

段氷河の半分くらいの横幅をもち、 ゆるやかな北面とは逆に、鋭く奥深く氷河に浸蝕されている。プラサ・フランシアのある、下部オルコー これで、フレンチ・バットレスと言われている。この岩稜は上段氷河によって中断され、 に 〇〇メートル前後である。 造を持つ。壁の中に上・中・下三つの氷河があり、氷河の部分では傾斜がゆるい。 うしろにひかえる、三〇〇〇メートルの断崖は、 と下部フレンチ・バットレスに分かたれる。フランス隊はこのルートを選ぶ事によって、 (センター・クーロワール)によって北峰壁と南峰壁とに分かたれる。 南壁の全貌 (雪崩の通路) 寄りにある岩稜が、からくも安全といえそうな唯一のルートである。 雪崩が集中する。北峰壁は上段氷河の下では、 の平坦部につながる。 BC(ブラサ・フランシア)から三キロばかり下った地点で、 ちょうどすり鉢の底という感じで、上段氷河の末端が崩れると、中段氷河を通って下段氷河 北峰壁のほぼ全域を横断している。 傾斜はやや強まる。下段氷河は最も小さいが傾斜は強く、基部でオルコーネス氷 北峰と南峰とをつなぐ約四キロの幅を持ち、 ほぼ全域にわたって雪崩の危険に晒されているが、 傾斜は約三〇度で三氷河中最もゆるい。中段氷河は上 北峰壁は南峰壁に比較すると、 もっともよく見える。 上段氷河が最も大きく高度は フランス隊の初登攀の 上部フレンチ・バットレス 客観的な危険を避け、 中央の大クー この山 中央クー ネス氷河 ルート ワー ワー 0 から

る。 うな大雪崩は少ないが、 南峰壁は北峰壁に比べると、 我々も南峰 落ちている。 壁に関心を持っていたが、実物を見て、これを登ってみようという気には 上部はすさまじい氷壁で、下三分の二が岩を主体とし、 小雪崩は頻発している。これが、アコンカグアに残された課題といわれている未登の壁であ はるかに悪い感じを受ける。上から下まで三〇〇〇メートルを、 中央に氷河を持ってい なれ なかっ ほぼ同じ調子 る 壁のよ 0

月二二日。

晴。

朝九時、

用をたすためにテントの外へ出た原が、

なにげなく南壁を眺めていると、

上段氷河の右

代り技術的

な困難を選んだといえる。

の南

面

D 端 こから人影が三つはい出して来たので、人間は無事であるらしい。幸運にも流された方のテントには装具が入れてあ 遠鏡でみると、 〇メートルの高度差を落ちてくる。 が鈍い音で崩れた。 人間はいなかったという。 かり一 センチばかりも積もる。 ひとつのテントがなくなっており、もうひとつは倒れたままでもとの位置にあることがわかっ 見る間に雪崩が北峰壁全体に拡がる。 しかし、 凹状部のアルゼンチン隊のルートは雪煙に呑まれた。一 毎日見るのとは規模の異なる大雪崩である。 この隊は装備を失って計画を中止することになった。 雪煙が岩壁を隅なく洗いながら、 BCはたちまち大騒ぎとなる。 キロ下のBCに雪の粉が この雪崩に対してフレ 大音響をたてて二〇〇 た。 望

四人がミラドール山の裾へ望遠鏡を持ってゆき、 南壁を観察する。 残る五人でBCの整理をする。

ンチ・バットレスは無事であった。

協議の末、 南峰壁はやめて、 北峰壁のフランス・ルートを登る事に決まる。

月二三日。

晴。

原、

小栗の二人がフランス・ルー

ト取付きの登攀と偵察を行なう。

BCから四十分で岩稜の

下

ラック地帯を二〇〇メートル登って岩稜へ取り付く。五〇メートルばかり岩を登り岩稜へ出て、Y字型雪渓への入り に着く。途中クレバスが多い。 (第一デポ) まででBCへもどる。 岩稜の端は大きなベルクシュルントで、直接取り付くことは出来ない。下段氷河のセ

他 の隊員はBCでロー プの巻き直しや末端の熱処理、なわばしごの作成をやる。夜セッソーがBCへ上って来て、

我が隊に参加する。

三人加わった事になるが、技術があるのはマリオ一人である。 〇〇メートル上である。 隊のリーダーのマリオが、 五日までに五七〇〇メートルまで登り、C1の予定地を整地する。フランス隊のC1 なわばしごを必要とする岩壁がすでに現われる。 新聞記者のニフリを連れて我が隊に参加を申し込んで来る。これでアルゼンチン人が 雪崩事故のために計 (我々の第二デポ) 画を中 止 したア

ングが現われ、 二七日。 晴。 市川、 これを越える。 矢入がミラドール山の中腹へ登り、南壁の望遠レンズによる写真を撮影する。 矢入、増山、 ボ マリオが先発して、C1予定地から三〇〇メートル上まで登る。 ロボロに朽ちたフランス隊の固定ロープを発見する。 他はC1予定地へ荷あげ、 他は休養。

夕方全員そろってBCへ帰る。 二八日。晴。 小栗が歯痛を起したので、原が切開手術をする。午後、原、 市川、 黒山、 増山の四人がBC

C1 (四人用)

を建設し泊る。C1とBCの間で、

夜、

フライヤーをたく。

入る。 惨な場所である。 隊もその悪さを強調している。 前 れを登りつめると鞍部へ出る。鞍部のむこう側に、狭く深い氷のクーロワールがある。 た平坦地に出る。 は先行してルートの開拓をする。ハング上はもろい岩稜を四〇メートルの三ピッチ登ると、浅い氷のクー ス 底へ下りる。 ている。 ワールが登りやすいようである。 ・ハーケンを打ち込む。あとで、この岩稜はやめてクーロワールを通るようになる。今年は氷が多く、一 ・ップとなり、 の難関である。 これが約一 晴後曇。 もろいうえに、 新し 底からは、 そこから人間大のペニテンテスのある雪渓を五〇メートル登ると、最後は六〇度の氷壁となる。 クーロワールを一〇メートル登ると、左の岩稜に古いロープが見えてくる。追いついて来た黒山 五〇メートル続く。 何条かの深いクーロワールに浸蝕された岩壁で、下から眺めると巨大な岩塔群に見える。 C1の四人はルート工作に出る。 いい口 ープを固定しつつその岩稜を登る。 逆層で見た目よりはるかに悪い。 右手に深い岩の割れ目を通して、下段氷河上部の氷壁が見える。三方の視界を遮られた陰 黒山が正面の岩塔の基部 一〇〇メートルほど登ってグレ 右手の岩にハーケンを打ちつつロープを固定してゆく。ついで岩くずの堆積 オーバーハングに増山と黒山でなわばしごをかける。 のフェー 黒山は四苦八苦だが、下は落石の雨に見舞われる。 傾斜は強まり、 スを登りはじめる。 ート・タワーの下へ出る。 岩は非常にもろい。三〇センチ大のアイ 切れたフランス隊 あぶみを使ってクー 中段氷河へぬけ出 0 n D 般に 原と市 ワ フランス ープが残 ールに ワール 黒山 る直 クー ĴΪ 为当

帰る。

に今日のかせぎを下る。 が三〇メートルを登り切って、 谷底の氷河が暗闇に沈み、 やっとの事でうすい崖の上に立った頃、夕闇が迫る。 峰々が残照に染まる。 星空の下を電灯の光を頼りに下る。 一八時、 固定したロープを頼り

一〇分、C1帰着。

この日、BCの連中はC1へ荷あげをする。

下へ着く。今日はここでふた手に別れて行動する。 三〇日。 風強く頂上付近はガス。 C 1 四 「人は寝坊して一一時一〇分出発。一六時一〇分グレー

チョ ケンを見るが、 とトンネルのようなチムニーが始まる。中間で二つに分れる箇所がオーバーハングで極度に悪い。フランス隊 八時。 左側の垂直の岩溝に入る。 原 ックストーンでふさがれている。ぶらさがって腕力で乗り越えると岩塔の上に出る。 市川組はフランス隊 二人ともへとへとである。 ゆるんでいるので新しく打ち直す。 のルートをたどる。 氷のついた、手がかりのない悪場で、 昨日の黒山 その先を背とつま先で登る。 の到達地点か 最後がひさしの様にかぶっている。 6 岩稜を一〇メートル登り、 チムニーの出口はひとか 上に中段氷河がひらける。 それを越える つづいて岩塔 カン 0

瀑が ルー って好ましいルート 黒山、 かあ 黒山と増山は、二〇時三〇分、C1に帰る。 b カン 登れる。 増山組 ら中段氷河 五ピッチ目にも小さなハングがある。 氷瀑にはなわばしごも取りつける。二人は原、 の登ったクーロワールは新ルートである。 であった。 へ出たわけだが、 今年は氷が多いことによって、 フランス・ルートよりも新しいクーロワール・ルートの方がやさしく、 原、市川は登ったルートの懸垂に手間どり、 全体に長いが、 全部氷でニピッチ目に五メートルのオーバーハングした氷 このルー 市川組より一時間早く中段氷河に出る。 ステップを切りつつ、ねじ込み式ハーケンを使って トが発見出来たのである。 二三時四〇分、 下りは再び この日二つの C 1 したが

師一人とアルゼンチンの登山家ホンルージュを含んでいる。 る。夕方オーストリア隊八名がBC入りする。この隊はフリッツ・モラベックに率いられる総勢二〇人で、米国 三一日。晴。 荷あげルートの様子が変って来た。 C1はテント地拡張作業をする。BCから四人がC1へ荷あげ。 中世古とセッソーが食糧と燃料を買うため、 南峰壁を目標にやって来たものだが、 取り付きのセラック地帯が変形し プエンテ・デル・インカへ下 偵察の結果はやは

り中止となり、東稜と東壁に向かうことになる模様

露岩上に決める。 た氷瀑のなわばしごは、 って登らなければならない。中段氷河を約二〇〇メートル登ってテント(C2)地を探す。五七〇〇メートル付近の 二月一日。晴。C1の四人は九時三〇分出発。クーロワール・ルートを登って中段氷河へ出る。 二一時C1に帰る。 氷の中に完全に埋っている。この先、この氷瀑を通るときは、そのたびごとにステップを切 昨 Ė 取りつけ

BCから橋村と小栗がC1へ上って来て、二人用テントを増設して泊ったので、C1は六人となる。

りはやい。フランス隊は三週間かかっている。 他はC1〜下る。矢入とマリオがBCからC1〜入る。BC建設からC2建設まで一二日間であった。これは予想よ へ、一○○メートルの荷あげ用ケーブルを架設する。そのあと橋村と小栗が中段氷河へ出て、C2を設営して泊る。 日。 睛時々曇。C1の六人はグレート・タワーのクーロワールまで登り、 クーロ ワールの入り口 から氷瀑の上

雪崩をまぬがれたほうのアルゼンチン隊は、 上段氷河にあがり、数日前アタック隊二名が出発したが、 まだ登頂せ

ず安否が気遣われ

ているという。

壁を越えて上段氷河にC3を建設することが、計画の大きな山場である。C2から岩壁の基部まで約二時間 三日。晴。C2の二人は中段氷河を登りつめ、上段氷河下の岩壁地帯の偵察に出かける。この三〇〇メートルの岩 かかり、

ワール寄りにやや傾斜のゆるい部分を持つ。 〇〇メートルの高度差を持つ岩壁地帯が、 中段氷河の中央部あたりの青氷の斜面に、 しっかりと上段氷河を支えている。 二人は岩壁の基部に登攀用具をハーケンで固定して帰る。 ねじ込みハーケンを使って六〇メートルの固定ロープをつける。 この垂直の保塁は、 センター

C1の六人はC2へ荷あげをする。

BCは石原一人となる。

北 エンテ・デル・インカでは買い出しのため下山した中世古が腹痛をおこし、 面でアタック隊の下山を待っていた、 アルゼンチン隊のサポート隊が、 まだ仲間が下山して来ぬといって、 兵舎の病室に入院してしまう。

依頼にプエンテ・デル・インカへ下る。

る 四 日日 晴。C2ではテント地を整備補強する。 C1からは、 矢入とマリオがC2に登り、 他は補給のためBCへ下

夕方C2を出た小栗が一人で夜の岩壁をBCに下る。途中固定ロープのハーケンが抜けて、一二メートル墜落した

が幸い無事であった。

は K の中央部を登路にして北峰 この 四 日で登ったことになる。連日大雪崩の通る下段氷河のまん中を通った不敵さにあきれかえった日本隊のBCは、 [時頃ビヴァークする。 日 の早朝、 オーストリア隊の二人(ハンス・シェーンベルガーとホセ・ルイス・ホンルージュ)が、 BCから望遠鏡で二人の動作がよく見える。我々が一二日かかって獲得した高度を、 壁の登攀を開始する。 その日のうちに中段氷河に達し、C2の二〇〇メートル上の氷河上 下段氷

を試みると答えたという。 止するよう隊長から勧告されると、 その話でもちきりとなる。 下にいるオーストリア隊員の話では、彼らは、そのように危険なル BCの仲間達はこの二人のことを、まったくクレィジーだと言っている。 自分達は妻子もなく、 いつ死んでもかまわぬから、 雪崩ルートを通ってラッ ŀ カコ ら登ることを中 ずれにせよ、

今日に限って雪崩は出なかったのだから、賭に勝ったといえる。 彼らは中段氷河から上のフランス・ルートへ入る模

この先をい かにこなすかが見ものである。

ある よりを選んだのは、 のやや右よりをニピッチ登り、一八時四〇分取り付きへもどる。 を登り切って上段氷河へぬける。C2の橋村と矢入は一三時二〇分出発。一五時岩壁に取り付く。 五日。晴、 リスのほとんどない岩壁である。 夕方から雪。 雪崩を考慮してのことである。ここの岩は轢岩といって、岩肌に拳大の半円形の陥みの 中段氷河にビヴァークした例の二人は、一〇時上段氷河下の岩壁に取りつき、 傾斜は平均七〇度くらいで、二ヵ所アブミを使用する。 マリオはC2から取り付きへ荷あげする。 荷あげ用 先行の二人とは別 1 橋村が右 いっぱい プを固

る C1は無人。 上段氷河にぬけたホンルージュとシェーンベルガーの安否が気づかわれる。 BCは休養。 午後、天候が悪化し上段氷河から上はガスにかくれる。 夕方になってBCに降雪はじま

定するため、二ヵ所に埋め込みボルトを打つ。

晴風強し。 C2から上は地吹雪となり、BCは風が強いが晴れている。C2では、矢入とマリオが岩壁取り 橋村は一人でBCへ下る。

BCから三人がC1へ荷あげをする

付まで荷あげを行ない、

他の隊員も悪天候のため、C1への荷あげを中止する。 C2から下る連中と合流するため、C1へ登ったが、C2から誰も下らなかったので再びBCへもどる。 C2からC1へ逆ボッカする予定だったが、C2付近は風雪のため動けず。 病気の癒った中世古が、 夕方BCへあがってくる。 橋村は空身で BCを出 BCで ВС

は、 夜 明日帰国する(母親病気のため)小栗のお別れパーティーをやる。オーストリア人が三人やって来て、 ヨーデル

を聞かせてにぎやかな夜となる。

日 快晴。 朝のうちC2以上は地吹雪であった。 朝八時、 小栗はBCを去り帰国の途につく。 そのあと、 残った C

1では五人が一○○メートル上の岩棚にテント場をきりひらき、

BCへ下る。 者全員でC1へ荷あげをし、C2の二人もC1まで下り、ここに全員が集る。 ってくる。五回のビヴァークのすえ登頂に成功したという。 タ方、 アルゼンチン隊のアタック・メンバーの一人アイケスが、 橋村、 プエンテ・デル・インカからBCへ上 市川、矢入がC1に泊り、 他は

せ集まっていたが、 うやく寝つこうとした頃だった。キューンといった妙な音。谷側に寝ていた私の上に、市川の体が重なって息苦しい ので、これは雪崩だと気づく。ちょうど三人はテントの隅に折り重なっていた。一番上の橋村が入口をあけたら、 人が泊っていたC1が爆風で潰される。今夏、北峰壁で発生した最大の雪崩である。C1にいた矢入の手記 っと雪が入ってきた。数本のハーケンで固定したロープに結んだ荷物は、テントを飛び越して吹きだまりのように寄 午前一時、 損害はないらしい。五時頃までかかってテントの修理をする。」 上段氷河の大氷塊 (我々はこれを「松坂屋」と呼んでいた)が崩壊して発生した雪崩によって、

ことである。C1の三人は一四時三〇分出発。二一時三〇分C2に着く。数日の悪天候のためクーロワー BCでは朝、 氷河から二〇メートル上の岩稜にあったC1が、 一面に雪がつもっているので、夜間に降雪があったものと考え、一〇時のC1との交信でやっと事 まさか雪崩の被害を受けるとは想像もしてい ル の状態は た

BCからは石原、 原、 黒山、 増山、 セッソーが荷あげをして、C1に泊る。

を使ってテン 内に残った市川と矢入は、火をくぐって外へ飛び出す時に、顔や手に火傷を負う。グランドシートやビニロンシー 扱いをあやまったための事故である。テントは一瞬にして半分に焼け落ち、 〇日。 晴曇風雪。昨夜おそくC2に着いた連中は、夜中(二時二〇分) トの修理を行ない、 朝五時就眠する。 晴天であったのが不幸中の幸いである。 にテント火事をおこす。ブタンコンロ 橋村はいち早く飛び出

新しい場所へC1を移動させる。

二回の事故

こかに無駄があるようにも思われるが、 になる。C2を設営してもう九日たっているのに、C2より上の岩壁はまだ二ピッチしか登られていない。 登攀の速度は更に落ち、上段氷河へは、いつになったら出られるのかという不安が、隊員の口の端にのぼるよう 行動の渦中にあっては、 どこがどうなのかという点は 判然とは理 解出 行動のど

(56)

精力が集中されていないと感じた者は多い。

(第四デポ)として使用することになる。上の氷壁がたえず音を立てて少しづつ崩壊しており、 日。 晴。C2の橋村と矢入が、岩壁のつづきに着手し、 上段氷河と岩壁の境界に出る。 大崩壊が起れば、 ここはのちにデポ地

約三〇〇メートルである。四ピッチ目にオーバーハングを持つ非常に困難な氷壁がある。ピッチのかわり目毎にボル 瞬にしてすべてが消し飛んでしまうと思われるような、寒心に耐えない場所である。岩壁帯は全体で七ピッチあり、

トを打って、ザイルを固定した。 市川はC2からクーロワールの大滝の上まで下り、 C1からクーロワールの直下まで、

ケーブルを通して荷物を受取る。 ボッカをして来た四人か

中世古とマリオはBCから新C1に入り、二人用テントを増設する。

この日の人員配置は次のようになる。C2-橋村、市川、矢入。C1石原、 原、 黒山、 増山、 中世古、 マリオ。

В

Cーニフリ、セッソー。

夜C2の橋村からC1へ莫大な荷あげリストを伝えて来る。 C2から上が一向に進展していないのに、 荷上げばか

二月二〇日までに登頂しなければ、冬が来て登れなくなると言っている。今年は例外的な晴天続きだが、いつまでこ とにもなる。必要にして充分な荷あげとは何か、作戦のむつかしいところへ来たようだ。マリオは過去の経験から、 ます遅れを大きくし、 りさせるのは何故か、 そのために長時間壁に釘づけになることは、 荷物がC2に余ってしまうではないかと、若い隊員が原に苦情を言う。 雪崩と落石の危険に晒らされる時間を永くするこ 過度の荷あげは、 快晴。

C2の原、

市川、黒山、

マリオが第四デポへ荷あげを行なう。

岩壁の下降は四〇メート

ルの懸垂が

C

n に頼れるかが鍵になりそうだ。この日オーストリア隊の二人が成功したとの報が入る。

る C1も停滞してC2へあげるべき装備を作り、余った時間で旧C1へ残してあった荷物を、新C1へ全部運びあげ C2は停滞。 矢入が歯痛を起したため、単身C1~下り、C1からは石原がつきそってBC

設出来るかに、 隊に加えるべきである等。 二隊編成して、 うことである。 ーについて橋村が彼の案を出す。 時C2へ帰る。C1から五人がC2へボッカをし、原をC2に残して他はC1へ帰る。夜、C2でアタック・メンバ 三日。 すべてはかか C3から二度の攻撃をかけて、 アタックの方法については、他案もあった。四人より三人の方が速い。二人又は三人のアタック隊を C2の橋村と市川は岩壁を登り、つづく氷壁を約二百メートル登ってC3の予定地を決めて、二一 いずれにせよ、 っている。 橋村、 市川、 あと幾日の晴天が我々に与えられているか、 原、 なるべく多くの人間を登らせる。 黒山の四人にしたいという。 現在体の調子の良い者を選んだとい 南壁を往復する。 我々があと何日間でC3を建 マリオをアタック

ランツ(オーストリア隊)がC1へ荷あげをする。 五日。 四日。 晴。 晴。C2の原、 C2の三人は停滞して荷あげ用荷物の整理を行なう。C1停滞。 市川は岩壁上の第四デポ地まで荷あげを行ない、続いて上段氷河へ上る氷壁にロー BCから石原、 矢入、 セッソー、 フ

ポ(クーロワールの入口)に荷あげをしてから引き返し、 一〇〇メートル固定する。 橋村は岩壁の取付まで荷あげを手伝う。 黒山とマリオはC2に入る。 C1を出た四人のうち、 BCの石原がC1 中世古、 登る。 増山

七ピッチ続く。 1の増山、 石原がC2へ入る。 九時三〇分。 橋村は体の調子が良くないので、BCへ下っていった。 中世古は第三デポまでで引き返す。 BCの矢入、 セッソーがC1へ荷あげをす

七日。晴後曇。 C3ではマリオが腹痛を起し、石原に付添われてC1へ下る。石原はBCまで下る。

Cで休養中である。 は烈風が吹いている。 八八日。 日目に、やっとC3の建設にこぎつけた。C1のマリオはBCに下り、 晴後曇。 BCでは体の調子がよいというから、 原 黒山と増山は下り、原と市川はC3を建設して泊る。作業中頭痛と呕気を感ずる。C2建設後 市川、 黒山、 増山が九時C2を出発、 高度障害らしい。 テント、食糧をC3予定地に荷あげする。 午後ムーラに乗って下山する。 橋村は

くずれるかもしれない。このあたりを何度も往復すること自体、 C2から増山がC1~下り、黒山は停滞する。橋村と矢入はBCからC1~登る。 九日。晴。C3の二人は、第四デポの荷物を逆ボッカする。 第四デポ付近の氷塊はたえず音をたてていて、 非常に危険な行動であり精神的にもまいる。 この時期には、 これだけの日 いつ 時

を投入したからには、

南壁の往復をするべきだという考えの者が多くなる。

三時間 が冷たい。 相談が、二人の間でまとまる。 新ルートを探索しようという考えから、中央クーロワール上部の「く」の字型のクーロワールへ入ってみようという めてC3へ帰る。 になって氷壁地帯を形成する。そこを突破しないと、その上の急傾斜地帯へ出ることが出来ない構造になっている。 二〇日。晴。 程 任頑張 C3の原と市川は上部へ偵察に出かける。上段氷河は傾斜のゆるい楽な登りである。 たが、 やはりフランス隊のルートしかなさそうである。晴れた日でも、 雪と氷の混合した壁はハーケンがまったく利かず、とても登れないことが解 クーロワールの取付きへ行ってみると、五メートルばかりの氷壁の帯にはばまれる。 この高度ではちょっと休むと手足 ったので、 どんずまりが段

中世古、 C2の黒山は停滞し、 セッソー、 ニフリはBCから歩いてプエンテ・デル・インカへ下る。北面へ下るアタック隊を出迎える準 橋村と矢入がC1からC2へ登る。 我々もここでビヴァークと決める。

幅五〇センチ、長さ一六〇センチくらいの岩棚で、

ク体制に入れた。 日。 橋村と黒山がC2からC3へ登る。 黒山もC3では軽い頭痛を感ずる。 C3はやっとのことでアタッ

備をするためである。

なる。 どって食事の準備をする。 で四人分の荷物をかつぎあげる。そのうちに日はかげり、結局今日はテントへもどって寝ることにする。 段氷河と雪の側壁の間に数段のセラック地帯がある。ここで手間どる。 市川と黒山が空身で前進し、雪壁を約一〇〇メートル登りザイルを固定する。 快晴。 上部フランス稜へ向かう。岩稜の末端はクレバスのため取付けず、左の雪の側壁から登ることにする。 C 3 のアタック隊四人は荷づくりに手間どり一二時出発。 ルート工作の市川、 黒山は一九時二五分C3にもどる。 橋村が強度の頭痛を訴え、 荷物は平均二〇キロ。 原と橋村がセラック地 上段氷河をまっ しばらく動けなく 原が先にも の上 す

市川、 壁につきあたる。 が荷物の大半を引き受ける。 検討して大幅に減らす。紺碧の空の西の一角にうろこ雲が現われる。凶兆である。いそいで雪の側壁の登りにかかる。 度もコールしてみる。 痛のためおくれる。 三日。 から東に走っている。 視界は数メートルとなっている。 晴後風雪。 黒山 顔に氷がはりつき、 一時間くらいおくれて追いついて来る。本人はなんとか頑張るといっている。ここで荷物を再 一〇時三〇分C3を出る。 の順で登る。 ○○メートルばかりおくれて、氷河のまん中で大の字に寝て動こうとしない。上の三人は何 一六時、 急な 雪壁に一歩ずつ市川の切ったステップをつたう。 先頭の市川は当然空身に近く、 ひどい寒さだ。 雪稜に出る頃は、はげしい風雪になる。 かんじんな時に晴天が終るとは。 昨夜のセラックの上のデポへ一二時二〇分に到着する。 岩の下部にビヴァークのあとらしいロープの片が残って 橋村はあまり背負えない状態なので、 ナイフエッジの上で降雪がたちまち膝 リッジを五〇メートルばかり うろこ雲は 空いっぱいに 橋村は 原と黒山

四人が腰をおろすのがやっ

靴下をかえ、羽毛入りのオーバーシューズを靴の上にはく。たいへんな作業である。それでも足がつめたい。 である。ガスで見えぬが下は奈落の底らしい。ハーケンを打ちロープを張りめぐらし、なんとか仮眠の体制を作る。 アルゼンチン隊員から、カメラと交換してもらった高所用二重靴をはいていたので、その作業に加わらなくてす

単身C2からC3まで登って来て、往復することになってC3へもどってくるかも知れない登頂隊員のために、テン が見えはじめる。運命はまだ我々を見はなしてはいないようだ。ビヴァーク地からBCの灯りが見えてくる。トラン ト内の整理をして待機していた。彼の歯痛は癒って体の調子は上々である。 る。BCと交信中にC3にいる矢入の声が入る。彼はアタック隊の安否を気づかって(C2とC3は交信が途断えていた)、 シーバーを入れてみるとすぐ交信出来た。 石原の声が返ってくる。 明日調子がよければ 南壁の往復を 考える旨伝え 食事が終った頃、風雪は次第におさまる。一〇時頃になってつめたい風が発生し、ガスが徐々に吹き飛ばされ、星

アタック隊を迎えるため、プエンテ・デル・インカを午後出発した中世古、ニフリ、セッソーは、徹夜の行軍をし

この日の人員配置は

て零時、プラサ・デ・ムーラスに着く。

ビヴァークー 市川、原、 橋村、

C3-矢入。

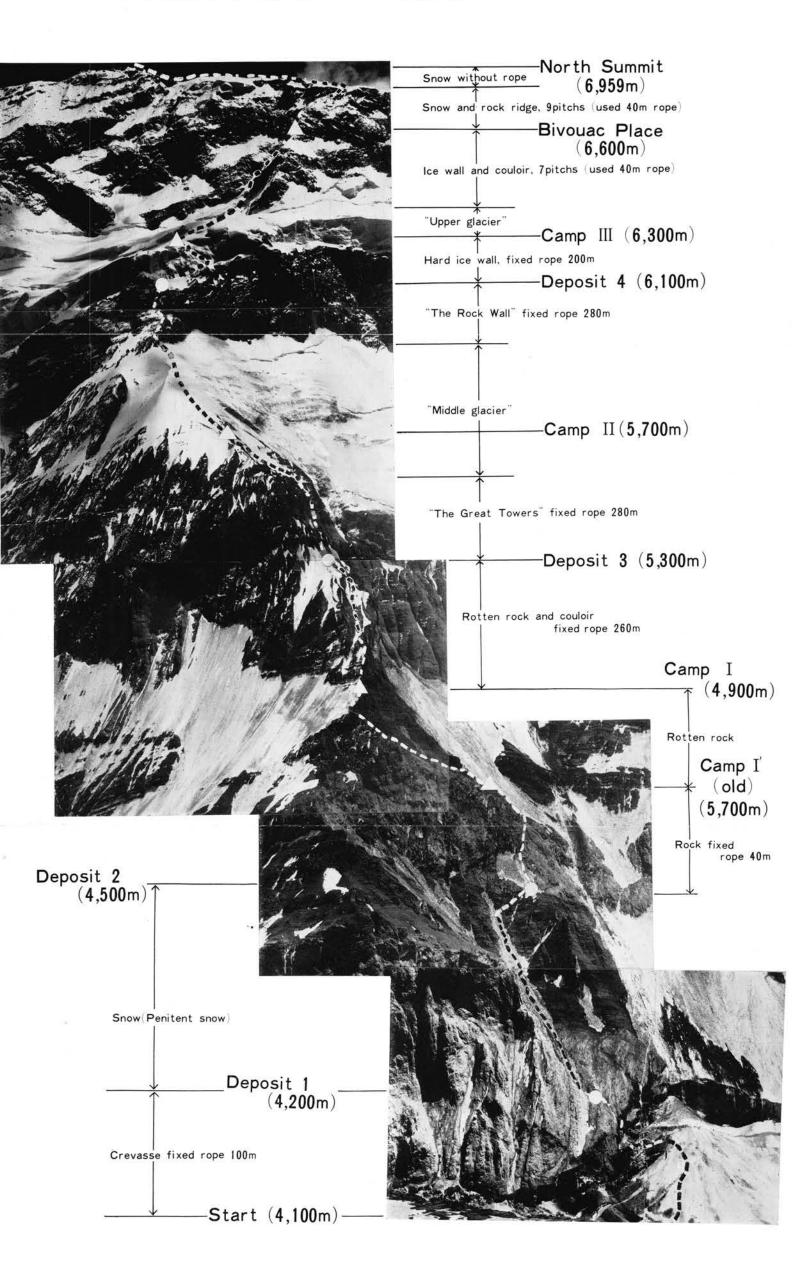
C2一無人。

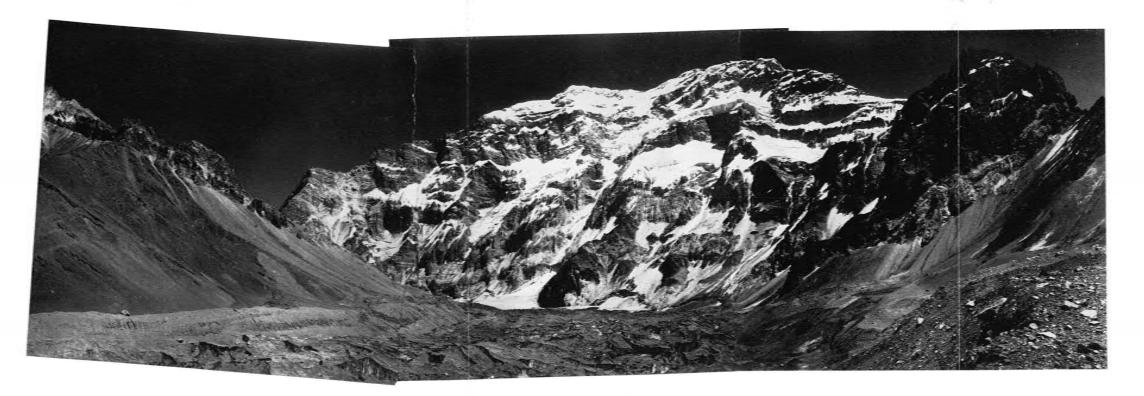
BC-石原、 C1一無人。 増山。

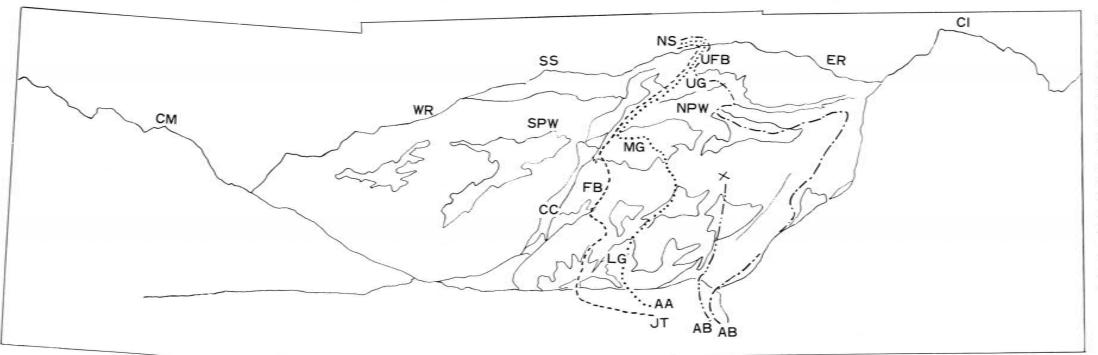
プラサ・デ・ムーラスー中世古、セッソー、

"Aconcagua South Face"

Climbed by the Tokai Section of JAC on February 24, 1966, following the French Buttress.







CM: Co. Mirador CI: Co. Ibaniez

JT: Japanese Alpine Club AA: Argentina & Austria

AB': Club Andino Buenos Aires ----

AD.

VH: Ventisquero Horcones Inferior

NS: North Summit SS: South Summit WR: West Ridge

ER: East Ridge SPW: South Peak Wall

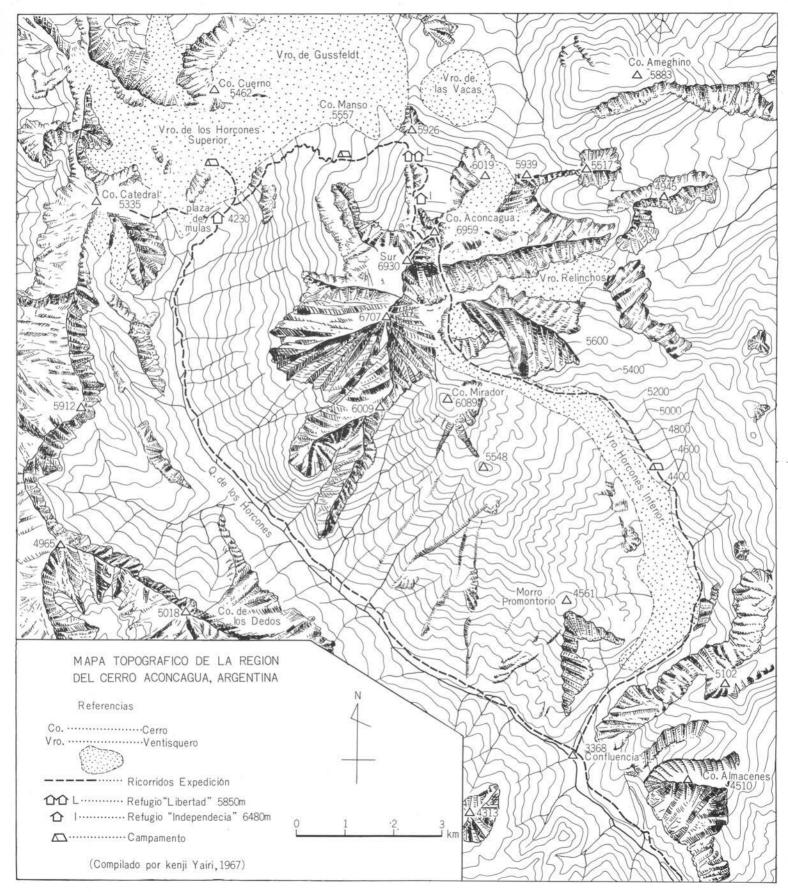
NPW: North Peak Wall

CC: Center Couloir

LFB: Lower French Buttress UFB: Upper French Buttress

UG: Upper Glacier MG: Middle Glacier

LG: Lower Glacier



Supplement to "Sangaku", the Journal of the Japanese Alpine Club, Vol. LXII, 1967.



ハー 1 がここに 橋村はモロイ岩に、 と黒山はビヴァー 壁に固定する。 欲はない。 しみとおり、 ク用具は全部その場へ置いてゆく。往復してここへもどってくる場合も考えて、残す荷物はしっかり袋に入れて岩 ・ケンが二本正面上方に見える。 四 再び夜明けまで寒い夜を耐える。 全身のふるえが止まらない。 今日こそ好運な快晴である。 ビヴァーク中の四人は、 ク地点で待つ。 苦しい体制でハーケンを打ち、アブミを使って難場を乗り越し、 そこは一見やさしそうに見えるが、 橋村はそれを避けて右へまわり込み、 コンロをつけてわずかの暖をとり、 夜半天候快復とともにはげしい寒気におそわれる。 橋村がトップを申し出る。 やがて空が白み、 朝食をすませ、一〇時出発の準備が完了する。 非常に困難な一 行く手を遮えぎる凹角状の岩壁 岩稜の右の側壁を登る。 スープを作って食う。 五メートルの 再び雪稜へ 両足と大腿部 出る。 フェ 市川 しかしあまり食 二時間後四人 が確認 1 へ取 スで に寒冷 原

間 間 東稜の上である。 氷のクー 壁を形成するすべてのものが、 明るく展望に富む。すさまじい高度感である。 切って、どんどん高度をかせぐ。 点にとぼしく、 でサポートしてくれた仲間達 に遠征という行事の意味をしかと味わうことが出来る。 を知ってもらいたい気持ちが湧いてくる。 この先は市川がトップを交替。 U ワールを右へ渡り、 これを下るのは危険だからやめた方が 一八時。 九ピッチ、 雪壁を八〇メートル登って稜線へ出る。頂上から距離にして三〇〇メートルは 一点に集中して落ちてゆくような感じを受ける。 最後の黒山が荷物の重味に苦しんでいる。 橋村、 BCや前進キャンプやプラサ・デ・ムーラスで成功を待っている仲間 八時間 原 四人の登頂を支えたあらゆる背景の大きさが、 の登攀であった。 黒山の順にか オルコーネス氷河は手掌のように小さくなる。 いいということになり、 かる。 まず生命の危険から解放された安心感に打たれ C3の矢入とコールをかわす。 堅雪と岩の稜が交互に現われ 往復案は実現せず。 気の許せない登攀がつづき、 自然に感じられ、 周囲の岩と氷 п この上部 1 プは る。 たえず伸 この瞬 る。 なれ は、 次

先に行った三人が瓦礫の頂上をふむ。三〇分遅れて原も頂上に着く。二〇時。頂上から西の眺めは遮えぎるものがな オーストリア隊員が一〇人ばかりいて、熱い紅茶でもてなしてくれる。ここで三〇分休む。黒山は、もう歩きたくな る。北面へ下りはじめる頃暗くなる。くずれやすい岩くずの斜面が無限に続くように感じられる。四人ともちょっと アイゼンの跡がつかぬ程に堅い。オバルチンを飲んで腹痛を起した原が、途中からずっと遅れて一人で歩いてくる。 オバルチンを飲んでから 東稜をつたって頂上へ向かう。 したことですぐ尻餅をついて、なかなか起きあがらない。一一時、 から連中と一緒に泊るという。三人はなお下りつづける。 太平洋に日が沈もうとしている。 東に連らなるアンデスの山波に、 ひときは高い アコンカグアの影が伸びてい 南からの冷たい風が雪煙をあげて四人を打つ。 リベルタード小屋へ着いてみると、東稜を登った

この日BCの石原と増山は望遠鏡で四人の成功を確認した。C2の矢入は一日気をもんで暮した。

を終る。原は下痢と腹痛のため、黒山は落馬事故で怪我をしたため、さきにプエンテ・デル・インカへ下る。 る。C3は放置される。二八日、北面から南壁にもどって来た橋村、 へ上って矢入にこのことを知らせ、さっそく三人で撤収にかかる。三人で三日かかって二七日までにC2の撤収を終 してきて、喚声をあげて喜んでくれる。この日、南壁のBCで、望遠鏡によって登頂を確認した石原と増山は、C2 二五日。晴。北面を下る三人は、三時プラサ・デ・ムーラスへ着く。小屋から中世古、セッソー、 市川、中世古が作業に加わり、C1以下の撤収 ニフリが

アコンカグアに冬が来た。南壁は時間内ギリギリの成功であったといえる。 BCをたたんで全員が南壁をあとにする。 数日前から南壁をおおった雪は、

橋村がトランシーバーを入れるが、どことも交信出来ない。御用ずみのヘルメット、ロープ、ハーケン等を捨てる。

カン

東グ IJ 1 ランドの山 (一九六六年)

フ オ 1 V ル 峰 の第二登とヌナタックの登山

池 田 錦 重

北風に追われるように海岸に戻った(『山岳』第六十一年参照)。 だ登山者の声も い冬を迎えるだけであった。そして最後の余力を傾けて行なわれた二度に亘る登攀は、 った。それと奥地は、 かし、近年になりやっと登山者の目が向けられ、 縦断し、マウント・フォーレルを始めとする幾つかの山々に登ったが、それ以降長い間登山者が近づかなかっ に送ったが、 の通過を許さず、 グリー ゆるやかに盛上り、 ンランド・スイスは、 同隊は奥地に入ったものの、この山岳氷河の旅に手間どり、フォーレル峰の麓に行くだけで精一杯であ 聞かず静かに横たわっており、更に北の内陸氷床は、この地点から我々を誘うかのように、 登山隊を拒み続けてきた。 海岸付近の暖かい気候と異なり、 印象的な 未知の広がりを見せていた。 一九六六年の第二次日本大学登山隊は、 かつて一九三八年にスイス隊 昨年(一九六五年)我々(日本大学山岳部及び桜門山岳会) 奥地へ向かういくつかの登山隊が出てきたが、この山岳地帯は奥地 同隊が着いた頃は、 しかし、 (在チューリッヒ) フォー V はや極地 のアンドレ・ロ ル峰の一 の短かい夏は終り、 角から見た東方の山 あっけなく拒絶され、帰路は ックが初めてこの は第一次隊を同地帯 ただ寒く暗 岳 中央に向 山岳を た。 ま

帰国と同

に 新たにマウント・フォーレル(三三六〇メートル)の第二登、奥地の未踏の山岳登攀と、 このあと行なわれるトラバ

-スにそなえ、 内陸氷床と気象の調査に目的が絞られ組織された。

隊員の構成は左記の通りである。

隊長中島 啓(三〇歳)目黒区役所勤務

隊員池田錦重(二七歳)幸建築研究室。(一九六五年の隊員)

- 五月女次男(二七歳)日本テレビ(株)。
- 神崎忠男(二五歳)自営。

上

昇

(二三歳

自営。

。 三好勝彦(三三歳) 無職。

った。 資の補給船として、その役目を果たしている。船内は我々の他に、同地域に向かうスイス登山隊の隊員四名と、 秋から冬にかけては、オーストリアの南極観測の輸送船として働らき、 マークでの学校が終り、親元に帰るグリーンランダーの子供達でにぎやかである。船は乗船と同時に出港し、途中厳 かげで見ずじまいである。 い避難訓練を受け、 ローリングが激しく、全員ベッドにもぐり込んだきりで、今年こそはと期待していたフェローアイランドは、 ここで最後の準備をし、 、六六年五月二〇日、 昨年のマルチン・S号と異なった雰囲気に驚かされ、緊張する。天候は北海に入る頃から荒れ 国内での準備を終えた我々はソ連を経由し、汽車でデンマークの首都コペンハーゲンに行 六月一八日、デンマークの砕氷船ネラ・ダン号 (三二〇〇トン) に乗り込む。 この船は 春から夏にかけては、 東グリーンランドへ物 デン

六月二一日、 天候は相変わらず雨天であるが、波は静かだ。 しばらくするとアイスランドが見えだし、寒々とした

暗

V

感じの島の光景に見いる。

レンセン夫妻も来ている

六月二八日、

船を降りた後、

島の奥の氷河湖から流れ出ている小川のほとりにキャンプをする。

の付近に大きな嵐がこないため、 ク・アイスの群が、小さく水平線上に見えてくる。 六月二三日、 太陽は一時間程水平線に姿を隠すだけで暗くならない。 時荒れだした海が 再び 非常に密になっており、 静かになると、 夕方、 スピッツベルゲンとグリーンランドの間を流 船はその縁に達する。氷は今年まだ時期が早いことと、 船は突込むと同時に速度が落ちる。 この頃から夜とはい れ出し "

海流 連中や子供達と船首に集まり、 えていたが、 止となる。 ているが、 四日 に乗り、 、雲海のようなパック・アイスの上に浮き上って見える。しかし、ここに来て氷は更に堅く、 かつて、この海流の北で多くの捕鯨船が氷に捕えられ、つぶされ、人々は船を乗りかえながら、 濃霧 昨日グリーンランダーの子供達が晴着を着けだしたので、 後尾の 漂流し、 がっかりする。船は相変らず前進、 の中をゆっくり進む。 ヘリコプターは何度となくルート偵察に飛び立つ。二六日、今日から我々の洗濯や、シャ 南端のケープ・ファーヴェルまでたどりついたという話など夢物語のようである。 船が氷に乗り上げ、 夕刻、 霧が動きだすと、 後退を繰り返しており、我々は食事の時間を除いては、 破っていく様子を飽きもせず、 突然東グリーンランド沿岸の 今朝は間違いなくアンマスサリックに着くと考 一日中暖 かか 山 口々が、 い衣服にくるまり眺 船はいっこうに 夕日を背に受け スイス隊 氷の上で 中

ため、 の父親達が小船でやって来る。我々の乗ったネラ・ダン号が着く小さな積石の岸壁は、 湾に入る。 この夜も海流に南の方へ押し流され、二七日、朝やっとアンマスサリック湾の入口に戻り、 黄 仕事も学校も休みとなり、 緑に塗ったグリーンランダーの小さい家が、視界に入って来る。そのうち岸から船に向かって、 湾内は浮氷が少なく、 早い速度で部落に近づくと、ディズニーランドの中に出て来る小人の家のように、 部落民で鈴なりである。 昨年世話になったオナビア船長やデンマ 今年初めての補給船を迎える 最後の浮氷をかきわけ ク山 船 岳会のソー の子供達

付近はツンドラ地

員とは別に、 スイス隊と英国が二隊、 招かれ、 ものすごい蚊の大群の攻撃を受ける。午後、 ここで初めて今年この地域に入る外国隊のことを詳しく聞く。 四名が先に飛行機で来て、 スウェーデン・ノルウェー合同隊の計五隊である。 クンミュートで橇犬を買い集め、 昨年世話になった家々に挨拶に行き、 奥に向 フィヨ スイス隊はネラ・ダン号で一緒だっ かう隊は、 ルドの凍結している時に、 夜はソーレンセン氏 我々の他に船 緒 犬の調 だっ の家に た隊 た

を兼ね

ながら、

セルミリガックからハーベェツ氷河まで食糧のデポを作りに行ったらしい。

使い、 の隊は、 ポまでゆき、 ランド ていないのが、 隊は海 英国 ハーベェツ氷河の源流に大きなデポを作ったようである。 地 から飛 0 我々と同じく人曳き橇でマウント・フォーレルを目ざすとのことであるが、これもナンセンやアムンゼン以 に強い伝統を持った国の人々であることで、 軍の登山隊で、 隊はインペリアル・カレッジの登山隊で、 そこからフェムステルネンの左手の山塊で登山をするとのことである。 行機をチャーターし、 いくらか救われるような気持がする。 四月、 二名の隊員が飛来し、 奥地に飛び荷を落した後、パリ氷河を中心に登山する予定とのことである。 海岸のクレバス帯が雪で埋っている時に、 スタウニング・アルプスでの経験者を含む強力な隊で、 我々は内心心が騒ぐのを覚えた。 これから一〇名位の人間 更にノルウェ しかしスイス隊の外はまだ来 が飛来し、 エスキモーの犬橇を ー・スウェーデン 空身で奥地のデ アイス 他の

ると浮氷も少なくなり、 氷群と戦 夜中に出直すことになる。 クンミュートの部落に向かう。 に乗り変え、 進む様は壮観であるが、 昨年と同じ上陸地点シオラリックに向かう。 翌朝四時三〇分に起き、 クンミュートの近くではほとんどない。 三〇月、 しかし湾の入口は大きな氷山群で塞がり、 僅か百トンの船では恐ろしいものを感じる。 午前〇時、 オナビア船長のアイナミケルセン号(一〇〇トン)に無理に乗せてもら 干潮により氷山が沖に動いたのを見計らって出発する。 一二時、 クンミュートでは 更に小型の漁船 シオラリックに着きライフボ 二時間余の苦戦の末、 アンマスサリッ ク・フィヨ 追い返される。 カヤック(一〇ト ートで上陸し、 白夜の中を流 ルドに入 再び

日

残ってい

る荷物をまとめ出発するが、

夕方から雲が出て来たため、

雪面

が凍結せず、

腰

までのラ

七

ル

る。ド

河 ï 0 入口にキャ ンプする。 午後は各荷物を入山用、 登山用、 デポ用に整理し、 橇を組立てる。

、マウント・フォーレルへの道

ラレ 空が見え、 発時はすっ 地 にはカラレ も消え、パドルが多く出ており荒れている。 デポする。 氷 、我々の姿に苛立ってくる。やっと七月九日に、 いになるが、 七月一日、 ンス氷河 河をつめ、 の幸先き良さを祝ってくれるかのようだ。 間どる。 翌二日、 の出合まで下りキャンプする。 かり曇り、 ス氷河 また、 いよいよ我々だけとなった。 ・ま頃彼らは犬を使い、奥にどんどん分け入っているだろうと考えると、 行動は日中の氷河の融雪時をさけ、 広い河原を歩きモレーンを越し、 上部の台地に荷物をデポする。 への道である第一の峠 この地帯は海岸沿いで気温が高いため、 やっと氷河上に荷を運び終りキャンプする。 雨と変り、 四日間 の停滞を余儀無くされた。 ^ 氷河の取付きまで荷上げが始まる。 ここからライタックナーゲン(二〇二〇メートル)を右手に見ながら、 荷物を集結することが出来る。 出発早々このバドル地帯で、 しかし、沿岸気象は誠に不規則であり、 直接舌端には取り付かず、 我々の頭上にも晴れ間が現われ、深雪の中をラッセルしながら、 雪面の凍結する夜を選ぶことにする。 軟雪とヒドン・クレバスに悩まされながらも、 これからは、 時々雲の切目から北方のスイス隊の上陸 側面 橇のベンドを二度にわたり折 秀峯ライタックナーゲンも姿を見せ、 海岸から五キロメートル程入っ いよいよ昨年と同じ人曳き橇による行 に廻り込み、 現在のにっ 海岸の氷河はもうすでに新 日中の暑い陽ざしも夕方の出 突き出た岩の上に ちもさっ b 五日、 地点に方 その修理 荷物を カラレ か カ 青 朝 な

このカラレス氷河では、 スの中で橇は進まず、 昨年の往きは結構悪い所だと考えながらも、 五〇〇メートル程進んだ所でキャンプする。 簡単に通りぬけてしまい、 翌日、 雪の締るのを待ち出発す 帰りに新 雪が消 (67)

海岸線の冬期の降雪は、 もすると、一年を単位として物を考えがちであるが、ここグリーンランドでは、氷河氷の補給は内陸氷床でなされ、 幅五〇メートル以上のクレバスが何本か現われ、その度に度胆を抜かれた所であるが、今年は時期が一ヵ月早い まずスムーズに通過できると考えていたところ、 氷河にほとんど影響を与えないらしい。 昨年以上の荒れ方で帰りのことが気になる。 我々の

隊を除いた外国隊がやって来た。 流をトラバースしながら、 間の苦しい荷上げとなり、 大きな落石があり、 の急なクレバス帯の斜面の間をとり、途中から浅いルンゼの中に入って登るが、上の岩場から荷上げ中に音響と共に こうとすると双発の飛行機が飛んできて、我々の頭上を二・三回旋回して沿岸の方に去っていった。 カラレス氷河をつめると、最後に Col de Poulies の急な氷河の登りとなる。 時は肝を冷したが、誰も中に入っていなかったので、ほっとする一幕もあった。 峠の岩場でキャンプする。ここでまた天気が崩れ、やっと一四日にここから無名氷河の源 セプテンバー氷河の落口まで行き、キャンプする。天幕を張り終え食事を摂り、 ルートは右のアイスフォールと、 いよいよスイス 今日は 二四時

来し、奥地のパリ氷河上に荷物をパラシュートで投下した帰りであるとのことであった。 後で判った話しではあるが、英国のインペリアル・カレッジのチャーター機で、アイスランドからクルスークに飛

ŋ 行程は全然捗らず、湿気の多い天幕で憂欝な気持になる。ここから更らに小さな峠越えをして、ミッドガード氷 早くもスイス隊が来たのだろうと考えられた。 六日、セプテンバー氷河を六キロメートル程横切った小さな氷河の入口で雨となり、キャンプする。翌日また停 峠の脇の岩山の基部には、今年の春多量にデポした英国隊の荷物があり、 手前で右手に入り小さな氷河をつめ、 ハーベツの源流、 四〇〇メートルの峠に出て キャンプす 周囲には何人かの人が歩いた足跡があ

ここでまた天気が崩れる。 日停滞の後、この行程で一番難関であるミッドガード氷河への下りである。 この辺ま

ク隊が使った正 では毎年外国の遠征隊が入っているが、ここを境にしてミッドガード氷河の悪さや、今までの行程を考えて引き返し 変ってしまっている。左手に落ち込んでいる氷河は、下部でものすごいクレバス帯となり、 我々も昨 面のルートも、 年 途中でビバークして天幕に戻っている。 は、 この急な氷河を一段下った所で三日間も停滞を余儀無くされ、一九三八年にアンドレ あれから二七年の歳月で氷河は後退と荒廃を重ね、全然我々の通れ 昨年の宮原隊長は下 るル ートではない

デポ地まで行く予定であったが、このミッドガード氷河への下の段で、 てい を使い、峠で一泊した所で、またあのいまわしい積雲がフィョルド沿いに昇ってきて、天気が崩れ停滞となっ 下から外国隊が登ってくる。話しをするとインペリアル・カレッジ隊で、四名の先発隊が、パリ氷河の飛行機による 見つけ一安心するということがあった。 た 抜けることができず、下降二日目隊員がクレバスに落ち、怪我をしたので上の峠まで引き返す途中とのことであ .る氷河を途中まで下り、 傷はたいしたことがなさそうなので、 一時は前進もあきらめた程であるが、最後に残されたルートとして、右手のフランス氷河に下っ そこから小さな峠を越えてミッドガード氷河の上流に出るルートを偵察の結果、 我々の橇は早くも一段目のアイスフォールにかかり、 お互いの健闘を祝い、 奥地での再会を約し別れる。 正面の アイスフォール ルートの偵察に出ると 々は 昨 やっ

す。丁寧に使えばどうにか使えそうである。一時はフォーレル峯の登頂だけはどうにかなるとしても、 道具もない我々は、 は万事休すといったように思われた。 九日、 やっとミッドガード氷河に下るが、 その修理に屈するが、 幸い 出合のパドル地帯で、またしても橇のベンドを二本折り、 昨年ここで捨てていった修理道具の一部があり、 Ŧi. 時間 その他の行 程 充分な修理 かけて

め 三三日 フランス氷河に入り、二〇キロメートル程歩きフェムステルネンの入口でキャンプする。 昨年だったら 既にフォーレ ル南面についているわけであるが、 やっと橇も直り、 フェ ミッドガード ムステルネンは五

をせき止め、 るから、 本の大きな山岳氷河の合流点で、幅一〇キロメートル程の氷原で、さまざまの氷河が流れ込み、流れでて行くのであ 南面のベースキャンプ予定地に向かう。ここまでくると内陸氷床近くとなり、豊かな雪のためクレバスもほとんど埋 その様は一様でなく、何本かのモレーンが走り、 幾つかの池を造っている。我々はここを斜めに横切り、パリ氷河の入口でキャンプした後、 各々の氷河は小さな氷脈を造って流れ込み、 氷河上の小川 フォー

まり、

行程がはかどる。

氷に乗って来る二、三頭を捕える程度である。我々の現在のコースとしては、まず出会う心配はない。 と言っているが、 岩の世界で生物はいない。かつてアンドレ・ロックは、この付近で白熊をとり、隊員とエスキモーと犬の腹を満した 天幕の入口を姿の見えないフォーレル峯に向け、背にテーブル・マウンテンとピイルツがそびえ、 入山は丁度二五日かかった。 二五日、午前一一時に予定地に到着する。標高一八〇〇メートルでフォーレル山塊とアバンガー なぜこの奥地まで熊が入ってきたか不思議である。現在ではアンマスサリック周辺でさえ、 ルートはわかっているとはいえ、 天候や橇の故障で苦しい氷河の旅であった。 我々のほ ーデン 山 かは氷と 0 春 間 の流

一、フォーレル峰の登頂

〇メートル)を登ろうということになる。 その後ヌナタックの登攀を含めて、アバンガーデン山塊のテーブル・マウンテン(三〇〇〇メートル)かピイルツ(二九〇 登る必要もあるまいとのことで、隊を第一=池田、 まだ夜も行動可能なので、十分な食糧と防寒具さえ用意してゆけば、まず日本で考えたように、 な装備と食糧の整理をする。 七月二六日、 中島、 池田、 偵察隊が帰り、一応今後の登山計画が検討され、まずフォーレル峰を明日全員で登り、 神崎はスキーで南面 キャンプからフォーレル峰の頂までの高差は一五六〇メートルあり、 一の氷河の取付きまで偵察に行く。 神崎、 第二=五月女、尾上、 第三=中島、 他は、ここでの登山 三好のザイルパーティ 上部 に天幕を出して と生活に必要 胜

年は、

この上で夕方となり引き返したが、

今日はまだ一一時である。

コ

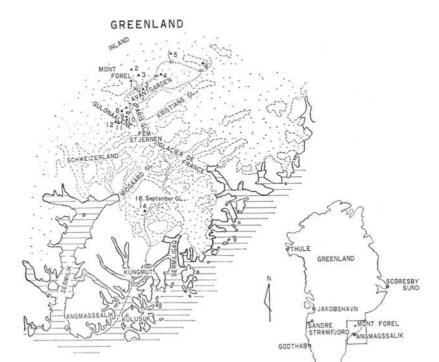
ルの高さは二九〇〇メー

トルと高度計は

に分ける

間半で、 み重 こにあとの連中のことを考え、 を真すぐに直 ざわつき出したようだ。しかし上部は風が強そうである。 二六日夜半起床、 なりあった氷を横に見て直登する。 二時頃になると、 桃色に変りはじめた。 稜線に突きあげている急な氷河の末端に着き、 登する。 熱いコーヒーを飲み、 右手はス いままで水平線下にあった太陽が昇り、対岸のアバンガーデン山塊の高峰 ありっ テーブル・マウンテンは桃色の笠雲を被り、 ノー・ドー たけのロープを固定する。 氷河のつめは胸をつくような急斜面となり、 アルファ米で朝食をとったあと、 ムから急激に落ち込み、 基部のモレーンにスキーデポをして、 我々の所にはまだ太陽の光がまわってこない。 アイスフォー いままで静 午前〇時スキーをつけて出発する。 ルとなり、 氷化して青氷となってい かで クレバ あ アイゼン た氷の スとブロ の頂 に取り 殿堂 我々は氷 は、 り替 " クが 刻 ヘ々と 急に 河 時 積

らく岩稜を伝 ルに下らねばならないが、 と下の は広い尾根であるが、 ス・ドームに集り、 一登りは簡単で、 氷河を登り切るとコルになっていて、ここから初めて頂上に続く雪と岩の混ったリッジを見る。 最後は氷のつまったチムニーを懸垂下降でコルに下る。 氷との ピッチ 0 なじみが悪く、不安定なため、スタカットで小さな雪庇と雪を払い除けながら進む。 たあと、 ドーム直下が一段、四、五メートルの氷壁となっているだけで、 程右手に捲き込んだだけで、 わずかに出ている岩棚の上で小休止する。 アイス・ドーム(三〇〇〇メートル)とのコルを境にして、やせた雪稜となっている。 7 ルの手前で岩壁となり切れ落ちているので、ここも帰りのために五〇メー 初めから急な雪稜となっているので、 四時三〇分ドームの上に出る。 ここから一〇〇メートル程、 五〇メートルのロープを頂に固定して降りる。 スノー・ドーム(二九五〇メートル) これは下の氷河のアイスフォ フ オー 六時半、 ス V ル峰 トル一本を固 との間 しば から 0 ムへ



SKETCH-MAP OF ANGMAGSSALIK

0 10 20 30 40 50km

PEAKS CLIMBED

△ PEAKS

CAMPS

1 Mt.Forel 3360m N66*56*30* W36*48*
2 Sydbjærg 2800m N66*58*W36*48*
3 Perfekt 3000m N66*58*W36*42*
4 草様 2950m N66*58*W36*42*
5 Blue Fuji 3020m N67*4*W36*13*
6 Minor Peak 2750m N66*58* W36*54*
7 Snow Peak 2750m N66*58* W36*58*
8 2600m隊 N66*47*30*W37*5*
3 本権は14 2500m N66*45*30*W36*54*
10 五本核3株 2500m N66*45*30*W36*53*
11 2400m無名株 N66*44*30*W37*17*
2 2200m無名株 N66*44*30*W37*17*
13 Table Mountain 3000m N66*51*30*W36*42*

14 1700m無名峰 N66°12'20" W36°44'

NANORTALIK

や日本の山でみる頂とはかなりかけ離れており、アンドレ・ロックも述べているように「フットボ ら急な雪面にアイゼンをきかせて登る。頂上は更に、ここから二〇分程歩いた所にある。 込み、神崎が先頭で上に登ると、 さしているから、 ・平らな広い所……」である。 最上部の岩場でちょっとつまるが、 あと上まで四六〇メートル、岩と雪の混ったリッジを快適に登る。 嬉しそうな声が返ってくる。 リッジの側面にまわり込み、 フォーレ 小さなチムニーが上に続いているところに入り ル峰の頂の雪帽の縁に出 しかし、 この頂の概念は、 下のコ たのである。 ールが出来るくら ルで懸念してい

消 0 三〇〇〇メートル りを見せている。 する山々である。 大きな凹みとなり、 雄姿が見える。 Ш え 日々が 鋭く尖った山が乱立し、その間を氷河が流れている。 間 快晴となった。 は丁度午後三時、 散在している。 ル級の山 北は、ここからすぐ神秘的な白一色の内陸氷床となり、平らではあるが、 その最後は雲と一緒になり、 クレバスが多いためか、 頂から見た展望は、 「塊が幾つかあり、その向こうは高い氷のプラトーになり、真白なピラミッドのような三角形 朝のうちは雪稜で強い風に悩まされたが、今はテーブル・マウンテンの笠雲も 近くは氷の中から無名のヌナタックが沢山あり、 南に氷河に削られた山々が、 黒っぽく見える。 境は夕日で黄色っぽく見え、 西はセルミリック・フィョルドに大きく落ち込み、 山容は、 頂に雪帽を乗せたフォー この山を境にして 徐々に低くなってはいる 目前にはパーフェクト峰 区別がつかなくなってい 中央に向 i ル る。 型の カン いつのまにか 僅 東は遠くに 重 かに盛上 感じ

上部にロープを固定して下る。天幕には二八日〇時三〇分に帰る。全員早速食事を摂り、 合って時を過す。 ス・ドー ムに登る岩壁で予想外に時間がかかり、 陽が斜めになり、 山の谷が青黒く影り出した一時間後に、 日は影り、 気温が下った中をスノー・ドームを越え、 我々は頂をあとにする。 朝日が輝き出す頃眠りにつ 取 帰 かりに、 付き氷河の アイ

全員山々を足下に見て写真をとったり、これから登る山々を物色したり、

後半旅行する地域のルートについて話

いた。

たフォーレル峰は、 日の休養を取った後、 から更に北に シドベルグ(二八〇〇メートル)に向かい、 Jomfruem(二八五〇メートル)があり、氷原上にどっしりと台型の岩峰で腰を落ちつけている。 すばらしい眺めであったが、近過ぎて写真に入らないのが残念であった。 隊を二隊に分け、一隊は 池田、五月女、神崎の三人で フォーレル峰北方にある 東面の雪のついたルンゼから尾根に出て簡単に頂上に登る。 ヌナタックは、 ヌナタッ 我々 他の

隊は中島、

尾上、三好でパーフェクト峰(三〇〇〇メートル)に向かい、西の尾根から頂に登る。

大きな池があり、その脇にスキーをデポし、ヒドン・クレバスを避けるため堅く締ったデブリの中に入り、すぐアイ が、全然役に立たず引き返すことにする。コルまで懸垂で下り、五月女と一緒になり天幕に帰る。 りに谷をつめると、 とこの迷路を抜け、 スフォールを左よりに登る。 リーンランドには珍らしく、下部のルートに大きなアイスフォールがあり、 七月三一日、キャンプの裏手にあるアバンガーデン山塊のピイルツに、 面へ斜めに走っているバンドに入り、 ピイルツと無名峰とのコルに出る。ついで池田、尾上でアンザイレンして岩壁を登り始める。 あと大きな背割れのあるクレバスに沿って右手に登る。クレバスの切れる地点から、さらに右寄 途中からアイス・ビルディングの中に入り、適当にルートをとりながら、 七ピッチ程登った所で 氷壁にぶつかり、 日本で用意した道具を 使用する 池田、 重畳な感じのする山である。 五月女、 尾上で取付く。 三時間程登る Щ

出すことにする。 現在の我々の力では、 トルの氷床に登り、北東面からアバンガーデン山塊の偵察をして帰って来る。以上から今後の予定を更に検討する。 Jomfruem に向 しかし、これから又、パリ氷河まで戻るには、 かった中島、 アバンガーデン山塊を北面からやるには、 三好隊は途中スキーの故障で計画を変更、そのまま南面の氷河をつめ、 後半の計画に支障をきたすので、ここでいったん前 まだ困難があり、 ル ートは南面を見た上で、

半の計画を打切り、

後半の奥地踏査の計画に移すことにする。

して、 とパリ氷河の合流点として、 を調べることにする。 に横たわる山 奥地に向かう隊は池田、 両隊共 岳 実行動八日間、 の踏 査と登攀、 中島、 五月女、 明日八月一日に出発することにする。 尾上、 更にその間に横たわっている魅力あるヌナタックの 予備日数二日 三好隊はパリ氷河の 神崎の三人で一台の橇を曳いて行く。目的はフォーレ の計 一〇日間 西に横たわる、 の食糧を持ち、 未知のグルトナーレ 合流場所としてアバンガーデン南面 登攀をしながら、 ル峰東方五〇キロメー ン山塊で登山することに 内陸 氷床 の氷河 状態 トルル

一、フォーレル峰以東の奥地一〇〇=ヒロメの旅行

許すと橇の重さで後に引き戻されそうで、雪面に這いつくばるような姿勢で、二六〇〇メートルの氷床の上に出る。 三. この南面 八月一日、 万分の 「また犬の生活に戻りましたね」といい皆で笑う。 「の氷河をつめることにする。 中島隊と別れ一三〇キログラムの荷物を橇に積み、 の地図を使っていたが、 これ クレバスはたいしてないが、 からは一〇〇万分の一となり、 午前四時に出発する。 最後の氷床への登りはかなり急で、 行動予定が立てにくい。ともかく、 海岸からフォー V ル峰までは

ピー 登り、 V で大雪庇で登れず、 崎で登りに出 プする。 目標として、 ここからは氷床も平らとなり、近くのヌナタックを物色しながら橇を進め、一五キロ クは簡単 頂上の小さな雪庇を乗り越し、頂に立つ。 近くには三つの峰を持つ小さなヌナタックがあり、 に登り、 かける。 ここから北東の方に台形をなし、 右手の側面をトラバースして直下の岩場に行き、ここから頂上まで五〇メー 手前のピークの末端までスキーを飛ばし、 ここから中央のピークまでは吊り尾根になった所を、 頂上では、 日光で側面 明日から我々が行くルートを調べることにする。 「の氷の壁が青色に輝いているヌナタックがあり、 時計を見るとまだ午前 リッジ通しに登り出す。 雪庇に注意しながら歩く。 0 時 メート 主峰は中央らし なので、 ル程歩い トル さっそく池田 程 頂上直 0 急な氷壁を 手 下の所 前 神

内陸氷床 への境となっているので、 明日この山の麓まで行くことにして頂を後にする。今日登ったヌナタックを三つ

峰と呼ぶことにする。

くのだが、目指すヌナタックが遠いのか近いのか、さっぱりわからない。なかなか近ずかず、嫌という程広さを感じ 発する。三つ峰の頂からは、あまり距離を感じさせなかったが、この目移りしない単調な世界に入ると、 ら天気は一度も崩れていない。もうそろそろ悪くなってもいい頃だろうと考えながら、朝食をとり、 させられた。 八月二日、めずらしい風の音で目を覚す。天気は曇り、雪であまりよくない朝だ。そう言えばフェ 最終目標である三〇六〇メートルの山塊が南東方向に見えるようになり、明日はブルー・フジに登りル 一六キロメートル程進んだ所で、ブルー・フジが左手に見えてきたので、今日はここまでとする。ここ 橇に荷を積み出 ムステル 一所懸命歩 ネン

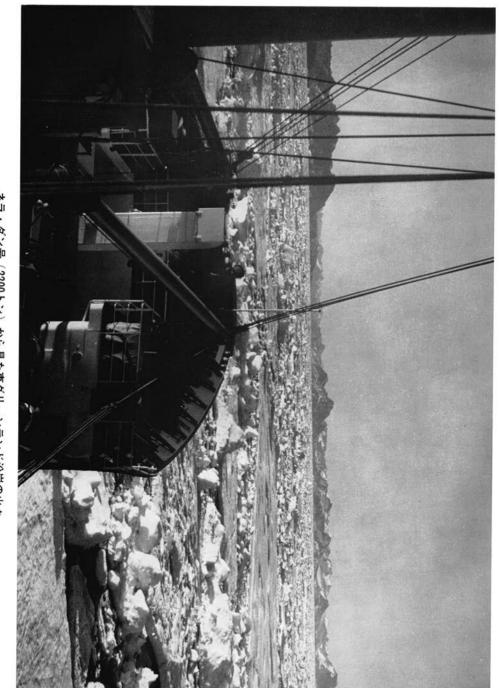
北面にルートを探すが、頂上から急な岩稜が落ち込み、時間がかかりそうなので南面から登ることにする。 主峯は北峯であり、細い雪稜でつながっている。 なことではないらしい。そんなことで奥のヌナタックの登山は中止する。 している。ここで付近のヌナタックの位置や高さを見ると、 の基部につき、 つ悪くなってきた。 ている。 八月三日、天気は持直したようだ。今日、できればブルー・フジと奥のヌナタックを登る予定で、ブルー・フジの あまり時間がかかり心配した五月女が迎えにくる。このような奥地旅行で、一人きり天幕に残されるのは楽 時間位、 ここから一ピッチ岩場を登ると頂で、時計は丁度午後二時であった。高度計は三〇二〇メートルを示 明日は目的の山塊に向かうことにする。 明日のルートや登攀出来そうな山をながめまわしたあと頂を後にし、 両側は氷壁となり、下まで切れ落ちている。 位置は航空測量により正確であるが、高さはほとんど違 天気は東の方から層積雲が広がり、 午後六時頃取付地点に降 雪稜は七ピッチで北峯

翌日、午前四時、

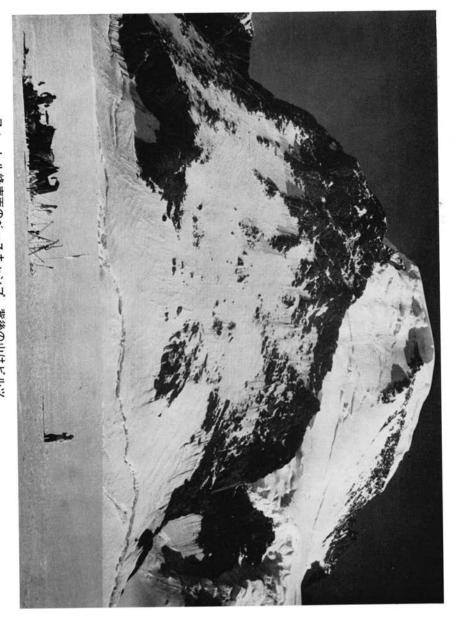
小雪がぱらついている中で荷をまとめ、三〇六〇メートルの山塊の南面まで橇を進めることにす

(76)

郵便はがき くじ抽せん日42年1月15日 賞品のお渡しは郵便局で 42年1月20日-7月19日 the the article 大変面白かった、 面白かったというのも 要なか、やはり面白 かりな、軍を危ね、 でなどがりっ毛が小 七くの、任好かっと 大学 大工第三节



ネラ・ダン号(2200トン)から見た東グリーンランド沿岸の山々 The East Greenland seen from "Nella Dan" (2200ton)

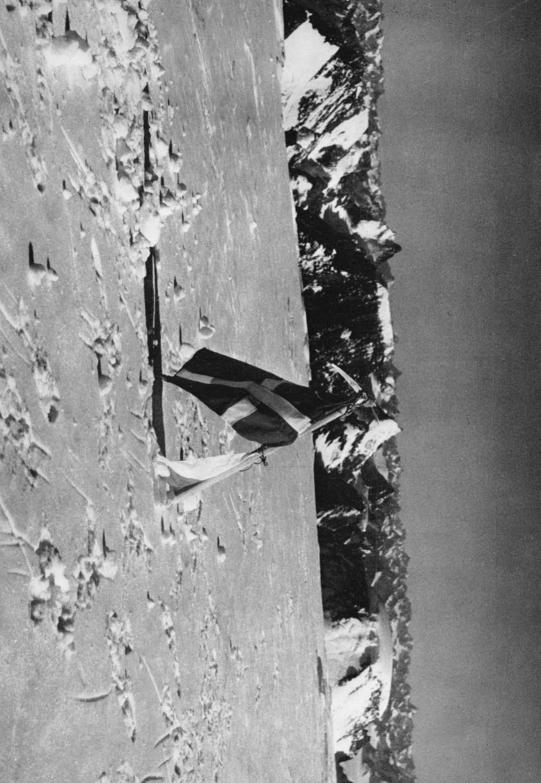


Base camp on the south foot of Mt. Forel, with Pilz (2900m) in the background. フォーレル峰南面のベースキャンプ、背後の山はピルツ



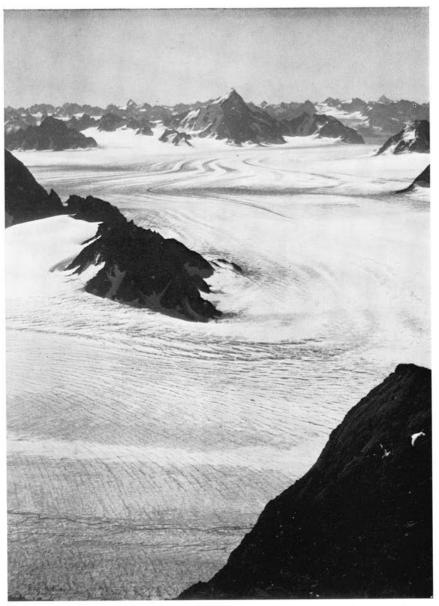
東面から見たフォーレル峰 Eastern aspect of Mt. Forel (3360m).

フォーレル峰(3360m)から見たグリーンランド・スイスの山々 View of Mountains in the Schweizerland (Greenland) from the summit of Mt. Forel (3360m). The 3000m-peak (nameless), Table Mountain (3000m), Pointe du Harpen (2940m) and Pilz (2900m) are seen (from left to right).





An unnamed mountain massif (3060m) seen from the camp below the "Blue Fuji."



ピルツ($2900\,\mathrm{m}$)の下のコルから見たフェムステルネン、正面の山はラウペルスペルグ($2580\,\mathrm{m}$)

View of Fem-Stjernen seen from Avantgarden, with Laupersberg (2580 m) in the background.

学生と一緒に山登りが出来たら最高だなあ」などと話し合う。 〇メート ようにスキーがよく滑り、三時間半程で二五キロメートルも進む。三〇六〇メートルの山塊の南の基部 る。 氷河はここが源流となり、 の所にキャンプする。この山塊は黒々として、 いくらか下り気味で、気温は低く、 馬場島から剣岳を見たような景観で、三人で「こんな所で 背に強い風を受け南東に方向を取る。 標高 九〇

ぐりながらヒドン・クレバスに注意して下る。 で n 南面を見ながら 個 側 面を登る。 からこの 次の朝、 現在の装備と食糧では無理がきかないので、 マイナーピークと呼ぶことにした。あとは周囲の山の写真をとり、雪の軟らかくなった上部の氷河を、 谷の側 Ш 面からこの山塊を見るが、簡単に登れそうなルートはない。 素早くリュックサックに荷物を詰め、三〇六〇メートルと裏手の二九五〇メー 頂上は 塊につき上げている氷河を登り、 あとは隊長との約束の場所に急ぐことにする。 串だんごのように乗かった岩になっており、 小さなコルに出る。 主峯は、 あきらめる。 キャンプの前に見える カール 今日で奥地の行動は最後とし、 その上に恐る恐る乗る。 それから始めはリッジ、 結局、 最南峰のピークが登れそうなので、 に入りこめば登れそうである ŀ 高さは二七五〇メートル ルの 途中から氷と岩の混っ アバンガーデン山 Ш 塊 0 間 腰までも 氷 河に た 東 入

が、 するが、 けたい所であるが、 ル の峠に着く。 程一気に滑り降りると、案の定、大きなクレバスに先を塞がれ、 かなかったが、ずいぶん立派なものもある。 八月六日、 クリスチャン氷河の上の山塊を左手に眺めながら歩く。 天幕の周囲をゾンディーレ この辺は、今まで我々の歩いた中で一番魅力ある、三〇〇〇メートル級の山々が連らなり、 天気は又もち直す。 先の氷河の状態もわからないので、今日は行けるだけ先を急ぐことにする。 残り少ない荷をまとめ、 ンしてみると、 午後一時、 皆突き抜けて底がない。 やっとアバンガーデン南面の氷河を結ぶ二四〇〇メートル 午前三時半に出発した。 右手の氷床のヌナタックは、 雪も軟かくなってきたので、 しかし、これ以上動く訳にもいかない 平らなゆるい単調な登りである 北面 から見た時あまり気が キャンプすることに 峠 カン ら四〇〇メート

河の下部はピイルツの登攀の際見たように、ものすごいクレバス帯である。それにしても今日はだいぶ歩いた。 で、五メートル四方、 建前のしめなわよろしく線を引き、天幕から一切出ないことにして、夕食を摂り休む。この氷

んど登りっぱなしで、三五キロメートル進んだことになる。

長が入って来たのだろうか、この跡は尾上と三好だなどと勝手に決めつけ、パリ氷河の出合まで下る。出合にはデポ を通り抜けねばならないので、 先をいそぐと 二時間程で抜ける。 あとはゆっくりと アバンガーデン山塊を見ながら のことがわからないので、下ることにする。途中から乱れたスキーの跡があり、パリ氷河で待ち合わせている中島隊 のルートは、この谷の中に入って見なければわからない。しかし、これから下の氷河も出合まで下って見ないと、先 スノー・ブリッジの上にスキーを滑らせるが、意外と安定している。しかし、日光がこの谷を照らす前に、 おるが天幕はないし、どうしたのだろうと考えながら天幕をはり、待つことにする。一睡りすると隊長の声に起さ 八月七日、気温が下がり、雪面が締るのを待って、午前二時二〇分出発する。左右にクレバスをさけながら、 やっと全員がそろうことになった。 この南面からのルートは、ピイルツとテーブル・マウンテンの間の谷が一番ルートとして有望であるが、 薄

四、グルトナーレン山塊の登攀(尾上昇記)

動を決めるため簡単な山に登ることにする。 トルの無名峯を最高峯とした二五〇〇メートル前後の山々を持った山塊である。まずパリ氷河上から、これからの行 目指すはパリ氷河の左手のグルトナーレン山塊で、長さ二〇キロメートル、幅一二キロメートル程の、二七〇〇メー 八月一日、 池田隊と別れた中島隊は、パリ氷河周辺の山塊で登山することにしてフォーレルのBCをあとにする。

八月二日、スノー・ドームと呼んだ二六〇〇メートル峯にスキー登山をする。 翌日荷をまとめ、奥地に向かった隊

て近くの山を登ることにする。 らなる二六〇〇メートル峰 と待合せる場所まで下り、そこに不要な物を残し、五日間の食糧と装備を橇につけ、 の間に狭まれた谷をつめ、広く開けたコルの小高い場所にキャンプする。ここをBCとし 最高峯とスノー ・ドームから連

その イスフォールになっていて、 を五本槍と名付け、 八月四日、 裏は雪の斜面となっていて、 スノー・ドームと谷を狭んだ西方にある二六〇〇メートル峯に向かう。 明日はこれに登ることにする。 期待と不安をいだき、 簡単に頂に登る。 頂からの景色は、 谷の出合までスキーで降りる。 南方に五本の岩峯が空に鋭くそびえている。 アイスフォール 峠から見たこの山は、 の下部に来ると、 下部がア

峯下の急な斜面をトラバースして、

一峯と二峯のコルに出て、 みがあり、 しかし、最高峯は一峯より五峯の方が高いので、 八月五日、 真直ぐ相当急な氷の稜を選んで登る。しかし、スタカットでの登攀は時間がかかり、目的は一峯にあるので、二 五峯の登頂をあきらめて引き返す。 五本槍に向かう。 取付きまでスキーを使い、 さらに稜線をたどり三峯に立つと、三峯と四峯の間に大きな切れ込 シールを張り登れる所まで登り、 ここから氷混じりの岩稜を登ると一峯の頂であっ 峯から上部 の岩稜を経

本槍から二つ谷を隔てた西方の二四〇〇メートルの無名峯に登る。 に下り、先に来ていた奥地の隊と再会する。 ためであった。そして、さらに二二〇〇メート 八月六日、天気が悪く、登攀は危ぶまれたが、 i の無名峯に登り、 食事の終る頃は晴れ上り、 天幕に帰る。 これはこの山塊で広く登り、 行動にさしつかえないので、 翌日はゆっくり起き、 Щ 塊の概念をつ 待合せデポ 最終日は か Ŧi.

テーブル・マウンテンの登攀

五

八月八日、久しぶりに全員揃い、 休養を兼ね、 二日に中島隊が登ったスノー・ドー ムにスキー・ハイキングをや

げ くる。 D. うという訳にもいかないので、遠まわしに断わる。彼らが出かけて行った後、とにかく我々は予定通り行動しようと ナーレンの最高峰に向かう所だとのことで、明日向かうことになっている我々はあわてる。そのあと、 がまだミッドガード氷河の上におり、 いので天幕の中に招き、その後の事を聞くと、彼らはミッドガード氷河への下降ルートでおきた事故で、 を南面の谷からさぐり、 まで残した最高峰を登りに行くこととする。 れても三日程しか食糧がないことから、 ル峰登頂の話をし、 頂上の手前で引き返し、帰りは豪快な滑降を思う存分楽しむ。 ケルビン山塊の麓にベースキャンプを設け、 天幕を開くと、 ミッドガード氷河の上で逢った、インペリアル・カレッジの連中であった。 テーブル・マウンテンは一緒に登ろうとのことであるが、今日初めて会って、 登れれば登るということにして、寝袋にもぐりこむと、スキーの滑る音がして、人がやって 四名でパリ氷河に入り、 明日九日は二隊にわかれ、一隊=中島、尾上、三好はグルトナーレンで最後 他の一 四名で Pointe De Halpen (二九四〇メートル) に登り、 一隊は、 池田、 飛行機で落した落下傘を、 五月女、 この夜、これからの行動を検討し、あと予備を入 神崎でテーブル・マウンテンか、ピイルツ クレバスの中から とにかく、外は寒 明日一緒に登ろ 我々のフォ 今はグルト 四名の隊員 い上

ルートから登っても仕方ないので中止し、天幕に帰る。 八月九日、 四時に天幕を出発する。 中島隊は最高峰のアイスフォールの取付きで、下って来た英国隊に会い、

眠りにつく

バンガーデン隊は ピイルツとテーブル・マウンテンの谷の入口で、 グルトナーレン の最高峰を 双眼鏡で

隊とパリ氷河上で再会するまで慎重を期し、残しておいた山を隊長や尾上、三好に登ってもらいたかったが、 頂上直下を下っている四つの黒点が見え、もうこの最高峰の登攀は終ったという気がした。我々としては奥地の

谷の入口は大きなセラックス地帯となり時間がかかる。そこを抜けるとクレバス帯になったが、 狙いをつけて上手

める他はない。

(80)

線に一二時につくという早いピッチだったので、 ここで 初めて頂上を目指すことに計画を変更する。 浅い氷のルンゼとなり、 そうに見えたので、この谷をつめてコルから数えて三本目の側稜に取付く。 は歩き出すとまもなく、一〇〇メートル程の高さを持つ岩峰にぶつかり、 とても不安定な坐り方をした岩で、 上部にゆくに従い、 しかし、 稜線に消えているところを登る。ここまではあくまで、 テーブル・マウンテンの方は、 両方の側面がよく見えて来たが、ピイルツの方は逆層の垂直な岩場となり、 一ピッチ登っただけで引き返し、 頂から南に大きな尾根が伸びており、 なお雪帽までこのような岩峰がいくつか 西面の岩峰の基部をトラバースすることに 始めはガラ場、 この日、 偵察のつもりでいたが、 次は岩稜となり、 その尾根の側稜が登 しかし、 とても取

た。途中から小雪になったが、 中をトラバースして零時に稜線に戻り、 ストした雪面を三〇分程登るだけでよかった。 ながっている。ここを通り、 切りながら稜線にもどる。この稜線に出たところは雪帽の手前で、 た これ 頂上には三〇分程滞在して、写真撮影したあと下る。 も始めには雪の斜面を、 最後の雪帽は右手に岩をまき気味に雪帽の縁に出る。ここから頂上までは、 天幕には朝の五時に帰着することが出来た。 途中から急な逆層のスラブの上を一時間程歩き、 なお、 時間は午後六時で、太陽は水平となり、 ゆるい側稜を下りだす。 帰路は急な側稜を下りきった頃から暗くなり、 その間にコルがあり、 天気はこの頃から悪化し、 途中から又急な氷の稜にステップを 海岸線の山々が夕陽で美しか 細く両側に切れた雪稜でつ 霧雨が降ってき ゆるいクラ 暗やみ

六、帰

路

にする。 この日、 しかし、 今後の日程を検討した結果、食糧も底をついてきたので、明日八月一一日天幕を撤収して海岸へ戻ること 正午に英国のキャンプに帰りの挨拶にいくと、 彼等も食糧がなくなり、 天候も悪くなって来たの

で、協議の末、今日一緒に彼等のBC迄引き上げようということになり、一〇日の午後、天幕を撤収してそのBCま

で下山し、隣りにキャンプする。そして彼等の計画変更により、余った食糧を御馳走になる。

上の峠で英国隊の隊長と会い、お互いの無事を願いながら別れる。 なお、Col de Poulies では、コルの西にある二 身の Gubser Max が、一九六三年に初登頂した時の書置きがビンに入れてあり、その裏に今年フォーレルに向かう 七〇〇メートルの山に中島、池田、三好で登る。頂上には、今年我々がくる時に一緒になったスイス隊の 翌一一日彼等のBCをあとに帰途につく。帰路は昨年と同じ早いピッチで海岸まで戻る。途中ミッドガード氷河の Zürich 丑

き込み、頂をあとにする。こうして八月二〇日、全員無事上陸地点のシオラリックに帰着した。

ことになっていたスウェーデン・ノルウェー合同隊の二名の隊員の名が書きこんであった。我々もその下に名前を書

会中部ネパール踏査隊」である。

アンナプルナ北方山域の踏査(一九六五年)

---ティリツォ湖をめぐって-

薬師義

美

はじめに

九六五年全富山ヒマラヤ登山隊」 九六四年九月に、ネパール外務省からの の計画が、 みるも無惨に崩壊していった。それを引継いで誕生したのが、 「ティリチョ登山申請不許可」 の公文書を受け、 軌道に乗っていた 「泊山岳

が 着踏査によって、ティリツォ・ピーク(七一四八メートル)の偵察の任務を果たすことができた。その後に、アンナプル の成果をあげることができた。 ネパール政府の登山禁止政策が打出されたあと、どの程度奥地へ入れるかに不安を抱きつつ、日本を出発したのだ 九六五年九月から翌年二月にかけて約五ヵ月滞在し、 目標の第一にしていたティリツォ湖へは、日本人として初めて訪れ、約二〇日間の定 その間にネパール官民の好意的な助力をえて、 予期以上

ら東のカンチェンジュンガまで、ネパール・ヒマラヤのジャイアンツをあまさず眺めることができた。 ナ山群の一周、エベレストの氷河群の踏査、真冬のゴサインクンド越えと、三回の踏破によって、西はダウラギリか

踏査隊は個人的なものであったが、第一の目的はティリツォ・ピークの偵察と周辺の地形を明らかにすること。

いにもそこは立入禁止区域からはずれていた。 登山の開禁に関する糸口をつかむことにあった。約五〇〇キログラムの装備、 第二に登山はできないのだから、 できるかぎり広範にネパールを歩 食糧を持って神戸港を出発したの

メンバーは

は一九六五年八月二一日である。

薬 師 義 美 (二九歳·高校教員·日本山岳会·京都大学学士山岳会会員)

伊東信隆 (二九歳・園芸自営・日本山岳会会員)

金 山 清 一 (二三歳・学生・京都大学山岳部員)

なお、 九六六年)として公刊している。 本踏査隊の公式報告書は『一九六五~六六年中部ネパール踏査報告』(泊山岳会中部ネパール踏査隊編著

ニ、アプローチ

船がボンベイに入港したときは印パ戦争の最中、戦況は深刻な様子であり、暗澹たる気持ちであった。しかし、パ

トナ経由で一気にカトマンズへ入ったのは九月一五日、ボンベイからまる二日であった。

なり時間をとられたが、九月三〇日にすべてがポカラへ集結した。 カトマンズではビザ延長とムクチナートの旅行許可の取付け、キャラバンの準備、ポカラへの荷物の空輸などにか

〇月一日、サーブ三人、 シェルパ二人(ラクパ・テンジンとソナのナムチェ出身の兄弟)、 ポーター十四人の小

河原が

ヤカン・コーラとムルキュン・コーラに二分する所で、中央の尾根へ取付いた。

キャラバンが空港前のアンナプルナ・ホテル ムリ・プラサッド・セルチァン氏の仲介で、ポカラ~トゥクチェ間を六日、 から、 トゥクチェ街道へ向かって動き出した。 川喜田二郎氏 四〇キログラム一日十二ルピーの請 の知己ア

九〇メートル)に到着した たものである。 なり、松柏類が卓越する。 ノーダラの尾根上からマチャプチャレの雄姿に嘆息し、ゴラ・パニ峠を越えたファラティからダウラギリに感嘆し カリ・ガンダキの大峡谷部をすぎ、ガンサ村からレテに至ると、風景ががらりと変化し、 半乾燥のチベット的な、 いわゆるタコーラ地域である。 約束の六日目にトゥクチェ 谷間が広く

れ と接触し、 なった。村から見えるニルギリ北峯の急峻な北斜面は、 へ入って、ここを基地にすることにする。 またラリット・ナル・シン・バタチァン村長らの助力をえて、スムーズにティリツォ湖へ行動を起こせるように ウクチェでは川喜田隊以来、 タコーラ滞在中は何かと世話になっ 日本隊の面倒をよくみてくれるインドラ・マンとゴビンダ・マンの両セルチァン氏 軍のチェック・ポストも警察もわれわれの行動に全面的な支持を与えてく た。一日の休養のあと、一〇月八日にジョモソムバ村(二七七〇メートル) 青白く月光に映えていた。

三、ティリツォ湖にて

意をととのえていた十二人のポーターをつれ、 なかなか立派である。 ティニのポーターでオランダのニルギリ隊に参加した者もいるから、 九六五年一〇月一〇日。 幸いなことにラクパ・テンジンは六三年秋に、 ジョモソムバ村を八時半に出発。三〇分でティニ村(二八七〇メートル)、 いよいよ山へ向かう。 道は 潅漑水路にそってティニ・コーラへ下っ 道はかれらにまかせきり。 アメリカ平和部隊員と湖を往復したという 自宅に寄って用

松の疎林の中をゆるく登

る といい、景色がいい。右手にはニルギリ北峯がおおいかぶさるようにある。道の左下に池が二つ光っていた。 道端にはトゲのある小潅木がいっぱいあった。一時二〇分、ツォモツォ(三六九〇メートル)。 オランダ隊のベース

キャンプ (四一三〇メートル) した。 ニルギリの北壁から氷塊が 轟音とともに落下し、 雪崩が ゴーゴー とこだましてい 約三九〇〇メートルで森林限界となり、アルプ状の広々とした牧草地が展開する。四時すぎに水場のあるカルカで まだ高度影響はない。

姿を現わす。左手のヤカン・コーラは急斜面となって落ちこみ、放牧の踏跡はここらまである。 とティリツォ 一日。前夜の新雪のため、出発は九時近くなり、気温はマイナス六度と少々寒くなった。新雪を踏んでニルギリ の中間のピークから下る長大な尾根をからみ、一一時半にその稜線に達した。 眼前に西ティリツォ峠

氷河となり、下部は岩がゴロゴロしている。尾根から谷へ下り、伊東と金山が右寄りにトレースをつけると、 ・は雪のない左側へ登ってくれという。薬師とラクパが急なガレ場からポーターを峠へ導いた。 四九〇〇メートルをこえて昼食。ポーターで頭痛をうったえるもの続出、 鎮痛剤を与える。 ポータ は

サイド・モレーンがのびている。 二分し、一つはヤカン・コーラの源頭となり、もう一つは湖へ下っていた。湖へ向から氷河の左岸には長大で顕著な わち湖の西岸に三時すぎ、全員集まってきた。 西ティリツォ峠、五〇五〇メートル。 ポーターとシェルパはそれを下り、隊員は氷河の中を歩き、 しかし朝からガスが飛び、 展望はきかない。 ティリツォ氷河は峠 モレーンの末端、

も見えず、すべては明日からとテントへもぐりこむ。 テントを仮設するころから頭がガンガンしだした。雲と降雪のためにグランド・バリエールも何

一二日。素晴しい快晴で明けた。ガンガプルナからティリツォ・ピークへと、 下の村々で聞いたとおり、湖は満々と水をたたえていた。日本で得た情報はすべて凍結していると 大障壁が延々とつづき、 湖は刻々と トルと計算された。

いうことであった。 湖面の高度(ベース・キャンプ) は滞在中の平均値から四八五〇メートルである。

高度影響で体調は悪く、 ベースの整備。 平静時の隊員の脈搏は平均して一○○前後、これに対して二人のシェルパ

は隊員の平 ・地での数に近い七七である。

テ 形の把握。 ィリツォ・ピーク、 そしてムスタン・ヒマールまで一望にできる素晴らしい展望台であった。 三日。 頂上にはスイスのA・バウムガルトナーらが立てたケルンがある。 各自コンディションの調整。薬師とラクパは峠の北の小ピーク(ケルン・ピーク、五二七〇メートル)へ登り、 ニルギリ。 またカリ・ガンダキをはさんでダウラギリ、 ムクト・ヒマール、 アンナプルナⅡ峰、 タコーラ・ ガンガプル ナか ヒマー

てきた。フランス隊はこれを求めながら、 た。 このピークからムクチナート・ヒマールにつづく尾根上に、 調子がいいので、 長大なザクの斜面をへつり気味に接近。 九五〇年には見ることができなかった。 途中から大障壁の上にアンナプルナー峰が頭をもたげ ピラミッド型の六〇〇〇メートルほどのピー クがあっ

五七五〇メートルで主稜上へ出ると、そこの雪稜は固くクラストし、アイゼンを持たぬ二人には歯がたたず、

返した。高度をあげるにつれて頭が重くなった。

〇~六〇メートルの顕著なモレーンの上は歩きやすく、アプローチには快適な歩道である。 河を歩いた。 方、金山とソナはティリツォ氷河の南岸のサイド・ 伊東は一人で湖南岸の氷

モレーンからティリツォ北尾根の取付き点を偵察。

高さが

東西 1 かか 四日。 「の長径は二・八キロメートルとなった。 し一〇時をすぎると決まってガスがわき、 身体の調子がはっきりせず、ポケット・コンパスを使って測量。 ピークをねらうには高性能のトランシットが必要だが、 長く作業ができない。 午後からデータを整理したら、 湖岸に二八〇メートルの基線を設けた。 約七二〇〇メー テ イリツォ湖

五.日。 早朝に測量の補足をし、八時半すぎから北峰をめざして出た。 出発が遅かったからガスの定期便に まか

れ の北岸は丘陵状になり、 ピークに立つより地形偵察が大事と、途中から湖岸北部の踏査に変更。 一部が断崖となって湖へ突入し、それが湖岸を通れなくしている。 北峯の裾をか

М 1トル)に登った。 ・イシャックが ムクチナート・ヒマールに登ったときにつめた氷河に突き当たり、 しかしガスのために湖南の一部と東ティリツォ峠が少し見えたのみ。 北岸で一番高い岩山 三時をすぎると小雪の定期

便がやってくる。

ら落下する氷河が直接湖へ突入し、 ンザイレンしたが、トップの金山は二度、 六日。伊東を残し、四人は湖の一周。 湖面からの厚さが五〇~六〇メートルもある。 堆石におおわれた氷河地帯をぐるぐる迂回しながら南岸を進 ヒドン・クレバスを踏み抜いた。とくに東部ではグランド・バリエールか

た。 のは二時。 もう東ティリツォ峠へ行く時間はなく、 急いで 前日のルートからベースへもどる。 しかも大障壁からいつ雪崩が落ちるとも知れず、いやな所だった。八時半にベースを出て東岸のモレーンに達した ヒマラヤのスケールに慣れず、いつも予想する三倍の時間がかかる。 薄暗い六時半に着い

し 凍結している春には、湖面をたどると東岸までわずか一時間あまりである。 朝から雲が低く、 小雪が舞う。午後から伊東と金山が北岸岩場のへつりルートの工作にでたが、 成果な

力 かない。 脈搏は平常にもどったものの、高度影響で三人とも満月みたいな顔になり、利尿剤を飲んでも、むくみはあまりひ

トルの末端ピークに達した。昼食のあと、 一八日。ティリツォ北稜岩尾根の試登。八時すぎ、第一隊の伊東と金山が先発した。 そこから岩尾根末端のピークへ二〇〇メートルの雪の斜面がある。 一二時から試登開始。金山がトップで二ピッチ目で第二岩峰を越えた。 一時間ほどのラッセルののち、 九時半モレーンの終る取付き 1

尾根の取付きへ偵察に出た。

氷河を横断し、うまく取付き地点を見てきたが、途中で人為的な雪崩を出した。

ップ交代で第三岩峰にかかる頃から雪が降りはじめる。

開いていく。 約一〇〇メートルフィックスした。第二隊の薬師とラクパの待つ末端ピークにケルンを積み、 大きな岩を積み重ねたようで、 カラビナ、アブミをデポし、 第三岩峰(五四五〇メートル)を登ったところで風雪が本格的になり、引き返す。 浮石の多いいやな岩質。三〇センチのアイスピトンを打ちこむと、だんだんリスが 四時にベースへもどった。 下降に六ミリの その下に残ったピト

と合する。その棚へ突上げる雪の尾根を後日試登したが、 この岩尾根は標高約六〇〇〇メートルまでつづき、六三〇〇メートル地点でティリツォ・ピー 岩尾根のもっと上部をうかがうには、 キャンプを出さねば クの中腹にのび る棚

ならない。

n 気温はマイナス一四~一五度であった。 ロという大きなチベット・ガラスである。この夜半に、グランド・バリエールがくずれたかと思うほどの大雪崩があ 爆風はテントをゆすぶった。雪の状態がよくても、南岸の氷河地帯を歩くのは極めて危険である。滞在中の最低 九日から二○日にかけて雪が降り、二○~三○センチほどつもった。入山の時とは一変して、周囲が白 二一日はめずらしく終日快晴となったものの、雪の落着くのを待つ。 テントのめぐりでさわいでいるのは、 色とな

切り出 1 なり、大雪庇をさけて、東斜面をトラバース気味に登る。 二二日。微風快晴、 二三日。朝から天気がはっきりせず、様子を見ているうちに昼となる。 二〇センチほどの積雪に遅々としてピッチがあがらない。 しに手間どる。 五八〇〇メートルで時間切れとなり下山。 これまでの南東風が北西風にかわった。雪崩の危険のない北峯へ再度攻撃。全員七時半に 新雪と旧雪の間に空洞があり、 この日 時半に過日の引き返し点に達し、 の日射はもうれつで、 一一時から伊東と金山がティリツォ北稜雪 なじんでいず、 頭はガンガンした。 薬師 トップに スタ

は不安定である。

四日。 雪尾根の試登。約一時間で氷河を横断、五一二〇メートルから尾根に取付いた。斜面は二五~三〇度、 悪

とから追ってきた伊東が下からコールをかけたとたん、すぐ横の雪面が広い範囲にわたって切れ、なだれ落ちてい い岩場にフィックスすれば、 荷上げルートによかろう。 ところが、一〇〇メートルほど登って昼食をしていた時、

唖然とする。

波が頭上へ来るような気がしたが、逃げ場がない。あれよと見ていると中段の大テラスでとまり、 思案しながら、さらに登ろうとした時、頂上直下の氷のえぐれた地点から氷塊が大音響とともに落下してきた。余 本流のブロックはもちろん下まで落下していった。 これですっかり出鼻をくじかれて下山。 ベースへ もどる 雪煙だけが流れて

と、新しい基線を設けてデータ補足の再測量にかかる。 二五日。三度北峰へ。前回のトレースが固まり快調に進んだ。 主稜の雪庇を確かめ、その上をビレーしながら、

回より少し上の五八二〇メートルまで達し、休憩した。もう頂上に手がとどきそうであったが、金山がトップに出 腹にまで響くような「ズーン」という音がした。 雪庇に亀裂は見当たらず、不気味である。ルートはこの危険

二六日。金山とラクパはベース撤収のため、ポーターを呼びに一気にジョモソムバへ下山した。

な雪庇上にしかないから、あと一〇〇メートルそこそこだが撤退した。

二七日。薬師と伊東は東ティリツォ峠へ達しようと出たが、 深い新雪にはかどらず、 ついに到達を断念してもどっ

た。セーターがこげ臭いほどに強い日射であった。

金山は 九人のポ ーターを手配、 翌二八日にツォモツォまで入った。ベースは整理

二九日。一二時にポーターがベースに着き、一時すぎに完全に撤収、下山。六時すぎにツォモツォへ到着した。三

〇日にのんびりジョモソムバ村へ帰着。下界の空気は甘く、むくんだ顔は急速にしぼんでいった。

あ

、ィを経由してポカラに同一五日にもどって、 政府の特別許可をもらい、一一月五日にジョモソムバ村をあとに、 踏査隊の第一の、そして主要な目的が終った。 ムクチナートを巡礼し、

四、ティリツォについて

を意味することも付け加えられた。 を教えられた。それはタカリー族の使うタカリー語で、「ティリ」は「遠い」、「ツォ」はチベット語と同じく「湖 た。それが一九六五年一〇月六日、 四八メートルの無名峰に対して、 テ イリツォ (Tilitso) という名称を世に紹介したのは、 トゥクチェでゴビンダ・マン・セルチァン氏から「ティリツォ」と発音すること 山麓の湖の名称をかり、 わが踏査隊がはじめてである。 「ティリチョ・ピーク」(Tilicho Peak)と仮称してい 登山隊計画の当初、 この七

近く発音し、有名な「Machhapuchhare」は「マツァプツァレ」と聞える。それで、発音の混乱をさけるために、わ れわれは「Tilitso」を用いることにした。また「ティリツォ湖」というのは、 (白い山) をダウラギリ峰と呼んだ方がぴったりするように、この呼称を使う。 インド測量局の地図には「Tilicho」という地名の記載がある。 ただネパール語では「ch」を「チ」よりも「ツ」に 語源的におかしいのだが、ダウラギリ

を発見、「大障壁」に感嘆しながらも、本命は別にあった。われわれの「ティリツォ・ピーク」はその「大障壁」上 エルゾーグ、G・レビュファ、写真家のM・イシャックの三人。彼らはアンナプルナエ峰を血眼でさがし、「大氷湖」(注1) ティリツォを訪れた最初のパーティは周知のように、一九五〇年のフランス・アンナプルナ隊である。 隊長のM

北岸のムクチナート・ヒマール(六二五〇メートルとしている)に登った、 版・ミュンヘン・一九六〇年・一二三頁参照) にポイントが明示されているだけで、資料は皆無であった。 そこで、当時湖の の一つのピークであり、インド測量局、 エルゾーグの著書、G・O・ディーレンフルト教授の『第三の極地』 マルセル・イシャックに問合わせをした結果、

ないとあり、湖と大障壁のすばらしいパノラマ写真(明らかにティリツォ・ピークの写った)が添付されていた。 その返事(一九六四年七月一二日付、パリ発)にはティリツォ・ピークといえるような山が存在したかどうか、 よくわから

ついで一九五六年、 ムクチナートの東方のカトゥン・カン(六四三〇メートル、高度計では六三〇〇メートルという)に 登

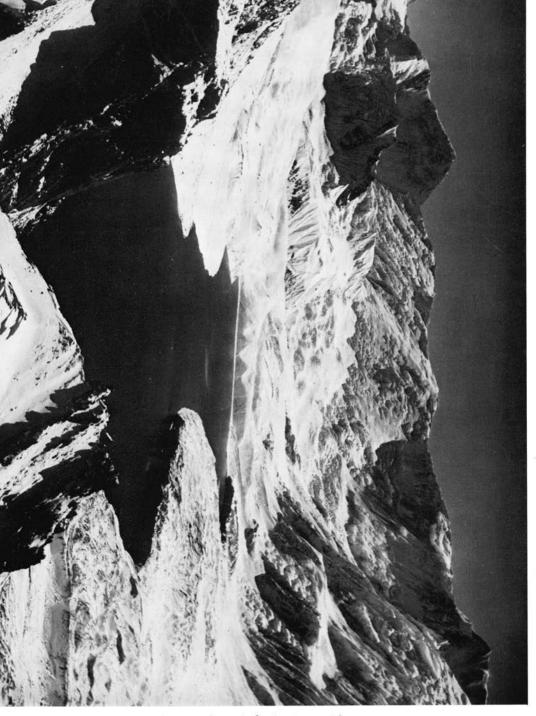
Baumgartner)はフランスのアンナプルナで活躍したアイラ(われわれは彼にカトマンズ近郊であった)らをつれて、 た スイス の 小 パーティがあり、 その報告に、 ティリツォ湖へも行ったとあった。 A・バウムガルトナー ォ大氷湖を横断し、 グランド・バリエール上の七○○九メートル峰を試みた。 本心は ガンガプルナ にあったようだ ン・カン登頂後、四月中旬に五日間入っていた。かれの手紙(一九六四年一一月二六日付、フォルヒ発)によると、ティリツ 非常に有益なサジェッションと多数の写真を送られた。湖の氷の状態がよければ、飛行機輸送したらよかろうと (Arthur

申し入れたが、今日まで返事を得ていないけれど、簡単な報告によると、一〇月三〇日に湖に達し、一一月二日に東(注w) ティリツォ峠に至り、 モソムバを中心にタコーラの地質調査を主にした。総隊長のK・G・エゲラー教授(アムステルダム大学)に資料交換を また一九六二年秋に、 同四日にジョモソムバにもどっている。 オランダ隊がニルギリ北峰(七〇三二メートル)に登頂(登攀隊長リオネル・テレイ)、 も付け加えていた。

域ブラガ村(タヵールともいう)からのもの、五八年西北ネパールの川喜田隊がダンガルゾンからとったものには、(注5) な存在として認められる。ただ当時の状況では、ジャイアンツにおされ、誰れもが注視しなかった。 別に日本隊もティリツォ・ピークの写真を公表している。とくに一九五二年のマナスル踏査隊のマルシャンディ流

彼が登攀隊長となって、 以上が活字にされた記録、報告であるが、リオネル・テレイの私信(一九六四年九月一五日付、 六五年にスペイン隊の計画があったようであるが、 予定年の九月に 山で事故死してしまっ シャモニー発)によると、

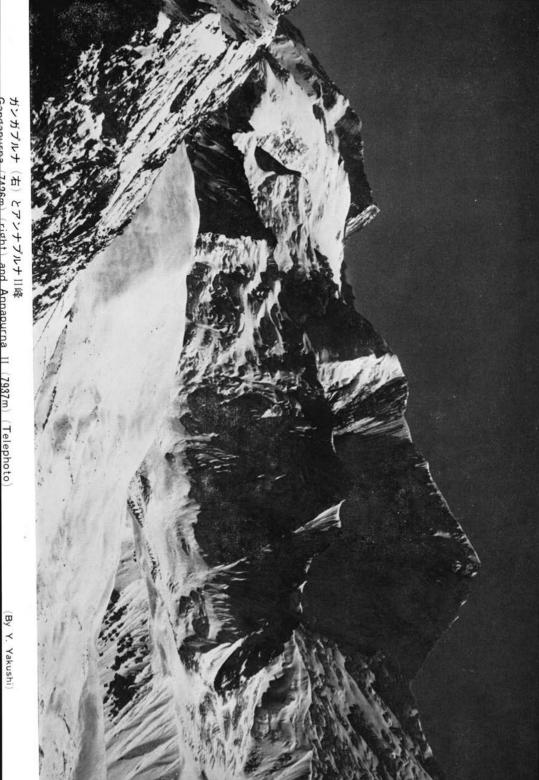
Dhaulagiri I (8172m) and Tukuche Peak (6915m) (Telephoto)



ティリツォ湖とグラン・バリエール(アンナプルナ・ヒマール) The Lake Tilitso and the Grande Barrière Gangapurna (7426m) (left) and Roc Noir (7513m) (right) are seen. (By Y. Yakushi)



ティリツォ・ピーク Tilitso Peak (7148m)



(7496m) (right) and Annapurna II (7937m) (Telephoto)





Tilitso Region Khatung Kang Tupra Know Jomosomba 2770 6430 5914 Thini 2870 Mini (Gyungtang) Knola MUKTINATH HIMAL C. 6000 Yakang Khola △Bal Bahadur C. 6000 PK. Tsomotso Harka Bahadur 3690 △ Bir Bahadur.
PK. Arko Tal OCairn PK. Khola Gandarme ... Bahadur W. Tilitso Pass Basin' Banded Innascree A Black PK. E.Tuitso P. Nilgiri N. Khangsar Tilitso Peak (Gombaya) Nilgiri C. North Annaputha Glacier 0 PAND BARRIERE Route by C.H. Bell, 1964 Route by Roc Noir Japanese, 1965 Gangapurna 5 KM 7009 Glacier 7142 Dome 7142 Annapurna I 7426 8078 A A A 8010 y Yakushi 8051

Supplement to "Sangaku", The Journal of The Japanese Alpine Club, vol. LXII, 1967.

長文の日記からダイジェストする。

聞いたが、 そのほか、 他のシェルパの話によれば、アメリカ平和部隊員のいく組かも湖畔まで行っているという。 トニー・ハーゲン博士がアンナプルナのアイラをつれて、湖を二度訪れていることを、 アイラ本人か

〇月ごろ、ポール、ボート、ダック(いずれもニック・ネームらしい)の三人と湖岸に二晩いて、そのあとダウラギリのB 三人が湖に入り、 その時も失敗に終ったが、 いたとあった。 ルケィのサーティフィケーションによると、一九六三年九月、マーク・シュワルツ、ペーター・パンドル、スキ嬢の であったデーブ・レイビス (Dave Leivis) の隊はトゥクチェ・ピーク (六九一五メートル) を三度目のアタックといい、 これら平和部隊員の地の利をいかした活動は非常に活溌であるが、そのほとんどは公表されていない。(注6) これは東ティリツォ峠を越えたのかどうか不明である。また、 湖岸に三日間いて五二〇〇メートルまで登ったあと、マナン・トンジェームクチナートと一ヵ月歩 いたって気軽に振舞っていた。ティリツォに関しては、同行したというシェルパ われわれのラクパ・テンジンは同年 1 のプータ ゥクチ

C にフレンチ・コルから往復したという。

ドン・バレイのダンブッシュ・ピーク(タバ・ピークともいう)に登ったあと、ティリツォ地域へ入った。以下に、 月一日付、サイゴン発)によると、 カ人、 つは彼自身のもので、サイゴン勤務の休暇を利用した単独行である。ティリツォへ行く前、 ī ところが、帰国して一年を経た一九六七年三月一七日、京都府立大学山岳会の高田直樹氏らにともなわれたアメリ ルワリン・ヒマールに入り、テシ・ラプチャ越えをしている。 チャール ズ・H・ベル (Charles H. Bell) 平和部隊員であった後述のダグラス・K・ビンガム が、 ティリツォ地域の未発表の二つの記録をもって来宅した。 当日の彼の話とのちにもらった手紙(一九六七年四 (Douglas K. 一九六三年三~四月には Bingham) む

ツォを経由して、 九六四年六月一三日、ベルは一人のポーター(バル・バハドゥール)をつれて、マルパ村を出発。 われわれと異なるルートから西ティリツォ峠を一五日に越えた。 その高度を一六四〇〇フィート ティニ、 ツ オモ

北岸へ一周し、北岸の丘陵の間に流れる「溝」(The Slot)を経由した。 (約五〇〇〇メートル)とする。 一九日には「ケルン・ピーク」にケルンを積み、周辺を偵察、 二〇日には湖の南岸から ルートはほぼ自分たちと同じようである。 (94)

バークして翌日もどった。この西稜はわれわれが三度試みたものである。 二三日にテントを「北峰」の西にある「瘤」(The Lump)の下へ移動し、 そこから北峰の西稜を試登し、途中でビ

稜から登頂した。 高度計を持参していず、彼の示す高度はいずれも低すぎると自分たちは思っている。いずれにしろ、登行は容易で、 二五、六日はキャンプを移動させた。 そして六月二七日に北峰(ビンガムの地図はこれをティリツォ・ピークとする) これはこの付近での最高峰であり、一八九〇〇フィート(約五七六〇メートル)としているが、 ベルは

後に下山。すぐテントを移動し「ブラック・ピーク」の下の池にキャンプ。 二八日に東ティリツォ峠を越えてマルシャンディ側へ下り、本流に至る前にショート・カットして「ブラック・ピ

1頂ではガスのため展望はよくきかなかったけれど、東方がよく見えた。ビンガムの作ったケルンを補修し、二時間

ーク・クリーク」(Black Peak Creek)に入り、途中でキャンプ。「縞状ピーク」(Banded Peak)と「ブラック・

北側に氷河をもつ三つのピークがあり、その中の一番立派なピークに、つれているポーターの名前から「バル・バハ 命名した凹地に入り、「インナスクリー湖」(Lake Innascree)の近くにキャンプ。 盆地は四~五マイルの長さで、 ピーク」の間のコルを越えるのが容易だと、のちに判明した。翌二九日に「バハドゥール盆地」(Bahadur Basin)と

二者は約一八〇〇〇フィート、前者は一九〇〇〇フィートとする。盆地にはもう一つ湖があり、ネパール語で「アル ドゥール・ピーク」(Bal Bahadur Peak)とし、他を六三年につれていたポーターの名をかり、「ハルカ・バハドゥ ·ル・ピーク」(Harka Bahadur Peak) と「ビル・バハドゥール・ピーク」(Bir Bahadur Peak) と命名した。

1

・タール」(Arko Tal もう一つの湖)と呼ぶ。三〇日にテントを西方へ移動

七月一日、バル・バハドゥール峰の南へのびる尾根上のピーク、「突起」(The Bump)約一八〇〇〇フィートに登

ところで、この二人のアメリカ人は、

カニ

顕著に存在したかどうか思い出せないと手紙でいっている。

る。八日に天気の小康状態をみて、「縞状ピーク」をガスの中で頂上に立った。 ゥール峯に登った。そこからカトゥン・カンの南面がよく見えた。三日からまた悪天が続き、 「北峯」の北側が急斜面で落ちているし、東方がよく見える。アイゼンがないので、バル・バハドゥール峯を 頂上にケルンを積んで下山。翌二日にポーターをマナンへ食糧買出しにおろし、午後からハルカ 南西方が少し見えるだけで、 雨のあとは毎 · . 日雪が降 ハド

着する。結局、 翌九日からまた雨や雪、一〇日に「尿道」(Orinary Tract)へ流れ出す「インナスクリー湖」を経て ・ル村を通 って、 彼は マナンに一一日に到着した。完全なモンスーンの中を、 「北峰」の単独登頂と「バハドゥール盆地」の新発見をもたらした。 マルシャンディ沿いに下り、 ポカラへ帰

を積んで、中にフィルムの空カンを入れ、降り出した雨の中を急いで下山。

暗くなってテントに着いた。

間 に 二日付、アラスカ発)によると、ネパール滞在の平和部隊員であった一九六三年八月(七月一二日付の手紙では七月となっている) くわしい日記がとられず、詳細は不明である。 がなかったために、 われわれのいう「北峰」に登っている。さらに翌六四年五月(七月二日付の手紙では四月)にふたたび湖へ入り、 方、ベルの報告にでてくるD・K・ビンガムの踏査について、直接当人からえた手紙(一九六七年五月八日付と七月一 湖西端の一六七五〇フィート (約五一〇〇メートル)の小ピークに登った。 残念なことに、六三年

ィリツォ地域のクロニクルの一つとして、以上の未発表記録をあえて紹介した。 ケールの大きいヒマラヤでは、六〇〇〇メートルそこそこのピークの登頂はほとんど問題にならないけれど、テ

われわれのいう「北峰」を「ティリチョ・ピーク」 (Tirichho Peak)

of Nilgiri) と呼び、 称していた。 また、 これはビンガムから聞いたものだとするが、 われわれのいう「ティリツォ・ピーク」に対しては、ベルは「ニルギリの主峰」 当のビンガムは七一四八メートルの高度のピーク

かれらは「日本人」の作った地図にもとずいていると

.っているが、その地図は一九六四年に遠征隊用に薬師が作図した「ダウラギリとアンナプルナ」(二〇万分の一) (96)

秋の京都大学山岳部のガネッシュ(アンナプルナ南峰)隊にそれを提供したとき、ある隊員が平和部隊員にあってそ のスケルトン・マップに間違いない。もしそうだとすれば、 余程のことがないかぎり、ピークを見誤ることがないはずである。地図の経路については、一九六四年 そこで部隊員の一人、ストュウ・デュリン (Stu During) が薬師に手紙 (一九六四年二二月六日付、 地図の七一四八メートル峰には「Tilicho Peak」と明

流れていることは、 滞ネ中に平和部隊員やネパール外務省などで自分たちが確認している。

トマンズ発)をよこし、求めに応じて四部送付した。これが在ネパール・アメリカ大使館で大量に複写され、多方面

いってきているが、 しかし、 かれらは七一四八メートル峰に対するわれわれのいう名称に、 「北峰」に対しては、もっと適当な名称を与えるべきだと、自分たちも考えている。 特に異議がなく、固執しない旨を二人とも

ニの村人はじめ、タコーラの住民はこの名称を知らなかった。 「ゴンバヤ」(Gombaya)と呼んでいることを聞いた。 一九六五年の愛知県山岳連盟のダウラギリⅡ峰登山隊からは、ダンガルゾンの村民は七一四八メートル峰 だが、西ティリツォ峠の西斜面を放牧地として利用するテ したがって、一九六五年一〇月九日にジョモソムバ村

郷の有力者たちが数名いあわせ、しばらく相談したあと、 村長宅で、タコーラ郡長のインドラ・マン・セルチァン氏の発言を紹介して、われわれの結論としたい。

の仮称は大変いい、 「君たちのいうティリツォ・ピークには現地名はない。しかしその山は立派な存在で、 ふさわしい名前だ。われわれもこれからそう呼ぶことにする。」 みな知っているから、

1 かということなる。また、 ・マナイズすると、「Tiricho」、「Tirichho」、「Tidicho」、「Tidichho」となり「ティリ」については「ェ」か ビンガムによれば、ティリツォに対して、「です」というネパール語があてられているという。これをロ タカリー語はチベット語の方言なので、「遠くはなれた」(remote)に当る口語チベット

端のガンガプルナにずれが生じていた。

れない。 語 はは 「tha-ring-Po」であり、「ティリ」と「タリンポ」には関連性が見られ、そうすると「r」 インド測量局が調査のさいにミスしたとも考えられるけれど、 既述のように われわれは が正しいの [Tilitso] かも 知

五、地図について

する。

b 発表パノラマ写真とカトゥン・カンからのスイス隊の写真にもとずき、 リエールからマルシャンディへ落ちる氷河については、C・H・ベルから提供された多量の写真に負うところが大き 万分の一)を基本図に使用した。 れが撮影したパノラマによっている。 ここに公表した二葉の地図は、 西ティリツォ峠 からヤカワ・カンに至る山脈は、 それに各種の資料を加えたが、とくに「バハドゥール盆地」 帰国後一年半をかけて作図したもので、 ダンガルゾン北方の峠からとられた一九五八年の川喜田 トゥクチェ・ピークからツァ インド測量局の一インチ八マイル の周辺とグランド・バ ル チェ 間 (約五〇 は 隊 b の未 n

くも、 をなしてい えていたが、 書を刊行したことを教えられた。その一つはグレイシァ・ドームの位置であり、 ガンガプルナ隊によっている。そのG・ハウザーの報告書から、 スケルトン・マップは、 また、D・K・ビンガムがペーター・アウフシュナイターと平和部隊の踏査資料を編集した広域の一〇万分の一の ピークらしくもなく、 たからである。 西 へ移動させ 非常にすぐれたものである。アンナプルナの北の内院はフランス隊に、 もう一つは、 ねばならない。 ロック・ノアー テ 間違えた理由は、 ィリツォで行なった測量結果に磁針偏差を加えていなかったことから、 ルへ続く坦々とした稜線にすぎず、 北側から見たグレイシァ・ドー われ われ が二つの大きなミスをしたまま、 七〇〇九メート われわれは七〇〇九メートル A はまったくドー 南の内院はドイツの ル 峰 のみがドー 踏查報告 峰と考

身全面的な信頼をおいていない。フランス隊が七キロメートルと称した湖の長径は、 ここで自分たちの行なった測量についてふれておくと、使用した器械は簡易測量用のものであるから、 それさえも、二・八キロメートルとしておく。 測量の結果二・七八キロ われ 自 (98

測値、 いない。そのためかどうかはわからないけれど、ビンガムの地図の高度と大きく異なるものがある。 ちの引き返し点の 高度が五八二〇メートルであり、 頂上までの残る高度差は一〇〇メートル前後と 思っている。 峠一六三○○フィート(約四九七○メートル)、ティリツォ湖一五七○○フィート(四七八五メートル)、北峰を一八九○○フ ソムバ村は九二二〇フィート(二八一〇メートル)、ツォモツォは一一五七〇フィート(約三五二六メートル)、 ィート(約五七六○メートル)、ムクチナート一二五○○フィート(三八一○メートル)などである。北峰については、 また高度については、 平均値を示した。 これらはいくつかの既知地点との平均誤差を求め、補正してあるが、 自分たちが通過、 滞在した地点のものはすべて自分たちの高度計(スイス製トンメン)による実 温度変化は考慮されて 例えば、 西ティリツォ ジョモ

るらしく、「新しい城砦」という意味だという。 チベット語では「dzong」が「城砦」、「新しい」は「sa-pa」(註号) る「Jomosom」は、 ここの中学校長は 村人によると「ジョモソムバ」といっている。 別に「ゾンサム」(Dzongsam) ともいわれてい 「Jhomosamba」とノートに書いてくれたが、この村に最近新しく軍のチェック・ポストがで

お、ビンガムもアネロイド気圧計を持参した実測値であるが、補正をどうしているのかはわからない。

地名の綴り方については、できるだけ現地採取した発音に近ずけたつもりである。

例えばインド測量

高

0

また ザルゲン・コーラ左岸の西チュルー峯からダモダール・ヒマールの接合点までに「ザルゲン・ヒマール」 カリ・ガンダキ右岸のトゥクチェ・ピークからケハ・ルンパ・コーラ (ビンガムの地図は Gya Lungpa とする) 「タコーラ・ヒマール」、 左岸の 西ティリツォ峠 からニサンゴ・ラまでを「ムクチナート・ヒマー

きたのは皮肉である。

(ネバールでは」をはに近く発音する)という名称を冠することを、ここで提案したい。

氷河ルートからイシャックが登ったときは、まったくガスに包まれており、ビンガムはおそらく「北峯」に登ってい たことになるが、いずれもガスのせいで、すっきりした頂上のパノラマ写真を持ちかえっていない。 たものと考え、 ール」は存在しないと、ビンガムもベルもいっており、川喜田隊やベルの写真でもそれは裏付けされるようである。 なお、一九五〇年にフランス隊のM・イシャックが登頂したという高度六二五〇メートルの「ムクチナート・ヒマ 高度計か何かの誤りとする。イシャックが「北峯」に登っていたとすれば、これまで三登が行なわれ

六、おわりに

地形的に未知の部分が多く残されている。再測量によるインド測量局の新版の地図(一インチニマイル)の公刊がま のはじまる六月ごろからポスト・モンスーンにかけては、完全にオープン・シーとなっている。 このアンナプルナの北方山域は、カリ・ガンダキやマルシャンディの河沿いによく歩かれているにもかかわらず、 季節からすれば冬季も凍結していると想像されるものの、いつから氷るかを確認した者はない。 ィリツォ湖はプレ・モンスーン期には凍結していることは、フランス隊 と バウムガルトナー の報告で確かであ

注

たれてならない。

- 1 M. Herzog; Annapurna, Premier 8,000 m. Paris, 1951. (『処女峰アンナブルナ』 白水社・一九五三年
- M. Herzog et M. Ichac; Regards vers l'Annapurna. Paris, 1951
- 2 Schweizer Alpen-Club, Band 33, 1957, S. 279-287 M. Dériaz-Grob; "Katung-Kang (6430 m ca.), Bergfahrt in den Norden der Annapurna." Die Alpen, Zeitschrift des

- 3 P. van Lookeren Campagne; "The Netherlands Himalayan Expedition to Central West-Nepal." The Himalayan Journal,
- Vol. 24, 1962—63, p. 49—52.
- 4 『山岳』第四十八年・一九五三年・一二頁の写真
- 5 『山岳』第五十四年・一九五九年・九二~九三頁の写真。
- 公表された例としては Donald A. Messerschmidt; "Trekking around Annapurna." Summit (Calif., USA), October-1966, p. 6-15.

一九六四年秋に、ヒドン・バレイに入って、いくつかの六○○○メートル峯にのぼり、そのあとアンナブルナ山群を一周した。

- Do; "The Thak Khola Region of Nepal." Summit, March-1967, p. 8-13.
- 7 Charles H. Bell; "Himalayan Trek." Summit, September-1966, p. 12—21
- 『山岳』第六十一年・一九六六年・一〇九頁の地図。
- Günter Hauser; Eisgipfel und Goldpagoden, Expedition ins Königreich Nepal. München, 1966
- D. A. Messerschmidt; "Trekking around Annapurna." Summit, October-1966, p. 8

(100)

Ш

美な姿となったが、

アルプス山麓における近代のピッケルは、

も彼を援け彼とともにつつましく登りつづけたピッケルは、

山の道具類の中に、すぐれた記録や名著にもうかがえない、

杖を生み、氷斧が登攀を援けて百年あまり、ピッケルは登山の歴史とともに歩み、ともに生きて、今日にみる整正優

かつては単なる足場切りの手斧であったが、

登山が

[の道具類の中に、ピッケルという雪と氷に対する至極便利な道具が作り出された。その時代にふさわ

生きた

「記録」

を読み取ることができる。

Ш 内 יי ケ ル 抄 録

熟視することによって、 登山の歴史の影絵でもあるし、 であったし、またこの道具類を通じて登山は徐々に進歩していった。 な言葉と、文字による「登山」の再現でしかない。 登る行為を、 の手足の延長としての道具類は、その時代に生きた人類の思惟と行動を、 積極的に援け、 登られた山についての認識はさらに深まり、 安全にしかも確実に押し進めてくれたものは、 登山の側面史でもある。 山を語る場合、その登山を援けた道具類の、 山が語られ、 愛着はたち難くなる。こうした意味から、 したがって、山の道具類の生きてきた道程 記録は綴られてはきたが、 必要に迫られて考えられた山の道具類 化石の標本以上に教えてくれる。 平 柳 所詮、 化石としての標本を それは不完全 郎 は Ш

人間

(101)

アルプス黄金時代の終焉を契機としてはなばなしく開

花し、より困難な登攀の補助手段として積極的に機能性が追求され、 幾百の議論と試錬を経てようやくエルクが生ま

れ、シェンクが鍛えられていった。

は作られるべくして作られ、山は登られるべくして登られて、 一本のシェンクにまつわる登攀の記録も、川のながれの一掬にひとしく、雪と氷への憧憬の過程に、 登山の歴史は今日に至った。 名作

に著しい進歩をみたためであり、 たればこそである。 うともしないが、その所以は、積極果敢な登攀の補助手段として、さらに安全確実な確保の用具として、氷雪に耐え っった。 ルプス山麓にエルクが生まれ、 言葉を換えれば、材質的には、 型状的には、より合理性を求めた結果、 シェンクが作られ、ウイリッシュが鍛えられて、今なお、 当時、従来の鍛鉄に代えて炭素鋼を用い、 単純でしかも豪快優美な姿が創り出されて 鍛錬、 **嘖嘖たる名声は衰えよ** 焼入れ、 焼戻し

れ のものとなすに至った。 大正末葉の頃、 工 ルクにはげまされて、 あたかも彼等が、 日本の仙台にようやく山内作ピッケルが、シェンクやベント(初代初期作) やがて、彼等に追いつき、追い越して、独自の山内作を創り出し、 彼等の作を確乎不動のものとしたように、 山内はシェンクにならい、 の型状を基本に鍛えら ついにその名を不朽 ベントに教えら

その滅失数はおそらく全作品の三割にも及ぶであろう。 は、 またその解釈に誤りのあることを恐れるものである。 蒐集した山内作の資料を分析し、 山内作が全き姿で保存され、遺されることを希わなければならないほど、数多く戦火に失い、 類推して、 ひとつの解釈を試みなければならないことを、 そのため、こうした空白を類推解釈しなければならないし、 私は残念に思う。 雪崩に呑まれて、

したがって、ここではできるだけ資料の分類を主眼として、山内作の現存資料を熟視したいと思うのである。

試 作 時 代

大正十三年、山内東一郎は、ピッケルの試作に手をそめはじめた。

た 持って来て自慢して見せた。 を経ていたが、 東北帝大金属材料研究所の鍛造工場において、彼は試作研究用機具の鍛造、 ある時、 鉱物の実験室で、採鉱用ハンマーを修理していた折り、山へ行く人達が、外国のピッケル 山内は、 ひどくそれにひきつけられたし、 また横目でにらむほどの敵愾心も湧き起 熱処理等の仕事に従事してすでに数年

になった。彼には、 ことは、きわめて自然のなりゆきであった。仕事の合間に図面を引き、材料を選んで、さまざまな議論を重ねるよう こうした人達が、 生命を托す最上の同行者であることを彼は熱心に聴いた。 初めて目にする風変りな鶴嘴である。 腕のたつ山内にピッケルを鍛えてもらおうとして、 雪と氷の山へ登るのに、どうしてもこの道具が必要である アルプスのなだたる名匠の話に花を咲かせた

内ピッケル鍛造の発端になったことは、周知の通りである。 した。西岡氏は立上氏を介して、山内へ宛てて代表的な外国のピッケルを、サンプルとして何本か送った。これが山 この大正の末、 山に熱中した立上秀二氏が、大阪の好日山荘の西岡一雄氏に、 金研でのこうした動静をつぶさに話

物ばかりであった。 当時、すでに我国でも模作のピッケルは作られていたが、すべて鍛鉄であって氷を打つと、(註1) へなへな曲がるような

(注1) 著者が使われている鍛鉄という言葉が、半溶融状態で精錬された、いわゆる錬鉄と同じ意味で使われているのであれば、 ある。従って、当時の街の鍛冶屋といえども、その粗材は殆んど平炉製鋼法による炭素鋼材を購入して使っていた訳で、著者のいわれるよう に一○○年以前であり、大正年間には、それより更に進歩した平炉製鋼による鋼材が、官営八幡製鉄所においても多量に製造されていた筈で とは云えぬが稍々不適当であろう。前記錬鉄にとって替って、溶融精錬による鋼材が出現したのは、ベッセマー鋼によって知られる通り、既 この用語は間違い

のは当らないと思う。最近、私は四十数年前の平炉鋼を調べる機会があったが、特に現代の鋼材と著しい差異は認められなかった。 に、へなへな曲がったというのは、材料の選択を誤ったか、適切な熱処理法を知らなかったことに起因するもので、鍛鉄であったからという

P ウフの名をつらね、 していた これらの名作に刺戟されたかのように、国内でもようやく氷斧製作の機運はたかまり、その揺籃時代を迎えようと ベントも輸入され、日本の山岳に試されて、その個性ゆたかな業物に、 方、アルプス山麓で鍛えられた名作は、続々と我国へ紹介され、 山内が試作打槌にはげんだ大正十三年までには、シェンクも、ヘスラーも、 大正初期には、 人はみな瞠目していたのである。 フリッツ、 そしてウイリッシュ エルク、 ヒュ ップハ

自分の意に従っての作品の製作は、 基礎工具類の製作にとどまり、一つの作品に対する彼自身の意志や希望は消え去って、その敏腕だけが必要とされ うやく製作上の苦悩が生じて来たためであった。研究所における作業は、 大正十五年、山内は惜しまれながら金研を去った。それは、金研に勤めること十年にして、 望むべくもなかったからである。 当然のことながら、 山内の心の中にも、よ 試作研究のためだけの

打槌、 山内は、金研にほど近い片平丁に、山内鉄工所を開き、ささやかながらも金床を設け、フイゴを据付けて、 熱処理等に必要な道具作りから始め、金研の下請工場をもかねながら、独立した仕事場を持つに至った。

返し、繰り返しながらも、ピッケルに対する心の傾きを、彼はどうすることもできなかった。 や鋼の色が、自分が今日まで魂をうち込んではげんだ刃物類よりも、なにか神秘的な訴えを持つことを覚えて、やり 当時、 彼の仕事は、 金研の下請仕事の外に、農業、林業関係の刃物作りであったが、ピッケルの持つあの優美な姿

三年以来西岡氏を通じて試作し、その成果があったればこそ、その自信と腕とに裏うちされて、良心的なピッケルを 頼が十本程 昭和二年、ピッケルの試作は遅足ながら進んでいた。この年にはいって、東北帝大山岳部から、ピッケル鍛造の依 あった。 山内が、 試作時代、本腰を入れてピッケルを鍛えるようになった契機であるが、

製作鍛造面では金研の本多光太郎博士、

桝田定司氏等の指導のもとに、

販売面では立上秀二氏の支援を

山岳部へ納めることができたのである。

通り火花が散 15 ケル にはすま 昭 材につい 和 三年 は、 よない 一四月、 ての専門的指導を受持ち、さまざまの面から工夫改善の助言をなした。 スイス物の模作にすぎなかったため、 V b 八高を経て東北帝大へ入った桝田定司氏は、 ば、 金研の魂にも似た原動力が、 さらに優れたものを作り出そうとして、 教え、 教わる者の全身に脈々と流れて、その一打一槌にも文字 金研で山内の人柄と腕とを識った。 何物をも自力で完全に作り上げず ピッケルの力学的 山岳部 納 めたピ

た の前に、 要性について一夜考えあぐねたり、 手によってさまざまに分解された。 たすら、 作時 見本はこのように分解され、試されて、名作と言われるピッケルの、 代 工 ルクやシェンクやベントにならい、 0 Ш 日内作は、 銘を切るほどに気負ったものでは シャフト取付けの穴の位置の狂いを発見して発奮したり、 万力に挟んでピックを曲げたり折ったり、 それに追いつくことに努力を注いだ。こうした名作の見本 なかかっ たし、 また彼には生涯そんな衒い 力の限界を識ることに山 やがておとずれる山内ピ シェンクの頭抜 は な [内は我を忘れ 9 カン 4 0 ル た。 かきの 0 Ш 作風 内 唯 必 N

試作 に L 謂 たにせよ、 かし、 無 試作時 b ば 0 せられ、 名作 前期を経 金研 代 所詮山内という根っからの職人が、 0 0 山 鋼と血みどろになって苦闘し、鋼に生きる喜びを全身全霊に感じながら鎌や鉈を鍛えていたが、 時代に鋼を扱い、 型を模しながらも、 て、 内の作風は、 ようやく独自の領域をうち拓いてゆくことは、 型の上ではエルクあり、 鋼に親しんだ山内は、 それらを分解し、 その気質に生涯はげんだからであることを否むわけには 組立てて、 さらにそれ以前、 シェンクあり、 先人の鍛えたピッケルの真髄を探ることに終始 蓋し偶然では ベントあり、 青森の故郷で鍛冶屋の徒弟として、 なか いずれ 0 た。 も模作の域を出 そこに 金研 の権 ゆ か 鋼の な 威 Щ から 神秘 内が た。 あ

得て、 昭和三年、 山内の鍛えるピッケルを、 西岡氏は全部引受け、一手に捌くようになった。 山内作は、 シェ ンクや

ウイリッシュやベントと同じく、好日山荘において、 山の道具の仲間入りをした。

試作時代後期は、 型の上からは、 山内の特徴が歴然と認められる。 それは、 エル クにもシェンクにもベントにも

かった、 桝田氏は、 山内の全作品に共通する顕著な特徴である。 すでに炭素鋼以上の鋼材として、 ニッケル ・クローム合金鋼の応用を考えていたが、 鍛えやすい炭素鋼

てなされたのである。

で基礎を作り、

スイス物に対して少しの遜色も感じない、

山内作の個性と合理的型状の追求が、材質の改良に先んじ

形をなしていること。 として表現された、 ていること。第二は、 と鍛えられていること。これは、第二の特徴に記したピックの断面の梯形に関連していて、そうしなければならない までの名作にみられる半円状の重々しい型に変って、ピラミッド型となり、 の氷雪の抵抗を高めることになる。これらはいずれも、 III 「内作の特徴の第一は、 彼独自の特色である。第三は、ピックとブレードの接する、 これは折れず曲がらずの工夫と、 ピックの厚さが上部と下部とを比較すると、 頭部に対するフィンガーの付根が丸味を帯び、 金研での桝田氏の力学的指導と、鋼の性質を呑み込んだ結果 ピッケルの軽量化を意図したもので、 下部は約二ミリ程上部より厚さを増し、 鋼の低温における脆性を考慮して鍛えられ 頭部上端は鋭く、 シャフト延長上の頭部の凸 下端は緩やかに、 結果として滑落停止時 断 面 は梯

では、 総じて観察すると、型状では試作時代初期のブレ むしろ曲線にうつり、 名作からの脱皮は、 初期作銀杏型にみられるように、 型の上からではなく、 ードの扇型は、 むしろ、 山内作の個性が著しく現われ、 シェンクやベントの直線を取入れたが、 鋼の性質とそれを合理的に工夫する内的な追求 きわめて流動的 後期の作

美しさをくみとることができる。

が

結果として山内作の特色をうき彫りにした。

これ

ら試作時代の山内作は、

昭和八年頃まで、

初期作ピッケルと共に販売された模様で、昭和八年『ケルン』

ついては、 は焼入硬化されにくく、ピッケルとしての本来の目的は全く果たせないものであった。 用いられた材質は炭素鋼であった。まだ鍛鉄といって炭素量〇・三%以下の軟鋼が使用されていた時代だが、(注3) 一般にある種の誤解があるのではないかと思う。 それは、 山内作即ち特殊鋼と考えられることである。 山内が炭素鋼を用いたことに

記の通り、

初期作銀杏型時代に材質の改良はなされた。

デン、タングステン、多量のマンガン等を加えたものを、合金鋼、又は特殊鋼とよぶ。(村木注: 燐、硫黄の他、特になにも加えないで、炭素量のみで材質の調整を行なったものを炭素鋼、又は普通鋼とよび、 を境として、それより炭素量の少ないものを鉄、それより炭素量の多いものを鋼とよぶ。そして、精錬時に必然的に加わる珪素、)鍛鉄については(注1)を参照されたい。なお鉄と鋼との区別は、材料中の炭素量の大小によって行なわれる。一般に炭素量○・○三五% クローム、ニッケル、モリプ

たがって山内作は、炭素鋼で試作時代を経過し、 この間一作毎に鍛造、 焼入れ、 焼戻しに金研の指導と独自

究が加えられ、特殊鋼への足がかりを築いていった。

して、大正十三年から昭和三年までの試作無銘時代の五年間、 とが、その番号と年紀からうかがえるが、試作時代はもっと僅少であったと想像される。 できる。昭和七年までは、徒弟も置かず、山内自身一人で鍛え、一人で仕上げていたが、年間約二十本鍛えていたこ 鍛造数はきわめて少なく、試作時代の本数は不詳であるが、有銘年紀入りの初期作初期の傾向から逆算することが 鍛えた数は百本でしかない。 仮に年間二十本鍛造したと

炭素鋼で鍛えられ た無銘無番の山内作は、こうして西岡氏の好日山荘に引取られて、 シェンクやウイリッシュやベ

ントと共に、山の道具の仲間入りをして、岳界に迎えられていった。

され、 内作ピッケルは氷雪に試され、 III 内作一号(写真)の製作年代を昭和三年と考えることには相当の無理がある。 有銘山内作一号が生まれるが、これは、 山の道具として商品化されてゆくが、間もなくその作の良心的ゆえに、広く岳人に愛 昭和四年後期の、初期作銀杏型の炭素鋼であると推論できる。 この試作時代の末頃、ようやく山

五号

に ニッケル ・クローム鋼と並んで、 並鋼 (炭素鋼=筆者注)として、 その価格が記されていることも興味深い。

初 期 作

後のことである。 たのは、 昭和三年、 好日山荘で、試作時代のピッケルが多少捌けたし、またその評価も悪くはなかった。 商品としての山内作が、 山内は金研下請の諸道具作りと一般刃物類の鍛造に加えて、ピッケルの製作を本格的に始めた。 自らの作品に責任を持つということで、 商品として価値づけられてから一年あまり 山内の銘を入れるようになっ

一初期作銀杏型一

は正確に表現され、 を用いていたため肉置きは堅固で、第一作にふさわしくきわめて丁寧に仕上げられている。 山 内作一号から、 掲載第一号写真からもそれが看取される。 初期作時代が始まると私は考える。それは、昭和四年後半の頃で、銀杏型に属し、材質は炭素鋼 前記山内作の三つの特徴

めた。 と刻まれている。 銘はアルファベットの刻印を組んで、表には三行に MADE BY YAMAUCHI SENDAI と記し、 (銘のヤマウチは誤りで、ヤマノウチが固有名詞として正しいことを、私は山内氏自身からたしか 裏には

ム鋼が、 東京工大出身、昭和六年作四八号所持)や、その他の人によって部分的に確かめられた事柄を綜合すると、 ついての考証は後記の通り、 この横文字の銘は、 昭和五年二五番前後から用いられ、すでにタガネ銘であったことが明らかとなった。 恐らく二十本を出なかったのではないかと思われる。 山内と桝田氏とのくしき邂逅を見逃すわけにはゆかない。 それについては、 特殊鋼の昭和 前沢秋彦氏(船橋在住、 ニッケル・クロ Ŧi.

の銀杏型は、

昭和四年から同七年の六〇番前後まで続き、材質的には、炭素鋼からニッケル・クローム鋼へと進

III

内作の年紀と番号からみると、

その概数は昭和四年第一

号から約十本、

同

五年は約二十本、

同六年二十

むが、 和久田弘一氏指導による、 昭和六年ニッケル・クローム・モリブデン鋼の門田作第一号との関連も見落

って、今冬(昭和七年一月頃、 さらに西岡氏の筆により、 「アイスピッケルの材質に就て」(『RCC報告』五号)によって広く岳界に識られた重要な時代である。 『RCC報告』 五号によって、山内作にニッケル・クローム鋼が使用されたことが判明するが、この 筆者注)穂高にて証明された。 「このニッケル・クローム鋼の秀抜なることは、已に已に我国のアカデミーの 云々」によって初めて活字となり、つづいて、 桝田定司氏 五号は、 によ

思われる。 帝大卒業直前 左袒しがたい。その論文は、特殊鋼ですでに数本鍛えられた時点に書かれたもので、恐らく昭和六年、 Ļ よりその化学分析が発表されたが、何故に、 その奥付をみると昭和七年十二月末の発行である。昭和五年後期に鍛えられたこの記念すべきピッケルは、 五号掲載のゆえに、 の執筆になるものと推察されるし、 特殊鋼を用いた時期が多少遅れて、 同報告四号(昭和六年三月末発行)に掲載されなかったかという疑 したがって『RCC報告』四号はすでに上梓される間際であっ 昭和六年作の三十番代とする考えもあるが、 桝田氏が東北 私はそ 問 桝田氏に が ?残る

炭素鋼で鍛えた作品 的に開始したが、 岡 氏 0 『登山 桝田氏は昭和三年に東北帝大へ入学し、 の小史と用具の変遷』によれば、 好日山荘で商品として扱った時点と考えるのが至当であろう。 仙台山内は昭和三年、 和久田氏は同四年、 札幌門田は同四年にピッケル 北大予科二年に在学していて、 の鍛造を本格

代 年に二十本、 番 から、 田の頃、 すでに銀杏型から琴柱型へと移っていたのである。 岳界は二五番代を偲んで、 合計七十本程を四年の間に鍛えている。 山内作 0 画期的研究に喝采を送ったことだろう。 『RCC報告』五号は昭和七年末の上梓であるから、 この銀杏型は、 第一号の堅固さに較べて、 しかし、 この山 特殊鋼を用 内作は六十番 Ш 内 作

るようになった昭和五年後半から軽量化され、 れる。銘は、 仙台山内作以外に、ピックの表または裏に、刻印の写真にみられるように、 GRAN DIOSE のマーク 写真四八号にみられるように、ブレードの型状に多少の変化が感じら

を十数本数えることができる。

言うより、むしろ内的な鍛造技術の研究の成果の上に、世界で初のニッケル・クローム合金鋼を用いて、山内作が鍛 れるような、エルクやシェンクやベントの型を脱皮して、ここには山内作の個性が歴然と芽生え、型の上での独創 え上げられた。こうした材質の特性が、山内作の型状に変化をあたえ、特殊鋼の扱い難さが、さらに研究を促して、 総じて、この時期に鍛えられた銀杏型は、前期試作時代後期の延長と考えられる。しかし、試作時代初期作にみら

次の琴柱型へと進む。

性という特殊な現象があって、ピッケルにその機械的性質を完全に具備させるためには、金研のすぐれた指導と、 特殊鋼としてのニッケル・クローム合金鋼は、炭素鋼に較べて機械的性質は数等優れているが、鍛造面では焼戻脆 Ш

内という鍛造工の桁外れの腕とが相俟って、はじめてなし遂げられた偉業である。

(注3) 焼戻脆性は鍛造には関係なく、成形後、焼入れ、焼戻しの熱処理を行なう際に影響する性質である。炭素鋼の場合は焼戻しの進むにつれて よって、この性質は改善される。 なく、この知識は既に一九○○年頃クルップ工場で実施されていた。更にニッケル・クローム鋼にタングステン、モリブデンを加えることに ている。これは焼戻し後、急冷すれば容易に防げることで、ピッケルのような小物の熱処理の場合、焼戻脆性を防ぐことはさほど困難では 靱性が増すが、ニッケル・クローム鋼の場合は四五○~六○○度で焼戻し後、徐冷すると却って脆くなる性質があり、これを焼戻脆性といっ (村木注

初期作琴柱型

ブレ

えた時期でもある。

この時代は、 昭和八年頃から、 山内は自分の腕に自信を持ち、 ードの型は初期作銀杏型から琴柱型へと移る。 自作のピッケルに誇りと愛着とを感じて、本業をピッケル一筋に置換

六十番代後半からと推定され

前掲引用文中「漸く」と「殊に」について、

この昭和八年から中期作の同十三年頃まで、寡作の山内としては信じられないほど多くを鍛えた。 和八年か 片平丁の 大町の山内としてその名を世界に馳せ、 6 新 工場はようやく手狭となり、 居 の鉄工所で、 一人の徒弟を相手に(「アイスピッケルを讃ふ」一西岡一雄 七年の間鉄槌とともに住みなれたこの借家から、 やがて昭和三十七年二月、この住まいを去ることになるが、 -昭和八年) 年間百本余りを鍛えるが 山内は、 大町 一丁目 Щ に移り 内は 昭

ぶりが高く評価された。フィンガーの尖端が丸留めから三角留めに移るのもこの時期であり、 にニッケル・クローム・モリブデン鋼へと移り、 n 型は、 る。 琴柱型としては、 琴糸を支える琴柱に似て鋭く、一尺一寸の雄豪なものも鍛えられ、 昭和八年から同十一年の四年間、 Щ 内作の初期の傑出した姿として、 六百五十番前後まで鍛えられ、 材質は、 西岡一雄氏等によってその名作 ニッケル・クロー その概数は四百本余りと考えら 番号の 「四」を欠番と ム鋼からさら

りとをこめて、 昭和九年に上梓された『泉を聴く』を開くと、 等に掲 成載され 昭和八年『ケルン』二号に「ピッケルの常識」と題して次のような一文を寄せている。 たものを集録したものだが、 山内作に関する四章を、そこに拾うことができる。 前記銀杏型及び琴柱型の山内作に関し、 西岡 氏は、 これ 喜びと期待と祈 雑誌

たのもこの年代からであった。

れ 殊にニッ 独り我国 4 [仙台の△山内作>札幌の△門田作>が漸く特殊鋼に手をつけ成功した位……。 ル クロー - ム鋼のものは断然外国品を圧 していると思う。 Щ 内 門田 作 は形にも優

その内容を明らかにしたい。

ケル に応用したことを指し、 前記 の通り昭和五年後半に至り、 金研の支援や桝田氏の指導によって、 従来の炭素鋼に取って代って、 この偉業はなし遂げられ ニッケル ・クロ 1 ム鋼

殊に」は文意を裏返して考えると興味深いものとなる。

当時、

店頭にはまだ試作時代のものや、

初期作銀杏型の

炭素鋼のピッケルが若干在庫されていて、 それが 昭 八年の頃であったから、 山内や門田の特殊鋼のピッケルとともに、 商品化された試作時代の山内作は、 飛ぶようには捌けなかったし、また 売られていたことを示してい

これが当時の日本の、山に対する動静であったと理解できる。

十本を鍛え、考えに考え、 と考えられるが、 昭和八年作のものでは、 詳らかでない。 迷いに迷った山内であってみれば、 私は七一番から一六三番までのものを確認している。その前後にまだ若干の八年作がある この琴柱型は、はたして山内自身の独創であったろうか。 次のより合理的型状については、様々な思索に悩んで 銀杏型の時代に年間

やり返し、くり返して何ものかを求めていた彼が、 さすが逸品の名にはじない。 して、多少考えないわけにはゆかないだろう。 昭和六年頃、三越百貨店でビョルンシュタットを輸入した。型は琴柱型に似て、 山内の琴柱型が、年代的にはビヨルンシュタットの後に作られたものであって 銀杏型の反動としての琴柱型への移行を、 奔放なあふれるばかりの力感は 前記ピッケル 4 の影響と

ばしりのように、 の胎動を、 遺された作品は語ってくれる。写真の一六三番と、 この琴柱型の時代にあって、 すでにこの期に認めることができよう。 扇型を鍛え、 うち沈んで琴柱に戻り、 山内はさらに次に来る型状について考え、 昭和九年作二九五番は、 またふと扇型を手がけては琴柱にかえる。 琴柱型時代の扇型であり、 思いあぐね、 ある時は青 こんな彼 中期作 の苦悩 0 ほ

ツ は かをこの店に頒けた。 この昭和八年頃は、 日 ュ材を、 本橋の川口銃砲店が輸入したテント、 海野氏が心をこめてけずり付けたり、思えばのどかな時代でもあった。 頭部と石突だけのものに、客自身がシャフトを取付けたり、またバット材として輸入されたア 好日山荘が神田小川町にあった頃で、 ザック類を登山用に捌いていたが、その見返りとして、 多くは 海野治良氏を通じて山内作を求めた。 この頃の石突部は、 仙台物のいくつ ハーネスが 好日山 荘

ため、百五十番頃から、年紀は番号の下に切られるようになった。 の下に製作番号が入っていたが、 銘について考えると、百番頃まで「仙台」の上に年紀を切っていたが、その後「山内作」 例えば、 昭八一二四のように、 昭和八年一二四番と理解するのに多少困難を感じる の下に年紀が切られ、

ュピッツェに較べて三割方長かった。

る。 れ ようになった。それは、 Ш 「巨人」のマークは刻印が破損して、使用不能になっていたが、 これらのマークは、 西岡氏が大阪で作ったものである。 [荘マークの名で呼ばれたが、 刻印写真にみられるように、横二五ミリ、 前者は中村勝郎氏により、 この刻印のある山内作は、 後者は 沢村寅雄氏(『泉を聴く』の装幀者) 海野氏によると十本程度しか 縦十ミリの矩形の中に、 百番代に至って、 別の新しいマークが 出なかったと言われてい の手によってデザインさ 独語で材質が記され、 用 いられ る

間、 作 かったが、 いてであった。まず、昭和八年末の一六三番頃までは、フィンガーは丸留めで、名作シェンクと同じく何の工夫もな の終りまで続き、 昭和九年初頭、 一九三番では三角留めに移り、それが砥ぎすまされた槍の穂先のように鋭く変る。この鋭利な三角留めは、 昭和九年初めの一八六番には、 山内作には大きな変化があった。それは、ピックでもブレードでもなく、 中期作扇型の時代に、今日にみる尖端の美しい三角留めに落ちつく。 尖端部に先細りの傾向が現われ、 見初代門田作のそれに似て、 フィンガーの尖端部 次の ti

四番 るようになっ rIi の番号が、 内作には たのは、 四四 山内自身というより、 は欠番とされているが、 恐らく三百番以降の昭和十年からではないかと想像される。 むしろ好日山荘の客筋から敬遠され、 初期作琴柱型の初めまでは「四」の字は用いられてい 空番になっていたが、「四」を欠番にす た。 四四四 四

相当の無理がかかることになる。 それは山 「内作の鍛造本数と、年紀の関係から推察して、仮に、 山内作は昭和十一、二年の作品にはほとんど年紀入り作品から逆算して、三百番代 四、四十、 四百番が作られていたとすると、

以降の「四」番を考えることは、難しく思われる。

ここでは一応三百番代より「四」番を欠番と考え、 以後の研究に俟つことにし、 山内作の鍛造数の試算も、 後記の

通り右の基準に従うことにする。

内独自の野心作ということで、これがその後の扇型に甚大な影響を与えたことは、蓋し当然の成行きであった。 は、 番 った曲線美が極めて強くうち出され、 フィンガーも二十センチ、 ケラ首も六センチと 法外に長く、 一尺一寸の業物 3の山内スペシャルである。形状は円弧を画いてピックからブレードに流れ、直線的な琴柱型には考えられもしなか 昭和九年後期、 直線的にブレードを囲んで扇型に纒められている。スペシャルとは大振りの謂ではなく、合理的に研究された山 従来の研究をさらに深めた独創的研究として、三本の山内作を試作した。その一作が、 前記二九五

すっきりした組合せのブレードは、何かその接点がやわらいで総体的に曲線を感じるようになる。足立源 五三六番が、氏の著書の表紙に写されているように、 その後山内作は、平穏な琴柱型に戻るが、一年を経た五百番頃から、琴柱型の変型に移り、今までの直線と曲 琴柱型変型の姿であり、 写真五五八番にみる 型状に移ってゆ 郎 伯 0 0

り、うち振ってみたい衝動を抑えることに苦労する。 のそれに似て、整正としたカーブを画き、ピックの付根には縹渺たる余裕を残し、一度手にたずさえて一振り、二振 しかしながら、そのピックの形を取上げてみると、 琴柱型時代の直線的な型状ではなく、すでに完成に近い中期作

く

えたいし、 である。 この琴柱型変型は、 またそれ故に、 前記琴柱型時代扇型の伏線と併せて、 型状の激変を通じて琴柱から扇型への突然の脱皮を、 山内作がいよいよ完成される中期作 単に誣説とするわけにはゆかないの への飛躍 の苦悩と考

材質的には、 この琴柱型時代に、 ニッケル・クローム鋼からさらにニッケル・クローム・モリブデン鋼 へ移ったこ る。

目の説は、

とが考えられるが、その時点については不明である。

は除去され、 説によれば、 靱性が増したといわれているが、 山内作ニッケル・クローム鋼は、 前述、 昭和八年作一四三番からモリブデンが加えられ、 ニッケル・クロームのマークを一八六番に見ることができるた

一応、この説には首肯し難いものもある。

られる。 に一本程度の打刻であってみれば、 る。 しかし、このマークは、 連続打刻のマークであれば、材質の改良とともに、その表示するマークも改められるだろうが、百番代に、 海野氏の説では注文者の希望により、 かりに材質の改良がなされた後にも、 十本程度しか打刻しなかったということが問題にな 不用意に打刻されたこともありうると考え

て、次の三説を掲げたい。 柄でもある。 山内作が、 何番からニッケル・クローム・モリブデン鋼に改められたかについては、興味をそそられるし、 したがって、一本一本材質の分析を試みれば、 その回答も自ら明らかとなるが、 ここでは 仮説とし 重要な

台二百番以降説 一四三番以降説 (昭和九年 (昭和 八年

(三百番以降説 (昭和十年)

てあれば、 この付については前記の通りであるが、 多少修正されなければならないし、 最後の打刻を以って ニッケル・クローム 鋼材の終焉と見做そうとす 台の説は、二百番以降の作品に、 ニッケル・クローム鋼のマークが打刻し

前記山内スペシャルをニッケル・クローム鋼と記しているためで

あり、 ると見做す考えである。 それを契機に、 東海大学工学部教授の吉田元氏が、 以後の山内作は鍛造上の研究も著しかったため、仮説として三百番代からモリブデンを含有す

Ш 「内は、直接には札幌門田との交渉はなかったが、 両者はその作品を通じ、 好日山荘を舞台に大いに影響があった

と推察される

これは 重ね、 就て」によって、 初代門田作は、 昭和六年、 『北大山岳部々報』四号(昭和八年十月発行)に掲げた氏の「アイス・ピッケル及びシュタイグアイゼンの材質に ひろく世に識られた。 彼が北大一年の時に、ニッケル・クローム・モリブデン鋼を用いて門田作第一号を完成させたが、 山内作にならぶ逸品である。 和久田弘一氏が北大予科生の頃、 門田直馬を指導し、 炭素鋼で試作を

をつくした 山内作は、 ニッケル・クローム鋼で世界に先馳けたが、続く門田作は、 さらにモリブデンを加えて材質の向上に意

こうした経緯を考えるとき、 私は仮説日の昭和八年説にこころが傾くのである。

中期作

氷の青春を懐古することだろう。 登山者は、初期作をさして山内の姿といい、 人は、山内ピッケルの姿を問われた時、 誰しも愛蔵するその作品を以って、これに答えるだろう。 戦雲の巷に山を想い続けた人々は、 中期作にその真髄を見出して、 旧きよき時代の

裏返しでもなかった。真実、彼はそのように信じていたため、 山内自身、自分の意にかなったピッケルを打つことができなかったと述懐しているが、これは謙遜でも、 珠玉の作品を遺すことが可能となった。 またその

中期作には、 このような力強さを、どうして作りえたのかと今さらながら、その造形のすばらしさに息をのむ。 力にみちあふれた整正雄渾の作品が、 数多く鍛えられ、ピッケルという山の道具に、

昭和十二年頃から、 型は扇型へ移った。六百数十番の作品からと推察される。 ブレードの形が、 二等辺の三角型を

して世俗的な迷いを拭いさった。

尺一寸物が大勢を占めるに至った。 なし、 前期琴柱型時代扇型にみられる直線が、 この中期作の本流をなし、 前期のそれよりも一層大振りになって、

写真七一三番にみられる姿が、 中期作の代表的なものであり、 材質、 鍛錬、 熱処理、 型状及び作品 傾けた彼の情

熱等、確乎不動の山内作として、噴噴たる名声をこの中期作においてうちたててゆく。

を紹介し、 思えば、 その中に左の一文を草している。 山内に対する叱咤激励もすでに『山岳』に拾うことができる。 第二九年三号に、 額田敏氏は

眺めて、それが幾度かの登山で、働ける数々の光輝ある歴史を所有者に連想せしむるに充分なる資格あらしめよ。」 質に於て作るべく努力せんことを夢め怠る勿れ。そして著者と同じく、 とげられた。 前記 作者山内氏よ、 『山岳』 は昭和九年の発行である。 西岡氏がここにかかげる一文にそむかざる作品を、 山内ピッケルに対する額田氏の激励は、 壁間にこの逸品が燭火に燦然と光芒を放つを より優秀なる逸品を、 初期作後期において、 その型に於て、 見事になし

昭和十一 年、 立大山岳部のナンダ・コット登攀に、 山内作を携え、 その真価はヒマラヤの蒼氷に試されて、

助を担うに至った。

郎の一身に属し、 であって、 日々もまた多かった。そしてこの頃、父親として一つの結論を持つようになった。それは、 わりなく、 かし山内は、 自分の心を鏡に作品に対する不満とたたかい、 血筋であっても技術の伝授は不可能であり、 山内以前にそれはなく、 自分を熟知していた。名声も納得のいくものであれば素直に受入れていたが、こうした世 また死後にその技術を遺すべくもない。 作品の形態は真似られても、 工夫を重ねて、妻女の苦労も知らぬげに、 このようにして山内は、 理論以上の何もの 自分の技術は一代かぎり 徒過して鍛えぬ かは 四七歳に Ш 内東一 か

この年、 日支事変が勃発し、やがて金研でも一人また一人応召して、山内がかつて退職した折り、 金研に推薦した

敏腕の職人も召されていった。このため恩師本多博士の熱望もたち難く、 日中は金研の仕事に従事し、 夜の仕事場で

ピッケルを鍛え、アイゼンを打ち、ハンマーやハーケンを作った。 乏し、ニッケル貨は鋳られて武器となり、ピッケルの鋼材は払底した。やがてピッケルの輸入は禁じられ、 この傾向が顕著に作品数に影響を及ぼすようになったのは、 山内はしかしピッケルの鍛造を止めなかった。 昭和十四年頃からである。 戦雲は急をつげ、

すら禁止の運命をたどるが、 山内のために廃物の自動車を分解し、そのクランク・シャフトをせっせと蒐めて、 山内

、送った。クランク・シャフトの材質は、特殊鋼であるためピッケル鋼材としては秀抜であり、主としてその成分は

山内の製作を援けるに、こうした海野氏の蔭の力添えを忘れること

東京好日山荘の海野氏は、

ーム・モリブデン合金鋼のものが多かった。

らうか がい知れ 廃品による山内作は、 昭和十五年頃から敗戦に至るまで、約百本鍛えられたことが、 その年紀番号等 か

昭和二十年七月十日、 仙台市は戦火に焼かれ、 大町の山内鉄工所は灰燼に帰した。 山内中期作の終焉を、 私はこの

期 元成求めたい。

ほぼ直角をなし、 ながらも、 ·期の山内作は、ブレードの形からみれば三変している。当初は、扇型の直線が鋭く走って、力というものを訴え ピックからブレードへ流れる円弧は、 日本の山岳に適した大きなブレードの秀逸さが特筆されよう。 いかにも安定していて、その両端を結ぶ直線は、 大振りの業物ではあるが、

ピックをかたちづくる曲線は、 さながら鎌倉期の太刀を想わせ、 透徹した鋼の色は青い空を映して冴えわたり、 流

0

肉がきわめて薄く鍛えられ、うち振る腕にさほどの重さを訴えない。

111

内は、

中期作後期に至って、

とができよう。

氷雪を打砕く素朴な山の道具であったことを理解し、納得するのに、 一の一閃を想わせる焼刃の匂いは、 ふかぶかと走って、日がな一日眺めても飽きることを知らない。そしてこれが、 ある種のとまどいと、 暫時のためらいとを感ぜ

ずにはいられない。

リベットの上に切るようになっ H 第二第三リベットの間に、 八五〇番前後から、 た。 製作番号を切りつけていたが、この頃から仙台の銘を、 銘の位置に変化を生じた。 従来までは、 第一 第二リベットの 山内作 間 から切り離して、 に 仙 台 山 内作を切

始め、 流れて、ピックとブレードのバランスは、ピッケル全体で支えられ、中期作初期にみられる力量感は、 円熟した山内のおだやかな姿を、 影響を及ぼす。 この中期作中期の扇肩張型は、 -期作の第二の段階として、 扇肩張型へと進み、 しかし、これも徐々に緩やかに変って、昭和十八年には又扇型へ戻って第三の変態を終 昭和十五年頃の千百番前後に、 昭和十三年の中頃の千番前後から、 そこにみる思いがする。 ブレードの肉置きはやや厚味を増し、二等辺の直線は僅かではあるが曲線を含み、 最も強く張り出して、 ブレードの傾きに較べて、ピックはうつむきごころに下へ 今までの扇型はブレードの付根に僅 後期作の昭和二十七年以降の作品 なおそこに消 かに 肩 から

るにも惮ることの多い日 戦乱のさなかに鍛えられた寡作の時代であって、ピッケルはもとよりその製作も禁じられ、山へ入 々であっ

え残るが、むしろそのとどまるところをしらない力を抑えて、静かな境地を模索する後期作への一つの伏線とみるこ

に より意を注いだ結果に外ならなかったが、 とその付根に厚さを増し、ピックのながれにおだやかな曲線を認めることができる。 この期に至るまで、 山内作は幾度びその形態に悩んだことだろう。 山内としては力学的な形態

扇肩張型に訣別して、扇型へ戻る。型は、一見中期作初期の扇型にみえるが、

り返し、くり返して、 胸をかきむしりながら、やっと一つの型に到達し得た時、 そこから新たな苦悩が入道雲のよう

に湧き起って、終日、 フイゴの手を休めてしまう。

拓いてゆく

しかし、この後期に至って、尺物を主とした整正の山内作は、 全体としての纒まりに、 山内作独自の不動 の境地

べて消え去って、 森の都仙台が戦火に焼かれた昭和二十年、大町の山内鉄工所も灰となった。そして、今まで鍛えた作品の記録はす 一二三〇番代を以って中期作を終る。 残されたものは一握の灰と、佇立する赤茶けた鉄床だけだった。

期 作

後

作品は、

て素朴に、 とだろう。 思えば二十年前、 昭和二十年、 山内は、 「お国のために」ということを考え、 戦火と敗戦にうちひしがれた山内は、再び道具作りから出発しなければならなかった。 希望と不安に胸を躍らせ心をいためたあの頃の、若々しかった自分をどんなに懐しく反芻したこ すでに五十六歳に近かった。 実践した人である。 彼は仕事を通じ、 戦争を通して、ほかの誰よりも生真面目に、

第一主義を捨てて、採鉱用ハンマーの製作に主力を注ぎ、「お国のために」余生を貫こうとして、それを全うした人 うした意味での次元が違う。 である。極論すれば、採鉱用ハンマーの製作は、戦に敗れ、疲弊した山河の復興に役立てられるが、ピッケルは、こ 敗戦後の彼は、鍛冶工としての自分の使命に、 こうして彼は、ハンマーを本業に置き換え、ピッケルはあくまでも余技として考え、 彼の思想から一つの結論を導き出した。それは、今までのピッケル 埒

後期作は、 前期の扇型を踏襲しながら、昭和二十七年頃に至って、顕著に扇肩張型へと進み、 昭和四十年、二一八 へ押退けようと心がけた。

後期作扇型は、

る。 六番の最後作までこの傾向は続く。写真二一八二番は七百番代を再現したもので、 後期作の範疇に入らないものであ

である 和三十七年から石突の足が、 この 後期 作の特徴は、 銘が中期作までの仙台山内作にとって変って、 石突の三倍ほどの長さに伸ばされて、 シャフトの奥深くたたき込まれるようになること 仙台山内東一 郎作と名前まで切られ また昭

昭和三十五年頃から、 この傾向 に従って、 ピッケルの一般的傾向として、シャフトの丸味が、 山内作には次の二つの変化が認められ 従来の楕円から角張っ た楕円 に移っ

ていたが、 今までシャフトの断面 シャフトが正確に握りやすく、打撃効果がよいため、 「が楕円であったため、 フィンガーの厚みも丸く盛上げられ、 角張ったシャフトに変ってゆき、 特に中期作に独特の風 従ってフィンガ 格を添え

の肉置きも平面的になった。

が、 けないようになってゆく。シャフトが四角張った楕円だからということより、 111 たまたまシャフトの変形と時を同じくしたためであった。 内作のシャフトのリングは、 ステンレスで作られた風雅なものだが、シャフトの変形に従って、 むしろ長バンドを使うべきだとの主 山内はそれを付

た。そして昭和三十五年頃、 昭和八年頃 から、 山内は銅でリングを作っていた。それがステンレ 山内のリングは消えていった。 スに移ったのは、 昭和十五、 六年の頃からであ

頭部に接 中期作初期に似て、ピックとブレードの尖端を結ぶ線が、シャフトに対し直角に近くなる。 厳密には一二三〇番代から一三〇〇番代末頃まで続く。二等辺のブレードは比較的力強く、

のどん底にあえいでいた時代のため、 この 期の作は前期の延長であるが、 材質的には敗戦の影響を多分に受けて、 山内としては不本意にも、 全作品中、暗い谷間を彷徨う時代でもある。 あらゆる物資は欠乏し世をあげて苦難

十二、三年までのことである。

ば、ピッケルという、より人間的な道具を、 この期の作品は一見して判る。鋼に艶がなく黒ずんでみえ、 戦後の当時を偲んでみる時、 混乱のさなかで、生きることだけで精一杯だった非人間的な時代に、 山内はよくも鍛え、よくも作ってくれたと驚き、 材料の倹約から一尺物以下の小振りのものが多い。 かつ山内という人間

味を、つくづくとかみしめるのである。 になかったという。 欣然と笑みをうかべて、 訪れたが、その焼野原に佇んで、しばし茫然として彼の名を叫んだ時、穴の底からうすよごれた顔をひょいと出 とて見当らず、そのままあっさり仙台へ帰ってしまったとか……。 大町の彼の工場は焼け落ちて、防空壕での生活が始まった。 またある時、 開口一番「あんたのピッケルは、まだできていませんよ」と、ピッケルのことだけしか念頭 山内は十本あまりのピッケルを抱えて上京し、好日山荘をさがしたが、当時のこと 罹災見舞に東京からXという友人が彼を

とだけに、生甲斐を求めていたことを教えてくれる。 こうした当時の山内の伝聞は、 世俗に汚れず、ただひたすら良心に忠実に生き、ピッケルを鍛えハンマーを作るこ

期作の中期に、 でない部分が発生する。 昭和二十三年頃、 扇肩張型への過渡期として、昭和二十三年頃からその姿を認めることができる。 扇型に肩が張り出したのと同様に、二等辺の扇の要に、ほんのわずか曲線というより、 作品では一五〇〇番代頃から、 見落とせば扇型ですまされるような微細な特徴であるが、 わずかではあるが作品に変化が認められるようになる。 初期作にみられる琴柱型とも言え むしろ直線的 かつて中

期の作に依然鋭い刃先をみるのは、 くかと思われる。 この期 の作 品は、 このため尖端部の磨耗により、ピッケル全体に多少の姿のくずれを心配するが、 ピックの尖端が刀の切先のように鋭く、厚さがきわめて薄くなっていて、 鍛造、 熱処理等の技の冴えと考えてよいであろうか。この期にはすでに材質的に 氷を貫き、 使いこまれたこの

ず、

揺がず、

であった。 年の彼の最後の作品まで続く。 八〇〇番近くまで続き、その後は琴柱型ほどではないが、 も落着き、一槌一打に心血を傾注した戦後作としての傑出した時代を創り出す。この傾向は、 昭和二十七年十月、皇太子様に捧げられた作品が、 ブレードの付根に肩が張出して扇肩張型となり、 この期のものであり、 昭和二十七年初頭の一 一八二五番 昭和四十

ことだろう。 後期作後期 山内としては、 0 扇肩張型は、 材質、 鍛造、 昭和三十年頃の一九〇〇番頃から 熱処理等の技術が集大成され、ピッケルとしての極致を表現しようと日夜はげんだ ピック の肉置きが薄くなり、 より軽量 化され

う。 物の、 ない。 どの軽さが、 ピッケルも山に対する傾向として、すでに大正、 ピッケルは、カミソリのようにただ切れればいいというものではないし、また、 氷雪への「道具」としての機能だけが、もてはやされる時代となっていた。だがしかし、 その機能を援けるのであろうか。その切れ味がその快い重さのゆえに、 昭和初期のスイス物の重厚さより、むしろ軽量化されたフランス みるに耐えぬものでは心が通じ 蒼氷を打砕き、 軽いといってどれほ 足場もけずろ

に放置されたまま、 鉱用のハンマーの製作につとめて、 この三十年頃から、 かえりみられない日々が続いた。 山内の寡作は一段と寡作の傾向をたどることになる。 年毎に目にみえてピッケルの打上げ数は減じ、その種鋼は、 特別の注文以外は引受けず、ひたすら採 あたら鉄床の片すみ

三十二年のことである。 総じてこの時代は尺物が主となり、 こうしたなかで山内は、 やがて記念すべき二〇〇〇番のピッケルを鍛え上げ、 来仙の高松宮様に捧げられた。 昭和

一分の狂いもない同型の作品を鍛え通した。 形状も山 「内の個性が一点に凝固したように、 完成された山内作として、 動ぜ

昭和三十七年二月、 山内は三十年も住みなれた大町を去り、 青葉城址下の追廻住宅へ移った。 彼が 七二歳の高齢

で、どのような苦悩に耐えなければならなかったか、察するにあまりある。 そして三十九年二月、 世の中へ山内の心と腕とを引出してくれた恩人の、西岡一雄氏は死去した。 彼が渋茶をすす

りながら、訥々と語ってくれたその死のことを、私はいつまでも忘れられない。

一本鍛えるごとに、番号、型、注文者名を、仮名交りに一行に横書きした彼の唯一の宝を、 和四十年十二月、 山内宅は全焼した。大学ノートに、 鉛筆で書込まれた戦後からのピッケル覚書帳は灰となっ 人はもう見ることは

れた作品数は、第一号から昭和四十年の二一八六番まで、有銘作一六六四本でしかなかった。 昭和四十一年四月四日、 稀代の名工山内東一郎は、塵肺症のため仙台鉄道病院で死去した。七五歳であった。

しいことを山内はみずからの作品を以って示してくれた。山内の鍛えたピッケルは、登山のあり方がどのように変ろ 山内作を介して山内を識り、山内を通じて山内作の真価を識ったが、後に続くピッケルの製作者に、 シェンクであり、ウイリッシュであり、ベントであったと私は思うのである。 酷寒の蒼氷にヘシ折れ、 へシ曲がることは恐らくあるまい。 所詮、 山内作をうみ、はぐくむためのエルクで その道のけわ

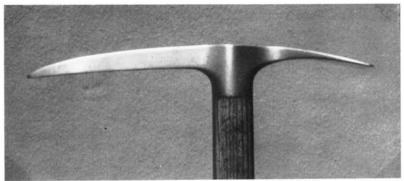
8 してのそれであれば、 少なくとも冬富士で折損等の故障が皆無となることを、鍛造の最低条件として望まずにはいられない。 [岳』第四五年の「ピッケル調査」にもあるように、今後のピッケルの製作にあたって第二の山内は誕生しなくと 山内作を骨董視するむきもあるが、こうした贅言は、 山内の高さに、 自作が及ぶべくもないことを、 山内を識らないための不用意の言葉でもあるし、 彼はみずからの言葉で証明することになろう。



山内東一郎氏 (昭和三十八年十月十三日 七十三歳 筆者撮影) Toichiro Yamanouchi, in 1963

山内作刻印



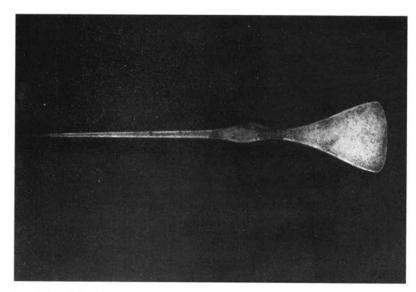


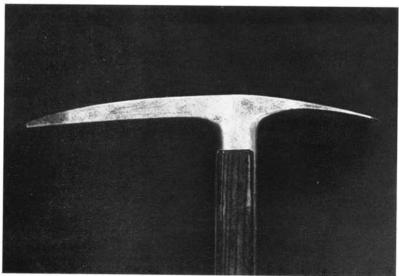


初期作銀杏型

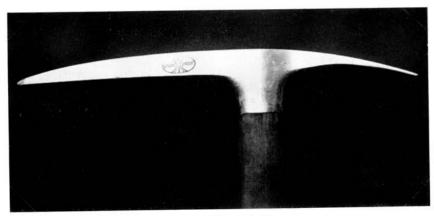
- (表) MADE BY YAMAUCHI SENDAI
- (裏) No. I

(大阪・大賀寿二氏蔵 推定昭和四年) SENDAI YAMANOUCHI No. I





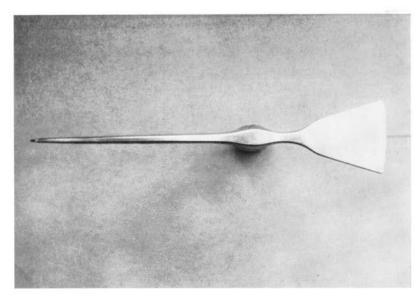
初期作銀杏型 仙台山内作 四八 (松本 小山義治氏蔵 推定昭和六年) SENDAI. YAMANOUCHI No.48

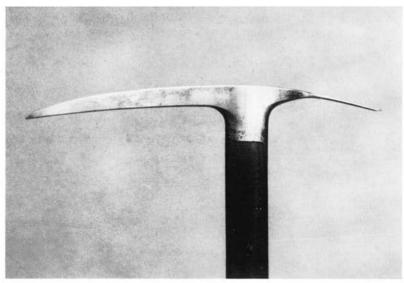


初期作 銀杏型 番号 所持者不詳 推定昭和六年) SENDAL YAMANOUCHI

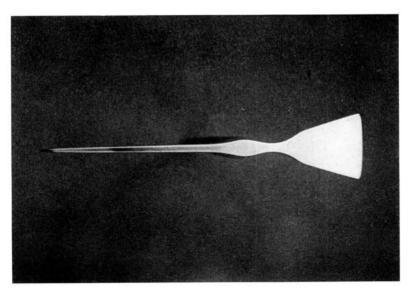


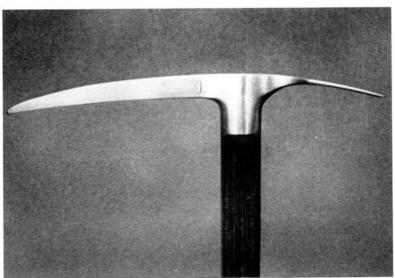
初期作 琴柱型 仙台 山内作 一八六 昭九 (北九州 月原俊二氏蔵) IN 1934. SENDAI. YAMANOUCHI No. 186



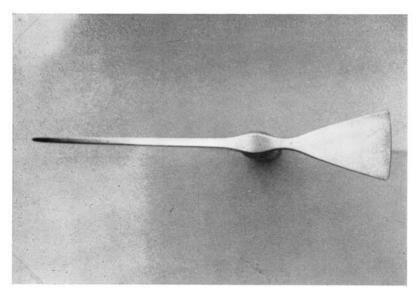


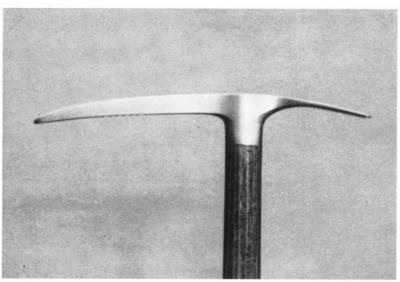
初期作 琴柱型 昭八 仙台 山内作 七七 (東京 広瀬潔氏蔵) IN 1933, SENDAI, YAMANOUCHI No.77



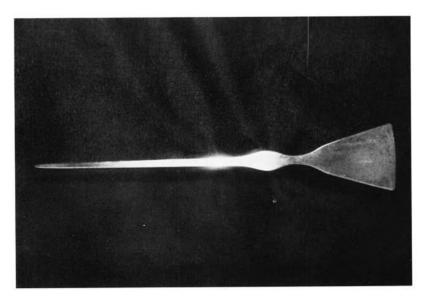


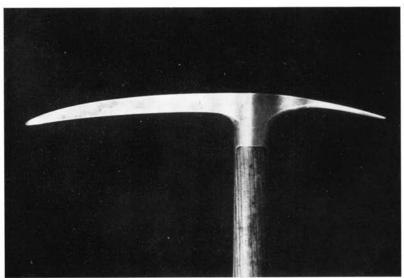
初期作 琴柱型 仙台 山内作 昭八 ——九 福岡 小林義明氏蔵 IN 1933, SENDAI, YAMANOUCHI No.119



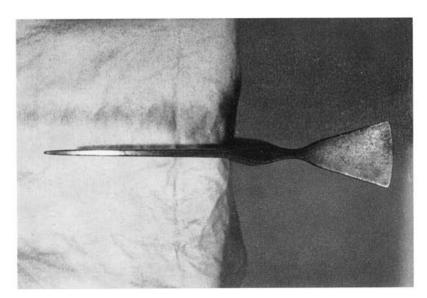


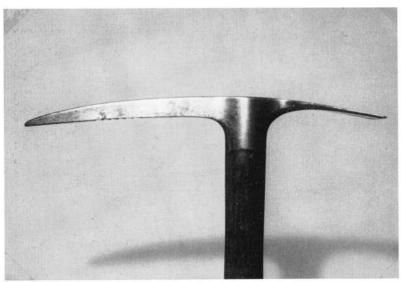
初期作 琴柱型時代扇型 仙台 山内作 一六三 昭八 (東京 水由武夫氏蔵) IN 1933、SENDAI、YAMANOUCHI No. 163



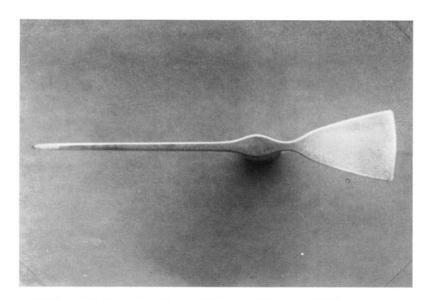


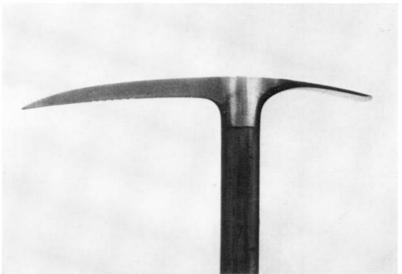
初期作 琴柱型 仙台 山内作 一九三 昭九 (京都 近藤氏蔵) IN 1934, SENDAI, YAMANOUCHI No. 193



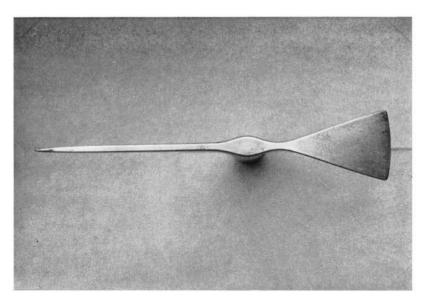


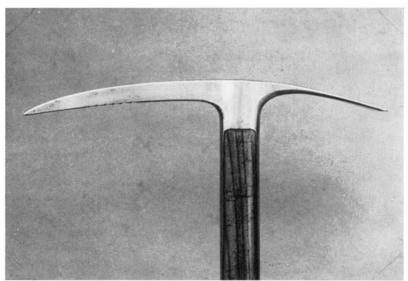
初期作 琴柱型 仙台 山内作 三六五 昭十 (京都 松居秀夫氏蔵) IN 1935, SENDAI, YAMANOUCHI No. 365



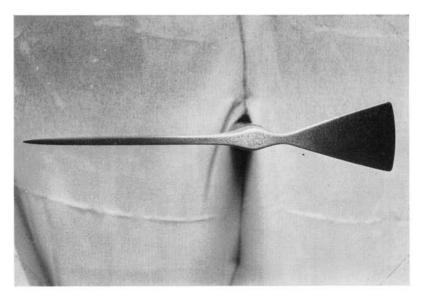


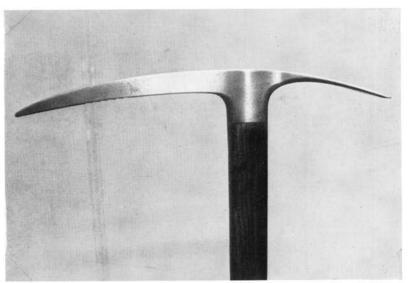
初期作 琴柱型 仙台 山内作 五五八 (東京 袋-平氏蔵 推定昭和十一年) SENDAI, YAMANOUCHI No.558



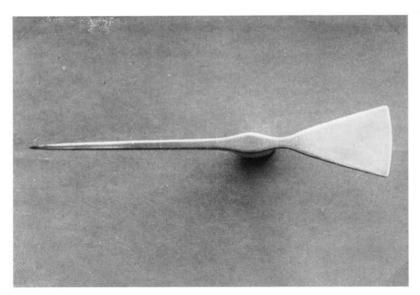


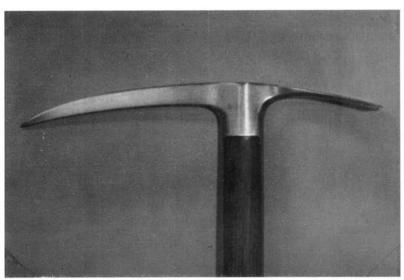
中期作 扇 型 仙台 山内作 七一三 (東京 吉田勇氏蔵 推定昭和十二年) SENDAI, YAMANOUCHI No.713



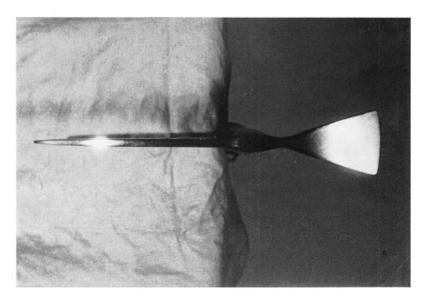


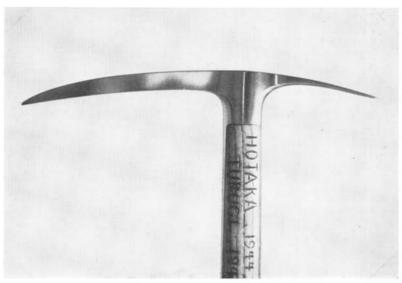
中期作 扇 型 昭和十寅春 仙台 山内作 九三… (静岡 岡田利貞氏蔵) IN 1938, SENDAI, YAMANOUCHI No. 93…



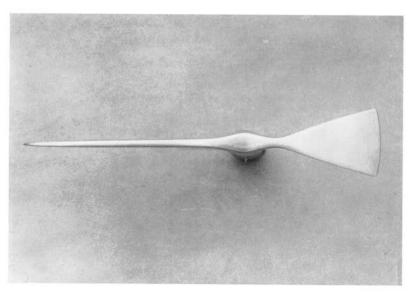


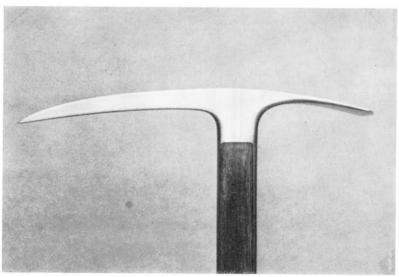
中期作 扇肩張型 仙台 山内作 ——八二 (東京 林依佐美氏蔵 推定昭和十六年) SENDAI, YAMANOUCHI No. 1182



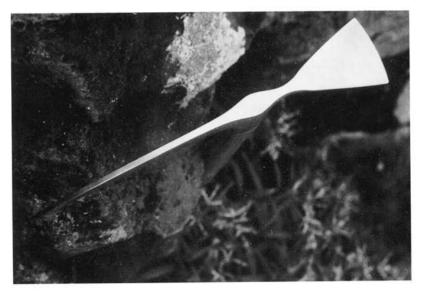


中期作 扇 型 昭和十九年 仙台 山内作 一二二〇 (京都 松居秀夫氏蔵) IN 1944, SENDAI, YAMANOUCHI No. 1220



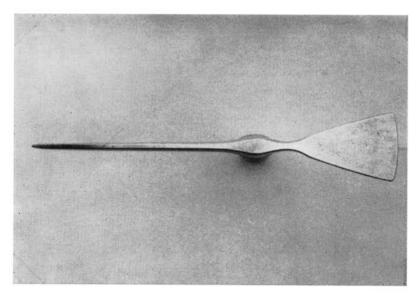


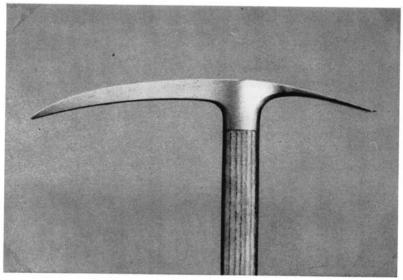
後期作 扇 型 仙台 山内東一郎作 一五五七 (東京 松永敏郎氏蔵 推定昭和二十三年) SENDAI. TOICHIRO YAMANOUCHI No. 1557



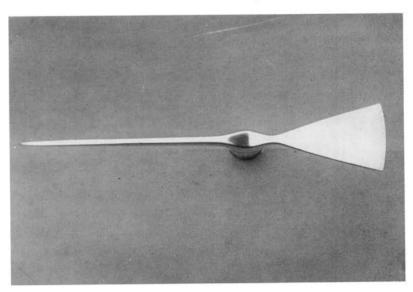


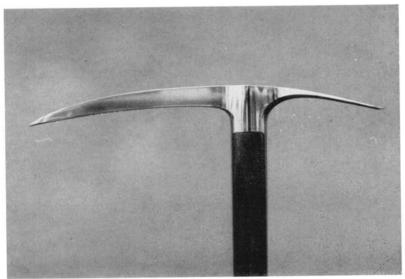
後期作 扇肩張型 仙台 山内東一郎作 一八二六 昭和二十七年 (山形 畠中善弥氏蔵) IN 1952. SENDAI, TOICHIRO YAMANOUCHI No. 1826





後期作 扇肩張型 仙台 山内東一郎作 一九一六 昭和三十年 (東京 水由武夫氏蔵) IN 1955, SENDAI, TOICHIRO YAMANOUCHI No. 1916





後期作 扇 型 仙台 山内東一郎作 二一八二 昭和三十九年 (筆 者 蔵) IN 1964, SENDAI, TOICHIRO YAMANOUCHI No. 2182

鋼

材

相的な解説は、 関連もあるため、埒外の立場から彼のすぐれた技工のうちまで立入って詮索することは不可能である。 てその機械的性質を異にし、 Ш [内ピッケルの材質については、各時代にわたってその概略をすでに述べてきたが、鋼は、 山内が、 いつ、どんな材料を用いたかについての追求が急であるし、また材料学的問題は、 空白のままむしろ余韻として各自の胸の裡にとどめたい。 したがって その使用目的も鍛造工程も違ってくる。 ここでは そうした専門的問題 含有される元素によっ 山内の鍛造技術との 鍛造工程 の皮 より

差異に対する熱処理上の要求からであった。 で、その時々によって鋼材の化学組成にも多少の違いはある。 傾向であって、 Ш 一内の用いた材質と、ピッケルの年代的分類との関係は、 厳密には型状の多様と同じく、 種鋼も一括購入される場合もあっ 左記の通りであるが、これらは主として用いられ 山内が試し焼きをその都度行っていたことは、 たし、 当用買いのこともあ た鋼材 たの

試作時代(大正十三年—昭和三年

初期=炭素鋼

後

期

炭素鋼

銀杏型=炭素鋼

ニッケル・クローム網

琴柱型=ニッケル・クローム・モリブデン鋼

(表) ピッケル粗材の鋼種と化学組成の概要(注4)

鋼種元素	炭 素 鋼	ニッケル・ クローム鋼	ニッケル・ クローム・ モリプデン鋼	クローム・ モリブデン鋼
С	0.35~0.45	0.35~0.4	0.44~0.50	0.47~0.50
Si	0.15~0.40	0.15~0.35	0.15~0.35	0.15~0.35
Mn	0.40~0.85	0.50~0.80	0.60~0.90	0.60~0.90
P	≦0.035	≦0.035	≦0.030	≦0.030
S	≦0.040	≦0.035	≦0.030	≦0.035
Cu	≦0.35	≦0.035	≦0.035	≦0.035
Ni		2.50~3.0	1.60~2.00	
Cr		0.55~0.95	0.60~1.00	1.0
Mo			0.15~0.30	0.2

のローム・モリブデン鋼 扇肩張型=ニッケル・クローム・モリブデン鋼 型=ニッケル・クローム・モリブデン鋼

(注4) この表が、山内作の ビッケル の 粗材の化学組成そのものを示すと考えること 通りである。 SCM5などであろう。これらも炭素含有量の範囲が極く僅か違うだけで、他の について、某製鉄会社の研究所で分析した結果があるので御紹介すると、次表の る。偶々、私が平柳氏から御預りした昭和十三年頃の山内のピッケル粗材の断片 ろ稀で、ニッケル・クローム鋼と云っても、この表に規定した組成の範囲に当て もが5400という呼称でまとめられてしまう。然し実際の機械的性質としては、 れば、この表に定められた範囲に、その組成が該当していればよい訳で、炭素量 規定そのままの値とは若干相違するが、比較的近いものを求めればSNC2及び する。ニッケル・クローム鋼、クローム・モリプデン鋼については、現行JIS 行JISG三一〇二(一九六五年改正)のS40Cに該当する改正前の値であり、 各添加元素の含有量は、何れも規格によって定められた上限値、下限値の数字 はまらないような、中途半端なものが多かったのではないかと考えられるのであ ない。またビッケルの粗材のように、町工場で小量購入する場合は規格品は蜜 炭素量○・一○%でかなり相違してくる場合もあり、お互いに全く同じとは云え を例にとれば○・三五%のものもあれば○・四四%のものもあり、それらの何れ 元素の含有量は殆んど同じである。従って実際の鋼材、例えば炭素鋼S40Cであ ニッケル・クローム・モリブデン鋼は現行JISG四一〇三、SNCM9に該当 実際の鋼材の組成を示している訳ではないからである。例えば炭素鋼は、現 極めて誤解を招き易いことである。何故ならば、ここに示されている銅種と

ラローム鋼 0.202 0.17 0.42	鋼種 元素 C Si Mn	
42 0.012	ln P	
0.007	S	
2.93	Ž.	
0.58	Cr	
<0.03	Мо	

生ずるというものではあるまいか。 全く当らないことであって、この程度の材料でも、適切な熱処理を施こし、十分な性能をビッケルに与えたという点で、山内の技術の価値が きであるというような、うるさい取決めがあった訳ではないから、たとえ規格外れの不良鋼材であったからと云って、山内を非難することは たとすれば、ニッケル・クローム鋼を用いたこと以上に大きな特色と云ってもよい。本来ビッケルの粗材として、どのような鋼種を使用すべ 少ないことで、これは鋼材が静浄であること、極めて靱性が優れていることを示すもので、山内のビッケルがすべてこのような低硫鋼であ この結果を見ても分る通り、ニッケル・クローム鋼鋼材の規格から云えば、SNC22に近い化学組成で、ハダ焼鋼として用いられるもので 炭素量は稍々高く、クロームは低く過ぎて何れも規格値から外れている。然し、当時の材料として注目に値するのは、 硫黄含有量の

ケル・クローム鋼をもてはやした当時の人々の心情が、大変不思議に思えるからである。 鋼に転じたか、その理由も薄弱である。元来、 な熱処理や鋼種の選択が行なわれたかどうか疑問点が多い。また、 状であって、云わば登山界の無知と事大思想に結びついた、偶然の産物と云ってもよいのではないかと云う気がする。何故ならば、 ッケルの使用条件、例えば水の硬さに対する破砕力の点から、ビック先端の硬さを考え、使用温度と鋼材の切欠靱性との相関を考えて、適切 きで山内に助言したことが拡大し、まるでニッケル・クローム鋼が万能の性質を持った鋼材であるかのように、もてはやされたというのが実 であって、当時、 モリブデン鋼が用いられたという点には若干疑問がある。とれらの鋼種の特徴、利点、欠点については、登山界が素人であったに過ぎないの はさむ余地はないが、平柳氏が云われるように、粗材に対して十分な研究と検討が尽されて、ニッケル・クローム鋼やニッケル・クローム・ また蛇足として、鋼材の専門家としての意見を述べると、山内の鍛造職人としての技術、一種の芸術家としてのひらめきには、一言もさし 通常の冬季登山に用いるビッケルは、炭素鋼で十分であると云うのが、私の見解であるからであって、その本質を知らずに、 昭和初期と云えども、鉄鋼材料のいろはを噛った者であれば、常識と云ってもよいことであった。そして、一寸した思いつ 安価な材料で、十分に目的を果たせる機能を持ったものを作ると云う、工業的な原則から云え そんな面倒なことを云わないでも、 (村木注 なぜ炭素鋼からニッケル・クローム

扇 型=クローム・モリブデン鋼

扇 型=炭素鋼

扇肩張型=ニッケル・クローム・モリブデン鋼

当初は炭素鋼によって鍛えられ、つづいてニッケル・クローム鋼へ進み、さらにニッケル・クロ

Ш

内ピッケルは、

炭素鋼をやむなく手がけたが、こうした材質にもかかわらず、その作品には彼の良心と敏腕とが、 内は鍛鉄の時代を故郷青森の鍛冶屋徒弟の頃に了え、 をピッケルに応用した。 りもさらに強く作用していたことが、丁寧なその作からうかがえる。 概要は、 ム・モリブデン鋼を用いて鍛造された。 略々前表に示したような鋼材規格表に準じたものではなかったかと推察される。 戦時中、 一時クローム・モリブデン鋼を用いなければならなかったり、 当時の一般的傾向としては、鍛鉄を用い、そこから炭素鋼へ移ったが、 のちに金研のアカデミーに支えられて、 山内作のピッケルに用いられた鋼材の化学組成 世界に先馳けて特殊鋼 戦後の混乱期には、 特殊鋼に対するよ Ш

銘

期作は上手に、 Ш 内作の銘振りは、 そして几帳面に綴られている。 その作品 の時代に似て興 、味が深い。 初期作はつつましく、 中期作はいきおいの赴くままに、 後

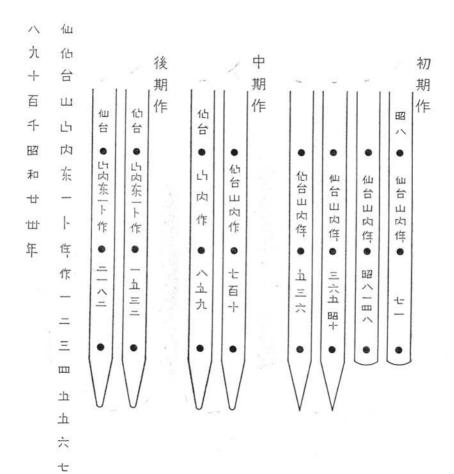
の特徴は、 字画の交叉すべき箇所が交叉しないで、一方が飛んで逃げていることである。 山内が用いた文字の位

置と、銘の特徴は次図のようなものである。

も工夫の跡がみられる。 ないタガネ使いも最後まで貫 銘には、 一の頃 年紀、 幹支、所持者名の切られるものもあるが、年代に応じて筆致に特徴が認められ 銘は小振りでつつましく切られ、 山内作の三つの特徴が、 かれているため、 はじめから最後まで一貫して守り通されたのと同じく、 山内作の第四の特徴と考えても支障はない。 作品そのものを象徴するかのように、 年紀番号等の位置に 山内の交叉

山内が何故こうしたタガネ使いをしたかは不明である。

日本古来の刀の銘は、その刀匠独自の特徴を顕著に表現し



する方策を講じているむきもあるが、 山内のように交叉しない字画を認めることはできない。刀匠のなかにはかくしタガネといって、偽物に あるいは 山内 にもそうした心意気があったかもしれない。 交叉した字画の方 対

が、タガネの使い方としては容易なはずだからである。

られて、丁寧にしかも上手にうつってゆく。銘はその時代の山内作を、あますところなく物語ってくれる。 る。こうした力強くまた雅味のある銘は、中期作から後期作の昭和二十七年頃まで続き、その後は徐々に小振りに切 大振りに切られ、 中期作の銘振りには、奔放であふれるばかりの力を感じる。作品にこもる雄渾の気魄は、彼のタガネにも作用して 鍛え上げた一本のピッケルにかぎりない愛着と満足とをもって、 タガネをふるうさまがしのばれ

ヤフト

分の角材を半分に割り、ピッケル二本分のシャフトに用いた。バットより細いシャフトであるから、 トが作れると思うが、山内は二本しか作らなかった。この角材は、鋸で正確に等分するのではなく、鉈で二分してい 昭和八年頃からの作品には、野球のバット用に、好日山荘で輸入したアッシュの角材を利用していた。バット四本 六本程のシャフ

とられなかったのである。 この一見素朴にみえる割り方には、 鉈で割ったように木目に対して自然ではない。そして鉈割りのゆえに、四本分の角材から、シャフトは二本しか きわめて重要な意味がある。それは、 鋸でひいては木目に逆らうこともあっ

らシャフトの角をけずって仕上げる。これは、 と石突を取付ける場合、木目は無視されて折損の危険が内在する。 二分した角材を、木目にそって四角に直し、その角材の上下に、ピッケルの頭部を取りつけ、 一見手順が逆のようにもみえるが、仕上げたシャフトにピッケル頭部 石突をはめ込んでか

III

「内は寡作であっ

た。

彼の意中は、

ず、そんな手 なく、正確さのために、丈夫さのために、 シャフトを最初に削っておかないと、 「順の悪い仕事をする職人はいない」という批評もあるが、 面倒な仕事をあえてしていたのである。 工具が操作できないし、 角材のまま 組立てて 削り出すのでは仕事になら 山内は、 手順のよい仕事を目的としたのでは

強く、 輸入のアッシュ材が入手不能になってからは、 ねばりがあって、木目も美しく、バット材にも使われているが、 北海道や青森の白タモを、 シャフトの材料としていた。 白タモは、

にあって、山内は取寄せた白タモの過半をすてた。 幹の直径の三分の二ほども黄色い芯材が中心

が、 験を試みて、意にかなえばピッケルを取付ける。 IE 精選した白タモを、 山内は一本のピッケルを仕上げるのに、シャフト取付けに、その三分の一の時間を要した。 一確なピッケルの頭部の穴に、 前記のように角材に仕上げ、 すり合わされたシャフトの差込部に接着剤を塗布してかしめる。 自製のカンナで試片を採り、 彼なりに耐折、 目にみえない 引裂き、 これだけのことだ 引張りの試

内 日本刀の技法をとり入れたとか、 考えだが、それだけシャフトの取付けは難しくなる。近頃は猿真似ばかり多く、模倣ばかりのものをつなぎ合せて、 あればこそ、 の良心の高さにある。 昭和九年作から、 粗略に片づけられなかったし、彼の良心をそこに垣間見る思いがする。 フィンガーの尖端が三角留めに変った。 山内のこころを知らずに、 世界一のピッケルだとか自讃しているむきが多いが、 山内作の形だけを模倣することを、 弱い木部に、できるだけ力を持たせようという彼らしい 人は許すまい。 真似てもらいたいことは、 Ш

作 品

数

7 貧困の生活に耐えなければならなかったし、ピッケルを鍛えて金儲けをしようなどとは、およそ考えてもみな 一年一作でもいいから自分の意にかなったものを鍛えようとしていた。 したが

3 ったことである。 名を残すより、 かせぎを考える風潮のなかで、 山内は自分の職人気質を貫いた。

欠番にしたと仮定し、 試作時代、 特殊の欠番のものもあったと海野氏は言われるが、欠番や再作は一応ここでは伏せて、三百番以降から 有銘有番の初期作へ移ってゆくが、 無銘無番の山内作は、 昭和四十年の最終作二一八六番までを試算すると、一六六四本鍛えたことになる。 百本を出なかったと推察される。ここでは試算上百本鍛えられたと考える。 一番から三百番頃までは通し番号で経過し、 時には四四番や一四四番 これが有銘 四四

示しているのではなく、所持銘を簡略化した、いわば数字としてのピッケルの固有名詞であった。 対して自作のピッケルに責任をもつというきびしい考え方から始まったことで、このことは、 Ш 内としては、 一応記録し、製作上の便利を計っていたが、こうすることになった発端は、 彼としては製作数を表 遭難に際し、

作の総数であるが、

山内作には、こうした試算の埒外にあるものが若干作られている。

がら、 調し、 ればならないだろう。 を 山内作があまりにも美しく、 後者が追越そうと試みれば、 己を語るということは、 暗に、 折れ、 氷雪に対する山の道具としての真価を等閑視しようとするが、 曲るという失態の発生を私は知らない。 願わくば、 ピッケル破損という事故の後に聞く作者の弁解と、 あまりにも手にすることが難しかったため、 それはいきおい、山内作とは別の型状において、 山内のように己を語らず、 鍛造上の技術が群を抜き、 作品の真価においてのみ 自己を表現することを望みた 山内作が今日まで世界の氷雪に試され 人は山内作を称して、 変るところは少ないからである。 別の理由づけにおいてなされなけ さらに美しさがそれを包む山内作 骨董品的

ばこわしてしまう彼であってみれば、 III 山内銘はあっても無番号の作品が若干あった。彼自身何故そうしたのか判らない。 記録上の不備がそうさせたと考えるほかない のである。 作品に不満があれ

再作のピッケルも若干あった。 所持する愛品を山で失ない、 戦火に焼かれ、 愛惜のあまり再作に失った番号銘を切

てもらうものである。

大正

三年、

ピッケルを試作

に は、 が、 ル作りは、本業としての余技であったことを思うとき、百本以上の特殊作を考えるわけにはゆかないのである。 は単なる数の表現ではなく、 らなければならない中期作初期の典型であるが、再作と同様、番号と型状に不調和な点がその特色である。 こうして 試作時代の百本と、有銘作の一六六四本と、 さらに特殊作の百本とを合計すると、 特殊作の作品数は、 111 今なお何本遺されていることであろうか。 内自身、 山内が一本のピッケルを鍛えるのに、どんなに苦労し、どんなに精魂を傾けたかを考えるとき、また彼のピッケ 生涯に山内ピッケルという名作を、 の類では、 番号銘を誤刻するものもあった。写真九三号は、 まれに同番号の複数製作があげられる。これは記録の不備によるものだが、以上の特殊作は、 試作と同様、 作品の固有名詞と考えるとき、所持者の納得と、 百本以上には出なかったと思われる。 これは あくまでも一つの仮説にすぎない 一八六四本鍛えたことになる。 昭和十三年春の作品で、 その山内作が、 一層の愛着が生まれることと思う。 おそらく、九三の下に一字入 全き姿で世界の登山者の手 試算ではあるが山

山内東一郎小伝

明治二三年十月四日生。青森県。小学校卒業後、 県内の呉服商に奉公し、 鍛冶屋の徒弟となる。

明治四五年、上京を決意。途中仙台に下車しこの地を第二の故郷とする。明治四四年、歩兵第五連隊へ入営、除隊。

大正 二二年 仙台高等工業学校機械工場の職工となる。

この間、鉄道機関区工場、

鍛冶屋、

町工場等に勤務

大正 四 年、東北帝大に鉄鋼研究所開設される。

大正 一一年、 六 年 鉄鋼研究所は金属材料研究所に改まる 仙台高等工業学校は、東北帝大工学部と改まり、 本多所長の鉄鋼研究所へ奉職。

(133)

大正一五年、 金属材料研究所機械工場を退職。山内鉄工所を設け、金研の下請工場として発足し、一般刃物類等の鍛造も始める。

昭和 二 年、試作ピッケルに対して、東北大山岳部から大量の発注がある。

昭和 三 年、好日山荘を介して、山内ピッケルは商品化される。

昭和 四 年、有銘山内作第一号を鍛える。銀杏型。

五. 年 ニッケル・クローム鋼を、世界ではじめてピッケルに応用する。

大町へ移る。 琴柱型に変り多作の時代へ入る。 ニッケル・クローム鋼から、さらにニッケル・クローム・モリブデ

ン鋼へすすむがその年代不詳。

八

年、

昭和 昭和一二年、 一五年、 戦雲急をつげ、ピッケル鋼材は払底し、やむなくその材質をクローム・モリブデン鋼に求める。 中期作扇型時代を拓き、確乎不動の山内作を鍛える。

昭和二〇年、仙台市被爆。山内鉄工所焼失し、ピッケル覚書を失う。

昭和二一年、後期作、炭素鋼、山内東一郎銘。

昭和三二年、 昭和二七年、 昭和二三年、 皇太子殿下へ一八二五号の特別作を捧げる。型は扇肩張型となる。桝田定司氏歿。享年四四歳。 二千号を鍛え、来仙の高松宮殿下へ捧げる。以後寡作の一途をたどる。 この頃より鋼材は良質となり、扇型から扇肩張型への過渡期をきずく。

昭和三七年、大町から青葉城址下へ移る。

昭和三九年、西岡一雄氏死去、享年七七歳。

昭和四一年四月四日、塵肺症のため死去。享年七五歳。昭和四〇年、山内宅再度の焼失。戦後からのピッケル覚書を失う。

昭和四二年六月記)

省から刊行された。戦後、民間の歌人も加えて選び直され、

六八七首が厳選されて、大正八年『明治天皇御集』として宮内

明治天皇の御製は九万三千余首に及ぶという。その中から一

山と明治天皇

、歌人明治天皇

明治天皇について書かれた著書や論文は、おびただしい数にのぼり、さまざまな角度から論ぜられているが、天皇が山に対して深い情愛をそそいで居られた点を指摘し、研究したものして深い情愛をそそいで居られた点を指摘し、研究したものんなことをいうと、「明治天皇が山を?」と意外な顔をする人が多いであろう。しかし、明治天皇御集を拝読すると、山に関が多いであろう。しかし、明治天皇御集を拝読すると、山に関が多いであろう。しかし、明治天皇御集を拝読すると、山に関が多いである。

若干あるが、それは岩永淳太郎編『明治天皇御製集』(淳風書収められている。公輯の御集以外にも洩れ伝わっているものがれた。この新輯には、旧輯の分も再録され、総計八九三六首がれた。との新輯には、旧輯の分も再録され、総計八九三六首が「新輯明治天皇御集』の名で昭和三十九年明治神宮から刊行さ

広

瀬

誠

院・大正十五年刊)に収められている。

明治天皇御製というと、固苦しい教訓歌のように誤解している人がある。あるいは、漠然と旧派の宮廷和歌ぐらいに思ってる人がある。なるほど明治天皇の歌の師は桂園派の高崎正風いる人がある。なるほど明治天皇の歌の師は桂園派の高崎正風れ、作風は万葉調でも近代調でもない。折口信夫氏は「明治天皇・昭憲皇太后は、性格的におほらかで、古代の一番貴い方々の風格を具へてお出でになった方であったから、万葉ぶりをお教へ申していたならば、どんなによい歌が出来たことか訳らぬを思ふ」(日本文学啓蒙)といって、この点を残念がっている。と思ふ」(日本文学啓蒙)といって、この点を残念がっている。と思ふ」(日本文学啓蒙)といって、この点を残念がっている。

(135)

ず、これ御製の特色と拝察したてまつる」「流派を絶し、時代 らせられた」(歌聖としての明治天皇)と景仰し、その天真爛漫 広大であらせられた。いかにも帝王の御製であり、御歌柄であ しての明治天皇は、その御風格に於て、まことに大空のごとく を絶し、ただちに和歌の本質に貫徹したものだと拝誦し奉る」 直ぐなる、さながらを咏じたまひて、毫も巧むことあらせられ ちがった、 (明治大正短歌史概観) と讃嘆した。 北原白秋氏もまた「歌聖と 天皇の御歌を評して「その歌調の堂々たる、御心のままの 気品高く、堂々たる調べを成就された。斎藤茂吉氏 明治天皇は桂園調に養われながら、桂園調とはまた

な歌風をたたえた。

日経新聞昭和四二・一・一二)といって、御製に実感のこもって かりであることは注目すべきことであります」
(歌人明治天皇 ないのがつねでありますが、御集のものは実に感の深いものば 訓的な御歌についても「元来、教訓歌は、作意としては尊いも ているのを拝見して、特に感を深くしたのでした」と述べ、教 風物といっているものを、天皇は『天地の妙相』と仰せになっ に多数あります。……私どもがふだん四季の景観または四季の の景観をおよみになったもので、すぐれた玉のような御歌が実 いることを感嘆している。 のであっても、和歌としての情味が乏しく、身にしみる感の少 新輯御集の編者のひとり窪田空穂氏は、「御集の中には四季

> となくしては、その人間を知ることは一歩たりともできないで ことであるといわねばならぬ」と評価し、「明治天皇の御事蹟 なこの歌人としての業績をのこされているということは偉大な るほどのものであったと思うのであるが、そのなかで、超人的 げた帝王の座にあっての仕事であった。その繁忙は想像を絶す 人ならいざしらず、新生日本建設のためあらゆる困難をなしと あるといってよい。しかもそれは風流韻事をこととしている閑 の作をなしたという歌人は古今を通じて明治天皇ただお一人で 堂々とした格調を示されている」ことを注目し、「生涯に十万 歳のころ「すでに帝王調ともいうべき風格をそなえておられ あろうと、私は思っている」(作家十万首の歌人 文芸春秋昭和四 を研究する面はさまざまであろうが、歌人としての面を探るこ やはり新輯編者のひとり木俣修氏は、明治十一年天皇二十六

く明治時代であるが、その明治の御代の天皇が、山に対して並 は、 く思うのである。 並ならぬ情愛をいだいて居られたことを、私はまことに意義深 れたのである。日本に近代登山が芽生えたのは、いうまでもな この大歌人明治天皇は深く山を愛された。しかもその態度 旧来の風流韻事的ではなくして、自然そのままの山を愛さ

以下、逐次明治天皇の御歌の実例をあげて論じたいと思う。

〇年一月号)と結んでいる。真に眼力のある人は、作風の相違

を超えて、天皇の御歌に感銘するのである。

カッコに包んで付記したのは、 (11前) としたのは明治十一年以前の作である。 題および製作年代 (明治何年)

行幸路の山

うものか」と驚かれたという。 く帯のように光るものは何か」とたずねられ、「あれが川とい 破って行幸された時、はじめて賀茂川を御覧になって「あの白 所の外へ出られることがなかった。それで、孝明天皇が旧例を 徳川幕府はきびしく朝廷を拘束し、歴代の天皇はほとんど御

も限りない情愛をそそがれた、すぐれた作品が多いという事実 見落されているのは、国民に対すると同じように、国土山川に れている。この点については従来も注意されて来たが、今まで 民の姿・国土の姿を親しく見てまわられた。天皇の御歌には、 ま近く国民に接する喜びが、一首一首にもりこぼれそうに歌わ 維新の大業が成ると、明治天皇は全国くまなく行幸して、国

めづらしき山のけしきを見つるかなこだかき岡に車と (獨中眺望 36

たびねする山辺のけしきおもしろし絵にうつさせて家

めづらしき海山みつつゆくたびは身のやしなひになる

39

38

ここちせり

旅にいでてまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふ Ш Ш

なりけり

42

みやこいでてまづめづらしとみるものはつねみぬ山の

すがたなりけ

旅に出て、何よりもうれしいのは、 大観に「めづらし」「うれし」「おもしろし」と連発され、「身 鷲かれた、そのような幽閉的宮廷生活から出て、新鮮な山野の う御述懐である。 御父孝明天皇が 「あれが川というものか」と 都で見なれぬ山の姿だとい

のやしなひになる」と喜ばれたのである。

明治十一年の北陸巡幸の記録を見ると、

抜萃」として掲載 も佳なり」(富山県教育雑誌明治四二年一二月号に「当時の新聞紙 も常願寺川を前にして、遠く立山等の五山を眺望し、風景最 袋地内字上人松の土手と云ふ頂上にて御野立遊ばさる、此処 鮒ヶ嶽相並んで雲外に聳ゆ、」「立山橋を渡らせ玉ひ、 に立山を望む、……該山の左右に浄土山・別山・剣 「早月川を渡らせ玉ひ、笠木村に御小休あり、此辺より遥か 鯉

だかき岡に車とどめて」と詠まれたように、各所で駕をとどめ などと記されている。「めづらしき山のけしきを見つるかなこ 天来に屹立して遥かに相揖するに似たり、 を極むべき勝地なり」(岸田吟香著御巡幸日記) 「東南は美濃飛騨の諸山相連りて波涛の如く、 実に千里の目 立山の一 族

(137)

いるのであろう。 には、そのような全国各地の山々に対する印象が織りこまれて て雄大な山岳の大観を御覧になったわけで、数々の山岳展望歌

高殿の窓をひらきて旅やかた山をまぢかく見るがめづ 39

をうつしめ めづらしき山のけしきをまもりゐてやすらふやどに時 43

をまぢかく見るがめづらし」とは、まことに子供のように率直 山に向かって、時のたつのも気づかれなかったのである。「山 とも詠まれている。旅舎に到着の後も、窓を開き、山をめで、 な天真爛漫とした表現である。

カク、タビヤカタ――ヤマ。第二首目、メヅラシキヤマノケシ第一首目、タカドノ――タビヤカタ、マド――ヤマーーマヂ も味わい深い名吟というべきであろう。 対する御心のゆらぎがそのまま出ている。自然のままで、しか の同音が交錯して反覆され、音調まことにリズミカルで、山に キ、ヤマノケシキヲマモリ、ヤマ――ヤスラフヤドと、幾種も

る。明治天皇は、ほんとうに山が好きで好きでたまらなかった えの話にうち興じて居られる帝の姿が、ありありとうかんでく とも詠まれている。夜になっても寝所にも入らず、側近と山越 のがたりして しばらくはねやへも入らずたびやかたこえし山ぢのも 45

のである。

が、土地土地の山の姿に新鮮な感興を催された帝の御心を、長く 記念したいという地方住民の念願が、この伝承に息づいている。 た山名だという。古風土記の地名説話さながらの逸話である 「馬のタテガミに似ている」といわれたところから名 づ けられ 富山県東端朝日町の馬髯山は、明治天皇巡幸のおり、天皇が

小車のまどうちあけてみつるかな伊吹の山の雪のけし

になって息づいている。 なったのである。歴史的回顧と雪山の姿に対する感動とが一つ 雪まみれの姿を、わざわざ車の窓をあけて、つくづくと御覧に らミコトの武勇を讃えられたが、そのミコトゆかりの伊吹山の けるのたけきをもうち平げしいさをををしも」と詠じて、心か ころなかったという。明治天皇は若きころ「まつろはぬ熊襲た いどみ、大氷雨に打ち惑わされて敗退し、力尽きてなくなっ の物語はまことに悲壮で美しい。ミコトは伊吹山の荒ぶる神に た。その魂は白鳥となって故郷へ飛んだが、ついにとどまると 伊吹山は日本武尊遭難の山である。古事記が伝えるミコト

山の回想と月の光

月みればまづこそ思へ旅寝して近くむかひし山のけし (をりにふれて 42)

きを

と御覧になった山のけしきだったのである。明治四十二年といえば天皇の御晩年である。晩年のみかどが明治四十二年といえば天皇の御晩年である。晩年のみかどが

月をとりあわせて詠まれた秀作が多いが、このほかにもして北山のたかねまばゆく月のてる見ゆ」(月 38)など、山として北山のたかねまばゆく月のてる見ゆ」(月 38)など、山として北山のたかねまばゆく月のてる見ゆ」(月 38)など、山として北山のたかねまばゆく月のてる見ゆ」(月 38)など、山とりまちける」(東京の御歌には「秋の夜の葛城山をながめつつさす月かげを天皇の御歌には「秋の夜の葛城山をながめつつさす月かげを

ひとめみし野山のけしきうかぶかなすみまさりゆく月みゆ (月 36)秋の夜の月にむかへば旅ねして見し海山のおもかげに

月

37

帝にとって終生忘れえぬ野山のけしきがあったことを、この一の強い主観で統率しているのである。旅路で一目見ただけで、とめみし」の一句は極めて印象的で、漂渺たる月の景色を作者などと、月を見て海山・野山を回想された歌が目に つく。「ひなどと、月を見て海山・野山を回想された歌が目に つく。「ひ

はれわたる空にむかひて思ふかな新高山の月はいかに遠く離れたものに心をいざなう。明治天皇は月をながめて、 関は、時間的に遠く過ぎ去ったものを思い出させ、空間な首は示しているのである。

対する御関心のほどを思うべきである。
対する御関心のほどを思うべきである。
を決定したことが、からなみに、新高山という山名も、実に明治天皇の命名にかかる。天皇はまた「わが国にありとあらゆる山の名をふねてふる。天皇はまた「わが国にありとあらゆる山の名をふねてふる。天皇はまた「わが国にありとあらゆる山の名をふねてふる。天皇はまた「わが国にありとあらゆる山の名をふねてふる。天皇はまた「おが国にありとあらゆる山の名をふねてふる。天皇はまた「おが国にありとも詠まれている。天皇はと、まだ見ぬ台湾の高山にまで憧れの心を寄せられた。天皇はと、まだ見ぬ台湾の高山に思いを寄せられた。天皇はと、まだ見ぬ台湾の高山に思いを寄せられた。天皇はと、まだ見ぬ台湾の高山に思いをはませてしがな」に知る。

四、深山路の実景と山の鳥獣

いことによってもうかがわれる。 実際に深山路を通られたの思いも及ばぬことであったろう。 政務多端のため、遊山的な山思いも及ばぬことであったろう。 政務多端のため、遊山的な山思いも及ばぬことであったろう。 政務多端のため、遊山的な山思がを汲みて遊ばむ夏なかりけり」(夏山水 37)等の述懐が多明治天皇の山の歌は、多くは遠望歌である。 天皇はみずから明治天皇の山の歌は、多くは遠望歌である。 天皇はみずから

は、木曽・箱根・二荒(日光)など行幸途次の山々であろう。

深山の実景を詠ぜられたと思われる作品には、次のようなのが

春さむき二荒の山も石楠木の花さく時になりにけるか 旅ごろも木曽路をゆけば夏木立しげれるかげもかぎり (夏旅

(をりにふれて 31

山ふかくのぼりてみれば草も木も雲にしめりて露けか 高ねよりかへりみすれば箱根山くもをふみてものぼり 35 35

白雲のはれまにみればみやま木の枝にむらむら霧藻か

かれ いはがねのたちかさなれる山みちをのぼりてみればそ (深山樹 (山家 42 39

る

ところで意外にも人家を見つけた具体的な経験が歌われてい き草木や、雲を下に顧みる山路のありさまや、岩山路を登った 石楠木・霧藻のような深山の植物に取材され、 しきるころ」(冬山 きけば二荒のみやまにははや初雪のふれりとぞいふ」(をりにふ る。事につけ折にふれては曽遊の日光を回想され、「人づてに 26、「下野のふたらの山やいかならむみやこも雪のふり 35)など感慨のこもった作がある。 雲に湿って露け

なお天皇の御歌には

みねたかき木木の梢に居る猿夕ぐれがたに叫ぶなりけ ちがひけり 11前 み山よりおちくる滝にいはつばめつばさやすめず飛び

おく山の杉の下みちききなれぬけものさけびて日はく n れにけり (深山獣 11前) 33

みち 荒熊もうつぼが中にこもるらむ雪にあとなき木曽の山

就て)と不審がっているように、猿の歌が多い。 なったものが割合多かったやうである」(明治天皇御集の編纂に 旧輯御集編者の一人井上通泰氏も「どういふ訳か猿を御よみに 等、イワツバメ・猿・熊のような深山の動物も歌われている。 伝統があるから、不思議でないが、猿の歌の多いのは意外であ が、これは古来風雅のものとして、 和歌の世界で扱われて来た 鹿の歌も多い

この時、 ぬ」とあるから、実際に野猿を見て居られるわけである。なお 又登りて蹲りなどして、段々と後の山に登りて林の内に入り の上に蹲り居たるを……少しばかり岩の上に登りては顧みし、 滝御覧の時「折ふし、大猿、一疋の小猿を背負ひて滝の傍の石 東北御巡幸記(著者不詳)によると、 捕えられて献上された鹿が、天皇の御前で山へ放され 明治九年六月九日華歉 ぞおもふ

皇の猿の歌も、このような実際の経験がもとになっているので ているから、野生の鹿も御覧になっているのである。このよう あろう。 な野獣の出没は、明治初年にはしばしばあったのであろう。天

五 浪漫的精神と山岳憧憬

野をかけめぐられたというが 明治天皇はお若いころ侍従たちをひきつれて、馬に乗って山

いさみたつ月毛のこまにうちのりて山の紅葉のいろを

|| 無鹿毛の駒をどらせて山路なる木木の紅葉の色をみる

りにふれて 16)とも詠まれているが、明治十八年には、 たつ駒にくらおけ飛鳥山そめはじめたるもみぢ見てこむ」(を がそのままのりうつったような御作である。あるいは「いさみ キギとKの音の反覆がここちよくひびき、まことに御心の躍動 のような作品がある。「くろかげの」の一首、クロカゲ・コマ・

花さかばいづこの山の奥までも駒にまかせてゆかむと

(をりにふれて)

山の奥までも」しかも「駒にまかせてゆかむ」とは、まことに 浪漫的である。芭蕉は「そぞろ神の物につきて心をくるはせ道 の作がある。「花さかば」という未然形につづけて「いづこの

> るのである に、窮屈な御自身を顧みての感慨がこもっているように思われ 国民の上を思いやって「たのしんでこい」というお気持と同時 ぞ今日も旅ゆく」とよんでさすらい歩いたが、天皇も、何か内 祖神の招きにあひて取るもの手につかず」奥の細道の旅に出 のしかるらむ」(夏旅 36)とも詠まれているが、そこには、 なかろうか。「夏しらぬ山をたづねてみな人の旅にいづるがた ることのできる気楽な身分を、つくづく羨しく思われたのでは でなかろうか。この一首を詠まれた時、天皇は、自由に旅に出 側から衝き動かされるような、止みがたいものを感ぜられたの け、若山牧水は「幾山河越えさりゆかばさびしさの果てなむ国

る旅かな ひさかたのそらゆく雲をさきだててしらぬ山路をたど

ら、いかに略式の場合でも、お供も多く行列も整っていたであ この一首も浪漫的音調をかなでている。行幸のことである のような浪漫的なものがあることに注目すべきである。 的な典雅な態度で終始した天皇の御歌の中に、少数ながら、こ とともに山路を越える気分を味わって居られるのである。古典 ろう。しかし天皇は空ゆく雲に心をとどめ、雲をさきだて、雲

さまざまのたのしみおほき秋の山こころのゆくにまか 40

ひたたばや

たかねみなさやかにはれし秋の日に山ぢのあそびおも

せてぞゆく

、秋日山行 36

たのしみは果なきものを夕日影かたぶきにけり秋の山

(秋夕 40)

う。高峰みなくっきり晴れた秋の日には、 帝のみこころは山路 政務多端のあいまに、たまに一日を割いての山遊びであったろ

の楽しさを思うて、ときめいたのである。

天皇はしばしば夢に山を見て

いつのまに山路をこえてわがこころとほきたかねを夢

おもひやる山べにゆくと見しゆめををしくも風のさま にみつらむ

しけるかな

然を尊ばれた。

うたたねのゆめの直路にみつるかな見まほしとおもふ

おく山にあそぶとおもひしゆめさめてきけばまくらに 「のけしきを

(水 43)

水のおとする

持っているであろう。明治天皇もまた、夢にまで見るほど「お などと詠まれた。山岳家ならば、いつも心に「思ひやる山」を

もひやる山」「見まほしと思ふ山」を心にいだいて居られたの

きかな

37

六 天 地 0 相

明治天皇御製の特色は、斎藤茂吉氏が「御心のままの直ぐな

歌 とありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして」 ぞありける」(歌 40)と、子どもが物を言うように、まっす され、「思ふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌に をまっすぐに詠みくだされるところにある。天皇自身「思ふこ る、さながらを咏じたまひて毫も巧むことあらせられず」と評 も、作歌態度と同じように、人工を加えない、ありのままの自 ぐに表現するのを理想とされているが、自然に対するお好み りもならずも」(をりにふれたる 45)と、その作歌態度を告白 したように、つくろわず、飾らず、技巧を弄せず、思うがまま 37)、「おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべにな

しろきわがすむいほにひかせてをみむ」(岩 45)と、つくろ て風雅でないとして好まれず、「つくろはぬ岩のすがたぞおも きは」(庭 37)とよんで、作りすぎた人工の庭園を、かえっ 「なかなかにみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけし

わぬ岩、自然のままの岩の姿をめでられ 天地のなしのままなるいはがねの姿はことにおもしろ

願された。窪田空穂氏が「天地の妙相」といって敬服したの まなる山川の景観をそのまま表現するような歌を作りたいと念 つす言の葉もがな」(をりにふれたる と讃嘆された。また「天地のおのづからなる山水のけしきをう 40)とよんで、自然のま

しのままなる」姿を尊ばれたのである である。天皇は、自然においても、

人間においても「天地のな

等、

という御態度についてであろう。 は、この「天地のなしのままなる」「天地のおのづからなる」

かきねゆく水にひびきて松風の音もながるる山のした

もいうべき天皇のお心持がしのばれる一首である。さらに 水のひびき・風のひびきの中にとけこんだような、自然随順と 山みちをゆくゆくみれば都よりまされるものは紅葉な りけり (紅葉 44)

た。 しかし天皇はまた

٤

都会の華麗よりも、

山岳植物相の美をまされりと詠嘆され

ともしびの影まばらにもみゆるかな人すむべくもあら

ともしびのたかきところにみゆるかなかの山べにも人

うな、うれしいような、ふしぎな感動を味わう。天皇は山上に ともる灯火を見て深く感動されたのである。それが人情の自然 山上から平野にきらめく町の灯火を見おろして、なつかしいよ くらしを偲ばれた。我々は都会を避けて山に登りながら、夜の 山につく灯火を限りなくなつかしまれ、山に営まるる人の

さまざまの山

うごきなき山にむかひてゆく水のおとにこころをすま

(をりにふれて 42

明治天皇の山の歌には、このような静かなおもむきを湛えたも

しけるかな

のが多いが、しかしまた

ひむがしのみそらしらむと思ふまに山の姿であらはれ

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむら

(眺望

だち

< 等 さらにまた 静かな中にも刻々変化してゆく自然の相をとらえた作も多

ただならぬ雲こそかかれ夕立は富士のすそのに今かふ

雲はしり風ふきそひてあしひきの山より山にふるしぐ

(時雨

れかな

れの頃 遠山の雲も動きて秋の野の茅はら萱はら風わたるなり 筑波嶺は雲にかくれて利根川の瀬のおとたかしさみだ 31

40

さやぎによっていきいきと動く自然が、緊張した音調に表現さ 山の気象の激しい変化や、 川のひびき・雲のうごき・風の

n た、 動的な名吟も多いのである。

天皇はまた

雨ぐものはれわたりゆく大ぞらにつね見ぬ山もみゆる 41

⊞

らむ 冬がれの野末に見ゆる白雪は何のあがたの峯にかある

(枯野

ひさかたの空にひとすぢはれたるはいづくの山のたか

ねなるらか

39

にまでお気づきだったのである。田部重治氏の『山と渓谷』の 2 ることに心をとめられた。日ごろから、 雨後あるいは新雪時などに、平生気づかなかった山の見え 山々の眺望の微細な点

中に、 私の村ではそれを蓮華と云ってゐる。」 所へ真白に染め出される。これは白馬連嶺の一峯であって、 まで殆ど私達の目に附かない山が、剣岳と猫又との間の低い に忘れることの出来ない印象を与へた。その頃になると、 「十月の終り頃になって是等の山々に新雪が来る有様は、 富山平野での幼少時代を回顧して 今 私

とあるのが思い合わされるのである。

は冬こそさやかなりけれ」 色を詠まれた歌が多いが、特に新雪の山岳景観を緊張したシラ かたの山」(枯野 天皇には「うちわたす野末の林冬がれてさやかになりぬをち 40)、「みどりにもはれたるそらに雪見えて山 (冬山 38) など、 冬山の透徹した景

べにうつし出された名吟が多く、

やま 秋風にはこねあしがら雲はれてはつ雪しろしふじの遠 33

嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさゆる今日

山々の高ねましろにみえながら都は雪のふらむともせ

かな

五百重山つらなるみねの奥までもさやかになりぬ雪の 35

つもりて

けり 大空はみどりにはれて山といふ山みなしろく雪ふりに

見えける こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ 雪 40

冬の冴えた空に南アルプスの雪姿を確認され、このように力強 汽車より見ゆ」と題して、その感激を伝え、 水氏の『日本アルプス 等の御作がある。甲斐の高根は南アルプスであろうか。 い一首をものされたのであろう。 えるかを、微に入り細にわたって説いてあるが、 「望岳都東京」には、 東京のどこから南アルプスのどの山が見 第一巻』には「白峰三山東京横浜間 木暮理太郎氏の 明治天皇も初 小島鳥

富 士: Ш

これは蒼然とくれゆく夕暮の富士。「高殿のまどのうちくらく これは暁天の富士。 なりにけり富士のたかねをうちまもるまに」(眺望 37)とも詠 これは溌溂たる朝の富士 ている。朝の富士・夕の富士・春夏秋冬それぞれの富士・晴れ た富士・雪の富士・雲の富士と、全く枚挙にいとまがないくら 富士山の歌である。私がざっと概算しただけで百三十首を超え をとめられたが、しかし山に関する御製中、もっとも多いのは 明治天皇は巡幸のみちみち、名も知れぬ鄙の山に限りなく心 ふじのとほ山 にけるかか 夕日かげかげろひはてて富士のねのいただき青くみえ みるがうちにふもとの野べはくれはてて空にのこれる がやきにけり そらたかくのぼる朝日にふじのねのいただきあかくか をぐるまのをす巻きあげてみわたせば朝日に匂ふ富士 さしわたる朝日のどけき高どのにわれものぼりてふじ あけにけり 大空にふじのねたかくあらはれてすがすがしくも夜は (うつの山にて…… 11前) (あるあした 28 (眺望 38) Ш Ш 33 37

> れなかったのである まれたが、夕富士を眺めて居て、殿内の暗くなるのにも気づか

山はみな緑になりてふじのねのほかには雪もみえぬ春

これは春の富士

れのころ 大ぞらは雲たちこめて富士のねも久しく見えぬさみだ

さみだれもかぎりなるらむけさみれば雲ぞはれたる富

31

これは梅雨の富士と梅雨明けの富士 高殿にのぼりてむかふ富士のねも雲のあつまる夏はき

夏されば雲ふかくしてかすかにもみえぬ日おほし富士 夏山

ふじのねにつもりし雪もとけぬらむけさいただきの青

おほかたは雪も消えたるふじの嶺にかかれる雲のいろ

(をりにふれて 32)

これは夏の富士

のさやけさ

く見えたる

の遠山

ふじのねの雲のひとひらうちなびき大ぞら高く秋風ぞ

これは秋の富士。爽快の感みなぎる作で、岡田紅陽氏撮影の写

(145)

秋天 31

旅 35

大空の雲まを見ればふじのねのいただきしろく雪ぞつ

(富士山雪 29

秋かぜの吹きはらしたる大ぞらにふじの高ねの雪ぞみ

これは新雪到来の富士

いただきは雲にかくれてふじのねの裾野ましろにつも

ってくるような一首である。 っそう大きく見え、それがべったりと白一色。富士の威力が迫 これは冬の富士。頂上部が隠れている時、裾野のひろがりはい

たという。しかし東京の生活で、もっとも心をお喜ばせしたの は、実に富士山であった。 にさしつかえるから」といって、京都行幸はなるべく遠慮され 天皇はいたく京都を愛されたが、「京都へ出かけると、政治

ふなりけり 鳥がなくあづまにすみてうれしきはふじの高ねにむか (富士山 39

とは、その心持を率直に吐露された一首である。行幸のおりに

朝まだき都をいでてふじのねをふりさけみつつゆく旅 П Ш

心ゆく旅路なりけり大空にはれたるふじの山もみえつ

れたが、

と、さわやかに歌いあげられ、車中では、

まがなぢの車のゆくて空はれてふじのたかねに雲もか

と嘆賞され、「かなぢゆく車ななめになりぬらしおもはぬかた 士を鑑賞され、あるいは「ここちよくはしる車のうちながらあ にみゆるふじのね」(望不二山 45)と車窓に位置を変えゆく富

見えぬのを残念がって居られる。さらに旅行の帰途には、 かぬは富士の見えぬなりけり」(汽車のうちにて 23)と富士の

の芝山 (西京よりかへりける船の中にて 11前)

あづまにといそぐ船路の波の上にうれしく見ゆるふじ

ふじのねのみえそめしこそうれしけれ東路さしてかへ

富士山 42

るたびぢに

と、富士の見えそめた喜びを包みなく歌って居られるのである。 散歩のおりには

こころなく道ゆく時にうれしきは富士のたかねのみゆ

と思いがけず見つけた富士を喜ばれ

るなりけり

ふじのねのけふはいかにと高殿にのぼれば空をうちあ

と、毎日のように心にかけられた。わざわざ富士見の台を築か

とくりかえしその変化のさまを歌われ

見ては、 と有頂天のお喜びである。雲に隠見出没する富士に対しては、 と見えぬ日多きを慨嘆され、 かな かぎりなくはれたる日にもいささかのくもはかかれり りふじの遠山 高殿のすだれまかせて白雲もかからぬ富士の雪をみる れわたりけり 富士の嶺にむかふうてなをあけてみむ空かぎりなく晴 白雲のなかばかかりてみるがうちにすがたかはれり富 じのとほ山 めづらしとさらにみるかな雲間よりあらはれそめしふ ふじのとほ山 むらくものかかればはれてみるがうちにすがたかはれ はれぬ日のおほきぞ惜しきわがそのに富士見のうてな なかりけり 天つそらはれ渡りてもふじのねにくものゐぬ日はすく 士のとほやす つくりたれども そのかわり晴天に玲瓏たる富士を (をりにふれたる (富士山 (山上雲 (富士山 (富士山 (富士山 雪

25

39

たかどのにのぼれど雲の立ちこめて見えぬ日多しふじ 、望富士山 42 31 人でなくては、出てこない言葉である。 仰ぐたびに珍しいと思うとは、富士に対して惚れに惚れこんだ と徹底的に富士に傾倒して居られる。見るたびに新しく感じ、 くりかえし「富士の遠山」と歌って居られるのは、 かねなりけり 天のはらあふぐたびにもめづらしとおもふはふじのた ふじのとほ山 みるたびにあらたまりぬるここちしてはるればあふぐ (不二山 山 富士が遠 45 36

である。 やかにみゆる富士のとほ山」(遠山 と」(旅 こちこそすれ」(山 える日には、「駿河なるふじの遠やまはれぬれば都のもののこ 「はるかなるものと思ひしふじのねをのきばにあふぐ 静岡 のさ すぎることを残念がって居られる心の現われであろう。だから 39)と山麓静岡を羨まれたが、都から富士が近々と見 37)、「ひむがしの都のものといふばかりさ 4)と、いかにも誇らしげ

天雲もいゆきはばかる富士のねをおほふは春の霞なり

40

36

朝戸あけて富士のたかねを見わたせば神代の雪に日か 29

16

この二首は伝承をふまえた作であるが、作者の詩的実感が神話 と渾然融合して、深い讃嘆の声となっている。 萬代の国のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなり

(147)

山 41

を観ずる国家宗教的心情は、近代登山家の胸にもたくましく脈をであるが、この御製は、形骸化した観念ではなくして、今まで多数の実例によって見て来たような、富士山の聖美に対するで多数の実例によって見て来たような、富士山の聖美に対するで多数の実例によって見て来たような、富士山の聖美に対するであるが、この御製は、形骸化した観念ではなくして、今まであるが、この御製は、形骸化した観念ではなくして、今まであ数の実例によって裏打ちされているのである。小島鳥水徹底的傾倒の情によって裏打ちされているのである。小島鳥水徹底的傾倒の情によって見が終れている。富士山を国の鎮めの霊山ともかしこからずや」と書いている。富士山を国の鎮めと仰ぐのは、万葉集以来の日本人の伝統的観富士山を国の鎮めと仰ぐのは、万葉集以来の日本人の伝統的観

九、ふるさとの山

て脱帽したことであった」(私の山谷放浪)という。

絶頂に立って第一に行ったことは、遥かに富士山の方角へ向っしては最初のマウント・ベエカアの火山氷嶺を登攀し得たが、打っているのである。鳥水氏は「米国西海岸に於て、日本人と

明治天皇はふるさと――京都の山をいたく愛された。「ふる 地方の山にむかひてふるさとのみやこのけしきおもひ 地方の山にむかひてふるさとのみやこのけしきおもひ をまた。 では、40)と写真を見てもなつかしがられ、 では、40)と写真を見てもなつかしがられ、 では、40)と写真を見てもなつかしがられ、

と幻に描かれた。そして、ふるさとの山に似た山を見つけて

はるかにもとほくなりけりふるさとに似たるけしきの

山はあれども

45

は

こうきされてきな、

に行幸された時は、

静かなる山のけしきをみつるかな西の都に車とどめて

と、その静寂なただずまいに詠嘆され、ふるさとの景色に我を(山 36)

めとぞなる (山 37)おとでなる

忘れて没入された

のである。ふるさとの山の功徳である。のである。ふるさとの山の功徳である。山をもって心の鎮めとされた朝おきると、まずふるさとの山に向われ、たとえようもない心

一〇、清聖にして悠久なるもの

りけり」(日 42)等、朝のさわやかな心もち、静かで、すがすこそをさな心にひとしかりけれ」(朝 37)、「おのづからねぶりこそをさな心にひとしかりけれ」(朝 37)、「おのづからねぶりにとしかりけれ」(朝 37)、「おのづからねぶりこそをさな心にひとしかりけれ」(朝 37)、「おのづからねぶりこそをさな心にひとしかりけれ」(朝 37)、「おので、すがすりけり」(日 42)、「起きいでて思ふ事なきあした

むかふ朝は

してもまた朝の心を歌われた。がしい気もちを詠ぜられた歌が、しきりに目につくが、山に対

しかりけり (山 35)

なりける (山 38)

る日なりけり (山 40)おきいでてまづうれしきはをちかたの山をさやかにみ

むらぎものこころしづかにおきいでて山をみるこそた

むらぎものこころのはれし朝かなさやかに富士の山ものしかりけれ (朝熊望 42)

れ、またさきに引用した大比叡の歌のように、朝の山が心の鎮等々、くりかえし朝の山に向かうたのしさ・う れ し さ を歌わみえつつ (をりにふれたる 45)

とが、天皇にとって何よりもの喜びであり、御心の安らぎだっめとなると述懐されている。朝起きて、遠山の玲瓏と見えるこれ、またさきに引用した大比叡の歌のように、朝の山が心の鎮

天皇はまた山に対してみずからを顧みて、

むらぎものこころのちりもしづまりぬ富士のたかねににむかひて (山 40)

が、同じような気もちを富士山に対しても寄せられ、の姿勢を正されたのであろう。「あさみどり澄みわたりたる大の姿勢を正されたのであろう。「あさみどり澄みわたりたる大と謙虚に述懐された。毎朝、山を鏡として一日の政務をとる心

久方の空にはれたるふじのねのたかきを人の心ともが の方の空にはれたるふじのねのたかきを人の心ともが

岳湯仰)と述べた言葉をこの御製に添えて味わいたいと思う。 で在す、生きて四方に磅礴し給ふ、人の心の奥深くまで。」(山 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き 大郎氏が南アルプスのカールの雪を讃えて「それは永劫に生き

「大郎といる。山に聖なるものを感じ、宗教的な敬虔な態と詠ぜられている。山に聖なるものを感じ、宗教的な敬虔な態といった。

「大郎である。」といる。

「大郎である。」といる。

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。」

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。」

「大郎である。」

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。」

「大郎である。」

「大郎である。これらの御製は、

「大郎である。」

なりけり (述懐 11前)とことはに動かぬ山を見渡してわがなすわざをなげく

天皇はまた若きころ

天皇は、山岳のもつ巨大さ・崇高さ・清らかさを 讃嘆 されで「初冬の陽の明るい荒涼たる岩の海、静まりかえるモレーンで「初冬の陽の明るい荒涼たる岩の海、静まりかえるモレーンの堆積」を眺めて、「人が五十年、 百年の生涯を生きて、 そして何万年かが過ぎたとき、何が残っているだろう」(尾根路)と と詠まれた。この一首に私は、田渕行男氏が涸沢のカールの底と詠まれた。この一首に私は、田渕行男氏が涸沢のカールの底

(149)

あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山も 一地 38

としもなし 大ぞらのすゑにはれたるとほ山はつちにつらなるもの THE STATE OF 41

を回想して「今よりは鮮かに見えたもので、空っ風の吹く頃な と詠ぜられた。中村清太郎氏は少年時代、東京から見た富士山

ど、お濠の松の木末に冴え返ったその色や形は、全く神々しい ちにつらなるものとしもなし」とは、そのような現実を絶した 現実のものとは思はれなかった」(山岳渇仰)と述べたが、「つ ものだった。しかしそれだけに又、はじめに彼には、何か斯う

神々しさである。 「あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山もありけ

> 年の地と題する御製「産みなさぬものなしといふあらがねの り」とは、まことに悠大きわまりなき感想である。明治三十七

ちはこの世の母にぞありける」には、母なる大地ともいうべき て」の一首にもまた巨大な神話的イメージが揺曳している。こ 神話哲学的発想が濃くたちこめているが、この「土よりいで

造神話的発想と密接不可分である。 の二首の御製において「あらがねの」の枕詞の使用は、天地創 以上見てきたように、明治天皇は山に対して深い情愛を寄せ

治百年を記念して私は、従来看過されて来た天皇の御一面を強 られたのである。まことに明治天皇は山岳愛好歌人である。明 られ、山に対する感情・思想を数々のすぐれた御製歌にとどめ

調し、あらためて全国の岳人とともに、この偉大な山の天皇を

敬慕したいと思うのである。

ら見える限りの山々を登りつくす」ことを念願として、四十数も素朴の形で表現したものといえよう。それはまた「新潟市か県境全縦走踏査登山は、そうした山に憧れる人のねがいを、最

後の県境を探る

越

=新潟県境全縦走踏査登山=

日本山岳会越後支

部

はじめに

「大がなにか物事に打ち込むときには、その対象をより深く識り、強く摑みたいと願う。登山という行為も例外ではない。人り、強く摑みたいと願う。登山という行為も例外ではない。人の心が山に対して魅力を感ずるとき、そこに愛情が芽生え、探のを、安易よりも困難を求める感情となり、例えばヒマラヤののを、安易よりも困難を求める感情となり、例えばヒマラヤののを、安易より、というでは、その対象をより深く識越後支部が、創立二十周年の記念事業としておこなった新潟

に、新らしい視界が展けたような思いで、私等の心は越後の県って、県境を歩くという着想は魅力的であった。ある日突然って、県境を歩くという着想は魅力的であった。ある日突然って、県境を歩くという着想は魅力的であった。ある日突然のに、新らしい視界が展けたような思いで、私等の心は越後の県別に、新らしい視界が展けたような思いで、私等の心は越後の県

境線という眼に見えない目標に向かって、ぐんぐんとのめり込

んでいったのである。

と、そこには知らずに過ごしてきた空白の部分が、なんと多いできた越後の山々ではあるが、これを線で結び指で追ってみる郷土の山として私等が先輩から引継ぎ、長い年月を登り親しんた六八七粁の県境線は、あまりにも遥かな長さに感じられた。

(151)

県境の山々は、磐梯朝日、日光、上信越高原、中部山岳と四つの国立公園に跨り、年ごとに開発整備されてはいるが、それでもなお県境線に拓かれた登山道やダムの湛水面等、明らかにされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、漸く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、本く全コースの五分の一に過ぎず、残るされた距離を併せて、本の県境線を忠実に辿ることが、できるものかどうかという不安も消し難かった。

遥かにけむる稜線と、果てしない広葉樹林の拡がり、執拗な低木藪を押し分けて、風雨の岩稜を踏み越えて、あるいは霧走ない。その成否はパズルと違って、机上で解答を出すことができみ。その成否はパズルと違って、机上で解答を出すことができない。それを解決するのは、縦走踏査行に参加する人々の熱意と、経験に裏付けされた登山技術だけである。

「越後の山男に、私等の仲間に、やってできないことがあるもか、藤島支部長は確信をもって断言した。ときから、既に数々の困難と危険を予想される企てではあったと

のか」と。

計画を立てる

昭和四十年六月の支部総会で、県境全縦走踏査の実施が決定

し、新潟県の登山界に計画を発表したとき、私等のためらいはし、新潟県の登山界に計画を発表したとき、私等のためらいは 下の山岳会から続々と踏査隊参加の申し込みがあり、四十五団 下の山岳会で他の好意的な側面協力があって、この山行に一 も、山岳会その他の好意的な側面協力があって、この山行に一 を、山岳会その他の好意的な側面協力があって、この山行に一 も、山岳会その他の好意的な側面協力があって、この山行に一 を、山岳会とができたのである。山で結ばれた友情の 頼もしさ、組織の持つ力の大きさ、それらをこの時ほど強く、

越後支部の委員で構成した実行委員会が、打ち出した踏査計嬉しく感じたことはない。

画の概要は次の通りである。

目的(六項目のぬきがき)

学の研究に寄与する。

文が県境周辺地域の踏査を実施し、未知の自然景観の発掘、及び県境周辺地域の踏査を実施し、未知の自然景観の発掘、及び県境周辺地域の踏査を実施し、未知の自然景観の発掘、返後支部創立二十周年を記念して、新潟県境山岳の全縦走

越後支部会員並びに友好登山団体の親睦と団結を深める。自然保護と遭難防止運動を推進する。

凼 查 時

期

昭和四十一年三月から六月までの間に重点を置く。

別動隊を編成して踏査活動の万全を期した。 とした登山を各隊毎に実施することとし、また人文調査班等の したが、その際の踏査資料が不充分の場合は、再度踏査を主体 行動日程の短縮を図った。また全県境線の完全縦走を第一義と 域であるために、実施時期を残雪期に選んで、登山の安全性と 県境線の八割が道もなく、資料も殆んど得られない未踏の領

踏 查 区 分

区 朝日連峰地区

鼡ガ関~日本国~朝日連峰~鷹ノ巣山~白布峰~貂戻岩~荒

荒川~大境山~飯豊連峰~阿賀野川 飯豊連峰地区

御神楽・浅草岳地区

第四区 阿賀野川~金凍山~貉ガ森山~中ノ又山~八十里越~浅草岳 奥只見・谷川連峰地区

浅草岳~毛猛山~大鳥岳~銀山湖~平ガ岳~谷川連峰~三国

第五区 白砂・苗場山地区

第六区 三国峠~白砂山~苗場山 関田山塊地区 ~高倉山 ~信濃川

> 信濃川~天水山~黒倉山~ 斑尾山し 関川

第七区 戸隠・雨飾山地区

関川~高妻山~天狗原山~雨飾山~

第八区 白馬岳地区

姫川~乗鞍岳~小蓮華山~朝日岳~長栂山~犬ガ岳~白鳥山

~玉ノ木

査隊本部の指令に基づいて、規律ある登山をおこなうこととす 慮して各自に踏査行動をおこす。但し各踏査隊及びブロック間 編成した踏査隊がリレー式ではなく、担当地域の登山条件を考 の計画進捗、 全県境線を八区分して各ブロック長の掌握下に、 踏査実施については互いに緊密な連絡をとり、踏 参加団

る。

踏 查 項 Ħ

人文

A 的施設の調査。 登山道、 林道、 山小屋、 狩小屋、 指導標、 その他の人為

查

C

山村の風習行事、

信仰、

祭祀、伝説、

産業、

遺跡等の調

B

山

沢等の地名及び山岳語彙の収録

一、地形·地質

B 池塘、水場の調査と水質調査 岩石及び鉱物資源の調査と採取

(153)

C 雪崩、残雪状況の調査、観察

三、動植物

A 植物分布の観察と目録作成

B 動物、野鳥、昆虫の観察と、自然保護に必要な調査。

四、気象

天気傾向と天気図作成。
天気傾向と天気図作成。
、風速、気温、雨量、雲量、

五、観光

A 自然景観の撮影と踏査行動の所要時間及び新コース開発

B 地元市町村の要請による観光資源調査。

使用した筈である。

使用した筈である。

を、記録用フィルム(カラー一○○本、白黒一五○本)の購入や、記録用フィルム(カラー一○○本、白黒一五○本)の購入

この計画で最も慎重に検討されたのは、

全縦走の基本方針で

隊員の自費自弁として快よく諒解を得たが、それでも計画書そここで本計画の資金繰りに触れてみると、踏査行動の総ては

ブロック会議等も活気を帯びて、いよいよ本格的な準備活動がブロック会議等も活気を帯びて、いよいよ本格的な準備活動が対面の趣旨を理解してくれて、十五万円の補助金交付が決まり、当座の出費はそれによって賄うことができたが、スタッフとしては、隊員達が「越後支部のために」あるいは「登山を通じて郷土開発に尽そう」と、物心両面の負担に喜こんで耐えてくれる姿を見ると、矢張り心苦しくもあり、山仲間の心意気にくれる姿を見ると、矢張り心苦しくもあり、山仲間の心意気にくれる姿を見ると、矢張り心苦しくもあり、山仲間の心意気にくれる姿を見ると、矢張り心苦しくもあり、山仲間の心意気にいる。といい、山男の才覚は所詮「取らぬ狸の皮算用」ことにした。しかし、山男の才覚は所詮「取らぬ狸の皮算用」

れて、踏査隊員一同に漲った。 送るとともに、私等の計画に対する自信と闘志はさらに昻揚さニュースがもたらされ、(『山岳』第六十一年参照) 朗報に拍手を れて、踏査隊員一同に漲った。 はじまったのである。

隊員相互の信頼と交流の生まれ育くまれる所以が ある。 即ち参加して、踏査隊員としての喜びと責任を分け合うところに、たのでは計画の意義が半減する。山を愛する多くの人が直接にあった。海外遠征登山のように、限られた人数で事をおこなっ

ければならないので、

他の印刷費や、最少限の必要資材を購入する費用は確保しな

協賛委員制度を設けて資金の援助を願う

b

踏査とは言っても、

登山行動だけでも非常な困難を予想されコースの絶対部分が地元の人々さえも知

と結束を強めるということが、計画の大きなポイントであっと結束を強めるということが、計画の大きなポイントであった。

八つの地区をさらに細分割して、単位団体毎の担当地域を作ったのは、踏査隊のチームワークを生かし、各隊の力偏に相応し、コースを分担してもらいたかったからで、これもブロック長の適切な配慮と、各隊の和やかな話し合いで、全ブロックの長の適が軽くなったことである。

登山行動の主目的は勿論県境全縦走の達成にあるので、可能の限り県境線上を忠実に踏むことが建前となるが、行政上の措置からか、部分的にはラインが渓谷の底を通ったり山腹を捲いたり、あるいは二つの三角点間を一直線に通して、沢も断崖も意に介せずといった所もあるなど、実際には完全なトレースの不可能な地点が多いために、原則として推定される境界線の両不可能な地点が多いために、原則として推定される境界線の両不可能な地点が多いために、原則として推定される境界線の両がは、路査隊のアプローチや支援隊の行動地域も含めた、けでなく、路査隊のアプローチや支援隊の行動地域も含めた、けでなく、路査隊のアプローチや支援隊の行動地域も含めた、は範囲なものとした。

とは、多分に隊員の精神的負担を重くするであろうし、また路 査項目の多くが、それぞれ専門的な知識や経験を必要とするこ となので、詳しい分析や解明は専門筋に資料を提供して研究願 うことにして、隊員はおのおのの知識と判断に従って、無理の ない調査収集をするように指示した。つまり本部としては、路 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 査は県境全縦走の副産物という考えでいたのであるが、しかし 本部とれだけ自然科学の観察をやれるか、地域行政の資料を集めるかということに期待が持たれもしたし、またそれらの課題 めるかということに期待が持たれもしたし、またそれらの課題 めるかということに期待が持たれもしたし、またそれらの課題

各隊が行動をおこす直前の四十一年三月に、責任者百名を招集した研修会では、地質、気象、動植物、民俗等について専門の権威から熱心な講義を受けたが、これが実地踏査の際に大きく役立って、調査収集の成果に輪をかけたことは言うまでもない。

なプラスをもたらすことになろうと信じていたのである。

求め得たもの

団体の持ち味を生かして、意欲的な踏査登山をおこなった。日 (ったが、各隊は予備踏査を含めた約半年の期間に、それぞれの 155) (154) (155) (

逆縦走、継走と多様の登山形式で伸々と行動した。は成就する訳であったから、各隊は自由に日程を組み、集中、時を問わず、担当区間の接点を互いに踏むことによって、縦走

「健闘有難う」と頭を下げるのであった。図を睨んで、隊員の無事を祈ったが、電報や電話で次々と「縦図を睨んで、隊員の無事を祈ったが、電報や電話で次々と「縦図を睨んで、隊員の無事を祈ったが、電報や電話で次々と「縦

密かに怖れていた遭難対策も杞憂に終り、行動全般を通じて一件の事故も惹起させなかったことは、それが決して単なる僥存ではなくて、踏査隊の慎重な準備と行動、隊員一人一人の不体力行の成果として、次の各項を挙げる。

一、新潟県境六八七粁の完全縦走を果した。本山行の成果として、次の各項を挙げる。

図作成の資料を得た。

た。 民芸品や山の産物、交通など僻地振興に関する調査をしめ、民芸品や山の産物、交通など僻地振興に関する調査をした。

用カラー写真が集まった。
四、各隊が選び出した約二千枚の記録写真と九百枚のスライド

等を採集した。

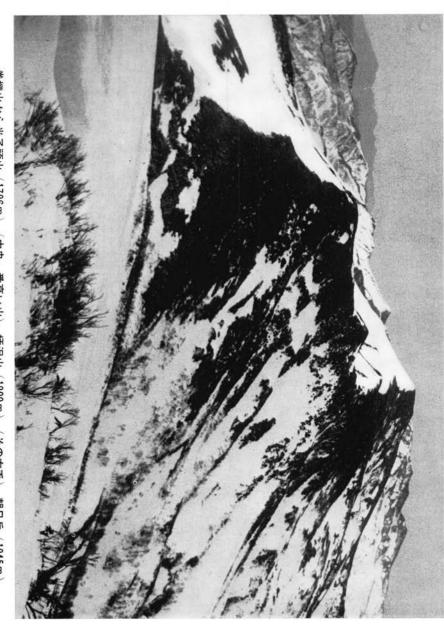
現況および改善に関する資料が集った。

と得た。を得た。を得た。

通して、県境周辺の現況と縦走踏査行の概要を報告する。備中の『踏査報告書』に委せて省略し、ここでは各隊の行動を以上のように収集した各資料の詳細については、目下出版準八、踏査団体相互が親睦交流の実を挙げ、同志的結合を深めた。

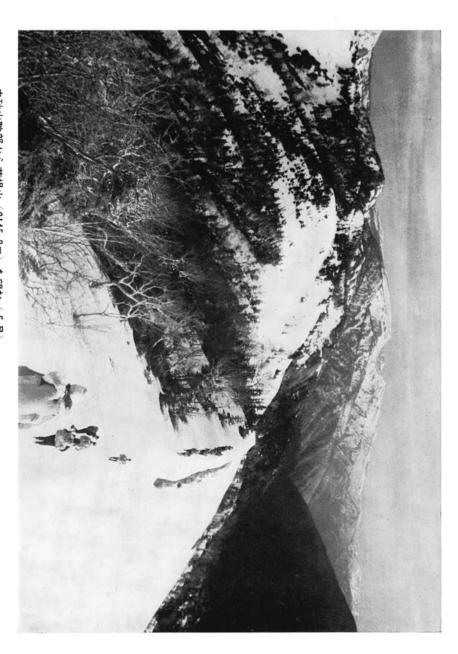
県境の姿と踏査隊の動き

新潟県は本州のほぼ中央部に、丁度本州を縮尺したような形で南北に延びており、その西北側は日本海に面し、弓状の県境で南北に延びており、その西北側は日本海に面し、弓状の県境線は山形、福島、群馬、長野、富山の五県と接して、東北から線は山形、福島、群馬、長野、富山の五県と接して、東北から線、下越の三地区に分けられているが、そこに属する山々も、されぞれ上越の山、下越の山と呼ぶに相応しい個性と、バラエそれぞれ上越の山、下越の山と呼ぶに相応しい個性と、バラエぞィーを備えて登山者を楽しませている。尤も厳密にはどこまでを下越と言い、どこからを中越と見ればよいのか、山岳の区分はやや漠然としているので、ここでは便宜上、信濃川、阿賀別という日本の代表的な長流が、県境を切断している地点を、上中下越の境界とみなして説明の目安とする。

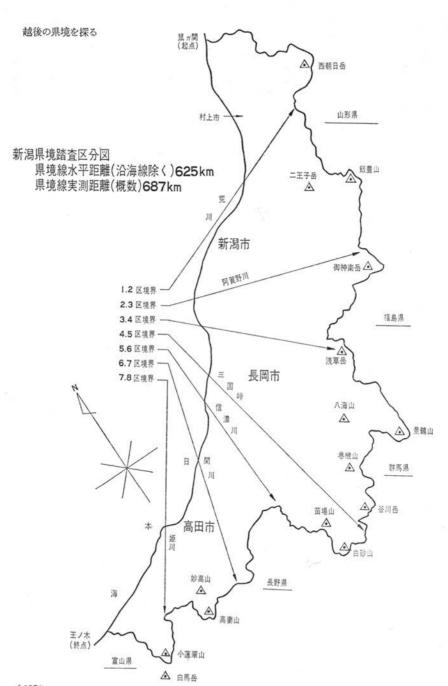


Komego-no-Atama (1796m) 巻機山から米子頭山(1796m) (その右手)を望む (center), Karasawa-yama (1900m) (left) and Asahi-dake (1945m) (中央一番高い山)、柄沢山 (1900m) (その左手)、朝日岳 (1945m)

(right) seen from Makihata-yama (1960m) (in May), Echigo District.



自砂山鞍部から苗場山(2145.3m)を望む(5月) Naeba-san(2145.3m)seen from the Shirasuna-yama Col (in May), Echigo District.



県境線の起点を北にすると、鼡ガ関から阿賀野川までの約一九二粁が該当し、ここでは飯豊、朝日の両連峰が大きなウエートを占めている。しかし県境線上の道としては、連峰主稜に開外の一六○粁は殆んど登山の対象にされたこともなく、踏査の予備資料も皆無に等しい未開地域である。恐らく今回の踏査の予備資料も皆無に等しい未開地域である。恐らく今回の踏査の予備資料も皆無に等しい未開地域である。恐らく今回の踏査の予備資料も皆無に等しい未開地域である。恐らく今回の踏査の予備資料も皆無に等しい未開地域である。恐らく今回の踏査がある。

飯豊連峰は新潟国体の舞台となって以来、地元市町村が目覚めて、急速に登山施設が整備されてきたが、朝日連峰は国立公めて、急速に登山施設が整備されてきたが、朝日連峰は国立公園指定当時に、朝日村三面から主稜の寒江山に至る登山道を伐関したのが唯一のもので、それも交通の不便が禍いして登山者開したのが唯一のもので、それも交通の不便が禍いして登山者関立公園地内でもこんな状態であるから他は推して知るべし国立公園地内でもこんな状態であるから他は推して知るべし生林に覆われ、あるいは猛烈な潅木藪や根曲竹の領分となって生林に覆われ、あるいは猛烈な潅木藪や根曲竹の領分となって生林に覆われ、あるいは猛烈な潅木藪や根曲竹の領分となって

体(一七○名)が、十二に分割したコースの縦走踏査をおこなこの地区は第一、第二ブロックとして下越方面の十四登山団

った。

各資料に十二年間も誤って記載されていたのを発見して、県か本国(五五五メートル)という低山帯のために、一五粁の藪山歩本国(五五五メートル)という低山帯のために、一五粁の藪山歩本国(五五五メートル)という舌労の多い山行をしたが、その前後四回に亘って人文、地質、気象等の克明な調査を 実施 して い四回に亘って人文、地質、気象等の克明な調査を 実施 して い四回に亘って人文、地質、気象等の克明な調査を 実施 して い四回に亘って人文、地質、気象等の克明な調査を 実施 して い四回に亘って人文、地質、気象等の克明な調査を 実施 して いるの紹介をはじめ、地名の語源追究、歴史や風俗の見聞記録も興かる。

隊員を喜ばせた。 隊員を喜ばせた。 隊員を喜ばせた。

ら感謝されるというエピソードもあった。

大千畳敷坑内は三五〇平方メートル、高さ三〇メートルの大空産出したとのことで、九合目から五合目にかけて掘り抜かれ、底の金産出量を誇った高根金山がある。これは近傍の駒ガ岳、焼峰、鳴海山三金山の総称で、中でも鳴海山が最も多量の金を焼峰、鳴海山三金で、九合目から五合目にかけて掘り抜かれ、高さ三〇メートルの大空大千畳敷坑内は三五〇平方メートル、高さ三〇メートルの大空大千畳敷坑内は三五〇平方メートル、高さ三〇メートルの大空大千畳敷坑内は三五〇平方メートル、高さ三〇メートルの大空

の資料としても、

大いに役立つものと思われる。

われ、豊臣から徳川時代に栄えた金山の遺跡が、昔のままに残っている。今でも車道終点から徒歩十時間の山中に、大規模なっている。今でも車道終点から徒歩十時間の山中に、大規模なかされるが、廃坑となってからの幾星霜を、殆んど顧みられることもなく過ぎてきた貴重な遺跡を、無為に放置しておいてよいのだろうかと、村上隊は訴えている。地元の岩船郡朝日村でいのだろうかと、村上隊は訴えている。地元の岩船郡朝日村でいのだろうかと、村上隊は訴えている。地元の遺跡が、昔のままに残れているが、佐渡金山にも匹敵する文化財として、今後の研究と保護を期待したいものである。

洞

小千畳敷坑はさらに地下一二五メートルも掘り進んだとい

象について勝れた記録を作成しており、下越地方の積雪期登山山、蕨峠と南下する二一粁の稜線は、ピオレ隊の活躍でトレーム、 山形側の五味沢、徳網の猟師が熊を追って入るほかは、人の訪れを見ない地域であるが、四月上旬にアイゼン領域の上半部を、下旬には下半部を主にしてと、二回に分けた踏査で縦走を果した。ピオレ隊には気象台の職員が隊員として、春山の気を果した。ピオレ隊には気象台の職員が隊員として、春山の気を果した。ピオレ隊には気象台の職員が隊員として、春山の気を果した。ピオレ隊には気象台の職員が隊員として、春山の気を見ない。

山々とは思われない重厚なムードと、貂戻岩、鳥帽子岩の奇勝と二十回を越す精勤ぶりであった。一○○○メートルに満たぬは形の両面から十二回の登山を実施したが、人文調査を含める蕨峠から荒川まで二八粁の山塊を担当した峡彩隊は、新潟と

を誇り、登山の対象としても興味深い山群であると報告していを誇り、登山の対象としても異晴しく、登山者の関心を集めることに連峰の展望台としても素晴しく、登山者の関心を集めることに連峰の展望台としても素晴しく、登山者の関心を集めることになろう。

て、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期七、八月の三回で縦走を完了した。路査に重点を置いて無雪期

荒川から飯豊の主稜に続くコー

スは、

地元の関川隊が五

活動に従事してくれたことは、本計画の趣旨をみんなが理解と中下越を問わず、いずれも本部の期待を上回る熱心さで、踏査中下越を問わず、いずれも本部の期待を上回る熱心さで、踏査中下越を問わず、いずれも本部の期待を上回る熱心さで、踏査を終了した。

共感をもって支持した証拠であり、 よく現わしたものといえよう。 また越後の山男の誠実さを

中越地区

体 (二六〇名) によって踏査された。 巡って登山者の憧れの山々が連らなり、興味ある対象となって 後半は銀山湖、尾瀬ガ原、巻機、谷川連峰、苗場山と上越線を 境が、登山者にとって全く未知の暗黒地帯であるのに較べて、 の宮野原橋までの三一一粁で、三、四、 し、長野県を流下する千曲川が信濃川と改名する、飯山線沿線 この地区は、 阿賀野川に沿って磐越西線徳沢駅付近を起点と 前半部の浅草岳までの県 五ブロックの二十三団

いる。

最悪の条件が揃っていたが、亀田、栃尾、加茂等の八団体が二 山で、会越の県境を綴っていて、縦走の可能性を疑わせるほど 的を全うした。隊員百余名を動員したこのブロックは、合同会 と支援隊が「混然一体」の見事な協力ぶりを示して、所期の目 区間に分けたコースを、混成パーティーでアタックし、縦走隊 えて立派なチームプレー を見 議や偵察、総合強化合宿等の準備段階から、各団体が歩調を揃 第三区は、 若松街道の鳥居峠から浅草岳までは、登山者と縁のない山 頼もしい実績を残した。 御神楽岳と貉ガ森山の間に若干の記録があるもの せ 登山団体親睦の好例として

が多い。

第四区は鬼が面山を越えて、毛猛、未丈、大鳥ダムまでを小

塩沢隊はコースの再確認と資料の充実に努力して、さらに六、 であったが、事前調査に万全を期して、立派な成果を納めた。 当した。殆んどの隊がゴールデン・ウィークを利用しての山行 隊。殿りの谷川連峰を三国峠まで、三条の秀峰隊がそれぞれ担 ノ岳の間を六日町隊。巻機から柄沢山を経て蓬峠までを堀之内 水嶺を小出隊。大水上、巻機山周辺を塩沢隊。 千谷隊。 奥只見、尾瀬、 景鶴、 平ガ岳など只見川と利根川の分 同じく巻機、

町など三団体が同じく協力調査した。 ど五団体が、第三プロック同様に混成部隊で三国班として担当 し、苗場西面の硫黄川から信濃川に至るコースを、 第五区は、三国峠から苗場山までを長岡ハイキング、湯沢な 津南、

七、八月と踏査登山を重ねている。

を味わい、 境伝いの登降となると、全く未知の山に変貌する感が強く、山 山者に親しまれている山が多くあるが、従来の観念を捨てて県 の持つ多様性に戸惑った向きもあり、それだけに登山の充実感 中越地区には、古くから登山道や山小屋の施設が整って、 山が一層身近なものになったと、喜こんでいる隊員

に季節旅館に変身するし、新緑のシーズンには、山の幸と民宿 観光開発に対する関心も高く、スキー場周辺の農家は、軒並み 在していて、冬の観光地としても活況を呈する。従って地元の 上越線の沿線には、 新潟県内だけでも二十六のスキー場が点

致に力を入れている所が多い。 を楽しむ山菜列車も運転されはじめるなど、 町ぐるみ観光客誘

想など、 する施策の強化がさらに望まれることになる。難かしい問題で になろうが、 瀬奥只見スカイライン」のコースも決りつつあるなど、 で登山者を惹きつけている。 ダム湛水湖等が出現して、 巡る道路計画の進展に伴って、 して有名な尾瀬の大景観を抱き、 秘境銀山平を水没させた銀山湖をはじめ、 此処はまた福島、 県が魚沼の山々にかけている観光計画への期待も大き それに関連して自然公園の管理など、 帯の国定公園指定運動や、 群馬、 地理的にも大きく変り、 しかも、 新潟の三県境に特別天然記念物と 開発のピッチもグンと上ること 近年は只見川水系の電源開発 只見川と尾瀬を結ぶ 魚沼スカイラインの構 田子倉湖、 自然を保護 新しい魅力 尾瀬を

上越地区

ら北上して雪倉、 山塊が現われ、 の領域に入り、 信濃川を越えると、 遥か七○○粁の彼方から南下してきた県境線は、 天狗原山と、信越県境に登山者の盲点のような山々を起し 雨飾山へと連なっている。 続いて戸隠連山の高妻、 白馬連峰の乗鞍、 朝日、 天水山から斑尾山まで延々六九粁の関田 犬ガ岳と走り、 そして姫川を渡ると北アルプス 小蓮華山と県下の最高峰とな 親不知の険を最後に飛 乙妻から柳原岳、 三国境か 薬師

> 騨の山脚を日本海に没している。この一八四粁の山波を第六、 八区として担当したのは、 上越地方の八登山団体であ

た。 七、

関田の山々は、

信濃川の上流千曲川とほぼ平行に起伏し、

術のように隠してしまうこともあるからである。 が、その単純さ故に、 私等に、ときにはひどい錯覚を起させる。 三団体は、予想外の苦労を強いられたらしい。 のであったが、此処を共同で踏査した高田、 本の峠道が県境を横切っていて、 隊員を反省させているが、 て踏査隊を悩まし、「我々の行動は失敗の連続であった」と、 とが判る。こうした地形に、 のように錯綜した尾根と、 を消した関田の山々を見ると、 丘陵に近い感じで、縦走コースとしては比較的容易に思われ の交流の深さを物語っている。 山街道をはじめ、 五日間で踏破した第六ブロ 現在は廃道となっているものも含めて、十六 等高線の表現している複雑な地形を、 殆んど登山記録もない七○粁の行程 数えきれない小突起を持っているこ 網の目のような薮の脅威が加 低山の通例で、この山塊が迷路 地図を見ても、 ック隊の健闘と、 昔から頸城と信州飯山地方と 柿崎、 地図の境界線は 本の簡潔な破線 山塊というより 試みに県境線 適切な継走策 高田電

戦は讃えてよいものであろう。

隊を合せると、 など山麓の村々で資料収集をおこなったが、支援、輸送、 域の踏査は四月に実施した。また人文調査隊が、大久保、 トルラインの縦走を完了し、戸倉山のピークを頂点とする低 乙見山峠から薬師、天狗原経由で雨飾に達して、二〇〇〇メー たが、これも恐らく初めての記録として残ることであろう。 遡行して、県境線に懸る苗名滝など四本の瀑布群を試登観察し 視野を拡げるなどの良い結果が得られた。また妙高隊は関川を や行動時間を比較したり、お互いの不備をカバーして、 よって、踏査の充実を図ろうとの考えからで、事実、残雪状況 って観察も行動も異るので、両者の収集資料を総合することに 日の間隔をおいて同じコースを縦走踏査したが、これは人によ 妙高と日曹隊は、 二江津隊は三月に雨飾山西南の県境尾根を攻略し、五月には 四十八名の隊員が出動して、踏査活動に励んだ 四月下旬から五月にかけての残雪期に、 調査の 通信 Ш 九 П

切っていて、地図によってもこの間のトレースは無意味と思わ切った人外境である。このうち糸魚川隊担当の、白馬大池から東・朝日岳間の一五粁に縦走路があるだけで、その他は想像を断北約二粁の千国揚げまでの県境線は、乗鞍岳の急峻な山腹と弥北約二粁の千国揚げまでの県境線は、乗鞍岳の急峻な山腹と弥北が上部を、最大高低差六○○メートルを示して一直線に突がっていて、地図によってもこの間のトレースは無意味と思わりった。此処も白馬大池川隊と電化青海のさわがに隊がアタックした。此処も白馬大池川隊と電化する。

に幾個所もあることは、登山とは関係のない行政上の問題だとい、未だに境界未定として地図上にラインのない地域が、県境の尾根を歩いた。それにしても、こうした境界の決め方とい報いられるものがないとして、やむなく長野県側の天狗原経由れたが、現地での隊員の判断からも、労力と時間の浪費以外にれたが、現地での隊員の判断からも、労力と時間の浪費以外に

当り、一週間を費して完全縦走を遂げた。
ームグラウンドとしてマスターしようと、非常な熱意で踏査にがに隊にとっても、全く未知の場所であったが、この機会にホびに降にとっても、全く未知の場所であったが、この機会にホ

しても、気にかかる。

信支援をおこない、その行動を助けるとともに両隊の友好を深糸魚川隊はこの間、蓮華温泉を基地として、さわがに隊の通

めた。

に変貌したいま、広域観光、資源開発の波が押し寄せるのも遠野線の隘路であった親不知子不知の難所が、快適なハイウエー断する朝日スーパー林道の開発計画が進められており、国道八断する朝日スーパー林道の開発計画が進められており、国道八

いことではあるまい。

さらに厳しく感じられるのである。 象条件が遠因となって、 成する山岳地勢と、 どでも新潟県とはかなりの格差が感じられた。 いる各県は、 れらの悩みは新潟県だけのものではあるまいが、 大気、 掛声だけが、 村の生活に触れてみても、 命的な政治経済の日蔭に生きてきた悲運が、 ようでも、 発展の可能性を多分に秘めて眠っているという感じである。 踏査行動を通じて見た県境の山々は、未知数の魅力を湛え、 地域開発の進歩が見られ、登山施設は勿論、 保健福祉面の解決と向上を切望する住民の声も大きい。 緑濃い谷間、 現実には無医村の悩み、 上滑りしているように思えてならない。変やかな 比較的に村落が県境線に至近の距離まで迫ってい 明るい高原と牧歌的な環境に恵まれている シベリア気団がもたらす卓越風や豪雪の気 裏日本という名のもとに、 まだまだ辺境開拓、 交通や教育施設の乏しさ 越後の山間部では 本州の脊梁を形 僻地振興という 林産、 境界を接して 往古から宿 交通な 2 Ш

還り、 発事業は盛んで、 きといった山仕事の範囲も狭くなったので、 水準も向上してきたし、 最近は漸く山里にも電化が進み、交通も開けて、 在 々減ってゆくことであろう。 道の往来もさびれて、人々が素朴に山を利用する機会 飯豊と朝日連峰をそれぞれ横断して、新潟 産業の近代化に伴って、 その一 方、 古い山道は自然に 巨費を投ずる開 熊狩り、 人々の生活

0

るが、 県、 ともできないであろう。 知れない。 両輪を、 ば、自然を愛する者の道義心や感傷だけで、 る役を果そうし、 への挑戦と破壊も、 道開発、そして山を震わせるダムのメカニズム。そうした自然 山形を繋ぐ自動車道路建設の計画が、 市町村等の行政機関の積極的な指導で、 奇想天外だと驚いているうちに、 スムーズに回転させてほしいものである 会越産業道路や国鉄只見線の貫通、 地域振興、 一面では埋もれていた山々に脚光を浴びせ 国立公園協会等の自然保護団体や、 観光や天然資源活用のためとなれ 地元町村で検討されてい 遠からず実現するかも 開発と自然保護 一概に拒否するこ 各地に盛んな林

踏 査隊の行動記録

県境西端の山を行く

四

月十三日、

晴。

縦走踏査隊六名は同夜県境に近い市振駅に

第八区

さわがに山

五岳会

たが、 下車、 す。大平対岸の県境尾根取付きは凄い雑木藪である。 に記念撮影。 て県境の海水で洗顔する。 右岸を進み、 十四日、 鼡の歓迎で入山前夜はあまり眠れなかった。 王ノ木公民館に泊まった。 晴。 親不知の天嶮の海面が薄赤く輝きはじめた。 二時半起床。満天に星が煌いて爽快。 上路川で左岸に徒渉。 出発準備を完了して県境表示板を背 最後の打合せをして床に就 早朝の雪解水に肝を冷や バックし 海岸に出

宝尾根には、 出発する。稜線は至る所にクレバスが口をあけ、 バーの眼に、日本海から黒姫山、 揚げ食糧を回収し、南面した頁岩の露頭から多種類の化石を採 した雪の斜面に、橅の大木が散在している。菊石山の手前で荷 い積層雲となって現れた。今日中に犬ガ岳を越えようと元気で 焼音と元気な話声が調和して、静かな春山の夕暮れとなった。 ながら大平側に場所を探して幕営とした。耳馴れたコンロの燃 が、重装備で初日のペースとしては順調に運んだと、皆を労わり 六時過ぎ、予定していた食糧荷揚げ地点には到達できなかった い。主稜南側の急斜面は既に雪が崩落して低木薮が出てい の緩登で広々とした白鳥山の頂上に立つ。口元のほころぶメ は、長くて辛い。頂上近くの岩の露頭に県境標石を見る。 雪の大斜面である。 始まる。大平川側は橅の大木が続き、大滝谷側は厚く重そうな た。雪が地肌を消し日差しが強くなると、雪面に雪虫の活動が 杉謙信の古戦場城山が丸い頭を突出し、境川の流れに光ってい て小杉谷から稜線を目指す。振返えると大平の村落の上に、 十五日、曇後小雨。昨夜描いた天気図の予想が、 菊石山の登りにかかる一二二〇メートル峰の手前鞍部が 稜線上の厚い積雪は金山谷側に大きなクレバスを作って 可成りの時間を費した。 我々の伐開した道があり、 白鳥山へ続く突起の一上一下のラッ 菊石山から北東に派生する三 目差す犬ガ岳の展望が素晴 万一の避難路に考えて 金山谷は堆積 西空から濃 七 た E ル V

を揺すり、天幕キープで眠れぬ夜となった。

だ。日暮れとともに、大平の谷から吹上げる強風が烈しく天幕

クを積ん

いたが、今回は使わずにすみそうである。

配置になりそうなので、 前途の長さに自重して、正午だが急いで設営して天幕にもぐり を窺いながら犬ガ岳へと痩尾根を辿るうちに本降りとなった。 に真新しい熊と羚羊の足跡を見た。遂に小雨が降り出 で、大平川の支沢の名前から引用されたものらしい。 一六時の天気図では、低気圧が日本海を通過後に冬型の気圧 黄蓮岳は菊石山の南鞍部から登り詰めた一三五〇メートル峰 全員で天幕の西側にブ 頂上付近

美をみせていたが、観賞の余裕もなく、 る。東西に長い平頂は、 場を避け、東側の雪上をトラバースしてから急斜面を直登す 雨は激しく、全員アンザイレンしたが、 する自信も加わり、午後に強行出発した。稜線へ吹き上げる風 ラジオが僅かに天候の回復を報じたし、犬ガ岳付近の地形に対 が、夜半から猛烈に吹かれて、積上げたブロックは風雨のため 立往生する。犬ガ岳の登りで雨は霙になった。頂上直下のガラ 強する。眼前の犬ガ岳は濃霧に隠れ、 に消滅していた。衰えぬ風雨に今日は沈殿と覚悟して天幕を補 十六日、強風、 雨後雪。二ツ玉低気圧の通過は 五葉松と石楠花の霧氷が素晴しい造形 風は益々強くなっ 高く積上げた平均五〇 しばしば息をつけずに 予想 できた

又谷の側にはサワラ、 緩降を繰り返えす。

石楠花、

五葉松の薮が新雪を被っ

て

小滝川西俣沢側に雪庇が大きく張出し、

北 v

は凍結して山は完全に厳冬にかえった。 で生命を護る暖かさを取戻すと、 岳から二つ目の峰を降ると、 キロ近い重荷のために、 わったが、富山から新潟へ吹抜ける風雪は天幕を揺すり、 た雪面を掘って設営する。実に苦痛の登行だったが、天幕の中 れた風雪の中では、これ以上の行動は無理と感じ、クラストし 今日は青海町のお祭りだったと、 霙は吹雪に変って、低木薮を新しく埋め始めた。犬ガ 風圧と軟雪に足を取られて転倒の連続 尾根は急に広くなり、視界を絶た 皆の表情も和らいできた。 お祝いの御神酒も程良く主 万物

する。雪と霧の混合したような中で、出発早々に北又川側の広 ける粉雪は、 が張出して停滞し、厳しい冬型の天候が続く。休みなく吹きつ い支尾根に迷い込み、気付いて戻ったときは一時間を浪費して に花を咲かせて、山男にとっては矢張り楽しい一日となった。 は危険と沈澱に決定。いささか時間を持て余したが、歌や議論 より遅れたので、凍って畳めぬ天幕を漸く撤収して八時に出発 く。しかし天気は快方へ向う前兆があり、 十八日、雪。風は幾分弱まったが、雪は依然として 降 十七日、吹雪。低気圧が太平洋に抜けると、日本海に高気圧 時間がたつに従って霧も薄くなり、 ブロック壁を越して天幕を埋没する。今日も行動 広い県境尾根の緩登 コースの消化も予定 . り続

> になった頃に黒岩山(一六二四メートル)の三角点を確認してホ ッとする。 た。霧の雪稜の登降で現在位置がはっきりせず、 ○九メートル独標の平頂を越すと、栂が枝を垂れて現われてき 物の変化に注意し、進行方位をチェックして慎重に歩く。一六 行程は遅々として捗らないが、霧の中でも岩盤の露頭や植 何となく不安

る。

か。黒負山から長柵山のシルエットを、 上に飛び出した。見えない星座がないくらいに空一杯の青い であった。天幕から覗いた星空の美しさに、思わず素足で雪の に当ったので、 で設営。終日、雪と霧の山稜に全神経を消耗してコースキー 淡い夕焼けが見えてきた。十六時近く、一八四〇メートル地点 間が拡がり、五〇糎の新雪を置土産に雪雲は東に去り、西空に ている栂林を縫いながら、 していた。荒れ続けた天気も漸く回復の兆が見えて、 話し合う。猛禽類の餌食になったのか、兎の残骸が血痕を散 高原状の黒岩平では、 かつて、これほど切実に星との対面を願ったことがあろう 冷え切った身体を温めた汁粉の美味しさは格別 数メートルの積雪から抜け出 夏の頃のお花畠の美しさを想像して 首の痛くなるほどに 霧の晴

れて、容易にトレースできなかった。 再現しようと試みたが、降雪中の行動であり、 夕餉のあと凍っ た寝袋にもぐり込んで、 今日 この踏査 疲労で記憶も薄 ・スを

張ったザックを背に泊湯を発つ。硬くクラストしたアヤメ平の 全くない。焼山の頂きの御来迎が、万感を込めて佇む私等を惜 ぐと、妙高山群が黒く赤く色づいてきた。視界を遮ぎる雲は 結して、体温を容赦なく奪いとられ殆んど眠れない。零時三十 ほぐされていった。食事に次いで撤収を急ぎ、含水冷凍して嵩 る。陽が昇るにつれて沈澱凝結した身体の節々が、軟かく溶け 分、全員が起きてコンロで暖をとる。漸く暁天に星の光が薄ら しみなく照し、真黒に雪焼けした皆の顔にも幸せが一杯に拡が 十九日、快晴。濡れた寝袋の表面も天幕の内張りも真白に氷

が見下され、温泉に待機していた糸魚川隊とのトランシーバー も高山らしくなってくる。朝日岳への最低鞍部からは蓮華温泉 ていた。黒姫山も明星山も遥かに遠ざかり、この辺りから展望 れと思われる高みはエビノシッポで飾られた緑色の岩原になっ 長栂山(三三八〇メートル)は高原状で頂点が判らないが、 そ

が、夏道があり、見馴れた絵葉書写真的の地域になったせいか、

長柵山以北のコースに較べると感激は半減し、こうも気持が違

うものかと可笑しくなる。

無言で誇示する風の威力を認めざるを得ない。

ないが、蛇紋岩の濃緑色が地肌を支配する富山側の斜面では、 樹氷を縫い、栂の樹枝に白銀の華を飾った見事な芸術も見飽き

肌を刺すように冷たい。 押えて、朝日岳の頂上へ登り詰めた。雪面に点々と岩の露出 た頂上で濡物を乾かし、パッキングを直して寛ろぐ。 暫く雷鳥と遊びたわむれてから、 朝日小屋は台風に飛ばされて跡形もな 急ぎがちのステップを寧ろ 風はまだ

交信に成功、経過を報告する通信係の声もはずむ

じ、二〇七五メートル独標付近で設営した。いよいよ明日は大 で全員が疲れ、クラスト斜面でスリップするなどの危険も感 線が岩壁となり、新潟側をトラバースして氷板にステップを切 にかかる頃には、柳又谷から這い上る霧が視界を閉した。 は栂の密林、新潟側は雪の大斜面で、雪虫を採りながら雪倉岳 に、ここでは温泉の湯煙りが無性に慕わしい。赤男山の富山側 伝言を受取る。長栂山では海を見て青海町が恋しくな できた田原兄弟等の一行に逢い、糸魚川隊の石田ブロック長の いが、近くの岩に踏査標識を取付ける。 りこむ。朝日、雪倉と高度が上り雪山の素晴しさを堪能した 詰めだと、とって置きの美食でエネルギーを補給して寝袋に入 る。今日は雪倉の避難小屋を当てにしていたが、ロングコース 赤男山へと雪深い南斜面を降り、鞍部で蓮華温泉からスキ

で埋っていた。稜線は露岩の断続で、 クはもうずっしりと重い。鉢ガ岳鞍部の避難小屋は、内部 模様が雪氷の下に透して見えて美しい。 しかけながら足も軽い。雪倉岳を難なく通過する。変成岩の縞 、立上っている。富山県朝日町の標柱が随分と眼につく。 二十日、晴。設営地を清掃して出発。 緩く起伏しながら三国境 岩石のサンプルでザ 時々現われる雷鳥に話 設営 から "

たの

大池小屋の屋根が僅かに出ていた。 大池小屋の屋根が僅かに出ていた。 自馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、自馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三国境に立ち、白馬岳に一礼してコースを東に地から五時間で三人の一次に対していた。

ここで蓮華温泉から登ってきた支援隊と合流して、喜びの握手を交わす。見事に焼けた隊員の顔は、乗鞍岳の安山岩より黒く白雪に反射している。最後の岩石を採取すると 岩原に 寝転び、一週間の行動を反芻しながら山々との別れを惜しんだ。び、一週間の行動を反芻しながら山々との別れを惜しんだ。び、一週間の行動を反芻しながら山々との別れを惜しんだ。が勝め合い感謝し合う。目的を遂げた悦びと、別れの思いが交を慰め合い感謝し合う。目的を遂げた悦びと、別れの思いが交を慰め合い感謝し合う。目的を遂げた悦びと、別れの思いが変を慰めるい感謝を抑える。

(行動報告のあらすじ)

あとがき

登山の総てを知っていただきたい。報告の記事は拙なくても、窓山の総でを知っていただき、関心を寄せられた多くの方々には、越後支に協力をいただき、関心を寄せられた多くの方々には、越後支に協力をいただき、関心を寄せられた多くの方々には、越後支に協力をいただき、関心を寄せられた多くの方々には、越後支に協力をいただきだい。報告の記事は拙なくても、

役立つことを願って、藤島支部長の陣頭指揮で作成を急いでいるらと、何一つ疎かにできない気持である。そして、それらが思うと、何一つ疎かにできない気持である。そして、それらがると、収集した資料の一つ一つに、隊員の汗が浸み込んでいるとる。収集した資料の一つ一つに、隊員の汗が浸み込んでいると

もらえれば、この記念山行はさらに価値あるものとなろう。ものを自らの心の中で咀嚼吟味し、明日への糧として生かしてたであろうし、新しい希望を得たこととも思われる。そうした本計画に携わった大勢のメンバーには、それぞれ反省もあっ

る。

佐藤一栄 記

踏查団体名簿

ハンター及びフォレイカーの登頂(「九六六年)

錦織英

夫

方法とも言えるのである。

ここ数年の間アラスカ、カナダの山々も、すっかり日本に馴としても、日本に近く、しかも第一級の氷河を有する山となれとしても、日本に近く、しかも第一級の氷河を有する山となれば、日本から大挙して出かけたとしても、不思議はない。文明 国の山登りは、やかましい手続きも不要だし、準備段階に費やす労働もはるかに少ない。

る接近は極めて困難であり、軽飛行機の利用という新らしい登とは全く隔絶された土地である。こうした状況では、徒歩によその上、高峻な山岳は長大な氷河に周囲をとりかこまれ、人里む以前には、山と人間との交渉も殆んどなかった地域である。土地が新らしく、人口は極めて希薄であり、登山者が入りこ

ある。この辺がアラスカ、カナダの山の良さと言えよう。 後って目的の山に接するまでの、キャラバンにおけるような とちらも自分の領域を守り通しているようで ある。 氷河は勿どちらも自分の領域を守り通しているようで ある。 氷河は勿どちらも自分の領域を守り通しているようで ある。 氷河は勿とちらも自分の領域を守り通しているようで ある。 氷河は勿とちらも自分の領域を守り通しているようで ある。この辺がアラスカ、カナダの山の良さと言えよう。

った。一見無茶とも思えるような計画を理解してくれ、何事にず、向う見ずな空想に酔った学生登山隊は、最初から強引であ日本山岳会学生部登山隊といっても、有志の集ま りに すぎ

充分納得が行くし、また、いかにもアメリカ人の好みに合った

山の方法を生むようになった。途中のアプローチを一切省略

る。

っていた。学生だけ、それも五校の集まりであるという点であ

私たちのパーティは、その構成において、ひとつの特徴をも

いきなり氷河上に降り立つような山登りも、この土地では

(169)

岳会の方々の暖かい御支援であった。 村木潤次郎氏始め学生部担当理事の諸氏及び松方会長その他山 つけ非力な私たちを励まし、実現にまで応援してくれたのは、

外、生還の見込みのないような状況に身をおくことは、国内の 行機で着陸するのは、氷河の殆んど上部であり、私たちは氷河 行機を使用せず、カヒルトナ氷河をタルキートナまで、約一八 山登りに慣れすぎた私たちにとって、やはり大きな魅力であっ 平線にまで続く原野の旅に、私たちは真のアラスカを感じたか も片手落ちだ。その下に拡がる何十キロもの氷河と、はるか地 の山の一年生である。ベースキャンプから上だけでは、いかに を飛んでしまうだけでは、いかにももったいない話である。飛 降は私たちにとっては、大きな意味をもっていた。せっかくあ た。その上、財力に乏しい学生隊には、飛行機代はばかになら った。一歩この氷河の旅に出てしまえば、目的地に辿り着く以 のような立派な氷河のある山へ出かけ、入山、下山でその上空 ○キロを徒歩で降る計画を組んだ。登山とは別に、この氷河下 フォレイカー(五三〇三メートル)両峰の登頂、そして下山は飛 目標をマッキンレー周辺に求め、ハンター(四四四一メートル)、

隊の構成は次の通りである。年齢は出発当時 織英夫 (25歳) リーダー、学習院大学山岳部 (24〃)サブリーダー、慶応義塾大学山岳部

> 村 佐村雄 **外保田** 山山和 JII 哉 Ξ 保 武 23 22 (23歳) (23 ″) 気象・梱包、学習院大学山岳部 医療、 食糧、専修大学山岳部 装備、芝浦工業大学山岳部 明治薬科大学山岳部

11

のドライブは仲々豪快であった。 ルキートナまで輸送した。この間約三〇〇〇マイル、十一日間 に、先着の四名はレンタカーに、約一・五トンの荷物を陸路タ 出発は船便の都合で三隊に別れて出航し、シアトルを基点

パイロットである。この二人がアラスカの登山にはたした役割 ウィルソンと並んで、アラスカでは最も腕の達者なブッシュ・ 染みのパイロットである。マッキンレー周辺は彼のナワ張りで シェルダンにとって、登山隊は上得意と見え、サービスにこれ 晴天をまって空輸開始である。ブッシュ・パイロットのドン・ は大きい。 あり、セント・エライアス山群を勢力範囲とするグルカーナの つとめてくれる。明治大学のマッキンレー以来、日本隊には馴 んできた。これで六名全員がタルキートナに集結した。あとは 六月一日、最後に日本を発った小川、佐村がシアトルから飛

るには許可が必要だが、その手続等もシェルダンが代行してく 距離にして約一〇〇キロの飛行である。ナショナルパークへ入 ここタルキートナから登山基地のカヒルトナ氷河まで、直

りである。彼は、このチャンスに二隊を輸送しようと意気ごんのアメリカ隊が、マッキンレーをねらって待機中である。 一トル)が朝陽をいっぱいに受け、 蒼空に鎮座している。 大じょうぶ、間ちがいなく飛べそうだ。朝食の仕度をしている。 大じょうぶ、間ちがいなく飛べそうだ。朝食の仕度をしている。 大じょうぶ、間ちがいなく飛べそうだ。朝食の仕度をしていると、早くもシェルダンが出てきて、両手をさかんに上げ、大張りき早くもシェルダンが出てきて、両手をさかんに上げ、大張りき見いる。 私たちの寝起きしている彼の格納庫には、昨日から四人れる。私たちの寝起きしている彼の格納庫には、昨日から四人

でいる。

をい ピークが頑張っている。左端は真白な雪のピラミッドのラッセ 連續が続く。左と右には、この山群を守る要塞のように、鋭い から 度は二〇〇メートルたらず、四〇〇〇~六〇〇〇メートルの高 ル カでは、山との出合いはまことに劇的である。何もない平地か 距が、いきなりせり上がっているのである。このようにアラス ーの三山がいきなりせり上がる。群を抜いて高い。機の飛行高 伏を見せる丘陵の奥に、マッキンレー、ハンター、フォレイカ ろひょろと頼りなく舞い立つ。濁流のスシトナリバーが大き 第一便のセスナは、小川、村山、私と荷物を満載して、 (三五五七メートル)で、私たちと同時期に、アダムス・カー っぱいにあびて輝いている。ハンターは真中に低くはある いきなり山の真唯中に連れこまれる。高い三山だけが朝陽 暗緑色の原野を割って蛇行して流れている。ゆるやかな起 番厳しい山容を見せる。この三山を中心に、 左右に白い ひょ

> ター、エリック・シプトン等の隊が二登をねらったが、悪天に 失敗した。右端には、一寸法師のようにうずくまる、ものすご いロックタワーがある。ムース(アラスカ、カナダ北部に棲息する ある。一九六四年にドイツ隊が登っている。その左手、ハンタ ある。一九六四年にドイツ隊が登っている。その左手、ハンタ ある。一九六四年にドイツ隊が登っている。その左手、ハンタ かるで、カース(アラスカ、カナダ北部に棲息する かったが、悪天に ター、エリック・シプトン等の隊が二登をねらったが、悪天に

シェルダンは御機嫌で口笛を吹いては、これらの山の説明をしてくれる。十分もすると、機は早くもピータース・ヒルの上ている。下山は、この辺りを通ることになる。シェルダンは下ている。下山は、この辺りを通ることになる。シェルダンは下を指さして「メニー、メニー、ブラウン・ベア」だと言って、さかんに嚇かす。彼は何とか私たちに、帰りの氷河旅行を思いとがよらせ、下山も運んでしまいたいようだ。アラスカの羆の恐どまらせ、下山も運んでしまいたいようだ。アラスカの羆の恐どまらせ、下山も運んでしまいたいようだ。アラスカの羆の恐ろしさは、前回の経験で私もよく知ってはいるが、そう簡単にろしさは、前回の経験で私もよく知ってはいるが、そう簡単におきないでは、大河がある。

忘れない。ここまで来ると、フォレイカーのでかいずうたいがり雪原となっている。ただハンター西尾根の下部は一面の荒れり雪原となっている。ただハンター西尾根の下部は一面の荒れり雪原となっている。ただハンター西尾根の下部は一面の荒れいが、非常にラフだと、シェルダン先生はつけ加えることをようだ。非常にラフだと、シェルダン先生はつけ加えることをすれている。

正倒的に迫る。トンボのようなセスナは、小刻みに機体を震わ はながら、この巨人に突進して行くのだが、私には静止してい るのではないかと、錯覚する程のスケールなのだ。ハンター西 るのではないかと、錯覚する程のスケールなのだ。ハンター西 も何度も見ては、頭にルートを描いてきた。いま、その本物の 山が目前に横たわっている。アイスフォールはどうやって通ろ うかと目をこらす。しかしルートを探し、登るなんていうこと が、不遜な企てのように思える。ただ驚嘆していればよい。印 象はあまりにも強烈、急にすぎる。たかだか五○○○メートル の山で、この有様である。一体、ヒマラヤだったらどうなんだ

着陸地は、ハンター西尾根を回り込んだ所の氷河上である。 大いる。驚いたことに、ここは駄目だから上にすると言って、 さっさと機首を北に向け出した。上とはもうひとっ上の支流 で、マッキンレーのベースとなる所だ。冗談じゃない。そんな で、マッキンレーのベースとなる所だ。冗談じゃない。そんな で、マッキンレーのベースとなる所だ。冗談じゃない。そんな で、マッキンレーのベースとなる所だ。冗談じゃない。そんな で、マッキンレーのベースとなる所だ。冗談じゃない。そんな で、マッキンレーのベースとなる所に。 で、マッキンレーので、ここは、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、の上でなけ、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、の上でなけ、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、の上でなり、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、の上でなり、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、の上でなり、 で、マッキンレーので、ここは、 で、で、でなけ、 が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん、下でなけれ が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん、下でなけれ が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん、下でなけれ が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん、下でなけれ が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん、下でなけれ が、この男程のものがと思い、上は絶対にあかん。 でなり、ものと、このとででは、 でなり、 でなり、

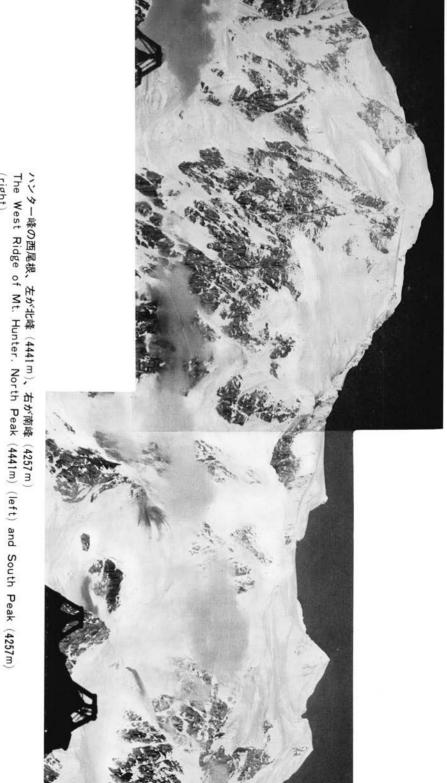
> る。そして北はマッキンレー南壁を仰ぐBCである。 あ。そして北はマッキンレー南壁を仰ぐBCである。 る。そして北はマッキンレー南壁を仰ぐBCである。 る。そして北はマッキンレー南壁を仰ぐBCである。

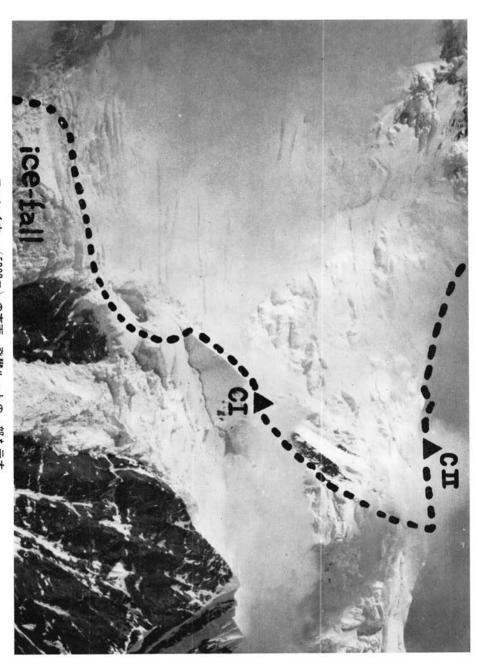
都合四回の空輸で、六名と荷物 一トン が全てBCに集結しが、見慣れぬ点景を示す。

ろうかと、心細くなる程の眺めであった

ハンター(四四四一メートル)

ない。頂上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三れており、最初は一九五四年のベッキー、ハーラの隊、二登はれており、最初は一九五四年のベッキー、ハーラの隊、二登はたいた頃、まず最初にマークされたのが、この西尾根である。この山が未だ未登の最高峰として残されたいた頃、まず最初にマークされたのが、この西尾根である。れたちが登ろうとする西尾根は、すでに二回にわたって登られた。頭上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くほぼ四○○○メートルのところに、南北に約三ない。項上近くは近四に対している。

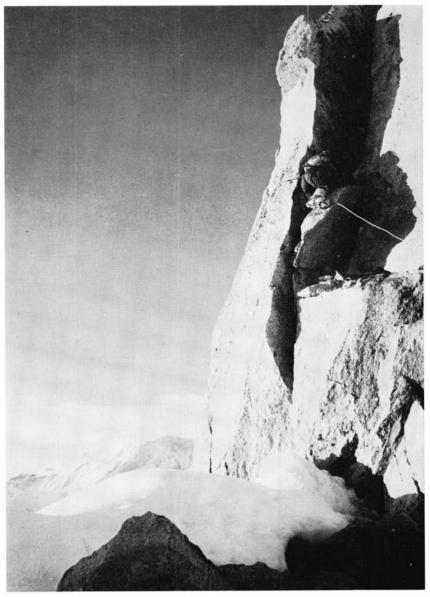




フォレイカー (5303m) の東面、登攀ルートの一部を示す Showing the climbing route on the eastern face of Mt. Foraker (5303m) and the lower northeast ridge.



ハンター峰の西尾根を見おろす(3297m峰が見える) Looking down the west ridge, with the Peak-3297m, of Mt. Hunter.



ハンター西尾根の岩稜帯を登る、背後にマッキンレー峰が見える。 Climbing up the rock part of the west ridge of Mt. Hunter. Mt. McKinley in the background.

いる。 キロにわたって雪原が拡がり、その両端に北峰、南峰がのって

る。

スケー 手の小氷河をつめ、二七五八メートルのロック・ピナクルの東 落ちる雪崩と、コル直下も非常に急で、望みはあまりもてな のコルへ直接上がるルートである。後者の方は、ピナクルをエ 尾根である。 から頂上まで二四〇〇メートル、距離約十キロの氷と岩のヤセ り下の稜は、どれも極めて急峻なリッジとなっている。取付き の侵蝕と風の影響によるものだろうが、ハンターも頂上台地上 トル・クラスは非常に鋭角的な山容の山が普通だ。これは氷河 上の山はボリュームのある丸っこい山が多いが、三〇〇〇メー 般にアラスカの山の傾向として、三○○○~四○○○メー 尾根の末端から忠実に上がるもの、 プ出来、 取付きに関しては二つのルートが考えられた。一 しかも距離的に有利だが、小氷河の両側壁から 山の相がはっきりした違いを見せる。それ以 他の一つはBCの裏

翌五日から負荷開始。日中は気温が上がるので、午前三時には行動を開始し、午前中に帰幕する。昨日の引き返し点から一は行動を開始し、午前中に帰幕する。昨日の引き返し点から一時間程のラッセルで、ピナクルの肩(二七四五メートル)に着く。
正午には帰幕して、寝ようとするが、折りからの熱気で、とてもテントの中には居れない。一日中、明るいので、行動はいてもテントの中には居れない。一日中、明るいので、午前三時にでも可能だが、休養、睡眠との兼合いが難かしい。ついオーバーワークになり勝ちである。

六日、天候はすっかり落着いた。ルートも完備され、早いペースでデポに到着。ここに三人用マナスルを設営、小川と錦織がこれに入る。BCの連中は、暑くなる前にとすぐ降って行っがこれに入る。BCの連中は、暑くなる前にとすぐ降って行っかりつく。

でいる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんじけんである。ナワバシゴをたらしてみる。今日中にコルまで工作しておこうと、暑い中にロープを引きずる。先ずピナクルの頂しておこうと、暑い中にロープを引きずる。先ずピナクルの頂しておこうと、暑い中にロープを引きずる。先ずピナクルの頂しておこうと、暑い中にロープを引きずる。先ずピナクルの頂しておる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんでいる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんでいる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんでいる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんでいる。ナワバシゴをたらしてみるが、とても届かない。こんでいる。カロバッカでは、

て雪原に出られた。この雪原はロック・ピナクルまで続いていっジをたどると、うまい具合に、末端のピークを巻くようにしっざを別かれており、その間にクーロワールが食込んでいる。一番北側のクーロワールに入り、これをつめ、更に北寄りのリー番北側のクーロワールに入り、これをつめ、東に北寄りのリーをはり末端からのルート以外は考えられない。末端は三本のリやはり末端からのルートを偵察したが、六月四日、二隊に別かれ、この二つのルートを偵察したが、

な所を空中懸垂するのもあまりほめられた話ではない。ウォシュバーン博士の一文には、南面に岩のバンドがあるかもしれなった。と指摘されている。少し降り南面をのぞく。確かに幅二メートル、長さ一○○メートル位のバンドが、段ちがいにコル下のトル、長さ一○○メートル位のバンドが、段ちがいにコル下のトル、長さ一○○メートル位のバンドが、段ちがいにコル下のトル、長さ一○○メートル位のバンドが、段ちがいにコル下のトル、長さ一○○メートル位のバンドがあるかもに幅二メートルで表がでいるかも不明だ。しかし、うまい具合に、頂してコルに続いているかものであるから、

ロープにぶらさがってバンドに降り立ち、そのまま回り込いしのぎやすい。

に注意する必要がある。

る

(午前十時)。

悪い。これはアラスカの山に限った現象ではないだろうが、特悪い。これはアラスカの山に限った現象では、日中は強烈な日ざししむ。三五〇〇メートル以下の高度では、日中は強烈な日ざしに雪がゆるみ、氷との接触が極めて不安定になる。足場は絶えに雪が分が多く、この雪にはすっかり悩まされた。その上、斜面る部分が多く、この雪にはすっかり悩まされた。その上、斜面の傾斜は太陽の照射角を直角に受けることになり、条件は一層で傾斜は太陽の照射角を直角に受けることになり、条件は一層で傾斜は太陽の照射角を直角に受けることになり、条件は一層で傾斜は大陽の照射角を直角に受けることになり、水田の原が表

岩稜帯の始まるコル(V字と呼称)までは、薄く雪庇の張り出したナイフ・エッジが、続いており、必要以上に大きなステップを切って降る。V字に降ってC1と交信する。予定をはるかに下まわる行進ぶりだ。V字は意外に広くテントも張れる。さに下まわる行進ぶりだ。V字は意外に広くテントも張れる。さに下まわる行進ぶりだ。V字は意外に広くテントも張れる。さに下まわる行進ぶりだ。V字は意外に広くテントも張れる。さに下まわる行進ぶりだ。V字は意外に広くテントも張れる。さに見題の岩稜帯は、高距二八〇メートル程で、途中、顕著な切れ込みが三つあり(下から第一、第二ステップを方に、第三ステップと命名)、その後は岩と雪まじりのナイフ・エッジとなっている。第一、第二ステップが大きく、正面はペロンとした重壁となっている。南面の雪面以外にルートはなさそうだ。少しでも工作しておこうと空身で出かける。第一ステップを右にバンドを伝い、クーロワールに入るが、雪はすっかりくさり、どうにもならない。セワールに入るが、雪はすっかりくさり、どうにもならない。カートルをフィックスしたにとどまる。帰幕も殆んどスタカットで降り、時間ばかり食ってしまう。この尾根にフィックスのより出いた。

る。

続いていた好天もどうやら崩れ出した。

は、C1からでは遠すぎる。

V字に中継テントを出す必要があ

どうやら、この尾根の難しさが始ったようだ。岩稜帯の工作

前一時に切り上げる

翌九日は雪で停滞。

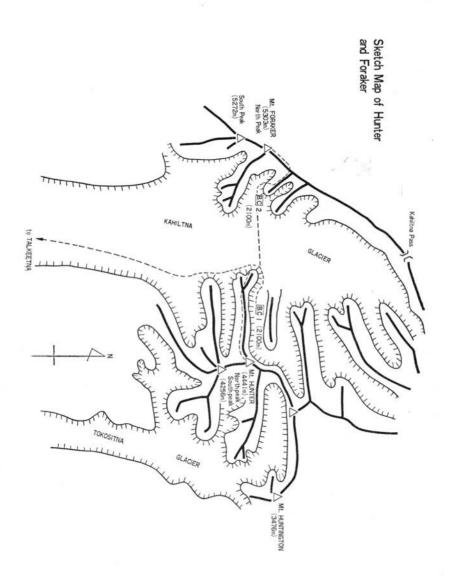
行動予定を一部変更し、又行動開始も午

にバテた。

BCに降ってもらう。 メートル、フィックスしただけで、ザアザア流れるクーロワー 登って失敗。もっと下の雪壁をトラバースしないと駄目だ。す 雪はグサグサにゆるんでいる。第二ステップは、昨日の偵察通 すっかり手間取る。第一ステップ横のクーロワールをトラバー 返し点までは、苦もなく行かれたが、第二ステップのルートに 気温も低く、三時間でV字に到着する。途中、二八九五メート ロープ二〇〇メートル、C2用の装備を持って出発。朝の内は 間を要しそうだし、ロープ等の道具類の補給に、小川、村山は ルの雪に、気色を悪くしながら帰幕する。 でに陽光強く、雪壁のトラバースは危険だ。本日の成果は四〇 ル・ピークの登りに一〇〇メートルをフィックス。昨日の引き 八日、昨日は全員C1に入ったが、岩稜帯のルート工作に時 右に回りこんでクーロワールに入ろうと、変なクラックを 第二ステップ下のバンドにはい上がる。連日の日照りに 残り四名で何とか岩稜を突破しようと、

うだ。この分だと、あの岩稜は荷物を背負って行動するのは フォレイカーという大物がひかえている以上、悠長に構えては ーバー交信の後、新たな作戦をこうじる。岩稜自体は何度も荷 要することになろう。撤収、それに崩れ始めた天候のことを考 非常に時間を要するだろう。 テップにジュラルミンのナワバシゴが、キラキラ光り、赤いヤ ワールに入ることに成功したようだ。 を設営。工作隊は、ようやく第二ステップを回り込み、 ルの通過はさすがに悪い。V字に六時三〇分到着。テント一張 名が、この中継キャンプを出す。荷を背負っていると、ピナク 帯のフィックスに出、この日は中継キャンプに泊まる。 予想され、次の好天の周期を失する恐れがある。 クにAC(アドバンス・キャンプ)を出すには、かなりの困難が 物の吊りあげが必要なので、予定通り三二九七メートルのピー えると、ちょいとあせりが出てくる。中継キャンプとトランシ て、岩稜帯の突破に終るだろう。C2を出すには、更に二日を ッケがウロチョロしている。どうやらかなりシゴカレているよ + られない。 ピナクル頂上から工作隊いかにと双眼鏡をのぞく。 日は三名 (磯、小川、村山)がサブで先行、そのまま岩稜 明日、もう一度彼等がやったとし 暑くなる前にC1に帰 この山のあと、 残り三 クーロ

だったが、着陸地点の問題とトコシトナ氷河の状態から、西尾私たちは当初、この山を東面、トコシトナ氷河から登る積り



日はゆっくりC1で休養してもらおう。

十二日は湿雪が降り続き停滞。午後九時、ガスが切れ、

視界

で、なめてかかっていたのである。 根に変更していた。すでに他の人間が登って いると いうこと

V字の中継テントをそのままACとし、そこから二日間、出来る限り上部(三五○○メートル近くにあるトリのトサカのような形の雪庇のリッジ)までルート工作をした後、全員でラッシュをかける戦法に切り変える。ACの高さは二八○○メートルで、頂上まで一六○○メートル もあり、アタックには少々高すぎるが、キャンプ数をひとつ減らす利点は大きいし、こういう山登が、キャンプ数をひとつ減らす利点は大きいし、こういう山登が、キャンプ数をひとつ減らす利点は大きいし、こういう山登が、キャンプ数をひとつ減らす利点は大きいした。勿りにも慣れておく必要もあると、妙な理屈をつけたりした。勿りにも慣れておく必要もあると、妙な理屈をつけたりした。勿らにもしている。

の岩稜の難かしいことを、口をそろえて言う。御苦労さん。明の岩稜の難かしいことを、口をそろえて言う。御苦労さん。明定な雪に苦労しながら、午後七時すぎV字に帰って来た。皆こに達し、引き返し始めた。折りからのガスと高温の中を、不安に達し、引き返し始めた。折りからのガスと高温の中を、不安にする。正午近く、工作隊は最上部のカニのハサミに達し、引き返し始めた。折りからのガスと高温の中を、不安に達し、引き返し始めた。折りからのガスと高温の中を、不安にする。

ピークに続いている。ここまで来て、白いものがチラつき始の間で、再びナイフ・エッジが降り気味に、三二三四メートル・

ここまで来て、初めて尾根が平らになる。しかしそれもつか

め、やがて本格的に降りだした。

次のピークは、中間辺りまでは簡単だが、そこから北側はセケスして引き返した。

の連中なのに、この頃になると、皆の食欲はすさまじく、「お中、行動を終って何やら食事をとる。ただでさえ、大メシ食い開始するため、朝、昼、夜のメシのとりかたが難かしい。午前の連中なのに、この長いの場合の

で、四〇〇メートルのロープが、寸分の切れ目もなく張りめぐもかなりあるので出発する。第一ステップからカニのハサミま

は尽きない。
は尽きない。
は尽きない。
は尽きない。
は尽きない。

気味なので、BCから上げる必要がある。 気味なので、BCから上げる必要がある。

十五日、久し振りに晴れた。午後七時、久保田、村山はBCへ、他の四名は上へと別れる。今頃から日没までは、全てがおへ、他の四名は上へと別れる。今頃から日没までは、全てがおたやかだ。雪崩の音も、日中、ザアザア小川になっていたクーだやかだ。雪崩の音も、日中、ザアザア小川になっていたクーだやかだ。雪崩の音も、日中、ザアザア小川になっていたクーたちはいたく感激して、極北の落日に眺め入るのだ。激しい山たちはいたく感激して、極北の落日に眺め入るのだ。激しい山たちはいたく感激して、極北の落日に眺め入るのだ。激しい山をりにけに、こうした瞬間がむしょうに嬉しい。

層帯がある。

ない。傾斜も五〇度はありそう。トサカの始まる直下に岩の断

をトラバースして、右のリッジに出る。一〇〇メートルのフィは下すぎた。垂直の雪の段をはいずり上がってから、氷壁の下トル・ピークのルートが、はっきり読める。昨日のトラバースんだところだ。今日はすっかり晴れているため、三二三四メートル・ピーー時すぎ、昨日の引き返し点に着く。ようやく日が沈

水壁は、新雪をつけ雪壁のように見えるが、恐らく氷にちがいた壁は、新雪をつけ雪壁のように見えるが、恐らく氷にちがいたを越えてしまえば、頂上台地までは簡単に行けそうだ。このトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷の大きな壁だけで、そのトサカまで、ほぼ二○○メートルの氷のボールがよりである。しかしている。

ロープはあと八○メートルしかないが、二本だけでもフィッロープはあと八○メートルしかないが、二本だけでもフィップを切る。露岩にアイスハーケンをぶち込み、んねんにステップを切る。露岩にアイスハーケンをぶち込み、がっちり固定する。下はBCまで一○○○メートルを越える空間が拡がっている。もう二ピッチでトサカに出られそうだ。午間が拡がっている。もう二ピッチでトサカに出られそうだ。午間が拡がっている。もう二ピッチでトサカに出られそうだ。午間が拡がっている。

BCへ降った連中は、とうに帰っていた。

わたりだ。

着ぶくれた身体には、むっとする程の暖気だ。寒くなるのは、

ガスのためか、今日はいつになく暗い。荷を軽くするため

した。食糧も三日分を用意。 これでようやくアタック体制が整った。続く二日は降雪に停 ので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、装備には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備 のは長いので、表情には万全を期し、雪洞に寝られるよう準備

十九日、午前八時頃からものすごい晴天となる。例により、十九日、午前八時頃からものすごい晴天となる。例により、て、アタックにそなえようとするが、休養充分の故、全然寝られない。それにアタック前の緊張もある。暑い天幕でゴロゴロする。今夕から動きだす積りだ。シェルダンの機らしい爆音が聞える。人し振りの晴天に、客でも運んでいるのだろう。 甲後五時十五分、いよいよ出発。食糧三日分、装備等でサブザックは、はち切れそうだ。まだ西日が照り、クーロワールはようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。それに休ようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。それに休ようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。それに休ようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。それに休ようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。それに休ようやく日陰になったばかりで、良好とは言えない。

に崩れる筈はないと思う。右手にブロッケンを見ながらのツナよる局地的な雲だろう。昨夜からの空模様から考えて、そう急後疲れのせいか、足が重く、汗がふき出す。出発して間もなく、ガスがはり出し、すっかり視界がなくなる。気温の変化にく、ガスがはり出し、すっかり視界がなくなる。気温の変化による局地的な雲だろう。昨夜からの空模様から考えて、そう急なる局地的な雲だろう。昨夜からの空模様から考えて、そう急なる局地的な雲だろう。 古手にブロッケンを見ながらのツナとの地域に関いる場合に対している。

た。

アイスバイルを懸命にふるう。氷を避け、露岩の部分を直上すや前○時から陽のあたりだすまでは、ステップにつまった雪する。先日のフィックス終了点までは、ステップにつまった雪する。先日のフィックス終了点までは、ステップにつまった雪かる。先日のフィックス終了点までは、ステップにつまった雪かる。先後十一時で描○時から陽のあたりだすまでの時間である。午後十一時

フィッタカー(AAC隊のエベレスト登頂者)が差し入れしてくれるが、それも尽き、蒼氷となる。こんな場所では、シアトルの

切った。何とコルから六時間を要し、予想通りの難場であっ切った。何とコルから六時間を要し、予想通りの難場であった。下イス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケンた、アイス・スクリューというネジコミ式のアイスハーケン

ような格好をしていて、よくまあ通ったものと感心する程。ピークの稜線は、巨大な雪庇とナイフ・エッジが、恐竜の背の空は素晴らしく晴れ上がった。見おろす三二九七メートル・

頂上台地まであと六○○メートル、頂上へは更に四○○メ

台地の縁の氷壁は、一ピッチの氷切りであっけなく抜け、大き なクレヴァスの中を通って、待望の台地に出た。十一時を回っ は左に巻く。台地の縁を飾る、大きな蒼いブロックが頭上に迫 ッセル、コンティニュアスでぐんぐん登れる。上部の氷のコブ ってきた。朝の陽がようやく私たちに追いつく。危惧していた カンパンをかじる。大斜面は、やはり雪で、大体ヒザまでのラ トルあるが、もう技術的に問題となるところはない。二度目の

動に移る筈であったが、この明るさでは、寝るまねをしても気 飾っていた。予定では、ここでひと寝入りしてから、最後の行 腹ごしらえをし、一時間程昼寝をする。午後一時三〇分、 に中央峰の小さな隆起を起こし、南端を優美な三角錐の南峰で て頂上を目指した たるい身体に気合いを入れ、防寒具、それに少量の食糧を持っ にくい地形でもあるので、今日中に登ってしまうことにする。 分は出ない。皆も元気だし、それにガスリでもすると、わかり かっ

陽光に輝いていた。台地は南に徐々に高度を落しながら、途中

たところ、予定より一時間早い。出た所は四〇〇〇メートル近

く、台地の北端で、正面、雪原の奥に、真白な北峰のドームが

されていた。台地はひざまでのラッセル。リッジ末端を回りこ 上からは、 頂上から台地の中央部へ、長いリッジが出ている。入山の機 南面をのぞくが、大きなセラックが乱立していて、ルー 南面の雪面から、 このリッジへ出られるものと予想

> ければならず、距離もある。 いさぎよくこのルート をあきら トがつかめない。それに、そこまで行くには、いったん降らな め、すぐ西壁へ転ずる。多少難かしくとも、距離は短かい。

びすを返して、北峰の西に拡がる雪原の真中をラッセルして行

く。一時間ばかり損をした

だ。一五〇メートル位と思われる。 フィックスし、 影響し始め、苦しい登高となる。頂上の雪庇は、もうすぐそこ 南西リッジも、この肩の部分だけは、雪庇がない。四ピッチを ひどい。南西リッジのほぼ中間にある肩に続く雪壁に取付く。 風は全くなく、熱気の中のラッセルにあえぐ。ノドの渇きが 遂にリッジにはい上がる。疲労とそれに高度も

側はすつかり雲海の下だ。軟雪と硬い斜面が交互にあらわれ、 に重い足をけって、右手にトラバースし、空との境に立った。 ようやく頂上ドームの直下に達した。もう一ピッチ。鉛のよう の遅い陽をかえして光る。期待してきた東面、トコシトナ氷河 た。頭上の空はあくまで蒼い。風に舞いあがった雪片が、午後 ンレー、フォレイカーそしてハンターの三山を浮かび上がらせ いつの間にか、四〇〇〇メートル付近を境に、雲海がマッキ

上に立った。 いた。三パーティ横隊で進み、手前で全員肩を組み、一緒に頂 しかも同時に

長く、きついアタックだっただけに、

六名が、

頂上はそこから先三〇メートル程の所に、小さくもりあがって

を私たちは子供のように喜んだ。ちの頂上に立つ姿が、ブロッケンとなって現れる。こんな偶然ちの頂上に立つ姿が、ブロッケンとなって現れる。こんな偶然

一種妖気じみた色だ。辺りの雪面も赤く染った。豪勢な夕日を でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、 でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、 でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、 でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、 でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、 でき色合を呈する。上から青、赤、黄、緑と原色の段だら染は、

時三○分、下山にかかった。フィックスを回収しては、懸垂ををつけ、エアマットに横になる。翌二十一日、十時に目がさめをつけ、エアマットに横になる。翌二十一日、十時に目がさめをのけ、エアマットに横になる。翌二十一日、十時に目がさめた。

てデポに帰り着く、

あびる私たちは、すっかり千鳥足。午後十時四五分、疲れきっ

くり返す。トリのトサカを降ったコルで、二度目の夕日を見

る。ここでも、ゆっくりお茶をわかしてカンパンをかじる。す

いて待っていた。時間にして六六時間、途中いくらゆっくりしょックスも全て回収する。懸垂の連続で、二十二日、午前十一っかり凍てついた雪に満足しながら下降を続けた。岩稜帯のフっかり凍てついた雪に満足しながら下降を続けた。岩稜帯のフ

たとはいえ、又この間の好天をうまくとらえたとはいえ、ちょ

っとひどい。皆の闘志と頑張りが、この長いアタックを支えて

雪が激しく、方々にクレヴァスが口をあけていた。 区1を撤収、BCに下山。カヒルトナ氷河も、連日の暖気に融 翌二十三日は雪で停滞。二十四日から二十五日にかけ、C2、

フォレイカー(五三〇三メートル)

カヒルトナ氷河をはさんで、ハンターと相対するこの山は、カヒルトナ氷河をはさんで、ハンターと相対するこの山は、どことなく特徴のない姿が、人目を引かなかったのだろう。五三○となく特徴のない姿が、人目を引かなかったのだろう。五三○となく特徴のない姿が、人目を引かなかったのだろう。五三○となく特徴のない姿が、人目を引かなかったのだろう。五三○となく特徴のない。

トが、ハーバードのパーティによって登られた。一九六三年七て以来二九年振りに、今度は東面、カヒルトナ氷河からのルー一九三四年、チャールズ・ハウストン等が西面から初登攀し

近年、アラスカの登山の傾向は、ヴァリエーション・ルートからの登頂に移行している。特にマッキンレー周辺は、その山からの登頂に移行している。特にマッキンレー周辺は、その山からの登頂に移行している。特にマッキンレー は別にしてら、すでに完膚なきまでに登られたマッキンレー は別にしてら、すでに完膚なきまでに登られたマッキンレー は別にしてら、すでに完膚なきまでに登られたマッキンレー は別にしてら、すでに完膚なきまでに登られたマッキンレー は別にしてら、すでに完膚なきまでに登られたマッキンレーの中、東後として注目されてきた。ハンター東面の二本の稜(との中、東稜として注目されてきた。ハンター東面の二本の稜(との中、東稜として注目されている。 ことに後南面の三本のリッジが見事なルートを提供している。ことに後南面の三本のリッジが見事なルートを提供している。ことに後南面の三本のリッジが見事ないの傾向は、ヴァリエーション・ルートからの登頂に移行している。

私たちが、対象として、この二峰を選んだのは、そのようなが、対象として、この二峰を選んだのはない。それ程ヴァリエーション戦列に加わろうとしたからではない。それ程の力もないし、むしろこの二峰が、何故か見はなされたかのような、静かな存在だったからである。山としての立派な個性をもちながら、この二峰は、毎年々々両者を横目で見ては、マッもちながら、この二峰を選んだのは、そのようなたにちがいない。

に切られていて、あたって見ないことには何とも分らない。

期間は十四日間に限られ、

迅速に登る必要があった。

登って北東稜に出るこのルートは、カヒルトナ側からのルートながら絶えずルートを観察してきた。東面のアイスフォールを士からの写真で、ほぼ見当をつけておいたが、ハンターを登り、ルートに関しては、はっきりしていた。ウオッシュバーン博

られる。トラバース地点は、クレヴァスとセラックでズタズタ してインゼルの上、スノー・リッジの末端に出るルートが考え れていて問題にならない。 るスノー・リッジの末端)があり、その左右は絶えず雪崩に洗わ 多かった。アイスフォールの中間部にインゼル(北東稜から伸び 鏡でのぞいても、経験のない私たちには、予測出来ない部分が このアイスフォールばかりは、幾ら上から見、又BCから双眼 きなヤツでもアイスフォールまで達するものは無かった。ただ 豪快な雪崩には肝を冷やしたものだが、仔細に観察すると、大 岩の巨大な斜面から落下する雪崩である。最初、私たちもこの がる高距四六○メートル程のアイスフォールと、その上の雪と ない、むしろ古典的なルートである。 すぐ南東稜に転じている。技術的な難かしさはあまり考えられ たハーバードも、最初このアイスフォールを探ったそうだが を考える時、先ずうかんでくるものである。南東稜から登頂し 左側端から登り、上部をトラバー 問題は、下部一帯にひろ ス

ブリッジを渡り、続いている所続いている所と探す。何度か行い所から、右に斜上して行く。クレヴァスを跳び越え、スノー・の後すぐアイスフォールを偵察する。左手で、ブロックの少なし、アイスフォールの末端近くにベースを移す。この日、負荷し、干七日夜から行動をおこし、カヒルトナ氷河を八キロ横断

その上の小さな雪壁には長いアブミを取付け、荷物を吊り上げ

この辺り、変化が激しく、絶えず不気味な音が響く。

こういう所で役に立つのは、長さ一メートル程のジュ

には、十五メートルのナワバシゴをセットし、荷物はケーブル

八〇メートルのロープをフィックスした。底に降るクレヴァス へ、ルート工作と負荷を行なった。アイスフォールには都合二

も及ばなかった。

二十九日、ベースの移動を終え、夕方から翌朝にかけてC1

ない。 ている地点を偵察して帰った。 村山は、下山の氷河旅行にそなえ、 イ印象を受ける。長持ちのするルートではない。この日、磯、 トを見つけようとは想像もしなかった。このルート以外他には いていた。間ちがいなく行ける。負荷後の一発の偵察で、ルー スノー・リッジ末端まで六○~七○メートルの所まで来た。続 ばならない。苦労してこれを渡り、更に右往左往しながらも、 をする。途中一ヵ所、どうしてもクレヴァスの底に降りなけれ と近ずき、早くも中間辺りまで来た。一瞬、これは行けるとほ くそえむ。少々時間がかかっても、今日中に目鼻をつける決心 きづまるが、その度ルートを探す。スノー・リッジ末端がぐっ 名物になった雪崩が落ち始める。ルート全体に、大変モロ 思わぬ幸運に満足しながら、大急ぎで降る。陽があたる カヒルトナ氷河の一番荒れ

は、決まって氷河雪崩が起きた。 温も低下し、アイゼンが利き出す。 このような気温の変り目に

と申し分ない。すぐデポを済ませ、午前六時、陽のあたる前に 先行の二名によって、左右の斜面に片足ずつ、ステップがきれ なっていて、絶好のテント地である。高度も二九二〇メートル いに切られていた。このナイフ・エッジが終った所は、平らに ッジが、長さ四〇〇メートルにわたって一直線に伸びている。 スノー・リッジに移ってしばらく行くと、美しいナイフ・エ

帰幕。 C1入りを完了した。この日から天候は下り坂に向かった。 寄せてきた。上空も巻雲がひろがり、悪天の前兆とは思ったが の日(三十日)の夜からの行動で全物資を荷上げし、 まさかこの後十二日間も降り続けようとは、神ならぬ身の想像 ヒルトナ氷河をはうようにして、あとからあとから黒雲がおし C1までのルートも整備されたので、この晴天を利 一日早く

が残った。 1まで非常に効率よく運び、このまま一気にアタックしてしま おうと考えていたが、 止みなく降り続いた。 七月一日、早朝C1の設営が終ってから、三日の夕方まで小 すっかり出鼻をたたかれた感じで、不安 風もなく、比較的乾燥した雪である。C

ラルミン製のスノー・バーだけである 午前一時、 フォレイーカーの頂稜に朝日が届く。ようやく気

(183)

三日、午後六時に起きる。さしもの雪もやみ、心なしか雲も

うすくなった。

午後九時三〇分、C2建設に出発。小川、村山が軽装で先行する。吹きだまりは、五〇センチ位の積雪となっている。完全は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。今日はいつになく気は、右から雪壁を直上してリッジに出た。大きな山だ。北東登に三〇メートル、フィックスし、その上東に二ピッチをスタカットで登ると、傾斜もやや落ちてきた。高度が増すに従い、カットで登ると、傾斜もやや落ちてきた。高度が増すに従い、根界もぐんぐんひらけてきた。やがてフォレイカーの量感にあれた、真白な姿が輪郭をはっきり見せる。大きな山だ。北東ながラウヘンしている。カヒルトナ氷河上空には、相変らず雲がたまっている。

どれも短かいものばかりで、きたなくモレーンをかぶっていどれも短かいものばかりで、きたなくモレーンをかぶっていれり、ったいの山が、雲を全てここで絶ちきっているのだ。北側の氷河は、の山が、雲を全てここで絶ちきっているのだ。北側の氷河は、の山が、雲を全てここで絶ちきっているのだ。北側の氷河は、だれも短かいものばかりで、きたなくモレーンをかぶっていれりで、とうとう北東稜上のジャンクション直下の急な壁にフィックスしたとれりを強いた。

テントを設営、アタックの本勢が整った。
北東稜を少し降った三五二○メートルの地点に、三人用の

不思議な美しさがある。冷たく、すき通るような美しさに、寒饗宴がくりひろげられた。極地の山の朝には、厳しさの中にも要求がくりひろげられた。極地の山の朝には、厳しさの中にものでいた。

さを忘れた

風にサラサラ落ち、テント内は真白になってしまう。外に出る段と強まってきた。はく息がテントの天井に凍りつき、それが来ない。冬富士の山頂露営のような強風が荒れ狂い、寒気も一来ない。冬富士の山頂露営のような強風が荒れ狂い、寒気も一来ない。冬富士の山頂露営のような強風が荒れ狂い、寒気も一水ない。冬富士の山頂露営のような強風が荒れ狂い、寒気もしている。

トランシーバーの故障は痛い。この風には、彼等もすっかりあ入れかわりに、C2に入ることになっていたのだ。こんな時、早くもC1の連中が上がってきてしまう。彼等はアタック隊と早くもC1の連中が上がってきてしまう。彼等はアタック隊ときが激しい。こんな日はいっぺんに凍傷になってしまうだろきが激しい。こんな日はいっぺんに凍傷になってしまうだろ

とフォレイカーがものすごい雪煙をあげている。北への雲の動

一向によくならない。夕方、風は衰えてきたが、雪は降り止まいが、風がひどい。風向はしょっ中変り、気をもたせるだけで五日、六日、依然として回復せず。降雪量は大したことはな

きらめ、再びC1に降った。

四五〇〇メートル辺りから寒気が一段と増してくる。

時、アイゼンが流れる程の硬雪で、高度はぐんぐん増してくる。

回のアタックさえ、うまくチャンスをつかまないと無理。ない。明日をおいて全員登頂の望みもなくなる。こうなると一

七日、午前一時、ガスと雪の中を出発する。コルまでは、ガスのためルート・ファインディングに苦しむ。ラッセルもももにたっする。セラックを回りこみ、大斜面の基部に立つ。頂上まで一八○○メートル、富士山を急にしたような斜面が、どこまでも続いている。

い。 側は広い斜面となっていて、はっきりした尾根の相をもたな 下で南東稜に接合している。東面は急に切れ込んでいるが、北 下で南東稜に接合している。東面は急に切れ込んでいるが、北

ここからは、濡れ光ったような斜面がずっと続いていた。時で気だ、何より早く登ってしまうことだ。ありがたいことに、ラッセルは吹きだまりだけで、連日の悪天に斜面は硬くクラストしている。一時間三〇分で早くも緩傾斜帯の入口に達す。ほぼ四一〇〇メートル、C2から六〇〇メートル位登った地点だ。とうせこんなやや視界がひらけ、雪も小降りになってきた。どうせこんなやや視界がひらけ、雪も小降りになってきた。どうせこんないでは、濡れ光ったような斜面がずっと続いていた。時

る様子もない。時折り陽もさしこんでくる。に従い、風も寒気もつのってはきたが、天候はこれ以上悪化すよくしている。スピード作戦は順調に運んでいる。高度が増すよくしている。スピード作戦は順調に運んでいる。高度が増す

高さを確認する。五〇〇〇メートルの大台を越したことを、二

ポン立てる度に、高度計をポケットからとりだし、稼いだ

でおおわれていた。風が強い。ハーバード大の標識竹を発見。は、ここからやや西に向きを変えている。頂稜はエビのシッポは、ここからやや西に向きを変えている。頂稜はエビのシッポートル。稜

背後にマッキンレーが浮かびでる。

頂上まで二、三の隆起があり、何度かニセの頂上にだまされる。今度こそ頂上と思ったピークに立って、又がっくり、前方る。どうやら頂上に間違いないようだ。ふるえながら、お茶とる。どうやら頂上に間違いないようだ。ふるえながら、お茶とる。どうやら頂上に間違いないようだ。かるえながら、お茶との確請をあけるが、すっかり凍っている。横なぐりの強風の中を最後の登高にかかる。

た。午前九時きっかり。八時間で登りついた。時間との競走にものすごい風がおしよせ、顔面があっという間に凍る。もうこの辺りどこでも頂上だったが、ピッケルで身体をふんばり、目をこらし一番高い地点を探す。あった、前方にシュカブラで雪をこらし一番高い地点を探す。あった、前方にシュカブラで雪をこらし一番高い地点を探す。あった、前方にシュカブラで雪をこらしていた。その一端に立った途たん、頂上は広く、平地をなしていた。その一端に立った途たん、

去った。もっといたかったのだが、この風と寒気ではいかんとメートルとアイスハーケン三本を頂上に捧げ、二〇分程で立ち後線が、ガスの中に消えていた。写真を撮り、白のロープ二〇る。斜面はどんどん低くなり、南峰(五二七二メートル)へ続くる。斜面はどんどん低くなり、南峰(五二七二メートル)へ続くる。斜面はどんどん低くなり、南峰(五二七二メートル)へ続くる。斜面はどんどん低くなり、南峰(五二七)、白の田と寒気ではいかんとメートルとアイスハーケン三本を頂上に捧げ、二〇分程で立ち、外間は大きの動きに顔をだった。

もし難い。

遠中、セラックの陰でツェルトをかぶり、お茶をわかす。こ がスばかり吹き出して、雪を融かすのが精イッパイ。十一時過 がスばかり吹き出して、雪を融かすのが精イッパイ。十一時過 だツェルトをたたむ。ガスの中、広い斜面のことゆえ、下降は だきの記憶を追い求めながら、ゆっくり進む。マッキンレーで も見えれば、よい目印になるのだが、それも雲の中。それでも りまれば、よい目印になるのだが、それも雲の中。それでも はきの記憶を追い求めながら、ゆっくり進む。マッキンレーで

名はアタックをあきらめ、

1が見え、コールをかけると返事があった。 と願うですったが深くなり、泳ぐようにしてコルに降り立つ。C ラ。ラッセルが深くなり、泳ぐようにしてコルに降り立つ。C カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ カントも見える。が人影はない。C1の連中はどうしたのだろ

> 午後四時帰幕。十五時間のアタックが終った。C1の連中が 来てない以上、このまま降るわけにもいかず、今日はAC泊り 来でない以上、このまま降るわけにもいかず、今日はAC泊り を決める。午後九時三〇分、うとうとしかけた頃、小川の声に 目が覚める。C1の三人が元気よくやってきた。彼等も歓声を あげ、登頂を喜んでくれた。コルからの我々のコールに、ア タックに出たものと思い、上がって来たとのことだ。少し遅く タックに出たものと思い、上がって来たとのことだ。少し遅く

めた喜びは大きい。唯一の好天らしき今日、アタック出来たの窮屈な姿勢で天気待ちしながらも、フォレイカーを手中に納

は全く幸運であった。ゴツイ山であった。

八日にはいっても雪は小止みなく降り続け、三時、C1の三

雪の中を降って行った。猛烈な雪の

で、六人でギューギューづめになって、

明日の晴天に望みをか

ける。風はないが、すごい降りだ。

時、シュラーフにもぐる。二四時間以上寝てないので、えらくみとれた。彼等三人とて、この山に寄せる期待は大きかった。 五ポートの任に甘んじさせなければならなかったにすぎない。 五中を立去って行く彼等の後姿には、落胆の表情がありありと読中を立去って行く彼等の後姿には、落胆の表情がありありと読

の積雪となっていた。一瞬、後悔めいたものが頭をよぎった。午後一時、だるい身体で目覚める。まだ降っている。かない

で言さない。 で今朝、あの連中と一緒に撤収しなかったかということだったともあり得る。この悪天が、いつおさまるか、今は全く予断こともあり得る。この悪天が、いつおさまるか、今は全く予断になる。 こともあり得る。この悪天が、いつおさまるか、今は全く予断に対している。

午後六時、雪の中、ACを撤収。不要になった物は全て放棄。ふわふわした雪がべったり付いていた。フィックスも殆ん葉雪にものすごい雪崩の音が響き、三〇分も続いた。ただでさえ雪崩の多い地だ。この雪で、山全体が雪崩に共鳴し始めた。 末旗の旗の部分だけが雪面に出ている。リッジを離れ、第二スノー・リッジを左にまく。コールすると返事があった。この辺はおびただしい積雪、往きはほんの少しもぐっただけだが、今は二メートルにも達しようかと思われる程の新雪に、全ておおわれていた。ベルグシュルンドにそってトラバースして行くと、小川、久保田がラッセルに出ていてくれた。C1は目と鼻の距離だが、彼等はここまで二時間三〇分もかかったとのことだ。

照ってくれることを祈る。 リッジの状態が恐ろしい。今日はここまでとし、明日、陽でもま降ることは、見合わさなくてはならない。長い第一スノー・ま降ることは、見合わさなくてはならない。長い第一スノー・

> しばらくガスの上がるのを待ち、再びカ ヒルトナ氷河にス ー・シューの足を運んだ。 る。近頃ぐっと暗くなってきた夜に加え、濃いガスがアイスフ C1を撤収。アイスフォールも一様に、新雪をべったり付け、 スフォールをようやく脱出し、BC2のデポにたどり着いた。 ォールの光景を、一層陰惨なものにしていた。午前四時、アイ ロックの間のチムニーをえんやこら登って、ハシゴをセットす がぶら下がっていた。懸垂でクレヴァスの底に降り、二個のブ ロックは、案の定どこへやら姿を消し、見慣れぬ位置にロープ となり、全身ぐっしょり濡れる。例のナワバシゴを固定したブ 雪にうまり、使用出来ない。再びガスと雪、それもひどい湿雪 っかり安定した。BCにシェルダンが数度飛来した。午後七時 午後、二人でスノー・リッジを氷河まで偵察。ナイフ・エッジ 一見しただけでは、その変化が分らない。フィックスは殆んど はべったり雪をつけ、下るにはもってこい。何よりも、雪はす 九日、相変らずのガスと雪だが、時々太陽がカーッと照る。

BC近くは融雪がすすみ、テントが五○センチも浮き出ていた。テントには、マッキンレー隊も、私たちのBCに設置しの書き置があった。マッキンレー隊も、私たちのBCに設置してあるラジオを、使用することになっていた。すぐタルキート

た 悪天だっ たが、 十三日は遂に快晴となり、さしもの荒天も終

0

Ш

岳

第 九六七年 六 +

月 年 FI

野を一 (三九五四メートル)、 タル キャベル(三三六三メートル)の三峰に登頂した。 その後は更にカナディアン・ ルキー DA 週間で踏破したが、 O チ 1 ナまでの一八〇キ п 程 の装備をシ コロンビア(三七四七メートル)、 I 日 - u ル 0 ダンに託 п 日が得がたい体験であった。 旅に発った。 " キー K Ļ 移 この夜、 動 氷河と不毛の Ļ I ディ 私たちは n ・ブソン ス 原

て、その北壁は、山というものが本来持つ構造の美しさと、並

はずれたスケールの大きさのゆえに、北壁なるがための荒々し

グランド・ジョラス北壁

ウォーカー稜の登攀

藤敏夫

伊

っている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊で ある。そしっている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊で、その北壁はシャとの国境に位置する四二〇八メートルの山で、その北壁はシャとの国境に位置する四二〇八メートルの山で、その北壁はシャとの国境に位置する四二〇八メートルの山で、その北壁はシャンロンデルへ急峻な山稜となって落ちこみ、西はミシェル・クロ、エレーヌ、マルグリート、ヤングと、それぞれの初登頂者ロ、エレーヌ、マルグリート、ヤングと、それぞれの初登頂者ロ、エレーヌ、マルグリート、ヤングと、それぞれの初登頂者ロ、エレーヌ、マルグリート、ヤングと、それぞれの初登頂者ロ、エレーヌ、マルグリート、ヤングと、それぞれの初登頂者ロ、エレースとは、カースとの地域といっている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊である。そしっている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊である。そしっている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊である。そしっている、幅二キロに及ぶ巨大な岩と氷の山塊である。そしっている。

の課題とまで、もてはやされ、今もなお、アルピニストの心をの課題とまで、もてはやされ、今もなお、アルピニストの心を

さと、平均傾斜七五度の花崗岩壁ということからも推測出来

一九三五年、ドイツのハリンガーとマイヤーはミッシェル捕えてはなさない、魅惑の岩壁である。

クロ・ピークにぬけて中央側稜を完登した。これがグランド・

顕著な側稜は、まだ手つかずだった。

東ーカー・ピークであり、頂上から一気に氷河を結ぶもっともがリラス北壁の第一歩であった。しかし、ジョラスの頂上はウジョラス北壁の第一歩であった。

九三八年八月、イタリヤの誇る名クライマー、カシン、チ

い。日本の山へ向かうと同じような気持で、我々はグランド・く、もっとも困難な登攀は完成された。我々がこの北壁を登ろうと思いたったのは、出発のわずか二我々がこの北壁を登ろうと思いたったのは、出発のわずか二

ジョラスに対処し、そしてその北壁を素直に実践してみたかっ

たし、我々にはそれだけの自信があった。気分が乗らなければ、たし、我々にはそれだけの自信があった。気分が乗らなければ、撃じく、困難な岩壁……唯、それだけの単純な事実が、我々かきたてるに十分な程、難かしそうであった。

をこの北壁へとおもむかせたのである。

パーティ

伊藤敏夫(二七歲)

石井重胤(三三歳)

伊佐忠義(三五歳)

一九六六年七月六日にアメリカ経由で羽田を発ち、シベリヤー九六六年七月六日にアメリカ経由で羽田を発ち、シベリヤルプスは気象状態が非常に悪く、百年に三~四回といわれた昨本を上廻る悪天ではないかというのが、現地における人々の登山本を上廻る悪天ではないかというのが、現地における人々の登山本。前日から冷たい雨が降り続き、翌一九日には、我々の登山本で上廻る悪天ではないかというのが、現地における人々の見解だった。

くる日もくる日も悪天は続き、山々は雪とベルグラに真白くなおわれて、本格的な登攀なぞ思いもよらぬ厳しさだった。その間、我々はエギーユ・ド・ペイニュで雪に叩かれて敗退し、の北壁の試登を行ない、アルプス最高峰のモンブランに登頂した。モンブランから帰った翌日、我々は一気呵成に、ウォーカー稜に向かうことを決定した。

だ。この天候も当分は続くだろう。ラスの涯にそびえるジョラスの北壁も、少し岩肌を増したようらの田間も晴天が続いている。心なしか、メール・ド・グ

八月一二日一六時三〇分、モンタンベールを発ち、強い風の

も唯、押さえているという効果しかない。

に入ったのは、二○時をはるかに廻っていた。
吹く中をメール・ド・グラスをつめて、北壁対岸のレショ小屋

八月一三日一晴一

―下部岩壁帯(一○・○○)―レビュファ・ク ラッ ク 上部レショ小屋(一・四五)―ベルクシュルンド(五・一○~三○)

(17·10)

満天の星の下の黒い闇の涯に、ジョラスの北壁がくっきりと治天の星の下の黒い闇の涯に、ジョラスの北壁がくっきりと流河をつめて、北壁下のクレバス帯をまき、セラックをなりに氷河をつめて、北壁下のクレバス帯をまき、セラックを

でルクシュルンドに達した時は、かなり明るくなっていた。 高度約三○○○メートル。日本の山の終るところでグランド・高度約三○○○メートル。日本の山の終るところでグランド・ショラス北壁の登攀は始まる。ザイルを結び、シュルンドを越ジョラス北壁の登攀は始まる。ザイルを結び、シュルンドを越ジョラス北壁の登攀は始まる。ザイルを結び、シュルンドを越きったの結合が非常に悪く、一つニセンチの湿雪の下は固い氷で、シッの結合が非常に悪く、一つニセンチの湿雪の下は固い氷で、シックを投り、左手はピッケルのピックを突き刺し、わずかにツァッを握り、左手はピッケルのピックを突き刺し、わずかにツァッケさえたが、左手はピッケルのピックを突き刺し、わずかにツァッケさえた。 肌を、右方にくいこませているこのクラックは、それほど神経

圧倒的な傾斜を持って、氷も雪もつけず、スッキリとした岩

日がのぼるにつれて、上部岩壁からの落氷が激しい。ピッケルをふるって、僅かばかりのホールドをかちとり、アイゼンがルをふるって、僅かばかりのホールドをかちとり、アイゼンがルをふるって、僅かばかりのホールドをかちとり、アイゼンが上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七上る彼等のすぐ下に、レショ氷河のセラック帯がまばゆい。七十まされて感じられる。五~六メートル流れてザイルの感触った。つきずられて石井が滑り落ちる。腰を滑るザイルの感触った。つきずられて石井が滑り落ちる。腰を滑るザイルの感触った。二人の全体重をのせたザイルが腰にくいこみ、痛く、身体が氷壁からはがれそうである。思わず悲鳴まじりの怒声がのどが氷壁からはがれそうである。思わず悲鳴まじりの怒声がのどが氷壁からはがれそうである。思わず悲鳴まじりの怒声がのどをつく。

下部岩壁帯に達し、岩壁ぞいに氷壁を左手に百メートルほどトラバースし、ほとんど岩稜をまわりこんだところで、レビュファ・クラックに導かれる岩壁の基部に達した。アイゼンを脱った岩を登るのは、神経が疲れる。三ピッチほど登ると、レビュた岩を登るのは、神経が疲れる。三ピッチほど登ると、レビュファ・クラックの下についた。

伊佐はアブミをセットしながら、三〇分でこれをぬけた。上部より有難いことには、岩が完全に乾き切っている。空身となりをいらただせる登攀ではない。残置ハーケンも見えるし、なに

は意外とフリークライムが多い。

荷物の吊り上げに時間を費し、この三○メートルのクラックをおけた時は六時をすぎていた。これからの氷のトラバースはをぬけた時は六時をすぎていた。これからの氷のトラバースはをぬけた時は六時をすぎていた。これからの氷のトラバースはた。シャモニー針峰群やヴェルト、モンブランの眺めをほしいた。シャモニー針峰群やヴェルト、モンブランの眺めをほしいた。これからの氷のトラバースはをぬけた時は大きである。

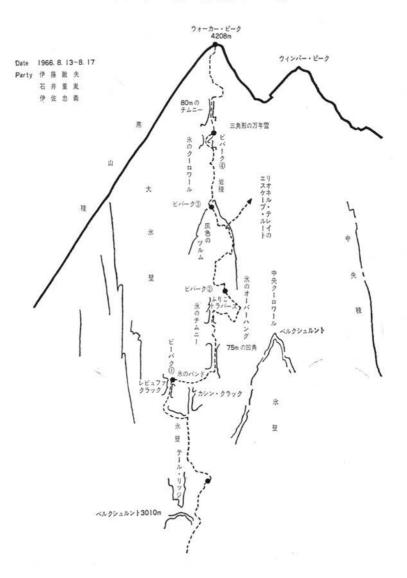
八月一四日一晴一

ー振子トラバース(一三・三○)―灰色のツルム基部(一七・ビバーク地(七・○○)―七五メートルの凹角(九・三○)

四〇

きと、虚空に向かって傾斜した、少しくだり気味のトラバース でと、流れ星が尾を引き、モンブラン・デュ・タキュールが黒いシルエットとなって静まりかえっていた。 、快晴だな、と安心していたら、太陽が昇り始めた。急がねばならない。落氷の始まる前に、氷のトラバースだけでも終えよならない。落氷の始まる前に、氷のトラバースだけでも終えよ

グランド・ジョラス北壁 (ウォーカー稜)



振子トラバースを試みる。一回。二回。三回目でようやく岩に

五メートルほど登って、いったん下り、右手の岩を蹴って

雪のつまったガリー

-から、 V

. よいよ振子 トラバース

K か

カン

を登ると、黒々とした七五メートルの凹角が姿を現わす。 かして、早々にこの二五メートルを済ませ、砕けた岩と雪の壁 氷壁である。アイスメスとピックをホールドに、なんとかご生 を行なう。ツァッケが五ミリほどくいこむだけの、傾斜の強い

らない。 どいバランスを強いられる。凹角のツメのハングを越えると、 用している細身のアイスハーケンをひっぱたいて、それにすが 壁とは比較にならぬ緊張を強いられる。時々、アイスメスに使 ラックにそい、ピッチを三回に切ってザイルを伸ばす。残置ハ り、ピッケルをふるってホールドをかちとり、ずり上らねばな ないというところを探し出してザイルを伸ばす。氷は固く、岩 上部は氷だらけの場所で、ルートの選択に迷ってしまう。 ーケンはがっちり効いているが数が極度に少なく、かなりきわ イゼンを脱ぎ、空身となって、トップが真直ぐにくいこんだク 中央クーロワールの氷壁がすぐ真下まで伸びてきている。 ート図をとりだし、結局、判らずに、ここしか登れそうに ア

岩を登る。とても、こんな所にルートをとるなんて考えも及ば

ルピニストの意思と執念をまざまざとみせつけられた場所であ れなかったら下降し、トラバースし、登るという、彼の地のア 稼ぎ、どうしても登れなくなったらトラバースし、それでも登 ない場所を、横断し、下降し、登るのである 岩壁の弱い部分を選んで、なるべくまっすぐに上へと高度を

った。

所なぞ予想も出来ないので、早すぎるが、氷の斜面を削りビバ 定してくることにした。 ークの仕度をする一方、行けるところまで登って、ザイルを固 いのか、見当もつかない垂直のフェイスである。ビバークの場 れる、つるつるの大岩峰である。実際、どこから取りついて良 壁をへて、灰色の垂直な壁の下についた。灰色のツルムと呼ば 崩れそうな黒い氷のハングを、だましながら登り、

ザイルは動かなくなったのでそこで切り上げ、ツェルトをかぶ れはしないのだから。日本から持参したトリ飯にお茶漬けの ヒーが沸く。次は夕食。急ぐことはない。夜は長く、どうせ眠 の中は天国である。膝の上でコンロが調子良い炎をあげ、 ルを何重にも身体に回して、体勢は整った。それでもツェル った。テラスとは名ばかりの、狭い氷の段に腰をおろし、ザ し、ツルムの稜らしいところから少し登ると、カラビナを通る フェイスを登り、トタン屋根の軒下のようなトラ バ

ース を

(193)

もなくすいこまれていってしまった。
り飯は、あっという間にコッヘルごと手を離れて、闇の中へ音のは、あっという間にコッヘルごと手を離れて、闇の中へ音楽。良い香がして腹がなる。そういえば、朝からほとんと食べ

は過ぎていった。 上り、ずり落ちては這い上っての、ウォーカーでの長い二晩目上り、ずり落ちては這い上っての、ウォーカーでの長い二晩日

八月一五日―晴のち風雪雨-

稜上のビバーク地(一六・四○) プ・ルート入口)(一一・五○~一五・○○) ― ウォ ーカーツルム基部(六・三○) ― 傾いたバンド(テレイのエスケー

ある。

がおびただしい。しかし、水晶どころではない。嵐との競争でホールドは水晶の粒で手が痛く、青や赤味を帯びた美しい結晶

我は登ることのみに熱中して昨日、地獄門ともいうべき振子トめる。荒天の兆しである。くだるには少し登りすぎている。我ンの彼方にどんよりとした雲が広がり、みるみる空をおおい始いるが、今朝の天候は完全なものとはいいがたく、モンブラはいるが、今朝の天候は完全なものとはいいがたく、モンブラはいるが、今朝の天候は完全なものとはいいがたく、モンブラはいるが、今朝の天候は見いとしたがある。

山へ登る者の冥利がつきる。 て、それも頂上へと続く可能性のみを残して思案するのでは、いのだ。登りたくて登っているのに、まだある可能性を残した。残された道は一切の望みを捨てて、唯、登るより仕方がな

におとしいれる

まる二日を経過しているのに、まだ半分を登ったにすぎな

ラバースと懸垂下降を、それとも気ずかず通り過ぎてしまっ

い。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多い。い。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。早く登らねばならない。山が荒れ始めたら、どんなにみじい。早く登らねばならない。山が荒れ始めたら、どんなにみじい。早く登らねばならない。山が荒れ始めたら、どんなにみじい。早く登らねばならない。山が荒れ始めたら、どんなにみじい。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多い。い。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。早く登らねばならない。山が荒れ始めたら、どんなにみじい。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。この手の切れるような花崗岩の壁は、水晶が非常に多いい。

マ、寒さは一段ときびしく、雷光がひらめき、雷鳴が心を不安と共に、まん丸い氷の粒が岩壁を叩きつけ、転がり、みるみると共に、まん丸い氷の粒が岩壁を叩きつけ、転がり、みるみるにおける悪天の襲来の早さは、我々の想像をはるかに越えてスにおける悪天の襲来の早さは、我々の想像をはるかに越えていた。ツルムのフェイスを登り切り、小さなバンドから中央クリーロワールへと続く、傾いたバンドをつめたところで、あられは雨まじりの雪を伴った嵐となった。身体はずぶ濡れにぬれば雨まじりの雪を伴った嵐となった。身体はずぶ濡れにぬれて、寒さは一段ときびしく、雷光がひらめき、雷鳴が心を不安

なければならない垂壁が残されている。なぜなら、明日になるしかし、あと少なくとも二ピッチ、どうしても今日中に越え

八月一六日一雪のち曇のち風雪一 をよけた恰好のテラスにビバークする。 もなくなるのは、目にみえているのだから。六級のかぶり気味もなくなるのは、目にみえているのだから。六級のかぶり気味と勢いを増し、重たい雪をまじえて、たたきつけてくる。六メートルほど登って、全く突然、墜落してしまった。嵐はますます激しく、雷光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雷光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雷光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雷光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雪光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雪光は近くを引き裂き、雨まじりの雪は、これでます激しく、雪光は近くを引き裂き、雨まじり始める。濡れた垂壁にとめ、早々にツェルトをかぶる。テレイとラシュナルが嵐壁にとめ、早々にツェルトをかぶる。テレイとラシュナルが嵐壁にとめ、早々にツェルトをかぶる。テレイとラシュナルが嵐壁にとめ、早々にツェルトをかぶる。

は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風ない岩の上にでたのだ。濡れた身体に稜上の風は冷たく、周辺ない岩の上にでたのだ。濡れた身体に稜上の風は冷たく、周辺ない岩の上にでたのだ。濡れた身体に稜上の風は冷たく、周辺ない岩の上にでたのだ。濡れた身体に稜上の風は冷たく、周辺は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風は乳白色のガスに包まれ、また雪が降りだしてきた。東側の風は乳白色のガスに包まれている。

に雪が降ってきた。 に雪が降ってきた。 に雪が降ってきた。 に雪が降ってきた。 に雪が降ってきた。

と、この水の流れる垂壁は凍りついて、全く手のほどこしよう

じられたのだ。下降は不可能である。唯、登ること、この登る の岩肌が物凄い形相をもって迫ってくる。ウォーカーの上部も ロワールから、ミッシェル・クロ・ピークのフランケにかけて のか、さっぱり見当もつかない濃い霧の中に、時々、中央クー を連打しての果てしない登攀が続く。どこを、どう登っている い。第一、この岩壁では容易な登攀は皆無とみてよいのだ。 すれば見失いがちなルートをたどるのは、並大抵のことではな ろうと思うも、アイゼンをつけ、雪や氷を落しながら、ややも 遅としたものだった。天気が好く、乾いた岩なら快適で簡単だ かり雪とベルグラにおおわれ、冬の形相だった。寒さと氷のた め、三~四級の岩稜の登りに、時間はどんどん過ぎ、登攀は遅 歩一歩が生へと通じている。 んな状態なのだろうか……。考えても始まるまい。 神経をすり減らし、ツァッケ一本に全体重をかけ、ハーケン 霧の中からみるウォーカー稜は、昨日来の風雪と寒気にす 骰子は投

根状のクラックの登攀にゆきくれて途方にくれ、ようやくの思ホールドもないスラブにツメをたて、氷と共に滑り落ち、屋

を伴って、横なぐりに吹き荒れ、寒さはきびしく、夕闇がいつかかかる。のぞきこむ庇の下は、気の遠くなるようなスラブのがかかる。のぞきこむ庇の下は、気の遠くなるようなスラブのがかかる。のぞきこむ庇の下は、気の遠くなるようなスラブのがかかる。のぞきこむ庇の下は、気の遠くなるようなスラブのがかかる。のぞきこむ庇の下は、気の遠くなるようなスラブのがかかる。のぞきこむ庇の下に達した。強い風が雪と岩をぬけ出ると、三角形の万年雪の下に達した。強いできょーラー・リスにかかる。空中に向かって張り出した庇いできューラー・リスにかかる。空中に向かって張り出した庇いできょーラー・リスにかいる。

四千メートルに近い吹きさらしの尾根にツェルトをかぶる。四千メートルに近い吹きさらしの尾根にツェルトをかぶる。四千メートルに近い吹きさらしの尾根にツェルトをかぶる。

ものなのだ。

のまにかしのびよっていた。

八月一七日―風雪のち曇―

ウォーカー・ピーク(一六・三○)−ビバーク地(一七・○ビバーク地(八・四○)−トラバース地点(一二・○○)−

ろ三百メートルもあるまい。うまくいけば、今日中にイタリヤ立ちはだかっている。あれを越えれば頂上は間近だ。余すとこ立ちはだかっている。あれを越えれば頂上は間近だ。余すとこ立ちはだかっている。あれを越えれば頂上は間近だ。余すとこで吹きつけていた。しかし停滞は許されない。濃いガスの切れて吹きつけていた。しかし停滞は許されない。濃いガスの切れ

に降りられる。

にのことに期待をかけて、石井が陰惨なガリーからチムニーへと登っていく。もろい不安定な壁だが、ルートははっきりしており、残置ハーケンも目にみえて多くなってきた。終末は近い。なぜなら、誰も命の綱となるべきハーケンを、抜かないで置いてゆきはしないのだから……。まっすぐのびたガリーから者手へと、乾いていれば豪快だろう四○メートルの水平なトラボースを済ませ、いやらしい氷のガリーを登ると悪場は終った。あとはガラガラした岩稜を、忠実につめれば良いのだ。た。あとはガラガラした岩稜を、忠実につめれば良いのだ。た。あとはガラガラした岩稜を、忠実につめれば良いのだ。た。あとはガラガラした岩稜を、忠実につめれば良いの大田の様の切れ間にウォーカーからミッシェル・クロへかけての稜線がみえる。間違いなく頂上は我々のすぐ近くにある。我々の線がみえる。間違いなく頂上は我々のすぐ近くにある。我々の線がみえる。間違いなく頂上は我々のすぐ近くにある。我々の

しかし、これから先の氷のはりついた砕けた岩稜も意外に悪く、果てしなかった。一六時三〇分、ウォーカー頂上の雪庇にく、果てしなかった。一六時三〇分、ウォーカー頂上の雪庇にハーケンを打ちこみ、会旗(独標登高会)をしばりつけて握手をした。雪庇を越えた頂上は、広い雪の連らなりだった。終ったした。雪庇を越えた頂上は、広い雪の連らなりだった。終ったした。 五日間にわたる、我々のもっとも激しく辛かった登攀のだ。 五日間にわたる、我々のもっとも激しく辛かった登攀は、過去のものとなった。降らねばならない。みおろすイタリヤ側も深いガスだった。 事故でも起してはと、頂上から少し下った岩稜にツェルトをかぶる。

八月一八日―曇のち晴のち雪

たこと

ラスの小屋についた時は、一時晴れ上りそうにみえた空から、 細 の下の通過に肝を冷やし、深いクレバスを跳びこえながらジョ は懸垂をくり返した。今にも音をたてて崩れそうな、セラック い雨が降り始めていた。 ガスの切れるのを待って、六十度を越す氷壁をくだり、 ビバーク地(一〇・〇〇) ―ジョラスの小屋(一七・四

こうして、一つの山は終った。

あり、 たのは、びっしりと氷化したクーロワールであり、クラックで といわれる、名もない三~四級の岩壁において、我々が直面し れが平年の状態における北壁だったら、 っとも手こずった場所であった。 ートこそ、我々がウォーカーにおいてもっともいやらしく、も 1 なくて済んだかも知れないが、我々がとりついた当 るしく危険と困難を含んだ、辛く果てしない登攀だった。 -図では、三~四級の容易な登攀としか書いてないこれらのル ふりかえってみると、ウォーカー稜の登攀は、 常軌を逸していた。先駆者が駆けるようにして通りすぎた 薄氷を踏むような、きわどいトラバースであった。ルー あれほどまでに苦しま 実際にいちじ 時 0 北壁

UU 「級の場所に比べれば、垂直やハングした六級の岩は、氷がな 174 これが雪の少ない普通の状態での登攀だったら、これらの三 回級の 登攀は、 楽しく、快適なものであったろう。この三~

> った。 恐らくは同じ状態に遭遇したのではないかと思われる。 幸いには、憧れの岩壁に五日間もの長期間を過ごすこととなっ 血のツバを吐く思いの咽の乾きを経験せずにすんだし、望外の すべての場所が、アイゼンをつけての登攀であったことを想起 か。 ジョラスにおいても、我々の登攀が最初にして最後のものとな 日間を費して登り切った、唯一のパーティであるイギリス人も、 たのである。最悪の気候といわれた昨年、やはりこの北壁に五 るという皮肉なめぐり合わせに、何度いきあったことか ○~二○センチの氷の下にがっしりと効いた残置ハーケンが してもらいたい。氷を叩き落し、打ちこんだハーケンの僅か ュファ・クラックや七五メートルの凹角、灰色のツルム以外 いというだけで、どんなにか我々に安息感を抱かしめ しかし、その反面、我々は先駆者の多くが味わったような、 当時の北壁における状態は、超六級といわれる著名なレ

それで良かっ 荒しかったからこそ、今なお激しく我々の胸の中にあるのだか 目、ジョラスを見たかったが、無理な天候だった。 二日後、 シャモニーをあとに我々は帰国の旅につい たのかも知れない。ジョラスの北壁は辛く、荒 た。 ま

橋 元

登山の帰路、大分隊が山麓を通っている。

板

計

ンズー・クシュのシャー・フラデーを夫々試登し、一方ワハン 松倉和義と四方田靖の両名を、アフガニスタンに派し調査に当 でもあり、万全を期することにし、一九六五年四月初旬、会員の としてとり上げられたものである。本会としては初の海外登山 は、一九六六年が本学院創立八十周年に当たり記念事業の一つ バンダコール(六八四三メートル)の登頂で果たした。この計画 フガニスタン国中央ヒンズー・クシュ山脈の最高峰、コー・イ・ 東北学院大学山岳会は、長い間の念願であった海外登山を、ア 両名は中央ヒンズー・クシュのミール・サミールと西ヒ

> り当たることにした。 快諾を得、隊員の健康管理は勿論、現地民の診療にもできる。 年秋から本格的な準備に入る。隊員のうち医師は、本会の特別 会員である仙台市立病院小児科長の加藤博士に要請したところ なったが、現役三名を含む次の十一名が選考された。一九六五 者をつくり、将来の会の発展に備えることとし、多少人員は多く さて隊員であるが、この際できるだけ多くの海外登山の経験

隊長 副隊長 佐々木 橋 郁 元 男(三一歳 一(四〇歳

匹 方田 公 也(二八歳 靖(二八歲

義(二九歳

入

佐々木

節

朗(二七歳

男(二一歳 志(二三歳 繁(二五歳

公

谷、東ヒンズー・クシュ入域について関係方面へ交渉したが、

(198)

バンダコールに決定した。この山は、一九六○年と六三年にド

会としては、この調査結果にもとずいて検討し、コー・イ・

という情報をもって、二ヵ月間にわたる調査を終って帰国した。 うまくいかず、近い将来もこの方面の入山は極めて困難である

イツ隊によって登られているが、日本隊としては名古屋大隊が

九六四年に試みているに過ぎない。なおコー・イ・モンディ

カブールはアフガニスタンの首都で人口三十万といわれ、

-心部はビルも建ち、

道も舗装されて車の流れも多い。

しか市

みるべき産業もなく、政治、行政の中心といった感じ。標

佐藤弘(一九歳)

医師 加藤義明(四一歳

を備は特別なものは用意はしなかったが、岩登りが要求されるだろうという想定から、これに要する登攀用具には意を用いた。食糧は登山行動中は日本からもって行くことにし、キャラ型自動車をもって行く計画を立て、カラチ陸揚げ、カブールま型自動車をもって行く計画を立て、カラチ陸揚げ、カブールまで陸送し、比較的自動車を利用できるこの地方を、ひろく歩くことにした。

カブール

先発隊として松倉、佐々木(節)、入賀、黒瀬の四名は一九六 大年五月三十一日羽田発カラチへ向かう。本隊八名は六月七日 次年五月三十一日羽田発カラチへ向かう。本隊八名は六月七日 羽田発、ニューデリーを経てカプールへ。ここでカラチ班と合 別田発、ニューデリーを経てカプールへ。ここでカラチ班と合 ルには六月十四日についた。パキスタンのハイデラバード、ム ルタン、ラワルピンディ、ペシャワール、カイバー峠を越えて、 アフガニスタンに入る。暑熱の旅は大変な苦労だった。河北新 報社の佐々木記者も同行し、元気な姿を見せた。

う感が強い。バザールは品物は少ないが、一応はほしいものはち思わせる涼しさ。二○○○メートルを越す岩山が市を東西にを思わせる涼しさ。二○○○メートルを越す岩山が市を東西にを思わせる涼しさ。二○○○メートルを越す岩山が市を東西にも別るが、湿気がないのでしのぎ易く、朝夕は日本の秋高一八○メートルの高燥の地にあり、日中の気温は摂氏三十高一八○メートルの高燥の地にあり、日中の気温は摂氏三十

空輸した荷を受取ることになるが、今年から食料品に対し関 をバザールで売ったのが原因らしい。われわれも予想外のこと をバザールで売ったのが原因らしい。われわれも予想外のこと をバザールで売ったのが原因らしい。われわれも予想外のこと をがするという。どこかの登山隊が前年、山で残した食料品 に対し関 そろえられる。少々不衛生で喧噪である。

食料品の購入、ドル交換、入山許可手続き等で隊員も忙がしたったり、カブールでは必ずうけるという下痢の続出で大忙した。ドルを現地通貨アフガニと換えるのも、わずらわしい仕事に何百ドルという高額の、しかも小銭にかえるにはその能力がなく、どうしても毎日のように少しずつ交換することになる。それに、破れたり汚れているものは、奥地では通用しないというので、これをよりわけて中央銀行でとりかえるというわけで、一度だ。ドクターは、大使館員はじめ十数人の在留邦人の診察にあた。ドクターは、大使館員はじめ十数人の在留邦人の診察にあた。ドクターは、大使館員はじめ十数人の在留邦人の診察にあた。ドクターは、大使館員はじめ十数人の在留邦人の診察にあた。

マンや、カブール博物館、オーレル・スタインの墓など。からのやきものの村、イスタリフ、避暑地として賑わうペーグ案内をうけ、カブール市内、近郊の名所旧蹟を見学する。古くである。この間、休日など暇を見つけて大使館の笹島書記官の

山に入る前には、むしろ必要ではないかとも思われる。 くらか理解できたし、気候、食事にも慣れ、この程度の滞在は 長かったが、この間アフガン人とも接し、言葉、習慣などもい 長がったが、この間アフガン人とも接し、言葉、習慣などもい

キャラバン

山に入るコースは二つ程考えられたが、われわれはパンジュール川を遡り、アンジュマン峠越えをとることにした。カシール川を遡り、アンジュマン峠越えをとることにした。カラ情報もあり、はっきりしない。まず先発として隊の車を利用う情報もあり、はっきりしない。まず先発として隊の車を利用して偵察すると同時に、ルハ、ゼネでの入城許可手続きと、馬の調達に当たることにした。

行動はできず、各地方官署で改めて、その地方に入るための許にかては、内務省で許可はもらったが、それだけでは自由にについては、内務省で許可はもらったが、それだけでは自由により、警察官が一人つく。入域に十三日、松倉、四方田、寺島、佐々木(節)、入賀、黒瀬二十三日、松倉、四方田、寺島、佐々木(節)、入賀、黒瀬

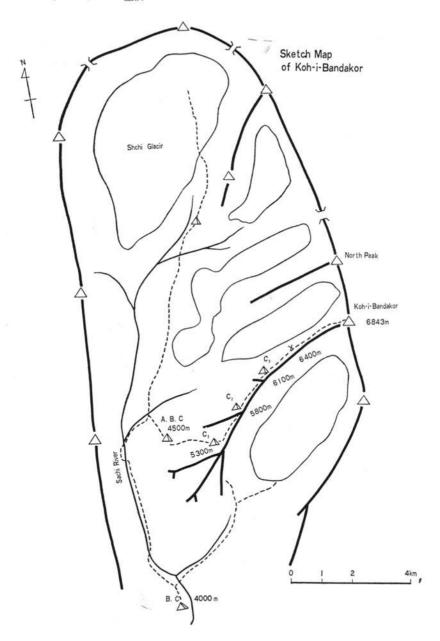
し、他は河原にテントを張る。ダシト・レワート方面へ行く現徒渉不可能となった。四方田と黒瀬はすぐカ ブー ル に引き返で、パンジシールの濁流が道路まであふれ、大型車でなければ可書が必要な仕組になっている。ここから間もなくの とこ ろ

地人に、馬の調達を依頼する。

二十五日、カブールの本隊はチャーターし

たバスで午前

クは、 迎えてくれる。たびたび登山隊が訪れるためか、思いの外手ま 先発隊の前宣伝で、すでにわれわれの来村がわかっており、 み、いよいよダシト・レワートへ。夕方六時無事到着。村では 年の調査隊員の松倉、四方田を知っており、手続きは円滑にす と同じように手続きをとり、警官も交代する。ここの役人は前 登る。チャリカールまでは快適な舗装道路だが、あとは大変悪 時、アリアナホテルにしばしの別れをつげる。運転手は無断 わしがよいようだ。馬の方も心配ないらしい。アブドラ・ハー の入口では、英語が幾らか話せるアブドラ・ハークという男が ハで先発隊を収容し、ゼネへ。ここでは、ルハで許可をうけた の屋根が落ちそうになる。途中二ヶ所程道普請をして進む。 い道となる。オンボロバスなので、道が悪くなると今にもバス 程北のチャリカールへ。ここから別れてパンジシール川沿いに なると車の中まで入ってくる。カブールから七十キロメート 客を拾っては屋根に乗せていく。そのうちに、屋根上が満員に 政府発行のものだという身分証明書をわれ われに示し



の整頓や、集まって来た部落民の整理にあたる。 一段落するて、キャラバンの相談にのるという。大きな声を張り上げ、荷

と、馬のこと、人夫のこと、食料品買入れ等、テキパキと定め

ることになる。

てくれる。彼は四十五歳で、カブールにはドイツ人の第二夫人にくれる。彼は四十五歳で、カブールにはドイツ人の第二十三頭を契約する。人夫は馬一頭に一人とし、して三頭、計二十三頭を契約する。人夫は馬一頭に一人とし、外にアブドラ・ハークとその弟アッサンがキャラバンに加わ外にアブドラ・ハークとその弟アッサンがキャラバンに加わる。この二名分の賃金はいらない、日本隊にサービスするといる。

二十六日、午前六時頃から、三々五々馬をつれた人夫が集まってくる。中には前年ミール・サミールに登られた一橋隊のサってくる。中には前年ミール・サミールに登られた一橋隊のサってくる。中には前年ミール・サミールに登られた一橋隊のサークでないと、世界雇ってくれと申し込んで来る者もあった。そいから注意すること。タバコなど品物は絶対やらないこと。そいから注意すること。タバコなど品物は絶対やらないこと。そいから注意すること。タバコなど品物は絶対やらないこと。その奥には悪いやつがいるから追い払うためと、アウ(カモシこの奥には悪いやつがいるから追い払うためと、アウ(カモシこの奥には悪いやつがいるから追い払うためと、アウ(カモシ

とドイツ製の猟銃を披露してくれる。

キャラバンは、まずパンジシール川をアンジュマン峠まで遡

二十七日、ミール・サミールの登山基地コージョンを通過する。前年調査隊員の松倉、四方田が部落民に歓迎される。鶏との、それに現地民の主食ノンの原料である小麦粉を買う。部落に入ると必ず病人がまっている。ドクターは多忙だ。医薬品関係は約四十キログラムもってきており、できるだけ医療に見放られた地方の現地民をみてやりたいと、ヒューマニスト加藤はされた地方の現地民をみてやりたいと、ヒューマニスト加藤はされた地方の現地民をみてやりたいと、ヒューマニスト加藤はされた地方の現地民をみてやりたいと、ヒューマニスト加藤は

二十九日、明日のアンジュマン越えに備えて、行動は午前中で切り上げる。広々とした草原にテントを張る。すぐ近くにはで切り上げる。広々とした草原にテントを張る。すぐ近くにはを食んでいた。山の方には二百ないし三百程の羊が群れていた。板橋と入賀は、すぐ目前にそば立つ雪の峰に登る。約二時間程で目ざす頂上に達する。高さは四五〇〇メートル位だろうか。頭痛がし、動きがにぶくなる。頂上からは五千メートルうか。頭痛がし、動きがにぶくなる。頂上からは五千メートルでは、すでにドイツ隊が入っているとのこと。夕食は明日に備では、すでにドイツ隊が入っているとのこと。夕食は明日に備では、すでにドイツ隊が入っているとのこと。夕食は明日に備では、すでにドイツ隊が入っているとのこと。夕食は明日に備では、すでにドイツ隊が入っているとのこと。夕食は明日に備

三十日、待望のアンジュマン峠を越える。四二二五メートル

カン料理とする

カの一種)を獲って御馳走するといって、アメリカ製ピストル

されたのか、四人は去って行った。次の日人夫に聞いてみると 対決も十二時すぎ話がついたのか、 月光のもと、鉄砲を構え、何事か盛んに言い合っている。われ 5 「旦那方の荷物を奪いに来た盗人で、 われのキャラバンを、 トから顔を出すと、アブドラ・ハークが「スリープ」と叫ぶ。 にあらわれ、ときには大人の腕位の大きなものも釣れるとい こちら側にはマスがおり、人夫の話ではカブールの高官も釣り ズー・クシュの最高峰にふさわしい。気の引きしまるのを覚え れた一連の山脈の中に一きわぬきんでた姿は、さすが中央ヒン バンダコールが初めてわれわれの目の前にあった。雪でおおわ る。この夜、十時頃テントの外がにわかに騒々しくなる。テン 流れに立った。バンダコールの見える草原にテントを設営。峠の いはふみ抜いて大変な難行だ。峠には七時に着く。コー・イ・ えないと、 ア、アラル海へ入るアンジュマン川の分水界となっている。 のこの峠は、インダス川にそそぐパンジシール川と、中央アジ 七月一日、休養日とし、隊員は洗濯をしたり荷の整理にあた 午前二時起床、 急坂で悪場の連続。人も馬も疲れ切ってアンジュマン川の 高度の影響で頭が重い。それに寒いので早々に下りにかか われわれは大きいのは駄目だったが、百匹近く釣り上げる。 馬は通れないという。それでも馬は足をとられ、或 四時出発。雪の堅い、朝の早いうちに峠を越 四名の原住民が襲ったものらしい。この 或いは多勢に無勢で追い返 追っ払った」という。事

> P で稼ぎに入るということは、容易でないらしい。特に現金収入 アズラットセーで荷をとり返されたという事件からも、 ろう。後日になるが、 だまだ部落、 い知ることができる。 の殆んどない奥の地方では、登山隊の仕事などは恰好のものだ 実はわれわれの荷の運搬仕事の奪い合いらしい。この国ではま п ボート部落の者に追い返され、またロボートの人夫も、 部族の対立や、 いま雇っているダシト・レワートの人夫 地方間の縄張りが強く、 うかが

馳走になったが、急須や茶碗がなんとメード・イン・ジャパン さんから、ノンとお茶の御馳走をうける。この先の部落でも御 さて何事もなくキャラバンは進み、 アンジュマン村では村長

後のキャラバンを進めることにする。

た損じたりする事故があり、

内外共、

お互一層注意をして、今

またわれわれの馬が、遊牧民の放っていた馬の群にまぎれ込

このため荷の一部をアンジュマン川に失い、ま

なのには驚いた。

二日がかりで越え、再びアンジュマン川にでる。ここはドイツ 隊が一九六四年、現地民のため事故にあったところだ。 メッド山群に入りこむ。そして三千メートル前後の峠を三つ、 所があるということで、ウェッシテーから左手クワジャ・ムハ 79 アンジュマン川沿いに道はあるというが、増水のため危険個 イスカゼールを経て、ラゼールでキャンプ。アンジュ

H

湖のようで、流れの方向も定かでなく一寸とまどう。に北の方、ジェルムへと流れる。この交わったところは大きなマン川はここでムンジャン川と、西と東から合流し、ほぼ直角

郷に入ったら郷に従えで、止むを得ないことだろう。馬も人夫 も困るし、情からみても何とも後味のよくない気持だったが、 しかももう少しというところで変えられるのは、こちらとして は、ここでロボートのものと交代となる。使いなれた人夫を、 間程で許可した旨の確認をうける。 い。幸いファイザバードからここまで電話が通じているので、 省発行の許可書はゼネで取り上げられており、どうにもならな はムンジャンまでとして、 で、これ以上の入域は許可できないという。ゼネの役人が入域 山に入ることになる。 込んでいる。キャラバン最後の入山手続きをして、いよいよ山 チ川を遡るのだ。部落の外れに役所があり、警官が十人程住み が発生し、 も明日にならないと集められないので、今日の行動はムンジャ ファイザバードを中継してカブールに連絡してもらう。 の路傍に、 ン川を渡っただけとなった。 五日、ムンジャン川を渡り、 間違いなく揃えると警官が約束する。ラゼールとロボ 多くの生命が失われたという。ロボートでは二十人 新しい墓が数多く見られた。 許可の手続きに行ったら、 山の名を書かなかったらしい。 明日必要な馬九頭、 ロボートにつく。ここからシャ ダシト・レワートの人夫 前年この地方にコレラ 書類の不備 ロバ十三頭 約二時 内務

(日本円一万円)で買い、BCへ上げることにする。シャチ川たルを越す山で遊牧民一家とあう。ここで牛一頭二千アフガニトルを越す山で遊牧民一家とあう。ここで牛一頭二千アフガニトルを越す山で遊牧民一家とあら。

が二股となる岩壁の下にキャンプ。

ベースキャンプ

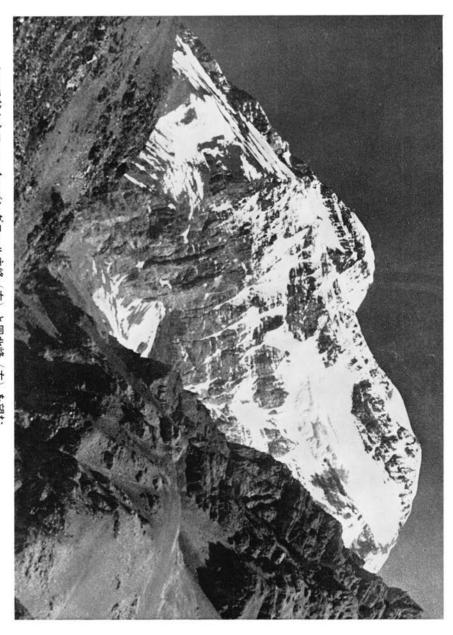
3

頂上を右手、それより発する氷河が南西尾根にかかり、岩と の岩尾根の壁がとりまき、うしろはすぐに、大きな黒岩の堆石 の岩尾根の壁がとりまき、うしろはすぐに、大きな黒岩の堆石 となり、われわれのキャンプを囲む。

この草原の東はずれ突端にケルンがあっ

た。

頂上に面して



Koh-i-Bandakor (6843m) (right) and the North Peak (left) seen from the Sachi Valley. シャチ谷からコー・イ・バンダコール主峰(右)と同北峰(左)を望む (By K. Terashima)



第1キャンプからシャチ氷河を望む The Sachi glacier seen from CI(5300m). (By K. Terashima)

冥福を祈った。 落遭難したときの碑であるという。近くに咲いていた花を捧げ せて。英国隊が、ここから見られる氷壁をトレースする際、 「ロバート・ウィルソン 一九六五」と記された一片の 岩をの 滑

Cまでついて来た二名である。一人はアビブラモンといい、ド 理は人夫にまかせる。 部で十四名がこの山の住人だ して使うことにした。BCには他に警官シェリンショウ君。 は唯一の読み書きのできるインテリ男である。コック兼雑用と イツ、イギリス、アメリカ隊にもついて来たという。 人夫で、ロボートの役人のコネでもあるのか、特に許されてB 込みがあり、二人おくことにした。彼らはダシト・レワートの 八日、午前中は荷の整理、午後は隊員の休養とする。 人夫は、山に入ったら雇うつもりはなかったが、 また肉は燻製として長くもたせることに たっての由 もう一人 牛の料 全

容 Ш 開 始

適当なキャンプサイトがない。手前西寄りからは岩を登り、 面はBCからみられるが、実際登ってコースをさぐることにし 七月九日、ルート偵察にかかる。隊をA、B、Cの三つにわ A、B隊は南面から、 奥の東寄りのコースは氷の壁で、高度の技術を要するし、 C隊は北面からみることにする。 南

> なしにあり、 西尾根への接近はできそうだが、岩がもろく、落石がひ 危険を覚悟しなければならないという。

大変苦労してBCへ。 なり気温の上昇と共に、午前中の登りとは違い、 と佐藤(弘)が岩を八〇メートル程試みてみる。下りは午後と 破し、それに続く雪と氷の壁をつめるより外ないとみる。 性があると判断し、 度南西尾根に出て、尾根通しに頂上にたどるのが、確実で可能 高さ四五〇〇メートル。ここから頂上へのコースは、やはり る。頂上と北峰の間から発する、氷河の末端の広い台地に出る。 る小さな沢には落石があり、 河原が現われ、それが終ったところから右へ小さな沢をつめ C隊はシャチ川を遡り、 まず眼前の岩場高差約一 まず滝状の岩を過ぎると、 またシャチ川の横断は増水のため 五〇メートルを突 シャチ川 再び広

員で北面からの偵察を続けることにした。 BCでは協議の結果、 明日もう一度C隊のルートに従い、 全

北の方シャチ川の源流にシャチ氷河の広い流れが落ち、 秀麗な六○○○メートル級の山がみられる。 とに決めた。頂上は東になるが見えない。ここからの から続く六〇〇〇メートル級の岩峰、 し、ここから昨日トレースした岩の一つ左に、 つきの岩と、氷河を詳しくみる。そして氷河の舌端にBCを移 十日、全員で南西尾根の北へまわり、 左手西方はシャチ川をは 北峰の下部、 右手東方には北峰 登路を求めるこ 尾根と 奥には めは

さんで、五〇〇〇メートル級の岩尾根がとり囲んでいる。

十二日、岩場は松倉と四方田によってザイル・フィックスを上二日、岩場は松倉と四方田によってガイル・フィックス・ザイル二百メートルを使用する。岩棚の上にデポ地をつくり、C1建設の機をまつことにする。ルート工作中イタリア製のハーケン類をみつけた。現地民の話によっと、イギリス、イタリアと、女二人を含む アメリカ隊が入ると、イギリス、イタリアと、女二人を含む アメリカ隊が入ると、イギリス、イタリアと、女二人を含む アメリカ隊が入るという。

行動は午前中に限られる。午後は融雪が激しく、

落石があっ

く日が続く

て危険だ。この落石の轟音は日が沈むまで全山をつつむ。 十五日、全員ABCに集まり、これからの行動予定を立て も、頂上へは二十八日とした。登頂隊のメンバーは、松倉、佐 とげと並行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げと並行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げとが行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げとが行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げとが行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げとが行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進 上げとが行して、C1建設は十九日とし、以下C2、C3と進

天候はどうも安定しない。十六日にはBCで四センチメート

高度の影響を、うまくかわすことができるかどうかにかかると

判断する。

ルの積雪をみた。

十九日、この日C1設営のため寺島、佐藤(弘)と佐々木、入賀の二パーティーがABCを出る。デポ地を経ていよいよ雪入賀の二パーティーがABCを出る。デポ地を経ていよいよ雪か画にかかる。雪と氷のミックスした斜面で、一歩一歩カッの斜面にかかる。雪と氷のミックスした斜面で、一歩一歩カッの斜面にかかる。午後四時、ABCの視野から消え、やがてう。頸が痛くなる。午後四時、ABCの視野から消え、やがてう。頸が痛くなる。午後四時、ABCの視野から消え、やがて持線に出たという連絡は午後六時過ぎだった。ABC出発から 十時間の苦闘だった。高さ五三〇〇メートル。

どったが、無事C1へ。この日デポ地からC1への荷上げが終登り初めで、手がかりの岩が落ち、アブミをつけたりして手間二十二日、アタック隊は四方田とともにC1へ向かう。岩の

も天候は午後雪がふり、山は一

面ガスにおおわれた。

トルのピークの上だ。アタック隊の三名はC3へ入る。この日

C3は頂上からの尾根が、やや南へ折れ曲った六一〇〇メー

連日の活躍で疲れも出たのだろう。 ろすのは痛手だが、C1へ移し様子をみることにする。やはり 明日ルート工作するとのこと。C1からC2の補給終る。 頭痛を訴えてくる。食欲も全くないという。この場になって下 いた刺身にして食べる。おいしかった。残りは明日C1へ背負 めたカモシカの肉をもって登ってくる。ドクターとわさびのき のコース偵察。C3の予定地の先が非常に悪い感じ、できれば 豆粒のように見られる。松倉、 って行くという。できれば登頂のお祝いの「肴」にしたいもの。 この日、BCからABCに佐々木(郁) 二十七日、最終キャンプC3の設営だ。C2にいた四方田が 二十四日、 二十五日、松倉、黒瀬、 二十三日、 五八〇〇メートルにC2建設。ベースキャンプが 寺島、佐藤 (弘) によってC2予定地トレース。 四方田によってC3予定地とその先 黒瀬、 四方田はC2に泊る。 が、イソッフの射止

バース気味に慎重に越えた。

登 頂 一松倉隊員の記録

日あたりから急に動きが鈍くなったようだ。ノロノロと出発の七月二十八日、午前二時起床。あまり食欲がない。どうも昨

能。もろい岩の重なったピークと、氷の連続した細尾根をトラ流れ出ている氷河に直接きれ込み、右は雪庇となって通過不可流れ出ている氷河に直接きれ込み、右は雪庇となって通過不可流れ出ている氷河に直接きれ込み、右は雪庇となって通過不可能。もろい岩の重なったピークと、氷の連続した細尾根をトラー式、食糧準備にかかる。登攀用具、ツェルトザック、カメラ一式、食糧準備にかかる。登攀用具、ツェルトザック、カメラ一式、食糧準備にかかる。登攀用具、ツェルトザック、カメラ一式、食糧

た時半、やっと安定したピークで休む。ここからは右手の雪底をさけて、北面をたんねんにたどる。午前八時、陽があたり始める。急に暖かくなる。十一時、大きな岩の下につく。ここ始める。急に暖かくなる。十一時、大きな岩の下につく。ここ始める。急に暖かくなる。十一時、大きな岩の下につく。ここれ気味。岩蔭にツェルトザックをかけ休ませる。隊長とC3にいる佐々木(節)、入賀に連絡をとる。C3出発後初めての無線はるなった、佐藤(武)と二人で登り続ける。細い岩尾根に変り、大きなブロック岩を越えて、いよいよ氷冠の登りとなる。この外面は、アンジュマン峠から望見されたときから、この山を見るたびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた氷の冠だ。勿るたびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた氷の冠だ。勿るたびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた氷の冠だ。勿為たびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた氷の冠だ。勿為たびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた氷の冠だ。勿為たびに、いつも話題になった、ギラギラ輝いた米の冠だ。勿からは大きないが、登りはじめは大きないが、

はまわりが十メートル位しか見えない。 込まない。登るにつれて高度感は増し、 す頂上だ。百メートル位あろうか。 何か異常な状態の自分を発見する。百メートル程でこの斜面も 感じだ。高さの影響もあるだろう。 の舞うのが見えた。十二時四十分、 に長く感ぜられた。岩を一つ、二つ乗り越え、頂上の雪庇に雪 雪原に出る。 十二時丁度。黒い岩が見えた。 わずかばかりの雪の斜面を ゆるやかだが、長い、 フーッと緊張感がくずれ、 斜面も急になる。 円球の上を歩いている あれが目ざ 時に 非常

残す、頂上直下の岩の上に腰を下ろした。

を打って確保に万全を期す。 かかる。午後一時二十分下り始める。氷のスロープはハーケン ラと、十六ミリムービーで記念写真をとり、ペナントなどを、 員の名を書き入れているところだ。三十五ミリのスチールカメ が霞の中に望まれた。また岩にもどると、佐藤(武) ミールが、その北にはノシャックと東ヒンズー・クシュの山脈 庇の上にはい出る。東北東の空に奇怪な山容をしたティリチ・ 空罐がケルンと一しょにあった。カメラをとり出し、 上に達したことを知らせる。隊長、ドクターの声も入ってく ついて黒瀬とあう。疲れた。ここで約二時間ツェルトザックを る。やっと落着いてみまわすと、ドイツ隊の残したカンヅメの イツ隊のケルンのわきの大きな岩の下に入れて、下山の用意に トランシーバーをザックから出し、サポート隊に連絡し、 午後三時、 黒瀬の休んでいる岩に は旗に隊 頂上の雪 K 頂

かぶって休む

ビバーク・撤収

ABCでは黒瀬が休むという報で、C3の佐々木(節)、入賀に黒瀬のサポートをたのむ。その後頂上からの連絡では、アタック隊独力で下れるから、サポートの必要はいらないだろうということだった。しかし万一のことを考え、アタック隊が登りに一息入れた六四○○メートルのピークまで登り、ここでビバークの準備をする。この段階で佐々木(郁)等による登頂の計画は、残念ながらとり止めることにする。

は風もなく月光の下一晩を過ごす。トザックの人となる。天候はこの日一日、好天にめぐまれ、夜以上の行動は無理と判断し、五人はザイルを結び合ってツェル以上の行動は無理と判断し、五人はザイルを結び合ってツェル

○下る。 ○下る。

ベースキャンプでは、イソッフが二頭目のカモシカを獲って御ャンプへ。板橋ら四名は、この奥シャチ氷河に向かう。この日きからけ、夜はささやかな祝宴。

馳走にあずかった。

マン川をジェルムへ下る。 ロボート集結八月四日、五日からキャラバン開始、アンジュ

たフランス隊とも交歓することができた。彼らは頂上直下に迫 隊の隊長トーマス・トレイブスヴィッテル他にあう。 二次RCCの日本隊、コー・イ・バンダコール第二登のドイツ になり、八月十三日カブールに帰る。ホテルでは千葉大学、第 またわれわれが下山直後、同じコースでバンダコールに入っ ファイザバード経由、クンドスで日本人橋本亮一氏にお世話

> りながら、隊員の一人が体を悪くし登頂をあきらめたという。 (編者附記)コー・イ・バンダコール(Koh-i-Bandakor) は近頃の文 る場合が多い。ヒンズー・クシュの研究家である吉沢一郎氏に糺し 献に屢々コー・エ・バンダカー(Koh-e-Bandakâ)と記されてい

料がまだ不十分であるという。従って、ここでは著者の記載通りに たところ、その何れが正しいか、現在のところ、それを決定する資

従っておく。

馬 敏 隆

ハース・キャンプまで

記録が報告されている。(註2) (由2) 一橋大隊によるは、ドイツ隊による初登の記録(一九五九年)、一橋大隊によるは、ドイツ隊による初登の記録(一九五九年)、一橋大隊による nistan Expedition of the Chiba University として、先発隊を Nuristan 側からミール・サミールに登頂する計画であった。 一九六六年六月五日、 千葉大学アフガニスタン調査隊 Afgha-私達はアリンガル河 Alingar River を遡って、ヌリスタン(世4) ミール・サミール Mir Samir (六〇六〇メートル) について

歳)、谷修一(27歳)、千葉順一(26歳)、富樫信樹(26歳)。全 メンバーは五名――隊長・中馬敏隆(37歳)、小貫伸一(29 出すこともなく、全員揃って羽田を発った。

○○メートル)から始った。四○人のポーターとサーダー、警察 装備○・六トンは出発の十日ほど前に直接カ ブー ル へ空輸し 六月二〇日、キャラバンはナンガラージュ Nanghalaju (一二

ザールどころか物を売る店もないが、ヌリスタンの警察がもつ きた通訳のナジブラ Najbullah 総勢約五〇人である。このナで付けた兵達が二人、それに私達五人と、カブールから連れて 幅広い急流が濁って流れて行く。 最後の拠点になっている。村外れの崖の下を、アリンガル河の ンガラージュはカブールから車で十時間ばかり走った村で、バ

ずくと松が現われる。これはかなり太く背も高い。 ところなのだが、ほとんどヒイラギで、それも背が低く枝を張 鼻を廻る一日かで、何日かが過ぎた。ヌリスタンは樹木の多い 降りの一日、あるいは遥かにアリンガルのゴルジュを見下す山 境の雪の山から派生する尾根を越える。高い尾根を越える登り 本流には部落がないため、キャラバンは支流の村を結んで、州 よ、広い白っぽい山腹にばらまいた程度でしかない。 面に落ちているのでは、憩う場所にもならない。尾根の背に近 る種類でないから、日影を作ることもなく、トゲのある葉が アリンガル河に沿って、かなり良い道が一筋白く見えるが、 何れにせ

man、クルガール Khurgal と泊って、六月二四日、 ジュニア ワドウ Wadhu、パシャガール Pashagaru、ショマン Sho-

Junia に着いた。アリンガル河に沿ったヌリスタンの中央部と言われるところで、大きくひらけた畑が支流に拡っている。ショマンからジュニアにかけてが、一番身装が貧しい。特に男の子はひどく、何もまとわない子が混って仲間の間からキャンプ子はひどく、何もまとわない子が混って仲間の間からキャンプーで、くっきりと朱を入れているのが何人かいて、こう言った手で、くっきりと朱を入れているのが何人かいて、こう言った手で、くっきりと朱を入れているのが何人かいて、こう言った手でが肩から弾帯をかけてピストルを持っていると、一寸凄味があって気味が悪い。私達はナジブラが猟銃を持っている外、武器はない。ナジブラはいざとなれば、どっちへ付くのか判ったものではないが、生兵法は怪我のもと、私達は生れてからまだ武器を手にしたことがないのだから。

る。村自体がそんなところなのである。

べて幾分か水量が減っているだろうか。このキビシトの村は、う。道は完全にアリンガルの流れに出た。ナンガラージュに比方。ゴは完全にアリンガルの流れに出た。ナンガラージュに比

ール・サミールの名も知らない。実際に見て知っているナジブ囲に抜きんでるピークの一つすら見当たらない。ポーターはミある筈もなく、形に覚えのある山がある訳でもなし、さらに周すのであるが、いくら双眼鏡で覗いてみても、名前を知る山の

て通ったほどの大きな湖を造っていた。マンドウ湖 Manduhキビシトの上流でアリンガル河は堰止められて、半日かかっらなのだから、私には大して信用する気にもなれない。

サミールだと大声を挙げてみたところで、彼が見たのは裏側かっが、かすかな三角形の光ったピークを指して、あれがミール・

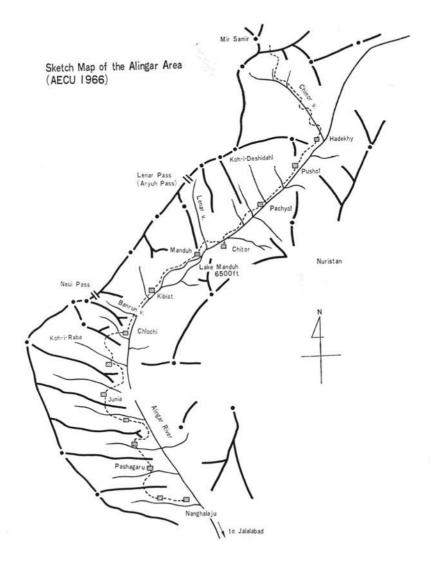
Aos と言う。翌二九日は右岸に入るリナル谷 Lenar V. を渡る。しかし増水したリナル谷の急流は、フィックス・ロープにる。しかし増水したリナル谷の急流は、フィックス・ロープにあってチトール Chitor まで、まだマンドウ湖が見える近さである。しかし増水したリナル谷の急流は、フィックス・ロープに

村である。 わashte-rewaht へ出られる。私達のキャラバンにも一つの目処がついてきた。チトールからパチョール Pachyol で泊ってプがついてきた。チトールからパチョールはアリンガル河最奥のショール Pushol まで二日、プショールはアリンガル河最奥の村である。

たメドウが現われて、新鮮な緑が眼に楽しい。流れは水量はあも両岸に見られ、道も橋を渡るようになった。時に露岩を配してリンガル河はマンドウ湖からすっかり様相を変えて、部落

遥か遠くにかすむ白い山々を、どれがミール・サミールかと探

なしい形をした雪の山が続き、足下は岩混りの快い草原である。 メートル、この峠は、左手間近かに四○○○メートル程のおと は約九○○メートル高くなった。越えた一番高い峠は二九○○高はやっと一九○○メートル、この一週間でアリンガルの河床河幅全体が滝のように迸り落ちる落差の間に作られている。標



こは標高二五〇〇メートル、夜は寒い。ナンガラージュの暖地 かけなくなった。子供が桑の木の下の学校? に十人程集って から住民の服装もぐっとよくなった。小ざっぱりと言っては言 からきたポーターを全部交代した。 いるのである。それだけにプショールの住民の方がずるい。こ ル河 Panjshir R. から入ってくるカブールの 文化に直結して いたりする。ヒンズー・クシュの雪の峠を越えて、パンジシー い過ぎるが、少なくともボロを纏う感じからは遠く、裸足も見 っても、牙をむいた荒さはもう見られない。リナル谷を渡って

ール谷 家も畑もない。パンジシールへの峠道が細く続いている。プシ ール・サミールが現われた。まだかなり遠そうだが、 の姿を確認できたわけである。 プショールの村はずれでアリンガル河は二分する。左へチモ ・ルから二日目、小さな橋の上から、丁度谷の上手正面にミ Chimor Dario と名を変えた河床を遡って行く。 初めてそ もう

0 派生して、パンジシール側に孤立していた。山頂から落とすど 側の偵察は徒労に終った。ミール・サミールは州境の主稜から た。ここを拠点に行なったミール・サミールのもつヌリスタン て、ポーターの帰った後のテントはうそ寒く、静まりかえってい ャンプを設けた。標高三三〇〇メートル、 面も、 七月四日、チモール峠にかかる放牧地に、仮りのベース・キ パンジシール河の源頭氷河を造っていた。七月六日の 時々雪が散らつい

前

進キャンプ

察で、谷、冨樫はチモール峠の上に立つコー・イ・ドクター 偵」Koh-i-Dokhtari(四六六○メートル)にケルンを積んだ ij

気味の午後の陽を受けた頂上のスノー・キャップは、透けて輝 ちはだかって、正面は雪の少ない岩壁がひと目をひき、半逆光 降りた。峠に立つと、ミール・サミールは全く目前に大きく立 を越えて、 パンジシール側サミール谷 Samir Dario の源頭 ばせて、七月一○日一気に雪のチモール峠(四三○○メートル) いている 今はどうしようもなく、再びプショールのポーターに荷を運

二段のアイス・フォールを懸けている。陽はミール・サミー 稜がコルまで一〇〇〇メートル以上もそぎ落とされて、 で、ミール・サミールの全容がその足下まで眺められる。 い故か、紅く燃えるような夕焼けは望むことができなかった。 の後ろに沈むが、雪が少ない故か、空気が乾いて水蒸気が少な から右手へ北東稜がギザギザの岩を長くのばし、左は短かい岩 が流れを作り始めた、雪線ぎりぎりのところに拡 ベース・キャンプは三九〇〇メートル、チモール峠から が 2 た 頂上 0

中馬敏隆

開始した。ベース・キャンプからサミール谷をへだてた対岸の ース・キャンプで一日休養した後、 七月一二日から行動 (213)

ちている。頂上からまっすぐにのびている岩稜が一本あるが、差は頂上から一○○○メートルもあろうか、下の氷河台地に落りとした三角形を成している。正面は垂直の壁となって、高度ミール・サミールを見ると、左右両翼に稜線をのばし、どっし

稜はギザギザの長い稜線で、末端では小さなピークをいくつも稜)を、他方は左側の稜線(南稜)をそれぞれ偵察した。北東我々は二手に分れて偵察を行ない、一つは右側の稜線(北東

逆層となって壁の中央で終っている

ルに達し、そこから稜線の状態をさぐった。
がに末端の小ピークにのぼり、頂上につづく稜線の状況を偵察びに末端の小ピークにのぼり、頂上につづく稜線の状況を偵察した。また南稜は頂上から一気に切れ落ちた急なリッジで、氷した。また南稜は頂上から一気に切れ落ちた急なリッジで、氷した。また南稜は頂上から一気に切れ落ちた急なリッジで、氷した。また南稜は頂上から、頂上につづく稜線の大態をさぐった。

一、南稜は氷河をたどれば、コルまでは比較的容易に達する二つの偵察から得た資料をもとに検討した結果、

が狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線には雪もあまりついていない。そうで、稜線には雪もあまりついていない。メートル、ルンゼの下部に大きなクレバスがあり、また中央部メートル、ルンゼの下部に大きなクレバスがあり、また中央部メートル、ルンゼの下部に大きなクレバスがあり、また中央部メートル、ルンゼの下部に大きなクレバスがあり、また中央部メートルとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって急なアイス・フォールとなっている。稜線に出るが狭くなって

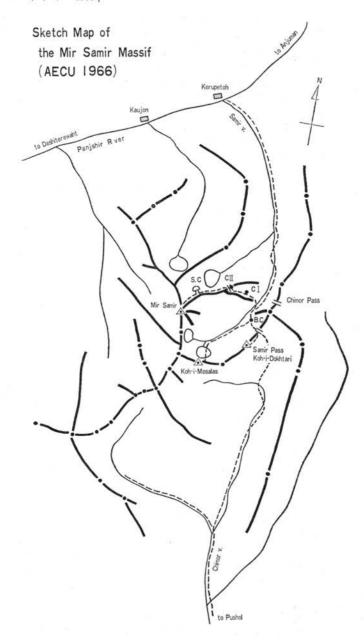
整地して七月一七日、谷、千葉、冨樫の三人はCⅡを建設し

いが、テント一つ分位の場所はあるように思える。

ところはコル状になっていて、下から見たのでははっきりしな

ら稜線づたいにアタックすることにした。 以上のことからアタック・ルートとして、北北東稜を決め、以上のことからアタック・ルートとして、北北東稜を決め、

で、CⅡ建設にやはり二日かかった。 CⅠ建設に二日、降雪のためCⅠで停滞した一日を はさん



た。翌一八日には稜線の偵察を行なって頂上アタックにそなえ

め我々は三人でアタックすることにきめてCIIにもどった。 あり、それさえ越せば頂上まではすぐのように思えた。そのた と岩の接点あたりであろう。頂上の手前に一つの大きな岩峰が で急な雪と岩の斜面となってつづいている。このやせたリッジ トがみえる。頂上に向かって右側は、数百メートル下の氷河ま うにして覗くと、はるか下方にベース・キャンプの黄色いテン サミール谷まで垂直におち、リッジの端しからはいつくばるよ だ。リッジの頂上に向かって左側は、えぐられたようになって 感じられる。しかしCⅡは五一○○メートルの高度があるの る。ここから見るとおどろく程近く、また高度差もないように るようにつづく急なリッジの最後尾に、上半部をのぞかせてい CII 我々の進むべき道はひとつ、リッジの上よりやや右下の雪 からみると、 ミール・サミールの白い頂は、殆んど重 な

登

百

フ・エッジになっていて、稜線上をスタカットで進んだため非のうの到達点まできてしまった。そこからかねて難関だと思っていた大きな岩峰まで、わずか四ピッチだったが、完全なナイでいた大きな岩峰まで、わずか四ピッチだったが、今日は約一時間でき出発した。前日四時間位かかったのだが、今日は約一時間でき出発した。

テラスになっているようだが、正面はオーバーハングしていて 強引だったが、この地点にビヴァークすることにした。幸い東 る。天候も悪く今日これ以上先に進むのは無理だと考え、多少 りに大きく、しかも稜線が丁度その影になって曲ってい に雪をかぶった四つの小ピークがその間にあった。岩峰があす なってきて、我々も少しあせりを感じはじめたが、岩峰の上に この岩峰をまきはじめた頃から天候は雪に変り、視界もわるく ンス、ホールドとも不安定で意外に時間がかかってしまった。 の頂上まで五ピッチかかった。この斜面は傾斜もきつく、スタ ートル、アプザイレンで下降し、そこから右斜上に向かって岩峰 れて、正面は再び一枚岩の壁になっている。やむなく約二〇メ ろ、ゆきづまってしまった。トラバースしたバンドはそこで切 手がかりもない。そこで右下にまき気味にトラバースしたとこ 前一一時だった。この岩峰は基部から高さ約四〇メートルで、 前の長い雪の斜面をトラバースして、岩峰の下についたのが午 め、下から見た時この岩峰と頂上の距離をあやまらせたのであ なりに右に迂回して、頂上直下のコルにつながっており、完全 いたが、実際は全然ちがっていた。つまり、稜線はここから弓 の間は、ひとつのコルをはさんで直線で結ばれていると思って ついた時はすでに午後三時半であった。我々はこの岩峰と頂上

常に時間がかかった。雪はよくしまっているが、ところどころ

アイゼンの歯がたたないような、かたい氷が顔を出す。岩峰

あまりなかったが、この近辺には高い山は全然見られず、足下

雪がだんだんはげしくなってきたので、まわりを見る余裕も

側にやわらかな雪の斜面があったので、雪洞をほりだしたが、ものの五○センチもほると、ものすごくかたい氷の層にぶつかって、どうにもならない。場所をかえたりしてみたがどこも同じで、どうやら三人ひざをかかえてうずくまるだけの、半雪洞をほるのに二時間かかった。

ンがあった メモ、それとその紙の裏に今年六月に登頂したドイツ人のサイ 初登頂した H. Biller 氏のメモと、 ろがある。その岩の下に小さな空カンがあって、一九五九年に 広い、なだらかな雪の斜面で、その一寸下に岩が露出したとこ り、ラッセルの交代がものすごく早くまわってくるように感じ し前から小雪となったが、コルからの登りは雪が膝までもぐ るのに苦労し、アンザイレンで慎重に通過した。コルにつく少 うと、見当をつけて出発した。頂上直下のコルにつづくナイ どんよりとしたくもり空だったが、午前中はなんとかもつだろ 夜は寒さと頭痛で殆んどねむられぬまま夜を明かした。今朝は た高度計で六二三五・八メートルを指していた。頂上はだだっ た。頂上についたのは午前九時半。 フ・エッジは、やや氷化した雪におおわれていて、ステップを切 二〇日、くもり後雪。ここは高度五四三〇メートルだが、昨 頂上の高度は我々が持参し 昨年のぼった一橋大隊の

区Iを撤収し、すっかり雪がとけてしまったベース・キャンプり手間どり、約八時間かかってやっとCIについた。二二日にり手間どり、約八時間かかってやっとCIについた。二二日に

コー・イ・モザラス(四九九二・六メートル)登頂

は小貫、谷、冨樫。 ー・イ・モザラス(Koh-i-Mosalas)に初登頂した。メンバースタンとパンジシールの 境界稜線上 に あ るピラミッド型のコスタンとパンジシールの 境界稜線上 に あ るピラミッド型のコ

ケルンをつんでヌリスタンの山々に別れをつげ、氷河を下ってイス・フォールを登り、そこから左手の雪渓をつめてコルにでのペニテンテ・スノーを縫うように登り頂上に立った。正面に見るミール・サミールが、圧倒的なボリュームを示している。また例た。ここにでるとヌリスタンの山が一望に見わたせる。また例た。ここにでるとヌリスタンの山が一望に見わたせる。また例た。ここにでるというに、から左手の雪渓をつめてコルにでイス・フォールを登り、そこから左手の雪渓をつめてコルにでイス・フォールを登り、そこから大河にかかる第一段目のアイス・フォールを

(217)

ベース・キャンプにもどった。これと言って難しいところもな い、よく晴れた、楽しい一日の山行であった。(谷修一)

(社へ) H. Biller; Nürnberger Hindukusch-Kundfahrt 1959 (註1)ミール・サミールの標高は、この六○六○メートルが採用され が、筆者は記録未見である。(日本山岳会『山』二六六号一九六七年 八月刊の一一頁の地図を参照されたい。――編者)私達の高度計では ている。またドイツ隊によって最近五八〇九メートルが報告された ィート) である 製の精密航空高度計(長針一回転一〇〇〇フィート、一目盛一〇フ 六二三五・八メートルを示した。使用した高度計は東京航空計器KK

(註3)佐藤之敏、ミール・サミール紀行『山岳』第六一年 (一九六六

(註5) 一九六五年の一橋大隊が使用した通訳と同じ。カブールの日本 (註4)一九六五年一〇月にカブールの The Afghan Cartographic いない。私達の通った地方は上記の図ではラグマンLaghmanに当る。 Institute で出した地図(1/300万)の州名には、ヌリスタンは入って

(註6)日本のヒイラギと同じ葉、本名はバルトウガシ。 大使館の近くに住み、英語よりも足が強い。

(註8)ドイツの Allgäuer Hindukusch Kundfahrt が一九六六年 (註下) I. Trübswetter: The Garmisch-Partenkirchen Hindukush Expedition, 1963, AJ 1964-II

Hans Pritschet の二名である。

六月一八日に登頂して残したもので、登頂者は Philipp Albrecht

DAV 1960

バダクシャン山地の旅

ムンジャン・パスとその周辺

安 JII 茂 雄

1

だろう。 ちに、その地名にいつかそんな憧憬に似た気持になっていたの か、明白な理由があるわけではないが、地図をみつめているう 名に、そこはかとない魅力を私はいだいていた。なぜであるの アフガニスタンへでかける前から「バダクシャン」という地

ビエト、パキスタン、中国などと国境を接している。つまり、 のような形をしたワハン廻廊もこの州内にある。 この辺りでもっとも中央アジアの核心地帯に近く、 バタクシャンは、アフガンでも最東北部に位置しており、ソ あの牛の舌

もともと私たちのパーティは、明確に特定の山頂を目ざそう

その可能性は、 て、もっともつよい希望といえば、ワハンの入谷であったが、 つあった。 ったので、一応その偵察踏査を主目的にしたわけである。強い 同じ頃にカフカズへ入り、来年はパミールという計画だ 出発の日が近づくにしたがって、稀薄になりつ

という計画ではなかった。仲間たち(第二次RCC)のもう一

てくれるのか不安でならなかった。 ン山地を踏査することが中心課題で、どの辺まで入山を許可し イ・クルベックなど候補にあがったが、私としてはバダクシャ そこで二次案として、コー・イ・バンダコールの東面、コー

で、十日の正午すこし前についた。 入山している旨の連絡はうけており、私たちはカブールに直行 に東北学院大パーティ、千葉大パーティがヒンズー・クシュへ たち本隊の五人は七月九日にいずれも羽田から出発した。すで 先発の青柳、石井の両隊員が一九六六年六月二十九日に、私

と、雲一つない青空。風土病のカブリに罹って、一人一人あい ついで下痢をおこし、腹痛を訴える。なんでも飲料水による凝 きれない。紺青色の色紙をぺったりはりつけたように朝がくる たたくうちに数日はすぎた。登山許可、通関などに手間どっ て、変哲のない中近東の灼けつくような時間は、なんともやり た。まずこの気候風土のちがう環境のなかに投げこまれて、ま 標高一八〇〇メートルのこの高原の町は、 まこと高燥であっ

似赤痢の由。

外務省では中部ヒンズー・クシュ以外の東山域は、登山禁止へ、雪の山々を眺めたい一心だった。

ているのだ。

もともと私などは、このカブールの町の暮しも、それなりに、というと大変な僻地らしく、江戸時代のエゾマツマエといっいるのは、到底たえがたいであろう。カブールからバダクシャンというと大変な僻地らしく、江戸時代のエゾマツマエといったぐらいの関係らしい。

ており、私たちの欲求不満はいくらか解消したかにみえた。ではひどく隔たっているのだ。それを結ぶたった一本の幹線道ではひどく隔たっているのだ。それを結ぶたった一本の幹線道の町をつないでいる。サラン・パスの上はさすがに肌寒く、残め町をつないでいる。サラン・パスの上はさすがに肌寒く、残いがように、大きないでいるのだ。それを結ぶたった一本の幹線道ではひどく隔たっているので、カブールと力があり、私たちの欲求不満はいくらか解消したかにみえた。

といえば粘土か砂礫でこねあげた、風化した丘陵ばかりつづい氷河の山など存在するのかどうか、みんな半信半疑だった。山し」といった濛漠とした世界である。一体はたして、この奥にし」といった濛漠とした世界である。一体はたして、この奥に

の主邑であり、ワハンの入口の町として、中央アジアの探検記バードに辿りついたのは、七月十八日だった。バダクシャン州幾台かのバス(トラック改造のもの)を乗りついで、ファイザ

のであろう、自動車さえなければ、『アラビヤンナイト』の蒼はこんでいた。この辺りまでくると、文化果つるところという仲面倒で青柳マネジャーは旅券をもって、いくどか役所へ足を体とには度々登場する土地だ。

眺めたのだった。 ・暗黒星雲という光の帯も、はじめて教えてもらって、私はた。暗黒星雲という光の帯も、はじめて教えてもらって、私はた。暗黒星雲という光の帯も、はじめて教えてもらって、私はたる舞台にふさわしい場景といえる。

2

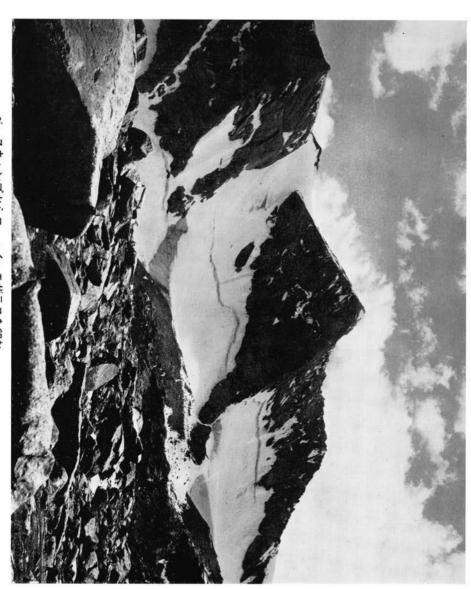
の国境に近いということで許可にならず、やむなくジュルムへった。しかし、ゼバックは禁止線に入っており、パキスタンとはじめ私の計画だと、ファイザバードからゼバックへでたか

唯一人の在留邦人橋本さんのご厄介になり、翌日はタルカンへ

クンズーツのスピンザーホテルで一泊して、この町にくらす



バミア原が5元/ジェア・ア・ア・アルの筆谷、石字の尾板が光東板Mir Samir (6060m) seen from the Samir Pass. The North-east ridge is the righthand one.



ベースキャンプからコー・イ・モザラスを望む Koh-i-Mosalas (4992.6m) seen from the Base camp.

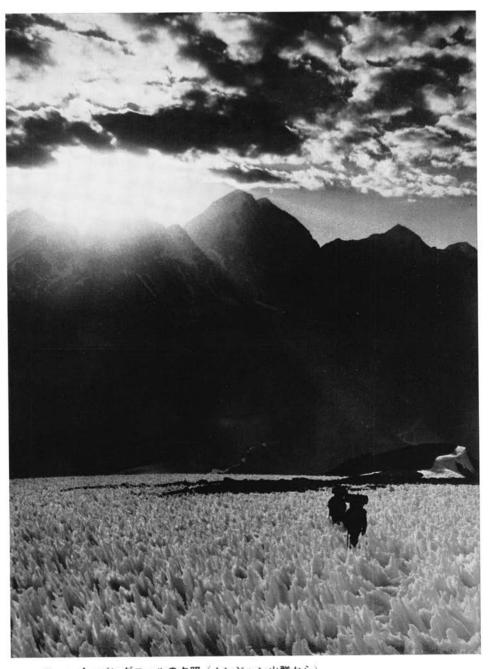
(By S. Onuki)



コー・イ・セフェからムンジャン山群を望む。遠景はコー・イ・クレベック(左)と コー・イ・マルケッチ

The Munjan group seen from Koh-i-Sefe.

Koh-i-Chrebek (6290m) (left) and Koh-i-Marchech (6400m-6450m) in the background. (By S. Shirahata)



コー・イ・バンダコールの夕照(ムンジャン山群から) Evening glow on Koh-i-Bandakor seen from the Munjan group. (By S. Shirahata)

向かうことにする。ジュルムが山にもっとも近い許可のとれる

迎をうけた。村はジュルム県のガバナーの所在地で、私たちに 能があったのだろう。 が紹介状をガバナー宛に書いてくれたのだが、あるいはその効 のも或る知人がいて、私たちの出発の前日、アリアナ航空社長 役場の一室を貸してくれて、ひどく好意的だった。それという ジュルムは日本の農村のような閑静な村である。ここでは大歓 はない。山地に近ずいたせいか、いくらか緑が目だちはじめ、 ジュルムまでは、バスが行った。常識で考える自動車通路で

のろと走った。 クで行った。ジュルム川ぞいの崖道で、いくどもトラックはエ ンコしながら、ゼン息患者のように砂塵をまきあげながらのろ 翌日、ここからさらに奥の村ハザラード・サフェまでトラッ

もある。私たちにはソルジャー(兵士)が一人ジュルムからつ を組んで、ジュルム川ぞいに南下してケロンまでぬけるのだ。 バダクシャンの山地へ入ったかんがつよい。あとはキャラバン ただろう。この辺りまでくると、雪の白い山がみえはじめて、 た。途中で橋がこわれていたりしたら、もっと時間をくってい この村も田畑などあって、緑の目だつよい村で、小さな学校 七月二十日にここまで入山できたのは、しごく順調であっ

> 村の、公会堂みたいな土造の家を貸してもらい、ここで数日を すごした

心を占める。 こえてくる。ひとしお異境へやってきたという孤絶感が、私の なると、村のあちこちからアラーの神への祈り声が、朗々とき 空は、いぜん毎日快晴つづきで一日の雨も降らない。夕刻に

をしているのだろうが、それにしてもアフガンでの経済観念は バンを組んだそうで、私たちが二隊目とか。お互いに駈け引き 歯切れがよくない。数年前に、イタリア隊もこの村からキャラ あわないらしい。この任には通訳のアリが当たったが、どうも の馬やロバは仲々集まってくれなかった。どうやら金額が折り よほど考えるべきであろう。 二日間ぐらいで出発できると予定していたのに、キャラバン

札となると、くずすことが不可能なほどの高額紙幣となって、 く消費経済は乏しい。それだけに収入というものは極めて貴重 なのだ。カブールなどでも五百アフガニー(一アフガニー=五円 ひどい低収入なのである。 してできた村が多いのだから、自給自足で流通機構は殆んどな いが、地方へくるとまるでなくなる。もともと、遊牧民が定住 カブールなどでは、いくらか消費経済は存在するかも知れな

ラバンの収入など、この僻地の村人にとっては、 そこでバクシシーと呼ばれるチップもさかんになるし、 一年に一度あ

いてきて、身辺の守護にあたってくれた。私たちは石垣のある

か、怪我の化膿で、あとは薬欲しさのニセ患者との、長沢隊員に滞在中は診療所を開いたが、たいていは栄養失調による眼疾結局、馬一頭一日一六○、ロバ八○アフガニーときまった。村るかなしかの好機といえるだけに彼らも目の色をかえるのだ。

の話だ。それでも二日間で八十人近く診療した。

一トル前後のドロミテばりの山が豪宏な岩ブスマをめぐらして際が駐屯してた。この辺りまでくると、川の両岸に四○○○メ態で足がおもい。二十四日の午後コー・イ・マダンという岩峰態で足がおもい。二十四日の午後コー・イ・マダンという岩峰が駐屯してた。この辺りまでくると、川の両岸に四○○○メの下につく。ここはラピス・ラズリーの鉱山があるとかで、軍が手工がが上上の一段がジュートル前後のドロミアはある。

二十五日、ついにジュルム川にでた。ここはアンジュマン・ 二十五日、ついにジュルム川にでた。ここはアンジュの上高がスからくだって来たところで、中部ヒンズー・クシュの上高い。この辺がアフガン民情の厄介なところで、ガバナーもジュル いっこの辺がアフガン民情の厄介なところで、ソルジャーも交い。この辺がアフガン民情の厄介なところで、ソルジャーも交い。ここはアンジュマン・

は馬の背にゆられていた。

仲々壮観である

のだが、そこの情報によると、パスにはすでに英国パーティした。とにかく、ムンジャン・パスへでてみようということな入山した由、西面へはこの村から入るのだ。ケロンで二日滞在ケロンへつくと、既に東北学院大パーティはバンダコールへ

である。

んなの心は焦り気味だった。一刻も早く出発したいと、みると、なんとも心がおもかった。一刻も早く出発したいと、みんなの心は焦り気があった。

3

七月二十八日、ケロンを出発。道はムンジャン川ぞいでなした。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。高度が四○○○メートル前後になって、私は高山病に罹った。

ケロンできいたとおりパスには、英国隊のベースがある。六ケロンできいたとおりパスには、英国隊のベースがある。六大ロンできいたとおりパスには、英国隊のベースがある。六

この辺りはパスといっても広濶な高原状をなしていて、この

(222)

地方では「サングリッチ・コタール」(コタール=峠)といってい地方では「サングリッチ・コタール」(コタール=峠)といってい地方では「サングリッチ・コタール」(コタール=峠)といってい地方では「サングリッチ・コタール」(コタール=峠)といってい

とにかくベース・キャンプの建設に、私たちはとりかかった。ケロンの村人たちは、賃銀を貰うとみんな還ってゆく。あた。ケロンの村人たちは、賃銀を貰うとみんな還ってゆく。あとにはボール箱が山と積まれ、いよいよ行動である。私たちも、あの東面を目ざしてやってきたのだと伝えると、英国パーティあの東面を目ざしてやってきたのだと伝えると、英国パーティあの東面を目ざしてやってきたのだと伝えると、英国パーティン・カルボのでは、少人数の場合、ボッカが弱体になりがちだ。

それでも近くに水場があって泉が湧いている。
る。周囲は砂と草のゆるい斜面だが、風が吹くと埃がひどい。
私たちのベースは、英国隊から三百メートルぐらい離れてい

パーとなる。まだ身体の調子がよくないのだ。 のためのCIを設営しに、通訳のアリも加わった。私だけキーのためのCIを設営しに、通訳のアリも加わった。私だけキー

と基部は前山にかくれているわけだが、それでも上部はかなり

荷上げを二日間つづけ、一方では偵察をだした。下部の

バンダコールは、ベースからは峰頭の部分しかみえない。

あ

いたのだ。それに踏査隊として、より広い山域を歩いてみたいへ登り、各隊員の意向をきいて撤退することに決めた。かねてへ登り、各隊員の意向をきいて撤退することに決めた。かねて、避約一○○メートルも困難らしい。そこで私は三日にCI

ので、バンダコールにだけ係りあってもいられなかった。

五日は一日休養した。英国隊も丁度ベースに集結していて、全員でコンパを催した。彼らは王立地学協会から委嘱されて、全員でコンパを催した。彼らは王立地学協会から委嘱されて、だコールの前衛峰に登っているとのことだった。そこで、私たちはムンジャン川(ウルフ川)の源流地帯の山々を調べることにした。このパスは二回ほどドイツ隊が越えたほか記録がなく、それも一回はアポロ蝶さがしのパーティとか言っていた。バンダコールは、ドイツ隊調べの英国隊の地図だと標高六八四○メートルとなっており、従来の六六六○メートルが改められている。標高はかなり劣るが、ムンジャン・パス周辺の山々に目標をさだめて、私たちは八月中旬まで踏査することにした。

4

た

ガバナーがやって来た。私はなんとかゼバックへぬけたいので (定でいたのだが、丁度私がベースにいるとき、サングリッチの 22) はじめ登山許可の関係から、帰路はアンジュマンを越える予)

手真似で頼むと、どうやらOKらしいのだ。これは嬉しかった。 だということで、一応、英国隊にも諒解はもとめたが他意はな あったし、ムンジャン川の源流(正確にはウルフ川かも知れない) ムンジャン山群 ――と私たちが名づけたのは、パスの近くで

ているものもふくめた。 括弧内の山名は便宜上私たちがつけたもので、地もとで判明し 群で――まるで涸沢をめぐる穂高連峰のようであった。(なお、 自体は五〇〇〇メートル峰で困難さはすくなく、ザイル使用の ピッチは数えるほどしかなかった。まこと小さくまとまった山 八月六日より十六日までの行動は、以下の通りであるが、山

П I (コー・イ・セフェ 五一〇〇メートル)八月六日より七 (コー・イ・オーガスト 五〇二〇メートル)八月九日、 安川、白籏の両名によって登頂 日にかけて、英国隊四人と青柳、白籏の六人で合同登頂

建設して十日より行動に移った。 この間にムンジャン山群中にCI(四一〇〇メートル)を

III 石井、長沢、大橋の四名によって登頂 (ムンジャン北峰 五四〇〇メートル)八月十日、 堀田、

Ⅳ・V(コー・イ・キャトル 五一二〇メートル、コー・イ・ よって登頂 五二〇〇メートル)八月十一日、安川、白籏二名に

> VI (コー・イ・ムンジャン主峰 五五三〇メートル) 八月十 二日にCIを四九〇〇メートルに設営し、青柳、白籏、 (224)

Ⅲ (コー・イ・ハロルゲッキ 五一○○メートル)八月十五 H 田、石井、大橋、長沢の六名により十三日に登頂 白籏、 石井の両名で登頂、三日前に英国隊が先登して

WI (コー・イ・キャッスル 長沢、大橋両名が山頂下五〇メートルの地点より時間切れ 五四〇〇メートル)十五日、

のため下山。

おり二登。

るかも知れない。 ら、モンスーンの影響もあらわれてきたので、狂いが生じてい ターのため若干の疑問がのこる模様。 ことに八月十日ごろ か のフィートから換算したものと、隊の精度のよくないバロメー 以上が大略の同山群中の行動で、なお標高については英国隊

雪もふり、雲量もとみにましてきた。 動していたが、八月十五日ごろから気候はめっきり秋めいて新 トル級の前衛峰にかなり登っており、この方面の地図作成に行 この間に英国パーティは、バンダコール東面の五〇〇〇メー

たちはお互いのベースで別れのコンパを催した。「一生に再び ン・バスに姿をみせた。英国隊は十九日までねばるという。私 八月十六日、サングリッチから迎えのキャラバンがムンジャ

そうに述べてくれた。

ならに述べてくれた。

ならに、私はつよい感動をおぼえずにはいられなかった。いる彼らに、私はつよい感動をおぼえずにはいられなかった。いたが、日本人パーティは初めてだったと、隊長のクリフは嬉したが、日本人パーティは初めてだったと、隊長のクリフは嬉したが、日本人パーティは初めてだったと、隊長のクリフは嬉したが、日本人パーティは初めてだったと、隊長のクリフは嬉したが、中るでは述べてくれた。

る。

5

く。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あこと――いかにもどっしりと逞しい白銀の山容である。 こと――いかにもどっしりと逞しい白銀の山容である。 と鼻の先のはずだ。バンダコールもしだいに小さく なって ゆと鼻の先のはずだ。バンダコールもしだいに小さく なって ゆとみの先のはずだ。バンダコールもしだいに小さく なって ゆく。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あく。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あく。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あく。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あく。きっと来年辺りこの東壁(正確には東北東壁)は、注目を あく。

た。みんなの日焼けした顔は、さすがに疲労に縁どられてみえが銀の鞍をつらねている。だが、もはや食糧も底をつきはじめびるだろうと考えながら、カブールとは反対に北を目ざした。びるだろうと考えながら、カブールとは反対に北を目ざした。

ここからトラックでファイザバードへ……一台のトラックにここから丸一日の距離だと教えてくれた。あれほど連日晴天つここから丸一日の距離だと教えてくれた。あれほど連日晴天ついきのバダクシャンの空に、灰色の雲がかかり、朝夕の肌寒さいきのバダクシャンの空に、灰色の雲がかかり、朝夕の肌寒さいます。

(**付記**) 本稿は正式報告といった内容ではなく、私の個人的感想で、詳さい。

アラスカ・ボナ峰登頂

東京教育大学山岳部·同OB会

はじめに

二、偵察行とランゲル峰登頂 本隊の行動と若干の地理学的考察

> 德 쓮 雄

1 永 林 夫 前

、登山と高度の影響について

ili 本 英 毅

1=

は じ め

徳 久 球 雄

然であろう。これが原因してか、山岳部としての活動も地味 員が多い。したがって山岳部のOBも教員が比較的多いのは当 後初めての遭難がおき、中心的メンバーであった隈部研二を白 猫も杓子も海外遠征というようなブームに刺激されて で はな と蓄積されたものが、目を海外に向けしめるようになったのは、 で、あまり目立つような活躍はしていない。だが戦後だんだん 教育大学というところは、その名の示すとおり、卒業生は教 部の成長を示すものであったと思う。そこへ一九六二年戦

> 考えられないし、またそのような時代でもなく、われわれも自 補であった。しかし、経済的に他に寄付を仰ぐこともほとんど 登りを続けようということであった。それまでカラコルム、ス 我々の学校と部の伝統を生かした科学的で、かつ地味な良い山 が迫られた。そしてその中から得られたものは、我々はやはり の事故にあい、相次ぐ遭難にわれわれの山登りの態度への反省 征への熱心なメンバーであった松下、榊が谷川岳東尾根で不慮 馬岳で失った。悪夢は続いて一九六五年四月、やはり、海外遠 分達の力の範囲内で考えようということであった。 更し、アラスカのランゲル山群が候補としてとり上げられ、デ ィスカッションが繰返された。われわれの場合、全員が隊員候 ノーレイク中心に考えられていた遠征は、経済の問題からも変

件ということだけで、行きたいものがいけないということをな くすようにしたいと考えたものの、教育大の範ちゅうにおいて 部の組織と力の弱体であることを示すものともいえよう。 さえてしまうような形となってしまった。これは、われわれの は約三五万の経費のほとんどは自己負担という形、隊員も主と は、同窓会等にお願いしても『笛吹けど踊らず』の観で、結局 ってくる。責任者としての私は何とかこれを緩和し、経済的条 してこの点から制約をうけるような形となり、盛り上る力を押 したがって、ほとんど全額に近い金が自己負担となってかか

ともかく、そのような形で教育大学の第一回の遠征隊の構想

遠征経験としては仕方があるまい。 的な研究のアプローチを試みたが、充分の成果があがったとは 究成果のあがるようなものにしたい。今回は地理学、体力科学 来われわれが次に外国の山に登るときも負け惜しみでなく、こ いいがたい。研究成果については別に公刊したいが、 のような形で、 た、ライト・エクスペディションという形になった。しかし将 ったから、 れわれとしても勤務や学業に支障のないことが第一の条件であ ため、勤務の関係から夏休み期間きり都合がつかない。またわ 努力、借金に借金を重ねた。また犬飼を除く全員が教員である 定がおくれたのは、 ができ上り、 ようということで準備がすすめられた。隊員も最後まで最終決 結局一ヶ月の短期間で教師・学生の夏休みを利用し 主として地理学と体力科学の面から、研究も進め 期間・費用も自前で、勤務に支障なく、かつ研 前述のようなことが含められ、各自努力に 初めての

隊員を紹介しよう。 一九六五年

三井勝雄(三四歳) 地理学科卒、 都立赤坂高校教諭

永峰隆夫(二九〃)地理学科卒、都立千歳高校教諭

一九六六年

本

徳久球雄(三四,)地理学科大学院卒、 衛生担当 青山学院大学講

山本英毅(三二/)体育学科卒、日本福祉大学講師、 力科学、写真担当 体

> 小林 (二九〃) 地理学科大学院博士課程、

斉藤光司 (二九 ") 日本史学科卒、埼玉県立久喜高校教

剣持二郎(二八》)哲学科卒、東洋女子高校講師、

犬飼凱雄(二四〃)農学部四年、装備担当

を得た。 犬飼は一ヶ月先にでてアンカレッジにいたおかげで、何とか話 ネジャーとして、頼みの綱でもあったのだが、彼の不参加によ せるようになり、残りの隊員も持前の心臓で事を処し、事なき た。しかし、語学は実地訓練なりということを証明し、先発の って、残った隊員は心細い英語で交渉することになってしまっ が、直前家族の病気で不参加となった。これは英語の達者なマ 尚 副隊長、マネジャーとして吉富享が参加の予定であった

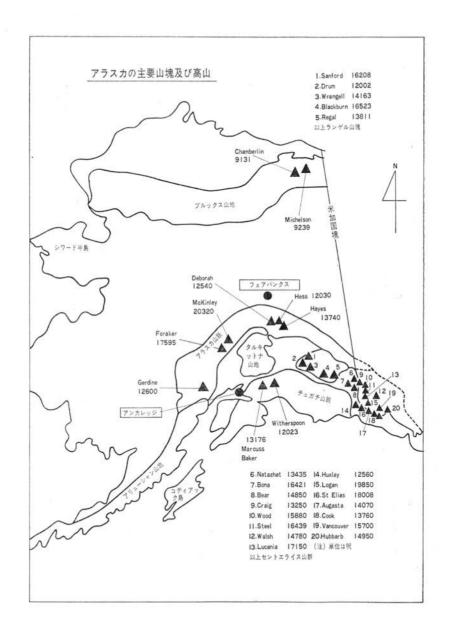
= 偵 察 行

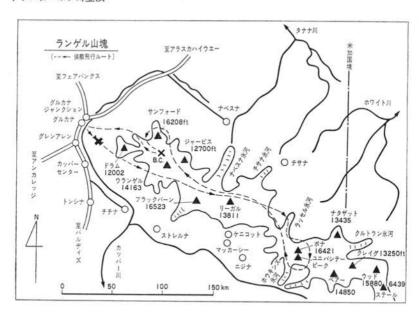
永 峰 隆 夫

山々などについて多少の見聞を得た。 ナ峰登山遠征計画の偵察、 翌年の夏に予定された東京教育大学山岳部及びOB会の 九六五年七月二〇日から八月二六日まで三井勝雄氏と二 ランゲル峰登頂、 その他アラスカの

アラスカに於いて標高一二〇〇〇フィート以上の高山は約三

(227)





聳え、 チ山 二三フィート)、 バンクスからも、 や長大な氷河のうちにヒマラヤ的な威圧感を秘めている。 北米大陸の最高峰マッキンレー(二〇三二〇フィート)を盟 が 広大なブルックス山地はミッチェルソン(九二三九フィート)、 東西に走るチュガチ山脈には急峻なウィ ザースプーン(一二〇 この山群東部のヘイズ(一三七四〇フィート)、 と氷河を結ぶ流離の夢をはぐくんでくれよう。アラスカ山 ャンバアリン(九一三一フィート) などを 主峰に 標高 こそ 低 ほとんどないようであるが、我国からは割合手軽に出掛けられ に含まれている。 ○座程あり、 がはア 位置にあり、 チャードソン・ハイウェーの西に佇ませており、 かも充実した山行が期待できるものばかりである。最北部の 一群 無数の無名峰・処女峰が原始と未知の香をただよわせ、 国立公園を形成し、多少人臭いが、その南面のバットレ 5 登攀意欲をかきたてている。 ノスカ山 アプロ t を中心とした山々は規模こそ小さいが、 ント・エライアス山群、 これらはブルックス山地、 脈と同様標高も高く、 マーカスベーカー(一三一七六フィート) 氷河の その白い姿を望むことができた。太平洋岸を 現在は一二〇〇〇フィート以上の未登峰 チ の長さをも合わせて困難な登攀が要求され 発達も著しい。 この山脈は降水量の最も多 ランゲル山塊の五 ヒマラヤを思わせる峻峰 セント・エライアス山 アラスカ山脈、 デボラ (一二五四〇 遠くフェ その美観 つの などが チ また は Ш 2 チ ス は Ш ガ

(一四一六三フィート)、ブラックバーン(一六五二三フィート)、リリンコィート)、サンフォード(一六二〇八フィート)、ランゲルは第三紀頃から形成されはじめた火山群であり、ドラム(一二は第三紀頃から形成されはじめた火山群であり、ドラム(一二は第三紀頃から形成されはじめた火山群であり、ドラム(一二十二)が天に牙をむよう。セント・エライアス(一八〇八フィート)、が天に牙をむよう。セント・エライアス(一八〇八フィート)、が天に牙をむよう。セント・エライアス(一八〇八フィート)、リカンドの大口であり、

ーガル(一三八一一フィート)などの高峰を含んでいる。

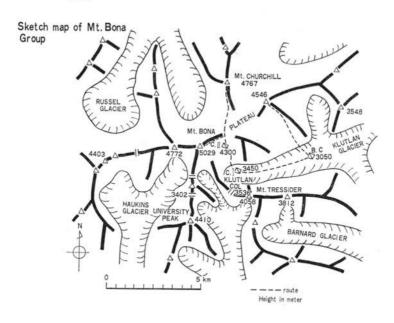
出る。 時期ではこのルートは避けるべきだと判断する。ボナとナタザ も日本ではこの氷河からの登頂計画を立てていたのだが、この 期には、この方面からの登攀の困難さを予想させていた。 る。長大なラッセル氷河は、その源頭から上部に無数の複雑な にクレバスの少ないことなどを観察の主眼としボナを一廻りす のラッセル、東面のクルトラン、南面のホウキンズの三つであ おろしてもらった。ボナをめぐって発達する主な氷河は、 察に向かい、その帰路ランゲルとサンフォード間の大氷雪原に を飛び、セント・エライアス山群の西端に位置するボナ峰の偵 クレバスを持つ急斜面が連らなり、 七月二七日、我々はグルカナ飛行場からランゲル山塊の真上 BC建設のため飛行機が着地できること、また登頂ルート (一三四三五フィート) ボナ東面に発達するこの氷河はクレバスも少なく、なだ の鞍部を東に越えクルトラン氷河に 七月以降のクレバスの発達 北面 我々

らかな北東稜には割合楽に取付けそうだ。またボナに登って余

最低コルに下り、再びゆるやかな雪原をクレバスの多い台地を

セスナはボナの南肩に突出する三角錐状の美しい山、ユニバーシティ・ピークに 翼を ふれそうに 接近しながら 南に回り込み、ホウキンズ氷河の上に出る。ボナ、ユニバーシティ・ピークのいずれもが、その南面は巨大な岩壁に守られ、屏風をはりめぐらしたような感じで、登頂ルートを捜すなら、ホウキンズ氷河しか考えられないが、これも上部に大きなアイスフォールをもっていて、やや絶望的だ。以上のことから来年の遠征にはクルトラン氷河から北東稜を登るルートを推すことに決める。グルトラン氷河から北東稜を登るルートを推すことに決める。グルトラン氷河から北東稜を登るルートを推すことに決める。グルトラン氷河から北東稜を登るルートを推すことに決める。

せていた。九二〇〇フィートのBCから、八八〇〇フィートの となけ、ランゲルとサンフォード間の大氷雪原に到る。 様々は雪上に立った。北のサンフォードの嶮しいバットレス、 でたったらかなランゲル、いずれもが美しい。七月二八日、ラ で大かに向かう。ランゲルは巨大な火山であり、卓状山体の上 に六つのドーム状ピークが数えられ、そのおくまったピークの とから、山賊の狼煙のような噴煙が時々一寸じのたなびきを見 をから、山賊の狼煙のような噴煙が時々一寸じのたなびきを見 をから、山賊の狼煙のような噴煙が時々一寸じのたなびきを見 をから、山賊の狼煙のような噴煙が時々一寸じのたなびきを見



ビバークとなったが、

いか割合気分よく行動でき、

八月四日、

一二時にランゲル六峰

なが

5

0 は 峰

斜面に暑さと息苦しさをしのび、ヒドン・クレバスに注意

ひたすらに聖なるピークを求めて登高すればよい

わけ

7

(一四〇一三フィート) にたどればよい。技術的に困難な個

やや急な斜面をザネット(一三〇〇九フィート)とランゲ

風の強いナマコ状の稜線をランゲルの北

はない。

ただ日蔭のない雪原、

無限につづくかと思われる氷雪

ルのコルまで登り、

となり、

である。

できておらず疲労が激しかったからである。八月三日、第二回

一三五〇〇フィートまで到って失敗した。高度馴化が

回めのアタックは一二〇〇〇フィートでビバ

のアタックは夕刻から出掛けたため、一〇〇〇〇フィートで

雪の状態もよく高度馴化ができていたせ

本隊の行動と若干の地理学的観察 小 林

詢

全

のうちBCに一番近い北西峰に立つことができた。

れで何とか山へ行けそうだわい、とようやく落着いた気持にな メンバー揃ってグルカナへ走りはじめた時には、やれやれ、 七月二三日午前、 というの カレ ッジ は 間の旅客便を独占するノースウェ 離日直前から米国の大航空ストが始まり、 アンカレッジ空港に徳久、斉藤が到着、 スト機 が

る。

(231)

羽

プしてしまい、我々を右往左往させるという事情があった

ことだし、アラスカ大学の戸田教授とは、人体の耐寒性に関す からである。アラスカ南部は例年八月になると天候が悪化する

た上、旅費も大幅に加算されて泣き面に蜂の心境であった。 られなくなって、やむなくサンフランシスコ経由で乗り継ぎ数 のに気をよくしたが、 ますことができ、耐寒性はエスキモー以上と大鼓判を押された らに滞在していた犬飼とともに、 が例外的に日航への振替え機乗を認められた。一月前からこち すったもんだの末、予定日より二日遅れて、山本、小林、 いつになるかもわからぬストの解決を待つわけにもいかぬし、 る研究に被験者として参加する約束の日どりも決まっていた。 初の外国旅行というのに予約なしの場当り機乗を強いられ 後発の徳久、斉藤は振替え機乗が認め 何とか戸田教授との約束を済 剣持

の山 ック達に空車を託し、飛行場の片すみに天幕を張って帰りを待 行基地に着く。 にひた走る。六時すぎにグルカナのジャック・ウィルソンの飛 チの山間をぬけると、今度は、果てしない寒帯林の中を一直線 を交代で役立たせる。 れる。我々日本人組はシボレー乗用車に乗り込み、 や、ローガン帰りのアート・デビッドソン君らが引き受けてく てくれた、気立てのいいアラスカの若者、 「々に犬飼と何回か行を共にし、おまけに彼の宿まで提供し ウィルソンは仕事で飛び立ったままなので、 車は白銀の氷河に飾られた美しいチュガ ニックパーカー君 国際免許証 =

が、

夢幻的な光を放って連らなっている。

リー

ガルの

という 正面には

その名もステアウェイ・トウ・ヘブン(天国への階段)

隊の荷を積んだトラックの運転は、この一ヶ月間西チュガチ

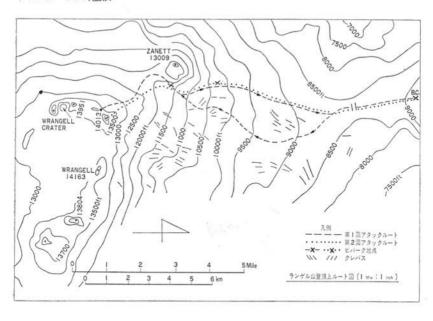
だけ荷を整理することにした。

徹夜の作業でかなりの荷を残せ

ることになった。あとは翌日の状況次第である。

六〇分の一)のコピーを基に、計画を縮小的に再検討し、できる 手は、便数を減らすことである。そこで一同、 ドルは定価だとの答えなので、これは値切りようがない。 とを知り、考え込んでしまう。 になったが、輸送費の見積りが我々の予算を大幅に超過するこ の交渉に入る。約束どおり明日中にすべて完了してくれること 染める。九時頃、ようやくウィルソンが戻ったところで、 て、アンカレッジで入手した未発行の大縮尺地形図(六三、三 正面にそびえるサンフォード、ドラム火山の膨大な氷帽を紅く つ。太陽は寒帯林の彼方の地平線上に長い間低迷し、 セナス機の飛行一時間当り八〇 ひたいを集め 空輸

末なマッカーシー空港に下りる。マッカーシー空港は、 ーンが近ずくと、グルカナから四五分で、森林を切り開いた粗 景である。上流にはブラックバーンからリー ガル に至る尾根 膨大な堆石が集合し、 ニコット氷河の末端に位置している。 発。機上から左にランゲル火山の噴煙を望み、 ム両火山が美しい。双発機とセスナ機に分乗、八時にグルカナ 二四日。基地付近はきれいに晴れ上り、サンフォード、 あたかも無数のボタ山が並んだような光 氷河の末端には上流から 次にブラックバ 丁度ケ ドラ



さて、ここから先は、専らセスナを往復させて氷河地帯に入っローチはきびしそうである。

恐るべき高度差のアイスフォー

ルが控えていて、

南面

からのア

原に ならさほどの日数を要しないだろう。ただ、第三の目標にな か 音が消えた後には、 時間が短縮され、 切る最短コースでクルトランに入った。好条件に恵まれて飛 氷河上流へと抜ける。源流地域をしばし逡巡した後、 じめたが、 くらか通じたのであろう。 と若干の荷物の積載を認めてくれる。我々の切迫した気持も ルソンも、 るのである。往復何便を要するかが我々の重大 な 関心事で 申 になっていた本流のクレバス帯は、これより下流になり、 、中に残されていた。 . 日に迎えに来ることを確認し合い、ウィルソンと別れる。 まず空身で偵察することを第一便として要求していたウ 下訳な コ ピークの南をまわり、 カーシーを出発する。 気に着陸してしまった。二便、三便はラッセル氷河を横 ルから発する氷河本流上、 いような気もする。 今日の好天で強気になったのか、最初から隊員二名 機はその下をかいくぐるように飛び、 便数も少なく済んだのは有難かった。 我々六名だけが三〇〇〇メートルの氷河 空の旅はまことにあっけない。 バーナード氷河上流からクル 第一便は徳久、犬飼を乗せて九時 氷河地帯にかかると、 ボナやチャーチルへは、 高度約三〇〇〇メートル ユニバ 雲が現われ 前 クル ここか 八月 1 カン トラン 5 0 トラ シテ 何 問 0 は

ていたナタザット峰へは、あまりに遠すぎる。ともかく、ここ

をベースにするのに異存はなく、かまぼこ型の天幕一張が張ら 雪洞の倉庫ができる

朝寝坊を申し合わせたのだが、早くから日が照りつけるので起 我々の感覚では、つかみようのないスケールである。大縮尺の ている。チャーチルは、ここから見ることができない。どうも ら見ると平凡で、クルトラン側にだだっ広い雪の横腹をさらし 氷河の幅は二キロメートル内外はある。目ざすボナは、ここか で、ふかふかした新雪におおわれている。源流とはいっても、 る。氷河もこの高さになると、盛夏といえども完全な涵養区域 く晴れ上っている。最低温度計は氷点下五・八度を示してい き出さざるを得ない。クルトラン・コルの一帯をのぞけば、よ 一五日。この際まず隊員の数日来の睡眠不足を取戻すよう、

終キャンプをプラトーの上に設ければ、そこから両峰とも楽に 後は一六五〇〇フィートの値を採用したい。いずれにしろ、最 とになる。この方が空中写真を図化した正確なものなので、 ていた一六四二一フィート (五〇〇五メートル) より 多少高 (五〇二九メートル) の等高線に囲まれており、これまで知られ なお、この新しい地図によれば、ボナは一六五○○フィート

てみれば迷路の中の二十日鼡同然である。時には強行突破する

れるかもわからない。昨夜は天幕をゆるがす雪崩の轟音に幾度 らに丸ビルほどの巨大なブロックがごろごろしていて、いつ崩 るが、そこには多くのクレバスやアイスフォールが分布し、さ どこも一様の膨大な山腹のどこにルートを取り、どこに中間キ ャンプを設けるか。山腹の平均斜度はせいぜい二○度内外であ

ら遅い出発は気にならない。小林、剣持は輪かんで進む。氷河 フランケには斉藤、犬飼が向かう。出発は一二時。日が永いか 面を偵察することになる。クルトラン・コルへは小林、 協議の末、クルトラン・コル方面と、BC間近の山腹の二方 か肝を冷やしたものだ。

おり、 着用、 する。 隊から、右だ左だとトランシーバーで指示があるが、当人にし 腹を登りはじめていたようだ。BCから氷河最奥に見えるプラ 三〇メートルなので、クルトラン・コルよりかなりボナ側の山 雪に巻込まれたので、そこから引き返す。高度計によれば三六 界から消えない。そのうちガスに突入し、四時頃には激しい吹 上は数キロ先まで見通しで、二時間や三時間歩いてもBCが視 トー直下の褐色の岩壁が、ガスの切れ目から間近に見えがくれ これをジグザグに避けて進むのに手間どる。BCや氷河 フランケ隊は細長いスノーシューズ(米式輪かんじき) 山腹の基部には長大なクレバスが幾本も平行して走って

ルの高さに、広いプラトーがあり、ボナとチャーチルはプラト 地図をたよりにルートを詳細に検討する。四千三、四百メート

の南端と北端とにあらためて高まっている。

往復できるであろう。とすれば、プラトーと氷河との間の一見

達することが出来た。 行動としては、 五時間の登りで、プラトー あたりから上部はガスに包まれ、 ク帯を廻り込むと緩傾斜の雪原が開けるが、ヒドン・クレバス は膨大なブロック帯の左端に沿って斜上、 が、このような場合、 渡り廊下のようになっているところを歩かされる。 再び急になると今度は左上にブロック帯が迫る。この 疲労を感じはじめたので偵察を打切る。 スノーシューズが効果的である。 までの中間点よりやや上部にまで到 状況が判然としない。 左からクレバスが迫 結局約 初日の ブロッ 山 一腹で

分BCに帰着 舞われたが、なおも登攀を続行、二時半、プラトー南端の一四 先日かせいだ下半部は要領よく突破する。上半部では降雪に見 視界が利かず、 九一六フィート の氷河隊は二時間で降雪域に突入し、先日以下の成果のまま退 偵察する。 二六日は降雪のため停滞。二七日は先日と同じルートを再度 フランケ隊は、 八時頃二方面へ相前後して出発。徳久、 プラトー (四五四六メートル) 剣持、 の状況は判然としなかった。五時二〇 犬飼の若手メンバーで頑張り、 の高地に到達した。 山本、 しかし

る。

察した二ルートのいずれかに決断し、速やかに前進キャンプをがある。ここから他のルートは考えられないから、これまで偵測とは少々先が心配である。八月に入れば一層天候悪化の恐れて八日は雪が降ったりやんだりで停滞となる。一日置きの停

から、 の往復は、よほどの悪天候でも可能である。以上のような状況 れていて、 色の岩壁の右手に、少なくとも一本はルートが取れそうで る。CI予定地のクルトラン・コル一帯は、いつもガスに包ま めることができるであろう。地形図によれば、プラトーへは褐 まだ判明していない。 のボナ峰までの距離が長くなるなどの欠点が指摘され て絶対安全な個所が選べない。プラトーへ出てから、 要だと言う。 のクレバスが発達しており、荷上げには厳重なルート工作が必 トは上部もクレバスが多く、とくにプラトー直下には巨大な横 設定する必要がある。剣持、 までの高度差が小さくなり、 氷河をつめるルートはクルトラン・コルから上部の状況が 思い切って翌日は、 天気が悪いが、雪崩には絶対安全だし、BCとの また、 山腹には中間キャンプ地として雪崩に対 しかしコル付近にCIを出せば、 コルにCIを建設することに決す 犬飼の報告では、フランケ・ル 次のキャンプをプラトー上に進 第一目標 る。 プラト

する。 背負い全員でCI建設に向かう。 れ風が強い。CIを設営し終ると徳久、 二九日。 斉藤、 高度は約三五〇〇メートル。 小林、 平凡な氷河歩きなので、 剣持はBCに戻る。 三時間半弱でCI予定地に達 各自、 付近は今日も濃い霧に包ま 山本、 四 〇キロ以上の 犬飼がそこに

三〇日。快晴。めずらしくCIの上空も晴れ上っている。B

Cでは最低気温氷点下一三度を記録する。七時二〇分、 を着けて出発したが、 けるルートは、このクーロワール以外にない。 ている。その左はものすごいブロック帯である。結局、上に抜 色岩壁の右手に雪のクーロワールがプラトーに向かって直上し 犬飼がCIから上部のルート開拓に出発する。見上げると、 三〇分ほどで脱いでしまう。スノーシュ スノーシューズ 山本、 褐

ーズも急斜面ではどうも調子が悪い。

強いられる。上部は四○度以上あるだろう。 クー す。クーロワールの入口まではなお一時間程登る。入口で昼食。 はまり込む。一時間を費やしてクレバス帯をようやく抜け出 二、三クレバスがあるが、 る。渡り切ると一二時。その上は次第に傾斜が落ちる。 いに大クレバスがパックリ口をあけている。 の迷路である。一度はトップの犬飼がヒドン・クレバスに半身 とすると、別のクレバスが待ちかまえている。ここもクレバス 八時頃、大クレバスに行手をはばまれる。これを迂回しよう ロワールは登るにつれて急になり、 スノー・ブリッジがある。 いずれも登攀の妨げにはならない。 スタカット で慎重にこれを渡 腰位までのラッセルを 幸いにも真中に一 出口には幅いっぱ 上にも

> とに満足して下る。BCの三人は午後CIへ荷上げを行ない、 は北東稜を残すだけである。八分通りルートの開拓ができたこ さらに一時間ほどのラッセルで北東稜の基部に達する。 形図で判断する通り、北東稜から迂回するのが最良とみえる。

この日は全員CIに集結する。

過 る。 ワールの上方にCIIを進めて、登頂隊をサポートすることにな には小林、 ャンスにCIから一気にボナの頂上を伺うことにする。 三一日も晴天になったので、前日の行動から考えて、 クーロワール出口のスノー・ブリッジにザイルをフィック 登頂隊は八時にCIを出発、下部のクレバス帯も順調に通 剣持、 犬飼をくり出し、 徳久、 山本、 斉藤はクー このチ 登頂隊

る。 5 る。CIIにはこの日のサポート隊三名が残り、 V ついに本格的な吹雪となったので、 ス、 協力して、高度四三○○メートルの地点までCⅡを上げ 雲が下がりはじめ、一時に北東稜の基部に達した時には、 スノー・ブリッジまで下ったところで サポート隊と出合 一一時にはクーロワールを抜けた。 後日を期し登頂をあきらめ しかし、このあたりか 登頂隊は再びこ

なる。ラジオの日本語放送(ラジオ・ニッポン)をキャッチ。 八月一日。CIIから上は一応視界がよいので、 また、天気も悪化したので引上げる。 隊長以下三名はCⅡを出発したが、 一時間程 で 故障者が ひる頃からは吹雪と 登頂をめざし

見

山腹を直上できそうだが、クレバスが曲物で、やはり、

地

世 て、 Iに下る。

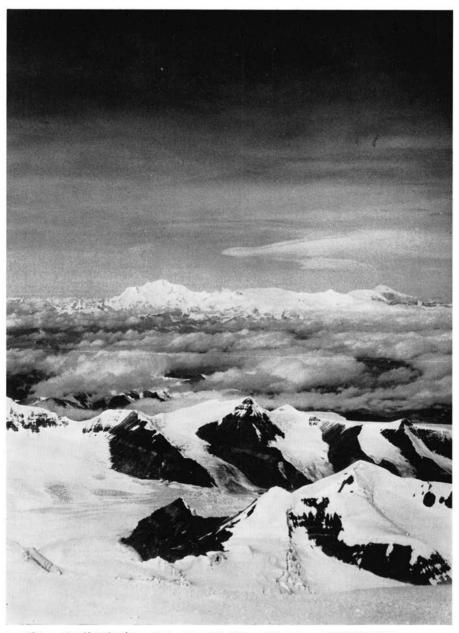
ここからどの位の比高なのか見当がつかない。

ないので、

いたボナの頂部が前方にすっかり現われる。比較すべきものが 時にはどうやらプラトーの上に出た模様で、これまで隠れて



チャーチル峰から見たボナ峰 Mt. Bona(5029m)seen from Mt. Churchill(4767m)



チャーチル峰からブラックバーン、ランゲル、サンフォードの諸峰を望む Mt. Blackburn (5038m). Mt. Wrangell (4267m) and Mt. Sanford (4940m) seen from Mt. Churchill (4767m).

ĮЦ

日

CIIでは四時に起床、

快晴である。

すっぱりと切れ込

と、いかにも遠い世界の出来事にきこえる。衛庁長官らが新任の抱負を語る。ここで吹雪に閉ざされている。といかにも遠い世界の出来事にきこえる。荒船運輸大臣、上林山防

狂い、CIIでは日中でも氷点下一二度をマークした。 す一歩一歩が不安の連続となったという。さて、CⅡには小 いつつCIへ下っていった。 り状態から這い上り、事無きを得たものの、 本が突然ヒドン・クレバスに姿を消し、 クレバスにだけは、くれぐれも注意せよとのこと。一度は、 着。CIから登ってきた三人に上の状況を伝える。北東稜はア 祝福の電波が、ボナ峰の上下を飛び交った。一時すぎ○Ⅱに帰 が、上空は晴れている。肝心なところで腰を痛めた徳久は、 イゼンが快適に効き、 に向かう途中、クーロワールの下でこれをキャッチし、一瞬、 た、と感激の声が伝わる。CIの三名も第二次登頂のためCII てくる。一〇時、ついに山本、斉藤から、唯今頂上に立ちまし 人が高度をかせいで行く状況が、 念だが残ることにし、 という。CIから下には雲海が発達していて遠望はきかな 剣持、 斉藤が早くから起き出し、今日こそは登頂できそうだ 犬飼が入れ替り、 技術的にはさして問題ないが、ヒドン・ 山本と斉藤で登頂パーティーを組む。 山本、 翌三日は一日中激しい吹雪が荒れ 刻々とトランシーバーに入っ 斉藤は腰の痛い徳久をかば 斉藤の確保で一瞬宙吊 それ以後は踏み出 Ш 残

んだクルトラン氷河をへだてて、無数の峰々と氷河が朝日を浴びて一斉に輝くさまは、これだけでも日本に残った山仲間に見せたい絶景である。中でも、肩を怒らした巨人、セント・エラ目にも黒々と雪を払って挑みかかるキングピーク、女王然たる目にも黒々と雪を払って挑みかかるキングピーク、女王然たる目にも黒々と雪を払って挑みかかるキングピーク、女王然たる目にも黒々と雪を払って挑みかかるキングピーク、女王然たる「、それに北端に孤高を誇るナタザット等々、名のある高峰の姿は、一つ一つが強く心に焼きついている。前景には、バーナード氷河、ローガン氷河流域の三〇〇メートル級の山々であろう、無数の鋭峰群が目白押しに競い立つ光景は、これまた圧巻である。CIでは頭上を圧していたトレシダー峰も、ここではかわいらしく足下にうずくまっている。

ない。 度こそ頂上であってくれと、祈りたい気持が芽生える。 たものの、 後、次第次第に傾斜が弱まっていく。 富士の九合目付近を登っている感じである。 が氷片をたたきつけ、まともに顔を上げることができない。 シティー・ピークの見事なピラミッドに感嘆の声をあげる。 にふみ込む。 時一五分北東稜基部。ここで輪かんをデポし、アイゼンの領域 六時半にCⅡを出発。ボナの左手に頭をのぞかせたユニバ 第一次隊から、 強風と、 かなり急な登り。ラッセル氷河側からの激しい風 高度による息ぎれとでふらつく体には、 頂上は意外に遠いことを聞かされては来 しかし登りは 時間強の急登の 向に終ら かなり

時五○分、ようやく我々は着いた。不思議なことに頂上だけ時五○分、ようやく我々は着いた。不思議なことに頂上だる。九

CIIで対面した山々が勢ぞろいすれば、西にはサンフォード、 は、うそのように風がなかった。 を転ずると、 今は尾根上にずたずたにクレバスが切れ込んで、悪相を呈して 鞍部から、さらに一○○○メートルも急激につき上げており、 これまでの唯一のルートとなった北稜も、ボナとの間の最低 削りとられて、三〇〇〇メートル近いフェースをなしている。 まとい、怪異な相貌で立ちはだかっている。その四周は氷河に た。その一つ、ユニバーシティー・ピークは、南隣りに氷の鎧を る。だが眼前には、もっと我々の目を釘づけにする山々があっ ランゲル、 氷河の華麗な饗宴がはじまった。東半周にローガンはじめ、 まいという、初登頂者アレン・カープの言葉そのままの、 メートル峰を最高とするこれらの鋭峰は、その後の試登を退ぞ の歴代の総長の名を冠することを提唱した。しかし、四四〇三 ボナ初登者のテリス・ムーアらが、アラスカ大学連峰と命名し をへだてて、見事な鋭峰群が立ち並んでいる。これらの峰は、 そこで、ボナの頂上ほど多くの山がみられる地点は他にある 登るなら、もっと早い時期を選ぶべきであろう。西に眼 リーガル、 ブラックバーン が一団となって 呼応す 個々の峰には初登の後に、それぞれ、アラスカ大学 初登者のルートとなった西峰 (四七七二メートル) Щ 朝

> ての希少価値を保ちつづけているのである。 け、毅然として、アラスカに残された四〇〇〇メートル峰とし

f, もその可能性が大きいと思われる。一体、ランゲル山地の山 じる。頂上の鋭く尖っているのが、一つの魅力といえようか。 ば、いかにも女性的で登攀の対象としては少々物足りなさを感 である。ユニバーシティ・ピークのすさまじい迫力にくらべれ を割られたような東面とのリッジに沿って登るのが、よさそう ただしCIIから行くには、あまり西をまわるのは損なので、竹 半分はまさにコニーデ火山の典型と言いたいような姿である。 円錐形をなし、 ル以下の消耗区域ばかりである。もう一つ、チャーチル峰は半 に見えるのは、モレーンをのせて黒ずんだ高度一五〇〇メート 続いているが、 は、北面に比して南面が著しく急峻であり、現に、このボ は、きわめて困難であり、北面、ラッセル氷河側には、 (注) 一九六七年、兵庫県山岳連盟とシアトル・マウンテニアーズの日 見たところ、南面、ホウキンズ氷河側に登路を求めること こうして、我々は一時間半近くも眺望を楽しんだ。それでも 北面は氷帽がだらだらとラッセル氷河やクルトラン氷河に 米合同アラスカ登山隊は、 登の暁には、それに、マウント・コーベの名を冠するという。 西側に美しい裾をひいている。見たところ、 頂上からホウキンズ氷河を見下ろしても、 この連峰の初登を目的とし、最高峰 西

なお心残りだったが、

さすがに体が冷えてきたので下った。一

原の横断が完了。

取付きで昼食。

輪かんをデポし、

一〇時一〇

体の形成時期と岩質の差が、

地形的な差異をもたらすことを示

チャーチル峰の取り付きまで一時間二〇分で雪

を期待する。 □時二○分○Ⅱに着く。翌日チャーチルに登れれば、再度荷上 上時二○分○Ⅱに着く。翌日チャーチルに登れれば、再度荷上

五日。前日に続き天気は申し分なく、願ってもないチャンスできたので、そこまでに約四○分の遅れを取戻すことができたので、そこまでに約四○分の遅れを取戻すことができたので、そこまでに約四○分の遅れを取戻すことができた。

くれるし、右手にローガンが上体を雪原の上に、 たりして、刻々と明 どる感じになる。少々視界が悪ければ、心細い思いをするよう るより魅力を増す。 あらわしているのが趣きを添える。 はブラックバーンの巨大な山体が、 を降りると、風もないで、うららかな慢歩気分になる。 な広大な雪原である。 てみえる。ここから見ると頂上は錐のように尖り、 いきわめて大きい、サインカーブの山から山までの一周期をた チャーチルは、そこから三キロの彼方に優美な双耳峰をなし 峰頭のとりつきまでの間は、 暗を変えていくのが、 風に追い立てられるように波の谷の部分 ラッセルもクレバスも大し 日向になったり日陰になっ 終始目を楽しませて 置物のように ちょうど波長 ボナから見 左手に

かに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く顕著なナイフ・エッジの登りにかかる。頂上まかに頂上へ続く記述している。

このことは、 の高度で特に大きいという気候地形学的な理由だけでなく、 地形であるのに対して、 な古い火山を除けば、いずれも上部は比較的平滑で、 紀の火山活動によって形成された火山で、それらは中生代後期 ラムなど、ランゲル山地の高峰は、いずれも第三紀末から第四 たからである。ブラックバーン、サンフォード、 これで一つ得心がいった。というのは、この山域でボナやチャ の堆積岩の上に乗っている。これらの諸高峰は、 ーチルのような高い山は火山であろうと、 と、いずれも石英安山岩質の噴出岩類で軽石も混じっている。 直接地面に接することができた。散在する礫を手に取ってみる 尾根の西斜面は雪がすっかり吹き払われていて、 山を削り込むような風化や浸食の力が、 中腹以下は急峻な地形を呈している。 以前から予想してい ドラムのよう ランゲル、ド 久しぶりに

断定しえなかった。 とは、これまで見てきた通りであるが、この一帯については、 をなす、 壁は、低所に露出する層理の明瞭な中世層と全く相違する塊状 山容は、溶岩円頂丘を思わせる。それに、CII直下の褐色の岩 ボナについてはまだ確証はないが、ここからふり返って眺めた 状に連らなる事実なども、 せる急崖が、四五四六メートル峰まで、途中とぎれながらも弧 たわけである。その半円錐状の山容の他、東面の火口壁を思わ これまで、地質の記載がなされなかったので、 すものと思われる。ボナやチャーチルも同様の地形を有するこ 明らかな火山岩であるから、プラトー全体が火山性の チャーチルについては、 これでつじつまが合うわけである。 それが 確認でき 同様に火山とは

あった。

がひときわ印象に残ったことであった。 東に続くフレデリカ山群から流下する、 だ、ボナのラッセル側の斜面がよく見えたことと、リーガルの 時二○分。遠望する周囲の景色はボナとあまり変りない。た 姿勢になって、 上は鋭いナイフ・エッジで、 り、スタカットでこれを乗り切ったところが頂上であった。 さて、やせ尾根は最後に一〇メートル程の雪壁とな はじめて、 厳密に頂上を踏むことになる。一一 後続者を確保するために馬乗りの ローン氷河の夢の曲線 頂

台地ということになる

って

お

た。

付きまでたどった。強い向かい風に悩まされてボナの肩を乗り かい風をさけて、 西斜面をラセン状にリッジの取

> CIに下る。CIには撤収後の重い荷が待っていた。 CⅡだけでなく、CIも撤収するという。 ボッカはさすがにしんどい。にわかに日が短かくなり、 収を完了、トレースが消え、ラッセルを強いられたが、 越え、CⅡには三時ごろ着いた。CⅠからの交信で、 つまれた氷河をたどる。すべての行動が終了したのは一○時で 五時四五分CII 七時に 霧につ

天候は悪化し、下山日までアタックのチャンスに恵まれなかっ う。ナタザットはアプローチが長く今回は敬遠する。 レシダー峰や三〇〇〇メートル級のピラミッドを双眼鏡で伺 一日の下山日まではまだチャンスもあろうと、 六日は休養日にする。 快晴なのはもったいない気もするが、 ボナ対岸のト しかし、

がやんで快晴なのにと不審がる。 て、天幕にもぐり込んだ。 ィルソンの飛行機を待ったが、ついに現われず。昨日までの雪 一一日は早起きして、パッキングを完了、氷河上で一日中ウ 仕方がないのでパックを開

新雪で離陸条件が悪化 う。余分なものは一切整理したにもかかわらず、 ナが現われる。昨日は山の向かう側の天気はよくなかっ 便が去ったあと、大わらわで滑走路を踏み固める。見なれた 一二日。一〇時すぎ、前日から待ちかねたウィ 第 便には隊長一人しか乗れない。 ルソンのセス 昨日までの たとい

Ш 終ったのは午後八時であった シーまで四便を要することになった。 1々に別れを告げるなどという雰囲気ではない。 全員がグルカナに集結し 結局マッカー

登山と高度の影響について Ш 本 英 毅

トルとあって、高地トレーニングへの関心が、スポーツ関係者 って、高地トレーニングの方法や効果が研究されている。 の活躍、更に次期オリンピック開催地メキシコが二四〇〇メー 二五〇〇メートルのエチオピアでトレーニングしたアベベ選手 間で急速に高まった。低圧室を利用して、或いは実際山に登 東京オリンピックを契機にスポーツ科学が活発化した。 特に

あり、 多い平地に下山して運動する時、酸素を比較的楽に摂取出来る 量の酸素を確保するために、呼吸、循環、 地で比較的短時間 からである。高地トレーニングの研究の多くは、 系機能が増強変化する、即ち高度順応を来たすためで なり効果が認められているが、それは酸素の少ない高地で必要 高地に滞在してトレーニングすると、持久性種目に於いてか 経験的なものが主であり、科学的研究があまりなされてい 数日或いは数ヵ月にわたって展開される登山活動に於い 高度が生体に及ぼす影響きわめて大であ 或いは瞬間的に最高能力を発揮することに 血液という酸素運搬 る 高地滞在後平 K 8 酸素の 拘わら

> 異なる環境下で、いかに消耗を少なくするか、 温或いは強烈な紫外線と闘いながら活動する登山で、 かに適応するかということが問題になってくる なのは、全身持久力のようないわゆるスタミナであり、 長期間、 生活条件の極度に制限された環境下で、 つまり高地にい 低酸素や低 平地と

あろう。 順応がなされない限り、 ある。今後ヒマラヤ登山が普及し、ベースまで飛行機で行き、 ちに登頂する。 このように 高度に 体を馴らす 期間があったか 順応を来たしたところで一気にアタックし、体が衰弱しないう は休養がなされる。この期間こそ高度順応を計るときであり、 後にBCを設け、そこを中心に偵察、 れている。即ち長期間のキャラバンの後、五〇〇〇メートル前 い以前から、 一般ルートや山小屋が利用出来るようになったとしても、 高度順応に関しては、その生理的メカニズムがはっきりし 戦前でも酸素なしで八五〇〇メートルまで到達できたので ヒマラヤ遠征隊の行動にきわめて合理的に応用さ 酸素なしで一気に登ることは不可能 ルート工作、 ボッカ或

5

される登山者が、この問題に無関心であっていいはずはない。 比べて劣っている。 ではないか。特に登山をする者の体力は、 登頂のチャンスをより大きく、且つ安全にするためには、 な面よりむしろ、高度順応の問題を考慮する必要があるの しかも悪条件下で長期間の活動を余儀無く 他のスポー ツマンと

術的

峰登山は、そうした意味で極めて興味深いものがあった。軽飛 症状により、高地滞在の影響を次に考えてみよう。 頂を目的とする困難な条件の中で、簡単に測定できる息こら 位寒さに強いことが判り、大いに自信を持つことが出来た。 になる機会があり、一見華奢な我々の手が、エスキモーと同じ 入山前アラスカ大学で東洋人として初の寒冷血管反応の被験者 題を考える絶好のチャンスでもあった。幸い低温への適応は いかと懸念された。しかし同時に、登山に於ける急性順応の問 頂しようとするものなので、寒冷や高度の影響極めて大ではな ボナ峰は、五〇三〇メートルしかないが、夏の世界から、 そこから一挙に登頂する方法がとれるのである。我々の目ざす 行機が足になっているアラスカでは、セナス機で氷河上に着陸 にして三〇〇〇メートルの氷河上にとび、そこから短期間に登 脈拍数、ハーバードステップ・テスト、それに自覚的疲労 九六六年夏教育大山岳部〇B会の計画したアラスカ、 ボナ

奮で気付かなかったけれど、セスナ機から放り出された荷物 なが最初三○○○メートルの氷河に降りた時は、感激と興 我々が最初三○○○メートルの氷河に降りた時は、感激と興 はなが最初三○○○メートルの氷河に降りた時は、感激と興 はなが最初三○○○メートルの氷河に降りた時は、感激と興

不

苦の日

ŋ

表 1 自覚的疲労症状の推移

3	报	ī	如	本						
未だ	収	さを	く僅	の山	月	日	行動及び自覚的疲労症状			
高地へ	吐	さを覚え、	僅か三〇	で高山	7/2		3000mの氷河上に着陸,全員何となく息苦しさあり,軽作業で息切れ。			
の適応	高山岩	荷物を持	×00	病ら	2	5	偵察の Ke. Ko. I. 頭痛, 息切れを訴う。 S 頭痛激しく食欲なし。			
11 か	症	を持	î	さき	2	6	停滞、動かなければ異常なし。			
をなさ	状が	った	トル	き経験を	2	7	偵察の I. Ke. 4500m まで登る。 I 頭痛激しく帰幕後呕吐。			
れ	,見	り歩	しか	を	2	9	CI建設、ボッカ35Kg平均。歩並乱れるもやや調子がでてきた。			
でいい	れ	3	な	なた	3	0	偵察, 快調な I も4500m付近でパテる。胸苦しい。			
ないだないた	0	と息切	N B C	ものは	3		C II (4000m)。ボッカ隊20Kgの荷物でグロッキー, S 頭痛激しく呕吐。			
とと、	れ	れが	付近	なか	8/	2 4	登頂,立ち止ると急に楽になり,動き出すととたんに息切 れがする。			
図われ	行機	し、頭	で、何	ったの		5	チャーチル峰登頂後、CI, CI 撤収、40~45Kg の荷物もあまり重く感じられず。			
する。	登山	痛	とな	に	6~1	1	気分よく、食欲さかん。			
- -	によ	食欲	なく胸	表 1	1	2	セスナ機で下山、特に変化を感じない。			

一〇メートルばかり運ぶのに息切れがして、びっくりした。

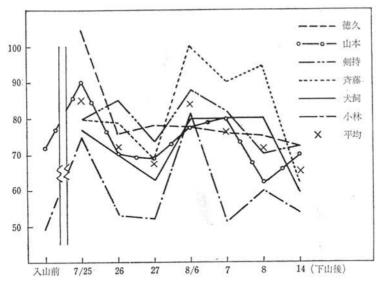


図 1 安静時脈拍数の変化 (BCにて)

表 2 高度と気圧の減少

高 度 (m)	気 圧 (mm)	酸素分圧	平地を1 とした酸 素の割合		
0	760	159.1	1		
1000	674.12	141.1	0.89		
2000	596.27	124.7	0.78		
3000	525.86	110.1	0.69		
4000	462.34	96.7	0.61		
5000	405.18	84.8	0.53		

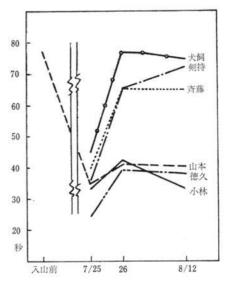


図 2 息をとめていられる秒数の変化

は高地で安静にしていること自体が、すでに平地である程度の が、これ程大きく現われたことは注目すべきことである。 になってしまうことが多く、 て平地でノーマルな範囲内の負荷も、 運動をしていると同じような負荷に当ることを意味する。 の酸素を摂取するために、呼吸や脈拍数が増加する。 わらず同じであり、希薄な酸素しか含まれない高山で、 素しかない。我々の活動に要する酸素の量は、 し表2の如く、三〇〇〇メートルの高度で、平地の2|3 が二六日には平均脈拍数が一八低くなり、息こらえは一九秒増 して、大幅に平常値に近づいている。 五と非常に高く、息こらえは平均三五秒と極度に少ない。 えの変化を示すものである。入山翌日の二五日は脈拍数平均八 高地での活動の激しさを当然減ら 高地ではオーバー 入山当初に 高度の 高度の如何に拘 このこと 必要量 ロード 影響 それ

例する は 3 2倍にもなることはない。それに高度順応で最も有効な変化 3|2倍に増強してもよい。しかし実際には呼吸循環系の増強と いう代償反応、 よる換気量を32倍にすればよい。それとも脈拍数か拍出量を 計算上は、酸素が23しかない三〇〇〇メートルの空気中 赤血球の増加である。 必要量の酸素を確保するには、呼吸数または一 。従って同じ血液でも、 順応反応が同時に現われるので、 血液の酸素運搬能力は赤血球数に比 赤血球が増加すると沢山の酸素 回 脈拍数だけ の呼吸に カコ

した者もあり、

全体として順応の傾向がある中で、個人差が著しく現われて

平地に下山してやっと平均六五になった。

だと思われたが、脈拍数はそれ程減らないばかりか、

息苦しさはなくなり体調良好で、

に帰った時、

に一五時間行動をしたためと思われる。 かる。八月六日急増しているのは、 在日数の経過に伴って、脈拍数が減少傾向を示しているのがわ

前日夜一〇時過ぎまで、

実

しかし登頂を終えBC

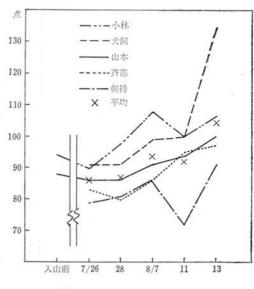
高地順応も進ん

逆に増

を保有出来るので、呼吸、脈拍等落着いてくる。

図1より、

さなければならない。



ハーバードステップ点の変化

3 図

と興奮の連続で、そのチャンスを失い、又下山後は各人別行動の人の心肺機能の良否を判定するハーバードステップ・テストの人の心肺機能の良否を判定するハーバードステップ・テストの活果である。 八月一一日 に二人が 大きな 変動をみせている。 飛行場で入山前の測定を実施する予定であったが、睡眠不足飛行場で入山前の測定を実施する予定であったが、睡眠不足である。 八月一一日 に二人が 大きな 変動をみせている の結果である。 八月一一日 に二人が 大きな 変動をみせている。

で、結論も得るまでに到らなかったが、実験を通して、高度ので、結論も得るまでに到らなかったが、実験を通して、高度の影響が三○○○メートルでも予想以上に大きいことが判ったのは収穫であった。特に入山二日目安静時に測定した脈拍や息こは平常値に近づいている。このことは夜行日帰り登が三日目には平常値に近づいている。このことは夜行日帰り登が三日目には平常値に近づいている。このことは夜行日帰り登が三日には平常値に近づいている。このことは夜行日帰り登が三日には平常位を表して、今後考える必要があるのでともなう遭難対策上の問題として、今後考える必要があるのでともなう遭難対策上の問題として、今後考える必要があるのでともなう遭難対策上の問題として、今後考える必要があるのでともなう遭難対策上の問題として、今後考える必要があるのでともなう遭難対策上の問題として、今後考える必要があるのでともならい。

はなかろうか。

になったため、脱馴化の追跡も出来なかった。その上資料不足

ルー・アンデス(一九六六年)

=カウヤラフとプカランラの記録

エーデルワイス・クラブ

征することに決定した。

は

ك හ 1=

日、単身カナダ航空機で南米ペルーの首都リマへ飛んだ。 労は色々とあったにしても、「さあ、これからだ」というファ 征だったため、漸く出発にまでこぎつけられた時、三年間の苦 港する船のデッキの隊員達を、私は感激の涙で見送った。 がら、横浜埠頭を埋めた見送り人に混って、ドラの音と共に出 あった。ブラジル丸に乗船した六名の隊員達とテープを交しな は、五月晴れの風の強い日で、私達が待ちあぐんだ感激の日で イトが沸き上った。そして後の仕事を片づけ、私は五月二十七 思えばヒマラヤ遠征計画以来、とにかく二転三転したこの遠 九六六年五月三日、ペルー・アンデス遠征先発隊出発の日

計 画

周年を記念して技術研究部が主体となり、ヒマラヤ遠征計画を 目的地を変更して種々検討の結果、南米ペルー・アンデスに遠 企図したが、ネパール政府の登山禁止令のためこれを断念し、 九五五年に発足したエーデルワイス・クラブでは、創立十

精通者として知られる日本山岳会の吉沢一郎氏に、 選定した計画目標についてのアドバイスを受けた。 まずペルーの国情について詳しく調査する一方、 大体私達で アンデスの

よう努力したい希望であった。 ル)の登山を目的とするほか、日本・ペルー間の親善を深める (六一四七メートル)及びカウヤラフ・セントロ (五六三六メート 今度の遠征はコルディエラ・ブランカのネバド・プカランラ

日本テレビの後援を受けた。 今回もヒマラヤ計画に引続き朝日新聞社の後援、そして更に

て取上げ、技術研究部の初期部員五名、隊長に坂倉、隊医にカ 究部の初期部員が中心となって、ヒマラヤ委員会を作った。 計画が進むにつれて、クラブ創立十周年記念行事の一つとし 一九六四年五月、ヒマラヤ遠征が具体化すると共に、技術研

メラ部の黒石を加え、計七名の隊員が決定した。 なお出発直前、日本テレビから申入れがあって、亀井カメラ

隊員は次の通りである。

隊長 坂倉登喜子 鋦 日本交通公社勤務

隊員 黒石 恒 40 (医師)開業医

″ 松田 柳子 ® (渉外)

三浦多美子

(37)

(食糧

鈴木 文子 30 (装備)明治製菓(株)勤務

根本 洋子 29 (装備)日本専売公社 "

大沢 蔦 29 (装備)日本デザインセンター勤務

亀井まゆみ 🖄 (映画記録)読売映画社勤務

NTVカメラマン

行動

一日リマへ先着して準備に当たった。 横浜から船で先発した黒石隊員他五名の内、鈴木、松田両隊

の隊員が到着し、全員リマに集結することができた。着、翌二十九日クリストバルを経由して来た先発の黒石他三名着、翌二十九日クリストバルを経由して来た先発の黒石他三名

れ、婦人団体等と交歓して、親善にこれ努めた。になり、大使館やペルー山岳会主催のレセプションに招待さいすでは日本大使館始め、在留日本人の皆様に非常にお世話

の知人を通じ、在留日本人の皆様に御厚意を受け、全く幸いで で連絡がよく行き届いていたと、おほめの言葉を頂いた。 で連絡がよく行き届いていたと、おほめの言葉を頂いた。 そしは親しくペルーの国情や、注意などを聞くことができた。そし は親しくペルーの国情や、注意などを聞くことができた。そし

カウヤラフ・セントロ登頂

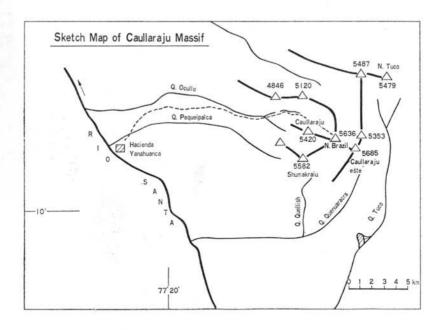
あった。

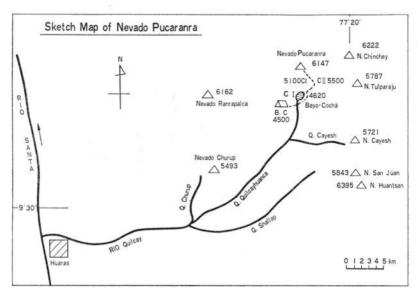
(坂倉記

六月一八日、高度馴化を目的のため、まずワラスを後に、カハイ 八日、高度馴化を目的のため、まずワラスを選の出発だ。約三時間でヤナワンカ農場着、ここの大月一八日、高度馴化を目的のため、まずワラスを後に、カ

この広大な牧場からは、真正面に巨大なカウヤラフ山群が見なせて、その真中にセントロの白い峰が頭をのぞかせていた。 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 ほとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張る。翌朝テントを起き出ると、外は一 はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はとりで中継テントを張えて三時間の後、美しい湿原帯の小川の はおり、約三時間程歩いた頃、氷河の流れに近い台地、四六〇〇メ リ、約三時間程歩いた頃、氷河の流れに近い台地、四六〇〇メ ロトル地点にBCを設営した。

い登りをすぎると、眼下ににごった氷河湖が見えた。その上部一二〇日、いよいよモレーンの丘を登って荷上げ開始、岩の多





の雪線近くの岩かげに、荷物をデポし下山する。

根本、パブロの四名がC1に残った。 にC1を作る。いよいよ明日のアタックを前に、松田、黒石、二一日、デポ地点から氷河を登り、五○○○メートルの雪原

二二日、朝八時、いよいよアタックの朝、好天に恵まれて出りて通過、その先にはあまり大きなクレバスにぶつかり、中に降発、五二〇〇メートル位で大きなクレバスにぶつかり、中に降発、五二〇メートル位で大きなクレバスにぶつかり、中に降発、五二〇メートル位で大きなクレバスにぶつかり、中に降発、五二〇メートル位で大きなクレバスにぶつかり、中に降発、五二〇メートル位で大きなクレバスにぶつかり、中に降発がら休み休み一二時、ピーク直下に着く。ここから稜線までは、今までとは違い傾斜がきつくなるが、危険というほどではは、今までとは違い傾斜がきつくなるが、危険というほどではない。稜線はやせていて、反対側はかなり急である。

一二時三○分、私達は小さいカウヤラフ・セントロ、五六三一、日本、クラブの旗をつけ記念撮影をする。眼下には緑、青、エステ(東峰)、そして雪をいただいた峰々の彼方に、いつものエステ(東峰)、そして雪をいただいた峰々の彼方に、いつものエステ(東峰)、そして雪をいただいた峰々の彼方に、いつものエステ(東峰)、そして雪をいただいた峰々の彼方に、いつものエステ(東峰)、そして雪をいただいカウヤラフ・セントロ、五六三

続いてセントロに登頂した。(根本記)

キャラバン紀に

七月一日は、いよいよプカランラへ出発する朝、午前八時にコーニアンギイ

ずつ積んで、午前九時にワラスからキャラバンを開始した。六頭に、黄色い袋に入れた二○キロの荷物を、振り分けに二個六頭に集結したブーロ(ロバ)二○頭と、カバージョ(馬)

大妻等の見送りを受け、長い行列を作ったキャラバン隊は、町夫妻等の見送りを受け、長い行列を作ったキャラバン隊は、町

丁度来合わせていた芝浦工大遠征隊長の加藤氏他四名、

谷川

て、インディオの娘が二人羊番をしていた。と、前方にひらけた牧場があり、その斜面に羊が放牧されていと、前方にひらけた牧場があり、その斜面に羊が放牧されていたの清流の水を飲んでは一息入れていた。狭い道を登り切る

やがて三〇分程歩いてポーター部落を通り過ぎ、道幅が狭

少年が、私の乗って来た馬で早速探しに戻って行った。 った。ここで突然ロバが一頭足りないのに気づいたアリエロの の泉のほとりで、ロバや馬を休ませて、私達も軽い中食をと の泉のほとりで、ロバや馬を休ませて、私達も軽い中食をと の泉のほとりで、ロバや馬を休ませて、私達も軽い中食をと

見ると荷物を積んだまま、飼い主の家へ戻っていたとか、これと事にいって来た。皆大喜びで迎える。どこに居たのか聞いてで連れ戻って来た。皆大喜びで迎える。どこに居たのか聞いての事にや場にです。 けいよいよかルカイワンカの右岸を

がブーロの郷愁というものだろうか……。

れて来た。私は思わず「ありがとう」と叫んだ。いつも私のたのバースデーだった。隊員のテントからバースデーソングが流その夜、ケルカイワンカの谷で迎えたテントの第一夜は、私

る涙が止まらず、泣けて泣けて暫くの間、眠れなかった。めに祝ってくれた亡き母のことをふと想い出し、こみ上げてく

をはなしてたてた。

二日、午前九時三○分テント撤収、谷を遡るに従って湿原をとなるので、別に怪我はなかった馬は湿原がきらいで、湿地になると動かとした湿原で、とうとう沼地に馬が足をもぐらせたとたしようとした湿原で、とうとう沼地に馬が足をもぐらせたとたしようとした湿原で、とうとう沼地に馬が足をもぐらせたとたんに、私は振り落されてしまった。スローモーションで落ちたんに、私は振り落されてしまった。スローモーションで落ちたんに、私は振り落されてしまった。そんなことですっかり遅れてし引いてくれた鈴木隊員だった。そんなことですっかり遅れてし引いてくれた鈴木隊員だった。そんなことですっかり遅れてし

急坂を登って尾根を捲き、ベース設営地へ着いた。 正近づいた。隊員達は川を遡って台地にとりつき、私は牛道の 直ぐ上の牧場で一行に追いつき、一歩一歩目指すプカランラまったので、ポーターが心配して迎えに来てくれた。

ベースキャンプ生活

ここは六一四七メートルのプカランラ峰を真上に仰ぎ、その月三日から約三週間続けられることになった。 四五○○メートルのBC生活が、この最奥の高原牧場で、七

> 絶好の幕営地であった。 原の中央には清洌な氷河の水が、美しい小川となって流れ込む原の中央には清洌な氷河の水が、美しい小川となって流れ込む

他に女性隊のため特別に用意したトイレ・テントを、少し距離隊長と隊員用のテント二張、食堂兼ポーター用テント一張、

て急に温度が上がり暖くなり、昼頃は眼鏡がいる程の直射日光が、バラ色に染まって、壮麗な姿を見せ始める。陽の光がテンが、バラ色に染まって、壮麗な姿を見せ始める。陽の光がテンの水面が凍っていた。真青な初冬の空に浮くプカランラの頂上

丸、クラブ族と五月三日出発の際、加藤泰安氏から贈られた鯉で、陽焼けを心配する程の暑さとなる。朝食後 テン ト に日の

幟りを立てる。

午後から荷分けをして、氷河湖デポ地点までロバで荷上げを

その夜は、コチャ附近に咲いていたエーデルワイスに似た花

私の御誕生祝いの祝宴が開かれて幸いな夜を

過ごした。

で食卓が飾られ、

が良く聞きとれた。コチャよりデポ地まで 約一時間半の 行程九時初めてトランシーバーの交信、感度良好で偵察隊からの声四日、荷上げデポからC1設営地の偵察と荷上げ開始、午前

五日、亀井カメラマンが高山病で、夜中から強い頭痛になやちる雪崩が碧い湖に白く浮き上がる。

でに一条白い銀河が、幅広い星の川を見せていた。じっと見上空に一条白い銀河が、幅広い星の川を見せていた。じっと見上げていたためか、その夜は寒くて眠れず、桃太郎灰を入れてカイロで体をあたためて寝た。外はマイナス四度だった。 一二日、朝六時半、ワラスからパブロの兄のポーター、マルセリーノが馬で「お早よう」とベースへ元気良く登って来た。が得意だった。早速日本的な朝食を共にして、装備を点検したが得意だった。早速日本的な朝食を共にして、装備を点検したが得意だった。早速日本的な朝食を共にして、装備を点検したが得意だった。早速日本的な朝食を共にして、装備を点検したが得意だった。早速日本的な朝食を共にして、装備を点検したが得意だった。

私は午後一時の交信に間に合うよう、テントに急いで戻った。したため、その間亀井カメラマンと後側のコチャまで登ってみた。ここは黒部源流の雲の平のような池塘より少し大きな湖があって、プカランラが湖面に影を落とす秘境であった。二人共あって、プカランラが湖面に影を落とす秘境であった。二人共っかり気に入り、カラー写真をあらゆる角度から撮りまくり、一三日、C2より頂上ルート偵察、午後一時まで交信を中止一三日、C2より頂上ルート偵察、午後一時まで交信を中止

四日、いよいよ今日はアタック隊が朝五時にC2を出発し

メートルのコルにC2設営完了の報告があった

報告がある。

私はベースから望遠鏡で、豆粒大の三つの黒点を追って見守っていた。午後五時、時間切れと、頂上直下のクレバスにはばまれ、登頂不可能のため下山に向かい、明るい内に岩場を通過まれ、登頂不可能のため下山に向かい、明るい内に岩場を通過まれ、登頂不可能のため下山に向かい、明るい内に岩場を通過まれ、登頂不可能のため下山に向かい、明るい内に岩場を通過の黒石隊員との交信は全く悲愴そのものだった。

ではないかと、胸さわぎがして眠れるどころではなかった。一五日、朝八時の第一号で、○時三○分無事アタック隊が戻ったという交信が入って、漸くベースは明るい空気になった。クレバスの連続と、もろい岩場の往復は非常に困難で、ポークレバスの連続と、もろい岩場の往復は非常に困難で、ポークレバスへ……の不安も消えて、真上に仰ぐプカランラの姿はクレバスへ……の不安も消えて、真上に仰ぐプカランラの姿はのレバスへ……の不安も消えて、真上に仰ぐプカランラの姿は

午後大時、アタック隊が元気にベースに戻った時は、嬉し涙で三人の顔がにじんで見えた。

一六日、ベースキャンプの留守番役だった私と亀井カメラマー大日、ベースキャンプの留守番役だった私と亀井カメラマーが、 松田、鈴木両隊員に同行して、氷河の末端まで撮影を兼

る隊員達の姿をキャッチした。

が物凄くえぐれて、大きく口を開けて待っている様相は、全くが物凄くえぐれて、大きく口を開けて待っている様相は、全くがしのばれて、感謝の念が湧く。

げて冥福を祈った。(坂倉記) やがて頂上近くに湧いた雲が広がって、天候がくずれ始めた やがて頂上近くに湧いた雲が広がって、天候がくずれ始めた やがて頂上近くに湧いた雲が広がって、天候がくずれ始めた

プカランラ峰

七月四日、五時出発、湖のデボ地から荷を背負って右手モレーンの上をたどる。体がなれるまで隊員一二キロ、ポーターニーンの上をたどる。体がなれるまで隊員一二キロ、ポーターニメートルの地点であった。

は遅かった。最初からカッティングの連続で、時間がかかり歩みっていた。最初からカッティングの連続で、時間がかかり歩み

氷河のとりつき点を出て三時間ほどして、一一時頃C1設営 地がみつかった。標高五一○○メートルの雪の平地で、BCか はがみつかった。標高五一○○メートルの雪の平地で、BCか はがみつかった。標高五一○○メートルの雪の平地で、BCか

五日、昨日活躍したポーターのビクトリーノが発熱し、寝こで、早朝出発して午前中に行動することにした。

人が先行し、ルート工作を行なった。そしてその後に荷上げ隊んでしまった。氷河のとりつき点から鈴木、松田、エバンの三

が続いた。

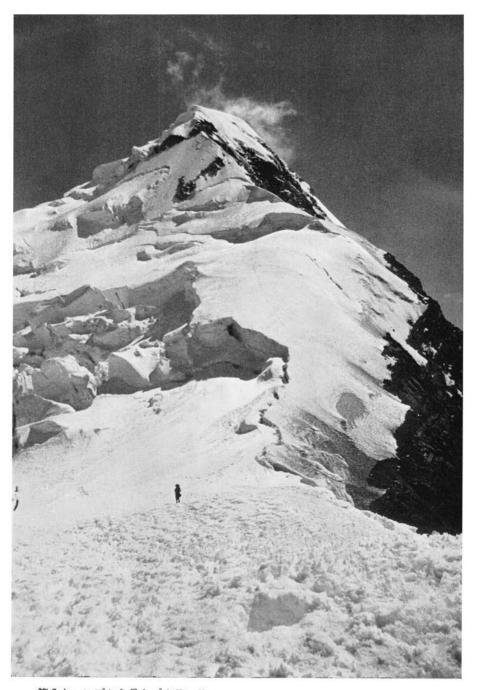
定、雪質の悪い急登二個所に、四○メートルと二○メートルのクレバスの断層個所にアブミをかけ、一個所にはハシゴを固

六日、入山六日目、C1設営を前に全員BCにて休養するとザイルをフィックスした。

箔のフライをかけて設営を完了した。き、六人用と四人用のテントを設営、隊員用のテントにアルミモ日、明けの明星を仰ぐ頃BC を 出発、 一時半C1 地に着とにした。

た。 八日、C1へ泊った松田外三名は、C2へのルートを偵察し

が荷上げをかねてそれにつづいた。両隊ともトランシーバーで人がルート偵察のために先行、黒石、松田、根本、大沢の四人九日、メンバーを交替して鈴木、ビクトリーノ、エバンの三



第2キャンプから見たプカランラ Nevado Pucaranra (6147m) seen from CII (5500m).

(By Ryuko Matsuda)

Nevado Tulparaju (5787m)

Nevado Cayesh (5721m)

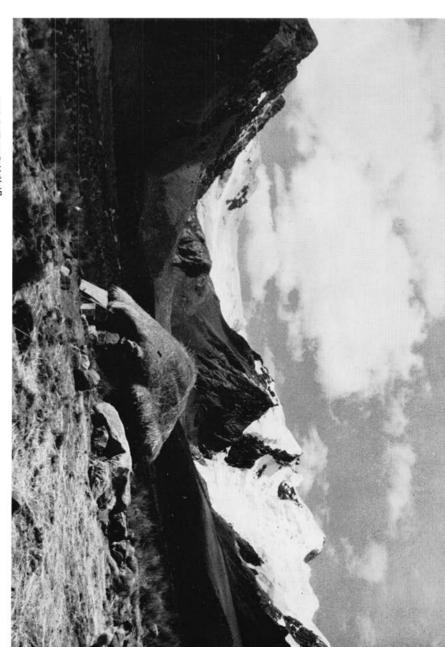
Nevado Pucaranra

プカランラ東尾根からの展望 A view taken from the eas

(By R. Matsuda)

CII (5500m)

A view taken from the east ridge of Pucaranra.



カウヤラフの放牧場 A pasture of Caullaraju

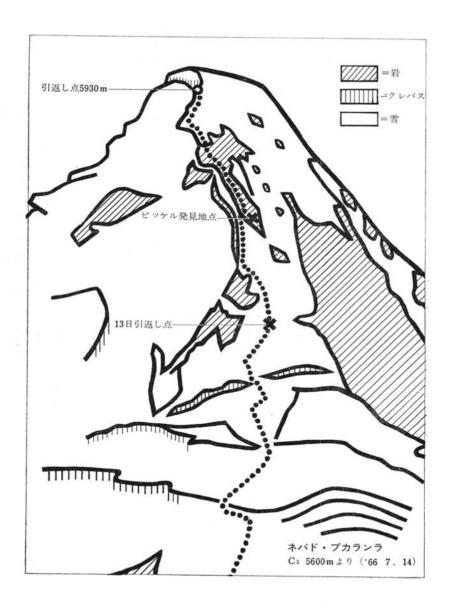
By T. Sakakura)



プカランラのベースキャンプにおけるエーデルワイス・クラブの隊員とポーターたち Members of the Edelweiss Club to Peruvian Andes (in 1966) and their porters at the Base camp of Nevado Pucaranra.

(Left to right) (front row) Fortunato Alvarado, Donato Flores, Yoko Nemoto, Mayumi Kamei, Ryuko Matsuda. Tokiko Sakakura.

(Second row) Victorino Angeles Chorqui, Tamiko Miura, Pablo M. Evangerista, Tsuta Osawa, Fumiko Suzuki. (By Kuroishi)



文信しながら登ったので、能率がよくコルまで登れた。夜もふ

一一日、C1泊り。 一一日、C1泊り。 一一日、C1泊り。

一三日、鈴木、松田、エバンの三人でルートの偵察に出る。 ンラは、北面に岩を露出し手強くも見えた。 ンラは、北面に岩を露出し手強くも見えた。

ることが出来、昨日四時間半かかった引き返し点に二時間余り 出発した。外はまだ暗く、明けの明星が輝いていた。前日の踏 出発した。外はまだ暗く、明けの明星が輝いていた。前日の踏 ので快調に高度をあげ のでとる。足場が切ってあるので快調に高度をあげ のでとる。と場が切ってあるので快調に高度をあげ

ようだ。そんな中を登りつめると、向こう側はがらりと様子がたが、ザラメ状の雪で、まるでアリ地獄に入りこんでしまった鈴木の順に登り始める。三ピッチほど登ってようやく雪稜に出命工で一息入れた後、トップを交替、松田、マルセリーノ、

変り、テラテラ光る氷の斜面をはさんで、黒い岩がつづいてい

った。この隊にはフランスのクロード・コーガン夫人が加わっこれは一九五七年のフランス・スイス合同隊のものに違いなかが見えた。「あった!」古い友に出合ったように心がはずんだ。

遭難死したが、ひそかに彼女を敬愛していた私達は、その足跡年、ヒマラヤのチョー・オユウに向かい、雪崩のため惜しくもていた。彼女は、アンデス、ヒマラヤ等で活躍し、一九五九

をじかに見て、ますますファイトを燃やした。

で、ピッケルにもザイルにも触れずに、岩登りの準備をはじめの確保に使ったのだろうが、私達の心は頂上に向かっていたのので、ケルが見えた。フランス隊が雪面にさして、下りのときのだら、エ〇メートル程下の岩の上に、白く風化した柄り、岩場に三人共渡りおわった時に「あっピッケルが」と鈴木り、岩場に三人共渡りおわった時に「あっピッケルが」と鈴木り、岩場に使ったのだろうが、私達の心は頂上に向かっていたので、ピッケルにも呼んが高値がある。

雪の斜面があらわれた。岩場の終りの大きな岩に、ハーケンがった。岩はだんだん傾斜をまして、六ピッチ目にひよっこり、ち、北斜面をチンチェイ氷河まで、大きな音をたてて落ちて行ち、北斜面をチンチェイ氷河まで、大きな音をたてて落ちて行ったが、岩がとてももろく、歩くたびにバラバラとくずれ落かめの二ピッチは、階段状に岩がつづいていたのでやさしか

ことにした。
一本打ってあった。丁度良い休憩場所だったので、昼食をとる

間で行けると、三人の意見が一致した。ここから見上げるプカランラの頂上は、どう長く見ても二時のだった。一二時半だったが頂上までは、どう長く見ても二時ので行けると、三人の意見が一致した。

雪への取付点は、空洞が出来ていて足場が高く、二人の肩を かりてようやく雪の上に出る。傾斜がきついので、又一歩ずつ かりてようやく雪の上に出る。傾斜がきついので、又一歩ずつ にすく深く割れていて、それがせまい稜線全部にわたっている ではないか。急いで登って来た二人も、だまりこんでしまっ ではないか。急いで登って来た二人も、だまりこんでしまっ ではないか。急いで登って来た二人も、だまりこんでしまっ

岩場の下りは登りよりもむずかしい。三ピッチ程下ったと 岩場の下りは登りよりもむずかしい。三ピッチ程下ったと おてしまった。幸いマルセリーノが確保していたので、かすり 像程度ですんだが、「落ちた!」という声と、ガラガラと岩の 落ちる音が、C2にいる人に良く聞こえたので、随分心配をか けてしまった。岩場を下り切ったところで、例のピッケルを拾 いに行った。赤くさびてはいたが、シモンだった。

六月二十二日

半、無事に天幕にもどった。(松田記) 日の引き返し点で真暗になってしまった。星明りに堅い雪の爪田の引き返し点で真暗になってしまった。星明りに堅い雪の爪田の引き返し点で真暗になってしまった。星明りに堅い雪の爪田の引き返し点で真暗になってしまった。

遠征隊日誌

一九六六年

六月二十一日 <晴>BC→三時間半→C1(五一○○m)建設。 (匹六○○m) 建設。								五月二十九日 先発隊(鈴木、松田)ロスアンゼルス上陸。 五月二十八日 隊長リマ着。 五月二十九日 後発隊(黒石、三浦、根本、大沢)クリスト 五月二十九日 後発隊(黒石、三浦、根本、大沢)クリスト 大月 十三日 全隊員、荷物ワラスに集結、リマ→車で九時間 六月十八日 人時、午後から雲多し>中継キャンプ→二時 カウニ時間→ヤナワンカ農場→三時間→中継 ック二時間→ヤナワンカ農場→三時間→中継 ックニ時間→ヤナワンカ農場→三時間→中継
	ンノ中継キャンプルニ時間→中継キャンプ	、セントロに向かう。ワラス→トニ	に集結、リマ→車で九時間→ワラ	根本ワラスへ向かう。	宋結。	『、根本、大沢)クリストバル経		E) ロスアンゼルス上陸。

すより仕方がなかった。高度計の針は五九四○メートルをさし

〇) -BC (二八、三〇)

—頂上(1二、四○~一三、三○) —C1(一五、五フ・セントロ(五六三六m)に登頂。C1(八、○○)へ快晴>黒石、松田、根本、パブロの四人カウヤラ

六月二十四日 七月十二日 七月 七月 七月 七月 六月二十九日 六月二十八日 六月二十七日 八 Н H 日 H Н H Н H 四人、カウヤラフ・セントロに登頂。BC(四、 上げ。 へ快晴、 向かって出発。ワラスー(九、〇〇)ー中継キャンプ ^晴、 残し他三人─BC (一七、三〇) 〇) -01(七、〇〇一八、二〇) -頂上(二三、〇 営。C1 (七、一五) -C2 (二三、〇〇) <晴、うすもや>C2を約五五○○mの南東コルに設 へ晴>BCにて荷物の整備。 流の草原にBC(四五〇〇m)を建設 ―BC (一六、○○) ケブラダ・ケルカイワンカの順 <晴のち曇夕方よりみぞれ>中継キャンプ(八、三〇) <晴>BC撤収―ヤナワンカ農場 〇~一三、一五)—C1 (一五、一五) 大沢をC1に <曇のち雪>三浦、大沢、パブロ、エバンへリスタの 建設。BC→三時間半→C1 <晴>C1地の偵察、荷上げ。 <晴>ワラスにて登山準備。 <晴>ワラスに戻る。亀井カメラマンと合流 <快晴> (一六、〇五) <快晴、風やや強い>全員BCに下り休養 へ快晴>プカランラの南面氷河上五一○○mにC1を 正午、大陽に暈かかる>ネバド・プカランラに 南風がやや強い> 日中巻雲が出て風つよい>C2地の偵察と荷 ~三十一日 八月三日~四 七月十 七月十四 七月 七月二十五日 七月二十日 七月十八日 七月十五 八月 八月 七月二十六日

十九日

В

リマに戻る。

全員で昼間は日本人移住史編纂の大使館の仕事の手伝いをする。

七日 六日

リマに戻る。 ワヌコにてコトシュ・ワイカヒルカの遺跡見学 〇) ークレバス引返し点(一四、〇〇) ―岩場取付点 五) —岩場取付(一〇、一五) —岩場終了(一二、三 断念。C2(五、〇〇)-一三日の引返し点(七、 人アタック、五九四○mの地点でクレバスのため登頂 <快晴、夕方より曇>松田、鈴木、マルセリーノの三 1110) -01 (111, 00 大使公邸にてレセプション。 <晴、雲多く、夕方よりあられ>C 2 撤収 <晴>中継キャンプーワラス。 <曇、夕方よりあられ>休養、下山準備。 <晴のち雲多く、夜三センチの積雪>C1撤収。 (1七、110)-02(1四、110) < 快晴>BC撤収—中継キャンプ。 (六、○○) -引かえし地点(五六五○m)(一○、 、晴、雲多しソ

日

八月十六日 八月六日一九 П В **クスコにてインカの遺跡、オヤンタイ・タンボ及びマチュ・ピチュを見学。** リマに戻る(飛行機の都合で帰国延期)。 夜は滋賀県人会の歓迎会。 夜は中央日本人会の歓迎会

七月十三日

<晴、うすもや>ルート偵察、C2への荷上げ。C1

八月二十三日

本隊はメキシコ・ハワイ経由、空路羽田着。

В

及びコロロ峰(五九一五メートル)、イリマニ峰(六四八〇メート

ボリビアの山(一九六五年)

岡島成行

同我々の今回の山行は、大きな山岳会等の遠征ではなく、個人 の山行であり、目的はただ一つ、美しく輝く銀嶺を、そしてで の山行であり、目的はただ一つ、美しく輝く銀嶺を、そしてで きれば処女峰を、攀じることであった。中学や高校の頃からの、 きれば処女峰を、攀じることであった。中学や高校の頃からの、 きれば処女峰を、攀じることであった。中学や高校の頃からの、 きれば処女峰を、攀じることであった。中学や高校の頃からの、 さほくれないため、アンデスに切りかえたのである。そして、さほ ど技術的に難かしくなく、未踏地帯ということでププヤ山群東 値を選んだ。ププヤ山群だけでは面白くない、ついでに美しい といわれているコロロ峰と、六千メートルを越す山を一つ加え といわれているコロロ峰と、六千メートルを越す山はどれが良 いか、日本では見当がつかない、実際に見てから決めようとい いか、日本では見当がつかない、実際に見てから決めようとい

を登頂することができた。

ラパスにて

で、上り下りのマラソンをした。このためであろうか、山では た。その後約一週間、毎朝一時間ずつ三八〇〇メートルの街 四名がラパスに到着した。 時宜しく 天皇陛下の 誕生日で あ 等、先発隊の主要な仕事が終り、出発準備も整ったころ、本隊 岳会との親交、アポロバンバ山群、イリマニ峰の偵察及び研究 常識を持ち込んで、勝手に怒っている姿は、余り見ばえのする が、一週間もすると悠然と構えるようになってしまう。日本の 図ではなかったようだ。無税で荷を通す交渉やら、ボリビア山 ースに合わさねばならない。はじめのうちは忙しく歩き廻った 張り切って仕事を片づけようと思っても、全くの一人相撲に終 発した我々を、全く拍子抜けにしてしまった。先発隊として、 ラパスに到着した。ラパスという街は面白いところだ。つい ってしまう。「郷に入っては郷に従え」の如く、全く相手のペ ケ月前に、文字通り金波銀波に激励されて、意気高く横浜を出 人も高山病にはかからなかった。 一九六五年三月二日、先発隊二名が横浜を出発、三月二八日

アボロバンバ山群 (Cord. Apolobamba)

五月一一日早朝、我々は力強いエンジンのひびきとともに、

朝もやの中を一路ププヤ山群に向かった。ププヤ山群は周知の朝もやの中を一路ププヤ山群に向かった。プヨプヨは、昔ドイツ隊やプヨプヨ(Puyopuyo))に着いた。プヨプヨは、昔ドイツ隊やプヨプヨ(Puyopuyo))に着いた。プヨプヨは、昔ドイツ隊や一橋隊がププヤ山群の根拠地として使った部落である。ここから先は一転して山深くなり、ロバやリャーマの世界となる。ち先は一転して山深くなり、ロバやリャーマの世界となる。ち先は一転して山深くなり、ロバやリャーマの世界となる。

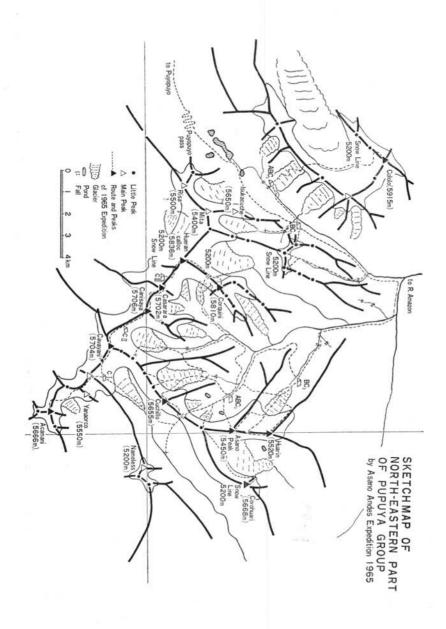
五月一五日。プヨプヨ峠を越えコロロ峰の氷河末端に到着。しかし今まで何度も何度も偵察したのであるが、どうも目指すしかし今まで何度も何度も偵察したのであるが、どうも目指すで消音会議である。そしてついにコロロを先に登ってしまえ、て鳩首会議である。そしてついにコロロを先に登ってしまえ、たいうことになった。コロロを登り、その頂から天下の形勢をということになった。コロロを登り、その頂から天下の形勢をということになった。コロロを登り、その頂から天下の形勢を眺めようというのである。しかし、いきなりコロロのような鋭眺めようといなって大丈夫であろうか、という心配があった。我々は、慎重に行動するよう心に言いきかせてきたのである。我々は、慎重に行動するよう心に言いきかせてきたのである。我々は、慎重に行動するよう心に言いきかせてきたのである。は、我々の後に続く若い芽を踏みにじることになる。この点をめぐって夜中まで語り合った。

П口口峰 (Nvd. Cololo, 5915 m)

急いで二人を呼びコロロを見つめる。第二キャンプは建設せず 初めて触れる氷河や青氷に胸が高鳴る。必要もないのにカッテ ころで落ちたのであるが、大音響に驚いて右往左往してしまっ 散った。ブロックは我々のいるところとは、全く関係のないと に、とてつもなく大きなブロックが崩れ落ち、三人必死に逃げ に明日は一挙にアタックだ。大喜びで下りはじめる。 れると、なんと霧の中にコロロが見えがくれするではないか。 ル)に着く。一人が小便をしに、ほんの五〇メートルばかり離 プを固定した。午後三時、第二キャンプ予定地(五七〇〇メート メートルに第一キャンプ建設。上部偵察もあわせて行なった。 たのだ。初めての氷河に緊張していたためであろうか。後にな オールの中を右に左に進み、三ケ所合計二〇〇メートルのロ ィングをしたり、アイスバーを打込んでみたりしてしまう。 五月一八日。コロロ峰に向かって前進を開始した。五二〇〇 五月一九日。第二キャンプへのルート工作。壮絶なアイスフ 下降中

第二キャンプ予定地まで、わずか二時間で登ってしまった。コまうと、全く易しくなってしまうようだ。昨日六時間かかったキャンプ出発。氷河の通過というのは、一度ルートを拓いてし去ャンプ出発。氷河の通過というのは、一度ルートを拓いてし

って大笑いとなった。



ルに立つと、朝の陽をいっぱいに浴びてコロロは天を突く。広 大な雪原を横切り、コロロの基部に到着。最後の二〇〇メート 大な雪原を横切り、コロロの基部に到着。最後の二〇〇メート ルだ。正午、頂上直下に達した。あと二ピッチ位である。今ま ではカッティングも簡単に済ませてきたが、ここから上は五〇 度以上の氷壁と変る。アイスバーを二本打ち込み、大きなバケ ツを掘ってジッヘルを完全にする。氷はぬる ぬる して不気味 が。慎重に、そして力一杯カッティングを続ける。午後一時五 だ。慎重に、そして力一杯カッティングを続ける。午後一時五 だ。慎重に、そして力一杯カッティングを続ける。午後一時五 だ。慎重に、そして力一杯カッティングを続ける。 ではカッティングも簡単に済ませてきたが、 ここから上は五〇 ではカッティングを続ける。 ではカッティングを続ける。 で後二時三〇分下降を始めた。 ほとんどアップザイレンの連続で 参った。七時帰幕。(コロロは一九五七年のドイツ隊につづい で第二登)

ププヤ山群(Pupuya Group)

る。と、ププヤ山群東面の大きなカールの中に入り込むことができと、ププヤ山群東面の大きなカールの中に入り込むことができる。

勇み立つ。
五月二二日。ププヤだ。目前に展開する処女峰のパノラマにあ!
今日からププヤだ。目前に展開する処女峰のパノラマに

アサノ・ピーク(Asano Peak, 5450m)初登

五月二三日。宮崎、二宮登頂。テントの前にそそり立つ二つの山を、いっぺんに登ってきてしまった。氷の状態が最良で、の山を、いっぺんに登ってきてしまった。氷の状態が最良で、

クチリョ (Cuchillo, 5655 m) 初登

緊張させられた。

「本学者のとれた美しい山である。稜線は細く、雪底が交互に張り出し場の最初のピークである。稜線は細く、雪底が交互に張り出し場をのとれた美しい山である。主稜線のカバヤニから伸びる尾場のよれた美しい山である。主稜線のカバヤニから見て、一番を張させられた。

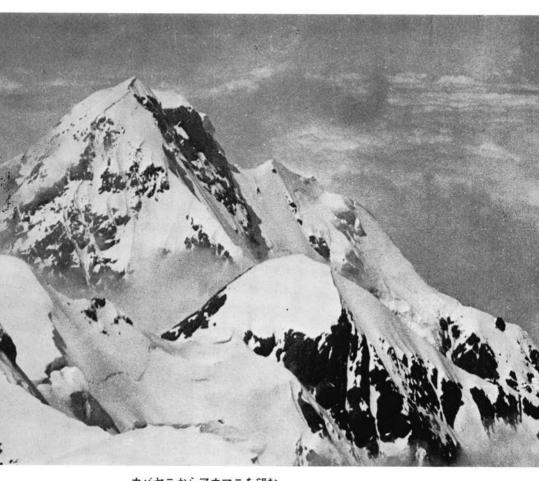
主稜線縦走

ーアカマニからウェランカヨックー

向かう。高度が上がるにつれて荷が肩にくい込む。一二時、よ五月三○日から六月二日まで、宮崎、太田、岡島縦走。 五月三○日から六月二日まで、宮崎、太田、岡島縦走。 五月三○日から六月二日まで、宮崎、太田、岡島縦走。



コロワリ (左) とクチリヨ (右) Corohuari (5688m) (left) and Cuchillo (5655m) (right).



カバヤニからアカマニを望む Acamani (5666m) seen from Cavayani (5704m).

もぐり込む

四時、 見した。彼等が登った時より状態が良い。アイゼンの爪が何と か入る位の雪であった。長く急なアカマニの雪壁を登り、一メ 肩で、一橋の人達が残したと思われるフィックス・ロープを発 カマニ (Acamani, 5666 m) に向かう。今日アカマニを登らな ートル位の雪庇を切れば、あとはゆるやかな稜となっていた。 いと、ウェランカヨックまでは行かれなくなる。ヤナオルコの 深さ五〇センチ位の穴を掘り、その上にアイスバーを立ててツ うやくコルの下の雪原 ェルトを張った。一二時四〇分、サブザックであわただしくア トを張る。 雪が堅くて 雪洞が堀れず、 平坦な 雪原に苦労して 頂に立つ。帰りはまた夜行軍である。七時半帰幕 (五四〇〇メートル)に到着。 すぐツェル

を右に左にルートを選ばねばならなかった。三時三〇分、コル った。 ル。もう一度登り直し、東面に廻り込み、大きなブロックの中 カバヤニからほんの少し下ると、下はズタズタのアイスフォー るカニサヤとのコルに行くのに、三時間もかかってしまった。 景に写真をとる。あとは下るだけ。ところが目の下に見えてい ッセルだ。時には股位までもぐってしまう。一二時、カバヤニ (Cavayani, 5704m) 登頂。 アカマニやウェランカヨックを背 (五五六〇メートル)に到着。 五月三一日。 そしてただ長く遠いカバヤニ目指して進む。 昨日の疲れのためか、出発が九時になってしま 早々と夕食をとってシュラーフに 今日はラ

> 上げカサララの頂上についたのは三時を廻っていた。 も見えない。それが約七○度の傾斜で山全体をおおっている。 ぐん進む。カサララの直下一○○メートル位から、厚さ二○セ スした二重雪庇を切ってハング状の氷を乗越す。ザックを吊り アイスバー、ハーケンを打っての登攀となる。三ピッチ、クロ ると中まで突き抜け、しかもその中はただ空洞となっていて何 ンチ位の一枚岩ならぬ一枚氷となっていた。カッティングをす nisaya, 5706 m)を快調に越し、カサララ (Casarara, 5702m) の我々のチームの最大の取柄は体力である。誰もバテずにぐん に向かう。日本の山と全く同じようにピッチもはかどる。 六月一日。縦走も三日目になると調子が出る。カニサヤ(Ca

東面に廻り込まねばならなくなった。ありったけのザイルを結 ートル)に出ることができた。風は終日強かった。 ならなかった。五時半、ウェランカヨックとのコル び、ザックをおろし、何度もバケツを掘って、確保しなければ カサララの頂上は大きく二つに分裂してしまい、下降はまた (五六五〇メ

rancalloc, 5836 m)の頂につく。今縦走最後にして最高の山 ある。高校の校歌を歌い、ビスケットを食べ、紅茶を飲み、 を背負うに限る。九時四五分、一息でウェランカヨック(Hue ゾン側からたたきつける。調子の良い時は寒気も小気味良い。 休みするとすぐ手足がしびれてくる。そんな時はまたザック 六月二日。八時、ツェルトをたたむ。今日は寒い。 風もアマ 測 (261)

調子では大変なことになりそうだ。慎重に戻って次の機会を待っている。一時間程登るとものすごい氷稜が出てきた。両側ことにする。一時間程登るとものすごい氷稜が出てきた。両側ことにする。一時間程登るとものすごい氷稜が出てきた。両側とにする。コルキニとのコルヘシリセードを交えながら下降す量をする。コルキニとのコルヘシリセードを交えながら下降す

コルからアイスフォールの迷路をくぐり抜け、氷河を下る。 コルからアイスフォールの迷路をくぐり抜け、氷河を下るにキャンプに帰った。うしろを振り返れば、コロロが血のようにキャンプに帰った。うしろを振り返れば、コロロが血のようにキャンプに帰った。うしろを振り返れば、コロロが血のようにキャンプに帰った。うしろを振り返れば、カーラ初登、カバヤニ、カニサヤ、アカマニ第二登。)

つことにした。

最後のアタックの用意を整えた。 頂を残すのみとなった。三日、四日とベースから荷上げをし、頂を残すのみとなった。三日、四日とベースから荷上げをし、

コルキコ (Corguini, 5810 m) 初登

てゆく。ウェランカヨックとのコルに登り、そこから反対側にたく、岩角に当たって切れ切れになり、悲鳴をあげて吹き過ぎた月五日。宮崎、二宮登頂。月明りの中を出発する。風は冷

いなかっただけに、登頂の喜びは大きかった。 無心にカッティングを続け、午後二時頂上に着いた。ウェラン無心にカッティングを続け、午後二時頂上に着いた。ウェラン一度下り、先日のナイフ・エッジが終るあたりに突き上げる。

コロワリ (Corohuari, 5668 m) 初登

六月五日。太田、岡島登頂。笠ヶ岳を少しゴツくしたような山である。コルキニ隊と別れ、クチリョからの分岐のピークを経て、コロワリの氷河をトラバース。頂上から一気に落ちてい効く。一二時頂上着。頂上は意外に狭く、しかも雪庇がものすごく発達しているので、一人ずつ頂に立った。下りはいつものようにアップザイレンの連続であった。

一時、全員無事ラパスに帰着した。 この二峰の登頂をもって、ププヤ山群東面を探査し、かつ未 監峰を登攀する、という目的は全て滞りなく終了した。六日、 路峰を登攀する、という目的は全て滞りなく終了した。六日、 は台、太田、岡島の四名はアマゾン源流の部落を訪ね、四日間 城台、太田、岡島の四名はアマゾン源流の部落を訪ね、四日間 な直接ウヤウヤ(Ulla Ulla)に撤収。一○日夜、ウヤウヤに 全員集合。一一日朝、トラックでウヤウヤを発ち、一二日午前 全員集合。一一日朝、トラックでウヤウヤを発ち、一二日午前 全員集合。一一日朝、トラックでウヤウヤを発ち、一二日午前 全員集合。一一日朝、トラックでウヤウヤを発ち、一二日午前

イリマニ峰(Nvd. Illimani, 6480 m)

一日であった。 一日であった。 一日であった。

二時間のアルバイトの後、午後六時帰幕。六月二○日。CI(五二○○メートル)建設。六月二一日。宮崎、ロニー、南峰(六四五○メートル)登頂。六月二一日。宮崎、ロニー、南峰(六四五○メートル)登頂。

六月二三日。宮崎、城台CIに入る。太田、岡島CⅡ(五九○島はCⅡ予定地へボッカ。



ため調子が狂ってしまう。北峰(六四八○メートル)から落ちて かない。偵察も気が重い。 いる西稜は鋭い。しかも西稜に出るまでのルートも急な氷稜し った五〇〇メートル位の差であるが、山の大きさが違ってくる 〇メートル)建設。ププヤ山群でのカンはまるで通用しない。た

トは拓けた。 察。宮崎、岡島午後になって西稜へのリッジを偵察。取付まで の間に三ヶ所青氷のいやなトラバースがあったが、何とかルー 六月二四日。宮崎、城台、CIIに入る。太田、岡島は上部偵

雪原にすべりおりる。四人が四人とも気ままなペースで歩き続 続ける。急な氷壁を登り切ると、反対側に二本の鋭い氷稜が見 ラと光る。ひたすらカッティングを続ける。今日はなぜか息苦 田、城台が続く。何とも言えぬ不安感と期待とともに、 トルンへ下り立つ。疲れた。コルからはアップザイレンを続け、 雪がぐずつく。午後五時三○分、中央峰とのコル(六三五○メー た。下降は雪が悪い。南面であり、午後なので氷が溶け、所々 えた。頂上だ。午後一時三分。西稜からは初めての登攀であっ 線は細い。交互に雪庇が張り出しているなかを、慎重に登高を しい。一一時半ついに稜線に出ることができた。あと一息。稜 めなければならない。気温が低く、風は厳しい。稜線がギラギ ープをたどる。昼までに稜線に立てなかったら、登頂をあきら 六月二五日。午前六時、CⅡを出発。宮崎、岡島が先行。太

> 本どこまでも続く。帰幕七時、 ける。広大な雪原に夕闇がしのび寄り、その中をトレースが

六月二六日。CI、CI撤収。最後の山の夜を迎え、 皆それ

ぞれ物想いにふけっていた。 六月二七日。ボリビア山岳会から指し向けられた車でラパス

に帰る。

を続けたもの、等に分れた。一九六六年三月二八日、最後の隊 行ったもの、コルディエラ・ブランカを通りアラスカまで山旅 を仮解散し、アマゾンを単身下っていったもの、北アメリカに 以上で我々の山行は全て終了した。七月二日、ラパスにて隊

員が帰国し、全旅程が終了した。 浅野アンデス探査隊概要

(1)目的 (3)経費 (2)期間 南米アポロバンバ山群・レアル山群の探査及び登山 約三二〇万円 一九六五年三月二日から七月二日まで

(4)編成人員

牧口順一 (27) 寿リコー勤務。立大山岳部OB 東芝工事勤務。立大山岳部OB

- 城台成和 太田光成 (21)葉山マリーナ勤務 神奈川大学在学。神奈川大学山岳部員
- (21)青山学院大学在学

岡島成行

(21)

上智大学在学。上智大学山岳部員

由があると思った。すべての生きものが、海を母胎に生を受け

ティエラ・デル・フェゴの山旅 (一九六六年)

体、精神の初源の構造が形成された時期に、また海と陸とのす

た時、全地球に大変動の嵐が吹き荒れていたように、

人間の肉

の経過の後、この私と自然の間に共通の感情を呼びさましたも さまじい闘いが行なわれていたに相違ない。その因果が永い時

間

安 荘 どのくらいの時間がたったろうか。明るい日ざしがさし込ん

のであろうか。

せる唯一の徴しであった。 れた河床と円錐台状の小火山が、わずかに地形に起伏をつけて 峰、そして湿気の多い空気、それが浅いまどろみの後に一転し ならなかった。濃い緑の森、 の届く限り一直線にのびる細い一本の線が、人間の営みを思わ いるが、丁度それは月の表面を想像させる光景であった。視野 て、褐色の灰色の乾いた荒野が果てしなく東の方に拡がり、涸 居ることを、自分に納得させるのに、長い時間をかけなければ ここで私は、これまで見てきた世界と全く異なる世界の上に 群青の海、 純白の氷、

称を、強烈に脳裏に焼きつけられた。 アンデス山脈を境とした西と東の気候、景観、風土の著しい対 の希望を与えるものではなかった。ここで私は、パタゴニアの れは荒野の無毛さ、厳しさを強調こそすれ、決して人間に生存 原に消えて行く川、台地玄武岩の崖等が時折り現われるが、そ エメラルド色に澱んだ小湖水、白い乾上った塩湖、荒れた平

入り組んだ深い入江と、濃い緑に覆われた谷と、白い懸垂氷

近付き難さとは別の何か近しさを感じた。 倒の所産であった。しかし、ここパタゴニアでは、ヒマラヤの たが、それは青年時代以後に形づくられたアルピニズムへの傾 た。ヒマラヤの白き神々の座は、私達の長い願望の的ではあっ ラヤで受けたそれとは、質的に異なったもののように思われ の私の神経には、誠に強い衝撃であった。それは、かつてヒマ 後で、北パタゴニアの立体的な変化に富んだ景観は、夢遊状態 りに誘った。常にうたたねをしているような単調な長い船旅の て濃い霧の中に没すると、興奮からの解放が一時に私を深い眠 河のかかる岩峰のパノラマが、次第にその視野をせばめ、やが これは海の存在に理

チナ湖を見ながら、アルゼンチン領から再びチリに入ると、川 飛行機はやがて右手にオヒギンス湖、ヴェドマ湖、アルヘン

添いに少しずつ緑色が目につくようになった。パタゴニア大陸

氷地帯は厚い雲に覆われ、その片鱗もみることは出来ない。 三十分ほどで、白く輝く海が視界に入ってきた。マゼラン海

ているのである。海峡の向こう側には、手前から徐々に高まっ が西から東へ走っている。波頭が強い風に吹き飛ばされて散っ 峡である。高度を下げた飛行機から見ると、海面に無数のすじ て先は厚い雲に消えているティエラ・デル・フェゴー―火の国

ーがあった。

というのに、肌を刺すような冷たい風が吹きまくり、窪みに牛 間は、鋪装された道路が海岸沿いに走っている。附近の荒凉と した様は、北部北海道の寒漁村を思わせるものがあった。真夏 空港からプンタ・アレナスまでの間、 約二十キロメートルの

えた小潅木は、根元からねじ曲って地面にはいつくばり、小石

坊主のように頑なにむらを作っていた 六万余の街で、パナマ運河完成以前には、世界周航航路上の重 の露出した地面には、家畜も食わない棘ばかりの植物が、谷地 プンタ・アレナスは、マゼラン海峡の大陸側にひらけた人口

の産出と、ティエラ・デル・フェゴに於ける石油の発見が、再 の拡大から永らく取り残されていた。しかし、近年良質な羊毛 要な位置を占めていたが、運河完成以後、世界的な経済、通商

> ライスト・チャーチと共に、南極探検の重要な補給基地となっ びプンタ・アレナスをよみがえらせた。またケープタウン、ク

ている。

査を行なら計画である。 再梱包を始めた。私達はここを根拠地に、いくつかの探検と調 翌一月七日、私達は食糧その他の必要物資の調達と、 隊員は九名で二つの班を構成した。 0

Ę 達 植物班長

隊

副隊長 H 富 地質班長 カメラマン

本 E 禎 ドクター

装備

村 涉外、 地質

賀 尚 庶務、 植物 植物

略次のように変更した。 脈の縦走を主体とするものであったが、現地に来て情勢を検討 したところ、種々の点で計画遂行上の難点が判明したため、 当初私達の計画は、 ティ エラ・デル・フェゴのダーウィン山 大

チロエ島附近の植物調査。 域、プンタ・アレナス周辺、パイネ山塊及びセラーノ河流域 植物班はナバリーノ島、ティエラ・デル・フェゴ北部平原地

地質登山班は、ナバロ山塊、サルミエント峰地域ならびにパ

イネ山塊、 グレイ氷河地域の探検、 登山、地質調查

配分し、梱包した。 私達は、 隊の構成、 行動予定にしたがって、食糧、 装備を再

った。 が欠如したため、食事が単調なものとなったのは致しかたなか ほぼ全部そろえることが出来た。 豊富で安い。食糧品は全部現地で調達したが、 プンタ・アレナスは自由港地域であるため、 しかし、日本製調味料と野菜 野菜類を除いて いろいろな物が

夕方九時頃、

まだ日没前の街に散歩に出ると、この南の果て

アレナスの海軍司令部との交渉が、 辻井隊長と西村が合流し、準備は大詰めに近づいた。 をみて、 の街には、 ヨレズボンにキルティング・コート、それにゴム長姿の私達 一月九日、 一様に日本の漁師かと聞かれるのには閉口した。 日本人は珍らしいのか時折り話しかけられるが、 サンチャゴでチリ国防省との交渉にあたっていた 最後の難関である。 9. 3

マ ゼ ラ 海 峡

一月十三日、 接岸中のコロコロ号に来船されたい」という指示を受取 昨日朝、 海軍司令部の副官から「明十三日午前

その日の午後ナバリーノ島へ出発する辻井隊長他三名を見送 皆で揃って人間の見おさめに街に出かけた。 佐伯副隊

> 長に惚れていると言うマダムの居るスナックバーに 私達がその余禄に与ったことは言うまでもない。 も顔を出

された。それがコロコロ号であった。 乗れと言う。三十分程で、沖合に錨定中の四本マストの帆船の 隻待っていて、コロコロ号は沖に仮泊しているので、 場に繰り込んだ。 氏のカミオネッタ(小型トラック)に私達の荷物を満載し、 側につながれている、六〇〇トンあまりのタグボートに横着 九時三十分、 私達はここで知り会ったイワン・ボビリエ 波止場にはアメリカ製の古い上陸用舟艇が この舟に 波止 1 ル

偉大な酋長の名前であることなどを語ってくれた。 ンの侵入者に対し最後まで頑強に抵抗を続けた、アラウコ族の は、私達に二人の士官を紹介し、更にこの船は彼よりも年上で、 五人は、 一九三一年製のオンボロ艦であること、 私達の荷物を積み終ると、 船長から昼食に士官のサロンに招かれ コロコロ号はすぐ出発した。 コロコロとは、 た。 そこで彼 スペイ

く、空には一点の雲もない。寒々として、いつも曇って冷たい風 今日は又何と静かな晴朗とした天気であろう。 破船の残骸が、 んびり楽しんだ。船はマゼラン海峡を真直ぐに南下しつつあっ た荷物の上に横たえ、冷たい風にあてながらあたりの景色をの 食後に振舞われた酒に火照った体を、後部甲板に山 海峡の西側の岸辺には、 往時の困難な航海をしのばせていた。 竜骨や肋材を海中からつき出した さざ波すらな しかし、 (267)

めてだと言っていた。 船長は、この二年程この地域の航海をしたが、こんな天気は始めてだと言っていた。

やがて船の正面に、二つのピークを持った真白な角錐台形の ルミエント峰(二三〇〇メートル)に相違なかった。イギリスの 海賊フランシス・ドレークの襲撃に対すべく、マゼラン海峡を 海賊フランシス・ドレークの襲撃に対すべく、マゼラン海峡を あから東へ初めて通過したペドロ・サルミエントを記念して、 名づけられた山である。

船はマゼラン海峡の西への屈曲点を過ぎ、マグダレーナ水道 に入った。左手のドウソン島は、黄緑色の小さな潅木と草に覆 ートル近い高まりを見せ、上部は小さな氷河で武装されている のが望見された。正面のサルミエント峰北面の氷河も間近に迫 った。日没直前にコロコロ号は左に折れ、キーツ・フィヨルド った。同没直前にコロコロ号は左に折れ、キーツ・フィヨルド に入った。両岸には氷に削られた急な崖が迫り、上部にかかる 懸垂氷河が、真青な氷の断面をのぞかせながらフィヨルドに落 ちかかっていた。

海軍士官学校で詳しく学んだものであろう。個々の艦の位置、後派の私達にとって、海戦の内容など知る由もないが、彼等はかの日本海海戦やミッドウェー海戦の作戦論であった。勿論戦がの日本海海戦やミッドウェー海戦の作戦論であった。初論戦

なく、強大になりすぎたアメリカへの、若干の快くない感情もからず同情的であるのは、私達に対する心遣いと言うばかりで洋戦争ではチリは連合国側についているが、彼等が日本に少な洋戦のではチリは連合国側についているのには驚いた。太平行動、戦闘能力など、実に良く知っているのには驚いた。太平

手伝っているように思われた。

の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音た。密林の背後には白い氷河の舌端がのぞき、時折り鈍い氷河た。密林の背後には白い氷河の舌端がのぞき、時折り鈍い氷河た。密林の背後には白い氷河の舌端がのぞき、時折り鈍い氷河に。密林の背後には白い氷河の舌端がのぞき、時折り鈍い氷河に、密林の背後には白い氷河の角落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音の崩落音が、あたりの静けさを破った。水面を走る水鳥の羽音

上陸は明午前三時、甲板に寝袋をひろげて眠る。

が止むと、かすかにそよぐ西風が、潮と氷の臭を運んで来た。

南十字星は天頂に達し、澄んだ空にまばゆいばかりにまたたい

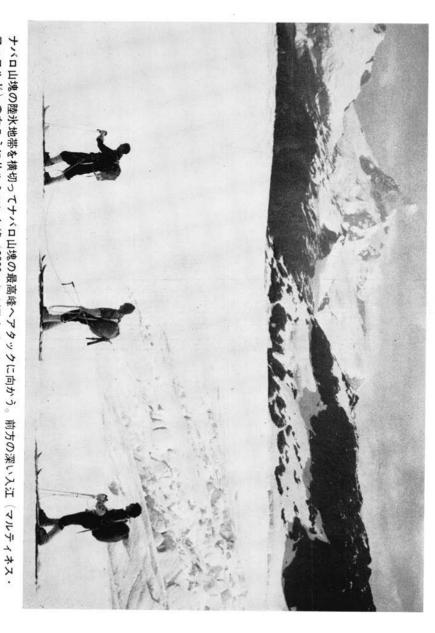
ている。

ペースキャンプ

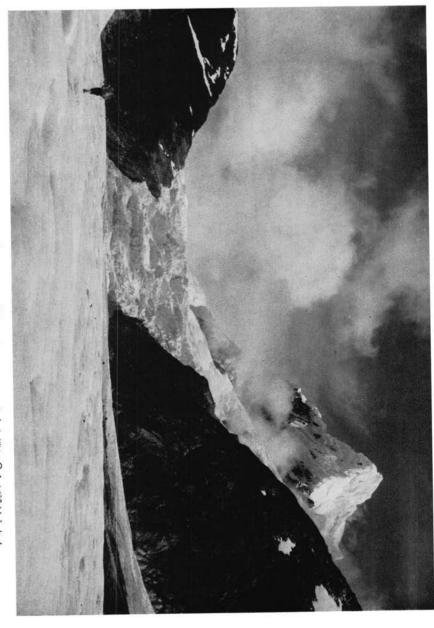
手早く荷物を片付け、後部甲板に山と積まれた私達の装備品立働く姿をおぼろげに浮かばせていた。 か、水兵達のは失せ、真暗な夜空に変っていた。淡い電燈の光が、水兵達の は失せ、真暗な夜空に変っていた。淡い電燈の光が、水兵達の

をカッターに移した。船長にお礼と別れの挨拶をし、

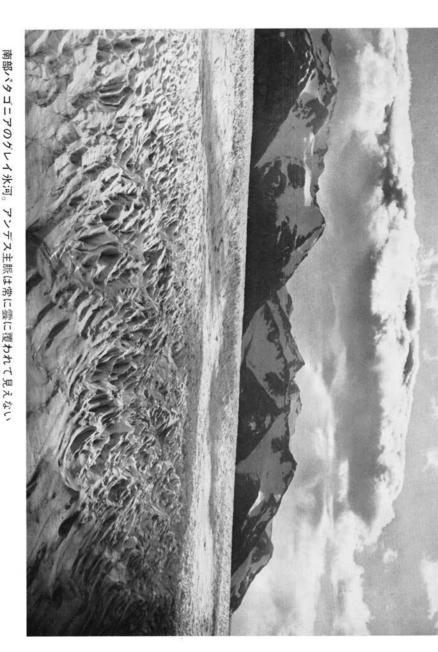
中尉の指



Fjord in the foreground. continental ice area. Mt. Sarmiento (2300m) soaring on the opposite side of the Martinez Approaching to the highest peak of Cordon Navarro massif (unnamed, 2000m) traversing the フィヨルド)の向こうにサルミエント峰 (2300m) が聳えている (By T. Saeki)



ブランコ氷河からサルミエント峰(2300m)を望む、前方アイスフォールの左上端にC1が設けられた。 Mt. Sarmiento (2800m) seen from the Blanco glacier. The Base camp was set on the left top of the icefall in center. By T. Saeki



of sight owing to being covered by clouds. The Gray glacier in the Southern Patagonia. The main range of the Andes are usually out By T. Saeki

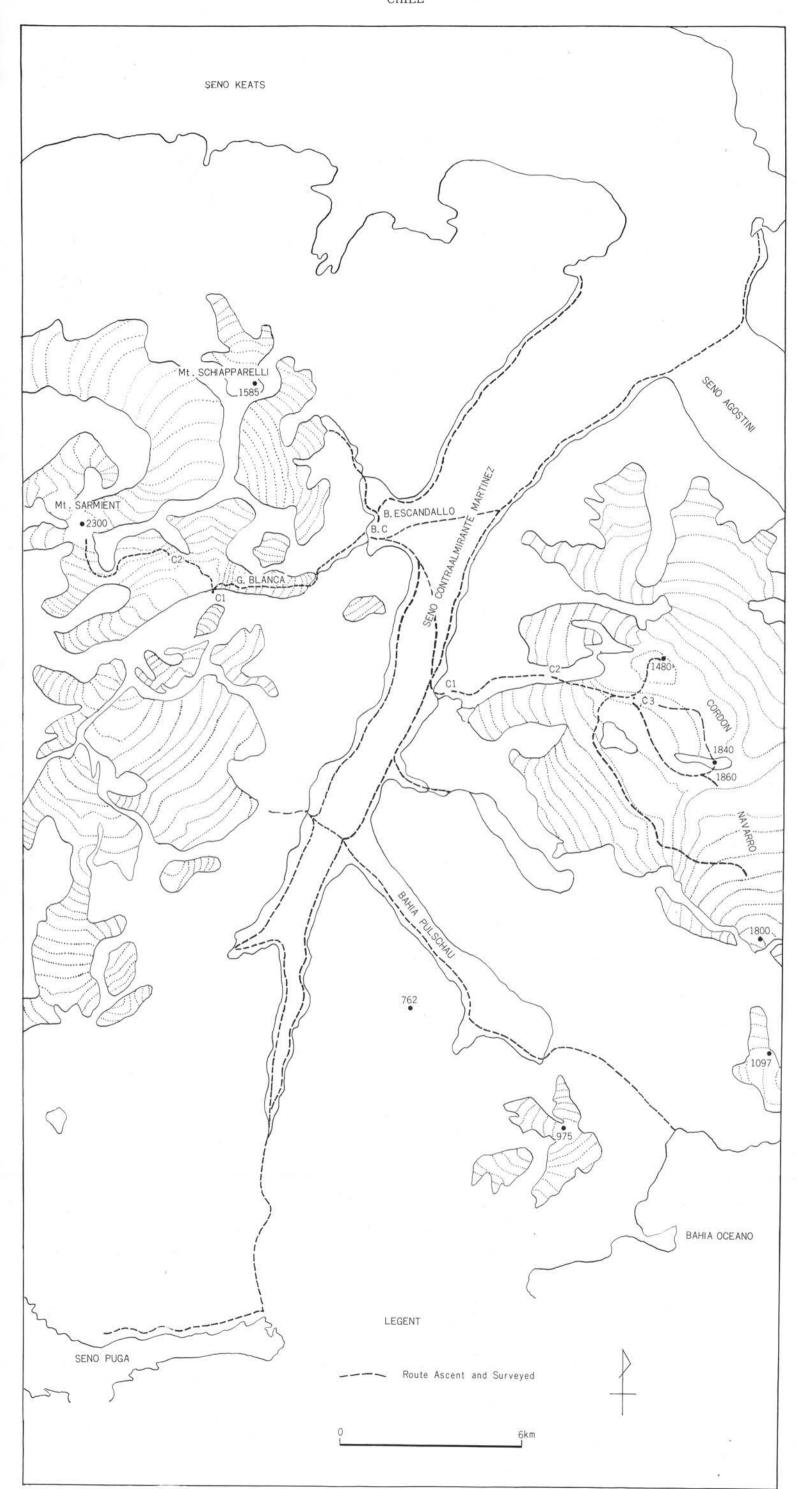


エスカンダジョ湾のベース・キャンプ。密林のせまる砂浜のへりにある。アメリカ隊の訪問をうけナバロ山塊の情報の交換をする

The Base camp on a sandy coast with thick forests in the Escandallo Bay.

(By T. Saeki)

CHILE





ようになった時、 は、カッターをコロコロ号から一番近い岸に向 しむ音が、 揮するカッターに乗り込んだ。水を叩くオールの音と支点のき 空がわずかに白んで、岸辺の様子をうかがうことが出来る 波ひとつ立たぬ静かな海面を伝わっていった。 私達は当惑してしまった。 けて舵をとっ 中尉

崖錐 れ 岸についた。 構えを見せていた。 平らな土地もなかった。その上、 ことは、 た急斜面の密林になっており、 L 手の平らな海岸にカッターを着けるよう、中尉に交渉させた。 不安定になった氷塊がせり出し、私達を一気に打砕こうとする た急な斜面が、五百メートル程も続いていた。氷河の端には、 なかった。そうこうするうちに、カッターは岩塊の散乱する かし中尉の返事は、 そこは高さ数百メートルの岩壁の末端で、わずかに堆積した の斜面が急角度で海に落込んでおり、幅十センチの砂浜や 不可能であった。 岸は水際から三メートル程の所から、苔の密生し 私達はあわてて渉外係の西村に、ずっと右 帰船時間を急いでいたためか、至ってつ ナタで切開くことなしに立入る 岩壁の上には厚い氷に覆われ

六時頃、

何とも佗しい気持で煙草に火をつけ一 れを積み上げた。 私達はカッターから荷物を下ろし、 カッターはすぐに母船に引き返した。 一服した。 僅かな潮間帯の斜面 私達は にそ

かに湾を出て行った。今や私達は、脱出不可能な地に置去りに やがてコロ コロ号は錨を上げ、 別れの汽笛を一つ鳴らすと静

> り消沈してしまった。 テントの中で、震えながら乾パンをかじったが、意気はすっか 冷たい雨に打たれ、 密林の上からは大きなしずくが容赦なく降りかかった。 い。この仕事の途中、 あれ密林を切開いて、荷物を斜面の上に移さなけれ されて、終身流刑者のような悲哀を感じながら船を見送っ 知らぬ間に潮が満ち、一番下の荷物を洗っていた。何はとも 荷物を移し終えた時には、微細な雨滴があたりに立ちこめ 歯の根も合わない有様だった。仮に張った 何の前触れもなく急に強い雨が降り始め ばならな 私達は

うだ、 くれ、 根の上に、二人の姿が見えた。 て来た。私も同乗して佐伯と遠藤を迎えに行くと、途中でゴム 頃、湾奥に流れ込む川を遡って探索した橋本と西村が引き返し で、ベースキャンプ地として不適当という連絡が入った。 営地を探すため、橋本と西村はゴムボートとエンジンを組立て、 砂浜が開けて、ベースキャンプ地として良さそうな所がありそ ボートが乗捨ててあり、 湾の北側へ踏査に出かけた。佐伯と遠藤は、もう一隻のゴムボ トを漕いで湾の南側に向かい、私は荷上げ地で待機した。 湾の北側に行った橋本から、 と連絡して来た。 ゴムボートを曳航して岬を廻り、 雨が止んで少し明るくなった。ベースキャンプの設 前方の小さな岬を作っている小高い尾 トランシーバーで、 湾奥の平坦地 南側の海岸で落合って はひどい沼沢地 岬の南側に

佐伯と遠藤は、海岸の中央北寄りの浜から一メートル程上がった所で、古いキャンプ跡を見つけた。太い木を 円錐状に 寄った所で、古いキャンプ跡を見つけた。太い木を 円錐状に 寄歴然として残っていた。私達は、二度にわたってサルミエント歴然として残っていた。私達は、二度にわたってサルミエント壁がのものであることにすぐ気づいた。かたわらには小川もあア隊のものであることにすぐ気づいた。かたわらには小川もあア隊のものであることにすぐ気づいた。かたわらには小川もあア隊のものであることにすぐ気づいた。かたわらには小川もあア隊のものであることにすぐ気づいた。

二人は荷物の運搬、三人は設営と分担して仕事を始めた。海門し、アゴスティニ師達の小屋を補強し、別に新しい物置を造倒し、アゴスティニ師達の小屋を補強し、別に新しい物置を造った。立枯れている大木を切り倒し数日分の薪も作った。空はすっかり晴れ上り、暖かい日ざしが木陰から漏れて、ほでかなぬくもりを与えていた。今朝の雨で濡れた衣類を砂浜でのかなぬくもりを与えていた。今朝の雨で濡れた衣類を砂浜でのかなぬくもりを与えていた。今朝の雨で濡れた衣類を砂浜での大のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの先のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの先のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの先のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの先のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの先のアゴスティニ・フィョルドの背後には、海面から直立しの進いが、

とばかりであった。シプトンの『暴風雨圏の国』の中でも、パル、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、嵐、吹雪、そしてテントに閉込められたみじめな日々のこれ、温、吹雪、そしてデントに閉込められたみじめな日々のことが、私に響戒の心を起させた。

大陸氷地帯へのルートを偵察することにした。その日の午後、私達はこの好天候を逃さずに、ナバロ山塊の

タゴニア・アンデスを世界で最も悪天侯の地域であると断じて

いる。

佐伯、橋本と私は、予備の燃料を充分積んでフィョルドに乗出した。エスカンダジョ湾から出るとやや波が出て来たが、危出した。エスカンダジョ湾から出るとやや波が出て来たが、危険という程のものではなかった。幅四キロメートル程のマルテってボートを進めた。無数の海鳥が波に浮かび、又私達の上をってボートを進めた。無数の海鳥が波に浮かび、又私達の上をに出てくる「競走馬」と呼ばれる海面を足と羽で 走り 飛ぶ鴨に出てくる「競走馬」と呼ばれる海面を足と羽で 走り 飛ぶ鴨

い森林に覆われた段丘が現われた。この段丘の背後には大きな一時間程でフィヨルドの東岸に、海面から二十メートル程高

た二千メートル近い岩峰が屹立している。

時折り氷塊も含んでいた。段丘を切って流れ出る川は白く濁り、

け、 群のように連らなっている台地の上に出た。そこから振り返っ 滝の落ち口のすぐ左手に、 番奥に、やや大きな川が滝になって海に落ち込んでいた。その やや奥深い支峡が現われてきた。 シカが海面に身を踊らせながら、ボートと競走を始めた。 の茂みを突切ると、氷河に浸蝕され滑らかに磨かれた岩が、羊 した。岸は急で船を着けることも出来そうになかった。湾の一 も人を恐れない。更に一時間程進むと、左手に岩壁に囲まれた 私達はフィョルドの東の岸沿いにボートを進めた。 私達はそこに船を引上げた。 私は一瞬、息をのんだ。 僅かな砂利の堆積した窪みをみつ それから崖をよじ登り、潅木 私達はこの湾奥を探ることに 数頭 少し のア

青い深い支峡とフィョルドをはさんで、その対岸には深い緑の谷間と、灰色の岩壁と、真白な氷河が視野一杯に拡がり、右の谷間と、灰色の岩壁と、真白な氷河が視野一杯に拡がり、右の谷間と、灰色の岩壁と、真白な氷河が視野一杯に拡がり、右の谷間とが変され突立っていた。サルミエント峰である。霧の氷の稜で武装され突立っていた。サルミエント峰である。霧の水の稜で武装されたのであるが開かれた時なのだ。その端正な姿を写す時、それは神々の宝石箱が開かれた時なのだ。その端正な姿を写す時、それは神々の宝石箱が開かれた時なのだ。その対岸には深い緑の谷間とが立ていた。

羊群岩の小丘を次々と駈け登って行くと、川が深くえぐれて を思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンと思われた。二十時、待ちくたびれた二人のいるベースキャンを開発して行うという。

ナバロ山塊

プに帰った。

一月十五日、晴れたり曇ったりしたが、穏やかな一日であった。午前中、上陸地に残った荷物を運び、ベースキャンプの整た。午前中、上陸地に残った荷物を運び、ベースキャンプの整た。遠藤と橋本は、ベースキャンプの背後の谷を遡って、サルミエントへの氷河のルートを偵察に出掛けた。サルミエント峰の足下から流れるブランコ氷河まで、湿地や草地の疎林が続いており、ルートは特に困難ではないとのことであった。 ており、ルートは特に困難ではないとのことであった。

に重宝な副食であった。アシカが数匹海岸に現われ、不審な闖汁をかけるもよし、火で焼いてもよし、ゆでて食うもよし、誠た。海岸で多量の貝を採取し三食のおかずにした。生でレモンー月十六・十七日は雨と激しい風雨で停滞を余儀なくされ

入者を鼻息荒く伺っていた。

一月十八日、八時、ボート二隻を横につないで、その上にスキーを敷き荷物を積んで出発した。小雨が降っていたが風もなく、穏やかな海面であった。九時半、昨日のデポに到着、テラスの上に荷物を運んで第一キャンプ地を作ることにした。遠藤と私はすぐに第二キャンプ地の偵察に出掛けた。森林テラスから斜面に出るとすぐ岩が露出し、ところどころに湿地のある草付きとなった。私達は湿地が多いということを考えて、日本からゴム長靴を持って来たが、非常な効果を発揮した。

て側堆石の丘陵が三列ほど氷河に沿って現われて来た。湖が、緑の密林に囲まれているのが見えた。更に登ると、やがらは、緑地が多量に浮いた氷河を放って現地の丘陵が三列ほど氷河に沿って現われて来た。

め帰途についた。間もなく激しい暴風雨となり、しばらくするうだった。私達は、この地点を第二キャンプ(C2)地点と決り、クレバスも少なく、大きな困難もなく氷河の内院に行けそり、クレバスも少なく、大きな困難もなく氷河の内院に行けそり、のが、私達は、この地点を第二十二十分、側堆石の末端に達した。そこからは氷河に容

とみぞれに変った。

海岸を歩いて食糧を採取する。着したが、激しい雨となったので、再度の荷上げを中止する。一月十九日、全員でC2へ荷上げし、十二時三十分C1に帰

メートル以上は常に曇って見えない。雨が雪になっているため一月二十日、雲低く雨を伴った強風が吹く。標高六~七〇〇

一月二十一日、午前中は雨が強い。午後、雨の止んだ時を見

と思われる。

計らってC2まで荷上げするが、途中で再び雨となりズブぬれ

となる。

2の標高は六八○メートルである。 一月二十二日、晴れ間が見えたので出発するが、再び雨となる。C

上段のプラトーに達した。夕方から再び雪とみぞれになる。 地点の偵察に出掛けた。側堆石の丘を下り氷河に入ると、無数 地点の偵察に出掛けた。側堆石の丘を下り氷河に入ると、無数 地点の偵察に出掛けた。側堆石の丘を下り氷河に入ると、無数 地点の偵察に出掛けた。側堆石の丘を下り氷河に入ると、無数

一月二十五日、雨の止むのを待って十時出発。下段のプラト、びしょぬれとなる。

一月二十四日、強い風雨雪で停滞。テントの中のものすべて

が、

え、アンザイレンした状態で下降を始めた。釘で打付けてある

した。C3は標高九四○メートルである。 分最奥のカール底にC3を建設する。西村と私はC2へ引き返った。C3は標高九四○メートルである。 のところでスキーをつけた。偵察のルートを通り十三時三十

十二日ぶりに太陽を見る。

きたので、私達はすぐ頂上を後にした。シーデポでスキーに換 峰を望むことが出来た。バックランド峰である。霧がかかって はっきり見えた。その先には、最上部を雲に覆われた岩の尖 るアゴスティニ・フィョルドが黒く光り、氷河の末端から大小 た 無数の氷塊が、フィョルドの口の方へと掃き流されているのが い急な崖で切れ込んでいるのが見えた。北側には、東西に延び ーをアイゼンに換えた。十七時三十分には困難もなく頂に立っ たが、私達は、右手のドーム状のピークに登ることにし、 部に達した。鞍部の両側にはほぼ同じ高さのピークが並んでい を繰返し、少しずつ高度を上げて、二時間余で私達は稜線の鞍 すぐ北側にそびえる一四八〇メートル峰に登頂することにし 近かった。少ない好天のチャンスを逃さぬため、二人はC3の た。急な雪と氷の斜面を、クレバスを避けながらキックターン 西村と私がC2から荷物を持って、C3に着いたのは十五時 南東の方向にはマルティネス・フィョルドの最奥部が、深 視界が悪くなって、高い山々を見ることは出来なかった スキ

三十分程でC3に帰着した。

○メートル級の山に登頂すべく出発した。佐伯は途中まで同行し、いくつかの写真をものにした。正面の最低鞍部から、右手に広い尾根をスキーで登り、岩塔の並んだ尾根のつけ根でアイだいに換え、十二時三十分頂上に達した。頂上の標高は一八四でメートルであった。彼等はここで、付近にあるはずの大きな山を探したが、一九○○メートル内外の三つのピークの他、何も見ることは出来なかった。

ピークは存在しないのだ。ピークは存在しないのだ。しかし現実には、そのようなピークがあることになっている。しかし現実には、そのような空地図にも、このナバロ山塊に明らかに二三○○メートル級の空地図にも、このナバロ山塊に明らかに二三○○メートル級の

頂から南に尾根が続き、そこに一つのピークがあり、そこから尾根は南東に折れ、その先にもう一つのピークがあった。尾根はそこから北東に延び、その先にこの山塊の一番高い一九○○メートル内外のピークがあった。 この夜、当面の目標とした二三○○メートル峰が無いと解った今、何を目標にすべきかを検討した。その結果、この山塊の最高峰である一番奥のピークがあった。

で稜線直下まで達し、十七時目的のピークに登頂した。標高はのルートを探すべくC3に引き返した。橋本と西村は、昨日登のルートを探すべくC3に引き返した。橋本と西村は、昨日登中のピークに向かったが、無数に走るクレバスに阻まれた。別東のピークに向かったが、無数に走るクレバスに阻まれた。別東のピークに向かったが、無数に走るクレバスに阻まれた。別

一八六〇メートルであった。

た。

そうだった。この日一日どんよりしていたが、静かな日であった。アイスフォール地帯のトラバースの外、大きな問題はなさは。産し、そこから主稜線まで及び主稜線上の 登路を 確認 しぬに でいた。 十七時、プラトーの南の一を横切って登路の偵察を行なった。十七時、プラトーの南の

が、雪穴の中はローソクの火もゆるがない。寒い一夜であっ入っているだけで安心であった。外はごうごうと吹雪いているかぶって一夜を過すのは、決して楽なことではないが、雪穴にを横たえることの出来る雪穴が出来上った。薄い布切れ一枚を

って外へ出るが、視界が殆んど利かない。十五時、シーデポ。られない。入口が雪で埋まる。一日寝たり坐ったりで過ごす。 着ているものが濡れて寒い。 一月三十日、昨日に引続き暴風雪、外に出られず待つ。アター月三十日、昨日に引続き暴風雪、外に出られず待つ。アターのを断念し、撤退することにする。十四時、風の切れ間を待って外へ出るが、視界が殆んど利かない。十五時、シーデポ。

にあたる。夕方再び雨が強くなる。一気にC1まで下り、焚火ったため、C2までスキーで下る。一気にC1まで下り、焚火ったため、C2までスキーで下る。一気にC1まで下り、焚火

す。

スキーをつけて下るが激しいみぞれとなる。十七時三十分C3

へ帰着。テントに乾いた衣類もなく、全身ずぶ濡れで夜を明か

一隻、岸辺の近くに停泊し、数人の人影が見えた。私達は、驚に向かって出発した。ベースキャンプに近付くと小さな汽船がた場がである。というでは、エスカンダジョ湾のベースキャンプーを開き、日のでは、大工時、個

きと訝しさと人に逢える嬉しさで、妙な気持だった。

方、船にのって帰って行った。彼等の話では、一月初めに、私 D. と酒とガソリンの補給を引受けてくれた。 達が初登頂した三つのピークのうち、一八四○メートル峰に登 ーターした船に、便乗させてもらっているのだった。彼等は夕 リア隊が来ていると教えてくれた。彼等は、イタリア隊のチャ フィヨルドから登ったが、求める山がなく、アゴスティニ・フ っているようであった。帰りに、私達に不足している野菜と肉 で、数日間私達の帰るのを待っていたのだった。そして彼等 ヨルドの最奥からダーウィン連峰の「五月峰」付近の山を登 それはジャック・ミラー氏を隊長とする四人のアメリ 又ベースキャンプの正面に見えるバックランド峰に、 帰りに吹雪で道を失い、餓死寸前に海にたどり着いたとい ナバロ山塊の二三〇〇メートル峰を求めてアゴスティニ・ イタ 力隊

物の撤収に行く。 し、久し振りに休養する。十時、橋本と西村はC1に残った荷し、久し振りに休養する。十時、橋本と西村はC1に残った荷二月二日、小雨と雪がパラつく。焚火で濡れ たもの を乾か

間、西村)の荷分けを行なう。

「月三日、雨が降ったり止んだりの一日であった。午後、サニ月三日、雨が降ったり止んだりの一日であった。午後、サニ

貝ばかり食べている。二月四日、雨、西の風が強く、木の枝が折れて飛ぶ。三食共、

サルミエント峰

設営を行ない、佐伯、西村と私の三人が、ベースキャンプに戻り抜け、十一時ブランコ氷河の末端に達した。ここでアイゼン に換え、氷河の中央に進んだ。右手の氷河から大きな氷河なだ れが落ちて来たが、遠く離れていたので何事もなかった。 十二時頃から天気が好転し、青空が見え、サルミエント峰の 十二時頃から天気が好転し、青空が見え、サルミエント峰の 中気にC1を前方のアイスフォールの上方に作るべく、予定 を変更し、橋本と遠藤はアイスフォールのルート工作とC1の を変更し、橋本と遠藤はアイスフォールのルート工作とC1の

戻った。 戻った。 戻った。 戻った。 戻った。 戻った。 戻った。 戻った。 に遠したのは、十九時をまわっていた。佐伯はの設営したC1に遠したのは、十九時をまわっていた。佐伯は不安定なアイスフォール地帯を登り切って、先に遠藤と橋本

って、装備、食糧をC1まで運び上げることにした。

調査を行なう。C1は、サルミエント峰の南東方にある氷河い地吹雪である。夕方少し雪が止んだので、C1付近の岩石のい地吹雪である。夕方少し雪が止んだので、C1付近ではひどしていた。下では小雨がパラつく程度でも、C1付近ではひどしていた。下では小雨がパラつく程度でも、C1に着いたが三人は停滞一月六日、西村と私はC1へ荷上げを行ない、登山班のサポートをする。

アゴスティニ師等のキャンプ跡が残っていた。と、ブランコ氷河の分岐点の南岸にあり、直ぐ上の岩棚には、

二月七日、地吹雪がひどいが、C 2 地点に向かって氷河を横断し、サルミエント峰の南東稜の下部にとりついた。標高八○
むなく氷崖の下にテントを張りC 2 とする。西村と私は、ここでサポートの任務を終わり、十四時十五分ベースキャンプに向かった。途中アイスフォールでクレバスにかかる氷塊が崩れ、私はクレバスに転落した。幸い下部になるほど幅が狭くなって私はクレバスに転落した。幸い下部になるほど幅が狭くなっており、五メートル程落ちて、胸部打撲だけで済んだ。二十時、やっとの思いでベースキャンプにたどりついた。

二月八日、曇、雪。この日 佐伯、遠藤、橋本は、C2からサルミエント峰南面のアイスフォール地帯を横切って、サルミエント峰の東のピークから南に派生する尾根にとりつき、試登を行なった。尾根は急で氷なだれの危険が大きく、尾根の上部の岩は、もろい霧氷に覆われ登攀を困難にした。標高一八〇〇メートルの地点で、天候の悪化によりそれ以上の登行を断念した。それより上は、完全にもろい氷に覆われた壁となっていた。それより上は、完全にもろい氷に覆われた壁となっていた。このルートはアゴスティニのルートと考えられる。くサルミエント峰への唯一のルートと考えられる。

なった。翌日は風雪で、当面天候回復の見込みもなかったのその夜の湿雪で、またテントの中のものが全部びしょ濡れに

ルミエント峰の一部が望見出来る程に天気が回復した。になった。皮肉なことに、次の三日間、時折り青空が見え、サで、一旦ベースキャンプに帰り、再度のアタックを期すること

一気にアタックする予定であった。 登り、C1に入った。サルミエント峰の南東稜にC2を設け、 では、近に、では、遠藤、橋本の三人は再びブランコ氷河を

翌二月十三日から再び暴風雪となった。十四日、十五日、十 翌二月十三日から再び暴風雪となった。十四日、十五日、十 翌二月十三日から再び暴風雪となった。十四日、十五日、十 翌二月十三日から再び暴風雪となった。十四日、十五日、十 である。十八日十時、三人はC1を撤収することになっており、撤収は十九日中に終わらなければならない。したがって、明日天気が回復しても、アタックは不 である。十八日十時、三人はC1を撤収することになった。何とも心の重い撤収であった。はるばる地球の裏側から、 でしょ濡れになって、寝に来たようなものであった。

フィヨルドの旅

とにした。
とにした。
とにした。

二月八日、午前中器材の点検整備を行ない、十五時ベースキ

であった。彼等は二月六日に、激しい風をついてバックランドと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がと、発動機の音が聞こえ、先にアメリカ隊が乗って来た漁船がといる。

峰の登頂に成切したという。

ンプした。

何とか話は通じた。

「何とか話は通じた。

「のとか話は通じた。

「のとか話は通じた。

「のとか話は通じた。

「のとか話は通じた。

「のとか話は通じた。

ナスに引上げるという。再会を約して別れた。 彼等はこれからベースキャンプの荷物を撤収し、プンタ・アレ れから酒びんの間に隠れたドブネズミまで運んで来てくれた。 で来てくれた。

かに弯曲した砂浜、海辺一杯にせり出した密林などが、海岸線水ス・フィョルドの最奥部に達した。この間は急な崖やゆるやネス・フィョルドの西岸の調査をしながら南に進み、十一日夕方、マルティニ月九日、十日、十一日の三日間は、マルティネス・フィョ

をかたち造っていた。

ャンプを出発し、エスカンダジョ湾南岸の調査を行なっている

何の困難もなく、プーガ・フィョルドの端に遠し、そこにキャ標高一二〇メートルばかりの小さな峠に遠した。十七時私達はフィョルドまで踏査することにした。五日分の食糧とテントを私達はここから低い峠を越し、太平洋側に出口を開くプーガ・

二月十三日、激しい雨をついて、プーガ・フィョルドの北岸 に沿って西へ進んだ。この付近は、氷河が後退して間もないた め、氷蝕された滑らかな岩が一面に拡がり、どこと選ぶことも なく容易に歩くことが出来た。フィョルドの岸の上から、海を なく容易に歩くことが出来た。フィョルドの岸の上から、海を なく容易に歩くことが出来た。フィョルドの岸の上から、海を なく容易に歩くことが出来た。

二月十四日、朝から激しい雨が降る。夕方雨の間を見て、峠再びマルティネス・フィョルドに向かう。十三時、再びゴムボートに乗り、フィョルドの東岸を調査しながら北に向かい、プルショウ・フィョルドの大口まで達する。

としておだやかな入江で、白い砂浜がずっと南の方に、ゆるやかな峠を越え、十七時オセアノ湾に達した。名前のように広々湾奥に達する。ここから、徒歩で標高一六○メートルのゆるや湾のに達する。ここから、徒歩で標高

い砂浜に印した。 水に覆われたダーウィン山塊の下部が、霧の下にく もって い 水に覆われたダーウィン山塊の下部が、霧の下にく もって い

時、やっとキャンプを探しあてボートを浜に上げた。サーカにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンプの位置がわティネス・フィョルドを横切ったところでキャンプの位置がわティネス・フィョルドを横切ったところでキャンプの位置がわけるにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンジンのマーカーにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンジンのマーカーにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンジンのマーカーにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンジンのマーカーにボートにもどり、暗黒のフィョルドをエンジンのマーカーにボール

二月十七日、雨まじりの烈風が吹いていたが、調査を強行することにし、海辺の海藻密集帯をオールでこぎだした。エンジンの始動をこころみているうちに、ボートはたちまち四〇メートルほど風に流され、高さ二メートルほどの波が荒れ狂う、フィョルドの中央部に押し流されてしまった。私達は身の危険を感じ、直ちに岸にもどろうとしたが、ほとんど進むことがでを感じ、直ちに岸にもどろうとしたが、ほとんど進むことがでを感じ、前手に冷たい海水を頭からかぶった。そのうちに、吸入弁から塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必から塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必がら塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必から塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必から塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必から塩水を吸いこんだエンジンが止まってしまった。西村は必から塩水を吹いている間、私はボートに浸入する海水を、腕が痛くなるほどボウルでくみ出した。

を上げた。そして、これまでの自然の仕打に復讐するかのよう

に、大木を切り倒し、盛大なたき火をした。

岸についた時は、安心感と疲れでガックリしてしまった。風

では、 ででベースキャンプに帰着した。 足らずでベースキャンプに帰着した。 足らずでベースキャンプに帰着した。 足らずでベースキャンプに帰ることにし、装備 で標本を満載して岸をはなれた。追い風に助けられて、三時間 と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた と、大きな氷塊のいくつも浮かぶ、美しい小湖水が静かなたた

二月十八日、サルミエント班の撤収を支援するため、西村と 利はブランコ氷河に向かった。途中、地質調査をしながら、ブ 利達は無事の再会をよろこびあった。天候にたたられ散々の 私達は無事の再会をよろこびあった。天候にたたられ散々の は行であったが、無事帰還できたことだけでも、多とせねばな のところに着くと、氷河末端の広い川原を徒 がして下ってくる佐伯、遠藤、橋本の三人を見つけた。 がして下ってくる佐伯、遠藤、橋本の三人を見つけた。 がりた。

た。かすかな蒸気エンジンの音が、鏡のようなフィヨルドの海二月二十五日、いつも一番早起きの佐伯にたたき 起こ され

達が、私達を握手ぜめにした。
登想のいい中尉と陽気な水兵おろされ、岸にこぎ寄せられた。愛想のいい中尉と陽気な水兵おろされ、岸にこぎ寄せられた。愛想のいい中尉と陽気な水兵がのされ、岸にこぎ寄せられた。カッターが

私達を収容するとコロコロ号はすぐ出帆し、マグダレーナ水 私達を収容するとコロコロ号はすぐ出帆し、マグダレーナ水の戸壁に横づけされた。辻井隊長らと再会し無事を 喜 び あっの 戸壁に横づけされた。辻井隊長らと再会し無事を 喜 び あっの 戸壁に横づけされた。辻井隊長らと再会し無事を 喜 び あった。丁度日曜日で街は静かであったが、マゼラン週間の最終日た。丁度日曜日で街は静かであったが、マゼラン週間の最終日に見る美しい女性の水着姿に、私達が熱狂したのは言うまでもない。

追記

> 果を上げ得なかったことは、慙愧の至りである。この原因は、 根本的には極めて天候が悪かったことにあるが、それに対する 私達の準備や心がまえが、充分でなかったことも一因といえ る。装備はヒマラヤ型の装備を用意したため、雨・みぞれに対 して弱く、常に身体が濡れたままで乾くことがなく、精神的に かったこと、すなわち極めて少ない登頂チャンスを有利に生か かったこと、すなわち極めて少ない登頂チャンスを有利に生か すため、悪天候でも可能なかぎり行動し、最後のツメだけを残 し、アタック・チャンスを最終キャンプでねばり待つようにす ることが、必要である。そのために、耐水性のいろいろな装備 が必要なことはもちろんである。

山に入るべく、サンチャゴからプンタ・アレナスへ向かう途山に入るべく、サンチャゴニアを出の先達の言葉の重みをひしとと言う問に対し、「先ず天候、そして少ない チャンス をいかにと言う問に対し、「先ず天候、そして少ない チャンス をいかにと言う問に対し、「先ず天候、そして少ない チャンス をいかにと言う問に対し、「先ず天候、そして少ない チャンスをいかにあらためて、かのパタゴニア登山の先達の言葉の重みをひしと感じた。

アーサー・エフ・ジェフリーズの富士登山

――一八七五年(明治八年)五月六日の登山-

来ると、ひゐき役者が舞台に出て来た様に嬉しくて堪らない」、ているのを翻展しながら――(中略)――名案内人が続々出て

そんな書物なのである。

この書物の巻尾に附録として、其迄にアルパイン・クラブが 受付けた入会申込者の登山経歴書の数例が載って居り、勿論、 トップのものは百近くのアルプスの名だたる山の名前が網羅されて居り――但し、人名、年代は記されて居らず、唯、山の名前だけ――「成程、これならACの会員にでも当然なれるだろう」と、うなずかせるのであるが、その数例の中の一つに「Mf. Fujiyama. Japan. to snow line」と記されているのがあり、僕も「オヤ……」と思った次第である。それに、この書物の出版が一八八八年とあっては、少なくともそれ以前に日本に来たが一八八八年とあっては、少なくともそれ以前に日本に来たが一八八八年とあっては、少なくともそれ以前に日本に来た

体どんな人物だろうと調べて見たくなった次第である。 切なる返信と共に、後に掲げるリポートのフォートコピーを入 会誌にこのリポートが載っている事を知り、最近、右協会の懇 山名から逆に調べて見たりして、漸く一八七五年の王立地学協 見たものの、それらしい人物も見当らず聊か焦燥の態だったが、 ACの会員に違いないと思うと、 『アルパイン・ジャーナル』のインディックス中の地域別の項の 『アルパイン・クラブ・レジスター』を克明に漁って 尚一層興味が湧いて来て、一

位だから(これについては後に述べる)、

当時としては何んと

いっても、大した御手柄だといわねばならないだろう。どんな

の富士登山という事は、フレッシュフィールド迄が驚いている して出発、正午に頂上に達しているが、季節的にも五月の初め

須走では三人の強力を雇い、午前三時、

折りからの月明を利

手した次第である。

田を通って須走に達している。富士山に行く最短距離を取らな 出る事は、役人の許可を要する時代でもあった頃だ。免に角、 を見ても東海道線は開通して居らず、外人が横浜の居留地外に たのだから、 かったのは途中、 ったので、止むを得ず会話本を両ポケットに入れて原町田、松 たが、間もなく歩きなれない通訳は足を痛めて逃げ帰ってしま 通訳とコックを雇い、自分は人力車で一応、横浜を後に出発し 何しろ一八七五年といえば明治八年だし、日本歴史の年代表 養蚕の盛んな土地であったそうだ。明治の開港以来日本の 外国人からの需要は莫大なもので、重要輸出品でもあっ 識者の言によれば、原町田の辺りは昔から桑の木が多 カイコが桑の葉を食って繭になって行くところな 絹の出来るのを見たかったからともいってい

....0

いるから、

々の言葉があるから、須走ではどんなアックスを用意したのか

相当な健脚家でもあった様だ。それでもアックス云

強力や御供の連中からは、未だ雪の深いこの時期に、

頂

で、降りでは遂にヘバッて自分だけ先に降りて来た等といって 氷の急斜面では相当難渋し、御供の強力も足が遅くて遅れ勝ち から、そんなものは日本にある筈もないし、事実、頂上近くの 場のアルプスでも、アイゼン等は未だ使用されていない時代だ 装備で登ったかは、詳しくは記されていないが勿論、当時は本

ど、見聞したくもなったのだろう。

富士山に登ろうという気になったといっているが、この登山記 其後、内地旅行に出掛ける迄に一週間ばかり余裕が出来たので 三月末に横浜に来て、 五月迄何をしていたかは判らないが この点は読者の御判断にまかせる。

Cumshaw と書いてあるが、耳を通じて音から覚えた日本語

元気に出発した等と書いてあるのも面白

い。(原文には

尾よく頂上を踏む事が出来たら「勲章」をやろうと彼等に約束 上迄とても登れるものではないと笑いものになったが、若し首

はないかと思い、僕は勲章の事ではないかと想像するのだが

を見ても如何にも楽しそうだが、最後に「この登山や其後の数を見ても如何にも楽しそうだが、最後に「この登山や其後の数のだろう。

rides). Mt. Fujiyama. Japan (to snow line). Sierra Nevadas, スフォード大学、クライスト・チャーチ出身の数学を学んだ人 中の一人であったとも思える。そして御多分に洩れず、オック ある海外旅行好きの、 イス・アルプス以外の所ばかりだから、 California, Rocky Mountains. 10,000 feet.」等と、 Southern Alps of Australia. Volcano in Tanna (New Hebactive volcano, 7000 feet. Mount Tanhara, Mount Te Aroha Ruapehu, (N. Island. N. Z.), 9000 feet. Mount Tongariro, try; or, Exploration in New Zealand." First ascent of Mount に提出した登山歴を見ても、「Author of "The King Coun 事であるが、"Pioneers of the Alps"に載っている彼のAC ないそうであり、単なる個人の好奇心で登ったのだろうという 地学協会の会員でもなく、またアルパイン・クラブの会員でも にわたる懇切なる通信によれば、このジェフリーズなる人物は 其後、王立地学協会のライブラリアン、ダグデール氏の再三 ヴィクトリヤ王朝時代の好景気時代の連 所謂イギリス人によく むしろス

もない事をここに述べて置く。

物で、 正しく地方の豪族の御曹子でもあったのだろう。 デール氏の懇切を極めた通信には、 ったら後便で知らせてあげると迄いって来た、再三に及ぶダグ 室、果てはクライスト・チャーチ迄、更に、又もっと詳しく判 いて、或は"Who was Who"国会図書館、タイムズの図書 ついても随所に筆を向けているのも、 うなずけるし、そういえば沿道の花や樹木、耕作地の視察等に ら成程、日本独特の絹の生産に、 事、衆議院副議長から枢密顧問官まで務めたという事だから、 実、数地方の農協代表者も務め、公安委員をやったり、 であったというから、所謂、地方の豪族であったのだろう。 最後に、このリポートを初め、 クリケットの名手であり、大地主で Country Gentleman ジェフリーズの経歴其他につ 態々脇道するのも蓋し成程と 誠に感謝、 成程と思わせるわけだ。 感激の他、何物 農協の親玉な

高、この富士登山については、夙に会員小林義正さんがその 高、この富士登山については、夙に会員小林義正さんがその の記述によれば「フレッシュフィールドがアルパイン・ジャーナル(一八七五年第七巻二百十四頁)のアルパイン・ジャーナル(一八七五年第七巻二百十四頁)のアルパイン・ノートで『王 立地学協会誌(一八七五年)の雑録にロープとアイス・アック立地学協会誌(一八七五年)の雑録にロープとアイス・アック 立地学協会誌(一八七五年)の雑録にロープとアイス・アックスを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、スを使って、富士山の冬期登山をやった記事が載っているが、

代々にも日本画などで馴染深い富士山は一万三千呎――一万四千呎位で、冬のこの時期に登山したという事には読者も驚嘆するに違いない』と述べているが、この小文が日本の山に関する最初の記事である事を記憶されてよいし、さすが編集者フレッシュフィールドの視野の広さが、うかがわれるというものである。ロープと氷斧を使っての富士登山がどんなものであったか、紹介されている地学協会の会誌を、未だ見る機会を得ていないが、もし同誌を一覧する便宜のある方は、ぜひ一度見ておいて戴きたいとおもう。」と述べて居られるが(『山と書物』三〇九頁)、全然別のタネから辿って来た僕の調べが、偶然小林さんのこれと同一人物である事がここで判然したので、小林さんにのこれと同一人物である事がここで判然したので、小林さんにも喜んでいただけると思う。

事実、一八七五年の頃ではスイス・アルプスに於いてさえ、本実、一八七五年の頃ではスイス・アルプスに於いてさえ、論、チンゲル迄伴ってウェッターホルン、ユングフラウ等に、その前年一八七四年の一月に初めて冬期登山をやって、それを『アルパイン・ジャーナル』誌上に寄稿し、読者を驚かせた時代でもあったのだから、当時『アルパイン・ジャーナル』の編集者たりしフレッシュフィールドが、この富士登山について一集者たりしフレッシュフィールドが、この富士登山について一

うか……。一難去ってまた一難来るという処だ。

は如何にも調べられないが、又、新たなる迷宮入りとでも言お

フリーズは如何にも誇らしげに述べているが、この一言だけで

帰りで登ったのは自分が最初だ……」と、この健脚の士、ジェ

かお稍々長文になるが Proceedings of the Royal Geogra phical Society, 1 st series, vol. 19, 1874—75, pp. 169—173. 所収のジェフリーズの登山記を採録する。

Ascent of Fuji-Yama in the Snow. By Arthur F. Jeffreys

Nippon,* or Japan, is a most delightful country to travel in for those fond of walking; horse carriages not being used except by the Europeans and a few Japanese living at the Treaty ports, and the native ponies being uncomfortable to ride. Of late years, in the vicinity of all the large towns, a class of vehicles called "Jin-Riki-Shas" has sprung up, which, on a miniature scale, are like our old-fashioned gigs with hoods, having elliptical springs and light wheels; one cooly runs between the shafts, with a second pulling in front

矢張り、この時期に富士登山をしたヨーロッパ人があるが、

H

唯一つ又、ここで気懸りになって来たのは「自分より以前に

^{* &}quot;Nippon" is the name given by the natives to the whole of the Japan group, and not to a single island as is usually done by Europeans.

by means of a rope, and they go at an astonishing pace.

There are very few roads in Nippon, the principal being the "To-kaido" or Western Road, running from Nagasaki to Tokiyo (Yedo), and the "Oskio-kaido," or Northern Road, from Tokiyo to Hakodati: these are suitable for small carriages, but the paths which traverse the country are very narrow, and are used, for the most part, only by pedestrians and pack-horses.

The Jin-Riki-Sha coolies are good-tempered laughing fellows, and seem to enjoy a run immensely; this class as well as the "Beltoes," or grooms, are usually tattoed in the most wonderful manner, the whole body, excepting always the head and legs below the knees, being covered with huge dragons, fair women, and other devices in black, red, and blue, so that the backs of your tandem (for they always strip as soon as they get outside the town) frequently present quite an attractive picture.

Having arrived at Yokohama towards the end of March, and having a week to spare before setting out on a tour into the interior, I determined to fill up the time by visiting the Mountain of Fuji-Yama, which lies about sixty miles s. w. of Yokohama, and is outside the limits defined by the Treaty,

beyond which no foreigners are supposed to go without special passports. The first thing to be done was to find an interpreter, then to secure a cook, and coolies for the baggage: for the European traveller must take a few provisions with him, as joints of meat and wheaten flour, as well as milk and butter, are not used by the natives.

On the 2nd of May, having sent forward the *impedimenta*, I started in the afternoon with a native interpreter. He proved a very poor pedestrian; so, although we had left the Tokaido and were following a narrow path, we still kept our Jin-Riki-Shas, and once the interpreter was capsized into a paddyfield with about six inches of water over it; his crest-fallen appearance caused great merriment to me and the coolies.

A large plain extends round Yokohama and Tokiyo, and a range of mountains separates this from the plain in which Fuji-Yama is situated. I did not take the shortest way to Fuji-Yama, as I wished to see the country where the silk is grown. That night I stopped at "Haramatchyda," which is about eighteen miles from Yokohama. The tea-house was full of Japanese, but the best room had been secured for me, and I dined with an old barrel for my table, for there

is no furniture in a Japanese house beyond screens and a few articles of lacquer-ware.

It has often been told how the "Musumés," or girls of the tea-houses, bring the traveller hot water for his feet on arrival, and attend on him with a most charming grace, so I will forbear repeating the same story again; it is rather embarrassing, however, to be served by these picturesque little creatures on their knees, which is the "mode" here.

The next day we had a delightful walk through a part of the silk district. The mulberry-trees, which are pollarded and therefore small, are planted in the midst of the corn-fields' and were just breaking into leaf; the yellow rape and white turnip flowers formed quite a flower-garden.

At "Tanna," a distance of ten miles, the interpreter gave in and declared he could walk no farther on account of blistered feet; therefore we left him, bidding him follow on horseback or in a "Cango" (i. e. palanquin), if he could get either: I never saw him again, so I suppose he returned to Yokohama. With a dictionary in one pocket and a conversation book in the other, I managed to make myself understocd fairly well, and fortunately the Book of Nature is the same in all languages. That afternoon we left the plains and

ascended the hills towards "Myanashi," which was out of the direction of Fuji-Yama, but worth a visit on account of the scenery.

We left the mulberries with the plains and got into the region of Camellias, Azaleas, and Westeria: these last were of two kinds, blue and white; the Azalias were of many shades, and varying from red and purple to white; the Camellia-trees were chiefly remarkable for their size, reaching a height sometimes of thirty feet. The cottages of the peasants are very picturesque, with their heavy thatched roofs surmounted on the ridge by a row of blue Iris.

The path was rather steep, and the coolies had a march of 26 miles altogether that day. We reached Myanashi, which lies in the midst of hills, about six o'clock: it is a pretty situation, and Europeans frequently stay here during the hot summer months.

On the morrow we retraced our steps, for five miles, to the plain, and then made straight for Fuji-Yama, skirting the base of "Oyama," a mountain of some 6000 feet. There was a strong sun, which, after the previous rain, brought out the insects in great numbers. I noticed most beautiful large swallow-tailed butterflies, of a dark purple, with eyes of a rich

very inquisitive. The first question usually is, "Anāta dōko

a more beautiful agricultural country of the annuals. Altogether it would be impossible to picture Cryptomerias mingling harmoniously with the lighter shades shrubs; the country was also very well wooded, the covered with vegetation, consisting of coarse grass and small rich appearance; even the hills, including Oyama, cultivation, and the bright green of the crops gave it a very plain country extending to the sea. Most of the land was under stand). At the top there was a most charming view over the range, being non-poisonous. That afternoon we crossed over a small snakes varying in length from two to four feet, most of them beetles, and on this and the following days I killed several orange colour on the wings; there were numerous bright by a pass called "Zemba" (as well as I could underwere dark

That night we stayed at a village called "Matsuda," having walked about 27 miles during the day.

Matsuda is outside the Treaty limits, and the "Yakonin," or official, might have turned me back, but he contented himself with taking my name. We put up at the Temple; a great many of these places, as in China, have strangers' quarters attached to them. Whenever I stopped to rest, on this and other expeditions, the people were very civil, but

māro-māro?" ("Sir, where are you going?") in a most insinuating tone: on being answered, they say, "So!" (something after the German manner), which has a world of meaning according to the inflection of the voice. They then ask, "And where do you come from?" and if they are "Musumés," and become chatty, they proceed to ask the traveller's age, and have great fun in guessing it. In all conversation they are extremely polite and well mannered.

We left Matsuda early on the morning of the 5th of May, and crossed the principal range of mountains which separates the country about Yokohama and Tokiyo from that surrounding Fuji-Yama and Kiyoto.

There are several passes over this range; those of "Hakoni" and "Tomé-Tongi" being the best known. We crossed by one called "Yangarusāwa." Here we saw the lacquer-tree, the juice of which forms the beautiful varnish.

Up to this time Fuji-Yama had been hidden from us by the mountains; but at the top of the pass the path took an abrupt turn, and we were brought face to face with the giant standing alone on the plain, its snowy side glittering in the sunshine; it appeared very close to us, but in reality it was

about twelve miles distant. Fuji-Yama means "The unequalled Mountain": it does not form part of a range, but rises from the plain in the shape of a perfect cone, with the apex broken off where the old crater is. As we then saw it, covered with snow, I certainly think it unequalled for beauty by any mountain in the world.

Having descended the pass, we had a walk of about eight miles to the village of "Sybashiri," which we reached at 3 P. M.

For some distance round the mountain the soil is formed of decomposed scoria; vegetation being represented by firtrees and hardy shrubs. I noticed men working hand-ploughs to-day; these are made of wood in the common shape, but are used like spades; that is to say, the plougher digs it into the ground, and one or more men pull it a few inches through the soil by means of a kind of handle which projects in front.

We found mine host of the tea-house, where we stopped, very drunk; but we managed to secure the services of three guides, an axe, a piece of rope, and torches, for the ascent the next day.

"Sybashiri," or "Subashiri," is one of the three villages

from which the pilgrims commence the ascent of Fuji-Yama. It lies on the east side of the mountain, and is about 800 feet above the level of the sea. "Yoshida" is the similar village on the north side, and "Murayāma" that on the south. Sybashiri consists of one long street, with a stream running down it. At the top of this street is a temple, dedicated to the tutelar deity of Fuji-Yama; for the natives consider the mountain as very sacred, and endeavour to ascend it once in their lives, coming from all parts for this holy purpose during the summer months when the snow has disappeared.

The guides slept in the tea-house, so there was no difficulty about making an early start at 3 A.M. the following morning. The guides and my two servants laughed at the idea of reaching the top in the snow; but having promised them good "Cumshaws" if we succeeded, we set out in good spirits.

There was no need of the torches, as a bright moon showed us the way. Having passed through the grounds of the temple, we entered a long avenue of fir-trees leading up a gentle ascent towards the mountain. After about 3½ miles, we came to a collection of sheds, where the pilgrims usually leave their ponies, but which at that time of year were unoccupied.

We then followed a narrow, but very fair path, for a mile and a half, the incline being steeper. There were a number of uninhabited rest-houses at intervals, in some of which the pilgrims are wont to sleep before making the ascent. The guides were very slow walkers, and we had some difficulty in making them keep up with us.

A mile more and we reached the snow. Soon after which, after having emerged from the jungle of stunted fir-trees and larches, we found ourselves at the foot of the enormous cone.

At the first start I felt as if we were bent on some murderous expedition, stealing away thus in the dark; but now that the sun rose in full glory, it seemed to encourage us to do an honest day's work. The ascent became gradually steeper, but the snow gave us a very good foot-hold. A fresh series of rest-houses now commenced, numbered 1 to 10, the last being on the summit; and the Japanese always fix the height to which they have ascended, by naming the number of the rest-house. At this time they were all buried in snow, with the exception of their roofs, whereon we sat and rested.

We had a most glorious day, without a breath of wind, and the mountain shone with such dazzling brightness that

our eyes were hurt by looking on it.

In the early morning a few clouds clung about the foot, and two small lakes in particular, covered with mist, looked like sheets of white wool stretched on the plain. I was reminded of the lines:—

"Like some tall cliff that lifts its awful form,
Swells from the vale and midway leaves the storm,
Though round its base the gathering clouds may spread,
Eternal sunshine settles on its head!"

We kept on a ridge nearly all the way up, so had no very great depth of snow till we neared the summit. On the northern side of this ridge, a large scoop seemed to have been taken out of the mountain; but, in consequence of the eruptions in former days, the sides are most wonderfully regular, there being no great ravines nor glaciers.

As we toiled up, a very sleepy feeling came over us, and the coolies would give way to the temptation occasionally as we rested. One of the men was knocked up, so we left him sitting on the roof of a rest-house. The ninth and tenth stages were very severe; the incline was extremely steep, and the snow was perfectly frozen and covered with a coating of

ice, so that one of the men was obliged to cut steps one by one with the axe, whilst I followed and the rest behind; and in this manner, taking about half a minute for each step, we painfully climbed up the difficult ascent to the summit, which we reached at noon precisely.

There is only a narrow and very irregular rim round the old crater, which is half a mile or so in circumference, although the Japanese tell you that it is two "Ri," or nearly five miles.

The crater was then about 150 feet deep, having a quantity of snow in it, which gave it the appearance of a hollow inverted cone. The men with me were rather awe-struck, and would not let me throw a stone into the crater. I noticed that each of them said a prayer immediately on reaching the top, and seemed in a great hurry to get down again. As there was a great quantity of ice about, and the rim was formed of rugged and uneven rocks, we tied ourselves together as a precautionary measure.

Although there were no clouds near the mountain, yet, in consequence of the powerful sun, mists were rising over the plains, and the view was not so extensive as I had anticipated.

We saw the Hakoni Lake and Pass to the s.e. by s., Odawara Bay on the N. by E., Tokio or Yedo to the N., Mount Asamayāma, and a high snow-capped range to the N. w. by N. The men were in a great hurry to descend, and, as it was bitterly cold, I was not sorry to beat a retreat.

I went first, and the rest held on to the rope, whilst I cautiously proceeded from step to step. I don't think that the rope would have stood a severe strain, so was glad to get down without having put it to the test.

We set a piece of rock gently in motion from the top, and the velocity it acquired as it rolled over the smooth snow was enormous. About half-way down it came in contact with some scoria that projected above the surface, and it then took a leap of about a quarter of a mile.

We were obliged to descend by the same way that we had ascended, for it would have been impossible to have cut steps as we were descending.

After reaching the seventh stage, one of the men and I left the rest, and arrived at Sybashiri some time before them, pounding through the soft snow at a great pace. The height of the mountain, by the latest calculation, is 13,080 feet, though it is generally reckoned as 14,000 feet. Its height

appears more than it is in reality from a comparison with other mountains of the same size, from the fact of its rising from such low ground; whereas other mountains are usually seen standing on high ranges. I should call the actual walking distance from Sybashiri to the top, about 8½ or 9 miles, and we made the ascent in 9, and the descent in 4¼ hours.

I heard that only one European before me had ever ascended to the top of the mountain at this time of year, but that I stood alone in having accomplished the ascent and descent in one day.

The following morning we crossed the range between Fuji -Yama and the sea by a pass called Tomé-Tongi, some way to the south of where I had crossed before, and reached the village of "Myanoshta," which is the summer retreat of the Mikado, and a favourite place of resort for the Europeans from Yokohama in the hot summer months. It is about 17½ miles from Sybashiri. It rained during the afternoon, and we were glad to put up at the excellent tea-house—the best in Japan, I believe.

The scenery is exceedingly beautiful, the village being situated on the southern slope of a long valley, with mountains on both sides. It is celebrated for its hot springs,

which the Japanese, and even foreigners, enjoy immensely for bathing purposes. A river winds along the valley to the sea at O-dawara, a distance of seven miles, and forms some pretty waterfalls in its course.

The next day was very gloomy, the valley being filled with mist, and the rain coming down like a water-spout; but as I had arranged to be back at Yokohama that evening, we set out with Japanese umbrellas and waterproof coats made of oil-paper, which kept us fairly dry to O-dawara, where we took Jin-Riki-Shas to Yokohama, a distance of 35 miles.

I may remark that a thin tough kind of paper, made from the bark of a tree, is used in Nippon for many things, including pocket-handkerchiefs and waterproof coats.

We reached Yokohama that evening, after an excellent trip of 6½ days; and from my experience of this and serveral other expeditions, I can recommend anyone who is fond of walking through a charming country, peopled by an exceedingly kind and amiable race, to pay a visit to the Land of the Rising Sun.

後記

本稿脱稿の数ヶ月後、私立富士学校々長、松方三郎さんから

诵 の通信が舞い込んで来た。

ような意外な通知だった。 の呼び出しか何かしらと思って、恐る恐る開いて見ると、次の くらいの資格はあるだろうと自認していたので、校長先生から 僕も富士学校の特待生と迄は行かないにしても、まあ優等生

仲々面白い本である。 談社発行 『日本滞在記』E・W・クラーク著、飯田 宏訳、¥480. 富士登山は明治六年である。著者はアメリカ人。 識

な古い時代の頃の事だから、そう矢鱈に季節外に登る毛唐もな である事は確かであるが、唯、時期が九月の初旬とある。 が、時期は明治六年(一八七三年)だからジェフリーズより前 からの仰せだったのだ。早速、講談社から求めて読んで見た いと思うし、 ジェフリーズの云う「自分より 以前の 外人の 富士登山者 恐らくこのクラークと云う人物ではないかと云う校長先生 僅か二年前の事だから、恐らくこのクラークがジ あん

> 回目に登っている。 フリーズの云う人物かも知れない。 凄い暴風雨に遭遇して二

学、数学を英仏両語で教えていた宣教師で、近くの蓮松寺と云 静岡の学問所の伝習所で、論理、地理、 八七一年)に来日し、明治元年九月、徳川によって開設された クラークと云う人物は、勝安房守の要請により明治四年 歷史、経済、物理、

化

うお寺に寄居していたが、後に勝安房守などの好意により、

紹介して置く。 し度くなるような話ばかりで、確かに面白い本だ。 も当時は日本人にとっては毛唐が珍らしい時代だから、 と滑稽な経験」「寺院生活」「城内生活」「京都旅行」他、 間に富士登山を行なったわけだ。この他 教鞭を取っていた由。後に東京の開成校に転勤になるが、この 岡城の外濠に邸宅を新造し、多くの生徒に慕われながら熱心に 「東海道の旅」「遠足 此の機会に フキ出 何れ

(一九六八・一・六)

高木菊三郎氏 (一八八八一一九六七)

昭和四十一年十二月、白金の八芳園で行なわれた年次晩餐会昭和四十一年十二月、白金の八芳園で行なわれた年次晩餐会下。 田和四十二年二月八日午前六時十五分胃ガンのため 高藤)は、昭和四十二年十二月、白金の八芳園で行なわれた年次晩餐会 昭和四十一年十二月、白金の八芳園で行なわれた年次晩餐会

本は、 本され、本会からは槙有恒、神谷恭両名誉会員、村井米子評議なわれ、本会からは槙有恒、神谷恭両名誉会員、村井米子評議なわれ、本会からは槙有恒、神谷恭両名誉会員、村井米子評議からなった。

ているが、それは、よく高木さんの生涯を物語っていたと思う。人の力』の中に、「意志と努力の"小学卒の地理博士》は、いたの力』の中に、「意志と努力の"小学卒の地理博士》は、いいであろう。滑川道夫編、文部省道徳資料『日本に生きる日本いである。

本郷、菊坂の生まれで、父が幕臣だったから、根っからの江戸本郷、菊坂の生まれで、父が幕臣だったから、根っからの江戸本郷、南坂の生まれで、進学をあきらめたが、持ち前の負けん気験のとき病気となり、進学をあきらめたが、持ち前の負けん気から独学を志した。

小学校を出るとすぐ上野図書館に勤めた。勤務は二部制で、 宇も受けた。また尾崎紅葉門下の少年俳句会にもはいり、いく つかの作品を雑誌に載せたこともあるそうだ。十七歳のとき、 参謀本部陸地測量部の試験に一番でパスした。それまで軍人し か採用されなかったのだが、日露戦争のため人員不足で、民間 からも採用されることになったのである。明治三十九年六月で ある。日給三十五銭の雇員となり、ここに地図と高木さんとの つながりが初めて生まれたのである。測量部に入っても、高木 さんの向学心はますます盛んとなり、蔵前東京高等工業の夜学 に通学し、写真、図案、製版、建築製図、電気などを学んだ。夜 学の記章をつけていると、大尉クラスの班長に、しばしば「夜 学が大事か、仕事が大事か」と怒鳴られたという。

わしくその様子を聞き、正確な地図作成の資料にした。高木さけたことがなかった。しかし現地の測量隊が戻ってくると、くけたことがなかった。しかし現地の測量隊が戻ってくると、くはたことがなかった。しかし現地の測量隊が戻ってくると、くはたことがなかった。従って東京近郊の陸地測量部における高木さんの本来の仕事は「図かき」なの

追

から勉強を始め、

高木さんが一番尊敬していたのは伊能忠敬であった。

五十歳

日本全土の地図を完成した努力に心を打たれ

書など、あらゆる資料に基づいてまとめ上げた。
中国の地図の作製は、日本の山の地図以上の苦労があった。馬が部分が、かなりあった。それをどう埋めるかが、「図かき」の賊に身ぐるみはがれる測量隊の話など珍しくなく、実測できな賊を発揮するところで、高木さんは歴史、風俗、古地図、古文版を発揮するところで、高木さんは歴史、風俗、古地図、満州、んが手がけた地図は、日本ばかりではなかった。朝鮮、満州、んが手がけた地図は、日本ばかりではなかった。朝鮮、満州、

しかし、私たちが高木さんに一番恩恵を被っているのは、五万分の一の日本アルプスの地図の製図は、大部分が高木さんの下分の一の日本アルプスの地図の製図は、大部分が高木さんのすって、登山者がどれだけ助かり、そして登山がどれだけ盛んにって、登山者がどれだけ助かり、そして登山がどれだけ盛んにって、登山者がどれだけ助かり、そして登山がどれだけ盛んにって、登山者がどれだけ助かり、そして登山がどれたいるのは、五

日本最古の地図は約千三百年前、天平時代の絵図だといわれる。次が延暦十年、太閤秀吉の「全国国絵図」が有名で、徳川時代に入ると、関ケ原の合戦に備え、軍用を目的とした絵図ができ始めた。こうした日本の地図の歴史については、高木さんの著書『日本地図測量の発達に関する研究』(『会報』二五三号の書書。 (『本地図測量の発達に関する研究』(『会報』二五三号参照)に、くわしく述べられている。後者は、昭和三十七年、七十四歳で東北大学から理学博士を授与された時の論文をまとめたものである。

たということである。

JACの創立メンバーが、足を踏み入れる以前の参謀本部員の測量登山については、『山岳』五十八年にその思い 出を述べておられるが、穂高岳の三角測量を初めて行なった館測量官、阿部郡治測量官などについて、まだまだお聞きしておきたいことが山ほどあったのに、まことに残念である。

道楽は古本屋と道具屋をのぞくことで、戦前本郷から青山に道楽は古本屋と道具屋をのぞくことで、戦前本郷から青山に別っ越したときは、五トン積みトラックで十台もの資料があったという。その貴重な文化財は、すべて戦災で失なわれたが、たという。その貴重な文化財は、すべて戦災で失なわれたが、たという。その貴重な文化財は、すべて戦災で失なわれたが、たという。その貴重な文化財は、すべて戦災で失なわれたが、たという。

高木さんの句をご披露し、ご冥福をお祈りする。 席上、小生所有の『日本地図測量小史』に書いていただいた、 嚴後に、昭和三十八年六月十五日六義園における有志閑談会の 最後に、昭和三十八年六月十五日六義園における有志閑談会の 最後に、昭和三十八年六月十五日六義園における有志閑談会の はいた。

菊 葉 楼

地図に生きて六十年や老の春

略歷

・主な山歴・主な山歴

大岳山。明治四十五年妙義山、奥山。大正五 年 鋸 山。 大正六年武甲明治四十一年高尾—景信—陣場山。筑波山。明治四十三年武州御岳、明治四十三年武州御岳、

十年富士山。昭和十五年霧島山。昭和三十九年上高地。昭和三年八甲田山。昭和五年甲州御岳。昭和九年北朝鮮狼林山。昭和山。大正八年鹿野山。大正十年赤城山。大正十三年戸隠山、高尾山。

山岳会での活動

明治四十一年七月入会(会員番号一六二)。以後山岳大会に 当時地形明治四十一年七月入会(会員番号一六二)。以後山岳大会に 当時地形「山岳会と日本アルプス地方三角測量の思い出」 を寄稿。昭和四十年1日本会永年会員として表彰される,昭和四十一年十一月十日の本会評議員会で名誉会員に推挙され、十二月二日年次晩餐会の席上松方会長より発表。

著 書

間書房)。 (山崎安治) 一書房)、日本に於ける地図測量の発達に関する研究(昭和四十年風 一書房)、日本に於ける地図測量の発達に関する研究(昭和四十年風

石黒清蔵氏(一八九八一一九六七

後に起きたのである。

後に起きたのである。

後に起きたのである。

後に起きたのである。

後に起きたのである。

昨年(昭和四十一年)十一月。魚津岳友会の城君・網谷君の昨年(昭和四十一年)十一月。魚津岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友たちによって、遺二名が池ノ谷で遭難し、今年の五月から岳友にもいた。

この日の石黒さんは生き生きとしておられた。若い二人の遺黒さんの姿が眼に浮かぶのである。三回目は捜索でなく、遺体発見の報を聞いて駆けつけられた石のであった。

止まったのである。

の中からムクムクとおき上がられ、道の上へはい上がって来ら

白萩川側へ五、六メートル転落された。一回転して下のヤブで の一四〇〇メートル程だった。突然、私の眼の前で転倒され、

私がかけよって起こそうとする前に、ヤブ

白萩川へ下りはじめて二十分程したろうか。それは小窓尾根

入院する」と言っておられた。

感懐が、どんなに石黒さんを生き生きとさせていたか 体が見つかったという、安らぎもあったのだろうけれども、 にもまして、 自分の古戦場である剣岳の池ノ谷へ来たとい

そ 5

n

た石黒さんの眼に、私はそのことを感じたのである。 たが、会話のフシフシに私はそれを感じた。自信と誇りに満ち おられる姿であった。昔のことについて、多くを語られなかっ 清蔵さんが、四十年前の昔を懐古しながら、こつこつと歩いて 大正十三年八月。人跡未踏の池ノ谷へ敢然と踏み入った石里

よもや、その翌日、あの恐ろしい出来事が待機していようと 勿論、誰が想像したであろう。

池ノ谷へ案内した自分を、誇らしくさえ思ったのである。 にも思ったのである。この老登山家を、その人の古戦場である 度だけは、石黒さんのために良いことをした――と私はおろか れた。それを眺めておられる石黒さんの横顔を見ながら 頃だった。左俣が見え、右俣が見え、池ノ谷の全貌が見わたさ を下り、小窓尾根を登り、小窓尾根の一六〇〇メートルは七時 読経しておられた。五時に私と二人でテントを出発し、 眼をさまされ、テントの外に出られて、発見された遺体の前で 七月二十八日の池ノ谷は、冷たい風が吹いていた。 四時過ぎ 池ノ谷 今

> …」と、発見された二人の遺体の指図をしておられた。 早く下山して検視の証明書を作り、ダビの手続きをするよう… たかと、後悔させられるのである。後から追いついた上市署の う配慮から、辛いのを我慢して、無理に歩いておられたのだっ まで歩かれたのである。同行する私に迷惑をかけたくないとい 少し痛いが、大したこともないらしい」といわれ、 神保巡査と、魚津の梅沢君にも「私は大したことがないから、 のあと、時時痛そうな素振りが見えたが、殆んど一人で馬場島 った」といってヤブの中から自分で手帖を拾って来られた。 いかね」といわれた。私が上の方を探していたら、「あった。 ケットを押さえてみて「手帖を落としたらしいが、その辺にな た。そして身体を二、三回曲げ伸ばしてみて、「右のアバラが シャツのポ そ あ

うような意味のことを言われて、私を制止された。 た時は、ベッドに横になっておられ、 することになったと翌日電話で聞いた。 の方に話そうとしたら、余計なことを言わなくても良い、 馬場島から車でお宅へおとどけし、事故のことについて家族 右肋骨が三本骨折しており、肺に孔があいているので、 カスレた声で「一ヵ月程 直ぐに病院にお見舞し

ヤへ行こうという計画があった時、極めて積極的にこの計画に の死を聞いた。唖然とした。信じられない思いだった。 その翌日。即ち、事故があった翌々日、突然電話で石黒さん 石黒さんを知って十年になる。 富山国体登山部門の はじめてお逢いした。 四年程前、富山の若い連中でヒマラ 準備 0

(295)

を画された。私が石黒清蔵という人と、親しい交渉をもつよう

ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。 ことに、次のことがある。

① 黒部川のド真中に、でかいダムを造って何たることをすとは何事であるか。

たのである。

- 勝手なことを言っていいのか。
 ② 山を知らんものが、登山届出条例などをふりまわして、
- ③ 山に情熱のないものが、山を語る資格はない。

石黒さんの登山観は、遂に一貫して変らなかったが、石黒さんの登山観は、遂に最後まで燃え続けたのである。石黒さんの登山観は、遂に一貫して変らなかったが、石黒さんの登山観は、遂に一貫して変らなかったが、石黒さんの登山観は、遂に一貫して変らなかったが、石黒さんと愛し、自らは、刻岳の小笠尾及びかったが、石黒さんと愛し、自らは、刻岳の小笠尾及びかった。

黒さんは剣岳の大窓に立たれた。今年に入ってからも、単身白けた人である。一昨年八月、多くの高校生たちにまじって、石俣初登攀。そして四十年後の今日まで、一筋に剣岳を歩きつづけた人である。一昨年八月、多くの高校生たちにまじって、石は少ない。大正十三年の池ノ谷初下降。翌十四年の池ノ谷右人は少ない。大正十三年の池ノ谷初下降。翌十四年の池ノ谷右は少ない。

剣岳を歩きつづけた人が居るであろうか。 尾根を登られたが、六十九歳にして、一体どこに、これ程まで萩川のブナクラ谷を歩かれ、七月に入って、やはり一人で赤谷

と流れていたのは、何といっても、押さえ難い山への情熱だって持ちつづけられた信念と共に、石黒さんの精神を貫いて脈々自然保護・登山規制の排除など、石黒さんが死ぬまで一貫し

立山トンネルは人類の損失であることを、何時でも、何処でもスコミであろうと、石黒さんの登山観はビクともしなかった。誰が何と言おうと動じない人であった。権力者であろうと、マ田黒さんは頑なな程正義の人であった。自ら信ずることは、

大が皆東する時、一人敢えて西するは淋しい。石黒さんは又 独高の人と言えよう。主張を異にする人と、席を同じう出来な 孤高の人と言えよう。主張を異にする人と、席を同じう出来な が人でもあった。そして晩年、魚津の若い岳人連中に、非常に い人でもあった。 明快に言い切る人であった。

不ほしい……と。
お別のあった日の朝。テントを出られる時、魚津岳友会長佐伯邦夫氏に言い残された言葉は……遭難にくじけず頑張ってくれ、辛いだろうけど、前向きの姿勢で立派な登山を続けてくれ、辛いだろうけど、前向きの姿勢で立派な登山を続けてほしい……と。

一昨年の魚津のザイル祭りは、夜中から飲みはじめて朝の

追

蔵さんで、ようやくみんながテントへ退散しはじめたものだ た。「オーイ、ぼつぼつ寝るか」と言い出されたのが石黒清 四時まで続いた。石黒さんも私もゲストとして参加してい

- のが、多かったように記憶している。 を持ってきて、皆に配っておられた。ゴマ油で炒めた類のも 山での集まりの時、何時も石黒さんは、何か変ったオカズ
- るイデタチであった。 靴。何時も太い登山杖を携行して、如何にもカレた風格のあ 白っぽい灰色のシャツとズボン。青いリュックに黒い登山 着て、会合に出ておられた。山での石黒さんのイデタチは、 下界では身なりをかまわない人で、黄色いアノラック等を
- AC六一三号」と、石黒さんの会員番号が墨で書いてあっ のばれるような、ユカしい感じのものであった。杖の頭に「J 杖は何時頃からのものか知らないが、石黒さんの山歴がし
- ある悲壮な会議の席上だった。山のおエラ方が並んでおら

「あんた方は涙が出ませんか。どうして私と一緒に泣けな

の吉沢一郎さんの話が出た。相当親交があったようである。 蒼白な顔で、大声を出しておられた石黒さんの顔を思い出す。 石黒さんの本業は製薬業で、石黒万金膏本舗の店主であ 石黒さんと話をしていると、よく新潟の藤島玄さん、東京

> 伯郁夫君から聞いた。 る。万金膏の効能は業界でも抜群であったと、最近魚津の佐

る。 かに、このような孤高の登山家がいたことを、大きな誇りとす 人を知り得て、私は本当に幸せだった。私の郷土に、私の身近 ると急に思い当たらない。免も角、石黒さんは得がたい人だっ た。再びこんな純粋な登山家に、私はめぐり逢えないだろう。 この人を失って、私たちの悲しみは大きい。けれども、この 無数のエピソートがあるようで、筆を取って考え出そうとす

そして私は信じたい。

のケガレなき足跡は、永久に消えないであろうことを 黒さんの孤高の精神は脈々と流れるであろうことを。石黒さん 山があり谷がある限り、剣岳があり、池ノ谷がある限り、石

れと祈るや切である。

生涯かけて剣岳を愛しつづけた人、石黒清蔵さんの御霊安か

訓練の最高の道場であるということで、有志を糾合しては剣缶へ登山し 薬業のかたわら、在郷軍人として富山市五番町校下の青年学校教育に当 に従事。その間、大正六年に一年志願兵として陸軍に入隊。除隊後、製 大正七(一九一八)年六月日本山岳会入会(会員番号六一三)。 明治三十一(一八九八)年十二月二十日生れ。本籍は富山市五番町七。 大正五年三月、富山県立富山商業学校卒業。以来、家業の家庭薬製造 山は

た。大正の末から昭和のはじめにかけての石黒さんの登山の記録は、『業

跡』という雑誌に掲載されており、そのうちの二冊は富山県立図書館にある。

時に年四十六歳であった。 時に年四十六歳であった。 は、南太平洋のセレベス島へ出動した。 は、自ら志願して応召をうけ、南太平洋のセレベス島へ出動した。

昭和二十一年六月、復員した時は陸軍大尉であった。親戚や知人へと題し「父より子らへ」とサブタイトルがつけてあった。親戚や知人へと題し「父より子らへ」とサブタイトルがつけてあった。戦地から自宅へ配られたものであろう。

表されている。 電山県内で出されている薬日新聞とか家庭薬新聞に、かなり以前から発 製薬について、教育について、山についての石黒さんの意見などは、

家族は奥さんと長男夫婦である。安治さんによって紹介されている。

(橋本広)

磯野計蔵氏(一九〇七一一九六六)

十年以上ちがい、同窓の関係もなく、ついに相知る機会はなか山登りという共通のホビーがなければ、磯野君と私とは年も

ったであろう。

昭和四年か五年頃、関東学生登山連盟が結成されて、各学校から委員が選ばれた。一橋山岳部からは磯野君が出てきたのだから委員が選ばれた。一橋山岳部からは磯野君が出てきたのだから、彼はその頃山岳部のリーダー格だったに違いない。連盟から、彼はその頃山岳部のリーダー格だったに違いない。連盟から、彼はその頃山岳部のリーダー格だったに違いない。連盟から、彼はその頃山岳部のリーダー格だったに違いない。連盟から、彼はその頃山岳部のリーダー格だったに違いない。連盟から、彼はその頃山岳部からは磯野君が出てきたのだから表示であって来たものだ。その徒党の中に磯野君もいたのところへ、まるで義士の討入りみたいに、大勢そろってや私のところへ、まるで義士の計入りみたいに、大勢そろってや私のところへ、まるで義士の計入りみたいに、大勢そろってや私のところへ、まるでは、当時「アルピニズムの旅の下に」という、おもに違いないと、大きないが、おもに、大きないが、おもに違いない。

組織の問題などという七面倒な話は、私の苦手だからいい加組織の問題などという七面倒な話は、私の苦手だからいい加速盟委員の意見開陳で、JACに何等かの変化があったかどう連盟委員の意見開陳で、JACに何等かの変化があったかどう連盟委員の意、あとは二三の連中が個人的にフラリと遊びにつとなく遠のき、あとは二三の連中が個人的にフラリと遊びにつとなく遠のき、あとは二三の連中が個人的にフラリと遊びにきて、私の家族とも親しくなった。磯野君はその中のひとりできて、私の家族とも親しくなった。磯野君はその中のひとりできて、私の家族とも親しくなった。磯野君はその中のひとりできて、私の家族とも親しくなった。磯野君はその中のひとりできて、私の家族とも親しくなった。

ーリッヒとロンドンからの彼の旅信がのっているが、丁度その年にはヨーロッパへ出かけていった。『会報』 二十八号にチュの年であるが、会の集会などにもよく顔を出していた。昭和八昭和五年にJAC入会 (会員番号一一八六)、学校を出る前

追

峰々をあちこち登ったようである 向こうにいた北大出身の井田清君と、 夏にはアルプス 0

善へ運送係を勤め、京橋中央亭での記念晩餐会の世話をした の山 でかずかずの山頂を踏んだに違いない。彼も残念だったろう。 に送られ、乗船帰国ということがなければ、その夏もアルプス 怪我をして、グリンデルワルトからマルセイユまでブラバンド 古本屋漁りも大いに楽しんだことだろう。九年の春、スキーで 合ったりもしているから(松方三郎著『アルブス記』一三八頁)、 本拠は英国にいた筈だから『ハイランド』の山も歩いたろう 十年には本会の理事に選ばれ、その年五月創立三十周年記念 いろいろ働いている。 加奈太のバンフから英国へ廻った松方君と、ロンドンで落 [岳図書展覧会のときは、虎ノ門のクラブルームから会場丸

議に時を忘れたのを想い出す。 くれたこともある。この時彼がもたらした古書目録を種にして、 まそれを取出してみると、 帰途訪ねて、北京の古本屋で松方君とバッタリ会った話をして 岳会だといっていられない時世だった。彼と会う機会も少なく たし、当国は阿呆ないくさをおっぱじめていたし、山登りだ山 夏戻ってきたときは、彼は家業に専念せざるを得ない立場にい なったが、それでも十八年には当時九州熊本にいた私を、北支の っていたとおもうのだが、三年余り私が日本を離れて、十三年 「古書の評価」という拙文を『会報』一二一号に寄せたが、 この頃まで彼はまだ「山登り」や「山の会」に相当関心を持 好書愛書の癖のあった彼と、書物談

> まことに不思議なものだと感じないではいられない。 人柄とに一方ならず打込んだのをおもうと、人間の出合いとは に余り共通点があるとも考えられない磯野君が、茨木老の絵と (二六三号)にあるが、或いはそんなことかも知れない。性格的 伯の水彩画を贈物にしたことから始まったと、最近の『会報 茨木猪之吉画伯と磯野君との因縁は、 彼の新家庭へ私達が

並み以上に熱を上げ、JACにも相当深入りしていた彼が、 おもうのである。 年以後、全く山から離れてしまったのを、私などは甚だ残念に でもなかったのではあるまいか。しかし若いときは山登りに人 わっていたりした。全く山というものに、 に応じてくれたし、 しまったが、お茶の水のクラブルーム建設のときも、 近年彼と会っても、山登りも山岳会も話題に上らなくなって 彼の書棚には山岳書の限定判が 関心が消え失せた訳 快く募金 新たに加

もいわれたが、もし彼がずっとJACの仲間の中に在ったなら 彼が大変な毒舌家皮肉屋であり、一方非常な読書家であったと 集まりで語られたのは、ゴルファーとして或いはロータリアン 気兼ねの必要もなく、いくらでも山へ出かけられた筈だが、好 としての面が多く、登山者としての面はまことに少ない。また い仲間が身近かになかったのでもあろうか。彼の歿後、追悼の 家業の総大将であれば、そのへんのシガナイ勤め人のように とまれ本会にとっては、昭和大年以来のふるい終身会員であ 指折りの読書家に数えられるには至らなかったろう。 毒舌皮肉をもって鳴るというほどのこともなかったろう

年七月記) 若さで失ったことは、取返しのつかない損失である。(一九六七り、折りにふれては力をかしてくれた磯野君を、五十八歳という

(藤島敏男)

略

昭和四十一年六月二十七日 膀胱癌のため慶応病院で逝去。五十八歳。社々長。 社々長。 東京商科大学を卒業と同時に株式会社明治屋へ入社、同明治四十年九月二十九日誕生。

代表委員であった。

代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

「代表委員であった。

主な登山歴

三年 二 月 五色温泉スキー。和二年十二月 信州野沢温泉スキー合宿。

三年 三 月 尾瀬スキー行、景鶴山、燧缶。

三年 七 月 上高地 (岳川、槍沢)。劔岳八ッ峰三年 六 月 塩見岳、悪沢岳、赤石岳。

三年十二月白馬岳(大雪溪から)。

四年 一 月 野沢温泉スキー合宿

四年 三 月 乗鞍岳スキー登山

四年 三 月 菅平から猫岳。

四年四月 丹沢、原小屋沢から早戸川。

四年七月 霞沢岳、明神岳。

四年十二月 野沢温泉スキー合宿。四年 八月 前穂高北尾根、北穂高

五年 四 月 劔岳、針ノ木峠越え。 五年 一 月 梲平から飛驒来越を越える。

五年 八 月 奥又四郎谷から前穂高北尾根、西穂高縦走。五年 七 月 高瀬川遡行、槍ケ岳、小槍、北鎌尾根。

五年 十 月 鹿島槍ケ岳。

六年 五 月 谷川岳。

八年三月渡欧、九年四月帰国。その間ベルナー・オーバーラントで、スキニ月渡欧、九年四月帰国。その間ベルナー・オーバーラントでおっまたスコットランドを旅した。

正いる。 (編者) でいる。 (編者) にいる。 に編者) にいる。 にし。 にしる。 にし。 にしる。 にしる。 と、 にし。 にし。 にし。 にし。 といる。 にし。 といる。 と、

斎藤長寿郎氏(一九〇八一一九六六)

斎藤君は「でん公」の綽名で通っていた。彼が慶応義塾の山



名誉会員 高木菊三郎氏 Kikusaburo Takagi (Hon. mem.) (1888—1967)







磯野計蔵氏 Keizo Isono (1907—1966)



斎藤長寿郎氏 Chojuro Saito (1908—1966)



和田豊種氏 Toyotane Wada (1880-1967)



先輩の与えた影響は大きかったと思う。斎藤君もこういう後進 となく、若い後輩に伝わっていっていた。こんななかに今は憶 うであった。斎藤君も勿論その一人であった。先輩の考えてい が部になじんで、育っていく姿がみられた。波木井、村上、本 こんな他の大学では見られない雰囲気のなかで、自然に若い心 …」と寝言に叫んだのに由来して、でん公が彼の通称になって の一人ではなかったかと思う。 い出の大島、豊辺、渡辺、青木の諸先輩がいた。なかでも大島 ること、しようとすること、したいと思っていることが、なん 生でも欲するならば、大学の連中と一緒に山にでかけたり、 あったろうと思われる。この時分の慶応の山岳部では、普通部 冬か春かの合宿のことらしいから、恐らく、彼は普通部二年生で ところだから間違いはあるまい。この話はどうも大正十年度の しまった。これは幼稚舎以来一緒の国分貫一君が伝えてくれた 岳部と関係するようになったのは、まだ普通部生で、関のスキ ·合宿がその始まりであった。 この合宿で「……でんでん… 国分、浜口の諸君、早く亡くなった中村邦之助君など皆そ 合宿もできたし、部の集会にも顔を並べることができた。 ス

節、槍を経て上高地に下った折であり、後者は後輩の指導のた念、槍を縦走した大正十三年夏とを別にすれば、大正十五年夏と山、剱に登った大正十三年夏とを別にすれば、大正十五年夏と山、剱に登った大正十一年夏と、大学生になったその夏に立た。 普通部生のとき無から常との山行の記録を辿ってみると、夏に北アルプスに出かけた

る。 そのものに、齢経た先輩の影響がひそかに働いたと思えるし、 に、只管に山を愛した彼のいき方からもきていたに相違あるま 又、その場合、大島先輩以来の何ものかがあったようにも思え の彼だけが加わっていることを思うと、登山の考え方、いき方 殊に、前記の冬の立山、剱には渡辺、青木、大賀のなかに年少 勿論であるが、 けていっていた積雪期登山という波のなかに、彼もいたことは 季節を逃すことは殆んどなかった。これは、当時、一途に目が 期の北アルプスにはいった最初ではあるが、それからは、この い。がこの場合、先輩の感化も大きかったのではあるまいか。 (大一四、三一四月)、冬の立山、剱(大一五、一月)が、彼の積雪 世界は彼をたまらなく惹きつけていったろう。 るように響く涸沢の落石の音、新雪の山嶺、白一色の雪と氷の 懐にはいって山行した。秋の澄んだ大気のなかに、吸い込まれ なった秋から春にかけては、好んで、とりわけ、槍、穂高の山 めに立山、剱に出かけたのである。その代り、人の気配のなく 山なる自然に於ける人気をきらった、それだけ 春の槍、

当時の後進に裨益するところが大きかった。又、こういう研究り込むという他に、降雪期乃至積雪期登山の諸条件の研究の為り込むという他に、降雪期乃至積雪期登山の諸条件の研究の為もあった。こういう研究の為の調査、観察の成果の一つは「一もあった。こういう研究の為の調査、観察の成果の一つは「一もあった。こういう研究の為の調査、観察の成果の一つは「一秋から春にかけての山行は、もとより北アルプスに限られて秋から春にかけての山行は、もとより北アルプスに限られて

表情を厳しくしたのではなかったかと、思われる。表情を厳しくしたのではなかったかと、思われる。表情を厳しくしたのではなかったかと、思われる。表情を厳しくしたのではなかったかと、思われる。表情を厳しくしたのではなかったかと、思われる。

望見したかも知れない。又、日高の山に誘惑されるという先輩 ろであった。斎藤君はこの前年の夏、 山歩きについて、自分の好きな点の一つとして挙げているとこ たであろう。原始に近い森林に抱かれた自然の路なる沢を辿っ 恐らく田中、 彼が日高の山に初めてはいった昭和三年夏の紀行を綴った最初 もかも擲り放して青森行の急行に乗ってしまった。…」これは 様に自分を北の方へ惹き附けてしまふ。今年も休みになると何 それだけフリーなワイルドに近い北海道の山歩きは丁度磁石の 益々強い誘惑となってくる。 度味を覚えた北海道の沢歩きは北アルプスが賑へば賑ふ程、 一国山から然別の山を歩いている。この時恐らくは日高の山を 一節にある詞である(『登高行』第七年)。北海道の山歩きは、 夏山に彼が特に愛したのは、北海道の山々であっ 沢から峯へ、そうして沢へと、これは大島先輩が北海道の 耳にしていたであろう。この年には札内川を溯って一 大島両先輩以来の刺激と影響が、その底にはあっ 山で一番嫌な事は人との交渉だ、 石狩山群のクマネシリ、 た。「....

> づいて、ヌビナイ川から神威岳に挑んだ。然し、この山行は十 る(『登高行』第七年、一五七頁)。これは今日の国土地理院 が、彼自身、 九七九・四メートル三角点峯 でいる。 に尾根を辿って一八三九メートル独立標高峯に立った。終ると 再び札内川を溯って、この度はヤオロマップ岳に登り、 切れになって已むなく断念している。翌昭和四年夏には、然し 勝側から絶えず吹渡る濃霧と偃松の密生とに悩まされて、時 るシュンベツ川を下って新冠に出た。中一週間をおいて引きつ 山のことである。)とイドンナップ岳に登り、 の一図幅「札内川上流」のカムイエクウチカウシ山と記され 直ちに踵を返して、大雪山から十勝岳まで北海道の大棟を楽ん 北海道は本当に磁石のように彼を引きつけたに違いな 五万分の一図幅の札内岳とは別であると記して (彼はこれをサツナイ岳と呼んだ 箱と滝の連続す 更に西

大和銀行外国部に勤められ、停年後、 迎えて帰国、その後、 応義塾を出た。 も同じであった。彼は小学から大学を卒えるまで、一貫して慶 で自分を語る性質ではなかった。その点、自分の山行に関して はなかったから、決断すると直往的であった。又、決して進ん 0 ンプルク、ベルリン、リスボン各支店の海外勤務を以て終戦を 、現在の東京銀行)に就職、 大阪勤務、ついでカルカッタ、 たから、 彼は、まじめに素直に山を愛した。彼の性格は常に細心であ 計画は可能な限り綿密であった。然し決して怯懦 昭和五年 家の事情によって退社された。 春、 経済学部を卒えて横浜正金銀行 大和不動産常務に就任、

昭和四十一年五月二日、前二年からの脳軟化症を加療中のとこ ろ亡くなられた。菊葉夫人とは昭和十四年ハンブルクで結婚、 男一女がある。

さんの小舎に孤りでいた時、ひょっこり、やってきて一晩を共 君であった。私は今でも、彼が早く亡くなりすぎたと思ってい った。然し終戦後、私が山岳部長をやらなければならなくなっ にしたのが、山での彼との出会いといえばいえる唯一の例であ を共にしたことはなかった。昭和三年十一月、私が上高地の常 私より後輩であったということのわけではなかったが、山行 部の再建のために大いに尽力を願ったその一人は、斎藤

ろう。彼の山行歴を、それ故ここでは『登高行』から採録す 彼は卒業後こんなわけで山行の機会には恵まれなかったであ

大正一一年七月:燕、常念、槍ケ岳縦走

大正一三年七月:立山、劔岳 大正一四年一月:蔵王スキー登山(峨々温泉から)

三月:槍ケ岳、南岳、西穂高岳 二月:八ヶ岳(夏沢から

五月:秩父行(塩山-将監峠-栃本-十文字峠-梓山-小

七一八月:東北地方の山旅(飯豊山、大日岳、朝日岳、月山 男應半島、 酸ケ湯から八甲田山、八幡平、岩手山

一〇月下旬——一月上旬:上高地(岳川、凋沢、北穂高)

一月下旬:八ケ岳(赤岳温泉から赤岳、横岳、硫黄岳、

夏

大正一五年一月:立山、劔岳

二月:八ケ岳(夏沢

三月:吾妻精錬所

七月:劔岳八ツ峯、立山—薬師—双六—槍 五月:横尾岩小舎から奥穂高、北穂高

一月:槍ケ岳、前穂高(単独行)

昭和 二 年一月:槍沢—槍ケ岳、横尾岩小屋—北穂高

二月:五色温泉—青木小舎—家形山—東大巓—栖森—峠

三月:飯豊山、大日岳

四月:黒岳、源次郎岳

五月:宝川笠ケ岳(武能小舎跡から)、一ノ倉岳、茂倉岳

この行は谷川岳岩壁の下調査の為

六月:仙丈岳、甲斐駒ヶ岳(北沢小舎から)

七月: (七月三日―七月一一日)ピリベツ川上流とクマネ

シリ岳、大雪山

(七月一七日―七月二五日) 石狩から三国山を越え

て音更へ

(七月二九日一八月一日)積丹廻り

九月:神津牧場

○月:木曾御嶽、乗鞍岳、北穂高岳(ツダルスキー・ツェ ルトザック及び英国製寝袋の効能テストの為

昭和 三 年一月:前穂高北尾根

一月:八ケ岳(夏沢温泉―天狗岳、夏沢温泉―硫黄岳

三月:(三月一五日—三月一九日)関温泉—神奈山、関

(三月二二日より)横尾谷岩小舎、前穂高北尾根(三

月二五日大島亮吉遭難)以後三月三一日迄搜索活動

五月:大島遭難の第二回捜索

六月: (六月一日-六月五日) 大島遺体発見の報によって

七月: (七月一〇日―七月二三日) 札内川からカムイエク ウチカウシ山―イドンナップ岳―シュンベツ川―静

ートルの独立標高点―神威岳に向かう―濃霧と時間 (七月二九日-八月四日)ヌビナイ川-一六四六メ

不足の為引返す。

一一月:北穂高(横尾岩小舎から)、前穂高(上高地から) 岳川—奥穂高—横尾岩小舎

年一月:涸沢圏谷(北穂高を試みる 二月:富士山(須走口)

pц

三月:魚沼駒ヶ岳

四月:奥穂高(横尾岩小舎から

四月(下旬):金峰山、瑞牆山

五月:荒沢岳、灰ノ又山、兎岳、中ノ岳、八海山(小出

大湯から

七月:劔岳八ツ峰

七一八月:(七月二五日一八月三日)札内川からヤオロマップ

岳、一八三九メートル独立標高点

ウシ山、オプタテシケ山、十勝岳 (八月九日—八月一五日) 大雪山 忠別岳、トムラ

九月:前穂高(又白側から)

一月:富士山(吉田口

昭和 五 年一月:横尾岩小舎から涸沢岳、奥穂高―前穂高-一二月:戸隠山、西岳、五地蔵岳、高妻山

岩小舎

号四〇五七番)。 五月二日病歿。日本山岳会へは比較的遅く一九五三年五月入会(会員番 明治四十一年(一九〇八)一月二九日誕生。昭和四十一年(一九六六) (相内武千雄)

和田豊種氏(一八八〇一一九六七)

師にあたる。体躯も容貌も、声も身ごなしもたいへんに大型な

阪大の名誉教授で、私にとっては精神科を教えてもらった恩

人であって、接するだに、明治の時代そのものの雰囲気を感じ

ピッタリとする空気があり、これがひとつの魅力ともなってい らい前になる。山岳会には、だいたいこのような明治の風格が ちかく、といってもわたくしの学生時代であるから、四十年く させるところがあった。 実のところ、先生が山に興味をもちはじめられたのは晩年に

るのは、誰しもの感じているところであるが、その方がたにも見られるように、先生もたいへんなスタイリストで、それとなく見せかけながら、帽子から靴まで、シャツといわずルックといわず、何気なく抱えたり、突いたりされる杖にまで、凝りにいわず、何気なく抱えたり、突いたりされる杖にまで、凝りにいわず、何気なく抱えたり、突いたりされる杖にまで、凝りにいわず、いでたちであった。先生のハイカラ振りは、エネルギーの溢れる行動によって、さらに生きいきとした色がついていた。その頃、スキーを担いで登って、僅かの時間をたのしむような束の間の六甲の積雪に、御老体ともいえそうな先生の姿を見出して、驚くことがあった。

(?) まわっておられたものである。 (?) まわっておられたものである。 (?) まわっておられたものである。 (?) まわっておられたものである。

かの失意のときなどに、温かい言葉と温容に接して癒された想て、阪大山岳部の連中はただ驚くばかりに違いない。何しろ明て、阪大山岳部の連中はただ驚くばかりに違いない。何しろ明た方である。私は学生時代(一九二〇年代)いろいろ御迷惑をかけた記憶や、患者をお願いしたときとか、また私のいささをかけた記憶や、患者をお願いしたときとか、また私のいささをかけた記憶や、患者をお願いしたときとか、また私のいささをかけた記憶や、患者をお願いしたときとか、また私のいささかの失意のときなどに、温かい言葉と温容に接して癒された想がの失意のときなどに、温かい言葉と温容に接して癒された想がの失意のときなどに、温かい言葉と温容に接して癒された想がの失意のときなどに、温かい言葉と温容に接して癒された想がある。

に一文をささげて先生を偲ぶ所以である。かし、山を愛され、山を愛した若い人々をよく遇された。ここい出がある。先生はもちろん山の大家というものではない。し

水野祥太郎

和田先生は誠に温厚な方でした。しかも一旦人と約束でもした時は、どんな事情が生じても、だんな都合の悪いことが出来た時は、どんな事情が生じても、洗して違約することのきらいな方でした。人と話しをしていても話を外らさず、退屈させず、時には諧謔を交えて笑わせてみたり、しかも心から親切さを忘れず人を喜こばせたり、時にはとんでもないことを云って、驚かせてみたり、からかっ時にはとんでもないことを云って、驚かせてみたり、からかっ時にはとんでもないことを云って、驚かせてみたり、からかった、退居されば、どんな都合の悪いことが出来た時は、どんな都合の悪いことが出来な嬉しい博士でした。

先生は生粋の大阪マンでした。和田元治さんの二男として明治十三年に生れ、大阪医学校の出身で、府立医学校の教授中、独立と歴任され、帰朝後は大阪帝大医学部の教授で、附属医院長などを歴任され、その名誉教授の任に就き、医学博士の学位を受けて再び官命により欧米各国に派遣されたことがありました。お若い頃は、よく好んで登山を楽しんでおられた由を聞いているが、私の知った頃はもう大きい山には向かわれず、医科大いるが、私の知った頃はもう大きい山には向かわれず、医科大いるが、私の知った頃はもう大きい山には向かわれず、医科大いるが、私の知った頃はもう大きい山には向かわれず、医科大いるが、私の知った頃はもう大きいは、原月に一度位は必ず近郷に、不日では、大阪帝大会のは、大阪帝大会のは、大阪帝大会のは、大阪帝大会のでは、大阪帝大会のでは、大阪帝大会のでは、大阪帝大会の大会の大阪マンでした。

白の飛び交っている球にも、可哀想なような気もするのであり白の飛び交っている球にも、可哀想なような気もするのでありしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とひしと感じられ、先生のなき撞球室は何となくさびしく、赤とりの飛び交っている球にも、可哀想なような気もするのであり

た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。 た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。 た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。 た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。 た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。 た生、どうぞ安らかに静かに御冥福をお祈り申し上げます。

(中原繁之助

明治三十六年二月、大阪府立医学校助教諭。明治三十二年十月、大阪府立医学校卒業。

明治三十七年三月~三十九年三月、日露戦争に従軍。

大正元年十二月、医学博士。 対正元年十二月、医学博士。 明治四十二年四月~同年十二月、独国へ差遣わされる。 明治四十二年三月、大阪府立高等医学校教諭。

昭和四年二月~同年十一月、欧米各国へ出張大正八年十一月、大阪医科大学教授。大正六年二月、府立大阪医科大学教授。

昭和九年六月~十二年六月、大阪帝大医学部付属医院長。昭和七年七月~九年六月、大阪帝大医学部付属医院分院長。昭和六年五月、大阪帝国大学教授。

昭和十六年五月、叙正三位。昭和十二年七月~十六年五月、大阪帝大医学部付属医院分院長。昭和十一年八月、叙勲二等、授瑞宝章。

昭和三十四年十月、大阪帝大名誉教授。昭和三十四年十月、多年公衆衛生の向上に寄与したため厚生大臣賞。昭和三十四年十月、多年公衆衛生の向上に寄与したため厚生大臣賞。昭和三十年三月~三十六年六月、大阪精神衛生協議会々長(初代)。同 年七月、大阪帝大名誉教授。

両氏の紹介で入会(会員番号四六三二)。 両氏の紹介で入会(会員番号四六三二)。

図書紹介

森林·草原·氷河

この書物は山の本として泰安君の処女出版だという。若い登この書物は山の本として泰安君の処女出版だという。長短二十五に及ぶ文章には、登山と遠征の然るべきだと思う。長短二十五に及ぶ文章には、登山と遠征の然るべきだと思う。長短二十五に及ぶ文章には、登山と遠征のが、読み通した印象では、おのおの文章が総合されて、一人のが、読み通した印象では、おのおの文章が総合されて、一人のが、読み通した印象では、おのおの文章が総合されて、一人のが、読み通した印象では、おのおの文章が総合されて、一人のが、読み通した印象では、おのおの文章に関連なりに、年間を入れた。

頂きも極めている。

「今はどうか、数年前までは、彼は中尾佐助とともに、海外遠征の回数最高で、八千メートル以上のヒマラヤン・ジャイアンツを一ばんたくさん見た日本人である」と桑原武夫氏がいわいる通り、この著者の山旅、登山、遠征の経験は、読者をうらやましがらせずには置かない。このような幅の広さは、著者自やましがらせずには置かない。このような幅の広さは、著者自やましがらせずには置かない。このような幅の広さは、著者自やましがらせずには置かない。このような幅の広さは、著者自やましがらせずには置かない。

「チョゴリザ登頂」のなかで著者は「全く科学がエクスペディションのロマンティシズムをメチャクチャにしてしまった」と慨嘆している。たしかに著者の場合は、未知への憧れとしてと慨嘆している。たしかに著者の場合は、未知への憧れとしての遠征ともいうべきものへの愛着が、つねにまとわりついている。その未知をきわめたいと思う心が、この本のなかに大きなる。その未知をきわめたいと思う心が、この本のなかに大きなる。その未知をきわめたいと思う心が、この本のなかに大きなる。

「カラコラムへの道」の終りに、

て以来、著者は、京大時代に白頭山の冬期登攀に加わり、さら

講演について教えられ、

少年時代に早くも父君から東京で行なわれた探検家へディン

中央アジアへの憧れを呼びさまされ

「私の心の中には、チョゴリザの上から見たコンダス氷河、「私の心の中には、チョゴリザの上から見たコンダス氷河、日

と記されている。このように著者の心は、カラコラムへ踏み入っても、さらに、その西北の空へと飛んでいる。巻末の一文「同心円」では、ビラフォンド峠のあたりで氷河上に見つけた一羽の千鳥のなきがらに托して「千鳥の旅を果てしなく思いながら、人間の世界の旅の不自由さをつくづく思わないではいられなかった」と語って、ここでも今は足を伸ばすことのむずかしい中央アジア内陸への、はげしい情熱を吐露している。「今日まで、私が達し得た地点をたどってみると、中央アジア内陸を中心として一つの。同心円%の上をむなしくさまよっているに過ぎない。……私は果たして行けるのだろうか。この次には一体どこで、この円上をさまようのだろう。ある日、あるいは、その地を踏んでいるだろうか。私はまだあきらめていない。しゃの地を踏んでいるだろうか。私はまだあきらめていない。しかし、翼のない私はあくまで待たねばならない。」

著者はまた、ヒマラヤで陸封型のマスを釣ろうと夢中になっている(ヒマラヤの釣り)。その存在は既に学説として否定されているにもかかわらず、ひょっとすると、そのマスがいて、サオー本で学説をくつがえすことができるかもしれないと考える。そのような夢の要素こそ、とかく型にはまった遠征報告のる。そのような夢の要素こそ、とかく型にはまった遠征報告のる。

といって夢ばかりではなく、本書には軽妙な表現を装いながら、実は鋭い忠言なり警告が、今日の登山者に向けて語られている点を見逃すことはできない。著者は「中入り後の切れの戒め」などと、伊予大洲の殿様であった「ご先祖さまの遺訓」を持ち出して忠告を試みたりするが、チョゴリザやサルトロ・カンリで発揮された、著者自身の適時における適切な判断に裏打ちされているアドヴァイスであるから、読者に訴える力は大きいであろう。

のであるはずである。」明的行為ではなく、向人的であるよりも、むしろ厭人的なも明的行為ではなく、向人的であるよりも、むしろ厭人的なも、文

論として、なかなかの好文章だといってよかろう。という考えは、本書のなかで二度も述べられている。と思われる方を基調として、著者の登山論は展開されていると思われる方を基調として、著者の登山論は展開されていると思われるい。そういえば本書のなかの「ロマンチスト今西錦司」は人物い。そういえば本書のなかで二度も述べられている。この考えという考えは、本書のなかで二度も述べられている。この考えという考えは、本書のなかで二度も述べられている。この考えという考えは、本書のなかの好文章だといってよかろう。

たろうし、また遠征余話といった題下に集められるものもあるといくつかの遠征に関する主記述の合間に、それに関連した短くが挿入されているわけだが、そのような短い文章は、むしろ纒は、その一つは本書の内容の配列についてである。先に列挙しば、その一つは本書の内容の配列についてである。先に列挙しば、その一つは本書の内容の配列についてである。先に列挙しば、その一つは本書の内容の配列についてである。先に列挙しば、その一つは本書の内容の配列についてである。

ナスル紀行が加わっても、よかったのではあるまいか。 きには、さほど気にならなかったのだが、改めて巻頭から順序をきには、さほど気にならなかったのだが、改めて参頭から順序をきには、さほど気にならなかったのだが、改めて参頭から順序をさって読み直してみると、右のような感を深くしたわけである。 いわに、これについての独立の文章のないことが惜しまれる。 いわに、これについての独立の文章のないことが惜しまれる。 いわに、これについての独立のではあるまいか。

島田巽

"1863 * 1963 1 Cent Anni del Club Alpino Italiano"

イタリア山岳会百年史=百年祭委員会編一八六三年―一九六三年

載せるため、出版は翌年まで延ばされた。 イタリア山岳会は一九六三年の創立百年に当って、十三人のイタリア山岳会は一九六三年春にとして資料の蒐集に着手し、二十名で分担して一九六三年春にとして資料の蒐集に着手し、二十名で分担して一九六三年春には原稿が集まったが、同年九月七日の百年祭記念大会の記事を載せるため、出版は翌年まで延ばされた。

豪華版である(販価一万リラ)。 葉)、本文中に百余の半身肖像画と 山小屋のスケッチを載せた 葉)、本文中に百余の半身肖像画と 山小屋のスケッチを載せた 印刷され、本文九五五頁、全頁大写真 五二 葉(内カラー一八 印刷され、本文九五五頁、全頁大写真 五二 葉(内カラー一八

アにおける登山技術の百科全書ともいうべきものである。 録であり、著名登山家とガイドの列伝であると同時に、イタリよび活動をあらゆる方面から記述し、同山岳会の正確詳細な記して、過去百年間のイタリア登山界とイタリア山岳会の歴史おして、過去百年間のイタリア登山界とイタリア山岳会の歴史おして、過去百年間のイタリア登山界とイタリア山岳会の歴史お

ルヴィオ・サリオが当ったという。や、所見の相違はあっても、この種の項目により多数者が執筆

本書の編纂には、種々のやり方が考えられたが、多少の重複

,

◇イタリア登山百年史

八五百

ならって山岳会の結成を思い立って以来、セラを中心とする一ノ・セラ(当時の大蔵大臣)と三人の友人が、英墺両国の例に一八六三年八月十二日、モンヴィゾの頂上に立ったクィンチ

におけるイタリア山岳会のはたらきの重要さを指摘する。をであり、その間における登山の時代に入ったが、すぐれた登山れを記述し、今日は大衆登山の時代に入ったが、すぐれた登山れを記述し、今日は大衆登山の時代に入ったが、すぐれた登山れを記述し、今日は大衆登山の時代に入ったが、すぐれた登山家の流れを記述し、今日は大衆登山の目的および方法に関する論争群の先駆者から、現在のワルター・ボナッチにいたる登山家の列群の先駆者から、現在のワルター・ボナッチにいたる登山家の列群の先駆者から、現在のロルター・ボナッチにいたる登山家の列

にわたる研究を列挙する。 学、人類地理学、洞穴研究、動植物学、水路学、医学、その他学、人類地理学、洞穴研究、動植物学、氷・雪・雪崩、地形のいで 気象・風土学、地質・鉱物学、氷・雪・雪崩、地形

詳述し、次の二章を付してある。

→ 八六三年十月二十三日、トリノにおいて成立し、英、墺、一八六三年十月二十三日、トリノにおいて成立し、英、墺、一八六三年十月二十三日、トリノにおいて成立し、英、墺、

◇文献 四九頁

員、名誉会員、総会その他の集会、一八六三年現在支部および山岳会の創立以来の各種規約類、歴代会長、役員、初期会

辿るのは面白い。 地るのは面白い。 はないるのは面白い。 地るのは面白い。 はないるのは面白い。 はないるのは面白い。 はないるのは面白い。 はないるのは面白い。 はないるのは面白い。 はないるのは、 はないるのはないる。 はないるのはない。 はないるのは、 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるのはないる。 はないるいる。 はないるいる。 はないるいる。 はないるいる。 はないるいる。 はないるいる。 はないるいる。 はないる。 はない。 はない。 はないる。 はないる。 はない。 はないる。 はないる。 はない。 はないる。 はないる。 は

ガイドが十名であった。
は組織−一八五○年頃クールマイョールに出来たイタリア最は組織−一八五○年頃クールマイョールに出来たイタリア最近組織−一八五○年頃クールマイョールに出来たイタリア最近には、

らの任務と賃金を定め、労働補償基金に加入した。これが他の八八八年主要支部が一つのガイド・ポーター組合を作り、かれその組織および傷害補償の問題を重視して研究を重ねたが、一イタリア山岳会は、一八七○年いらいガイドの素質向上と、

実地試験の経過が載せてある。

・ポーターの採用および昇級のか、各支部で行なわれるガイド・ポーターの採用および昇級のほ会ガイド・ポーター全国組合、が成立した。右の 歴史 のほ支部にも波及し、一九三一年にはこれを統合して "イタリア山

(自ガイド契約ーガイドと登山者の契約の性質に関し、慣習、 は、その中にはK2遠征に関するガイド対山岳会の訴訟 などの興味ぶかい記事があり、わが国でも将来起こるかも知れなどの興味ぶかい記事があり、わが国でも将来起こるかも知れなどの興味ぶかい記事があり、わが国でも将来起こるかも知れなどの興味がかい記事があり、わが国でも将来起こるかも知れない問題について参考になる。

◇イタリア大学生山岳会 Il Club Alpino Academico Italiano 一九頁

山岳会の歴史。 名によって会の内部に成立した、ガイド無し登山を趣旨とする名によって会の内部に成立した、ガイド無し登山を趣旨とする

◇青少年登山百年史 一四百

術書の出版等を行なった。戦後の調査によって学生生徒の体力れた。政府も体育に留意し一九一○年文部省は全国の学校が一れた。政府も体育に留意し一九一○年文部省は全国の学校が一地がありに一日は遠足することを定め、第一次大戦まで実施され好が、第二次大戦後同様の定めは広く行なわれず永続による。よりでは、東京の参加を歓迎し、殊に青少年登山の奨励と訓練に力を入設する。

の登山に伴う危険、その他の問題に触れている。 が等を実行している。本章は、この歴史を述べると共に青少年が等を実行している。本章は、この歴史を述べると共に青少年員会を設けて研究し、学校の登山旅行、夏休み中のキャンピン低下がわかって以来、文部省はスポーツを奨励し、山岳会は委

◇登山学校 一二頁

各支部で登山学校を開く一方、本部に登山学校全国委員会をも支部で登山学校を開く一方、本部に登山学校全国委員会をしてある)支部に属するもの二七。

◇遭難救助 一五頁

古までの経緯と、救護隊の活動を詳述してある。 年イタリア山岳会遭難救護団が組織された。本章にはそれに至年イタリア山岳会遭難救護団が組織されたが、一九五四て各地方で救護所が設けられ救助隊が組織されたが、一九五四の重要が取り上げられ、必要に応じるまでの経緯と、決護隊の活動を詳述してある。

◇スキー登山 二二頁

◇欧洲以外におけるイタリア人の登山 一○七頁ケープまで旅行したフランチェスコ・ネグリが、最初にスキーケープまで旅行したフランチェスコ・ネグリが、最初にスキーを用いたイタリア人であり、一八九七年ロイチ中尉がこれを試を用いたイタリア人であり、一八九二年欧州極北のノース・

び台湾登山を記す)、アフリカ、中米、アラスカ、グリーンラの島屿(ピエロ・ギリョーネとフォスコ・マライーニの日本及ルム、ヒンズークシュ・アフガニスタン、中央アジア、アジアアジア、コーカサス、小アジア、イラン、ヒマラヤ・カラコ

リア登山家の活動のあとを詳述する。 ンド、北米、南米、大洋洲、ハワイ、即ち全世界にわたるイタ

◇山小屋と避難小屋 六七頁

は次の通り。 のスケッチと、すべての小屋の表と分布図。その数と利用状況 ら、戦中戦後の状態、その経営に伴う諸問題を記し、主な小屋 イタリア山岳会所属山小屋および避難小屋の建設の 歴史か

· <u></u> -	九万三三	- = = =	八、九六〇	七三
	71.111	1111		711
	八二八	三八〇		
_	九四六	四一九		一九〇
	九六三	四四三		一九

二九頁

図面および写真入り。

◇山小屋中央委員会 三頁

[小屋の建設と管理を全国的見地から調整する 仕組 みの 説

カラビナ、その他に及ぶ。一八九八年イタリア最初の登山技術 ◇刊行物 「(ジュリオ・ブロシュレル著)の興味ある記事を転載する。 昔からの技術と装備の変遷を説明し、今日のピトン、ボルト、 ◇登山技術と装備の進歩 四七頁

> 一定期刊行物 三三頁

纂主任が相次いで今日に至る、その一人ずつの業績を詳述して 誌が刊行された。それまで出なかったのは会員数が少なく(約 二百名)、資金も不充分だったからだという。 爾来十二名の編 山岳会創立後二年たった一八六五年、はじめて年に四回の会

(1イタリア山岳案内記 四九頁 あるのは、如何にこの刊行を重く見ているかがわかる。

既刊一一冊の説明。 一八八〇年いらい出版された二四冊の説明。 | ル山小屋から山小屋へ (案内記)八頁

◇国民図書館 七頁

家の自署本多数。 トリノに在り、蔵書一四、五〇〇冊、稀覯書および有名登山

◇山岳映画 七頁

九〇〇年以降のイタリア山岳映画および映画祭の概説。

◇国民山岳博物館

山家の業績に関するあらゆる記念品をあつめている。本章は、 八七四年トリノ市の由緒ある建物に設けられ、イタリア登

この建物の由来とその内容を説明している。 漫画家と登山との関連を書いたものに、六つの漫画の複製を ◇漫画にあらわれたイタリア山岳会

四頁

添えてある。

Century of Mountaineering, 1857–1957"

A Centenary Tribute to The Alpine Club from The Swiss Foundation for Alpine Research. By Arnold Lunn, George Allen & Unwin Ltd., 1957. 263頁,原色挿絵8葉,写真16葉,索引17頁 25S

先ず、その内容からいうと、全巻を二十章に分かち、第一章 だ「山岳美の発見」と題して、古代ギリシャ人、ヘブライ人、は「山岳美の発見」と題して、古代ギリシャ人、ヘブライ人、は「山岳美の発見」と題して、古代ギリシャ人、ヘブライ人、は「山岳美の発見」と題して、未だ所謂、スポーツとしての登山ではないが、実際には山を登り初めた時代とでもいうか、この時代には牧師や山麓の猟を登り初めた時代とでもいうか、この時代には牧師や山麓の猟を登り初めた時代とでもいうか、この時代には牧師や山麓の猟を登り初めた時代とでもいうか、この時代には牧師や山麓の猟を登り初めた時代とでもいうか、第四章は「英国して、先ずイギリス登山界の父、フォーブストの先駆者」と題して、先ずイギリス登山界の父、フォーブスを語り、アルバート・スミスに続いてメンヒ、ウェッターホルを語り、アルバート・スミスに続いてメンヒ、ウェッターホルを語り、アルバート・スミスに続いてメンヒ、ウェッターホルを語り、アルバート・スミスに続いてメント、第四章は「英国して、大きないの登山に及び、例のアルフレッド・ウィルスとバルマとの登山に及び、例のアルフレッド・ウィルスとバルマとの登山に及び、例のアルフレッド・ウィルスとバルマとの登山に及び、例のアルフレッド・ウィルスとバルマとの登山に及び、例のアルフレッド・ウィルスとバルマとの登山に及び、大きないと、

頂争いの話も、この章で初めて出て来ている。

第五章の「英国山岳会」は、創立の動機、オリジナル・メン第五章の「英国山岳会」は、創立の動機、オリジナル・メンに、ウェンパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章にエンパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章にエンパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章にエッパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章にエッパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章にエッパー、レスリー・スティーヴン等の挿話が、次の第六章によって述べられている。

第七章は、「黄金時代のガイド連中」について述べられているが、バルマ、アンデレッグ、クリスティアン・アルマー、ラっエナー、クロッツ、カーレル等、スイス、イタリアの一流どっころが選ばれているのも当然のことだ。第八章は黄金時代が終わって、一八八二年のダン・デュ・ジェアンの登頂迄の間を称した「銀の時代の登山」として、この時代の登山はマンメリー、て「銀の時代の登山」として、殆んどイギリスの登山家によって登頂された時代であるが、一部はフランス、ドイツの登山家の活躍もこの頃に初めて現われ、メイジュの登頂とかツ登山家の活躍もこの頃に初めて現われ、メイジュの登頂とかツを山家の活躍もこの頃に初めて現われ、メイジュの登頂とかツでよってであるが、一部はフランス、ドイツの登山家の活躍もこの頃に初めて現われ、メイジュの登頂とかツィグモンディーについても述べられ、またガイドレス登山の勃興等についても述べられている。

よって多少のことは知っていたものの、ここで又更めて今迄知ー、レスリー・スティーヴンの章と共に、今迄に幾多の文献にているが、筆者もこれ等の連中については、前記の ウィン パクーリッジの人物評みたいなことが二十数頁に亘って述べられ続いてこの時代の代表的人物として、第九章にマンメリーと

らなかった挿話的なことが述べられているのは興味深かった。 らなかった挿話的なことが述べられているのは興味深かった。 この第九章において、マンメリーが英国山岳会に入会を拒否されたいきさつ等が述べられており、併せてラン自身の拒否されたって知っていたが、ラン自身のことが公の活字となって表われたのは、これが始めではないか……。拒否されている事実は その昔、ランの "Alpine Ski-ing at all Heights and Seasons" その昔、ランの "Alpine Ski-ing at all Heights and Seasons" たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 たのは筆者の知る限りでは、これが始めてだろうと思うので、 からなき拒否されたからといって、人の困るのを喜ぶような、そ 入会を拒否されたからといって、人の困るのを喜ぶような、そ 人会を拒否されたからといって、人の困るのを喜ぶような、そ 人会を拒否されたからといって、人の困るのを喜ぶような、そ 人会を拒否されたからといって、人の困るのを喜ぶような、そ

とう「A·C の会員になった……」と、僕は思わず同僚に叫んで ランが入会お断わりの電報を受取って悶々の情遣る瀬なく、が の理由も聞いていたわけだ。 クラブに入会お断わりなのだろうという疑問も当然起り、そ ており、 書が我々学生時代からスキーの本を始めとして数多く入って来 しまったことも覚えている。それ程日本においては、 パイン・ジャーナル誌を手にして先ず驚いたのは、ランがとう 誰だって不思議には思うだろう。それだけに、この章の ಸ್ತಿ "Oxford Mountaineering Essays" その名も知れ渡っていただけに半面、何故アルパイン・ 戦後久し振りで英国山岳会の会員名簿を見たり、アル 彼の "The Englishman in などを読めば、 ランの著

ら逍遥する件は、本書の唯一の感傷的場面とでも言おうか。リンデルワルドの谷を独り淋しくウェッターホルンを迎ぎながリンデルワルドの谷を独り淋しくウェッターホルンを迎ぎなが

けん、半面、昔ランの著書が入り始めた頃は、日本でも漸く冬棚登山が勃興し出した頃でもあり、前述の"Alpine Ski-ing at all Heights and Seasons"等については、『先蹤者』の著者等も判然筆者に、この本の教えを受ける処が多々あったと言っていたし、当時の『登高行』や『山とスキー』に発表した「春のか山」と「五月の立山」とか「火口原のスキー・ヒュッテ」等を読んで見れば、成程とうなずける個所があるのだ。「五月の立山」などは確か筆者の記憶に誤りなければ、この本を室堂と携えて行ったと思う。従って日本の冬期登山の初期は、アーノルド・ランの間接の指導によるものだと言っても過言ではないと筆者は思っている。

(一八八二年-ば誰しも異存のないフレッシュフィールド、アブルッチー公、 登山について述べられており、第十一章においては、遠征となれ への熱が抬頭して来たことに及んでいるが、これも当然の話で、 て興味深いものがある。 って今迄語られていないような、 れている。これ等四人の人物についても、他の多くの文献によ コンウェイ、 ロッキー、アンデス、ヒマラヤ、ニュージーランド等への遠征 コーカサス、ノルウェー、ピレネー、スコットランド、北米、 第十章はアルプスの著名峰が登り尽くされてから、 セラ等が「四人の海外遠征の偉人」として述べら 一九一四年)と併記してあるが、 第十二章は再び「アルプス」に戻って 挿話的なことも述べられてい つまり銀の時

控えるが興味ある個所である。

第十三章は「スキー登山と冬期登山」と題して述べている

スキー登山の早くからの提唱者のランとしては、

、当然述べ

るのも無理はないだろう。

下が立派な登山家で、そのお人柄についても賞讃の言葉を述

最後に秩父宮殿下にお供したことや

グリンデルワルドにおけるラン自身との交際の場面は、仲々駆 味ある一幕でもあるので、この件は筆者も先年、 トの頂上で邂逅して、レイ自身が感激した場面や、ライアンの の章で知った次第である。特にギド・レイがエギーユ・ヴェル イン・クラブでもブラックボール組であったということも、こ かったが、この章によって初めて詳しく知ったような次第であ て、ライアンという人物は勿論著書もなく詳しいことは知らな について詳しく数頁をさいている。ヤングは当然のこととし が、特にこの章でV・J・ライアンとウィンスロップ・ヤング 誰でも知っているような連中のことについて述べられている ッカー等その他アルプスの文献に興味を持っている読者なら、 ブロディッヒ、ギド・レイ、スイスのハスラー、ガイドのクル 名誉会員に推され、七十九座の四千米級の全部に登ったという ァネル、ハーケンの創始者フィヒトル、九十四歳で英国山岳会 初登攀者、 いて述べられている。エギーユ・ブランシュ・ド・プトレーの から第一次欧州大戦の間の欧州各国の著名登山家の業績につ 彼は相当の業績を残しながら、横柄な処があって、アルパ 『山・よき仲間』で引用したので、ここに敢えて再録は差し シーモア・キングとかダン・デュ・ジェアンのプフ 「会報」

> とだ。 細に亘って述べられているのは、我々としても何とも嬉しいこ て沢山あるが、特にこの百年史の一章で秩父宮殿下について詳 の名誉会員に列せられた方々は、ベルギー皇帝などを始めとし べているのは喜ばしいことだ。従来、高貴の方々で英国山岳

(1946)1967)に述べられているが、これによっても宣伝屋の称あるラン の登山家でもあるらしく、その著書"Delectable Mountains" の唯のお世辞でもないことは明らかだ。バスクという人は相当 員によって近着のアルパイン・ジャーナル (Vol. LXXII, May ついて一言も触れていないのは誠に残念だ」という書き出 dern Mountaineering in Japan,"の中に「秩父宮殿下のことに ーナル誌 (Vol. LXXI, Nov. 1966) に当方より寄稿した"Mo-ここで聊か余談に渉るが 殿下の生前を偲んでいる一文がダグラス・バスクという会 は楽しき本としてランも、 ――二、三年前のアルパイン・ジャ この第十六章で推賞してい

従来のオーソドックスの登攀法としては、最も立派な極致を行 この時の登攀は人工登攀の論議の対象にはならない 章で慎さんのアイガー東尾根登攀のことが述べられているが、 称し、この度の世界大戦にはさまれた時代に大いに発達したこ ドリル、アンカー等を携えて岩場を登攀することを人工登山と なったものであることを述べている。即ち、 とを述べ、この登山法に対する諸家の批判を述べている。この 第十四章は「鉄の時代」と題してピトン、カラビナ、ロ 次のようなことを レック

る。

「最も悪い、悪場で十八フィートの長さの棒を利用して登られた。(この丸棒の構造については特に慎さんの『山行』から別用すると――丸太棒の上、上端に鉤を付し、下端に三本の石突を確実に作った。これは岩壁の傾斜面に対し何時も三本の石突を確実に用いんためである――「山行」初版八二頁より)。この工夫は、アルプスの初期のガイド連中が屡々用いていた梯子に似ていアルプスの初期のガイド連中が屡々用いていた梯子に似ていアルプスの初期のガイド連中が屡々用いていた梯子に似ていてルプスの初期のガイド連中が展々用いていた梯子に似ている。山の構造を変えずに、その侭の状態にしておく梯子のような補助用具と、岩にピトンを打ち込んで山の構造、状態まで変な補助用具と、岩にピトンを打ち込んで山の構造、状態まで変な補助用具と、岩にピトンを打ち込んで山の構造、状態まで変な補助用具と、岩にピトンを打ち込んで山の構造、状態まで変ながあるのだ」とえて登攀するやり方との間には、根本的な違いがあるのだ」とえて登響するやり方との間には、根本的な違いがあるのだ」とえて登響するやり方との間には、根本的な違いがあるのだ」とないているのは独立に関する場合にある。

る。
三大壁の登攀について各々一頁大の写真入りで述べられていがランド・ジョラスの北壁、アイガーの北壁、所謂アルプスのグランド・ジョラスの北壁、アイガーの北壁、所謂アルプスのと、

の小遠征隊主義のことについても触れている。

大いで、この時代にアルパイン・クラブの会長を勤めた二人次いで、この時代にアルパイン・クラブの会長を勤めた二人の偉大なる登山家として、ファーラーとストラットの名が出ている。もう一人、この時代には恐らく一番活躍したと言われている。もう一人、この時代には恐らく一番活躍したと言われている。なりれ、登山家としても、また円満なる人格者としてかねこそなけれ、登山家としても、また円満なる人格者としてかねる。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがある。唯、この際、筆者の欲を言わせて貰えば、ストラットがもの言相、ウィンストン・チャーチルをして「この若年の英将校の手記は誰か戦慄なくして読みおわせようか……」と迄感激せしめた挿話の一端でも述べて貰いたかったのだが……。

第十六章は「第二次世界戦争中と大戦後のアルパイン・クラ第十六章は「第二次世界戦争中と大戦後のアルパイン・クラでのへだたりも何もないということを述べている。間には国境のへだたりも何もないということを述べている。

ング、クロード・シュスター、レオポルド・エメリーの人物評次いで、この戦争勃発時から戦後にかけての会長をやったヤ

を述べている。エメリーについては特に清簾潔癖な政治家として、チャーチルと並び称せられるような人物であったと述べている。ラン自身にしてもアルパイン・クラブに入会させて貰ったのは、エメリーとシュスターの推薦によったのださせて貰ったのは、エメリーとシュスターの推薦によったのだから、ここで一言述べることも当然ではあろうが、この三名については百年史の一頁を飾るにも当然なくてはならない人物だ。いては百年史の一頁を飾るにも当然なくてはならない人物だ。でにエメリーは一九五五年、モンテ・ローザ・ホテルの開業百年祭に出席、坐長格として名演説を試みて後、僅か数ヵ月にして会なったことも、筆者はよく知っていただけに、この章も亦面白く読んだ次第だ。

第十七章は「エベレスト」に全章を費やしているが、何しろ 第十七章は「エベレスト」に全章を費やしているが、何しろ

第十八章はエベレストに続くヒマラヤ巨峰の「偉大なる十年で一言も触れていないのは残念なことだ。 て一言も触れていないのは残念なことだ。

ている。

tain Writing "なる題名の中で「山に関する出版物に対する不"Mountain World "一九五五年号で、"Courage and Moun-第十九章は「登山文献の近代的傾向」と題し、曾てヤングが

時的の興味しか与えぬからだ」と言っていることは注目に価すらことだという書き出しで、登山を技師の報告の如く記録せよることだという書き出しで、登山を技師の報告の如く記録せよとの要望が、文学的表現を主とする山岳書を書くことの出来ない連中から出ている。そして、機械時代の科学的人間には、登山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって登頂、登攀山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって登頂、登攀山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって登頂、登攀山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって登頂、登攀山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって登頂、登攀山の筋肉的運動は機械的であり、人工登攀によって整頭、東京には、大衛的の東京とは、登山の筋肉の運動は、大衛的の東京とは、登山の指導によって表現である。

だ。

(ここでは人工登攀礼讃者の意味)が近代以前の登山者(ここでは人工登攀の勃興する以前の登山者のこと)が技術的に近代では人工登攀の勃興する以前の登山者のこと)が技術的に近代のことでは人工登攀礼讃者の意味)が近代以前の登山者(ここのは人工登攀礼讃者の意味)が近代以前の登山者(ここ)が大術的登山(人工登攀)書礼讃の連中は、近代登山者

重視していたとは思わない。例えば、古い大寺院のステンド・ワードに支援者を見出したが、私はホワードが、その説を自らプスに登って霊感を得たとか、感動を得たとか書いた連中の誇識を 皮肉ったものだが、ピューリタン的 アルプス登山者は ホ で、アルプス登山者は精神的に昂揚したことを述べ、アル 論文で、アルプス登山者は精神的に昂揚したことを述べ、アル

………ということを、マロリーなどの短文を引用して述べていくが、併し、中世の遺産を破壊したピューリタンを、処罰する権い。併し、中世の遺産を破壊したピューリタンを、処罰する権い。併し、中世の遺産を破壊したピューリタンを、処罰する権が、の山より受ける感動を書き表わした、美しい文学書のようなものもよいのではないか。但し、その表現があまり誇張し過ぎて、神がかりのようだから、それもよかろう、併し一方、登山者のもよいのではないか。但し、その表現があまり誇張し過ぎて、神がかりのようなのは感心しないが、一応 god という言で、神がかりのようなのは感心しないが、一応 god という言で、神がかりのようなのは感心しないが、一応 god という言葉は禁句にはなっているが、使っても差支えないのではないか葉は禁句にはなっているが、使っても差支えないのではないかずは禁句にはなっているが、使っても差支えないのではないかなない。

ての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をは国威発揚とか、民族意識の発揚が目的でなく、スポーツとしは国威発揚とか、民族意識の発揚が目的でなく、スポーツとしは国威発揚とか、民族意識の発揚が目的でなく、スポーツとしての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、をての登山の先駆者として各国登山者との親交、友好、調和、を

というよりも、何れを省くかに苦労したと言っているが、正に書を草するに当り、あまりに材料が沢山あって、何れを採るか以上で大体この書の内容の説明は終わるが、ラン自身もこの以上で大体この書の内容の説明は終わるが、

その通りであろう。

も恩義はあるわけだ。 たBBビンディングを、今以て後生大事に使っているし、ラン 接的指導者であると思っているし、その昔、ランが専ら推賞し るのだから、矢張りランでなけりゃ百年史は纏まらないだろう。 金時代の連中から始まって、現代の一流登山家と広い面識があ るのが妥当のような気もするのだが。併し、何んと言っても黄 ラックボール組であったこととも併せ考えて、ランの著者を見 あるかどうかは、筆者の如きが判る筈もないが、一応永らくブ というようなレヴューが載っている。この『百年史』もそうで られている。要するに「ラン自身の偏見で、間違いも沢山ある 対するアルパイン・ジャーナル誌の批評などでは、コッピドクや する人物も多く、先年出版された"Matterhorn Centenary"に 終わったかも知れない。なおランについては一部にはなお批判 来ないし、聊か筆者の好みに従ったような、片寄った内容紹介に 大冊に盛られた内容について、詳しく説明することはとても出 の言うテレマーク等も盛んに楽しんだのだから、ランに対して 筆者自身にしても、前述のように日本の冬期登山の発展の間 筆者自身も、ランの真似を言うわけではないが、あれだけの

あり、最近何十年振りかで未だ「あなたの推賞したBBビンデそれに昔、フトしたことからランと手紙の交換をしたことが

理念とし、百年の伝統をきずき、貢献して来たと述べている。

早速次のような返事が来たので序でに載せて置く。「ィングを今でも穿いて登っている」旨の手紙を出したところ、

Jungfrau Lodge 3825 Mürren Switzerland

20th January 1966

Dear Mr. Naruse.

It was a great pleasure to be reminded of our earlier contact many years ago. I am grateful to you for your translation of your article on the "Club Room at Zermatt."

I am afraid the multiplication of ski lifts is reducing to a very small minority those who prefer genuine mountain skiing on natural mountain snow.

Yours sincerely

Arnold Lunn

I have the happiest memories of Prince Chichibu with whom I did a lot of climbing. I was very sad when he died. I hope to ski this winter though I am nearly 78!

自らの無学も省みず、こんなことを言うのは僭越だが、昔、中自らの無学も省みず、こんなことを言うのは僭越だが、忠訳だの程は充分拝察仕るが、なるべく誰が読んでんで見てもご苦労の程は充分拝察仕るが、なるべく誰が読んでんで見てもご苦労の程は充分拝察仕るが、なるべく誰が読んでも判るような、判り易い日本語の言い廻しを切に望むものであも判るような、判り易い日本語の言い廻しを切に望むものである。

本お第十九章の"Modern Trends in Mountaineering Literature"の一章全部が省略されているのは、どういうことなっだろう。何故省略されたのか、また原著者との了解済みなら、のだろう。何故省略されたのか、また原著者との了解済みなら、のだろう。何故省略されたのか、また原著者との了解済みなら、のだろう。何故省略されたのか、また原著者との了解済みなら、ではないだろうが、原書にはない「モン・ブランの初登頂」とではないだろうが、原書にはない「モン・ブランの初登頂」というものが、「ランの本にはモン・ブランの初登頂に対するランの付けられている」とか、「モン・ブランの初登頂に対するランの付けられている」とかう理由で巻末に載っている。その時間の程にも感服を惜しまないが、こういうことは近頃の山岳書の翻訳の傾向なのだろうか。

(成瀬岩雄)

会 務 報 告

九六六年七月~一九六七年六月

◇七月理事・評議員会 松方、三田、 七月七日(木)ルーム 渡辺、加藤、村木、大塚、 松田、

川崎、 島田、 小方、 吉沢、石原、村井、藤井、折井、後藤、 住吉、 竹田、 広谷、平山、 倉知、 津田、 長尾、 、山本、 山山、 沼倉 望月、

一、六十周年記念展覧会報告の件

▽議事、報告

支部長会議開催の件 職員交替の件

五 新旧役員交歓会開催の件 職員関係諸規定検討の件

ルーム使用規定検討の件

八、図書閲覧並びに貸出規定の件 当番制実施申し合わせの件

九、その他報告事項

(詳細、会報二五三号参照)

◇支部長会議 七月三十日(土)国際文化会館

出席者 宮城=坂本、越後=藤島、信濃=高山、 石原、静岡=山本、関西=水野、山陰=佐野、東九州=野口 山梨=三井、東京=

> 松方、三田、 渡辺、 加藤、 大塚、 松田、飯野

▽議事、報告

一、会長挨拶

二、本年度理事会の方針説明

三、県外会員に関する件

各支部現況報告

(詳細、会報二五五号参照)

◇九月理事·評議員会 九月一日(木)ルーム

出席者 三田、加藤、 広谷、平山、住吉、 折井、藤井、佐藤、 倉知、 辰沼、村木、大塚、松田、 小方、山口、竹田、 深田、 飯野、 宫下、 吉沢、 川崎、 石原

▽議事、報告

二、実行予算案検討の件 一、支部長会議報告の件

三、各担当理事業務報告

支部報告

五、その他報告事項

◇十月理事・評議員会 十月六日(木)ルーム (詳細、会報二五六号参照

出席者 松方、辰沼、村木、松田、川崎、宮下、竹田、 小方、広谷、長尾、竹内、島田、堀田、中屋、佐藤、 住吉、 石原、村井

▽議事、報告

一、会報の三種郵便認可申請の件 遭難対策シンポジュウムの件

四、各担当理事業務報告 三、「山岳」、「山日記」編集状況報告の件

(320)

五、支部行事に関する件 六、その他報告事項

(詳細、会報二五七号参照)

◇十一月理事・評議員会 十一月十日(木)ルーム 出席者松方、渡辺、加藤、辰沼、村木、 住吉、小方、竹田、長尾、 石原、佐藤、 村井、 、広谷、 田村、三枝 倉知、 大塚、松田、 山口、竹内、 深田、 宮下、 藤井

>議事、報告

二、永年会員表彰の件 一、年次晩餐会開催の件

三、名誉会員推薦の件

五 雪崩研究会開催の件

「山岳」「山日記」「山」編集状況報告 遭難対策シンポジュウム開催の件

七、その他報告事項

(詳細、「山」二五八号参照

◇十二月理事・評議員会 十二月一日 (木) ルーム 出席者 松方、三田、渡辺、 加藤、辰沼、 松田、飯野、

沼倉 住吉、小方、長尾、竹田、平山、広谷、倉知、三枝、 島田、 宮下、 川崎、 藤井、

▽議事、報告

一、年次晩餐会開催の件

=; 備品貸出規定案検討の件

知床の自然保護に関する要望の件 山岳遭難シンボジュウム内容検討の件 「山日記」四十三年版編集方針検討の件

> 七、その他 六、「山岳」広告の件

(詳細、「山」二五九号参照

◇一月理事·評議員会 出席者 松方、渡辺、 竹田、住吉、小方、 村井、石原、沼倉 広谷、長尾、竹内、倉知、 一月十二日(木)ルーム 加藤、村木、大塚、 松田、 吉沢、 飯野、 川崎、 深田 宮下、

一、昭和四十二年度予算案検討の件

二、会員入会状況報告の件

三、各支部現況報告

「山岳」第六十二年編集者の件 昭和四十二年度役員候補者推薦の件

六、その他報告事項

(詳細、「山」二六一号参照)

◇二月理事・評議員会 二月九日(木)ルーム

出席者松方、加藤、辰沼、村木、松田、飯野、 長尾、平山、小方、倉知、深田、藤井、石原、 村井、 広谷、 竹田、 中田、

二、昭和四十二年度予算案概要説明の件 一、昭和四十二年度役員候補者推薦の件

三、その他報告

◇三月理事・評議員会 三月二日(水)ルーム (詳細、「山」二六二号参照)

出席者、松方、三田、辰沼、村木、松田、飯野、宮下、 山口、長尾、竹内、 竹田、 深田、村井、藤井、 折井、 石原、

>議事、 中田、 沼倉

一、通常会員総会開催の件

二、新役員推薦の件

昭和四十二年度予算案検討の件

ルーム移転の件

その他報告事項

(詳細、「山」二六三号参照

◇臨時理事・評議員会

三月二十三日(木)

ルーム

出席者 高山 竹田、 松本、 少大 三田、辰沼、 、長尾、 村木、 山山、 大塚、 住吉、 藤井、 松田、飯野、宮下、 村井、 吉沢、 竹内、 佐藤、 広谷 石原

▽議事、

一、通常会員総会開催準備の件

東京支部解散の件

三、昭和四十二年度役員候補者推薦の件

昭和四十二年度事業計画案検討の件

ルーム移転の件

◇四月理事·評議員会 四月六日(木)ルーム

出席者 小方、 松方、 深田、 、大塚、 松田、飯野、宮下、長尾、 村井、 島田、 中屋、堀田、 広谷、 石原、 竹田、 沼倉 竹内、

▽議事、 、報告

通常会員総会開催準備の件

Ξ, ルーム移転の件

その他報告 東京支部解散の件

> ◇昭和四十二年度通常会員総会 四月二十二日 (土) ドイツ東アジア研

究協会講堂 出席者松方会長以下九三名、委任出席二、三四七名

▽総会次第

一、開会の辞

二、会長挨拶

三、昭和四十一年度事業報告

松 松 辰

方

郎

方 沼

区

吉

支部報告

信濃支部(小里頼忠)、 富山支部 (中田勇吉)、 静岡支部 (山本朋三

五, 昭和四十一年度決算報告

郎)、東海支部(原真)、越後支部

(藤島玄

監查報告

全員異議なく収支決算を承認

七、昭和四十二年度事業計画案審議の件

松

田

雄

野 飯

П

末

延

野

享

昭和四十二年度予算案審議の件 全員異議なく承認

飯

野

享

(全員異議なく承認)

九、諸施行規則承認の件 (全員異議なく承認)

役員改選の件

島 田 巽

雄一、平山善吉、飯野享、竹田寛次、広谷光一郎、長尾悌夫、宮下秀 部節雄の十七氏を選任、会長、両副会長を含め二十氏に決定。退任され た村木潤次郎、住吉仙也、川崎巌、平山善吉、山口節子、小方全弘、竹 昭和四十二年度の理事として、加藤泰安、辰沼広吉、大塚博美、松田 深田久弥、野田三郎、酒井敏明、 倉知敬の八氏の労を謝す。 関口周也、大貫良夫、中島寛、丹

監事一名は牧野衛氏を新任。

(322)

氏の理事就任に伴う後任に沼倉寛二郎氏を選任 評議員は村井米子氏の任期満了に伴う後任に川森左智子氏、 深田久弥

沼

区

吉

十一、閉会の辞

「山」二六四号参照

◇五月理事・評議員会 野田、 藤井、 丹部、広谷 松方、三田、 吉沢、佐藤 折井、 長尾、平山、 渡辺、 五月十一日 、石原、 深田、 (木)ルーム 沼倉、 関口、 辰沼、 川森 酒井、 大塚、 、中島、 松田、 大貫、 飯野、 宮下、

▽議事、 報告

一、本年度理事会運営方針検討の件

二、常務理事互選の件

三、常任評議員互選の件 加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、丹部の八氏を互選

吉沢、藤井、中屋、石原、 佐藤、折井の六氏を互選

四、役員任務分担の件 報)、中島(山岳)、大貫(山日記 広谷(指導、婦人)、平山(図書)、長尾(医療、調査研究)、酒井(会 查研究)、大塚(海外登山、装備)、松田(総務、庶務、海外連絡)、 飯野(経理、山荘)、宮下(学生部、ルーム)、野田(東京都岳連)、 渡辺(自然保護)、加藤(総務)、深田(支部)、辰沼(遭難対策、淵 (庶務)、竹田(学生部、装備、山岳)、関口(集会、海外連絡)、

五、本年度各種専門委員会設置の件

集会委員会、学生部、婦人懇談会の十五委員会を設置 名簿委員会、図書委員会、調査研究委員会、神河内山荘運営委員会、 自然保護委員会、山岳編集委員会、 エベレスト委員会、海外連絡委員会、指導委員会、遭難対策委員会、 会報委員会、山日記委員会、会員

> 七、その他議事、報告事項 六、ルーム移転の件

(詳細、「山」二六四号参照)

◇六月理事・評議員会 出席者 大貫、吉沢、石原、 松方、深田、 沼倉、 辰沼、 六月一日(水)ルーム 大塚、飯野、広谷、 中尾、川森、松本、 長尾、 竹田、

関口、

▽議事、報告

一、本年度各専門委員会運営方針および構成に関する件

三、ルーム基金の募金に関する件 二、ルーム移転に関する件

四 実行予算案検討の件

五、支部長会議開催の件

六、その他報告事項 (詳細、「山」二六五号参照)

×

×

◇小集会

▽第二三○回 於·日本体育協会 四十一年七月二十五日 月

シルクロードの旅

深

田

久 弥氏

▽第二三一回 四十一年十一月十六日(水)

雪崩に関するシンポジュウム (会報二六一号参照

於・日本体育協会

▽第二三三回 四十二年五月八日(月)

於·国際文化会館講常

雪の世界

司会 金坂一郎氏

(323)

マイク・バンクス氏

(会報二六六号参照)

◎会場の関係で小集会としてではなく、東京文部主催の毎月第三水曜日

ビールパーティー

アフリカ・ケニア高原の話

ブカランラ登山

▽十二月二十一日(水)於・図書室ブカランラ登山

松

田

柳

子氏

林

知

彦氏

中

太

郎氏

▽二月十五日(水)於・図書室

ベルー・アンデス

▽三月十五日(水)於・図書室

◇主なる行事および集会

▽富士山頂診療所の開設。七月二十二日~八月十五日の二十五日間開設

▽東京支部二十周年記念山行。十一月三日。於・奥武蔵定峰高原、大霧▽東京支部二十周年記念パーティー。十月十九日。於・松屋サロンし、七○名の診療を行なった。

山。参加者四十名

(「山」二六三号参照

▽石川支部二十周年記念行事。十一月六日。於・金沢市観光会館(会報

二五九号参照)

○静岡支部主催第九回紅葉会。十一月十二~十三日。於·井川村白樺荘。

▽遭難に関するシンボジュウム開催。本会遭難対策委員会の 主催 に より、十二月十日、青山学院大学講堂にて開催。(「山」二六一号参照)り、十二月十日、青山学院大学講堂にて開催。(「山」二六一号参照) 名誉会員、永年会員推薦のあと、スピーチが行なわれた。出席者一八名誉会員、永年会員推薦のと、スピーチが行なわれた。出席者の主催 に よ

示された。なお、今年はルーム所蔵の全部の絵画も公開展示された。▽この一本展。十二月二日。年次晩餐会の会場の一隅に恒例によって展三名。(「山」二五九号参照)

▽第十二回東京支部主催スキー講習会。(「山」二六一号参照)

六一号参照)一月二十一日~二十三日。於・山田温泉。参加者七十六名。(「山」二一月二十一日~二十三日。於・山田温泉。参加者七十六名。(「山」二

▽東京支部婦人部主催スキー懇親会。

二月二十五日~二十六日。於・奥日光光徳沼、参加者九名。

坂倉登喜子氏

Ш

子氏

じ会場で春季懇親会を開催。参加者七十二名。(「山」二六四号参照)▽春季懇親会開催。四月二十二日(土)通常会員総会にひきつづいて同▽春季懇親会開催。四月二十二日(土)、ドイツ東アジア研究協会講▽東京支部解散総会。四月二十二日(土)、ドイツ東アジア研究協会講▽東京支部解散総会。四月二十二日(土)、ドイツ東アジア研究協会講

開催。東京から十二名が参加した。(「山」二六五号参照)
▽山形支部主催熊の肉とスキーの会。五月三日~五日。大井沢~月山で

□ 大暮翁碑前懇親会。五月二十日~二十一日、金山平で開催(「山二二六五号参照)

開催。(「山」二六五号参照)
▽第二十一回ウェストン祭。六月二日~四日信濃支部主催にて上高地で

▽第十回有志閑談会。六月二十四日(土)六義園・心泉亭で開催。出席

□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)
□六八号参照)

◇海外登山界との交流

▽本年度は三十ヵ国、四十八団体と Journal の Library Exchangeを行なった。

開催した。(「山」二五八号参照) ▽台湾省山岳協会訪日登山考察団来日。富士山、北アルプスに登山、九を団長とする十一名が八月五日来日。富士山、北アルプスに登山、九

▽外国人登山家との交歓会。十一月二十五日。於・OAGハウス。五十六名の参加者をえて盛会。(「山」二六○号参照)

際文化会館で歓迎会を行なった。(「山」二六三号参照) して富士登山に来日。本会ではレンキー夫妻を招いて三月十四日、国 して富士登山に来日。本会ではレンキー夫妻を招いて三月十四日、国

▽マライニ・ブンシャー・レビュファ 三 氏 の 歓 迎 会。四月二十四日 会であった。

た。出席者六十二名。(「山」二六六号参照)日、国際文化会館にて行なわれた講演会にひきつづき歓迎会を開催した。出席文化会館にて行なわれた講演会にひきつづき歓迎会を開催した。出席者では 五月 八

▽ネパール国マナンダハー氏来日。元外務次官のマナンダハー氏が六月

席者十一名。(「山」二六六号参照)

◇海外登山

一九六六年は別稿の如く三十五隊の登山隊が海外の山にでかけたが、 で東京文部婦人部ニュージーランド親善登山隊、山口節子氏他三名十二月~三月に、ニュージーランド親善登山隊、山口節子氏他三名十二月~三月に、ニュージーランドにでかけ、ウェリントン支部主催のホブキンス・バレイ・キャンプに参加(「山二六〇、二六二号および本号巻末二八頁海外登山年表参照)

二八頁海外登山年表参照)

▽海外登山審議会 昭和四十二年度国際スポーツ行事用外貨枠は九月十四日開催した海外登山審議委員会において、一ツ橋大=サラグラール四日開催した海外登山審議委員会において、一ツ橋大=サラグラールアン三、九○○ドルの四隊にそれぞれ割当てられた。(「山」二六○号アン三、九○○ドルの四隊にそれぞれ割当てられた。(「山」二六○号で照)

物の湯で開催されたが、参加者一○○名の中本会々員六十名が参加し、 ○ 第五回海外登山技術研究会 四月二十九日~五月二日まで発哺温泉天本会の計画も保留の状態が続いている。

た。(「山」二六八号参照)

◇岳界トピック

た。

本会に直接関係はないが、この期間に記録すべき次のトピックがあっ

▽富山県登山届出条例の施行。三月二十六日付公付されたこの条例が、 十二月一日から適用されることになった。(「山」二五八号参照

▽群馬県谷川岳遭難防止条例の施行。一月一日から適用になった。(「山 二六一、二六六号参照

▽文部省登山研修所の開設。六月末を以て立山の千寿ケ原 に 完成 し た (所長井上一男氏)。(「山」二六五、二六七号参照

⇔会報 ◇山岳 第二五三号~二六四号(編集代表吉沢一郎)を発行。第二五八 第六十一年(通巻一二〇号)を三月二十日発行。編集者望月達

◇山日記 号から題名を「山」と改める。 一九六七年版(第三十二輯)を発行。編集代表竹内通雄

◇名誉会員 氏(会員番号一六二番)を名誉会員に推挙した。 昭和四十一年十二月二日、年次晩餐会の席上、高木菊三郎

◇永年会員 内は会員番号 二月二日の年次晩餐会の席上「永年会員章」を贈呈された。(カッコ 本年度在籍五十年に達した左記七氏が永年会員として、十

八九)、 田中薫 目黒四郎 (四四四)、小島栄 (四五〇)、松本善二 (四五九)、辻荘一(四 (四九〇)、大島永明 (五一三)、佐々木健太郎 金

◇物故会員 こに謹んで哀悼の意を表する この期間に逝去された会員は次のとおりである。本会はこ

九六七年度役員

会 長 松方三郎

副 会 長 三田幸夫、渡辺公平

常務理 事 加藤泰安、深田久弥、辰沼広吉、大塚博美、松田雄一、飯

事 竹田寛次、平山善吉、広谷光一郎、長尾悌夫、 享、宮下秀樹、丹部節雄

理

事 松本熊次郎、牧野 酒井敏明、関口周也、大貫良夫、中島 衛

寛

野

五田三郎

監

常任評議員 吉沢一郎、中屋健一、藤井運平、佐藤久一朗、 石原憲治

折井健一、

評 議 部 員 長 島田 荒巻広政(秋田)、小林雄次郎(石川)、藤島 玄(越後)、 朗、三井松男、須賀太郎、沼倉寛二郎、 津田周二、伊藤秀五郎、水野祥太郎、中田勇吉、 巽、 掘田弥一、望月達夫、後藤幹次、 川森左智子 高山忠四

野口秋人(東九州)、水野祥太郎(関西)、三谷孝一(能

形)、三井松男(山梨) 形)、三井松男(山梨)、北川正次(宮城)、後藤幹次(山海)、伊藤弥十郎(福島)、北川正次(宮城)、後藤幹次(山本)、緑田、収(山陰)、山本朋三郎(静岡)、塚本茂樹(信本)、織田 収(山梨)

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LXII

Issued in April, 1968

Contents

(in English)
Cordillera Vilcabamba and Rio Urubamba (Peru), 1965By Yasushi Egami 1
Aconcagua, South Face-French Buttress, 1966By Makoto Hara 4
The Second Greenland Expedition, 1966By Kaneshige Ikeda 6
Tilitso Lake in the North of Annapurna, 1965By Yoshimi Yakushi 7
Hunter and Foraker, in Alaska, 1966By Hideo Nishigori10
Mt. Bona, in Alaska, 1966By Tamao Tokuhisa11
Darwin Range in Tierra del Fuego, 1966By So Amma13
Mountains in Bolivia, 1965
Cordillera Blanca, 1966By Tokiko Sakakura18
Koh-i-Bandakor, Central Hindu Kush, 1966 ······By Genichi Itabashi·····20
Mir Samir, 1966By Toshitaka Chuma22
Munjan Pass and its Surroundings, Central Hindu KushBy Shigeo Yasukawa24
(in Japanese, except the articles mentioned above)
Kazuma Jo, the first original member of J.A.CBy Toshio Fujishima 1
A short study on the ice-axe "Yamanouchi"By Ichiro Hirayanagi 101
The Emperor Meiji and the mountainBy Makoto Hirose 135
Trarersing the mountanis on the boundaries of Niigata Pref,By Ichiei Satoh 151
The North Face of Grandes Jorasses (Walker Buttress)By Toshio Itoh 189
The ascent of Mt. Fuji by Mr. Arthur F. Jeffreys in 1875By Iwao Naruse 280
In Memorium:
K. Takagi, S. Ishiguro, K. Isono, C. Saito, T. Wada 292
Book Reviews
Club Proceedings

Editor: Tatsuo Mochizuki

Associate Editors : Junjiro Muraki, Yuichi Matsuda Kanji Takeda, Hiroshi Nakajima

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Mukai Bldg. No. 23, Kanda Nishikicho 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo.

(April, 1967~April, 1968)

President: Saburo Matsukata

Vice-Presidents: Yukio Mita, Kohei Watanabe

Honorary Secretaries: Taian Katoh, Yuichi Matsuda

Honorary Editor: Tatsuo Mochizuki Honorary Librarian: Kyuya Fukata

Honorary Treasurer: Toru Iino

Auditors: Kumajiro Matsumoto, Mamoru Makino

Committee

Taian Katoh Kyuya Fukata Hirokichi Tatsunuma
Hiromi Ohtsuka Saburo Noda Yuichi Matsuda
Zenkichi Hirayama Toru Iino Kanji Takeda
Toshiaki Sakai Shuya Sekiguchi Koichiro Hirotani
Yoshio Nagao Yoshio Ohnuki Hideki Miyashita

Hiroshi Nakajima Sadao Tanbe

Council

Kanji Gotoh Ichiro Voshizawa Gen Fujishima Shuii Tsuda Hidegoro Itoh Tatsumi Shimada Shotaro Mizuno Yaichi Hotta Kenichi Nakaya Kyuichiro Satoh Tatsuo Mochizuki Kenichi Orii Kenii Ishihara Yukichi Nakada Kanjiro Numakura Matsuo Mitsui Unpei Fuiii Chushiro Takavama

Sachiko Kawamori Taro Suga

Chairman of Local Sections

Akita: Hiromasa Aramaki Yamagata: Kanji Gotoh
Miyagi: Tokuro Date Fukushima: Yajuro Itoh
Echigo: Gen Fujishima Yamanashi: Matsuo Mitsui
Shizuoka: Tomosaburo Yamamoto Shinano: Shigeki Tsukamoto
Tokai: Masao Kumazawa Ishikawa: Yujiro Kobayashi
Toyama: Yukichi Nakada Kwansai: Shotaro Mizuno
Sanin: Osamu Oda Fukuoka: Daisuke Suematsu

Kumamoto: Koichi Mitani Higashi Kyushu: Akito Noguchi

Cordillera Vilcabamba and Rio Urubamba (Peru), 1965

By Yasushi Egami

The Peruvian-Andes-Amazon Expedition dispatched by the Doshisha Alpine Society consisted of the following members:

Yasushi Egami	(age 29)	Leader, member of the Api Expedition in 1960	1
Shigeto Maeshiba	(27)	Vice-leader	
Takeshi Rito	(25)		
Seihei Iwata	(25)		
Mitsumasa Miyamoto	(25)		
Tetsuji Kawada	(25)		
Masami Ogawa	(23)		
Yoshiaki Sawa	(22)		
Reiji Horie	(22)		
Masayoshi Abe	(32)	TV. Cameraman	
Marcelino Morales (H	uaraz)	Porter	

On May 31st, 1965, a caravan to Salcantay began from a small village named Mollepata. It was almost a half day's ride by truck from Cuzco to Mollepata where we gathered 33 mules in cooperation with Raul Montes and his brothers.

Our original schedule was to stay over night at Pampa Soray and next day cross the Incachiriyasca Pass (4600 m). However, on accout of heavy snows on this pass, Raul Montes and his brothers insisted upon our returning to Limatambo village and then approaching to Salcantay from there. It seemed that they had completely lost intention to cross the Incachiriyasca pass. But our intention was to carry out the original schedule, so we spent two days for snow-shovelling on the pass, for the purpose of making a road for us and mules to pass over. It was a really annoying work.

Besides of this work, some members were sent out to make reconnaissance of the west ridge and the south ridge. As a result of it, we concluded that climbing the west ridge was just impossible, but that the south ridge had a slight chance, and yet the work seemed to be very difficult.

On June 3rd, we finally crossed the Incachiriyasca pass and down to Pampa Sisay. From this side we looked up at Salcantay with breathless interest. Coming down from the Incachiriyasca pass, we found a part of the ancient Inca-road. After crossing Pallcay pass, we arrived in the valley facing to the east side of Salcantay, where we set up Base Camp (4500 m).

On June 5th, another reconnaissance parties were sent out to the east ridge, the north-east ridge and also the north face. The east ridge was attempted once in 1956 by Dutch party accompanied Lionel Terray. They ascended this ridge, crossed the northeast ridge and then traversed the north face. Austria party also tried the northeast ridge in 1954. Unfortunately, they had to discontinue their climbing because of Fritz Kasparek's accident. In 1952, Franco-American Combined Party took a route on the north face and succeeded in reaching the top of Salcantay for the first time.

As a result of reconnaissance, we decided to attempt the northeast ridge which was the longest ridge of all in Salcantay. At that time, we had already expected various difficulties which would be met such as a part of east-wall; a large mush-room styled ice-wall confronting the whole north-east ridge; a sharp and undulating edge like a "crest" avove the north-east ridge; and another ice-wall that could be an exit to a plateau of the south peak.

On June 9th, we began climbing. First of all, we crossed the tail of the east glacier, climbed up the rocky ridge, and then back to the east glacier side again. After climbing up a steep-sloped couloir, we finally arrived on the north east ridge. We continued climbing for a while, and then Camp 1 was set up at the height of 5,000 m. Ropes of 100 m long had been fixed to the end of rocky ridge.

Another unexpected hard work for us was to approach Camp 2 from Camp 1 because of an ice-wall sharply stretched out over a plateau where we had decided to set up Camp 2. The ridge right avove Camp 1 became narrower suddenly, and traversing the steep-sloped snow wall, about 60°, was a really great matter. We had to descend to the lowest col and start to go up again. From then on, we continued the same conditioned climbing and ropes had been fixed continuously. The advanced members arrived at Camp 2 at 5,300 m on June 11th. There, we could look around a beautiful view of mountains of Cordillera Urubamba and especially a glaceful figure of Veronica (5,870 m) stood in front of our Camp 2.

Our next problem was to grapple closely with the east-face confronting us. We also found a dislocation on the ridge above our head. It looked like an alligator

opening his mouth, so we named it as "alligator's mouth". A grand slope of the east-face with stucked-out snow peak lied stretching far away above the alligator's mouth. This snow peak which really looked like "mushroom", stretched out about 10m over our head like a brim. It was impossible to make a detour either from the left or right side of the mushroom snow peak.

On the first day here at Camp 2, we could only climb about 100 m up to the point just below the mushroom snow peak. Then nexy day, on June 13 th, we broke through a tunnel at the right hand side of the mushroom snow covered with only thinner ice as compared with that of the other parts. It took three long hours to make this tunnel wide enough for a man to pass through. Making a tunnel in Andes had been tried before by the Japanese party at Alpamayo in 1963, and New Zealand Party at Mitre (Cordillera Vilcabamba) in 1962.

On June 14th, we still worked on the same tunnel, making it wider enough for a man to move with luggages. Meantime, we started to crash down the snow-brim of jagged ridge which stretched over the tunnel.

On June 15th, all of us took a good rest all day long. Next day, we again engaged in making a route on this crest-like ridge. Fritz Kasparek's accident in 1954 was believed to have occurred around this area.

On June 17th, our Camp 3 was constructed on the plateau located on the crest ridge. 800 m long ropes had also been fixed continously from Camp 2 to Camp 3. Our precious efforts during the five days had solved the most difficult problem on the northeast ridge and 300 m height was completely secured at last.

On June 19th, in order to make all members' climbing safer and surer, Camp 4 was set up on the east shoulder of the south peak (5,900 m). Although crevasses were seen here and there, a route up to the Camp 4 was completely different from the ones we took so far.

On June 21st, we descended the ice-wall about 50 m from south peak, then we finally reached the summit of Salcantay from the left side, contrary to Franco-American Party's route.

Members arriving at the summit on the first day were Rito, Iwama, Miyamoto and Ogawa and on the second day, June 22nd, Ogawa, Sawa, Horie and Rito.

Withdrawing work, however, was just beyond description as compared with that of the ascending, all members returned to the Base Camp safely on June 27 th.

Peaks we climbed besides Salcantay are listed as follows:

A peak of Rayusca	5,000 m	Jun. 2	Ogawa, Sawa
Quishuar (1st ascent)	5,775 m	Jul. 16	Rito, Kawada

Mellizos	5,230 m	Aug. 20	Kawada, Ogawa
(Minor peak of north-peak)			
Mellizos	5,300 m	Aug. 31	Iwama, Kawada
(North peak)			
Mellizos	5,410 m	Aug. 31	Iwama, Kawada
(South (main) peak)			
Cima-Roca Llosa	5,000 m	Aug. 27	Maeshiba, Kawada,
			Morales
"	"	Aug. 28	Ogawa, Horie
Nevado-Blanco	$5,250\mathrm{m}$	Sep. 3	Kawada, Ogawa

Riding on two liferafts from Coribeni Mission, north of Quillabamba, other party descended the Rio Urubamba that is a headstream of the Amazon, and arrived at Atalaya where Rio Urubamba joins in the Rio Apurimac. There, we changed our liferafts to a launch and continued to travel down to Pucallpa.

Aconcagua, South Face, 1966

-French Buttress-

By Makoto Hara

This expedition, which we call "Scientific and Mountaineering Expedition to Andes, 1966", was organized by Tokai Section of the Japanese Alpine Club in cooperation with Nagoya University, School of Medicine.

The purpose of this expedition, which is twofold, is as follows;

- To make researches in physiology of high altitude on the north face of Mt. Aconcagua,
- To climb the South Face of Mt. Aconcagua after finishing the researches above mentioned.

Members:

Kentaro Takagi, 55, leader, Professor of Nagoya University, school of Medicine.
*Kunitoshi Ishihara, 34, vice-leader, member of JAC (the Japanese Alpine Club).
Shigeru Ando, 36, instructor of Research Institute of Environmental Medicine, Nagoya University.

Tetsuo Nagasaka, 32, Staff of Department of Physiology, Nagoya University, School of Medicine, member of JAC.

Toshiyuki Takai, 32, electric engineer, member of JAC.

- *Takashi Nakaseko, 32, member of JAC.
- *Makoto Hara, 28, surgeon, member of JAC,
- *Kazutoyo Hashimura, 28, member of JAC.
- *Akihiro Ichikawa, 27, member of JAC,
- *Kenji Yairi, 24, member of JAC.
- *Akihiko Kuroyama, 23, member of JAC.
- *Yoshihiro Ogi, 23, member of JAC.
- Mitsumasa Takada, 31, member of JAC.
- *Naoyoshi Masuyama, 25, member of JAC.
- *Mario Quesada 25, member of Centro Andino Buenos Aires.

*Asterisked members participated in the climbing of the South Face, and the other members returned home or left the party on finishing the researches on the north face.

First, the party stayed at Plaza de Mulas (4200 m) on the north face of Mt. Aconcagua from Dec. 15, 1965 to Jan. 8, 1966, and carried on the physiological investigation of the members climbing to the summit by the route on the north face. The results are reported in the following journals;

Nagoya Journal of Medical Science, November, 1966.

Nagoya Journal of Medical Science, January, 1967.

Nagoya Journal of Medical Science, March, 1967.

Upon the completion of the scientific study at north face of Mt. Aconcagua, nine members of the team moved to Plaza Flancea of South Face of Mt. Aconcagua, where they established a base camp for mountain climbing on January 16, 1966. After several days of reconnaissance to the South Face, it was decided to take French Route which seemed to have the lowest objective risk. This route forms buttress. There was more ice found this year than usual. January 25.

Camp 1 was established on a rocky ridge at about 5100 m. Beyond the Camp 1, a route was opened up by fixed ropes and rope ladders. Rotten ropes used by French team 13 years ago were found here and there.

The first obstacle, Great Tower, was broken through via two routes. One was the route used by French and the other was Ice Couloir which was recently opened, and located in the right side of the French route.

We used the latter route as a loading route to Middle Glacier.

February 2.

Camp 2 was established at 5700 m in Middle Glacier. French ventured to do Rush Tactics to the summit from this point. Their great victory, however, resulted in a miserable climbing. After 4 nights of bivouac, all of them got frostbitten.

In order to avoid repeating their experience, it was decided to establish Camp 3 at Upper Glacier. We spent 16 days to break through the Rock Wall which stood between Middle Glacier and Upper Glacier, and to establish Camp 3. Among the 16 days we had three days of bad weather.

February 18.

Camp 3 was established at 6300 m on Upper Glacier.

February 23.

Four of the team left Camp 3. It became a stormy weather in the afternoon, and they made a bivouac on a rock ledge at 6700 m.

February 24.

It was a beautiful day. They reached the top after 10 hours of climbing the rocky ridge in which rocks, snow and ice were encountered one after another. It was just the time of sunset.

Then, they descended through the north face and arrived at Plaza de Mulas at 3 o'clock a.m. on February 25.

After finishing the attack on the South Face of Aconcagua, the team was devided into 3 small groups, and they traveled through Patagonia district.

The Second Greenland Expedition, 1966

By Kaneshige Ikeda

In 1965, the Nihon University Alpine Club sent a mountaineering expedition led by T. Miyahara to Schweizerland, in the east of the Greenland. The party tried to climb Mt. Forel and failed to reach the top because the party spent many days unexpectedly to approach the mountain. (see "Sangaku" vol. 61, 1966) In the next year, 1966, the second party of six members led by H. Nakajima was sent to the same district again to climb the mountains and to survey the district.

June 18 Sailed from Copenhagen for Angmassalik and landed there on the

27 th.

- June 30 Sailed for Kungmiut along the Angmassalik Fjord and landed at Sioralik in a small cargo boat hired at Kungmiut.
- July 1 Started for Mt. Forel along valley glaciers with a load of 700 kg on two sledges drawn by the members.
- July 25 Arrived at the south foot of Mt. Forel via the west foot of Rytter-knagten, 16' September Glacier, Glacier de France, Femstjernen and Paris Gletscher, and set up their base camp there.
- July 27 All the members started from the base camp at 0:00 and reached the top of Mt. Forel at 15:00. They came back to the base camp at 1:00 on the next day.
- July 29 The party was divided into two 3-member parties, and the first led by the leader climbed Perfekt (3000 m), and the second led by the deputy-leader, K. Ikeda, climbed Sydbjaerg (2800 m).
- Aug. 1 The first party moved to the north side of the Culdnaalene range and climbed five peaks in the range.

 The second party started to the northeast to survey the interior ice sheet beyond lat. 67° N. The party climbed three peaks on the way and came to the rendezvous on the Paris Gletscher round the Avantgarden range on the 7 th.
- Aug. 8 The British party of the Imperial College visited the camp.
- Aug. 9 The second party started from the camp at 4:00 and made the first ascent of Table Mountain (3000 m) from the south at 18:00. They came back to the camp at 5:00 in the next morning.
- Aug. 10 The whole party left the camp for home.
- Aug. 20 Arrived at Sioralik.

Tilitso Lake in The North of Annapurna, 1966

By Yoshimi Yakushi

The reconnaissance to the Central Nepal Himalayas by the Tomari Sangaku-kai (Tomari Mountaineering Club of Toyama prefecture) explored the Tilitso Lake and its neighbourhood in the north of Annapurna Himal, and made extensive tours of the Nepal Himalayas from the autumn of 1965 to the beginning of 1966. The members were as follows: Yoshimi Yakushi (age 29, teacher), Nobutaka Ito (29, horticulturist) and Seiichi Kanayama (23, student).

In 1950 the Tilitso Lake was visited for the first time by the French Annapurna expedition led by M. Herzog ("Annapurna, premier 8,000 m." Paris, 1951). They discovered this ice lake unexpectedly when searching for Annapurna I and called the lake "Tilicho" on the basis of the Indian Survey map. And besides they found there was a great topographical mistake on the map.

We gave attention to the unnamed peak (7,148 m) in the "Grande Barrière" The peak was already taken its photographs from Manang side by the Manaslu reconnaissance expedition of 1952 led by Dr. K. Imanishi ("Sangaku" JJAC, vol. 48, 1953). In 1958 the NW-Nepal scientific expedition led by Prof. J. Kawakita also took pictures of the peak from Dangardzong ("Sangaku" vol. 54, 1959). We could not get, however, further information and pictures. So I wrote a letter to Mr. Marcel Ichac, a member of the French Annapurna expedition, who had explored the Tilitso region and then ascended Muktinath Himal (6,250 m, by their report) in the north side of the lake. He gave me useful information and photographs ("Regards vers l' Annapurna" Paris, 1951). Then I asked some questions of Mr. Arthur Baumgartner. He had visited the Tilitso Lake after the first ascent of Khatung Kang (6,430 m) near Muktinath in 1956 (Die Alpen, ZSAC, Bd. 33, 1957). I was given his instructive reports and materials. And the Dutch Nilgiri expedition of 1962 paid a visit to the lake (The Himalayan Journal, vol. 24, 1962–63). But all of them departed there leaving the data about its area dissatisfied.

Under these circumstances the reconnaissance started, making it the principal purpose to explore the most fascinating and challenging Tilitso Lake and its surroundings in the north of Annapurna. But then I was surprised by an American,

Mr. Charles H. Bell's visit to my house after a year of return from Nepal. He, with only one porter, explored the Tilitso region in June-July 1964 and discovered the "Bahadur Basin" which was named by him. On his way he climbed the North Peak (ca. 6,000 m) in the north side of the lake on June 27 and ascended three peaks ("The Bump", "Harka Bahadur Peak" and "Banded Peak") surrounding the basin. Then he went down to the Marsyandi river via Manang. Moreover I heard from him that Mr. Douglas K. Bingham, a member of the American Peace Corps, had visited there twice. By Bingham's letters to me, he climbed the North Peak in August (July?) 1963 and reached only the shore of the lake in May (April?) 1964.

Two Americans think that Muktinath Himal of altitude 6,250 m does not probably exist and M. Ichac surely climbed the North Peak in 1950. They, also, give the name "Tirichho Peak" for our North Peak of north side of the lake. As to the latter we do not agree with them, and give the name "Tilitso Peak" for the splendid and unnamed peak of altitude 7,148 m in the Grande Barrière, because the Thakali people of Thakkhola agreed to our naming. "Tilitso" is a Thakali language. Sri Indra Man Serchan, Subba of Tukuche, taught it to us and added that "tili" means 'remote'. "Cho", fixed on the Indian Survey map, has the same meaning and pronunciation as the Tibetan language "tso" which means 'lake'. For that reason we spell "Tilitso" not to be misunderstood.

On October 1, 1965, we started from Pokhara with two Sherpas (Lhakpa Tenzing and Sona) and 14 porters. After six days' walk our caravan arrived at Tukuche, and reached Jomosomba on October 8. The Base Camp was established on October 11 at the west-shore of the lake, 4,850 m above sea level, via the Tsomotso (3,690 m) and the West Tilitso Pass (5,050 m) after two days' approach march from Jomosomba. Both the French and the Swiss reports told that the lake had frozen over. It was, however, not an iced one, but a rippling blue water that we could find. The Thakalis in those areas, Tukuche, Thini or Jomosomba, who knew well about it said that it did not freeze in autumn.

During our stay at the lake we made a round of it, searching for the route to the north ridge of Tilitso Peak and trying to attack the North Peak (ca. 6,000 m) in the north of the lake. The length of the lake, west to east, was 2.8 km by our survey. We had some clouds and slight snow almost every afternoon during the first half of our stay. Then it was very fine weather all day long and the wind changed to the north-west after the snow of October 18—19 about 20 cm deep. Temperatures at night fell from -10° C to -15° C at the Base Camp. After 17 days'

stay we left the lake, and turned back to Jomosomba on October 30. Since then we travelled about Holy Muktinath and returned to Pokhara on November 15, by way of the Marsyandi river.

The second tour was made for Namche Bazar from Kathmandu. At the foot of Khumbu Himal we explored the glaciers of Khumbu, Imja and Ngojumba from December 9 to 20. On the way we could luckily see the Mani-Rimdu, the greatest Lamas' dancing festival of Thangboche Gompa, on December 9. We took our way back to Kathmandu through the Arun river. It was a long walk of 18 days. Lastly we had a short tour crossing snowy Gosainkund. All of our tours and explorations were finished at the end of January of 1966, while we could enjoy our tours and observe the whole Himalayan Giants from Dhaulagiri to Kangchenjunga. We had a long spell of fine weather.

Hunter and Foraker, in Alaska, 1966

By Hideo Nishigori

Our expedition was organized by the Japanese Alpine Club, Student Section.

The six members were:

Hideo Nishigori	(25)	Leader
Yasuhiko Iso	(24)	Vice-Leader
Yasuo Kubota	(22)	
Takeshi Ogawa	(23)	
Yuzo Samura	(23)	
Kazuya Murayama	(23)	

We first aimed to climb Mt. Hunter's east ridge from the Tokoshitona Glacier but gave up the idea. The landing place looked difficult and it would have been hard to walk down the icefall between Hunter and Huntington; the walk out was important to us. So we changed to the west side.

Don Sheldon landed us on the Kahiltna Glacier at 2,100 m on June 3.

We placed Camp 1 at 2,745 m at the foot of a rock pinnacle and Camp 2 on the col at 2,865 m. After fixing ropes on the rock ridge and steep ice to 3,500 m, we pushed on and stood on the summit of mt. Hunter's north peak (4,441 m) on June 20 and bivouacked on the plateau. (First ascent by Beckey, Harrer, Meybohm, 1953. Second ascent by Choate, Hoeman, Johnston, 1963.) We returned to Base Camp on June 25. We suffered from melting snow, especially below 3,000 m Our second aim was to ascend Mt. Foraker (5,303 m).

On June 28 we moved camp to the foot of the icefall at 2,130 m. After a day's reconnaissance we broke through this rough icefall, from the top of which we turned to the right to the sharp snow ridge which ascends to the northeast ridge. We climbed this knife-edge to 2,920 m, where on June 30 we established Camp 1.

In the continuous bad weather we reached the northeast ridge and made Camp 2 at 3,520 m at the col, where we had to halt for three days. On July 7 we left Camp 2 at 1 a.m. and climbed the moderate northeast ridge, until at nine o'clock Iso, Samura and I stood on the summit in a strong wind. On the descent we sat out a white-out at 5,000 m—the ridge was an extensive slope—and got back to Camp 2 at 3:50 p.m. after an ascent of neally 2,000 m in one day. This is the third ascent of the mountain too and that by a new route. (First ascent by Brown, Houston, Waterston, 1934, from west. Second ascent by Duenwald, Richardson, 1963, by southeast ridge.)

We withdrew our camps in heavy snowfall and found that while we had been climbing, the condition of the icefall had changed very much. We came back to Base Camp in terror of avalanches and falling séracs. It snowed every day from July 1 to July 12.

We walked down the Kahiltna Glacier to Talkeetna in a week.

Mt. Bona, in Alaska, 1966

By Tamao Tokuhisa

We, Alpine Club of Tokyo University of Education, sent a reconnaissance party of two members over Wrangell Mountains in Alaska in the summer of 1965. They brought us, along with the success of climbing Mt. Wrangell (4318 m), the information that Klutlan Glacier would be the best route to the summit of Mt. Bona (5029 m). And in 1966, we Mt. Bona party of six members went over there and were successful in climbing it and two other peaks.

Meanwhile we had some geomorphic survey and physiolosical study at high altitudes with certain results and also in Fairbanks co-operated with the frostbite experiments at Institute of Arctic Biology of University of Alaska.

The details of the climbs go as follows.

The names of the members:

Tamao Tokuhisa (34) leader

Hideki Yamamoto (32)

Koji Saito (29)

Makoto Kobayashi (29)

Jiro Kemmochi (28)

Yoshio Inukai (24)

(Reconnaissance Party)

Katsuo Mitsui (32)

Takao Nagamine (28)

A summary of the procedure;

- July 24. Landed by light plane on Klutlan Glacier and set up the Base Camp at an altitude of 3050 m.
- July 27. In several attempts to find out the best route to the summit of Mt. Bona, Kemmochi and Inukai climbed a nameless peak of 4546 m located to the south-east of Mt. Churchill (4767 m).
- July 29. Set up camp 1 at 3450 m almost at the top of the glacier. Advancing upward on the glacier, had to take a great care about hidden crevasses large and small.
- July 31. Advanced farther up to the point of 4300 m just under the north ridge of Mt. Bona and there set up camp 2. Had our first attempt to get to the summit.
- August 1. The second attempt.
- August 2. Saito and Yamamoto got to the summit with the blessing of fine weather.
- August 4. Kobayashi, Kemmochi and Inukai ascended the peak again. Quite exhausting work these ascents were, though there wasn't any remarkable difficulty as far as the climbing technique required was concerned.
- August 5. The latter party of three started from camp 2 for Mt. Churchill with success. Step-cutting on the south ridge under the summit was rather a tough job.

- August 6—11. Were engaged in physiological experiments and geomorphical survey at the Base Camp.
- August 12. The light plane took us back to Glennallen.

Notes; The altitudes above are due to our altimeter and are identified to those shown in the map of U.S. Geological Survey.

Darwin range in Tierra del Fuego, 1966

By So Amma

In 1965 to 1966, Hokkaido University sent a scientific and mountaineering expedition to southern Patagonia and Tierra del Fuego. The expedition party, led by Dr. T. Tsujii, was composed of four botanists, three geologists, a cameraman and a doctor. The Botanical sub-party made a botanical survey in Isla Navarrino, central part of Tierra del Fuego, Rio Serano area in southern Patagonia and Isla Chiloe. The geological and mountaineering sub-party worked in the western Darwin range in Tierra del Fuego and Gray glacier area in southern Patagonia.

The geological and mountaineering sub-party, T. Saeki and four other members, departed from port of Punta Arenas in a Chilean navy boat on January 13th in 1966. And we landed on the beach of Bahia Escandallo in Seno Contraalmirante Martinez the next morning. Immediately we set up our base camp on the same place that the Italians to Mt. Sarmiento, led by Father Agostini, had made their base camp before.

On 18th of January, we crossed Martinez Fjord in a small rubber boat with engine and landed on the western edge of Cordon Navarro massif. We went up along the western glacier, named Kudahasu glacier, and made camp 3 on the upper ice plateau.

On 25 th of January, we had good weather after ten stormy days. T. Endo and M. Hashimoto got one unclimbed peak, about 1840 m in the western area of Cordon Navarro. At the same time S. Amma and T. Nishimura got another peak about 1480 m. As a result of this climbing, we concluded that there were no peaks

higher than 2000 m in this area.

Next day, another unclimbed peak about 1860 m was ascended by M. Hashimoto and T. Nishimura, located southward to the 1840 m peak.

Consequently we attempted to climb the highest peak in this area, situated at the eastern end of the massif. Next evening, it began to storm. Three members waited in a snow hole on the main ridge, but the weather did not improve in a week.

Then we returned to base camp in Bahia Escandallo, and there, we met four Americans, led by Mr. J. Miller. They had also climbed Cordon Navarro massif from Agostini Fjord.

On 5th of February, We walked up to Mt. Sarmiento along the Blanco glacier. In a few days, we made camp 2 below the southeastern ridge of Mt. Sarmiento.

On 8th of February, T. Saeki, T. Endo and M. Hashimoto tried to climb from the southeastern ridge, but they could not ascend higher than 1800 m because of bad weather. Then they waited for the next chance for ten days in camp 1, but a hard storm beat them down.

At that time, S. Amma and T. Nishimura made a geological survey along the shore of Martinez Fjord to get geological cross section of the western Darwin range.

On 25th of February, We were piched up by a Chilean navy boat "Colo colo", and returned to Punta Arenas two days later.

After the climbing of Darwin range, we spent about a month in making exploration trips around Gray glacier area in southern Patagonia.

Mountains in Bolivia, 1965

By Shigeyuki Okajima

Since the beginning of 1962 the Alpine Club of Asano High School had been doing an extensive research and study about climbing mountains abroad, and it was in 1965 that we finally succeeded in sending the Andes Expedition to an unexplored region of South America. We owe our succeessful climbing to the accomplishment made by the great foreign forerunners, such as some of the German, Italian, and

English mountain climbers. Also we extend our many thanks to the Club Andino Boliviano for its kind, friendly, and generous help during our stay there.

Outline of the expedition

 Objective: Exploration and climbing of the Pupuya group in the Andes, Bolivia, South America

2. Date: From March through August, 1965

Cost: ¥3.199.620 (\$9054.5)

4 members:

Junichi Makiguchi (27) leader

Keisuke Miyazaki (25)

Shigekazu Jodai (24)

Shigeyuki Okajima (21)

Terushige Ohta (21)

Hidekazu Ninomiya (21)

All the members graduated from Asano High School, Yokohama.

Report of the expedition

Mar. 2, 1965 Okajima and Ninomiya left Yokohama.

Mar. 29 The two arrived in La Paz, Bolivia, and went first to the Japanese Embassy. Started negotiating with the Club Andino Boliviano regarding the fee for entering the mountains and with customs (regarding) taxes. Began preparation research of the Pupuya group and other mountains.

Apr. 2 Makiguchi, Miyazaki, Jodai, and Ohta left Yokohama.

Apr. 28 The four arrived in La Paz. The spirit of the expedition was encouraged by the reunion of the all members after a month.

Started training and turning our condition in preparation for the climbing. Checked the food and the equipment situation.

The Pupuya group

May 11 Left La Paz on a truck for the Pupuya group. The next day arrived at Pupuya and negotiated with the Indians for the loan of the porters and llamas. Organized the caravan and put the load in order.

May 15 The caravan started along the unknown ridge and set up the first camp in the meadow over the pass. Reached an agreement to set up the Nv. Cololo Base Camp here and attack Nv. Cololo (5915 m).

Continued reconnoitering the area for the following two days.

- May 18, 19 Set up Nv. Cololo Camp 1.
- May 20 Miyazaki, Okajima and Ohta climbed Nv. Cololo. It was the second ascent following the first by a German party in 1957.
- May 21 Withdrew Nv. Cololo Camp 1 and returned to Base Camp. Started preparation for entering Pupuya.
- May 22 Drived the llamas all day into the meadow in the Pupuya group.

 It was a beautiful location surrounded by the untrodden mountains.
- May 23 Miyazaki and Ninomiya made the first ascent of Huarin (5520 m) and Asano Peak (5450 m). The good ice condition enabled them to climb both mountains the same day. Okajima and Ohta checked the equipment and food. Studying the result of the reconnaissance of the ice condition, decided on setting up the Advanced Base Camp at the cirque as planned in advance.
- May 24, 25 Moved the food and equipment stuff from the Base Camp to the Advanced Base Camp. Continued reconnaissance of the area and learned the possibility of a traverse from south to north along the main ridge of the Pupuya group.
- May 28 Miyazaki and Okajima climbed Cuchillo I (5655m), the first peak on the main ridge deriving from Cavayani.
- May 30 Miyazaki, Okajima, and Ohta started on a traverse along the main ridge, set up Camp 1 on the snowfield between Yanaorco (5550 m) and Cavayani, and made an ascent of Acamani (5666 m), the Southernmost peak on the ridge.
- May 31 The burden of 22.5 kg felt extra heavy on the shoulders during the climbing on the ridge at an altitude of 5600 m. Made an ascent of Cavayani (5704 m). Set up Camp 2 at the col between Cavayani and Canisaya.
- June 1 Climbed Canisaya (5706 m) and Casarara (5702 m) and arrived at the foot of Huelancalloc. Had a difficulty on Casarara because of the bad ice condition.
- June 2 The wind blew very hard. Fastened the crampons carefully tight. Finally standing up on the top of Huelancalloc (5836 m), sang our school song. It was the highest and last peak to climb during the traverse. Slided along the vast snowfield, came down on the glacier without a stop, and arrived at Base Camp at dusk. Having finished the traverse, took two days off for rest and preparation

for climbing the last two mountains.

June 5 Miyazaki and Ninomiya made an ascent of Coruquini (5810 m).

This success gave us a great pleasure since we had not expected to climb it first and it was much higher than we had thought.

Okajima and Ohta climbed Corohuari (5668 m), the main peak of the Western Mountains named by the Hitotsubashi University party.

June 6 Withdrew the A.B.C. and returned to the B.C. Miyazaki, Jodai, Okajima and Ohta started on a trip to some villages near the source of the Amazon River; Makiguchi and Ninomiya returned direct to Ulla Ulla.

June 11 The whole party safely arrived in La Paz and took a rest. Decided to climb Illimani with the members of the Club Andino Boliviano in order to enhance mutual friendship.

Nv. Illimani

June 19 Left La Paz with Ronie and Jorge of Club Andino Boliviano.

June 20 Set up Camp 1. Only the Japanese party rushed on the west ridge since the Bolivians did not seem to have technique enough to climb from the end of the west ridge of the north peak.

June 21 Miyazaki and Ronie climbed the south peak of Illimani (6,450 m).

June 22 Proceeded to Camp 2.

June 23 Set up Camp 2.

June 24 Miyazaki, Jodai Okajima, and Ohta entered Camp 2.

June 25 Miyazaki, Okajima and Ohta climbed the north peak of Illimani. This was the first ascent from the west ridge. Strong wind and sharp knife-edged ridge made the climbing more difficult.

June 26 Withdrew Camp 2 and Camp 1. Returned to Base Camp.

June 27 The whole party returned to La Paz by truck.

Thus finished up the Andes expedition. The party broke up on July 2 in La Paz, and each member took his own way to come back home—one went along the Amazon; one went to the Peruvian Andes and all the way up to Alaska; one made a trip around the United States via Mexico; and so on.

We believe that all the experiences each of us had at different places will contribute to our attempt for the next expedition. Our last member returned to Yokohama on March 29, 1966, and we were happy and grateful to have accomplished all our trips without serious mistakes or accidents.

List of Ascents

Cololo	5,915m	May 20	2 nd ascent	Miyazaki, Okajima, Ohta
Huarin	5,520 m	May 23	1 st ascent	Miyazaki, Ninomiya
Asano Peak	$5,450\mathrm{m}$	May 23	"	"
Cuchillo I	$5,655\mathrm{m}$	May 28	"	Miyazaki, Okajima
Acamani	5,666 m	May 30	2 nd ascent	Miyazaki, Okajima, Ohta
Cavayani	5,702m	May 31	2 nd ascent	Miyazaki, Okajima, Ohta
Canisaya	5,706 m	June 1	"	"
Casarara	5,702m	June 1	1 st ascent	"
Huelancalloc	5,836 m	June 2	3 rd ascent	"
Coruquini	5,810 m	June 5	1 st ascent	Miyazaki, Ninomiya
Corohuari	5,668 m	June 5	"	Okajima, Ohta
Illimani south	6,450 m	June 19		Miyazaki, Ronie
Illimani north	6,480 m	June 25	3 rd ascent	Miyazaki, Jodai, Okajima, Ohta

Cordillera Blanca, 1966

By Tokiko Sakakura

During the dry season (June-July) in 1966, the Edelweiss Club (one of the female alpine clubs in Japan) sent an expedition to the Cordillera Blanca of the Peruvian Andes. The members were as follows: Mrs. Tokiko Sakakura (leader, the president of the club), Mrs. Tsune Kuroishi, Miss Tamiko Miura, Mrs. Ryuko Matsuda, Miss Fumiko Suzuki, Miss Yoko Nemoto, Miss Tsuta Osawa and as a camerawoman, Miss Mayumi Kamei.

Although the main objective of the team was the climbing of the Nevado Pucaranra (6147 m), we had planned to spend the first 2 weeks for the acclimatization in the Caullaraju massif, southern part of the Cordillera Blanca.

When we were staying in Lima, we, fortunately, had a chance to meet Mr. Domingo Giobbi who was well acquainted with the Caullaraju group. He wes also just staying in Lima to prepare for the climbing of the Nevado Uruashraju (5735 m) in the Cordillera Blanca. Many useful bits of advice about the Caullaraju 180up were given to us, for which we had no words to express our gratitudes.

It was on the 13th of June that all members and our equipments were assembled in Huaraz.

On June 18th, riding precariously on a dirty truck, we left Huaraz for Caullaraju with our equipments. Tottering along the highway to Lima, we went on along the River Santa.

After 2 hours' drive, we reached Yanahuanca farm. Here we met the 3 arrieros and donkeys (burros) hired beforehand. They had previously started from Huaraz before our departure.

On June 19th, we crossed the Pampa de Lampas and reached at Quebrada Ocullo where we set up our base camp at 4600 m just below a tiny glacial lake. Two days later we established camp I at 5100 m on the glacier.

At 8 a.m. on the 22 nd, Mrs. Kuroishi, Mrs. Matsuda, Miss Nemoto and Pabro Morales, a porter, left camp I. By noon, they were on the summit of the Nevado Brazil (5636 m). It was the second ascent since Mr. Giobbi had climbed for the first time in 1961. Glacier conditions were mostly good and the climbing was rather easy except for a steep snow slope just below the summt.

On June 24 th, Miss Miura and Miss Osawa with 2 porters made the 3 rd ascent of the mountain.

On June 27th, we withdrew our base camp and returned to Huaraz on the following day.

Next 2 days in Huaraz were spent for buying some supplies and weighing our materials for each donkey (40 kg per a donkey).

On July 1st, the caravan which now consisted of the 7 members, 4 porters and 26 donkeys, 1eft Huaraz for Pucaranra along Quebrada Quelcayhuanca. I was ahead of them smiling airily on an old small horse-back.

After 2 days going, we set up our base camp at 4500 m in the center of a pasture. There was a glacial lake named Bayo-cocha about 100 m up from our camp.

On a glacier that dominates the lake, we placed our camp I at 5100 m. It was the 7 th of July.

On July 12th, we climbed to a snowy saddle on the south-east ridge, where we set up camp II at 5500 m.

At 5 o'clock on the 14th, Mrs. Matsuda, Miss Suzuki and Marcerino Morales, a porter, started for their attempt on the east ridge.

At 10 o'clock they reached the rocky ridge and found a fixed rope and an iceaxe which must have belonged to the Franco-Swiss expedition in 1957.

After they climbed a fragile rock pitch for about 150 m, steep snow-slope ap-

peared again. Just below 150 m from the summit, they were, unfortunately, cut off by a huge crevasse on the very ridge. It was already 2 o'clock in the afternoon. To their great dismay, they found it to be too much for them. Nothing could be done except reluctant withdrawal.

Belaying each other, they climbed down the steep steps as rapidly as safety permitted. But the darkness was complete by the time they reached the foot of the rock section.

When they got at camp II, it was already past midnight.

Koh-i-Bandakor, Central Hindu Kush (1966)

By Gen-ichi Itabashi

The expedition to Koh-i-Bandakor of Central Hindu Kusn in Afghanistan was held from June to September 1966 in commemoration of the 80 th anniversary of Tohoku Gakuin University.

In order to prepare for the main project, we sent two members of Kazuyoshi Matsukura and Yasushi Yomoda to Afghanistan for two months in the previous year and let them try Mir Samir and Shah Fladi of Koh-i-Baba.

The caravan to koh-i-Bandakor started off Kabul on the 25th of June, 1966 We chartered a bus to Dasht-i-Rewat along the Panjshir River. From Dasht-i-Rewat we, eleven members began to walk with 24 porters, a policeman and 23 horses. The total weight of our packages including foods was 1.5 tons.

On the 30th we passed Anjuman Pass (4,225 m.), where we first saw Kohi-Bandakor in the distance. As it was expected to be the highest peak of Central Hindu Kush, her sharp figure enchanted us strongly. We went down along the Anjuman River and crossed the Munjan River, and finally went up the Sachi River.

On the 7th of July, the 13th day since we left Kabul, we settled in the base camp. This site was used as a B.C. by the expeditionary parties of various countries. It faced to the south side of the peak and there was a broad dry river-bed between the mountain and the green grassed camp site. It was marvellous to see the south side of Bandakor in front of the tents. It was 4,000 m high. At a

corner of the camp site was a cairn in memory of Robert Wilson of British party in 1965.

There seemed to be three routes to attack the summit from here. The first route was to climb straight up south side of ice-fall, which was shortest. The second one was also from the south, but to reach the south-west ridge avoiding the ice-fall. The third one was to go up the Bandakor River to north side of the mountain and from there to reach the south-west ridge. We made a reconnaissance of these three routes and found that the first two had frequent stone fall, but there was no suitable camp site. We decided to take the third one. A policeman and two porters, Alamhorn and Isof, who were cook and janitor from Munjan stayed in the base camp. Isof hunted two antelopes with his antiquated gun.

We put the advance base camp right below the southwest ridge at 4,500 m. The route from the A.B.C. to the ridge was on the rocks and icy walls. First, we fixed a 200 m. rope on the rocks and settled a depot. Then we climbed the icy wall and built Camp 1 at 5,300 m. on the 18 th of July. On the 25 th we built Camp 2 on the south-west ridge at 5,000 m. The last camp was established on the 27 th at 6,100 m by attack members, Matsukura, T. Satoh and Kurose.

It had been snowy and foggy every afternoon since we had entered the mountain zone. For instance, we had 40 m.m. snow fall at Base Camp on the 16 th of July.

At 4 o'clock in the morning of the 28 th, the three attack members began to climb. The sky was clear but they were hindered by sudden blows of wind at times and their toes were chilled by severe cold. They traversed north side of the ridge. At 11 a.m. they reached a rocky step which was the foot of the last steep slope to the summit. At this point Kurose so much suffered from headache and nausea that he had to stay by the rock. Matsukura and T. Satoh continued to climb an ice-covered slope and reached the summit at 12:40. After they reported their success to the leader at A.B.C. by the transceiver, they found a cairn built by the German party. They began to come down at 1:20 p.m. They had to take a rest for two hours to be relieved of their exhaustion at the point where Kurose was waiting.

They could not come down to Camp 3 before dark. The supporting membes, Iriga and S. Sasaki came to get them. These five members tied each other with a rope and bivouacked in a zeltsack at 6,400 m. Fortunately the weather was fine all day long from this very day on, and they encouraged each other in the moonlight. The next day they withdrew Camps 3 and 2, and came down to Camp 1. On the 30 th all the members gathered at the advanced base camp.

On our way back, we came down along the Anjuman River to Jurm with eleven horses. At Jurm we chartered a bus and came back to Kabul on the 13th of August, via Faizabad and Kunduz.

The members are as follows:

ware amounted the		
Leader	Genichi Itabashi	(age 40)
Assistant leader	Ikuo Sasaki	(31)
	Kazuyoshi Matsukura	(29)
	Yasushi Yomoda	(28)
	Kohya Terashima	(28)
	Setsuro Sasaki	(27)
	Shigeru Iriga	(25)
	Takeshi Satoh	(23)
	Kimio Kurose	(21)
	Hiroshi Satoh	(19)
Medical Doctor	Yoshiaki Katoh	(41)

Mir Samir, 1966

By Toshitaka Chuma

Afghanistan Expedition of the Chiba University 1966 (AECU) was organized and sent by the Chiba University Himalayan Committee. The intention of the expedition was to ascend Mir Samir 6060 m, (our aneroid altimeter indicated 6235.8 m on the top) and make investigations into the Alingar valley in Nuristan. The members were as follows; T. Chuma, the leader (37 of age), S. Onuki (29), S. Tani (27), J. Chiba (26), N. Togashi (26).

On June 9, 1966 we landed at Kabul. After we had the permission of our mountaineering through Nuristan we left Kabul on June 18 with an interpreter (Najbullah) and the baggages of about 900 kgs in weight. One day's trip by bus brought us to Nanghalaju situated on the Alingar river, the starting point of the caravan to mountain. There is the Telephone Office of the Police there.

We departed upriver on June 20 with forty men hired in the village for transportation. During the early several days, we went through the villages on the main stream of the Alingar river, and day after day, we climbed up and down the passes. Between Nanghalaju and Kibist the villages seemed to be poor for the most part. On July 1, we reached the farthest village in this area, Pushol, and stayed there for two days to change the porters. In the upriver beyond Kibist, the valley of Alingar was very quiet, and we were pleased with little flowers in the meadow.

We wanted to take the route to Mir Samir on the side of Nuristan, but Mir Samir was situated far away from the main ridge, and was surrounded by upper valleys of the Panjshir river. The party with thirty-three porters went across the snowcapped pass of Chimor. And we set up Base Camp on the grassy terrace, the observation point of Mir Samir, at the altitude of 3900 m. It was the evening of July 10.

As the result of reconnaissance we chose a route to ascend the northeast ridge where long rugged and rocky peaks continued. The route would bring us the largest probability and safety of the ascent. We carried the whole necessary loads to Camp 1 on a snow-covered moraine, and on July 17 finished setting up Camp 2 on a narrow, windy and cold col which was striking on the upper part of its northeast ridge. The altitude of our camps was 4500 m and 5100 m respectively. We could go directly on the steep snow from Camp 1 to Camp 2. Three of us S. Tani, J. Chiba and N. Togashi got in Camp 2 as the attack members.

Mr. Chiba told us as follows:

"We, three men, spent one night at Camp 2 and next morning started to fix the ropes on the northeast ridge. We prepared four 6 mm—50 m nylon ropes. The first rope was fixed at the snow ridge. The third and fourth ropes were fixed on a traverse route over a steep incline. Both sides of the northeast ridge were so sharply cut down that we could not look down a glacier below our eyes 1500 m without any disturbance. It took us five hours to fix four ropes. It was fine in the morning and became cloudy in the afternoon. We returned to Camp 2 and got asleep early.

"On July 19, we left Camp 2 at 6 a.m. to attack the top of Mir Samir. It was mild weathor but cloudy. After one hour's climbing, we reached the fourth fixed rope. Then we fixed one more rope and went on climbing. The snow on the ridge was unsteady. The ice was so hard that we had to cut the steps with an ice axe. At 9 a.m. we stood at the foot of the great rocky peak which could be recognized from Base Camp, and found it impossible to climb this peak directly. We took the route on the right side of this peak, descended 20 m by the rope, traversed a face, climbed a steep incline with snowy rocks and then could stand

on the ridge. It had already begun to snow and blow. It was 3 p.m. We had to recognize that it was impossible to ascend the top of Mir Samir in a day. We worked two hours to make up a snow cave for spending the night. Because of coldness we could scarcely sleep in the night. Next morning it was fine. We started from the snow cave at 6 a.m. The route was on the thinnest ridge, so we traversed on the left side of it. After climbing an uneven snowy incline, we got to a col. Between this spot and the top, stretched only a wide and steep snow incline. It began to snow. Though we made haste, we could make little progress. The summit was often enveloped in fog. At last we reached the top of Mir Samir, at 10 a.m., July 20. We stayed at the top for about an hour taking photographs, and then left for Camp 2."

We returned to Base Camp on July 22. Over the summit of Mir samir, there was not any cloud, and we relaxed carefreely. On July 25, it was finest, and three men, Onuki, Tani and Togashi, got in a glacier to climb on Koh-i-Mosalas. They passed a small ice fall, trod through the penitente snow, stood on the summit and built the first cairn by themselves.

Early in the morning of July 27, we left the Base Camp that we should have no chance to visit again.

Munjan Pass and its Surroundings, Hindu Kush, 1966

By Shigeo Yasukawa

1. Members:

Shigeo Yasukawa, leader, age 40, professional writer.

Ken Aoyagi, deputy leader and liaison officer, 35, managerial staff of a publishing house (C.E. Tuttle Co., Inc.)

Shiro Shirahata, recorder and in charge of meteorogical observation, 32, professional photographer.

Takeshi Ishii, in charge of provision, 30, school teacher.

Hiroshi Hotta, in charge of equipment, 30, sales clerk of a sporting goods shop. Gaiki Ohashi, in charge of provision, 25, alpine guide.

Kunio Nagasawa, medical doctor, 23, medical student. Colbon Ali, afghan interpreter, 28, employee of Aliana Hotel.

2. Progress of Party:

- June 29 Two members of the party (Aoyagi and Shirahata) left Tokyo by air.
- July 3 The party arrived in Kabul, applied for a permission to enter the Wakhan Valley northeast of Afghanistan, which application was rejected by the Afghan authorities; changed the original plan and decided to climb the peaks around Koh-i-Bandakor, 6,660 m., from the Munjan Pass
- July 10 Main Party arrived in Kabul.
- July 16 Started from Kabul for Kunduz in an English Wanderer's bus; stayed at Spinzer Hotel.
- July 17 Kunduz to Taluquan; stayed at an hotel. Changed bus to a hired truck near Khanabad.
- July 18 Taluquan to Faizabad; camped near the Jurm River. Abandoned the truck at Kishim, where the bridge was broken and impassable by car.
- July 19 Faizabad to Jurm; stayed at Governor's Official Residence.
- July 20 Jurm to Fazaratesafe, terminal of the caravan on wheel.
- July 23 Fazaratesafe to Augegeself Camp-site accompanying a herd of 13 horses and men, with a soldier, on foot along the Anjuman River.
- July 24 Augegeself Camp to Roisewalshue village at an altitude of 2,400 m., passing through hamlets of Rovert and Madan.
- July 25 Roisewalshue to Iskazele village, passing through Palwara hamlet and Nawashawer Pass. (From Iskazele a way opens to Kabul passing through the Anjuman Pass.)
- July 26 Iskazele to Keron village (2,500 m.), which lies at the top of the Willy Pass; changed horses at Keron, a new herd consisting of 9 horses and 8 asses, with a replaced soldier. (Another route follows along the Munjan River, but it involves two crossings of the river.)
- July 29 Willy to Camp-site by the Munjan River; passed Magnol hamlet (3,140 m) and crossed a river running from the Koh-i-Bandakor Eastern Glacier.
- July 30 Riverside Camp to the Munjan Pass; pitched the Base Camp atop the pass at 3,860 m. above the sea level, close to an English party from Manchester; horses were sent back. Here, the party comprised 7 Japanese and two Afghans (interpreter and soldier.)

- Aug. 1 7 members from BC to C-1, aiming at ascent of Koh-i-Bandakor, 6,840 m. Two members remained at C-1 for route-finding.
- Aug. 2 4 members to C-1. 2 members went futhur up for finding the route.
- Aug. 3 6 members tried the North-east Ridge of Koh-i-Bandakor. 2 members from BC to C-1.
- Aug. 4 Gave up Bandakor because a steep ice wall of over 1,200 m. in the North Face blocked our way after an attempt of 150 m. climbing.
- Aug. 5 All equipment collected at BC.
- Aug. 6 Aoyagi and Shirahata first climbed Koh-i-Sefe, 5,100 m. starting at 8.30 a.m. and reaching the top at 18.10 p.m., with the Manchester party consisting of Cliff Meredith (leader), Brian Cosby, Steve Crowther and Pete Booth. (The English party named this mountain Koh-i-Pendal and its height measured by their altimeter, which was much more accurate than ours, to be 16,800 ft.) Camped at the top together. Meanwhile, other 4 members hauled the load up to C-1, near the right Munjan Glacier, spending the night at C-1.
- Aug. 7 Aoyagi and Shirahata descended from the left Munjan Glacier. All members to BC.
- Aug. 9 Yasukawa and Shirahata first climbed Koh-i-August, 5,020 m. and returned to BC. 5 members went up to C-1. Aoyagi met a minor accident with one of intercostal bones broken.
- Aug. 10 Hotta, Ishii, Nagasawa and Ohashi first climbed Koh-i-Munjan North Peak, 5,400 m. and returned to C-1. Yasukawa and Shirahata to C-1.
- Aug. 11 Yasukawa and Shirahata first climbed Koh-i-Quatre, 5,120 m. and Koh-i-Kiba, 5,200 m., and returned to C-1.
- Aug. 12 6 members established C-2 at 4,900 m. on the upper Munjan Glacier, and spent the night there.
- Aug. 13 Aoyagi, Shirahata, Ishii, Nagasawa and Ohashi first climbed Koh-i-Munjan, 5,530 m., the highest peak of the Munjan Mountain Range and returned to C-2.
- Aug. 14 6 members returned to C-1.
- Aug. 15 Shirahata and Ishii made the second ascent of Koh-i-Hallolgek, 5,100 m., first climbed by the Manchester party a few days earlier. Nagasawa and Ohashi climbed Koh-i-Castle, 5,400 m., up to a point 50 meters below the top.
- Aug. 16 All members at BC; held a farewell party with the Manchester party

- who would stay behind for another week or so.
- Aug. 17 Started a return caravan from the Munjan Pass to the hamlet of Sanglich along the Sanglich River. A caravan of 8 horses, 3 asses and 9 horsemen, following passed through Abdrusul Tuphana (fortress.)
- Aug. 18 Sanglich to Iskator hamlet.
- Aug. 19 Iskator to Zebak; camped near Zebak, alongside the Sanglich River.
- Aug. 20 Zebak to Balack by truck.
- Aug. 21 Balack to Faizabad; changed the truck and then to Talquan; stayed at Spinzer Hotel.
- Aug. 22 Talquan to Kabul, arriving at Kabul mid-night.
- Aug. 29 The main party flew from Kabul for Japan.

海外登山年表 -1966年-

(Japanese Overseas Expeditions in 1966)

松田雄一編

1966年に海外へでかけた登山隊の数は35隊に達したが、1965年度同様この中「山岳」の本文に掲載できたのは、紙面の関係で10隊にすぎなかったので、残りの隊について記録にのこす意味で、1965年と同じ年表形式に従って一括整理してみた。

この年表を作成するに当っては、昨年同様各隊の代表者に「海外登山遠征隊調査表」の用紙を送って記入してもらったが、一部書いて貰えぬものもあり、これについては新聞その他の資料により補足せざるをえなかった。また各隊とも地名、山名、人名等は英文名も併記して、日本語のよめない外国人にも判るようにしたかったが、資料に記載されていないものが多く、これらを調査してまとめる時間的な余裕がなかったので、やや統一を欠くところもあるが、その点は御寛容願いたい。

さて、1966年のこれらの隊の記録を整理して、気のついた点を二、三あげてみると、

- (1) ネパール, カラコルムが登山を禁止しているため, 初登頂を目的とした Major Expedition は一隊もなかった。
- (2) アコンカグア南壁、イエルパハー等困難なルートの登攀もあったが、他のほとんどの隊が2 受、3 登を最初から考えてでかけており、その点はいささか寂しい限りであった。
- (3) 1966年に日本隊として初めてコーカサスをめざす隊が3隊でかけた。この他チトラルへ入った1隊をのぞいては、概ね知られている地域であった。
- (4) 幸いなことに事故が少なく、死亡者はキナバルでの病死事故1件のみで、怪我人も少なかった。

等をあげることができるが、1966年はこれといった初登頂の記録がみられず、例年に比して低調であった。反面日本の海外登山も地についてきたともいえる。

なお参考までに、この 35 隊に登場した参加者の 延人員は 218 名で、この中女性は 15 名、本会の会員は66名が参加しており、ほとんどの隊の中心として活躍し、また本会の団体会員も 2 団体(支部を含む)がでかけており、本会と関係のない隊は僅かに 2 隊にすぎず、相変らず本会と海外登山が密接な関係にあることがわかる。

(注) 年表の Nos に※印のある登山隊は,その記録が 本文に 収録してあることを示し,また 隊長や隊員名の前に * 印を付したものは本会の会員である。

Nos	活動期間	目 的	55	事
* 1	1966. 6~9	コー・イ・バンダコ ール Koh-i-Banda- kor (6843 m) 第5 登	(30) *四方田靖(30) 寺島公 繁(27) 佐藤武志(23) 黒瀬2 *加藤義明(41) 行動概要:カブールからタ 用。それよりキャラバン14 え、コー・イ・バンダコール 稜にルートをとり登山行動2! (5200m), C 2(5900m), C 28日12時40分, 松倉, 佐藤の	
* 2	1966. 6~8		tion of Chiba University 隊長=中馬敏隆(37) 隊員= 業順一(26) 富樫信樹(26) : 行動概要: 6月18日カブー ュよりキャラバン開始,7月 サミール峠へ向かい,7月4 地に BC を建設。ヌリスタン るルートの偵察に向かい,7 リ(4660m) に初登するも, ンに落す面をもたないことを 月10日,パンジシール河の海動,北東稜にルートをとり 5100m に C 2 を建設,19日 後,20日午前9時35分,谷,成功。22日 BC へ下山。更には,コー・イ・セ・コンジュ	-小貫伸一(29) 谷修一(27) 千通訳=ナジプラ(Najbullah) -ル発,6月20日ナンガラージ 1日最奥の村プショールより,1日最奥の村プショールより,1月6日,コー・イ・ドクターミール・サミールはヌリスタと確認。サミール峠を越え,7頭 3900m の地点に BC を移り,13日 4500m に C1,17日 5600m の雪洞に ビバークの干葉,富樫の3名が第4登に25日には小貫,谷,富樫の三名(約5000m)に登る。27日 BC),8月1日カブールへ帰着。
* 3	1966. 7~8	中部 ヒンズー・クシュ, ムンジャン山 群での登山	Kush Expedition 1966) 隊長=*安川茂雄(40) 副隊 史朗(33) 石井武(30) 堀田引 喜(22) 行動概要:ワハン谷が不同	ュ 登山隊 (R.C.C. II Hindu 長 =青柳健(36) 隊員=*白簇 公司(30) 長沢邦雄(22) 大橋劉 可能だったため、中部ヒンズ 洋をめざし、7月16日カブール

発、カンズーツ、ファイザパード、ジェルムを経てムン ジャン峠に BC を設営。英国隊についでバンダコールの東 面を偵察したが、断念。その後ムンジャン峠周辺の未踏出 城で活動し、8月6日~7日コー・イ・セフェ(5300m)に 青柳、白羅が英国隊と合同で初登。8月8日コー・イ・オ ーガスト (5020m) に安川、白籬が初登。8月10日コー・ イ・ムンジャン北峰 (5400m) に堀田, 石井, 長沢, 大橋 の4名で初登頂。8月11日安川、白籠の2名でコー・イ・ キャトル(5100m), コー・イ・キバ(5200m)に初登頂, 8月13~14日コー・イ・ムンジャン主峰(5600m)に青柳 以下6名で初登頂。8月16日白籏、石井の両名コー・イ・ ハロルゲッキ (5300m) 第2 巻。帰路は8月17日 BC を撤 収してサングリッジへ下り、カブールへ帰着。 文献:安川・白籏著「アフガニスタンの山旅(あかね書 房刊)、「山と溪谷」335号 (1966年11月号)、「山岳」62年

219百参昭

チトラル

Nos	活動期間	目	的	与背		事
4	1966. 7~8	査とブニ	・ゾム Bu-	隊員=*雁部貞夫(27) ン・モハメッド(20)	小田川兵吉(29) : ~8月4日 チトラ ジワル谷の奥グラム らし, サラグラール。 (200m 級の山々と, で探査。18日小ゾッ 22日ブニ村に到着。 の地点まで達した;	通訳=ゴオーラ ルに滞在,5日 ・シャールに到 、ウルゲント, それらの山から ホ・ミール(約 。26日迄ブニ・

アラスカ・カナダ

Nos	活動期間	目	的	后	事
* 5	1966. 4~9	ter(4441m) フォレイカ Foraker (第3登, お ディアン・	第3登, - Mt. 5303 m) よびカナ ロッキー	日本山岳会学生部アラスカ・カナダ登山隊 Alaska & Canada Mountaineering Te 隊長=*錦織英夫(25) 隊員=*磯弥須彦(24 佐村雄三(23) 村山和哉(23) *久保田保雄(2 行動概要:シアトルを経由し陸路 5 月30日 キートナに集結。6 月 3 日空路 カヒルトナ の地点に BC を設営、西尾根よりハンターを	am))*小川武(23) 2) 日登山基地タル 氷河上 2134m

			19日 2987m の C 2 より頂上に向かい, 20日午後8 時全員登頂に成功。その後 BC をフォレイカーの東麓に移し, 7月7日東面の新ルートより錦織、磯、佐村の3名にて,フォレイカーの第3登に成功。帰路は56 km のカヒルトナ 氷河を歩いて下山。7月28日よりアラスカ・ハイウェイを南下,8月4日ジャスパーに入り,8月8日全員ロブソン(3954m)に登頂。更に8月17日、磯、久保田 はコロンビア(3747m),錦織、小川、佐村、村山の4名はエディスキャベル(3363m)の両峰に登頂。8月22日シアトルへ下山。 文献:「JAC 会報」254号,256号,「山岳」62年169頁参照
※ 6	1966. 7~8	ボナMt. Bona(5029 m) 第4登, チャー チルMt. Churchill (4767m) 第2登	sity of Education Alaska Bona Expedition)
7	1966.6~7	ブラック・ラピッド 氷河 Black Rapids Glacier 周辺の山の 探査	青山学院大学山岳部アラスカ遠征隊 (Aoyama Gakuin Univ. Alaska Expedition 1966) 隊員=*栗林一路 (42) 単独 行動概要:6月13日アンカレッジ着。6月16日から19日までアンカレッジに近いアンカレッジ山塊(仮称)に入り,6月18日1411mのAピーク (無名降)と1447mのBピーク (青山ピークと命名)に登る。6月25日から7月1日までブラック・ラビッド氷河に入り,6月27日ガニサック・マウンテン (2148m)に登頂。6月30日 2179m の無名降に登頂、ワン・マイル・ピークと命名。 文献:栗林一路著「アラスカの山に挑む」雪華社(1967,5)
8	1966.6~ 10		大阪山の会北米大陸登山隊 隊長=*吉永定雄(34) 隊員=宮崎貞三(31) 大西保(25) 藤本節三(32) 岡嘉昭(30) 行動概要:6月12日ヴァンクーバー発,7月28日迄の間

セルカーク、パーセル、ロッキーの川を訪れ、セルカーク では Mt. Sir Donald (3297m) は6月16日, 7月25日の 2回試登し、不成功に終ったが、6月14日 Eagle Peak (2854m), 6月16日 Uto Peak(2932m) に登頂。 ロッキー では、6月26日 Mt. Assiniboine (3618m), Mt. Magog (3063m) の両峰に登頂。7月18日には Mt. Robson (3953m) を南面より登頂, 7月23日には Mt. Athabaska (3491m) にも登頂した。パーセルでは Bugaboo Group アスカ 7月8日 Snowpatch Spire (3063m), 7月9 日 Howser Spire (3399m), 7月7日 Bugaboo Spire (3176m) に登頂したほか 他の 5 峰にも登頂。 次いで 8 月 5日よりアメリカに入り、8月11日 Mt. Ranier (4392m) を南面より、8月22日 Grand Teton (4196m) を南面よ り、9月6日には Mt. Whitney (4418m) を東面よりそ れぞれ登頂。メキシコには9月18日入国, 9月27日 Popocatepetl (5452m), 9 月30日 Ixtaccihuatl (5286m), 10月8日 Citlaltepetl (Orizaba 5700m) にそれぞれ登 頂し、10月15日計画を終了した。

文献:「岳人」233号(1967年4月号)~235号(1967年6月号),「OAC会報」(遠征特集号), JAC会報257号

南部アンデス・パタゴニア

Nos	活動期間	目	的	5指	注
* 9	1965. 10~ 1966. 5	Aconcagu Face (702 登と高処医	na South E 1m)第3 で		

ーゴ・アルヘンティーノを探る。フィッツ・ロイ班(3名) 3月20日~4月29日。フィッツ・ロイ、トレ川塊および大 陸氷河を探査する。5月29日をもって全員帰国。 文献:「山岳 | 62年40頁参照,「JAC 会報 | 253号, 254 号, 256号,「山と溪谷」333号 (1966年9月号) ※10 1965.11~ 南部パタゴニア・ダ 北海道大学パタゴニア学術調査隊 (Scientific Expedi-1966. 5 ーウィン山脈の登山 tion to Fuego-Patagonia 1966. Hokkaido University) および植物学、地質 **隊長=** 计共達—(35) **副隊長=** *佐伯宣里(37) * 字間苷(29) 学調杏 **隊員=***遠藤嶺→(29) *橋本正人(27) *西村豪(28) 以上登 山, 地質班, 吉田利尚(29) 芳賀卓(25) *庵谷晃(24) 以上 植物調查班。 行動概要: 1月6日プンタ・アレナスよりフェゴ島ダー ウィン山脈のナバロ・サルミエント山塊に入り、1月24日 遠藤、橋本により 1860m の無名峰に登頂、同日安間、西 村も 1450m の無名峰に初登頂。1月26日、橋本、西村は 1840m の 無名峰に 登頂。最高峰サルミエントは南東稜よ り試登するも2月9日 1600m に到達したのみで失敗。2 月26日プンタ・アレナスに帰る。次いで3月1日より南部 パタゴニアのパイネ山塊に入り、セロ・ブランコ(1800m) に試登するも、悪天候のため、3月20日ガレイ氷河を標高 900m に達したのみで敗退。 4月1日プンタ・アレナスに 帰る。植物調査班はブンタ・アレナスよりナバリーノ島、 ティエラ・デル・フェゴ平原、セロ・パイネ、セラーノ川 等を調査する。 文献:「山岳」62年265頁参照,「山と溪谷」333号(1966 年9月号),「JAC会報」263号

ペルー・アンデス

Nos	活動期間	目	的	58	4
※11	1966.5~8	Caullarajı (5636m)第	a Centro 引2登, ネ ロランラ acaranra	(36) *松田柳子(30) *鈴木文子(30) *根本洋) *三浦多美子 子(30) *大沢 ョルキ(35), レス(27), バ フローレス, (18日~28日コ 登山し, 6月 カウヤラフ・ 沢, パブロ・

			20日ブカランラに向かい、7月2日ケブラダ・ケルカイワンカを遡り、ブカランラ南麓 4500mに BC を建設、7月7日 C1 (5100m)、12日 5500mの南東コルに C2 を建設して、14日、松田、鈴木、マルセリーノ・モラレスの3名にて登頂を試みるも、5920mの地点でクレバスにはばまれて断念。19日 BC 撤収、20日ワラスへ下山する。 文献:「山岳」62年246頁参照、「JAC 会報」254号、エーデルワイス・クラブ刊「Edelweiss」第30号(1967年2月)
12	1966.5~ 11	ネバド・イエルバハ Nevado Yerupaja (6634m) 第3登	
13	1966.5~ 10		東京農業大学山岳部個人山行 隊員=土井洋二(25) 吉田栄孝(25) ポーター=ルビン 行動概要:北米よりベルーに旅行。リマ――クスコ―― ワドキーニヤを経て、プマシージョ峰を試登し、6月3日 5900m まで達した。 文献:不詳
14	1966. 5~8	サラポ Sarapo (6143m) 第2登	日大三高山の子会ベルー・アンデス遠征隊("Yamanoko" Alpine Club Andes Exp. 1966) 隊長=島田泉(28) 隊員=栗橋紘夫(21) 中坪皓(21) 白井 基良(21) 武者孝幸(21) 行動概要: 5月3日横浜発, リマを経由してワイワッシュ山群に入り,シウラ・コーチャ畔に BC (4290m) を設営。BC よりサラボの東面にルートをとり,10日を要して

C1を建設,7月2日にC2建設。4日には400mの氷壁の4分の3を登って引き返し,5日は休養,6日C2を4時に出発,午後0時30分,中坪,武者の両名がサラボに登頂。8日BCへ下山。14日BC撤収,コルディエラ・コチャパタに向かい,ロデオ(4200m)にBCを設け,18日5590m峰に3名,5560m峰に2名が初登頂した。

文献:「JAC 会報」256号,「ペルー新報」1966年7月19日号,「山と溪谷」343号(1967年6月号)

コーカサス

Nos	活動期間	目	的	5篇	事
15	1966.5~7	エリプルース m) 登頂	(5633	mic Expedition) 隊長=中村太郎(35) 副隊 坂青々(32) 高橋修(31) ; (25) 牛窪光政(21) 佐藤? 行動概要: 5月28日ソラクワ経由イトコールに着 拠をおき,6月10日第13 失敗。いったんBCに下し 頂する。6月18日より再 日,鰺坂,井上,米田,4	車船バイカル号にて横浜発。モス く。ウクライナ国立登山学校に本 次のエリブルース試登を行なうも 山して待機。その間ピアタウに登 度エリブルースに向かい,6月21 牛窪,佐藤の5名登頂に成功。そ はいり,アラタウ登山基地を親善
16	1966.6~8	リダ地区での登	登攀お	pedition 1966) 隊長=*上田哲農(54) 副 隊員=青野恭典(27) 車義 (32) *芳野満彦(34) 行動概要: 日ソ文化交近 労動概要: 日ソ文化交近 で動概要: 日ソ文化交近 間ソ連に滞在し,その間レルル・アウズ・バシ(468) アリウェル(4350m)を上 (4100m)を田中、車が、 を松本、青野がそれぞれる は7月12日チゲッタ・カラ 7月18日にエルブルース	

17	1966, 7~8	中央カフカズ諸峰の 登攀および踏査	日本グルジア友好交流登山隊(横浜山岳会) 隊長=橋本金作(53) 登攀隊長=湖出昭雄(38) 隊員=石 井修一(34) 羽生哲夫(33) 山田一治(31) *池谷有爾(30) 杉山敬弘(29) 中島徹夫(27) 平山昌司(27) 内田昌子(27) 行動概要: 7月19日横浜発。ナホトカ,モスクワを経て 25日トビリシ着。29日カズベク村に至り、8月1日、湖出 以下7名にてカズベク(5047m) 登頂。5日アイラマ登山
			基地に着き、8日コルラ・パシ氷河を経てACをブラトウ(3700m)に建設。9日ナムクパメ(4278m)およびウナムソ(4000m)に登頂。次いで15日ウシュパ氷河を経てシヘリダ・キャンブ地にACを建設。16日シヘリダ峰(4000m)および 3780m ピークに登頂。更に17日には石井、羽生、杉山、池谷の4名にてチャトウィン・タウ(4380m)に登
			頂。AC を撤収してウシナバリ部落へ下山。22日トビリシ 帰着。モスクワ,ナホトカを経て30日横浜帰着。 文献:「横浜山岳会々報」 号(1966年7月),「JAC会報」257号,袋―平編「グルジアの山旅」あかね書原(1968.2)

ヨーロッパ・アルプス

Nos	活動期間	目	的	SE	事
18	1966.6~8	ドロミテおよ モニーでの6 の登攀	級岩壁関する	その6級岩壁に挑み,6月 書。次いで6月16日~19日 遂げ,6月25日~26日には こす。その後シャモニーに かの後ドリュー南西岩稜を	昭(23) にて、イタリーに入り、ドロミ 11日~12日チベッタ北西壁を登 チマ・グランデ北壁の第8登を マルモラータ南壁の第4登を果 移り、8月6日、5泊のビバー
※19	1966. 7~8	グランド・ジ 北壁の登攀。	関 い ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	行動概要: 7月18日シャ こBCを設営。24日エギー レートを登攀。29日~31日 -カー稜の第1回試登。 8 投ルートより登頂。12日よ 3日より4ビバークの後17 ジョラス小屋に到着, 19日	= 石井重胤(32) 伊佐忠義(24) モニーに集結, モンタンベール ユ・ド・レムのジャン・クジー・ グランド・ジョラス北壁, ウォ 月10日~11日, モンブランを一 りウォーカー稜を再び目指し、 旧北壁を完登, 18日グランド・ BC に帰着した。 号, 「岳人」228号(1966年11月

20	1966. 7~9	ドロミテおよびシャ モニーでの登山	山岳巡礼俱楽部ヨーロッパ・アルプス隊 (Alps team of Berg Wall Fahrt Klub.) 隊員=皆川捷三(23) *山田裕紀(22) 高木チエ子(25) 行動概要: 5月30日横浜港発 7月4日マルセーユに到着後、1967年1月15日帰国するまで、アルプス周囲の5ヶ国およびデンマークを旅行。この間7月~9月アルプスで登山した。登った山、壁は次のとおり。チマ・グランデ南壁(7月12日)、チマ・オベスト東壁、チマ・ビッコロ・コロデュ、ラバレット西壁、ビッツ・ベルニナ、メンヒ北西稜、エギーュ・ド・レム北々東リッジ、エギーユ・ド・ミディーンが、エギーユ・ド・ミディー・ア・スト東壁、エギーユ・ド・ミディー・ア・スト東壁、エギーユ・ド・ミディー・ア・スト東壁、エギーユ・ド・ミディー・ア・スト東壁、エギーユ・ド・ミディー・ア・ストリンが、大学には、カース・ア・ルート、コンタミス・ルート)、バビオン岩稜(2回)、グレボン文献:山岳巡礼俱楽部部報「GAMS」
21	1966. 8~9	オーストリア・アルプスの親善登山	1966年日本・オーストリア親善登山隊 (Japan-Austria Friendship Mountaineering Team 1966) 岩手県山岳協会 隊長=矢羽々文一郎 副隊長=矢羽々昭夫 隊員=菊地繋 人(35) 伊藤寿(34) 村上穀(30) 出堀宏明(29) 斉藤新悦(28) 佐藤時雄(27) 黒川富也(26) 伊藤恒延(23) 他にオーストリア山岳会員リック博士(39) 他3名同行。 行動概要:早池峰山麓の町、大迫町とオーストリアのベルンドルフ町の姉妹都市締結を記念して交歓親善登山を金画。シベリア鉄道にて、8月中旬オーストリアに至り、オーストリア・アルブスで登山。8月29日ダハシュタイン(3006m)、9月2日ビェルト・スピッツェ(3772m)、4日シュミロン(3606m)、8日グロース・グロックナー(3797m) にそれぞれ全員で登頂する。 文献:不詳
22	1966. 8	マッターホルン Matterhorn (4478 m) 北壁登攀	*高田光政(31)(日本山岳会東海支部) 行動概要:アルブス三大北壁の完登をめざしてヨーロッパに滞在中の高田光政は、ドイツ人ゲルハルト・パウアー氏、チェコ人シルビア・キシルコワ嬢と3人でマッターオルン北壁に挑み、8月10日ヘルンリ小屋を後に北壁へ向かい、途中1ビバークののち、8月11日19時10分、山頂に立ち、21時30分ソルベイ避難小屋に到着した。 文献:「山と溪谷」335号(1966年11月号)

グリーンランド

Nos	活動期間	目	的	12	事
※ 23	1966.6~	フォーレ	ル Mt. Fo-	日本大学第2次グリーンランド登山隊	(Nihon Univ.

rel (3360m) 第2 登 | The Second Greenland Mountaineering Expedition) 10 とアパンガーデン 隊長=*中島啓(30) 副隊長=*池田錦重(27) 隊員=五月 Avantgarden 山塊 女次男(27) *神崎忠男(25) *尾上昇(23) *三好勝彦(22) での登山 行動概要: 5月20日構浜発、シベリア経由にて6月1日 コペンハーゲン着。6月27日、東グリーンランドのアンマ スサリック着、7月1日準備を整えシオラリクより2台の 橇で奥地に向かい、7月27日フォーレルの第2登を全員に て行なう。次いで7月29日、フォーレルの北にあるパーフ ェクト(3000m)の第2登を中島、尾上、三好にて行ない。 同日,池田,五月女,神崎はシドベルガ (2800m) の初登 を行たう。次いで隊を2つに分け、奥地アイスキャップ調 査隊(池田, 五月女, 神崎) は、8月1日三峰(2900m)。 3日ブルー富士(3020m), 5日マイナー・ピーカ(2750m) に登頂後、アバンガーデン山塊を一周。他の一隊(中島、 尾上、三好)はグルトナーレン山塊の未踏山城をめざし、 8月2日スノー・ドーム (2600m)、4日スノー・ピーク (2600m), 5日五本槍の第1峰 (2500m), 6日はこの山塊 の西にあるロバの耳 (2600m), (2400m) 等3峰に登頂。 その後8月9日には池田、五月女、神崎はテーブル・マウ ンテン(3000m)に初登頂する。8月1日帰途につき、20日 上陸地点のシオラリクに帰着、アンマスサリック、サンド P・ストルム・フィョルドを経由してコペンハーゲンに厚 り、10月1日構浜に帰る。 文献:「山岳」62年63頁参照,「JAC 会報 | 254, 256,

アフリカ

Nos	活動期間	目	的	5篇	都
24	1966. 4~9	アフリカ大と親善と総	2000 Maria (1900)	PAN Mt. Climbing Goo 1966) 総指揮=尾関広(70) 隊長= 貫司(36) 隊員=臼井一郎(重田忠(34) 内田良平(30) 墓 林理伯(24) 立沢貞彦(29) 飯 行動概要:エチオピアー ンザニアーザンピアーマ 国を訪れ、登山と親善訪問を とおり。 〔エチオピア〕 ①ラス・ダシャン(4620m にて登頂。	機断親善神奈川県登山隊 (JAdwill Mission to Africa, e植木知司(36) 副隊長=亀井33) 中川弘(40) 大熊昭三(37) 高貫辰男(25) 望月忠義(24) 小島不二雄(23) 植田廉之助(36) -仏領ソマリ――ケニア――タマラウイ――モザンビークの各と行なった。登山の記録は次の由) 1966. 5. 24. 植木以下12名 1966. 5. 25. 亀井以下7名に

259号。

て登頂。
①エルゴン・コイトス (4213m) 1966.6.26. 植木以下 11名にて登頂。
②ケニア・バチアン (ケニア最高峰) (5199m) 1966.7. 5. 内田, 小林の2名にて登頂。
③ケニア・レナナ (4985m) 1966.7.7. 植木以下 4 名登 頂。
④ケニア・ダットン (4885m) 1966.7.7. 重田, 望月, 飯島, 登頂。
[タンザニア] ①キリマンジェロ・キボ(最高峰 5895m) 1966.7.18. 植木以下6名にて登頂。
②キリマンジェロ・マウエンジー (5150m) 1966.7.20. 内田, 小林にて登頂。
〔ウガンダ〕①ルウエンゾリ・ビットリオ・エマニュエレ (4891m)1966.8.5. 植木以下10名にて登頂。
②ルウエンゾリ・アレキサンドラ (5091 m) 1966.8.7. 植木以下 6 名にて登頂。
③ルウエンゾリ・モエビウス (4918m) 1966.8.17. 植木以下 8 名にて登頂。
[マラウイ] ①ムランジェ無名峰(2000m) 1966.8.28. 植木以下 6
名にて登頂。 文献:神奈川県岳連「帰国報告会資料」、「山と溪谷」
338~342号(1967年1月号~5月号), アフリカ大陸縦断親 善神奈川県登山隊後援会刊「赤道の氷河を越えて」(1967

トルコ

Nos	活動期間	目	的	58	非
25	1966. 3. 29 ~4. 4	アララッ	登湖	隊長=*深田久弥(63) (32) 広瀬徹也(27) ガイド=アブドラ・ラ 行動概要:トルコリ 自動車の通じる所まで BC, C1(c.3000m), フマニの二人が頂上へ 上まであと 200m の地	東北端の小さな町ドウバヤジットよりで行き、それより馬3頭にて荷を運び、 C2(c. 3300m)、C2より鈴木、ラ 向かったが、途中天候悪化のため頂

年11月刊)

海外登山年表 =1966年=

ボルネオ

Nos	活動期間	目	的	58	事
26	1966.6~7	A CONTRACTOR	Kinabalu の登山と学	Party of Kagoshima Un	4 = 植木健至(39) 前田武彦(24) 3) 寺元健雄(23) セルトン発, 27日入山, 29日, レ最高峰=4101m) に雨宮, 前 名が登頂。更に雨宮を除く 4 名 ビーク (4003m), キナバル・ 登 頂 し た。更に 7 月 1 日には 、セント・ジョーンズ・ビーク ビーク (4094m) の両峰にも登 名はキング・エドワード・ピー 標高 3810m のサヤト小屋にて 悪化したため、計画を中止して ターにより 7 月 4 日 デッセルト 日脳炎のため病死した。他の際

ニュージーランド・アルプス

Nos	活動期間	目	的	58	事
27	1966. 12~ 1967. 2	岳会との	現善(ホブ ベレイ・キ 参加)	隊長=*山口節子(32) 隊 (23) *岡部浩子(23) 行動概要:12月上旬夕 12日, アーサーズ・バス に登頂。14日~17日マウ 小屋,19日~23日 タスマステッター・ドーム(282 両峰に全員登頂。24日よントン支部主催のホプキ 2月1日より山口,武田・辺に入り,福岡登高会と	
28	1966. 11~ 1967. 3			愛知県山岳連盟ニュージ 隊長=吉見善次(27) 副	ーランド・アルプス登山隊 隊長=鈴木紘(28) 隊員=木村博

交歓

(25) 森川勝己(22) 中世古直子(28) 平栗延子(25) *高橋 達維(33) 大田徳明(25)

行動概要:12日22日マルテ・ブラン・ハットへ入山、12 月23日ミナレッツ (3065m)=吉見, 高橋, 中世古, 平栗, 24日 ダグラス (3071m)=木村、森川、24日 ハイディンガ - (3066m)=鈴木、太田、26日スペンサー (2750m)=鈴 木、太田、リンデンフィールド (3150m)=木村、森川、 エリーデビューモント (3109m)=高橋、平栗 により それ ぞれ登頂。1月1日より主目標のクック、タスマンにかか り、カック(3765m)は1月1日リンダ・コース(=吉見、 高橋)、1月2日リンダ・コース (=森川、中世古)、ザブ リゲン・リッジ・コース (=木村、太田)、1月3日リン ダ・コース (=鈴木、平栗) よりそれぞれ登頂。タスマン (3498m) の方は1月3日シルバーホルン・リッジ・コー ス (=太田、森川)、1月10日シルバーホルン・リッジ・コ ース (=鈴木, 太田), サイム・リッジ・コース (=吉見, 木村) よりそれぞれ登頂。1月13日ハーミテージへ下山。 1月15日より第3次計画であるセフトンをめざし、吉見以 下8名セフトン・ビバーク小屋に入る。翌16日高橋、中世 古、平栗はフット・ストール (2720m) に登頂。鈴木、木 村、森川、太田の4名でセフトンへ向かうも頂上直下より引 き返す。18日票天候のためセフトンを断念してハーミテー ジヘ下山。1月25日より最終目標のアスパイアリン(2988 m) に入口。2月2日木村、森川、太田がアスパイアリン に登頂。同日高橋,中世古,平栗はフレンチ峰を,吉見, 鈴木はアバランチ峰にも登り、ニュージーランドでの登山 を終了した。

文献: 不詳

1967.3 L.P~H.P の紛走

29 1966. 11~ クック 登頂 お よ び 福岡マウント・クック遠征隊 (Fukuoka Mt. Cook Expedition)

> 隊長=*新見勲(36) 隊員=柳原健二(26) 池辺勝利(24) 水崎嘉則(24) 鬼木稔(24)

行動概要:12月中旬、ハーミテージよりクック山域へ入 り、12月31日、リンダ氷河経由(=池辺,柳原)、サブリゲ ン・リッジ経由(=水崎、鬼木)の両ルートよりクックの 同時登頂に成功。更に柳原、水崎はクックのウエスト・リ ッジより登り、ロウ・ピーク~ハイ・ピークの縦走にも成 功した。他に、エリーデ・ビューモント、グリーン、ホッ クステッター・ドーム、ミナレッツ等にも登った。

文献: 不詳

台 湾

Nos	活動期間	目	的	記	事
30	1966. 12~ 1967. 1	玉山 (3997m)	登頂	東京印書館訪華親善登山隊 隊長=西田守(30) 隊員=新井高明(石薫(25) 横山文二(25) 中国側隊員 行動概要:12月27日台北発,嘉義, 山荘に BC を設営。29日西山,30日3 の後,全島をワンデルングして1月5 文献:不詳	=郭玉祥(36) 阿里山を経て,排雲 山(主山)登頂。そ
31	1966. 12~ 1967. 1	玉山 (3997m)	登頂	長崎大学学士山岳会防華親善登山隊 ty for Sino-Japanese Friendship 隊長=*本多夏生(36) 副隊長=中尾 春見(27) 松尾司(26) 檜崎紙雄(23) 彦(23) 中国側隊員=陳仲佐,頼朝殷 行動概要:12月30日台北発,阿里山 1月2日玉山(主山),北山(3920m に登頂,3日更に南山(3900m),南 頂。4日東山(3940m)にも登頂して 下山。 文献:中華民国台湾省親善登山報告 (1967年2月発行)	か 動悟(33) 隊員 =竹島 森島征(23) 久保優 長、頼澄洲 」、排雲山荘を経て、)、北々山(3910m) 玉山(3380m) に登 16日東埔より台中へ
32	1966. 12~ 1967. 1	玉山 (3997m) 登頂 (高校生 登山 指導者 の養成)		東神戸高校山岳会玉山登山隊 隊長=*山内敦(35) 隊員=*田中俊甫 *中本憲一(20) 中国側隊員=黄螽羽 行動概要:1月7日より14日まで入 登攀活動を行ない、1月10日玉山主崎 の偵察を行なって23日帰国。 文献:不詳	山し地質調査および
33	1967.1 王山 (3997m) 登頂		登頂	日本山岳会信濃支部訪華親善登山隊 隊長=*三代沢本寿 隊員=*早川研ー 中国側隊員=林天祥 行動概要:連日の悪天候のため玉山 登頂したのみで下山する。その後山中 および民俗的調査等を行なって帰る。 文献:日本山岳会信濃支部情報 No	I(主峰)に1月11日 原住民の工芸の技術
34	1966. 12~ 1967. 1	雪山(3884m)	受頂	芝浦工業大学山岳部第1回海外合宿訪 隊長=浜野鉦市(40) 隊員=荒井充(2 黒嘉明(20) 秋山知也(20) 落合—布(2 藤幹雄(19) 高田潤(20) 手塚房夫(19) 進(19) 行動概要:12月18日台北を出発。29 ョウ池,30日シカヨウ山荘を経て山荘	22) 竹谷宗男(20) 目 20) 大木賢一(19) 斉 9) 原島正樹(19) 東原 9日環山よりサランシ

			雪山に登頂。1月4日蘭溪小屋より環山を経て台北へ下山。 1月12日帰国。 文献:不詳
35	1966. 11~ 12	雪山 (3884m) 登頂	名古屋商科大学防華親善登山隊 隊長=大木勇夫(28) 隊員=深井文礼(23) 山川正樹(23) 飯田泰英(22) 弓岡勇治(22) 山口浩(21) 鈴木徹(21) 川 上勝彦(27) 中国側隊員=林樹枝(42) 行動概要:11月30日台北着。12月4日豊原より入山。シ カョウ社,瓢単酒池,大山を経て,12月7日雪山に登頂。 12日台中へ下山。その後日月潭,七星山等をまわり12月23 日台北発帰国。当初雪山周辺で長期間滞在の予定であったが,許可がえられず,雪山のみの登頂に終った。 文献:名古屋商大山岳部刊「雪山登山報告書」(1967年 8月発行)



1959年プレ・オリンピック上位入賞 ノン・オリノニップ・ (アメリカ・スコオバレー ジ津濃が国産スキー初の快挙 1967年プレ・オリンピック出場 (フランス・グルノーブル) 国産スキーでは2社 四座グマーでは2、(美津濃ほか1社)



農スキー

美津濃スキーは、国内大会はもとよりプレ・ 世界レベルに挑戦!! オリンピックほか世界のスキー大会に出場し、 オーストリア、フランスのスキーに挑戦! 1972年サッポロ・オリンピックを目ざし、 「世界一のスキー」の生産に、美津濃は貴重な 成果を上げています。

《ブルーインパルス®¥43,000·¥48,000》

到当少年—

Jockey

#95 ピークハンター

#100 ピークハンター ¥10,000

#75 クライマーエリート ¥ 8,000

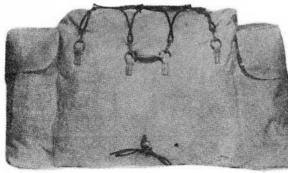
#90 ピークハンター ¥ 9,000

#95 ピークハンター ¥ 9,500

#35 ベルグシュタイガー ¥ 3,500

ハイキングスーパー ¥ 6.000





キスリング型

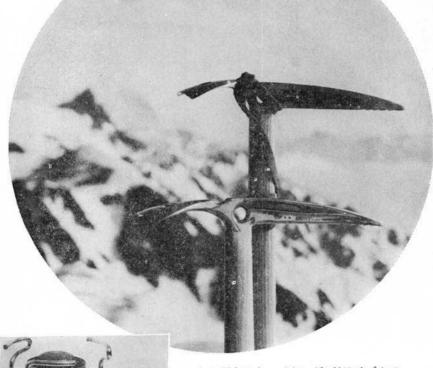
224 (72 cm) ¥4,000 # 222 (66 cm) ¥3,800 # 65 (65 cm) ¥2,700 # 60 (60 cm) ¥2,500 # 55 (55 cm) ¥2,300 # 50 (50 cm) ¥2,000 (価格は予告なしに変更することがあります。)



東京/蔵前 ジョッキースポーツ株式会社

Ever New -世界を結ぶ登山用品-

技術と信頼を誇るエバニュー製品



ヒマラヤからハイキング・ドライブまで 輸入品 ホエーブス (オーストリア製) 石油・ガソリン両用 燃焼時間 4 時間 ¥ 4,800

スキー・登山・ハイキング・体育用品の総合メーカー

I/CZz-

常に最高を創る!





隊員の方々から折紙をつけて かえし、その努力がみのって 秀な性能は世界的に認めら アにも防寒装備を納入し、 しました。テストにテストを ただきました。米、 厳密な低温試験をくり 南ア、オーストラリ 冬の装 備 合せくだ なら、 英、

制

作 指 わた

日本南

東京都千代田区三年町1番地(商工会館内) 東京 581-1078

タイガー印はスキー靴で最初の 全日本スキー連盟推薦品です!!



白銀の世界を

あなたのものにしてください

審査をパスしたのです

この機能豊かなタイガー印スキー靴で

これらのすべての点が

〈全日本スキー連盟用具委員会〉の

タイガースキーシューズ・AA

高質化学レザー製高級品 サイズ/22.5~27.5 cm カラー/黒 価格/3,000円



実にラクにできるのです だから 初心者でも スキー操作が がから 初心者でも スキー操作が Onitsuka

足とスキーの密着が 機能性を追究しました

素材を厳選し

靴は とくに初心者にとっては スキー回転運動のポイント

Tiger

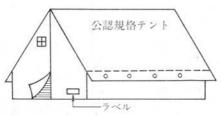
对二型力株式会社

本社・神戸市須磨区寺田町 3-1-3

他に化学レザー製A-2,800円 J-1,900~2,300円 ラバー製R-1,700~2,000円もございます

登山用キャンプテント

キャンプ用テントは安心して御客様におすすめ出来る日本山岳協会 公認サイズ・ラベルの付いた品を御指定下さい。



登山用テント部会会員の製作したテントは総 て入口右下部にラベルが縫付けてあります

日本帆布製品工業会連合会

登山用テント部 東京都中央区銀座4の1 三和銀行ビル 電話 (561) 0231・1820



エニートランシーバーの通信連絡なら

信頼されています。

(主な納入先)

南 極 観 測 隊 国立登川研修所 第21回~第23回国体 海外登山遠征隊 一般業務用



(FB-600 0.5W) トランシーバー

他にハンディタイプ

ANY® 株式会社 エニ

本 社 東京都世田谷区烏山町1801 (300) 7311 党業所 東京都杉並区下高井戸1-101 (322) 6590

〈信頼〉

この2字を 靴づくり50年の伝統が物語る

ミナミのオリジナル

登山靴 5,800円より チロリアン 5,000円

●スポーツマンの専門店



東京神田小川町大通り角 TEL(294)3731~5 横浜元町商店街 TEL 045 (641) 5271

川とスキーの専門店

キスリング 門田ピッケル

" アイゼン

夏冬用テント

東京都文京区湯島 3-38-9 片桐盛之助 電話 下谷 (831) { 1794番 6880番



山友社 左かはこ

登山・スキー靴

四谷本店 TEL(351)1912.7432

八重洲口 新宿区三栄町3 中央区八重洲2の5 サービスショップ TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階 TEL (352) 6564



40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊 全装備納入以来高所用天幕専門 製作・海外遠征隊には各方面より 御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント

田

東京都杉並区桃井1丁目3番 電話 東京 (399) 2548 (398) 8469 (夜間)

キーホームプレー キーホルダー マイ止 を属看板

東京都千代田区飯田橋2丁目8-6 電 話 (263)4741·夜 間 (261)4095

株式会社アジア

キャンプテント キスリング パラソル スポーツウエアー レジャー用品

信頼 *** Crown

品質保証

ル川テント株式会社

有名デパート、小売店でお求め下さい。

東 京・大 阪・広 島



札幌市北13条西4丁目 TEL (71) 2346 · 8739

いで湯高原湖スキー場を結ぶ

みなさまの 長野電鉄

志賀高原と山ノ内温泉郷

野沢温泉

南志資温泉郷

志賀・草津高原ルート

上信スカイライン

いつでもどなたにも 長野電鉄ホテルチェーン

信州山ノ内島郷上林島 ●政府登録国際観光旅館上林ホテル

- ●温泉ブールと千人風呂
- ●1 泊2 食 1,500円-4,000円
- ☎湯田中局(026933) 3 5 5 1 億

信州志賀高原丸池患丸池観光ホテル ●日観連会員旅館

- ●グリル・展望大食堂・ケームセンター
- 1 泊 2 食 1,200円~4,000円
- ☆志賀高原局(026944)2611所

信州山ノ内患郷上林島 **三光館** ●日観連会員旅館

- 1 前 2 章 1,200円~2,500円
- **☆**湯田中局(026933)3 6 1 1

信州野沢島 野沢観光ホテル

- ●水連公認50メートル温泉ブール
- ●1 泊2 食 1,300円~4,000円
- **☆**野沢&局(026903)104 · 105

●長野電鉄 東京事務所☎241-7141●名古屋案内所☎261-8011●大阪案内所☎633-8685

丸善の洋書ご案内

ソ連測地学・製図学の精華の一大集成 '最新世界地図帖' - 英語版-

THE WORLD MAPS Second Edition

〈近々入荷発売〉1967.33×50 cm., 250 pages 予定価 ¥ 30,000

ソビエト測地学の最新データにもとづいて作成された詳細精密な世界の自然地理・領土・行政区画・人口・交通等にかんする地図の集成で、この種のものとしては世界屈指のものでございます。

■第1部 地表の構成・領土区画にかんする自然地理と行政区分地図

■第2部 ソ連の自然地理・行政区画・交通および各地域別の全般図

■ 第3部 ソ連以外の世界の大陸別・各国別・地域別・島嶋別の自然地理・行政区画・交通地図

■第4部 南・北極部分と海洋地図ならびに補足地図

■索 引 本文とは別冊で索引が本年3月に出版予定。価格未詳

東京・日本橋 電話:272-7211 振替:東京5番

M丸善

支店・出張所一東京(丸ビル)・名古屋・京都 大阪(心斎橋北・梅田)・神戸・姫路・岡山 け島・福岡・長崎・金沢・仙台・札幌・紐育

建築関係図書出版/相模書房

- ●フラットとハウス 長 素連訳·定価2,000円
- ●建築工具史話李家正文著·定価 480円
- ●建築物法規概説 笠原·市川著·定価1,800円
- ●工業地計画論料野昭著·定価5,000円
- 屎尿浄化槽設計資料集 石関秀穂著·定価1,600円
- ●日本劇場史の研究 須田敦夫著·定価2,000円
- ●住 居 学 吉阪隆正著·定価 950円

内容詳細目錄謹呈·東京都中央区入船町2-1·振替東京130480



愛する日本の山々を描いた岳人たちの名紀行! と穂高 行他 堺の 明神 岳 第2巻 笛吹川を溯る他 月の 剣ケ倉沢から平 日高 0 ·勝岳紀行 -ケ岳 周 第3巻|知床

・南会津朝日ガ岳他 A5変型判函入 帝 帝川岳 志 日誌

の富

大雪山紀行

ヤッホ

交 通 公 社 0

りでおとくです



編



出発の安心感 お帰りの満足感

日本交通公社

定評ある

コースタイム入精密地図と案内書

①南部器 武 甲 山 ・ 三 峰・坂倉登享子 大 曹 薗 嶺・梶 玲樹・他 (2) 康 AL HE 1 ③ 奥轶父·金峰一甲武僧~霉取·敖德·横山原夫他 4 陣馬高原・秋川溪谷・道太山塊・浜野多治他 Ш 塊·宮坂和秀 (6) th 五 = **岭·富士**条行 #限 湯 98. 海•渡辺正臣 (8) 康 В * 鬼 48.川崎路寮 9尾瀬と権枝岐 会津駒·川崎降意 10 軽井沢·神津牧 ・妙義・掛川昭一 11伊 豆 大 ♣・渡辺正臣 12三浦半島 · 5T · 鎌 倉·本保 340 13美ヶ原・霧ヶ峰・高ポッチ・坂倉登喜子 越温泉鄉 - 川崎降章 (14) 谷 ٤ £ 整 科 15 A 播 高 原:山口羅久 須 塩原 16 38 鬼怒 川·人見義男 • # (17) 磐梯 • 吾 妻 達太良·深沢達治 • 草津白 08 法 習 高原 根・下 達也 26 ● №・川 終降 ※ 20 黒 άB A 馬 立山·川崎隆章 (20) BE 992 * 島・本保 200 22浅間高原・ 沢 曹平·掛川昭一 Ŧ 連 峰 . 松 島·脊井能蔵他 24)八幡平·岩手山 · 秋田駒·村井正衛 25 霧ヶ峰・ 白 樺 湖 ・ 夢 科・坂倉登喜子 26 雲ノ平・黒部源流・檎穂高・伊藤正一 ② 妙高・戸隠・野尻湖・黒姫・グループ・ド・モレーヌ 28 南アルプス・夜叉神峠・入笠山・白 策 史朗 29 中央アルプス~木曾駒・木曾御岳・塩 沢 一郎 ③ 南アルブス南部・井川湖・寸又峡・白 簇 史朗 ⑤ 北 ア ル ブ ス の 全 貌・羽賀・山下 32 加賀白山·白川鄉·医王山·出村健治他

33 65 由日 н 亷 峰·衣袋肾 34 大雪山・層雲峡・然別湖・中条身作他 50金剛・ 生 駒 · 信 貴·仲西政一郎 m (52) -摩 耶·中村 53 岩涌山·紀泉高原 ・ 友 ヶ 島・仲西政一郎 · 角 介 太 郎 54 京 都 व्यक्त स्था £Ł. 50 to 27 野,仲西政一郎 . 本 峰の 56 大 ılı 2 100 谷·仲西勒一郎 57大台ヶ原・大杉谷・高見山・仲西政一郎 59 奥高野・龍神温泉・湯ノ峰温泉・仲西政一郎 ⑩赤目・青山・室生付近・水町進他 6D 鈴鹿連峰·御在所 · 伊 吹 · 能沢 友三郎他 62 大 ш . 335 山·佐野勇 63 帝釈峡・三瓶山・備北山群·加藤武三 の秋吉台・三段峡・芸北山群・加藤武 63 九重·飯田·久住·万年山·加藤数功他 碗英彦山登山と耶馬澤標 勝・仰木砂油郎 ⑥阿蘇登山と周遊・熊本県岳連
⑥平尾台・福智山塊・月原俊二 鶴見山 69 m 布 別 府・松岡 実他 定 150円

地図専門

ニッチ

本社 東京都千代田区西神田2 2 -振琴 東京195917 TEL(261)5126 -8 支店 大阪市南区安堂寺橋通3~60 振林 大阪 28570 TEL(251)0609

1

き

7

東京都千代田区三崎町2-18

8 13 10 11 15 7 沪 탪

界 岳

:5変型版・布装箱入・各巻680円 名著を集 8

好評のブルーガイド・山のシリーズ

片 出 著

博

心の強い著者は、

長い山旅生活

間に多くを学び、

山菜に

5

1 ても 深

小いスポ

1

ツはない。

科学的探究

Ш

登

りほど間口の広く、

奥行

におよぶ豊富なカット たユニー の数々。 V 1 一の香りをただよわせる。ふるさとの味。 クな好随筆集。 山旅の楽しみも倍加する。 写真は、 格調高い文と八十枚 尊い山旅から生ま

究した。

採集するだけでなく調理法まで研

を語

0 かし 5

れた結晶

国鉄新潟支社長

装幀

· 猪熊弦一

郎

著者は

朴で新鮮な山旅集である。

本書は山菜の味覚を思わせる素

B6/上製

560

日本山岳会副会長

渡

辺公平

Щ

本多勝

著

> の栄光とアイガーの悲劇

服部満彦著

エスキモーからア

ベトナムで 山を対象に

ブルーガイド 76

岩壁完登の記録

真実の愛と死の苦闘とを描いた殺人 380円

西丸震哉著

山による現代文明批判でもある。

ど、豊かな体験と知識の上にたったエッセー

クとは何か、探検と登山の意義、

づった紀行と現代登山論。

パイオニア・

ワー

遭難の問

は鋭い観察で注目を集めた著者が、 ラビアなどで清新な紀行を発表し、 再度におよぶヒマラヤ遠征、

説する異色編 山の動植物、

自然現象を体験から解 360日

実業之日本社 振替 東京銀座西1-3 東京326

帰集委員

一深田久弥

・諏訪多栄蔵・吉沢

/諏訪多栄蔵・松月久左訳

(4月刊

全12巻別巻2 菊刊豪華裝 定価各巻不同

(11) (10 (9 ウェー隊/吉沢一郎訳 イリチ・ミール登頂 チェンジュンガー 深田久弥訳(近刊) 福田宏年訳(6月刊 ル・ヒマラヤ 一白部 一聳える国 ムの夜明け 一郎訳(近刊 /尾崎賢治訳 (一四〇〇円 (8月刊 五か月 HOOE /薬師義美訳(1100円 1000円 (IIIOO用 1000円 ート登攀史 の闘 LI 周

郎

情熱の記録

(5) (3) (8) (4) 2 1 (9)

K 2 登 テジオ/近藤等訳

ヒマラヤ、 ピエール/安川茂雄訳 ヒーベラーノ横川文雄訳 ツターホ ノ田辺・望月訳 レスト ·登頂 ル

他

編

わがよき仲間

他一編

が半生の山々 登山百年史 メートル / 横川文雄訳 他 の上と下 組

別巻1

(12)

カラ

コルム登山史

/ 日高信六郎訳

ファンティン編/牧野文子訳

マラヤ巨峰初登頂記

別巻2とマラヤ事典

(別巻

編集委員=吉沢一郎・近藤 等・横川文雄・安川茂雄 アイガー北壁カスパレック/尾崎賢治訳 スマイス/吉沢一郎訳 全12巻別巻1 山家の思い クロ 方法一郎訳 生涯 ド 福田宏年訳 の高嶺 頂 (全13冊揃一〇、一四〇円) 伝 他一編 に ン の山と谷(他)編 栄光と悲劇の人一 挑む の暗 出 にて (他 | 編) い壁 (他二編

《サンワ》で しっかり 貯めましょう





日本団体生命はわが国における

グループ保険の開祖です。

個人保険も

登山保険も行なっております。

本店・東京都千代田区丸の内2-1 電 話 (281) 3211 (代表)

小伝馬町別館(役員室,総務部他) 電 話 (662) 3311 (代表)

支店(大阪・名古屋・福岡・札幌)

支社 (東京他 25)

昭和生れのホープ

電話 (662) 3311 (代表)
・東京都中央区日本橋小伝馬町3-2

日本団体生命

みなさまと ともに20年



〈協和〉は 今年20周年を迎えます。 つねにみなさまの最も身近かな銀行として 変らぬお力ぞえをいただき 心からお礼申しあげます。 これからもお客さまの心をお預りする気持で まごころこめたサービスを心がけ ひとりでも多くの方に いままで以上にお役に立てるよう努力いたします。 いっそうのお引立てをお願い申しあげます。

20周年 協和銀行



亀 有 支 店 業平橋支店 塚支店 松戸支店 田端支店 子 支 店 E 赤羽支店

葛飾区亀有町5丁目137番地 墨田区押上1丁目1番97号 足立区竹塚町1264番地 千葉県松戸市松戸1202の1 北区田端町1845の6 北区王子2丁目1番1号 北区赤羽町2丁目694番地 電話 (601)6131(代)

電話 (601)3171(代) 電話 (622)1131(代) 電話 (886)3797(代) 電話 松戸(62)2141 電話 (893)3741(代) 電話 (911)3991(代) アルミサッシ スチールサッシ カーテンウォール

日本建鉄

東京都千代田区大手町2-8(日本ビル) TEL 270-6511(大代表)



営業品目

スロットル・レバー クラッチ・レバー リコイル・スターター エヤークリーナー その他 耕うん機、防除機、田植機、芝刈機 船外機、建設機械等に広く使用され ております。

中小企業庁指定合理化モデル工場

CPK 中央プレス工業株式会社

代表取締役 原田幹市

本社,東京工場 東京都杉並区桃井4の4の4 (399)0141(代) 高崎工場 群馬県高崎市大八木777 (高崎2)0278(代)

自動面積計 特許 No. 42029744 ¥ 620,000

光電的方法で不定形平面の面積を測定し、ディジタル表示します。

用途

地図上の諸面積, グラフからの曲面積, 葉面積, 顕微鏡写真からの結晶の大きさ等の測定ができます。 カタログ進呈

林電工株式会社

代表取締役 林 和 夫 事務所 東京都千代田区神田神保町1-8 電話(291)9213(294)0064(野ロビル) 営業所 東京都千代田区神田神保町1-32 電話(294)0062-3·5486(工芸部直通)



山小屋の窓に

ペヤグラスを

(断熱複層ガラス) 凍らない くもらない 見晴らしがすばらしい

●お問合せはお気軽にどうぞ

板硝子工事 池田ガラス建材株式会社

代表取締役 池田光二(会員) 東京都練馬区氷川台4-35-9 電話(932) 3 2 0 1 (代表)

<u>電線・</u> ケーブル・



姫路・大阪・東京・名古屋・神戸・富山・札幌

オートメーションの

完全体制を推進する

横河の電気計測器と 本山のコントロールバルブの御用は

SIIN

横河電機製作所 代理店本山製作所(仙台)

有信計器株式会社へ

取締役社長 神 谷 恭 (JAC-744) 横浜市花咲町 4 -117 中銀ビル TEL (23) 6551-3番







1500円



頭痛・歯痛・神経痛

痛みの激しいとき おためしください ハイグレランの強い鎮痛力は新開発成分セコピラピタール によって発現。さらに活性ピタミンB、(ジャン)イルチアミン)などを 配合して、その効果をいっそう助最強化しました。







"良いクスリー正しく使って明るい家庭"――ハイグレラン をご使用のときは、お近くの薬局・薬店でご相談ください

ハイグレラン錠

ビリン系薬剤に過敏な方は服用できません 6錠 12錠



ビリン系の薬剤に過敏な方は、薬局 ・サップ・ロン錠 ・薬店で――非ビリン系 鎮痛・解熱剤

製造 グレラン製薬 販売 武田薬品



5

疲労はその日に解消しましょう

鈍ってはいませんか? 冴えず、決断力が とかく、身体の調子が あなたに

遅れてはいませんか?

回復が 疲れや二日酔いの あなたに

社会の中堅を支える いませんか?

仕事と一緒に 疲れを、翌日にまで あなたに 責任の重みを増す

トップマネージメントの 持ち込んではいませんか?

期待される 生活が不規則になっては 成長株のあなたに ムリが重なり

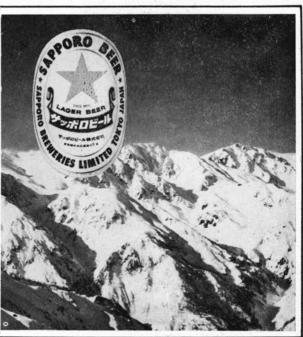
·神経痛 疲労回復に



●味は本場のミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー

大サッポロビー

最初のうまさが持続する…







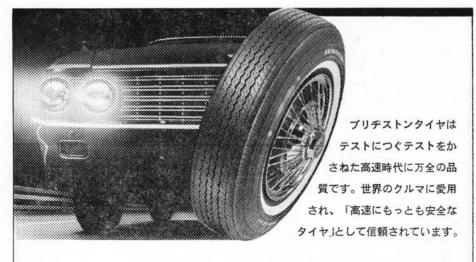
主原料にエスピーの純カレー まの有名な赤カン。 世界各地から集めた三十数種もの香辛料が、ぜいたくに使われています。 これをベースにしました。 ます。 これをベースにしました。 かレーの辛味と酸味を整えて、だんぜんおいしくしました。 高価な純良ラードを使用即席カレーに共通の、あの油くさいにおいがなくなりました。 高価な純良ラードを使用のようではの味を、お楽しみいただけます。 シャガイモを入れないのがコツ きす。 シャガイモを入れないのがコツ きゅうを逃がさず、シャープな味を

奥さまの腕が光ります。めです。すばらしい味と香逃がさず、シャープな味を

S&BGOLDEN ゴールデンカレー

●クロレラ入り……....7皿分 ¥100円

アスピー食品株式会社



BS フ"リチ"ストン

新野地温泉



相類層層號

スキーと登山の基地、岳人の宿



福島市土湯温泉町野地1 相模八郎

スキー、ゴルフに信夫高湯温泉へ 吾妻スカイラインの表玄関 福島よりバス50分、ハイヤー25分

日本交通公社 協定 吾妻高原ホテル

TEL 庭坂 (024594)-78

登山に、湯治に、保養に 吾妻連峰920mの高原

福島ベス水保サードスカーぬる湯



福島県観光連盟・協定

ぬる湯温泉

連絡先 TEL 佐倉 (024504)-63 43 年8月に直通になります。

表吾妻唯一の山小屋 電燈、風呂、寝具、完備

夏期スカイライン浄土平駅より7分 冬期ぬる湯かより100分、信夫高湯かより200分

吾妻小屋

問合わせ ぬる湯温泉

スキーに良し、登山に 良し、皆様のおいでを お待ちしております。

吾妻連峰の東麓 標高750メートルにある高湯温泉は福島盆地の広がりを前に硫黄の匂いがたゞよう高原のいで湯でございます。

収容人員 170名様 客室45室

宿泊料金 1200~3000円 朝 食 250~500円

半 泊 800~1200円 中 食 250~500円

吾妻スカイラインの入口 高湯温泉

ADACHIYA 上述

TEL 庭坂(024594)170~2 東京案内所(561)1245~6

機化学ハ ツ ク 定価 5,500円 機 化 " 43年5月発行 機器分析ハンドブック編集委員会編 K 定価 5,000円 T. 学 ハ K 定価 8.500円 膏 便 覧 定価 1,800円 石 灰 K 定価 5,500円 ス 便 ガ 市 田中教室編 定価 750円 気象学ハ F 78 V5 リ化学ハ K 定価 3,000円 微生物学ハ 定価 3,000円 栄養学ハンドブック編集委員会編 定価 2,500円 公衆衛生活動ハンドブック欄果委員会欄 定価 2.500円 騒音対策カン " 定価 4,000円 土木工学ハンドブッ (B5判) 上巻・下巻 定価 7,000円 土木工学ハンドブック 土木工学ハンドブック 定価 布-8,000円 (A5判) 定価 7,000円 K シープ マク 編集委員会編 定価 5,500円 建築音響工学ハンド 定価 4,000円 化 学 用 語 900円 化学実験ハ K 200円 定価 建築 用 語 曲 定価 2,500円 機 械 工 学 用 曲 語 定価 1,200円 学 気 用 語 辞 T. 曲 定価 1,800円 同編集委員会編

権威ある執筆陣!豊富な内容!



溪堂の山岳図

田区 東 千代 京都 神 H 馬娑 河 台 2 東京 291局9442 / 振替東京 72

*明治大学ヒマラヤ登山隊の記録/高橋進編 1,

*望月達夫著

ージ・カラー山岳画一ページ/予価九六〇円 B6判/本文三〇四ページ/黒白写真一三ペ

笠頂づ ページ・黒白写真二ページ/折込み地図二枚/価九〇〇円A5判箱入り上装本/本文三二八ページ/カラー写真一六 ージ

楽しい飾り気のない文章でつづられた山辺閑話

ある。この人っ気のすくない山や峠の遍歴が

ひっそりした山や峠の紀行で 山好きの人たちに送る〈遠

ヒマラヤは初めてという八人が

一九六五年四

Z

新

H

ひたむきに山に登りつづけている幸福

者のひ

11

山 近い山) は りである著者が

24

与坂 *戸野昭 藤泰安著

二五ページ/折込み地図三枚/価一五〇〇円 A5判箱入り上装/本文四四八ページ/写真

草原

ージ・本文色彩画三八ページ・挿画六九ノ価二八〇〇円B5判箱入り布特装ノ本文二〇〇ページノ口絵原色画四ペ 原の足あと 本直行画文集

自然を美しく楽しい文章と豊富な絵でつづった

画文集である。著者の山岳画は個展でも好評を

な山

一を登ってきた異色画家が

三十年間

北海道でクワを持つかたわら

北海道の四季の

と情熱が全編にみなぎっており 岳人必読の書人物論なども格調高い文で 著者の豊かな経験

と探検の紀行である。それに登山談義 にわたる蒙古・ヒマラヤ・ニューギニアの登山

随想

近代登山

家の一人である著者のつづる三十余年

登山記録である。この正直に徹した報告には

れぞれに感じとった喜怒哀歓を素直につづった 月未踏峰ゴジュンバ・カンの頂に立つまで

若者の生気がみなぎり

異色のヒマラヤ登頂記

博しており

書架を飾るのに

またとない

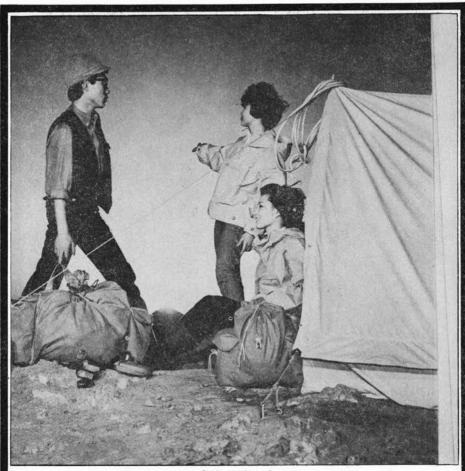
書物

唄う歌 ·朝倉宏編

四〇円/第2集=一七六ページ/価二八〇円 A6ポケット判/第1集=一二六ページ/価ニ

*日本山岳会編 六ページノロ絵原色版一二ページノ価四〇〇円A6ポケット判ノ記入欄一六六ページ・本文二一 九六八年版

集を 松方三郎 は の歌も選んで むずかしい原語の曲には訳詞を較的にポピュラーなもの臼曲を 第2集は日本 ヤの地図 トにまとまっている。なかでも「登山者と自然」 つけ8曲を集めてある。ポケットにはいり 山で歌を唄う人たちの気持にピッタリ合った歌 一九三〇年に誕生した赤いカバーの 山行ですぐ役立つ記事や資料が ご要望にこたえて再版した。 深田久弥などは 「登山の基礎」加藤泰安 岳人必読の読み物 第1集は比 (山日記) コンパク 「ヒマラ 便利



未知に挑戦するとき

クレモナの良さが集結する。強い 扱いやすい!風雨、紫外線にビク ともせず、黙々とその威力を発揮 します。あらゆる試練に耐え抜く 山男の根性をそのまま受けついだ クレモナ。ヒマラヤから南極まで 広く各地で信頼をあつめています

少りがにこのシャンである。

登山用具

テント・シート・ルックザック・アノラックなど 倉 敷 レ イ ヨ ン 株式 会 社 大阪市北区梅田8・東京都中央区日本橋通3の1

山岳」投稿規定

投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要 はない。

、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。

原稿は返却しない。

、研究並びに紀行には、その概要を付けること。

、紀行にはなるべく概念図を添付すること。

地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊 写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。

、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがあ な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。

、校正は編集者に一任されたい。

送

しり先

東京都千代田区神田錦町三ノ二三(向

日本山岳会「山岳」 編集部

島田田木月 宽次一郎夫

潤 寛雄 汝 達

九六八年三月二十日発行

山岳 六十二年

定価

IIOOO用

(通巻一二一号)

東京都千代田区神田錦町三ノ二三(向井ビル内)

日 本

Щ

岳会

振替口座東京四八二九番 電話東京二九三局七四四

日 本 山岳会内

発編 印 行集

真 版

望 月

達

夫

株式会社 技

株式会社 光村原色版印刷 所

東京都千代田区神田駿河台二

売 所

会株社式

渓

振替東京二四七二三番

電話東京二九一局九四四二番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。



● 感激の第一声から緊急連絡まで アタック・パーティとベース・キャンプ間など 離れた所と、ボタン1つで無線連絡が簡単に でき、安全な登山がスピーディにおこなえます。

●遠距離通話ができる〈500mW〉強力形 高性能シリコントランジスタとメカニカルフィルター が威力を発揮! 山の頂上と頂上の間約100kmでもOK 2チャンネルの送受信もでき混信の時にも安心です。

● 受信待ち時間の雑音を消すスケルチ装置付 雨でも使える防滴ケースなど、軽くて便利な設計です。

実力を発揮する強力〈500mW〉遠距離形



#13#/LN-7111-/~

2波内蔵遠距離用高感度設計 11右トフンシーバ(500mW) RJ-20 (防漢ケース、イキホン、電池付) 1台 現金正価 28,000円 月賦定価 (12回) 29,700円 (初回金5.500円 毎月2.200円×11回) 2台1組 現金正価 56,000円 月賦定価 (12回) 59,400円 免許申請料 1台につき500円



大岳 年年 3 623 37 学会 9 23 1 H ILI 1 9 5 年 1 9 55555 4 (4)(5)(6)(8) 1 9 4 5 京 都 大 1 9 9 6 III 会議学長会ビ 9 文神深日 1 年 (9 1 9 5 8 芦田 1 5 8 (10) 9 本山本教育 1 9 年 9 (11)H 5 9 (12)1 9 毎明 日治 0 (13)1 9 6 (14) (15) 年年 同 社 9 6 0 ī Ö 9 6 早大全早上全京ビ H 大岳大 阪本 (16) 9 6 1 (17) (18) 1 9 6 1 年 1 9 6 112223333 H (19) 9 6 6 (20) (21) 9 本都 111 大山 1 9 6 (22 1 9 6 1 9 6 年年 電日 (23) (24) 11 9 6 同都大北 (25) 9 6 年 志立府道道田田 3 1 9 6 年 (26)(27 1 9 6 年 (28) 1 9 6 4 北早早明防富亜 (29) (30) 年年 1 9 6 1 5 9 6 (31) 1 9 6 55556666777778 治衛 年年年年 1111111111 9 6 (32) 山泊山岳細亜大一デルワイスクラ 6 (33) 99 (34 99 6 (35 (36) 6 年年年年年 9 R C 6 (37 (38) 99 6 (39 (40) 9 6 年年 11 9 6 静信 9 6 (42)色術科 9 6 年年 美 (43) 11 9 (44) (45) (46) Ш 1 9 6 8 年.

登頂に観測に

このマークがお 伴いたしました

Ш 答 ル 器 山 111 Ш in 登 探查 E 11 テ調第リ D Ш 中ョ E 民族文化調查 111

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田 株式 細野テント Tel. (253) 須田町 2 -23 会社 細野テント 4426~7

The Journal of
The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXII 1967